KAIZO

改造

十一月號

192

改造社版

日本地理大系

豫約募集

全學界を壓倒する大偉業・此國家的快擧を支持せよ!!

同胞七千萬を擁する我國土の美は世界唯一である。古今の如何なる名文、名畫をもつてしても科學的教養ある近代人に、祖國の美を理解せしめる事は不可能だ。本社が莫大な犠牲と苦心を拂ひ、科學の「正確な把握」に藝術的感覺の息吹きを與へて、「生ける寫眞」となし、加ふるに全學界權威者を悉く網羅して興趣ある解説を附したのも、其不可能を「可能」とする意圖に外ならぬ。此の國家的快業に直面し、全國民の支持を俟つ!!

寫眞を主とす

本大系は寫眞を主として編纂する。何故寫眞を主としたか、元來地理の對象は實在の形象であつて寫眞を以て說くのが當然であり、且つ、美の國日本の地理的現象は到底文章ばかりでは表はせないからである。然しながら如に與へられた一つのテーマの科學的價値を重要視し、且つ藝術的に表現する事は甚だ困難な事業で、從來の繪葉書や名勝寫眞ではその意味で殆んど價値のない物故、我社は特に巨萬の費用を投じ出版界未曾有の航空普通兩寫眞班を組織し編輯委員の指揮に依つて本土は勿論植民地の隅々まで活躍することになつた。

航空寫眞班を特設

近代地理學の原則に則り**全卷二千五百の航空寫眞**を滿載す。陸海軍各新聞社航空班の援助は勿論だが特に航空寫眞班を新設し全領土を空中より撮影する。我航空界の權威**御國飛行學校長伊藤酉夫氏を班長に、一等操縦士**熊川良太郎氏を主任操縦士に二等操縦士藤田武明氏を豫備操縦士とし**三菱式**（巴一2型）**改造號**を**主機にアブロ式**（50K型）を補助機とする**改造社航空班は**東京市外立川を根據地として活躍する。此の國家的事業の爲め江湖の援助をお願ひする。

第一回配本（第七卷）

近畿地方

十月初旬擧行される伊勢神宮式年遷宮は國を擧げての大祭である。此の二十年一度の機會に際し記念のため第一回配本「近畿篇」卷頭には古式に於ける內宮御遷宮式圖（額面用二頁大、特別原色版）を掲げ、三重縣の部には特に一般撮影を禁止されし得難き神宮の寫眞（御手洗、淨流、皇太神宮一ノ鳥居、皇太神宮正殿及東西寶殿、同正面、豐受大神宮正殿、同正面、內宮御田植、外宮御田植式、神宮御鹽田二見ヶ浦御鹽製造場等）十數葉を掲載し加ふるに內務省考證課長、文學博士宮地直一、造神宮技師大江新太郎、神宮皇學館教授佐藤虎雄氏の正確詳細なる解說を附し、寫眞、解說、印刷共に斷じて他の追隨を許さない。國民思想涵養のため各學校は勿論各家庭に必ず備へられよ

近日配本（第一回配本に限り分賣す）

特典 會員全部に本社が斯界の權威者に委囑作製せる掛軸用**新日本大地圖贈呈**

全十五卷

一册 貳圓八拾錢

申込金不要

內容見本進呈

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二



壯年及初老期の保健に

アニマザ

血壓を低位に保ち、早老及血管硬化を防止す

齡六十を過ぎて血管硬化し老衰期に入るは生理的にして止むを得ざるも、現代に於ける過勞及び焦燥の生活は四五十歳代の壯年者をして早くも多數の高血壓者を出し、腦力、精力、活動力を奪ひ、老衰を急がしめつゝあり、かゝる場合アニマザの應用は老衰現象の進行を阻止し壯年及び初老期生活の悦樂を恢復す

。

本劑は幼若動物の血管内膜及び中膜に存するホルモンを抽出せるものにしてその應用により血管に若返り現象を與へ、血壓を低位に保ち、頭重、倦怠、眩暈、肩張り、不眠、耳鳴、性的無力等の自覺症狀を輕快せしむ

獨逸オスナブルク臟器治療藥會社

總代理店　東京日本橋區本町　株式會社田邊元三郎商店

三〇錠……二圓四十錢
一〇〇錠……六圓八十錢
粉末…二五瓦入　注射液…六管

各地著名藥店にあり



改造 十一月號 目次



創作

東洋君子國

時は秋だ。空も冴える。心も冴える。『男廿七八、小春日和に讀書かな』と、讀書子の意久地なしを嘲つた句もあるけれども、此頃は本を讀んでもよく頭に入る。

キップリングの『海から海へ』の中に彼れがマーク・トウエンを訪問した記事がある。其時トウエンは、頻りにパイプを吹かしてゐた。トウエンは世界的の文豪であつた。キップリングはまだ名をなさない文士の卵であつた。それで其パイプが欲しくてたまらない。テーブルの上にでも置いたら、一寸失敬して盗み度いと思つた。文豪は部屋の中を歩るきながら話しをしてゐる。パイプをテーブルの上に置く事は置くが、キップリングの手の屆く所に置かない。それでとう／＼盗めなかつたと書いて居る。

これはユーモアたつぷりに書いてあるから面白く讀まれた。所ろで、日本でこんな事を書く文士があつたとすれば、其文士は直ちに盗癖のある者として、警視廳のブラック・リストに載せられ、指紋を取られ、要監視人にされるであらう。

カフエー征伐、俗惡歌征伐、五月蠅い事だ。

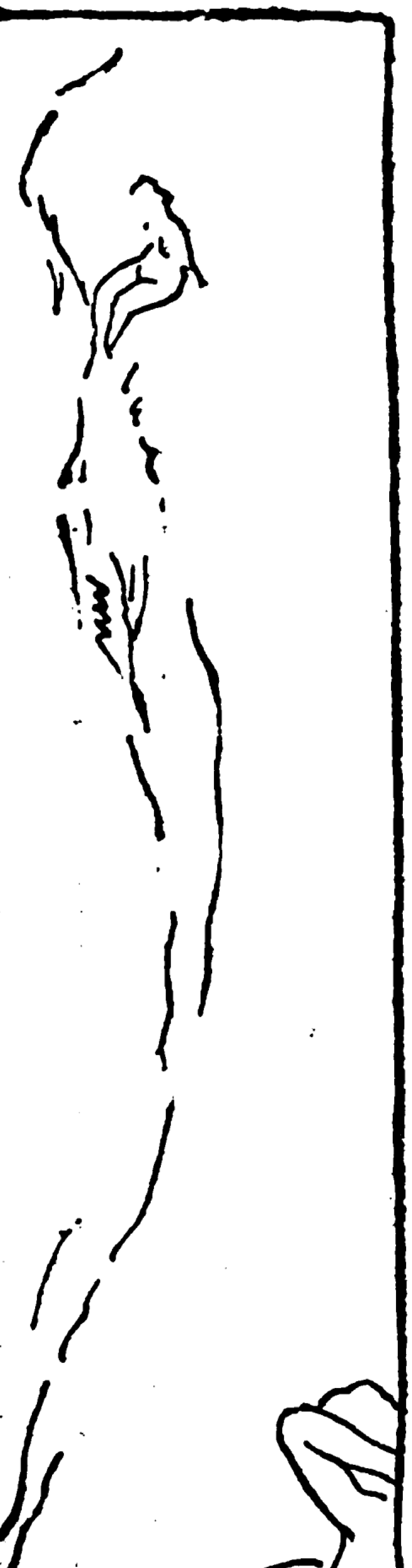
さうした類はまだ五月蠅位で濟まされる。だが此頃の新聞のやうに、明けても、暮れても、疑獄、檢擧、收監と云ふ大きな活字が目を射るときは、無關係の者でも、身體が竦みさうだ。讀者もウンザリする。

必ずしも新聞に書くなと云ふのではない。必ずしも罪のあるものを見逃せと云ふのではない。現狀を暴露して初めて社會は改革される。法律に定めた事なら、矢張定めた通りにせねばなるまい。併し爬羅剔抉して、人の罪を發き立てゝ、自から快よしとするのが日本人の國民性であらうか。政界の巨頭、前政府大官、實業界の大立物、皆んな收監されるのならされてもよい。だが日本の政治は刑事裁判以外に何物もないと云ふ狀態になつては、吾々は悲觀する。

刑事趣味の濃厚な政治家になると、人の顔さへ見れば『此奴には何か犯罪はないかなあ』と云ふやうな顔をする。日本全體を監獄に見立てゝ政治をなさんとする。さうなれば日本は東洋君子國でなくして、東洋囚人國だ。どうか、そんな政治家には支配されたくないもんだ。

引つ張り度くはないが、惡い事をするから引つ張るのだと、それは御尤もだ。勞働運動の鬪士は……併しそれを書くと卷頭言には長過ぎるから別の機會にする。

何分、時は秋だ。天に一點の雲もない。小春日和はうらゝかで暖かだ。吾々もさうした氣持ちになり度いと、これを大きな聲をして誰れかに叫び度い。



現代口語文の缺點について

谷崎潤一郎

明治の中葉以後に始まつて今あるやうに發達した日本文の形式、──いはゆる言文一致體、或ひは口語體と稱する文體は、現在では殆んど完成の域に行き着いたと云つていい。しかしながら私のやうに日常文筆を以て世渡りをしてゐる者は、自分が始終此の文體を使ひこなしてゐるだけに、實際の經驗上から、いろいろの缺點にも氣がつき、まだまだいくらでも改良すべき餘地があることを、しみじみ感じさせられる。人人の口から口へ話される言葉は、人爲的に改良しようとしても到底出來ないことだけれども、文章の方は社會一般がその心がけになり、教育家や著述家などが少しその方に眼を開けてくれたら、必ずしも改良は不可能でない。一例を擧げれば、今の口語體は一と通りのことを記述するには結構間に合つてゐるものの、少しく精密な、たとへば哲學の理論を表現したりするのには、とかく晦澁に陷り易い。早い話が西洋哲學の飜譯書で、敢て名文と云はない迄も、意味がはつきり分るやうに書いてあるものは甚だ少い。英語もしくは獨逸語の書について、コツコツ字引を引きながらでも拾ひ讀みをした方がまだ呑み込めると云ふ場合が多い。これは飜譯者の罪と云ふよりも、現代の

國文そのものに何等かの缺點があると見ていい。古い時代の語法でも現代に活用出來るものは生かして使つたらよささうなものだが、私の信ずる所では、今の口語體は國語の持つ特有の美點と長所とを悉く殺してしまつてゐる。云ふ迄もなくこれを研究することは、社會一般を利益するところが大であるから、玆に私は自分の仕事の上に就いて感じたことを世間の識者の參考までに記してみる。學術的に、秩序を立てて撿討するのは國學者の任であつて、私の柄にないことだから、矢張りいつもの隨筆風に、思ひつくままを次ぎ次ぎに述べて行くであらう。

○

口語體と云ふものは明治以後の產物のやうに思はれてゐるけれども、必ずしもさうであるまい。源氏物語の文章なぞも矢張りあの當時に於いては、一種の口語體であつたであらう。嘗て學校の敎室で敎はつたところでは、口語と文章語とが分れて來たのは平安朝の末ごろであつたやうに聞いてゐる。すると鎌倉時代以後の和漢混交體を經て、明治に至つて王政の復古と共に國文も亦口語體の古（いにしへ）に復つたのである。つまり我が國に假名文字が發明されてから後の國文の發達は、大體に於いて平安朝と、鎌倉以後と、明治以後との三段に分けていい譯である。

ところで私が、自分でも日常それを使つてゐながらしばしば不思議に感ずることは、現在の口語體の「のである」と云ふ云ひ廻しである。かりに私はこれを「のである口調」と名づける。（のである、のであつた、あつた、あつたのであらう等、さう云ふ云ひ廻しの凡べてを含んでゐるものと解して貰ひたい。）いつたい此の「のである」と云ふ口調は何處から始まつたか。われわれが實地に口で話をする時に「のである」と云ふ言葉はめつたに使はない。演壇に立つて公衆を相手にする時には使ふけれども、その場合その人は口語でしやべつてゐるのでなく文章語でしやべつてゐるのであつて、演說や講義でも多少碎けて物を云ふ時は、あります口調かございます口調になる。今日の標準語は東京語に律つてゐるのださうだが、「のである口調」は絶對に東京の口語でない。從つて江戸つ兒の言葉でもない。或ひは徳幕時代の武士の用語であつたかとも思つたが、どうもさうでもなささうである。

そこで思ひ出すのは、故大隈重信侯が存生の頃、例の「あるんであるんである」と云ふ侯の口眞似が、しばしば當時の新聞紙上を賑はしたことがある。私はまのあたり故侯に會つたことがないから分らないが、新聞の口眞似がほんたうだとすれば、侯は日常の會話に「のである口調」を用ひたのであらうか、それとも又、ああ云ふ地位の人だから新聞記者や訪客などに接する時は、自然と演說口調になつたのであ

らうか。これは私の想像であるが、演說口調で物を云ふのが習慣になつて、知らず識らず日常の會話にもそれを使ふやうになつたのではないか。もちろん家族の人たちと話をするやうな、餘程打ち解けた時は兎に角、さうでない時、いくらか裃をつけた氣分になる場合は、おのづと「のである口調」が出る。――侯に限らず、凡そあの頃の政客、主として薩長土肥の人たちはみんな多少ともさう云ふ癖があつたのではないか。

ここで一足飛びに私の獨斷を云つてしまふと、「のである口調」はどうもあの頃の四國人や九州人が東京へ持つて來たやうな氣がする。彼等のお國言葉のうちにさう云ふ云ひ廻しがあつたかどうかはよく知らない。けれど恐らくは、お國言葉を避けるために、田舍訛りの誹りを免れるために、一種中立のああ云ふ言葉を使ひ出したのではないか。それと動機は違ふだらうが、今の陸軍では兵士に「であります」と云ふ口調を使はせてゐる。それは特殊の陰影や地方色のある言葉を避けて、簡單明瞭に、達意を主にするために採用したのであらうが、「のである口調」もいくらかさう云ふ必要から起つたとも見られる。昔は百人一首のかるたはいろいろの書體で書いてあつたのが、今では活字體の標準かるたと云ふものが出來た。「のである口調」はちやうどその活字にあたる。今でもよく、たとへば琉球とか、青森とか、邊陬の地から都會へ出て來る人たちは、敎育のある者である程、「であります口調」や新聞雜誌の文體に近い口語體で、切り口上で物を云ふのはしばしば見受けるところである。但し、維新當時の「のである口調」は、德川時代の禮儀正しい、今から見れば寧ろ卑屈な、階級的な言葉づかひが殘つてゐたあの頃の東京に於いては、いくらか權柄づくに、敗殘の御家人や町人を相手に威張つて物を云ふ心持ちもあつたであらう。即ちあの當時には活字以上の役目を果たしてもゐたであらう。

○

なほもう一つ思ひ出すことは、嘗て東京の府立第一中學に在學の時分、或る年學校の記念日に、當時麻布中學の校長をしてをられた故江原素六翁が來賓として出席され、講堂で訓話をされたことがあつた。私は翁が維新の豪傑の一人であり、當時も有名な政客であり、高潔な人格者であることを聞いてゐたから、子供にありがちな英雄崇拜の心持ちを以て翁の演說に耳を傾けたが、意外にもその言葉づかひは自分の學校の校長や敎師の「のである口調」でなく、實にキビキビした江戸辯であつた。「おらア知らねえ」とか、「仕方がねえ」とか、翁はさう云ふ言葉をさへ交へた。人も知る通り、江原翁は德川氏の遺臣であり、生粹の江戸文化の中に育つた人であるから、演說にもその持ち味が出ずにはゐなかつたのであらう。德川の末期になると、旗本の武士も市

井の町人と殆んど變らないサバケた口調を使つたもので、翁の言葉を聞いてゐると全く私の親父なぞの話しぶりと同じであつた。私は後にも先にも、こんな氣持ちのいい、カラリとした演說を聞いたことはなかつた。少しも衿（かみしも）を着けてゐないで、翁の颯爽たる人格が言外に溢れてゐた。勝海舟翁などの話しぶりも恐らくさうではなかつたであらうか。

これを以て見ても、「のである口調」は矢張り他國から這入つて來たものに相違ないと思ふ。

○

何にせよ此の口調は、地方的、乃至は歷史的特色がないだけ萬人向きのするものであるから、これを標準にすることに私は異存があるのではない。旣に紅葉漱石の如き江戶人ですら此の文體で立派な作品を遺してゐる以上、過去に於いても相當の効績を認めなければならないし、況んや現在では、善いにも惡いにも、動かすことは出來なくなつてしまつてゐる。

しかしながら、簡單明瞭とか、適確とか云ふこと以外に、美の表現を目安に入れる小說に於いては、さう一も二もなく此の文體にきめてしまふこともなからうかと思ふ。尤も今日でも「のである」の外に、「だ」と云ふ口調、「であります」と云ふ口調の文體も多少は行はれてゐなくもない。中里介山氏の「大菩薩峠」の如きは「でありますロ調」で書かれた作品中での雄篇と云ふべきであらう。簡單と云へば「だ」止めが最も簡單であり、力も强いが、その代り音がキタナイ。「であります」は冗長のきらひがあるけれども、優しみがあり、親しみ易くもあり。實際の口語に近くもあり、何處かに傳統的な和文と共通なひびきもある。「のである」は、何と云つても政治家の演說口調から出たものだけに、四角張つた、多少取りつくろつたやうな、ギゴチない感じを起させる。殊に此の頃のやうな政界の有樣では、議會の速記錄を想はせるだけでもあまりいい氣持ちはしない。餘計なことを云ふやうだが、此の間前大臣が裁判所へ呼ばれた時に所懷を記した文句に、「雲はやがて晴れるものである」と云ふのがあつたが、あれを讀んでから「のである」が變に不愉快になつた。

それに、文章に苦心する程の人は誰でも氣がつくことであらうが、「のである」の文體だと、不必要に「のである」を重複させ、濫用する弊に陷り易い。たとへば、「行つた」と書けば濟むところを、「行つたのである」とする。甚しきは大隈侯の如く「あるのである」とする。私なども、此處へ「のである」を附けるのは無駄だと思ひながら、どうも附けないと落ち着きが取れず、据わりが惡いやうな氣がして、結局附けてしまふ場合がある。「あつたのであつた」「ないことはないので

ある」などと云ふ語法は、耳馴れてゐるからさほどに感じないやうなものの、考へて見ると隨分をかしい。そしてそんなことのために、「あります口調」より却つて冗長になり易い。「あります口調」なら、「ありますのであります」、「ありましたのでありました」、「ありませんことはありませんのであります」などとはめつたに書くまい。

○

現代に於いて、漢文くづしの文體で、自由に、有効に、古人の名文にも劣らないほどの美しさと力强さを以て發表することの出來る人は、幸田露伴先生を措いては殆んど一人もなくなつてしまつた。大谷光瑞氏なども書くことは書くが、どう云ふものか此の頃發表されるものは以前のもの程整つてゐない。その他の人人のは私が書いても書けさうな程度のものばかりである。が、それならあゝ云ふ云ひ廻しは亡びてしまつたかと云ふに、案外さうでなく、今の口語體の中に惰勢を殘してゐるやうに思へる。

「あるのである」、「あつたのであつた」、「ないことはないのである」、等等の不思議な云ひ廻しは、それぞれに漢文くづしの文體の、「ある也」、「なる也」、「ありし也」、「なりし也」、「たりし也」、「あらざるなき也」、「なきにあらざる也」等の變化ではないかと、私は見てゐる。明治維新の頃に演說でもしようと云ふ豪傑氣取りの人たちの頭は、たいがい漢文くづしの文體で固まつてゐた。その證據には、あの當時の政論などの文體を見るとよく分る。即ち「のである口調」は漢文くづしをそつくりそのまま口語に移したものであらう。現に此の頃でも德富蘇峰大人の文章なぞはその生きた標本ではないか。一般の人はあれほど極端ではないけれども、多かれ少かれ文章軌範的云ひ廻しの餘勢を受けてゐるのである。まさか當節の人の頭に十八史略や八大家文の口調がこびり着いてゐる筈もないが、それでも高山樗牛あたりの衒學的論調が何等かの感化を及ぼしてゐないことはあるまい。それに釣られて、全く漢文の影響を脫し切つてゐる青年たちまでが、無意識のうちに引きずられてゐるのであらう。

○

今日、夕刊の三面なぞに載つてゐる講談の筆記を讀むと、ずゐぶん自由な云ひ廻しをしてゐる。「のである」「あります」「ございます」等ちやんぽんに使ひ、名詞止めもあれば、動詞止め、「てにをは」止めもあり、少しも囚はれたところがない。あれは餘程參考になると思ふ。「のである口調」の一つの大きな缺點は、いかにも彈力がないことである。「たりし也」「たらざる也」の漢文口調にはピーンとした響きがあり、語勢を强める効果があつたのに、「あるのである」になつて來ると、べたべたと蒟蒻でも踏んづけるやうな氣がする。それにいつた

い、今の人の書く物は一つのセンテンスが短かく、十中の八九まで働詞を以て終るものだから、(此のことに就いてはいづれ後段で詳しく述べる。)從つて「る」と「た」が一層重複する。試みに座右にある現代作家の著作をひろげて、一つ一つの文章の終りの字を見ると、「る」か「た」でないものは殆んどない。日本語と云ふものはもつと融通が利く筈であるのに、これでは餘り堅苦し過ぎる。さしあたりもう少し實際の口語に近く、思ひ切つて砕けてみたらどうか知らん。日常の會話に、「さうでせうね。」とか、「さうかえ。」とか、「あるんだよ。」とか云ふ一種の捨て字、——「ね」、「え」、「よ」、「わ」、「や」、「な」、「さ」、「わい」、「わよ」の類、——文法上は何の品詞に入るものかよく知らないが、——あれなぞ男女老若の區別をするのに重寶な日本語獨特のものであるが、小説中の會話だけでなく、地の文にも使つてみたらいいであらう。親しみもあり、語勢を強める働きもし、「る」止め「た」止めの頻出を避けることも出來るではないか。

○

さて、以上は大體論であつて、これから少しく別な方面を考察しよう。

○

此の間左團次一行が露西亞へ行つた時、あちらで歌舞伎劇の紹介に勤めたレニングラードのコンラド君が二三年前に來朝した折、コンラド君、同夫人、及び關西に在住する日本文學通の露人プレトネル君、ネフスキ君、及び私と奈良ホテルに會合したことがあつた。その時のコンラド君の話に、今の露西亞で私の「愛すればこそ」を譯してゐる人があるのだが、第一に此の標題の飜譯に困つてゐる、「愛すればこそ」は一體「誰」が「愛する」のですか、「私」が「愛すればこそ」なのですか、「彼女」がですか、それとも「世間一般の人」がですか、要するに主格を誰にしていいかが明瞭でないと云ふのであつた。私はそれに答へて云つた、「愛すればこそ」の主格は此の戯曲の筋から云へば「私」とするのが正しいやうである、だから英譯では「ビコース、アイ、ラヴ」となつてをり、佛譯では「ピュイスク、ジュ、レイム」となつてゐる、しかしながら、本當を云ふと「私」と限定してしまつては少しく意味が狹められる、「私」ではあるが、同時に「彼女」でもあつてもいいし、「世間一般の人」でも、その他の何人であつてもいゝ、それだけの幅と抽象的な感じを持たせるために、此の句には主格を置かないのである、それが日本語の特長であつて、歐洲語では主格を入れないと語を成さない場合でも、日本語ではそれを必要としない、曖昧だと云へば曖昧だけれども、具體的である半面に一般性を含み、或る特定の物事に關して云はれた言葉がそのまま格言や諺のやうな廣さ

と重みと深みとを持つ、だから出來るならば鮮西亞語に譯すのにも主格を入れない方がいいと。

これは日本文ばかりでなく、漢文についても同じことが云へる。たとへば李白の玉階怨を取つて見よう。——

玉階白露生　　夜久侵羅襪
却下水晶簾　　玲瓏望秋月

此の詩の起句と承句とは白露が主格であるけれども、轉句と結句とには主格がない。「却イテ水晶簾ヲ下シテ、玲瓏秋月ヲ望ム」者は誰であるとも斷つてない。これは帝王の寵愛の衰へた宮廷の美姫の閨怨を詠じたものには違ひないが、此の詩に何か悠久な美しさがあるやうに感ぜられるのは、主格を入れてないためである。かりに歐洲語であつたら、承句の「羅襪」と云ふ名詞の前にも「彼女の」と云ふ代名詞が必要であらう。それから結句の「玲瓏」と云ふ語も何を形容したものか、玲瓏たるものは月の光であるか、水晶簾の內にゐる美姫の容顏であるか、恐らくその兩方に取つてよからう。ここに於いて此の「玲瓏」と云ふ言葉は非常に生きて働いてゐる。一つの情景を敍すると同時に、その蔭にある他のもう一つの情景を連想させる。日本の枕ことばや掛けことばなども決して單なる駄じやれではなく、矢張りさう云ふ働きを持つてをり、二度に云ふことを一度に濟ます役目をしてゐる。就中俳句はかう云ふ表現法の極致を示したものだと思ふ。

○

私は、殊に近頃、英文の小説を讀む毎にいつも感じることなのであるが、西洋人と云ふものは分り切つた手順を馬鹿ていねいに記して行くので、そのために非常にまどろつこしい。日本文ならこんな所はアッサリ片附けるのにと思ふと、讀んでゐてもぢれつたくなる。西洋人は「あなたは鉛筆をお持ちですか?」と云ふ場合に、「あなたと一緒に、」——「ウイズ、ユー」と云ふ言葉を加へる、それでなければ「今そこにお持ちですか」と云ふ意味が通じないものだと、中學時分に教へられたことがあつたが、まさか實際はそれほどでないにしても、兎に角さう云ふ云ひ方をしたがることは事實であつて、彼等の國語の性質上、自然さうなるのだと思ふ。獨逸へ行つた私の友達が、ボーイに湯をくれろと云ふ時、「ハイス、ワッセル」と云つたところがどうしても通じない、何度くり返しても分らないのでやうやう氣が付いて、「ハイセス、ワッセル」と云つたら、「ああ、さうですか」と直ぐに通じた、「ハイス、ワッセル」でも大概察しが附きさうなものだのに、さつぱりさう云ふ氣轉が利かない、教育のない者ほど呑み込みが惡い、と云ふ話であつた。萬事がそんな調子であるから、小説の描寫なども不必要に念が入り過ぎ、細か過ぎる傾きがあつて、そのために却つて、

鮮明を缺き、印象が稀薄になる。これは「饒舌錄」の中でも言及したことであるが、元來うそをほんたうらしく感じさせるのには、成るべく簡單に書くのに限る。くどく說明すればするほどうそが一層うそらしくなる。たとへばここに「Aと云ふサラリーマンがあつた」と書くだけで濟むものを、「彼はいくつで、何處の學校を出て、何何と云ふ會社に勤めて、いくらいくらの月給を貰つて、……」と、さう書くと却つて拵へごとじみる。必要がなければ人物の名前なぞも記さない方がよく、伊勢物語の「昔男ありけり」で澤山である。現代の日本の作家で、ほんたうらしく書く點に於いては德田秋聲氏を第一とするが、さすがに同氏は此のコツをよく心得てゐる。西洋でも近頃ポール・モーランあたりは大分書き方が東洋風で、思ひ切つて筆を省略してゐる。モーランの物はあまり唐突で分りにくいと云ふ批評があるのは、いつの間にか讀者の頭が西洋物にカブレてゐるのである。

だから、哲學とか科學とか、理詰めで正確を期する記述には西洋流の方が勝れてゐるけれども、文學に於いては必ずしもさうとは云へない。日本の詩や歌や謠曲などを英譯する場合、もしほんたうに原文の味を出さうとするなら、文法的にはどうあらうともサブジェクトのないセンテンスを使ふより外にないと思ふ。いくら西洋人だつて日常の會話にいつも必ずサブジェクトとプレディケートを伴ふ譯でもあるまい。半分口の内で云つただけでも用が足りる場合の方が、實際には多いであらう。現に電報の文句など主格を略すのが常ではないか。

人はよく、日本語はヴォキャブラリーに乏しいと云ふ。私なども青年時代にはしばしば痛切にそれを感じ、口にしたこともあるのだが、さうして事實、乏しいには違ひないのだが、さう云ふ國語にはそれを補ふに足るだけの長所があることを忘れてはならない。

○

今の中學校や專門學校で敎へる國文法と云ふものはどうなつてゐるのか、私たちが學生時分に敎はつたのと大して違つてゐないのであらうか。

明治年間は何事につけても西洋文物の模倣時代であつたから、文法迄が英語や佛語の直譯に終つたのは是非もないけれども、私たちの習つたやうな文法が今も敎へられてゐるのだとしたら、全く有害にして無益なものである。その後さつぱり用がないので文法の本なぞついぞ覗いたこともないから何とも云へないが、もう今日は獨創的な國文法が行はれてゐてもいい頃である。

英語では全然必要のない場合でさへ、體裁のためにサブジェクトを置かないと承知しない。これに反して日本語に於いては、少くとも詩や小說の文章には主格を置かないのが普通であつた。平安朝の昔から

徳川時代まで、西洋の眞似の流行らない時代はさうであつた。今こころみに雨月物語の「白峰」の冒頭を見ると、

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山のもみぢ見すごしがたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不盡の高嶺の烟…なほ西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、葭がちる難波を經て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつゝも、行く行く讃岐の眞尾坂の林と云ふにしばらく節を停む。…

と、ここ迄が一つのセンテスであつて、此の中に主格にあたる言葉は何處にもない。隨つて此の長い道中をした主人公が誰であるかは讀者の想像に任せてあるので、「圓位」と云ひ「西行」と云ふ名が出て來るのは、われわれの原稿用紙なら三四枚も先へ行つてからである。尤も國文學の素養のある者なら讀んで行くうちに次第に見當がつくやうに書いてあり、そこに奥床しさがあるけれども、同時に又、主格がないために此れを讀む者は自分がそれらの名所古蹟を見て廻つてゐるやうな感じを起す。主人公の西行の境涯と讀者のそれとが一層切實に結び着けられる。作者がそこ迄を意識して書いてゐようともゐまいとも、かう云ふところが日本文の特長なのである。西鶴などの文章は最も顯著に此の筆法を用ひてゐる。源氏物語の「桐壺」から「花の宴」迄を調べて見ても、冒頭のセンテンスに主格のあるのは、「桐壺」、「帚木」、「紅葉賀」の三篇だけで、その他の五篇は悉く省略してゐる。

思へどもなをあかざりし夕がほの、露にをくれし程の心ちを、年月ふれどおぼしわすれず、ここもかしこも、うちとけぬかぎりのけしきはみ、心ふかきかたの御いどましさに、けぢかくなつかしかりしあはれに、似る物なう戀ひしく覺え給ふ。…

——と、此れが「末摘花」の書き出しである。もう一つ「空蟬」の冒頭を引くと、

ねられ給はぬままに、われはかく人に憎まれてもならはぬを、こよひなんはじめて憂しと世をおもひしりぬれば、はづかしうて、ながらふまじくこそ思ひなりぬれなどのたまへば、涙をさへこぼして伏したり。いとらうたしとおぼす。…

此處では「ねられ給はぬままに」から「こぼして伏したり」迄が一つのセンテンスで、「いとらうたしとおぼす」は又別のセンテンスである。ところで最初のセンテンスには、隱されてゐる主格が二つある。卽ち「ねられ給はぬままに…ながらふまじくこそ思ひなりぬれなどのたまふ」者は源氏であつて、「涙をさへこぼして伏」す者は從者の小君でなければならない。それから次ぎの「いとらうたしとおぼす」者は再び源氏になつてゐる。源氏物語の文章が今の人に分りにくいのは、かう云ふ風に一つのセンテンスに二つ以上の主格が出て來る時で

さへもそれを省略するせゐであつて、もし學校の綴り方の時間に生徒がこんな文章を口語體で書いて出したら、必ず訂正されるであらう。しかしながら、それが日本文である限り、口語體であらうと昔の和文體であらうと、此の書き方は文法的に正しいのである。主格を入れても勿論誤まりではないが、どちらかと云へば入れない方が美しいのである。そんならどうして二人の人を區別するか、一つが源氏の動作であり、一つが小君の動作であることが何處で分るかと云へば、働詞で分る。源氏の方は「ねられ給はぬ」と云ひ、「のたまふ」と云ひ、「おぼす」と云ひ、ちやんと敬語が使つてある。小君の方はただ「打ち伏す」となつてゐる。

さう考へると敬語は單に儀禮上の言葉ではない。文法上立派に一つの働きを持つてゐるのである。

○

羅典語は主格がなくとも、働詞の變化で分るやうに出來てゐる言葉ださうだが、日本語に於いても、敬語を使ふ場合には主格を略すべきであり、そのための敬語と考へていい。禮儀から云つてもその方が正しい。恐れ多いたとへではあるが、「行幸」と云ひ、「行啓」と云ふやうな言葉は、元來主格たるべき御方のおん名を口にするのが勿體ないために出來たのではなからうか。

「給ふ」と云ふ働詞は、昔は二た通りに變化した。「給はん、給ひ、給ふ、給へ」と變化する時は高貴の人の動作を敬まふ言葉になり、「給ひ、給ふる、給ふれ」と變化する時は、高貴の人の前へ出て、自分の動作を卑下して云ふ言葉になつた。これなどは、ちよつと聞くと隨分面倒な區別のやうで、學校で教はつた時分には昔の人は厄介な使ひ分けをしたもんだと思つただけだが、よく考へると、なかなか重寳な役目をしてゐる。なぜなら、此の使ひ分けに依つて、「主人が曰く」、「家來が曰く、」と、一一斷る必要もなければ、二人の關係を説明する手數も省け、ただ對話を記すだけで双方の身分が分るやうに出來てゐる。かう云ふ風な便利な言葉はその外にもまだ澤山あつた。「御邊(ごへん)」と云ひ、「おん身」と云ひ、「それがし」と云ひ、「妾」と云ひ、「まろ」と云ふやうな人稱代名詞も矢張りさうであつた。これらは凡べて、便利と云ふことを目的にして生れたのではないとしても、實際の文章の上では何程か言葉の省略に役立つてゐた。

「給ふ」と云ふ語の第二の變化は、今日では既にすたれてしまつたし、それでなくても、階級的差別の撤廢されつつある現代に於いて、昔のやうな敬語を復活することは不可能でもあり、好ましくないには極まつてゐるが、しかし今でも「おつしやつた」、「いらしつた」、「遊ばした」、「せられた」、「なさつた」と云ふ程度の敬語は生きてゐるのだ

し、「給ふ」だつて第一の變化の方はまだすたれた譯ではない。第二の變化の方も、それに代つて自分を卑下する言葉はある。「僕」と云ふのを「わたくし」と云ひ、「はい」と云ふのを「へい」と云ひ、「です」と云ふのを「ございます」と云ふ類は皆さうである。だからそれらが使はれてゐる限りに於いて、主格を略すことが出來る。

「私」と云ふのに「アイ」と云ふ言葉しかなく、「はい」と云ふのに「イエス」と云ふ言葉しかない英語は、便利で簡單なやうだけれども、小說などを書く時には却つて不便な場合が多い。

○

私は日本の文法の書に、性の區別、ジエンダーの項が設けてあるのを見たことがない。少くとも私の學生時代には、「彼女」「彼女等」と云ふ直譯の代名詞を除いては、日本語にはジエンダーがないもののやうに敎へられてゐた。

けれども昔は「妾」と云ひ、「御許」と云ひ、「御前」と云ひ、それらがさう規則的に使はれてゐなかつたにせよ、現に代名詞にジエンダーがあつた。現代に於いても歐洲語のやうに一つ一つの單語に性はないけれども、男の話す話と、女の話す話とは、實際にはちやんと區別が附く。小說の中の會話を讀んでも、男が云ふのか女が云ふのかは直ぐに分る。それは主として前段に述べたやうに、「ね」、「わ」、「わよ」、「だわよ」、「てよ」、「の」、「のよ」等の捨て字に依つて分るのであるが、その外にも「しない?」「しなくつて?」等の女性特有の云ひ方がある。「下さい」と云ふ時に、女だつたら「くれない?」とか、「頂戴」とか、「頂戴な」とか云ふのが普通である。食物の味を形容する「うまい」と云ふ言葉は、關西地方では女は決して使はない。女なら必ず「おいしい」と云ふ。女が「うまい」と云へば「巧み」と云ふ意味に限られてゐる。

尤も歐洲語に於けるジエンダーは、たとへば獨逸語で太陽が女性だつたり月が男性だつたりするやうに、必ずしも人間の男女の區別ばかりには使はれてゐない。それはそれで、澤山の代名詞が重なつたりする時に、それらの代名詞の指示する物を互ひに區別することが出來、さう云ふ點で役に立つてゐるけれども、會話に性の分ちがないのは、小說家に取つて此の上もなく不便である。恐らく此れは世界中で日本語だけが持つ特長ではないだらうか。支那語にだつて多分さう云ふ區別はあるまい。

從つて西洋の小說では、「と、彼が云つた」と、「彼女が云つた」と斷らなければ分らなくなる。彼の國の作家は此の「云つた」の頻出を避けようとしていろいろ違つた言葉を置き換へるのに苦心するらしく、嘗て何かの英字新聞にそのパロディーが出てゐたのを見たことがあつ

た。それを讀むと、「ヒー、セッド」、「ヒー、アンサード」、「ヒー、リプライド」、「ヒー、コンフェッスド」、「ヒー、プロテステッド」、「ヒー、リトーテッド」と、あらゆる言葉を並べてあるが、さうすればする程、苦心のあとが餘計眼について耳觸りになる。

のみならず、會話の間に「云つた」を挾むと、喧嘩口論の場面のやうな急迫した情景は死んでしまふ。英語ではよく、一人が云ふ言葉を二つに分けて、「と、彼は云つた」を間へ挿入するやうにする。――

「はい、私もさう思ひます。」

と彼は云つた。

と書くべきところを、

「はい、」

と彼は云つた、

「私もさう思ひます。」

と云ふ風に分ける。思ふにかうすると受け答への間に地の文が這入らないで、いくらか應酬ぶりが生き生きとするからであらう。

會話をする者が二人に限られてゐる時はまだ始末がいいけれども、よく彼の國の小說にある晩餐會などの場面、大勢の淑女紳士たちがサロンに集まつて、彼方の隅や此方の隅から警句が飛んだり、舌戰が挑まれたりするやうなところになると、西洋の作家はそれを明瞭に書き分けるために隨分忙しい思ひをするらしい。全體さう云ふ賑かな席の雜談の空氣を生き生きと描寫することは、いづれにしても相當に作家的修業を要する仕事ではあるが、日本語のやうに男と女の區別がつき、「僕」、「わたくし」、「わし」と云ふやうな代名詞に依つて年齡や身分の相違を現はすことの出來る國語は、そんな場合に餘程面倒が省ける譯である。

○

尙ついでながら、普通われわれは小說の中の會話と地の文とを分つために「　」の印、――カギを用ひる。これは英語の第一第二クォーテーション・マークにあたるものだが、此のカギも日本語にたいては實はそれほど必要はない。

德川時代の作品にもカギはしばしば用ひられ、そのカギの肩へ、しやべつてゐる人の名前の頭字を入れたのがある。たとへば小春と治兵衞の會話なら、小へとして小春の言葉を書き、次ぎに治へとして治兵衞の言葉を書くやうにする。けれども此れは會話と地の文とを區別するためと云ふよりも、むしろ話し手と話し手とを區別するためのものであつた。當時は話し手が變る每に行を改めることをしないで、ずつと書き續ける習慣になつてゐたから、會話が幾つもつながる場合にはカギを入れないと分りにくかつた。が、それに反して會話から地の文

へつながる場合には、口語と文章語とが截然と分れてゐた時代であるから、そんな印を使ふ必要はなかつたであらう。

今日われわれの作品に於いては、會話は話し手が變る毎に一一行を改めるのが通例になつてゐる。その上口語と文章語との區別も、昔ほどハッキリとはしてゐないものの、「のである口調」を用ひる限りはまだまだ相當に隔たりがあつて、たとひ續けて書いたにしてもそんなに紛れ易くはない。「のである口調」はその點に於いて、「あります」や「ございます」口調に比べて、たしかに小説の文體としては便利である。私は歐洲語の實際をよく知らないからあまり口幅つたいことも云へないけれども、思ふに西洋の口語と文章語との距離は、われわれの現代の作品に於けるそれよりも一層近く、紛らはしいのではなからうか。さうだとすれば此處でも日本の作家の方が得をしてゐる勘定である。

○

以上に述べたやうな日本語及び日本文の長所は、誰よりも先にわれわれ小説家が最もよく心得てをり、それを充分に活用してゐなければならない筈である。然るに不思議にも事實は反對なのである。

一つの新しい時代が來れば、藝術の上でも舊套を脱しようとする運動が起り、在來の傳統を破つた若若しい手法が生れるのは言を待たない。明治の文人が維新以來の時勢に應じて口語體と云ふ自由な文體を創めたことは、平安末期の和漢混交體と共にたしかに文學史上に於いて特筆される功績であつた。さうして又、それと同時に西洋風の調子や云ひ廻しを取り入れたことも、當時に於いては必ずしも無益な努力ではなかつた。それはあの頃に於ける歐米模倣の一般風潮に捲き込まれた結果ではあらうが、さうだとしても、一度は通つて來なければならない道程であつたかも知れない。鹿鳴館の舞踏會のやうな、たわいのない、笑ふべき模倣ではなかつたかも知れない。私はここで懺悔をしなければならないが、有りていに云ふと、われわれの口語體が最も西洋臭くなつたのは自然主義勃興前後の時代、ちやうど私などが文壇へ出かかつてゐた時分からであつて、紅葉や美妙齋の頃には、まだ雅俗折衷體の臭味が脱け切つてはゐなかつた。その證據には、今でもあの頃の文體を守つてをられる鏡花氏などの作品を見れば、思ひ半ばに過ぎるであらう。即ち年代から云へば、明治の末期、或ひは大正の初期頃から顯著に西洋風になり始め、その後は日に日にその傾向が急激になつて遂に今日の狀態を來たしたもので、私なども多かれ少かれ勢ひを助けてゐるであらう。が、その功罪は兎も角もとして、最早や今日では、明治以來歐化の方向のみを辿つて來た文體に何等かの變化を生じてもいい時期ではあるまいか。ここでわれわれの國語の性質を考へ、その長所を生かすやうに努めても、まさか時勢が逆戻りする心

醜はあるまい。

もともと西洋と日本では言葉のジニアスが違ふのであるから、模倣したところで程度は知れたものである。そして模倣すればする程、日本文としては醜くなり、分りにくくなる。早い話が飜譯物を見てもさうではないか。西洋の作品をわれわれの口語體に直すと大概の場合原文よりは冗長になるので、日本語と云ふものは不便な國語だ、歐洲語と同じ事を表現するのに餘計言葉數を費しながら意味は却つて不明瞭になると、よくそんなことを云ふ人があるけれども、一つの國語を直譯風に他のもう一つの國語に移せば、何處の國の言葉でもさうならざるを得ないのである。まだしも歐洲語を日本語に直すのだつたら曲りなりにも意味は通じるが、その反對の例を考へてみるがいい。和歌や俳句の英譯がいかに長たらしく、原文の二倍三倍の文字を費しながら、殆んど內容が違つたものになつてゐるのは、われわれのよく知つてゐることではないか。さう云ふ場合、日本語のやうな簡便な云ひ廻しを持たない歐洲語では、直譯しようにもする道がないので、結局パラフレーズするより外はなく、飜譯と云ふよりは一種の註釋のやうになつてしまふ。もしわれわれが西洋物を譯するのに、直譯體に依らないで純然たる日本風の表現法を取るとしたら、むしろ原文より短かいくらゐになることは、鷗外漁史の「即興詩人」などを見ても分る。

これを要するにわれわれの書く口語體なるものは、名は創作でも實は飜譯の延長と認めていい。故有島武郎氏は小說を書く時しばしば最初に英文で書いて、然る後にそれを日本語に直したと聞いてゐるが、われわれは皆、出來たらそのくらゐなことをしかねなかつたし、出來ない迄もその心組みで筆を執つた者が多かつたに違ひない。それは努めて表現を清新にするための手段でもあつたけれども、正直のところ、美しい文章、ひびきのいい文章、――と云ふことよりも、先づ第一に西洋臭い文章を書くことがわれわれの願ひであつた。斯く云ふ私なぞ、今から思ふと何とも恥かしい次第であるが、可なり熱心にさう心がけた一人であつて、有島氏のやうな器用な眞似は出來なかつたから、その反對に自分の文章が英語に譯し易いかどうかを始終考慮に入れて書いた。西洋人はかう云ふ云ひ廻しをするだらうか、西洋人が讀んだらどう思ふだらうか、と、それがいつも念頭にあつた。

○

誰であつたかが、幸田露伴氏は非常に長いセンテンスを書く、時とすると一ページもつづく程のがあると云つてゐたが、これは私も夙に氣が付いてゐたことで、露伴先生の文章と云へば、屑屑嶇嶇と句を重ね、言葉を疊み、いかにも呼吸の長い、息の深い感じを起させるのは、主としてそのためであつて、現存の作家中長いセンテンスを書く

點に於いては恐らく先生を随一とするであらう。その外には泉鏡花氏、里見弴氏、宇野浩二氏なぞが長い方だが、概して大正期以後の作家の物は一つ一つのセンテンスが短かい。若い人ほどさうのやうである。

私の見る所を以てすれば、これは關係代名詞と云ふ重寶なもののない日本語を以て、歐洲文の組み立てを模倣した結果であると思ふ。英語のセンテンスの最も簡單なる形、——

何何ハ何何デアル

と云ふ語法が、何處迄もわれわれの口語體に附いて廻つてゐて、而も此の形式を備へた一つのセンテンスと、他の一つのセンテンスを結びつける言葉がない。尤も全然ない譯ではなく、「何何ガ何何シタ時ニ、何何ガ何何シタ」と云ふやうなのは云へるけれども、「何何ハ、何何ガ何何シタトコロノモノヲ、何何シタ」と云ふやうな、英文法で云ふ從屬的クローズが附く文章は、云つて云へなくはないにしても明瞭を缺き、そんなクローズが二つ三つも重なつて來たら到底分らなくなつてしまふ。だからさう云ふ文章を日本語に譯さうとすると、いかに忠實な飜譯者でも一つのセンテンスには譯し切れないで、二つにも三つにも分けることになる。（岩波から出てゐる久保勉氏譯の「ケーベル博士論文集」は原文の關係代名詞を生かすやうにしてありながら、明晰さを失つてゐない。あれなどは先づ例外の名譯と云つてよからう。譯者の苦心が思ひやられる。）かう云ふ場合、昔の日本文では前に引用した源氏の「空蟬」の一節がいい例であるが、ああ云ふ風に幾つものクローズの中にある不必要な主格を略してしまひ、時に依つては極く肝心な主格だけを入れるので、却つて意味がハッキリするし、どんなに長いセンテンスでも割りに紛糾を來たすことなく續けられる。それのみならず掛け言葉と云ふものがあつて、二つの主格——或ひは主格と目的格、その他いろいろの場合——を一つの働詞又は形容詞で受けることが出來、關係代名詞よりもつと便利な働きをしてゐた。ところが西洋流に「何何ハ……」「何何ガ……」と一つ一つ主格を入れると、「ハ」だの「ガ」だのが徒らにめまぐるしいばかりで、澤山の働詞がそれらの孰れを受けてゐるのだか見分けがつかない。そこで仕方なくクローズを獨立させて、別のセンテンスにするやうになる。

○

英語でも規則働詞の過去の形には必ず語尾に "ed" の音がつく。しかしながら、日本語のやうに働詞がセンテンスの終りへ來ることは稀であるから、それほど耳ざはりではないけれども、われわれの口語では、殊にセンテンスの短かいものでは、どうしても「る」止め「た」止めの頻出を免れられない。

私は敢て「た」止めの多い文章が悉く惡文だと云ふのではない。

くとも「た」の音や「る」の音の繰り返しは、音樂に於ける鉦や太鼓と同じやうに拍子を取ることになる譯だから、表現にテムポを與へようとする時は、「た。…た。…た」と行くのも惡くはない。實際「た」止めの文章の持つ魅力の大半は、此のリヅムの感じから來る。名文家と云はれる人は此のリヅムを非常に生かして使つてゐる。「る」止めでも同樣な譯であるが、「た」のやうに齒切れがよくないので、効果が薄い。「た」の方を太鼓とすれば、「る」の方は木魚ぐらゐにしか響かない。

○

今日は何事もテムポの世の中であるから、拍子入りの文章が然く盛んに行はれるのも或ひは偶然でないかも知れない。兎に角「た」止めの文章は齒切れがよく、爽快、新鮮、剛健と云つたやうなものには適するが、纖細なもの、優婉なもの、暗示的なもの、象徵的なものを云ひ現はさうとするのには、決してふさはしい文體ではない。

前にもちよつと觸れて置いたやうに、日本語の表現の美しさは、十のものを七つしか云はないところ、言葉が陰影に富んでゐるところ、半分だけ物を云つて後は想像に任せようとするところにあつて、眞に日本的なる風雅の精神と云ふものはそこから發してゐるのである。尤もかう云ふと、それだから日本語は不完全な國語だ、十のものを七つしか云はないのでは舌足らずがしやべるやうで、到底歐洲語のやうに、說いて委曲を盡すことは出來ない、と云ふ人があるかも知れない。それは人人の考へやうだから、一概には片附けられないけれども、私に云はせると、全體人間の言葉なんてさう思ひ通りのことを細大洩らさず表現出るものではないのだ。手近な例が料理法の本だとか、魔術の說明書なぞを讀んでも、それが日本文であらうと英文であらうと、圖解でも這入つてゐなかつたら中中分るやうには書けてゐないではないか。言葉と云ふものはそれほど不完全な、微細な叙述になつて來ると一切實用にならないものなのだ。試みに鰻をたべたことのない人に鰻の味を分らせるやうに說明してみろと云つたつて、何處の國の言葉でもそんな場合の役には立つまい。然るに西洋人と云ふものは、なまじ彼等のヴォキャブラリーが豐富なために、さう云ふ說明の出來得べくもないことを、何とか彼とか有らん限りの言葉を費やして云ひ盡さうとして、そのくせ核心を摑むことは出來ずに、愚かしい努力をしてゐるやうに私には見える。獨逸語は哲學の理論を述べるのに最も適してゐるのださうだが、それにしても作者自らが此れで充分と思ふ程には決して云ひ盡せはしないであらう。現にショウペンハウエルが「意志と現識の世界」の序文で、「自分の本は一字一句が全體に關連してゐるから、正しくは二度讀んでくれないと理解されない」と云

つてゐるやうに、言葉を費せば費すほど、全面を同時に具象的に云ひ表はすことが至難になる。さう云ふ點を考へると、少くとも文學に於いては、日本語のやうに言葉の云ひ表はし得る限界を守つて、それ以上は暗示するだけに止めた方が、賢いやり方ではないであらうか。

○

だが、さうは云ふものの、日本語にしても今日の飜譯體を改めて、その本來の傳統的な語法を復活しさへしたら、ずゐぶん細かい心の働きや物の動きを表現することが、――或ひは氣分に依つてでも感じさせることが、――出來るのである。それも和文の云ひ廻しが今日の口語體に全く應用出來ないのなら仕方がないが、いくらでも活かして使ふ道があることは既に上來述べて來たところで大體明かになつたと思ふ

私の知つてゐる限りに於いて、今日の作家で古い手法を上手に活かして使つてゐる人は、泉鏡花氏のやうな老大家を除いては里見弴氏と久保田万太郎氏の二人である。それが近頃のことでなく、兩氏とも可なり若い時代からずつとその心がけでゐたらしいのは敬服に値ひする。さうして而も面白いのは、同じく古法を守りながら兩氏の行き方が全然違つてゐることである。里見氏の方は、思ふに鏡花氏の文章などからニュアを與えたものらしく、盛んに主格を省略してあり、その結果として筆が極めて自由自在に、何處迄でも腰が伸び、云はんと欲して云ひ得てゐることなく、殆んどおしやべり過ぎる程に迄、痒い所へ手が屆くやうに行き亘つてゐる。久保田氏の方はそれと反對に、出來るだけ言葉數を愼しみ、云はないで濟むことは成るたけ云はないやうにして、守錢奴が錢を吝しむやうに一語一語を惜しみつつ暗示的に使つてゐる。メーテルリンクの行き方などと稍趣を一にしてゐるが、あれで久保田氏が、狹少な下町情調の世界のみでなく、もつと多趣多様な方面にまであの語法を押しひろげることが出來たら、私は文句なく頭を下げるであらう。が、何にしても此の二人の文章は、日本語の積極的な長所と消極的な長所とを、先づ遺憾なく代表してゐると云つていい。

今の若い人たちの眼からは、里見氏の文體も久保田氏の文體ももう古くさいであらうが、何も此の兩氏のスタイルをそつくり眞似ろと云ふのではない。古い語法も活用の方法次第では却つて非常に新しくなる。むしろ現在の口語體の方が、今では一種の型に囚はれてしまつてゐる。さういつ迄も「彼は云つた」「それはあつた」ばかりで押して行くこともなからうではないか。西洋でもアンリ・ド・レニエの文章に何處が始まりで何處が終りだか分らないやうな書き方だと聞いてゐる。ジョウヂ・ムーアの此の頃の物も、會話に行を改めず、クォーーション・マークを施さず、地の文の中へ、一つセンテンスに書き込んでゐるところは昔の日本の小説と同じである。殊に近來はジエーム

ス・ジョイスなどと云ふ奇拔な作家が飛び出して來る世の中だから、今に西洋の方が一と足お先に失敬して、主格のない文章なんかを書くやうなことになるかも知れない。

○

われわれ創作家の心がけもさる事ながら、私は今の小中學校の教師、――就中文法、綴り方、古典文學を擔當する人人や、教科書の編纂者あたりがもう少し此の點に氣を附けてくれたらどうかと思ふ。云ふ迄もなく、國語の傳統的精神を發揚することは、東洋思想を尊重することである。徒らに左傾思想の取り締まりをするよりは、此の方がずつと有効ではないか。

取り分け私は、今の女學校の先生たちに忠告したい。近頃の女子は綴り方でも手紙の文章でも、全く男子と區別がないやうな書き方をするが、あれは學校がさう云ふ方針で教へてゐるらしい。女子と男子が平等であると云ふことは、女子を男子にしてしまふこと、女性の美點をなくしてしまふことでない以上、そして日本文には、立派にジェンダーの差別が設けてある以上、その折角の國語の機能を亡ぼしてしまふ必要が何處にあらうか。ほんたうを云ふと、もつと高級な小說や論文でも、女性の筆に成るものは一見して男子と區別されるやうに書いたら、隨分讀み物に變化が出來て面白いと思ふ。假りに男子の「のである口調」に對して、女子が「あります口調」を使ふのなぞも一つの方法ではないか。さうして此れは、繰り返して云ふが、ひとりわれわれの國語に於いてのみ實行出來ることなのである。

○

私は自分が小說家であるから、主として小說の文體について得失を考へて來たのであるが、普通日常の實用文で小說の中に含まれてゐないものはないから、私の論旨は殆んど凡べての口語文に當て篏められるものと思ふ。ただ餘程專門的な學術上の論文とか、哲學的の理論とかは、私には畑違ひであるから自信のあることは云へないけれども、あれも何とかもう少し分り易く、親しみ易く、日本風に云ひ現はせる方法があるに違ひない。一般的にどう云ふ風に改良しろとは云へないながら、獨逸哲學の飜譯書などを讀んで見ても、此處をかう云ふ工合に云つたらもつとハッキリするだらうにと思ふやうな所がザラにあつて、一字一句に就いてなら幾らでも缺點を指摘し得る。蓋し西洋哲學の飜譯は飜譯中の難事であつて、理想を云へば飜譯者が原著者と同程度の頭腦を持ち、原著者の思想を悉く消化し盡してから、然る後に全然自分の物として、原文の字句に囚はれることなく表現するに越したことはないであらう。尤もたまには「ケーベル博士論文集」のやうな例外もないではないか。

但し、ここに、誰でも氣がつく筈であり、早速改良しようと思へばなし得る缺點が一つある。それは用語、テクニックに就いてである。

○

此の間近松秋江氏が何かの雜誌に、「近頃新聞紙上に現はれる若い人たちの評論は何を云つてゐるのやらサッパリ分らない。新渡戸博士のやうな人が、矢張りあれを讀んでみて分らないと云つてゐた、なぜあんなものを始終掲載するのか、新聞紙の見識にかかはる」と云ふやうな氣焔を擧げてゐた。秋江氏の云ひ方は少し極端ではあるが、所謂評論家の文章が讀みづらいことはたしかである。われわれのやうにその方面に馴染みを持つてゐる者が、成るたけ親切に意味を汲み取るやうにして讀めば、まさか分らないことはないけれども、全くのしろうと、殊に新渡戸博士のやうな老人だつたら、いくら學者でも分らないと云ふのが本當であらう。つまり文壇では通用しても一般には通用しないのである。それが論戰などの場合、急き込んで筆を走らせたりしたのは尚更分らなさ加減がひどい。近松氏は此の弊害を、評論家の頭腦の問題に歸してゐるかのやうであつたが、──さうして事實、頭のよしあしにも依るには依るが、──半分以上は用語の撰擇に原因するところがあると思ふ。どう云ふ譯か若い人になればなる程、創作にはわれわれよりもやさしい言葉を使ひながら、論文の場合には馬鹿に澤山の漢字を列ね、何何的何何的と云ふ風に幾らでも四角張つた文字を積み上げ、殆んど語を成してゐないのが多い。そしてそれ程の必要もないのに殊更哲學上の熟語を用ゐる。大衆に向つて呼びかけてゐる人程さうなのは甚だをかしい。

○

全體日本に於ける漢學と洋學とは、兩極端のやうであつて實は思ひの外緣が近い。今日のわれわれの口語文に於いても、眞に日本的な和文の文脈こそ廢れてしまつたが、漢文口調は未だに潜勢力を保つてゐることは前に述べた通りである。それのみならず、明治になつてから、西洋流の物の云ひ方が輸入されたと同時に、漢語や漢字の使用量も徳川時代よりは却つて殖えた。その證據には、明治以後に於ける諸官省の公文書、新聞雜誌等の記事文と、徳川期のそれらに該當するものとを比較して見れば直ちに分る。役人の名前にしてからが、御老中、若年寄、町奉行、目付、岡ッ引、お小姓、お小姓頭、組頭、お側用人、お馬廻り、勘定方、賄ひ方などと云ふのと、今の内閣總理大臣、總督、長官、知事、參事官、秘書官、刑事、警部、巡査などと云ふのと、どつちがより日本的であるか說明する迄もないであらう。

蓋し漢語風な役人や役所の稱呼はその由來する所が久しく、唐制を模倣した王朝時代に端を發してゐるのであるが、鎌倉幕府になつてか

らそれが始めて日本風な呼び方に改められ、德川時代迄ずつとさうであつたのが、明治維新と共に、漢字や漢語の使用までが王政の古へに復つたのである。しかしながら、官吏の稱呼を改めることは、人心を新たにするための政策であつたとしても、何故かうまで支那や朝鮮臭くする必要があつただらうか。

○

それと云ふのは、漢語はいかに日本語に同化されたと云つても元來外國語であるから、西洋の熟語に當て嵌める場合に、純粹の大和言葉よりはエキゾチックな感じを出し易く、何となくハイカラに聞えるせゐであつたに違ひない。たとへばコンサーンと云ふ英語を「係はり」「係り合ひ」「氣がかり」などと譯したのでは一向耳新しくないが、「干與」とか「關心」とか云ふと變に西洋臭く、意味ありげにひびく。即ち漢語は明治の歐化熱の機運に乘じて、計らずも洋語と握手したのである。

尙もう一つの理由は、日本には昔から科學らしい學問がなく、醫學、天文學、本草學等をすべて支那から學んだ結果、それらの學術上の熟語も漢語をそつくり使つてゐたのが、明治以後に於ける科學思想の勃興と共に、そのまま新來の西洋の熟語へ應用された關係もあらう。しかし漢語でもさう云ふ風に昔からあるものを使つてゐるうちはまだよかつたが、追ひ追ひ學者たちが勝手に漢字を組み合はせて、思ひ思ひに新奇の熟語を作るやうになつてからは、漸くその煩に堪へられなくなつた。そして一時は、新しい熟語を使ひさへすれば新しい思想家であるかのやうに見せかけることが出來たので、此の弊害は今日も全く終熄したとは云ひ難い。私の知つてゐる範圍でも、「觀念」の代りに「理念」などと云ふ隨分不思議な哲學上の言葉が出來たのは、つい近年の事のやうに記憶してゐる。「觀念」と「理念」と、學者に云はせたらいくらか感じが違ふのかも知れないけれども、一字か二字の漢語の中へ思想的內容を盛り込まうとするのは無理な話で、さう云ふ人たちは一字一字が意味を持つてゐる漢字の性質に禍され、言葉は符牒に過ぎないことを忘れてゐるのである。

○

ハイカラな近代的熟語のやうに見えても、案外古い言葉もある。「舞蹈」と云ふ語は枕の草紙に出て來るし、「觀念」と云ふ語も元は佛敎の言葉で、方丈記の中に使つてある。その他「藝術」「文藝」など云ふ言葉も、今と多少は意味が違つてゐるにもせよ、明治以前にないことはない。そんな譯で、すでに成語として通用するものは改める迄もないけれども、此れから新しく作る熟語、或ひは飜譯する熟語は、もつと日本語らしいものにしたらどうであらう。漢語に直すくらゐな

ら、西洋に原語のあるものは寧ろそのままを使つた方が、まだしも此れからの世の中には分り易く、便利ではなからうか。漢字は一字一語であるから、ちよつと考へると簡單に用が足りるやうだが、昔なら知らず、今後の時勢では、——殊に四聲の區別を持たない日本人に取つては、——澤山の漢語が重なつて來ると、ただ無意味なる音の累積としか感ぜられなくなるであらう。

○

イギリス人はアイディアと云ふ言葉を哲學の熟語としても使へば、普通の會話の中にも使ふ。さう云ふ風にわれわれの哲學も、われわれが日常口にするやうな砕けた言葉で云ひ現はすことは出來ないだらうか。況んやそれ程嚴密なる敍述を必要としない、新聞紙上に現はれる評論の如きにおいておやである。

「觀念」、「概念」等の厄介な言葉を使はないでも、大概な場合は「考へ」と云ふだけで濟むことがある。然るに多くの評論家は、「知つてゐる」で濟むところを「意識してゐる」と云ひ、「餘り」、「差引き」「さや」で濟むところを「剩餘」と云ひ、萬事がさういふ行き方で、ことさらに漢字を多く使ふ。就中最も眼につくのは「的」の字の亂用である。**あれはただの「の」の字に書き換へて差し支への場合が非常に多い。**たとへば「思想的背景」は「思想の背景」で、「社會主義的文學」は「社會主義の文學」で澤山である。（現在の支那語に於ける「的」の字は「の」の字程にしか使はれてゐない。）それも程度問題であるが、いかなる漢語にでも「的」の字を加へて強ひて形容詞の働きをさせ、それを幾個となく積み重ねるに至つては、先にも云つたやうに音の連續になるばかりで、意味を追ひかけて行くのに骨が折れるから、到底晦澁になることを避け得られない。

○

純然たる日本語で熟語を作ると、長たらしくなり、纏まりがつかなくなると思ふ人は、農夫、漁師、大工、左官、指物師、塗師屋等の間に使はれてゐる用語を見るがいい。實際、今日眞の日本語らしいテクニックが生きて使はれてゐるのは、彼等の階級に於いてのみである。彼等が日常それで結構用を足してゐる愛すべき言葉、——働きのひろい、細かい、簡單で氣の利いた言葉は、遠く室町時代頃からの正しい傳統を引き繼いでゐるのである。

私は、漢字制限よりもローマ字採用よりも、何よりも先づ用語の矯正と、「新しい言葉の作り方」の改良とが急務であると思ふ。それからでなければ漢字制限もローマ字採用も實行出來る筈がない。

○

から云ふことは、凡そ筆を執る程の人がみんなで氣を揃へてくれなければ、**私一人が突如として異を樹ててみても一向實効のないことで**ある。恐らく世間には私と同様な意見を持ちながら、仕方がなしに大勢に引きずられてゐる人が多いであらう。何とかならないものであらうか。

（昭和四、十月記）

政界革新の諸方策

（黨費の公開、寄附の制限、認可許可手續の改革、機密費制度の改革、地方利益に依る黨勢擴張の禁止、瀆職に對する制裁の擴張、選擧公營）

清瀬一郎

昭和四年九月二十六日午前八時、前內閣の閣僚小川平吉君が東京地方裁判所檢事局に召喚を受け、卽日起訴せられた。世間傳ふる所によれば同氏に對し在職中行はれた頗る重大なる瀆職の嫌疑があると云ふのである。前には賣勳事件につき天岡前賞勳局總裁の收監を見、今又、此重大事件の報に接したるのみならず、前朝鮮總督さへも疑雲の裡に包まれて居る。此等續發の諸問題が世間に異常の衝動を與へたことは無理もない、都下の新聞紙は一齊に前當局の責任を糺彈し、若くは政治道德の作振を望むの社說を揭げた。然し、此問題に當面して我々の考へさせられることは、斯る事件の發生する原因が何處に在るかである。古來賄賂と云ふことは殆んど絕えたこともなき古き形の犯罪であるが、その動機は多く當路者の私慾から來て居る。それ故にその規模も比較的小であり、又その發生も偶發的であつた。然るに今回の件の如きはその規模の大にして且つ計畫的なることは、到底封建時代の吏僚の收賄事件と比較さるべきものではない。斯の如き新犯罪の發生するには、そこに新しき原因がなくてはならぬ。それは何であるかと言へば、彼の政黨組織、殊に黨費の制度の不合理より來て居るものと見るの外はなからう。卽ち政界革新の根本は政黨の黨費の問題を中心として考察せらるべきである。この問題を解決せなければ、幾回檢擧を行ひ、又如何に嚴罰を用ひても事件の再發は之を防ぐことが出來ない。依てこれ等の問題に關し、少しく考察してみたいと思ふ。

一、黨費の公開

日本の政黨が一ヶ年幾何の黨費を必要とするかは明瞭ではない。大正十三年の總選擧の際に要したる費用は內務省の調べに據ると貳千萬

百九拾壹萬圓であつたとある。昭和三年の總選擧は普選の制度の下に一層擴大されたる有權者を相手としたものであるから、此經費は一層增大して居るものと見られなければならぬ。獨り黨費の限度が明瞭でないのみならずその出所に到つては全く之を知ることが出來ない。大政黨の幹部中でも自黨の黨費の出所を、知つて居る者は極めて少數であると思はれる。世間に傳へられる所によれば凡そ次の三に在るやうである。(一)は富豪、財閥の寄附金である。富豪財閥は現在の政府黨にも又將來政權を握らんとする黨派にも相當の金額を寄付して置くものらしい。之は一見合法的のやうであるが、寄付を受けた黨派はその政權の地位に在るや自ら寄付者に對し有利なる行動を採らなければならぬこととなる。認可許可の出願は申すに及ばず、租税制度、關税政策等が富者保護に傾くは之が爲めである。(二)黨費の出所の第二は政府の權內に在る認可、許可若くは榮典授與に牽聯して金錢を收受する事である。その不法なるは言ふまでもない。(三)は公金殊に機密費、交際費の流用である、後にも述ぶる如く以上三個の財源は總て違法、不正であるから、之を杜絶するやうにしなければならないのであるが、之を杜絶する前提問題として、各政黨をしてその使用したる費用を公表せしむるの制度を採ることが尤も有效なる手段である。さうすれば自ら政黨の黨費は黨規に據て課せられたる會費及び無條件の寄付金となることと思はれる、黨費の公表については諸外國に於ても案外その法制が鮮い。唯、最も黨費問題につき苦き經驗を爲した米國に於ては一九一〇年以來選擧費(Campaign expenditure)屆出の制度を設けた。即ち黨務委員會はその受納せる金員の受取並にその支拂へる金員の支拂證を寄附者の氏名と共に之を下院事務局に提出すべきものとして居るのである。第五十二議會に於て尾崎行雄君が、議會に提案した「政治運動の爲め金品供與の制限に關する法律案」には次の如くなつて居る。

第五條　政治運動に關し金錢、手形、物品その他財産上の利益供與を受けたる者は其の收受の日より七日以內に官報に公告すべし。但し所定の會規會則に依るものは一括して其の總額を公告すべきものとす。

第六條　政治結社は每年一回一定の時期に其の收支計算を官報に公告すべし、議員の選擧ありたるときは其の終了後一月以內に選擧に要したる費用の收支を官報に公告すべし。

第七條　前二條の規定に違反したる者は六月以下の禁錮又は二百圓以下の罰金に處す。

無論、法文の作成法にはいろ〳〵論ずべき點もあらうし、之が實行、細則についても考案はあらうが、今日の如く黨費の不公明を默認する譯には行くまい。將に提案せられんとする勞働組合法、小作組合法にはその經費の公表を要求するであらう、獨り政黨のみその經費の收受を不公明の儘に打捨て置くべき理由のあらう筈はない。況んや之が政界百弊の源なるにおいておや。

二、寄附の制限

前項にも言つたやうに、政黨が一部富豪財閥より明示又は默示の條件を以て寄付を受けることは言はゞ一種の賄賂ともいふべきものであるから、之は始より禁止するを當然とする。嘗て米國でデモクラット黨の大統領候補者クリーブランドが、レパブリカン派のマッキンレーにひどくやられた事がある、それは保護關税政策に依て利益を獲得する營業者がマッキンレーに巨額の黨費を寄附したためであつた。依てマッキンレーは大統領に當選するや寄附者に極めて有利なる關税法を制定したと云ふことは有名な話である。斯くの如き苦き經驗をした米國では、その一九〇七年の法律に於て政黨基金に對しては、商業又は工業會社より寄附を爲すことを禁じて居る。我國の政情を察しても一部財閥の寄附行爲が國家全體の政治を歪曲しつゝあることは蔽ふべからざる事實である。殊に我國では或は特許會社、或は補助金を受くる會社等が政黨に巨額の選擧費を寄附しつゝあるやうに思はれる。アメリカのやうに一般に商工業會社よりの寄附を禁止するといふことが出來ないでも、少くとも此等の者より黨費の寄附を受くることを嚴禁するを相當と考へる。前にも引用した五十二議會に提出されたる「政治運動の爲め金品償與の制限に關する法律案」には次の如くにして居るのである。

第一條　左の一に該當する會社、組合其の他の團體又は個人は政治運動に關し直接たると間接たるとを問はず金錢手形物品其の他財産上の利益の供與を爲し又は供與の約束を爲すことを得ず。

一政府の特許せる事業を營むもの

二政府より補助金其の他財産上の保護補償若は保證を受くるもの

三政府に於て理事又は決議機關の全部又は一部を任免するもの

四政府より特權を付與せられたるもの

五政府の請負を爲すもの

第二條　前條に規定する會社、組合、團體の理事取締役其の他の役員にして個人名義を以て前條の行爲を爲したるものは該會社、組合、團體の行爲なりと推定す。

第三條　何人と雖政治運動に關し第一條に規定するものに對し直接たると間接たるとを問はず金錢、手形、物品其の他財産上の利益供與の申込を爲し又は供與を受くることを得ず。

上記の法文にも尙ほ研究を要する字句等は多々あるであらうが、趣意に於て右樣の規定が必要なる事は確に認識し得られるものと思ふ。

右の趣意はその文字でも明である如く一切の寄附を禁止するものではない、眞に或る政黨主張に贊成しその成功を祈るため瞭出せられる淨財は之を受くることを許すは當爲である。然し此の金額は政黨自身の利益から言つても、なるだけ少額の金額を多數の人から受ける方がよろしい。アメリカで一九〇四年の大統領選擧の際、共和黨のローズベルトは、自黨の爲め、One dollar subscription（一人一弗の寄附行

爲）といふ運動を始めた、之が非常に成功して多額の運動費を作ることが出來たといふことである。よつて一九〇八年の選擧には民主黨も亦、同樣の寄附金運動を爲して非常に成功したといふことであるが、我國政黨の採るべき黨費問題解決法は此種の方向に進むべきものではなからうか。

三、認可許可手續の改革

我政界の第二の腐敗原因は、政府の權內に在る認可、許可の行爲に牽聯して金錢を收受することにあるは前に述べた通りである。我國に於ては鐵道にしろ、電氣事業にして、水利權の許否にしろ中央政府の認可許可を要する事項は頗る多い。然るにその決裁をする手續が全く不公明である。一定の文書を具へて府縣廳に提出すると、府縣廳では之に簡單なる副申を付けて中央政府に提出する。さうすると所管大臣はその書類を受取て一兩年間は机の抽出にでもほり込んで置く。そこで當業者は堪り兼ねて或は陳情或は嘆願等に出掛けて來る。各省で面會しても宜ければ官舍で面會しても宜し、私宅で面會しても宜ければ待合で面會しても宜い。こんな不公明な取扱ひで正しき政治が行はれる筈がない。犯罪の原因は自ら玆に伏在し、政黨への入黨の勸誘は申すに及ばず終には不正の金員の據出を要求することともなる。之はどうしても一層公明なる方法に據らなければならぬ。此の點に付て最も參考とすべきは、英國に於ける Private Bills（私益法案）の處理方法である。英國に於て鐵道とか電氣事業とか運河とかの事業を起さうと思ふ者は、先づ之を議會に請願するのである。この請願に對しては關係地方の新聞に公告を爲し又は適當なる揭示方法等により利害關係人に異議申出の機會を與へる。さうした後、請願書を議會の Private Bill Office（私益法案課）に廻はす。此處で一般人の縱覽に供する。此の案は更に委員四名より成る特別委員會の審査に付するのであるが、この委員會は立法委員會であると同時に司法委員會であると言はれて居る。即ち、請願人異議申立人を呼出し各その主張につき辯論をなさしめ、嚴正な審理を爲したる後委員會の態度を決し、之を本會議に報告し、採否を決定することとなつて居る。我國の法律制度上、認可、許可を議會の權能とするには議論の餘地は多からうが、今日のやうな秘密制度でこの重大なる問題を決する事が、政界腐敗の一原因である事は爭ふことは出來ぬ。嘗て我國の預金部資金の運用について非常なる弊害があつた。そこで先年預金部資金運用委員會なるものが組織せられた。預金部資金運用委員會は大藏政務次官、大藏次官、關係各省高等官、會計檢査院部長、日本銀行總裁、學識經驗ある者等十五名以內より成立するもので、預金部資金運用につき大藏大臣の諮問を受ける機關であるといふことになつて居る。諮問機關といふ制度では未だ趣意を貫かぬが是れでも從前の、獨斷秘密の制度よりは進歩したものと云はなければならぬ。我國でも發明に對する特許については、幾分公正な組織を採用して居る。即ち特許出願に對しては適當の技術者

をして審査せしめ、一應許可を與ふるの條件ありと見れば、之を公告し、公告の日より六十日以内に一般から異議の申出を爲すことを許し、異議の申出ある時は出願者及異議者の主張を審査した上、特許の許否を決し、尙ほ拒絕された場合には抗告審判及大審院の出訴を許すのである。多くの場合特許發明の實施よりも尙ほ重大である鐵道敷設や、電氣事業の認可、許可の類を今日のやうに暗黑秘密の裡に定めて行くといふことは一般の法治主義から言つても不相當の處置であると感ぜざるを得ぬ。

四、機密費制度の改革

前に述べた如く、政黨殊に政府與黨の黨費として政府の機密費、交際費の類が流用され居りはせぬかといふ事は、汎く行はれて居る疑惑である。現に嘗て山梨半造氏は機密費自身は使はないが、機密費の利息は使つたと自白したことがある。即ち年度末に要する機密費を既に年度初めに大藏省より引出して置いて、之を自己の取引銀行に預金し、その間の利息を使つたと言ふことである。この事自身が既に不法行爲であるが、世界ではなか〳〵この位の自白では承知しない。實際機密費の元本自體を選擧に流用したといふことは殆んど何人も抱く想像である。元來機密費は、その名の示す如く機密に使用さるゝものであるから之を公表する譯には行くまい。然し乍ら縱令機密費であるといつても政府の用途以外に使用することは明に橫領行爲ではないか。之を放置して置くべきではない。機密を要するといふならば、又この檢査を機密に行ふ方法があるではないか。少くとも會計檢査院の檢査には服せしめることが當然である。會計檢査院の檢査にも提出する事の出來ないやうな不正の行動は國家としては爲すべからざるものであるから、之を回避する理由は成立しない。尙ほ制度の問題ではなが、元來我國では各省各別に餘りに多額の機密費を持過ぎて居る、この總額も之は減額せなければならぬ。

五、地方利益に據る黨勢擴張の禁止

我國では國費で以て施行すべき事業、殊に港灣の浚渫、河川の改修、道路の建設、鐵道の建設等を好餌として地方人の入黨を勸誘强制することが盛んに行はれて居る。元來政友會が今日の黨務を維持して居ることは、寺内内閣以來十數年の間連續に此方法を施用したからであると斷言しても過當ではあるまい。アメリカでは地方の利益の爲めに國庫の金を取出すことは Pork-barrel (豚肉桶) と言つて居る。國の所有である。豚肉の桶から豚肉を摑み出すといふ意味合ひである。(To get Pork out of the public pork-barrle)。此等のことは實に我國に於て重大なる害毒を流しつゝあるのである。害毒の顯著なるものは次の二點である。即ち一國の政治は國家全體の利益を考慮して決定せられなければならぬ。嘗てエドマンドバークがその選擧區たりしブリストルの市民に宣言したる如く、代議士は選擧區より選び出されるか、選

び出された代議士は國の代議士であつて、地方の代辯士ではない筈である。それにも拘らず代議士が、專ら自分の出身地方に豚肉を持て歸らうとすると國費は無意味に增加することとなつて、國家の不利益を招くことになる。現に我國の國費の膨脹は此の原因から來て居るものが甚だ多い。第二は國民の政治思想に非常なる惡影響を及ぼす。國民が自分の住所地に鐵道を敷いて貰ひたいが爲め、良心に背いて或る黨派に加入しなければならんといふことは、既に自己を欺くものであり、引いては政黨といふものの本質が之がために曖昧となつて眞に立派なる立憲政治を行ふことが不可能になつて來る。第五十二議會に關直彥君の名義を以て提出したる「政治結社加入勸誘方法の制限に關する法律案」は此問題を解決するために立案せられたものであつて其の全文は次の如くである。

第一條　鐵道の敷設道路港灣橋梁河川に關する事業並學校、官公署の設置移轉其の他公費を以て施行する事業又は政府の權限に屬する認可許可其の他特殊の利害關係を利用して政治結社に加入し又は加入せざること並政治結社より脫退すべきことを勸誘したる者は三年以下の禁錮又は二千圓以下の罰金に處す

前項の勸誘の仲介又は周旋を爲したる者亦同じ

第二條　行政官廳の處分が前條の利害關係の利用に基くと認むべき理由あるときは關係者は其の取消を行政裁判所に請求することを得

第三條　官吏にして情を知りて第一條の犯罪を構成するに至らしめたるときは五年以下の禁錮又は三千圓以下の罰金に處す

六、瀆職に對する制裁の擴張

院内に於ける發言が無責任であるといふことから生ずる重大なる危險は、その瀆職問題である。ローズベルトは嘗て紐育州の下院議員の三分の一以上が或事件に就て收賄したことを發見したと云つて居る。米國の國會はそれほどでもないが、ロード・ブラキスは嘗て米國議員の約五分は買收が出來る者である。と云つたことがある。我國に於て議員に於て議員の瀆職罪で問疑せられた標準的事件は彼の日糖事件である。然し乍ら本質は瀆職であるべきものであつて法規の解釋上纔かに免かれて居る者が幾らあるか測り知れない。元來瀆職に關しては議員に特別の規定があるのではない。一般の官吏其の他の公務員と同じく、刑法第百九十七條が適用さるゝばかりである。同條によれば「公務員その職務に關し賄賂を收受し」たときは三年以下の懲役に處せらるゝのが、職務に關しない時は常識上賄賂罪であつても刑法の制裁を受けない。議員の職務は實は甚だ狹い立法協贊と豫算審議のみである。だから法律を作るにつき金錢を受取つたならば議員と雖も瀆職罪を以て處斷せらるゝこと日糖事件の例によつても明であるが、立法協贊及豫算審議以外のこと、例へば認可許可の運動若くは黨籍變更の代價として金錢を受取つても瀆職罪を構成しない。何となれば、之は議員

の憲法上、議院法上の職務に關せないからである。曾て政界の某長老は遊廓移轉運動を引受けて數萬の金を受領した、然し遊廓の移轉といふことは、議會若くは議員の職務權限に關係がなかつたから檢事は之が起訴に躊躇した。只移轉許可の望みなきに拘らず、これありとして金錢を受領したのであるから詐欺であるとして起訴して見たが、元より此起訴こぢ付けたるを免れぬ。普通では移轉困難なればこそ、運動を要するのである。故に此起訴は破れて、某長老は無罪の判決を受けた。前年來議員が黨籍變更の條件として或る者より巨額の金錢若くは利權を獲得したといふ噂が專らであるが、司法部は初めより之に對し手を着けることさへも爲さない。此等は元より法の缺陷と稱せざるを得ぬ。第五十二議會に於て増田義一君の名義を以て提出されたる「議員の職務に關する法律案」は、議員たるものには、特許會社、補助會社の役員となることを禁じ亦黨籍變更につき金錢の受授を禁じたのであるが、その規定は列擧的で反つて洩す所がある〔と〕思はれるからむしろ更に總括的の規定を設けるやうにする方が宜からうと思ふ。即ち刑法に「職務に關し」とあるのを、議員に關しては廣く「政治上の行動に關し」といふことに改める方が宜いと考へる。

尙ほ此問題に關し參考とすべき一事がある。即ち米國の若干の州に於て採用せられて居る Immunity statutes（免責法）である。贈賄の罪を犯しても之を自白する時は免除するといふ規定である。元來賄賂は秘密の裡に受授せられるゝものであるから、贈つた者と受けた者と共に之を隱蔽するに於ては其證據を擧げることはなかなか困難である。今日各國に行はるゝ如く贈賄、收賄を同等に處罰することになれば兩者は結托して事實の眞相を得難いから、その檢擧を容易にするため米國の若干の前に於ては上記 Immunity statutes といふものを設けたのである。我刑法第百九十八條第二項には贈賄者自首した時は其刑を輕減又は免除せらるゝ事になつて居るが、此の規則は實は殆んど實用されて居らぬ。何とすれば、自首といふのは官に發覺以前に自白することを要するすので、既に官に發覺した後に於てはこの規定の適用がない。又本條は輕減又は免除といつて居るが自首した所で免除せられるものとは限らぬから、自首する者が殆んどない。既に斯樣な規定を置く以上は一刀兩斷贈賄者は自白する以上は無罪となるといふことならは檢斷は一層容易となるであらう。

七、選擧公營

以上私は黨費の公開、寄付の制限、認可許可制度改革、機密費制度の改革、地方利權による黨勢擴張の禁止の六項に亘て、政界革新の方策を開陳したが、實は之では未だ核心に觸れては居らないのである。富豪財閥の不淨なる寄付も、認可許可の亂用も、機密費の濫費も、更に其の根本に遡れば實は政治運動殊に選擧に過大の金が要るとふいことに原因して居る。此の道根を除き去らねば、以上の各方法はその效果を發揮する事は出來ぬ。從て罰すれば從て犯し、遂に犯罪と檢擧のは

しなき競爭となるに終るであらう。今日我國の代議士が一回の選擧に幾何の金錢を浪費して居るかは正確には判らぬが、平均一人に付二萬圓を降ることはあるまい。之は一個人については相當の大金ではないが代議士二百名を抱擁する政黨は少くとも三百名以上の候補を立てなければなるまい。平均二年目に廻つて來る總選擧に六百萬圓の金を集めることは容易の事ではない。乃ち玆に寄附の强要となり、認可權の亂用となり、機密費の濫費となるのである。論より證據、彼の滿鐵事件、松島遊廓事件、今回の鐵道事件が極めて明かにこの事を證明して居るではないか。そこで我々は選擧公營といふ主張を立てるに至つた。その要旨は選擧運動の方法は言論と文章の二方法に據ることは尙ほ現行法の如くする。さうして言論を用ふべき演說會場は市町村に於て之を設備し、各候補者を招いて此場所で政見を發表せしめる。次に文書は政府に於て之を印刷した全候補者の分を一括して選擧民に無料にて配達するといふにある。これ以外の方法に據る選擧運動即ち自費による運動は一切之を禁止するといふに在る。第五十六議會に於て私の同志大竹貫一君の名義を以て提案した「衆議院議員選擧法改正案」は之を重要なる骨子として居るのである。その重なる條項を摘記すれば次の如くである。

第八十八條　選擧に際し候補者の政治上の意見の發表に必要なる演說會場は市町村に於て之を設備すべし。

市町村長は各演說會の期日を市町村內に告知し同時に各候補者に通知すべし。

第八十九條　市町村長は議員候補者の履歷並政治上の意見を市町村の掲示場に掲示すべし、掲示場の數及掲示の期間は勅令を以て之を定む。

第九十條　議員候補者の政治上の意見は政府に於て之を印刷し通常郵便を以て選擧人一人に付一通を限り無料にて配布すべし意見書の字數及其の屆出並配布の時期に關しては命令を以て之を定む。

第九十一條　何人と雖第八十八條乃至第九十條の方法以外の方法に依り選擧の運動を爲すことを得ず。

無論之を實行するについてはいろ／＼の細則も必要であらう。けれども根本に於て此方法を採らなければ、他の諸方策のみでは到底効果を收めるものでないと思ふ。もと／＼今日の議會は英國に於ける歷史的の產物であつて、本來議會に列することを以て一の利益と考へた沿革があるから、今日に至るまで各國共、未だ選擧公營の主義を採用するに到つて居らぬが、然し大勢は之に向つて居るものなることを看取することが出來る。既に議員を以て地方的の代辯者ではなく國家の機關と見る以上は國費を以てその選定し事務を執行することは當然ではないか。嘗てローズベルトは、その教書中に於て政戰費用の一部は合衆國政府に依て負擔さるべきものであることを主張した。米國のオレゴン州に於ては近年、州の費用を以て各候補者の人物、才能及所屬政黨の主義政策を記述したる册子を發行して居る。我國の普選法

に於ては、各候補者は、公立學校その他の營造物を使用することを許した。又選擧中政見書は一通に限り無料にて配達することにした。即ち期せずして選擧公營の方向に向ひつゝあるものとも言へる。然し普選法は一方に於て一萬貳千圓限度の私費を投じて自腹運動を爲すことを許したから、此等の規定は殆んど選擧費輕減の爲めには役に立たないことになつた。世間或は自費運動の禁止の實行不可能なることを心配する向もあるであらうが、之は案外容易ではあるまいか。今日の様な一萬貳千圓といふやうな中途半端な規定では取締は困難であらうが、初めより絶對に自費運動を禁ずるのであつたならば、却つてその勵行は容易であらう。丁度節酒は困難であるが、禁酒ならば實行し得らるゝやうなものである。

× × × ×

私共の同志は革新黨と稱へ、既成の兩黨にも無産の諸政黨にも屬することを得ず。獨り孤獨の道を歩みつゝある所以のものは、實に我政界の革新を要望するがために外ならぬ。議會政治は革新された政黨によるに非ずんば、實は欺瞞の政治である。國民は多年普通選擧を要望した。當時の考へでは普選にさへなれば無産者の利益は議會に代表せられると信じたからである。然るに最低一萬貳千圓の金がなければ一人の候補を立てることが出來ないといふのでは、どうして眞に無産者の利益が議會に於て代表せらるゝか。現在の議會に無産者の利益を反映せしめやうといふことは、駱駝に乘て針の穴を通るほど困難なことではないか。議會制度を信ぜざれば止む。之を信じ之を是認する以上は政黨の改革從て選擧費問題の解結といふことが總ての問題の大前提問題であることを確認せぬわけにはゆかぬ。(昭和四年十月九日)

農村經濟と負擔の輕減

牧野輝智

（一）

所謂農村問題の內容は多種多樣なれども、其の大部分は經濟問題に關聯するものである。如何にして農村經濟の行詰を打開すべきか。如何にして農村人の生活苦を緩和すべきか。更に進んでは如何にして農村の生活狀態を改良し向上せしむ可きか等、是等は何れも經濟問題を內容とするもので、所謂農村問題の主要事項は是等の問題に外ならないのである。

農村經濟問題の解決には二つの方面がある。其の一つは積極的の方面に屬するもので農村の收入を增加せしむることである。他の一つは消極的の方面に屬するもので農村人の負擔を輕減することである。農村の收入を增加する手段としては農作物其他農業副產品の增收を圖ることが根本的且つ恒久的の要件であるけれども、當面的の問題としては農業生產品の增收が必ずしも農村人の懷中を豐にする原因とはならない。否却つて農業生產品の增收が農村人の經濟を惡化せしむる原因になる場合が稀ではない。之が爲に農村經濟問題としては農業生產品の價格維持の問題が最も重大なる性質を帶びる事になるのである。此の點を具體的の計數にて說明すると次のやうなことになる。大正十五年即ち昭和元年に於ける我國の米穀實收高は五千五百六十萬石で不作の年であつたが、價格から見た農村の收入は十八億三千萬圓であつた。然るに昭和二年度の米作實收は六千二百萬石といふ大豐作であつたが其の爲めに米價は崩落し、金額から見た農村の收入は却つて減少し十七億六千萬圓に過ぎなかつた。作柄から云へば六百五十萬石の增收でありながら金錢に評價された農村の實收入は反對に七千萬圓近くも減收と云ふことになつてゐる。是では農村人が却つて豐作を呪ふのも無理もないことである。昭和三年も六千萬石以上の豐作であつた。今年も先づ豐作らしく農林省發表の第一回米作豫想は六千五十萬石の收穫を報じてゐる。三年に亘る豐作の爲め米價は著しく低落し、本年九月中の定期市場先物最低値は二十五圓臺に慘落してゐる。昨今の相場は旱冷による增收不安から廿八、九圓程度まで恢復してゐるが、假りに

實收穫を六千萬石と見て、其市價が廿八圓であるとすれば、本年米作の總收入は十六億八千萬圓に過ぎないことになり、三年前五千五百六十萬石の收穫に過ぎなかつた年よりか一億五千萬圓もの收入減となるのである。斯やうな事情であるから農家が收穫よりか市價を氣にするのは當然のことで、米價調節の必要なる所以も自から會得される次第である。

（二）

農村問題として農産物市價の問題が最も重要であることは我國ばかりではない。各國とも殆ど同樣である。試みに米國の事情を陳べて見る。米國では今春フーヴアー氏がクーリッヂ氏に代つて大統領に就任したのであるが、フーヴアー大統領の最初の政策（大統領教書にて發表したる）は何であつたかといふと、それは農産物市價維持の問題と此目的を遂する爲めの關税改正問題であつた。而してフーヴアー大統領は就任早々其の具體案を議會に提出し、農産物市價維持の爲めに聯邦農務局を新設し、十億圓（五億弗）の救濟資金を設置することを決定した。是は米國でも農産物市價の問題が、經濟問題としてのみならず政治問題としても社會問題としても、如何に重大視されてゐるかを如實に語るものであると思ふ。

我國の農業生産品として米穀に次ぎて重要性を有するものは生糸であるが、是も農村經濟現實の問題としては、量の問題よりか價の問題が重大である。しかしながら生糸の市價は主として米國の景氣に支配されるものである。此の點に於て米穀とは事情を異にしてゐるが、何れにしても農業生産品の市價を適當の程度に維持することは、農村經濟の堅實なる發展のため缺く可からざる要件である。尤も農業生産品は多く。國民生活の必需品であるから、其市價が適當の程度を超えて昻騰することは甚だ忌む可きことで、斯かる場合に是を抑制することは之亦必要であるけれども、世上には農業生産品は生活必需品であるから安いに越したことはないといふ見地からして、米穀其他食糧品の調節は昻騰の抑制をのみ趣旨とす可きもので其の低廉を阻止する如きは無用有害であると主張するものも必ずしも稀ではない。成る程消費者として食糧品の市價は安いに越したことはないけれども、農業も亦營利事業である。生産費をキルやうな市價が農業を存續せしめ發展せしむる所以でないことは極めて明白である。此の理由に基いて昨今商工會議所や取引所などによつて主張せらるゝ米穀法廢止の提議には輕に贊同を表しかねる次第である。勿論米穀法の效果に就ては甚だ物足りない感じを免れないのであるが、それにしても米穀法を米穀需給調節上有害無益と斷ずるは中正を缺いた意見である。米穀法の廢止は米穀の調節上更に有効適切なる制度を樹立した場合になす可きである。何等對案なく兎に角米穀法を廢止せよといふ主張は、消費者の立場からのみ見て生産者の立場を考へない議論か、さもなければ商工業のみを偏重して農業の重要性を閑却した議論であることを免れないの

である。

米穀市價調節の問題は今現に農林省を中心として頻に議をねられてゐる。何れにしても農村經濟の恭調を破壞しないやう農產物市價の激騰激落を適當に抑制することは極めて重大なる問題である。農村經濟の問題としては斯の如くにして農村の收入が豐凶作の爲め激變しないやうに努むることが肝要であるが、更に消極的の問題として今日の農村負擔を出來るだけ輕減することが必要である。

(三)

農村經濟改善の手段として、如何に農村負擔を輕減す可きかの問題に就て、私が第一に擧げたい項目は、農業生產費を出來得る限り輕減することである。而して此の目的を達するに就て特に必要なるは肥料代の負擔を輕減することである。是は肥料の使用を減少せよといふのではない。肥料の使用は今日でも農業費用の重要部分を占めてゐるが、此の傾向は今後も益々增進さる可きものである。田中內閣の當時在野黨の議員が農村振興の第一は何かといふ意味の質問をなしたに對して、首相が農村の振興は肥料の公平なる分配をなすことであるといふ答辯をなしたとて嘲笑の題目となつたことがある。しかし私をしていはしむれば何も左程可笑しいことではないと思ふ。今日の農村經濟問題中肥料問題は可なり大なる重要性を帶びてゐる。嘲笑者こそ農村でどの位の多額の肥料代を拂つてゐるかといふおぼろげの數字さへ知らないからではないかと疑はざるを得ないのである。私は茲に特に急死した田中首相の爲に辯ずるのではないが、農業經濟に於ける最も重要なる支出は肥料代である。其の肥料代負擔を緩和することは確に農村經濟を改善する一つの方策である。試みに農林省調査の統計を引用すると農家の一年の肥料消費價格は六億八千三百萬圓といふ巨額に達してゐる。

	千圓
自給肥料	三四二、八一〇
販賣肥料	三四〇 三四〇
合計	六八三、一五〇

自給肥料といふのは堆肥綠肥等の類であるが、農家の負擔に最も關係多いのは販賣肥料卽ち農家にて購入する肥料の代金である。この內には內地製品と外國からの輸入品とあるが、昨年の貿易表を見ると硫酸アムモニヤ、油糟、燐礦石、チリ硝石の四種だけでも其の額は一億四千萬圓を超えてゐる。左の如し。

	千圓
硫酸アムモニヤ	三六、三〇五
燐鑛石	一一、七五三
油糟	八六、六八四
チリ硝石	五、八一七
合計	一四〇、五五九

今此の輸入肥料の問題を金解禁と結付けて考へて見ると、金解禁のため爲替が平價附近に恢復すれば、金輸出禁止中の爲替相場(例へば

昨年中の平均爲替相場）に比し約一割昂騰することになる。さうなると輸入肥料の市價は當然一割低落することになる。一億四千萬圓の一割即ち農家は輸入肥料の代價だけで一千四百萬圓の負擔輕減といふことになるのである。此の場合に爲替恢復の影響は輸入肥料のみに止るものではない。内地製造の肥料（金肥）の市價も亦是に順應して低落す可きものである。それでないと肥料の輸入が增加するばかりで内地製の肥料は賣れないことになるからである。此の點に於て金解禁の肥料に及ぼす影響は米穀や生糸に對する場合とは事情を異にしてゐる。斯くて内地製販賣肥料の代價も亦輸入肥料と同樣一割低落するとなれば、農家の肥料負擔は三千四百萬圓程輕減されることになるのである。

以上私は主として爲替關係から肥料負擔輕減の問題を陳べたのであるが、一體今日の肥料販賣組織には改良を要する幾多缺陷や弊害が存してゐる。農家の資力乏しいため、或は又購入上の智識が缺けてゐるため不相當に高い肥料を買はされてゐる嫌がある。此の點に就て農家の立場に同情する者は百姓は肥料屋の食ひ物になつてゐると憤慨する者もある程である。若し肥料の購入方法に就て古來の弊竇を打破することが出來たならば、農家の負擔は相當輕減されることになるであらう。肥料は今日でも一年に六億八千萬圓も使用してゐるが、是が絶頂ではない。今後耕地の擴張、耕作法の改良、農業知識の普及等に伴ひ、肥料使用就中、金肥の使用額は益々增加する一方であるから購買組織の改善といふことは更に一層其の必要を増す譯である。尙ほ根本の問題としては化學肥料の製造技術の進步によりては生産費輕減し、其の市價を今日よりも低廉ならしむることである。斯くて肥料問題を農業家のために有利に解決したならば、それが農業負擔の輕減となり農村經濟改善として現はるゝは當然の結果である。

（四）

農村負擔輕減の問題として第二に考ふ可きは租稅其他公課輕減の問題である。地租は本稅こそ千七百萬圓であるが、地方の附加稅は一億一千三百萬圓である。即ち土地に對する本租と附加稅の合計だけでも一億八千萬圓に達してゐるのである。此の他租稅其の他公課が各個に如何に賦課されてゐるかを示すため、地租卅四、五圓を納付する自作農の公課が何に程の金額であるかを左に揭ぐ（農林省農務局編農業經濟調査に據る）

國稅	地租	三三・九七〇円
	其他	二・四二一
	小計	三六・三九一
	租稅總額に對する%	二〇・九
府縣稅	地租割	四〇・九五〇
	戶數割	一六・六七七
	其他	六・八九四
	小計	六四・五二一
	租稅總額に對する%	三七・〇
	地租割	二一・五二〇
	戶數割	四六・二三四

市町村税	其他	五・六五七
	小計	七三・四一一
租税總額に對する%		四二・一
租税總額		一七四・三二三
其他の公課	農會費	五・二九七
	其他	二四・〇二〇
	小計	二九・三一七
諸負擔總計		二〇三・六四〇

備考　(一)右は全國に亘り自作農六十九戸に就て調査したものの平均である、(二)國税は直接國税のみである、(三)公課中其他とあるは養蠶組合耕作組合衞生組合水利組合等の如き組合費、區費部落費山林會費教育會費等の類を云ふ。

右の計數に依ると四税中の地租卅三圓九十七錢を納付する自作農の公課總額は二百三圓六十四錢といふ金高になつてゐる。農林省の該調査にては此の程度の公課を收納する自作農の所得は千七百四十四圓家族は七人になつてゐるから該公課は所得の一割一分七厘に達してゐる計算である。而かも是は直接の公課のみである。酒、煙草、織物砂糖等の如き間接税の性質を有するものゝ負擔は別に存してゐるのである。しかして我國の税制では是等の課税こそ國税の重要部分を占めてゐるのである。昭和四年度の歳入豫算にて税收入の總額(煙草專賣益金も收入の性質に考へて此の中に含ましむ)は十億三千三百萬圓であるが、其の内間接税に屬するもの、即ち消費税・關税・專賣益金の合計は六億七千百萬圓であるから、直接税と間接税の比較は三五%對六五%である。間接税の過大である税制が小所得者に不利であることは改めて云ふ事でもない。從つて前掲公課以外に間接税の負擔が今日の農村に採りて多大の苦痛であるは當然である。斯樣な次第であるから今日農村の負擔輕減を論議する場合には、國税地方税の輕減といふことは注目すべき重大性を帶びることになる。此の點から見ても現內閣の豫算緊縮地方財政整理は、國税地方税を通じて國民の負擔輕減となりて現るゝに於て始めて其の意義を全うし得る次第である。

(五)

農村負擔の輕減策として第三に考へらるゝ問題は農村金融の問題である。今は農村の負債が何程であるかは的確に推定し難いが不動産を抵當とせる農村の借金のみにても其の額は廿七、八億圓に達してゐる。此の外個人間の信用貸借、信用組合其他からの借入金等を通ずれば恐らく四十二、三億圓にも達するであらう。而して其の金利は驚く可く高率で不動産を擔保とせるものでも其一割二分(個人間の貸借)內外である。無擔保の貸借が非常に高利であることは特に云ふまでもない。此の負債の爲に自作農は變じて小作農となりつゝあるのである。元來農業金融は長期でなければならないのであるが、事實は之に反し不動産擔保のものでさへ其の期限は一ヶ年以內のものが八割五分を占むるといふ狀態である。斯の如くに農村金融の條件が不利である

のは、第一に農村金融の資金が缺乏してゐるからである。若し農村の金融資金が充實したならば、金融の道も困難でなくなり、金利も低下する筈である。農村の金利を假りに二分低落せしめても農村の金利負擔は一億圓近く輕減せらるゝ道理である。從つて農村金融を改善し、其の金利を低下せしむることは、農村の負擔輕減に相當の効果を擧げ得ることになるのである。

然らば如何にして農村の金融資金を充實し、其の金利を低下せしむ可きか。私は是に就て最も大切なことは農村自身の覺醒であることを信ずるのである。農村金融の改善には農村人自身の資金を農村から流出せしめず、農村の金融に供することが最も肝腎である。農村の生產は米穀と繭だけでも一ヶ年廿五億圓内外の生產となるのである。是等の收入が農村第一主義にて主として農村の爲めに使用されるならば、農村の資金は今程缺乏しない譯であるけれども、米穀賣却金や繭賣却金の大部分は農村から都市に流れ去るのである。それも租税としての納入金が都市の金庫に集中さるゝ如きは致方ないが農村の金融機關が不備である爲め、或は郵便貯金として大藏省の預金部に集中され、或は大銀行の支店を經由して都市に吸收されるのである。甚しきは農村信用組合の資金までが其の運用を誤り、普通銀行の預金となり居るものが巨額であるため、農業者の金融資金となる可きものまでが、都市の商工業者の資金として利用されることになるのである。農村人が自覺して農村にて生產した餘剩金は努めて農村自身の資金として留保し利用するやうにしたならば今よりは資金を豐富にすることが出來るであらう。政府としても郵便貯金や簡易保險金等の如く農村から吸收したものは、其の運用につき之を農村の資金として還流することに就て今日よりも更に力を用ひなければならない。生命保險會社の如きも今後大に農村に其の營業の手を延ばさんと欲するならば、米國に於ける生命保險業と農業金融との關係などを參考として、農業土地に對して資金を投下し、農村金融の改善に資することを考ふるの必要があるやうに思ふ。

農村公課（租税其他）の輕減や農業金利の低減は農業生產物の生產費を低下せしむるためにも必要である。私は本文の劈頭に於て農業生產品市價の暴落は農村經濟を破壞するものであるといつたけれども、さればとて農產物の市價を不當に昂騰せしむることは食料品の消費者に不利益を與へて農村のみ利せんとするものである。從つて農產物市價なるものは、生產費を基調とした適當なる價格のものであらねばならぬ。而して生產費の低減による農產物市價の低落は農村の利益を阻害することなくして食糧消費者の利益を增加し得るものである。勿論農業生產費の低減は消費者の利益を本位としてのみ考ふ可きことではないが、農產物市價の問題が生產者と消費者との利害を一致せしむる事に甚だ困難であるに拘らず、生產費低減の問題に至つては其の利益は兩者に共通する者であるから農村經濟問題として、將た又國民經濟全體の問題として極めて重大なる意義を有することになる譯である。

國家豫算の統制者は誰か

——政府と議會との立場——

蠟山政道

一

先年、政友會內閣の當時、自作農創定策に關して、該政策の立案當局者たる山本農相と三土藏相との間に意見の相違が生じ、閣議に於いて大に爭ひが行はれ、その結果として該政策は具體化するに至らず、從つて內閣の政策とならずに了つたことがある。これは、同じ內閣の下に行はれた出來事であつて、政府內部の意見が纏らなかつたことに過ぎないが、問題の性質としては、或る政策とそれを實現するに要する費用との振合ひに關して、費用を消費する官廳とそれを支出する官廳との間に意見の不一致を來した一例と見ることが出來る。かうした爭ひが度々生ずるやうでは、內閣の重要政策は大概多額の費用を要するものであるから、容易に閣僚の意見は纏らずに終るであらうが、その際何かその立場を異にする各省と大藏省との間に互讓妥協する標準が存在しないものであらうか、と云ふ疑問が生ずるのである。言葉を換へて云ふと、或る政策を實現することゝ、それに要する費用を工面することゝの間に、お互に守らるべき準則が在り得ないものであらうか、と云ふ疑問なのである。

政策の立案と遂行とを司る官省が、一國全體の財政狀態を顧慮せずに、その政策丈けのことを眼中に於いて立案するとなると、必ずや大藏省の立場と衝突するに定まつてゐる。その場合大藏省の地位が弱いと國家を破産に導くやうな結果を來すであらう。又大藏省がただ既存の財政狀態のみを顧慮して、或る政策の內容そのものまでも左右するやうな強い地位にあると大藏省の地位は殆んどデイクテーターの夫れに近いものになる。この兩者の場合は、何れも極端な例を想像したものではあるが、事實と雖も決してこれに遠くないやうな狀態が屢々目撃されるのである。この際、政策の立案者は何處までそれに要する費

用支出の經濟的價値を顧慮しなければならぬものであらうか。又費用の工面者は何處まで財政的見地からして、立案された政策そのもの丶内容に立入ることを差控ふべきものであらうか。この二つの相反する要求を如何に調和し、如何に協定するかは、正に閣議の任務であらうと思ふが、その際何らかの準則が經驗的に或は理論的に存在するならば、そこに國家豫算の統制者としての内閣及び大藏省の地位がハッキりと確立さる丶のである。

この國家豫算の統制と云ふ問題は、最近に於いて又、一箇の時事問題として、別の方面に現れた。それは、政友會内閣が突然に瓦解した爲めに、議會に於ける變化を伴ふことなくして政府が民政黨内閣によつて代られたことから發生した。即ち民政黨内閣は、前内閣の提出し、現在の議會の議定し、更に前内閣の公布した豫算に對して重要なる變更を加へ、「實行豫算」として、前例もあることであるが、事實上自己の政策に叶ふ程度のものに、議定豫算の範圍内に於いて變更してしまつた。その政策とは政費の緊縮節約を標榜し、兼ねて我國當面の課題たる金解禁に備へんとするものに外ならない。この政策の是非はここに取扱はんとする問題でない。

が、この「實行豫算」に關聯して發生した問題は、我々に對しては、先きに陳べた如き政府内部に於ける國家豫算の統制てふ問題を、政府對議會の關係に於いて再現してゐるものとして映ずる。卽ち現れた場面が異る丈けで、問題の性質は同じである。ただ先きの場合に於いては、統制を主張するものは大藏省であり、論議の行はれる所は、内閣であつたものが、ここでは大藏省に當るものが政府であり、各省の地位にあるものが政黨であり、論議の行はれる所は議會か、又はそれの解散された場合は國内であると云ふ重大な相違がある。そうして、その際、眞にその豫算の統制を行ふ者は政府か將議會かと云ふことが、一箇の疑問として我々國民の前に投ぜられたのである。

二

然し、ここに差し當り一言して置かねばならぬことは、この「實行豫算」に關して世上行はれた議論は必ずしも右に提示した形式に於いて行はれたのではないことである。それは寧ろ今回の「實行豫算」なるものが憲法違反ではないか、少くとも議會の豫算議定權を無視した政治的責任の問題ではないか、と云ふに在つた。「實行豫算」なる名稱は、もと豫算の不成立の際、前年度豫算を標準として編成せられる豫算に對するものであつて、今回の如き豫算を名づくるものとして適當であるか否かに就ては多少問題があらう。然し乍ら、今回の豫算は、公布豫算の範圍に於いて、卽ち政府が議會から與へられた許容の範圍内に於いて、自己の政策―その政策の當否は暫らく別問題であるとして――に叶ふやうに變改を加へて出來上つたものであつて、濱口首相の所謂「政府内部の申合せ」である。この「申合せ」が、法律上如何なる效果を惹起するものなりやに就ては、學者の議論は大體に於い

て、之を消極的に解してゐると見て差支ない。美濃部博士の說く所に從へば、『豫算(の議定)は支出の承認であつて支出の命令ではなく、豫算定額を節約することは、政府の完全な自由である』(帝國大學新聞、九月十六日所載「實行豫算編成と議會の權限」)。又、政治的責任の有無の問題としても、政策を異にする內閣の更迭した以上は、前內閣の提出し、その與黨の力に依つて通過した豫算をその儘遂行し得ないことは明白で、假令これに大規模の變改が加へられたとしても、それは止むを得ない處置とされてゐる。これまでの所では問題はない。

ただ、今回の實行豫算の編成に就いて、新聞紙の論調や學者の議論に於いて、遺憾なり又は不穩當なりとせられてゐる點は、この「實行豫算」の編成が、議會政治立憲政治の本義から見て、臨時議會の召集を行はず、政府の專權を以て行れた所にある。所が、この點に就ても、現在の政府が議會に於いて少數黨であり、且つ臨時議會の招集を行ふことに就ては政治上の情勢を顧慮せねばならず、又臨時議會の招集は議會の解散を伴ふ趨勢にある等種々なる周圍の事情からして、現政府が之を通常議會に讓つたことをも亦止むを得ざるものと是認する議論もある。かくて、結局この「實行豫算」の論爭からして、何が積極的な結論として得られたかを反省して見ると、そこに何物も見出されなかつたと云ふ觀があるのである。

議會政治又は立憲政治の本義から見て、今回の「實行豫算」の編成とその執行とが、臨時議會を招集せずして獨り政府の專權を以てなされたことが、何故に權利の濫用若しくは政治上不穩當なりとせられるのであるか。この點は、序ながら、今少しく吟味をして置く必要がある。再び前陳の美濃部博士の議論を窺ふに、曰く『豫算は、その法律上の性質においては、唯經費の支出の承認であるけれども、政治上からいへば、明かに事業計畫の性質を帶びて居る。政府がある事業の遂行を必要なりと認めて、その經費の承認を議會に要求し、議會が豫算によつてこれを承認したとすれば、假令法律上からいつて議會はその事業の遂行を政府に要求したものでなく、唯その經費を承認したに過ぎないとしても、經費を承認したことは、實質においては事業を承認したことであり、從つてここに事業の計畫が豫定せられたものとなり、政府は政治上の德義として、その承認を得た事業を遂行すべき責任あるものといはねばならぬ』と(前陳論文、但し圏點は筆者の附したもの)。博士は更にこれを別の言ひ方に於いて說いて曰く『法律上からいへば議會が豫算に協算するのは、決して事業に協贊するのではなく、唯經費を承認するだけであるから、その事業を中止したとしても、議會の議決に反するのではなく、改めてその議決を求むべきものでもない。唯政治的道德の問題としては、議會が經費を承認するのは、その事業を必要とするからこそこれを承認するのであり、隨つて經費の承認は暗默には事業の必要を認むることの意思表示を包含するものと見ることを得べく、從つてその事業を中止することは、議會の暗默の意思には反するものとなることは免れない』と(同上、圏點は同じく筆

者の附したもの)。

美濃部博士の所論には、我々の思索を要求する甚だ暗示に富める箇所がある。若し、その箇所を仔細に吟味して見るならば、或は筆者が當面の問題として本文に於いて論及せんとする國家豫算の統制問題に對して、又それに關する政府對議會の立場に對して、一道の光明を點じ、そこから現代日本の有する議會政治、及び豫算制度の缺陷に就て建設的な立法上の改革が示唆されるのではないかと思ふ。即ち議會の經費の承認が實質上事業を承認したことであり、從つてそれは暗默には事業の必要を認むることの意思表示を包含したものである、とするならば、その承認や意思表示が何等法律上の効果を伴ふものでなく、之を無視しても政治道德上明確なる責任の追求に由なき現狀は、確かに制度の不備と言はなければならない。若し又、それが不備ではないと云ふならば、その法律上の効果を伴うてはならぬ、又明確なる政治上の責任を生ぜしむる必要なし、と云ふ他の事情からする積極的の理由を示さなくてはならぬであらう。何れにしても、こは單に臨時議會の招集と云ふ事によつて解決される單なる政治問題ではないと考へる。況してや、臨時議會の招集の有無は、他に斟酌標擬すべき政情の存在によつてその是非が考慮されると云ふ現狀に於いてをや。問題はもつと制度上根本的であつて、臨時議會に限らず、總て如何なる形式なるを問はず、議會そのものゝ意思が、豫算制度に對してより明白に法律上も政治上も反映し、その意思に反する場合には一定の法律上及び政治上の効果を伴ひ、それ以外は効果はないと云ふ風に明白にされる仕組みが要求されねばならぬものと思ふ。即ち一定の限界に於いて事理の明白なるやう期待される制度の實現が急務なのであつて、その限界の廣狹何れなるかも決し兼ねるやうな曖昧な論爭が發生する事態は好ましくないのではあるまいか。

三

從來、議會の豫算に對する立場は、歳入豫算に重きを置いた爲めに、歳出豫算に對する關係は消極的なるを免れなかつた。歳入豫算は直接國民の負擔に影響する所大なるを以て國民の代表が之に重を置くは當然であるが、歳入の主たる源泉である所の租税に就ては別に法律に依る定めがあるから、歳入豫算に對するものとしては税外收入のみであつて國民代表の協贊の役割は比較的小さいと見なければならぬ。寧ろ歳出豫算に就てこそ、豫算協贊權の重大なる內容が存在するのである。然るに、何れの國に於ても、議會制度の初期に於ては、この方面の法律又は慣行に不備が多く、議會は多く歳出額の支出承認を與ふる權能又は慣行しか有たぬのが常態である。

この支出承認のみの權能と雖も、政府が超然的官僚內閣である場合には極めて政治上有効に活用されたのである。即ち議會の多數黨は多く政府反對黨であるが故に、出來る丈けその支出承認の額を切り下げることに努め、政府の事業を抑止し、節約の効果を擧げることが出

來た譯である。即ち議會の機能は單に支出額の承認に止まつても、その承認が可及的緊縮的に行はれたが故に、豫算の統制として有効に活用され得たのである。然し乍ら、かやうな政府對議會の關係は本來好ましからざる態樣に置かれたものであるから、その統制は合理的根據を缺き、往々にして抑止的禁止的な結果となり、政府の政策及び事務は停頓澁滯せざるを得ない。

之に代つて發達した政黨内閣の時代に入ると、議會の多數黨は通常政府の與黨であるが故に、政府と議會とは歲出豫算の内容に對して大體同一の見解に立てるものである。往年政府の政策が放漫に流れざるやう不斷の監視を行ひ、可及的その支出額の小なるやう緊縮節約を要望した議會は、今や一變して政府の費用支出の原動力を成すに至つたのである。議會の多數を占むる政府黨は、自黨の利益となるやうな政策とそれに伴ふ支出を要求して止まない。寧ろ政府の方が、一國全體の財政能力を見渡し、それを責任を以て處理しなければならぬ地位に在るから、自己の與黨の要求と雖も輕々しく受け容れないと云ふ立場に立つて、議會を牽制しなければならぬと云ふ珍現象を呈してゐるのである。かやうな事態に在つて議會が事實上その多數黨によつて決定する支出最高額の承認と云ふことは、明白に政府の事業計畫に對する承認―寧ろ裏書きと云ふべきであらう―であると共に、豫算の統制手段としては全く無意義なものと化してゐるのである。故に、今回のやうに、議會の形勢に何等の變化もなく、ただ政府が突然他の方面の事情から更迭すれば、反對黨たる小數黨の内閣が朝に立つことになり、それの編成した實行豫算が、議會の多數黨の反對と憤慨とを買ふのは明白な事理である。なぜならそれは議會の與へた意思表示を無視し、その利益を企つて編成された豫算を編成し更へすものであるからである。

そこで、ここに重大な問題が生ずるのである。一方に於いて議會の承認が明に政府の事業計畫への裏書きであり、その意思表示が自己の利益の爲めに企る事業計畫への賛成であるとするならば、他方に於いて政府の更迭によつてその事業計畫たる政策の變化が又當然であり、それに伴ふ實行豫算の編成が如何に大規模に行はれようとも法律上適法でなく、政治上容認されるとするならば、政府と議會との兩者の意思は如何にして兩立するものであらうか。臨時議會の招集によつて、議會そのものゝ變化を齎らす事が手取り早い一方法に違ひないが、それを强制する制度を設けない限り、或は又政府をして常に議會の解散を即時行ふことを有利なりと考へしむる政情の存在を前提としない限り、この矛盾した意思に對する調和の道は制度上は考へられないではないか。

ここに筆者の敢て借問せんと欲する所に、この矛盾を或る程度まで打開し得る制度の立法的改革が行はれ得ないか否かの問題である。それは、既に述べたる如く、政黨内閣の時代になつても依然として官僚内閣の時代の如く、議會をして國家豫算の統制者として何等效果なき

權能——それは寧ろ豫算彈駁の權能である——のみを賦與し、眞に國家豫算の實質的合理的統制を行ひ得る餘地を少しも殘して居らない制度に對する批判の必要である。換言すれば、政府の政策又は事業計畫そのものに對して金錢上の支出を承認するに對して、議會の多數黨のみならず、少數黨の意思をも反映せしむる制度を設けこの制度を通うして政府の事業計畫の實質に或る程度の批評とそれに基く變更を與へしむるならば、政府の提出豫算の内容には議會の意思が政府の政策と衝突しない範圍に於いて加はることゝなる。さうすれば、議會の豫算議定權の性質は、飽くまで單なる支出承認に止まり、それ以上を出ないとするも、政府と議會との間には今日よりは今少しく密接な協力が存在することになり、政府の變更があつても、重大な政策上の變化を伴はない限り、議會の意思は政府によつて尊重せらるゝであらう。かやうな仕組みは、既に業に晩近各國に於いて實現又は考慮されてゐる所であつて、我國に於いても今回のやうな問題の發生した機會に於いて考慮すべき一問題ではあるまいか。

四

惟ふに、國家豫算の實質上の決定は、政府に依つて爲されてゐる場合と、議院殊に下院に依つて爲されてゐる場合と、この兩者の協力の下に爲されてゐる場合等三つがあり得る。英國の例は第一の場合に屬し、第二の例は曾つて米國に於いて採用せられた所である。同じデモクラシーの國でも、三權分立の制度を採らない議院政治の國にとつては、第一の例に依るのが豫算制度の性質上好ましい。從つて我國が英國の場合の如く、政府が豫算の實質上の決定者であることは我々の賛同を惜まぬ所である。ただ、この二箇の場合の何れに於いても缺陷は免れない所であつて、豫算の統制てふ見地からすれば、どうしても政府と議會とは何等かの仕組みに於いて協力しなければならぬのである。殊に政黨政治の時代に至つてこの必要は益々感ぜられるに至たのである。

現に英國も、歐洲戰前に於いて、豫算の精査に關し、改善すべき所あるを知り、一委員會を設けてその調査をしたことがあつた。戰時の經驗は一層その改善の必要を痛切ならしめ、その結果として一九一八年ハーバート・サムユエルを委員長とする「國家歲出に關する特別委員會」が設けられた。該委員會の報告の一節に次の如く書れてある。曰く『豫算の見積書を議會に提出することは、勿論、有用なことである。それに依つて豫算見積書の包含する金額を公開せしむることになり、その支出に對する責任を確定せしむることになる。それによつて各大臣及び各省の上に間接乍ら影響が及ぶ。なぜならその中の項目を撰び出して批議する可能性が存在し得るからである。議定豫算委員會(The Committee of Supply)——英國の豫算委員會は二つに分れ、一つはこの議定豫算委員會であつて、他は財源豫算委員會(The Committee of Ways and Means)である。前者は歲出豫算の支出に承認を與ふる

委員會で、後者はその支出に對する財源の充當を決定する委員會である。この二個の委員會の決定あつて豫算は法案として通過するものである。筆者註――に於ける討議は政策及び行政の討議として缺くべからざるものではある。しかし歲出豫算案の直接有効な統制と云ふことに關する限り、見積書が提出されなかつたとしても又議定豫算委員會が閉會しなかつたとしても別段の變りはない位だと言つても決して過言でない。實の所見積書の大部分は形式的に通過され、年々歲々各會期の終りまで碌々討議もされずに閉ぢられてゐる有様である。各見積書は閉ぢられてゐやうが或はそうで無からうが、提出された時と殆んど同じ形體のまゝで議會の過程を通り脫けて來る仕末である。しかも何れの年でも又どんな項目でも、それによつて提出された豫算案が檢討され修正される機會が有効に與へられないと云ふ辯解は成立たない』と。この委員會の提案の結果として、下院に「豫算見積に關する常設委員會」が設けられることになり、政府の政策從つて信認問題に觸れない限度に於いて歲出の款項に對して減額又は削除を要求し得ることゝなつたのである。この委員會は常設的なものである丈け、比較的黨派的見地を超越した專門的智識を有する議員が委員となつてゐる。その權能は政府の政策に觸れるやうな修正が出來ないから極めて限定されたものであることは明かだが、兎に角議會の意思が政策を離れた立場に於いて政府と協力し得る仕組みであることは注目に値する。殊に議定豫算委員會の討議は政策を中心として行はれ勝ちで、政府反對黨の討論は結局のところ政府を信認するか非かと云ふ政策的動機によつて決定されるから、議會全體としては政府と協力の餘地は存しない。政治的には、これは議會の職能上當然の事であるが、歲出豫算の統制の上から見て財務的技術的には反つて影響がないと云ふことになる。

勿論これは英國のやうな二大政黨對立の國で、政府は一箇の多數黨によつて通常組織されてゐる國に適切な制度であることは云ふまでもない。同じ議會政治の國、卽ち政府は下院の多數の信認を受けてゐなければ存續し得ない國でも、小黨分立從つて政府は勢ひ聯合內閣たることを常態とする國にとつては事情は聊か異るであらう。かやうな國に於いては、議會の豫算議定權を今一歩强めて、政府の同意なくしても一定の條件の下に於いて豫算を增額したり新項目を挿入したりする權能が與へられても差支ないであらう。その方が反つて議會政治の目的に叶ふ所以であるかも知れぬ。然し、その場合に於ても、如何にして歲出の節約を企圖し得るかは考慮に値する問題である。獨逸は憲法によつて、正にかやうな議會の權限の大きい類例に屬する國となつたのであるが、最近に於いて議會の豫算議定權を制限せんとする運動が生じて、旺んに論議されてゐるのを見ても、獨逸の制度は安定を得て居らぬ證左がある。要は、政情の如何によつて議會對政府の關係の異ることを考慮に入れつゝ、議會は如何なる權能と制度とによつて豫算の統制を行ふべきであるかを硏究せねばならぬのである。現代日本の議會政治の步みは英國式か獨逸式か、必ずしも斷定を許さざるも

のがあるが、大體に於いて小黨分立に依る聯合制の內閣が寧ろ稀れである事實から考慮して英國式に近いものを判定し得るならば、その改革の指針は英國の夫れを學ぶべきではないかと考へる。

　次に最近に於ける米國の豫算統制制度は、憲法問題としてでなく行政技術の上から我々の參考に値する。米國はもと極端なる三權分立の國として、豫算の決定は實質的に下院の行ふ所であつた。大統領がこれに對して拒否權を有してゐたと云ふ、議會政治の國々とは反對の有樣であつた。然るに歐洲戰爭以前より起つてゐた豫算局設置の運動は遂に戰後になつて具體化するに至り、執政機關たる大統領の下に各省の豫算は統一せられることになり、下院の豫算委員會と相俟つて合衆國の豫算は決定されることゝなつたのである。この制度の下に於ける下院の豫算委員會の職務權限を一考して見ることは甚だ興味がある。米國は三權分立に依る憲法を有する國であつて、政策の立案は議會の有する所であり、その執行のみが大統領の權能とされてゐるが故に政策に伴ふ支出の決定も亦議會の權限に屬する。豫算局の設置後執政府が、豫算案の統一を司るに至つた後に於いても、その豫算に對して議會は法理上如何なる修正變更をも加へ得るのである。從つて我々の問題として考察したいのは、實際どの程度まで議會は政府の立案せる豫算を變更してゐるかと云ふことである。この點に就ては、豫算局の提出にかゝる見積案を精査して、これに承認を與ふる爲めに法案を作成する豫算委員會(Committee of Appropriation)の活動が最も重要な地位を占めてゐる。該委員會の方針は、大體に於いて、政府の豫算案を以て政府所要の支出額の最高を示すものと見做し、その增加を試みず、必要ならば、削減のみを行ふと云ふに在る。しかも、過去數年の事實は、多少の削減は行はれてゐるが、大體に於いて豫算局の作成案が示す總額は、該委員會の採用する所となり、更に議會の法律となつてゐると云ふことを示してゐる。然し、總額の變更は少いが、款項の變更修正は相當多いことを見逃してはならない。兎に角米國は豫算制度に關する限り、豫算局の設置以來は、政府と議會との間に比較的調和のとれた協力が行はれてゐると見て差支ない。（ウイロビー『國家豫算制度』一八六—七頁）

　要するに、各國の政情は夫々に異るが故に、どの制度が最も善いかと云ふことは、その政情に適したものと云ふの外はない。が、しかし政府と議會との間に豫算の統制と云ふことに對して意思の上に又制度を通じて協力と共同とが存しない場合には、必らずその國の財政組織はよく行はれないと云ふこと丈けは云ひ得ると思ふ。なぜなら、豫算が放漫になり、國家の財政を危胎に陷らしむるやうな事態を惹起する場合は、必らず政府が放漫政策に傾いてゐるのに對して、その與黨が一層油を注ぐやうな場合であつて、議會は全體としてそれを阻止するを得ないで、結局總選擧によつて國民の判斷に俟つの外はなくなるのである。政府と議會との何れか一つのみが、放漫に流れても他に之を阻止する力があれば、問題はないが、我國のやうな政黨內閣の場合に

於いてはその可能性は甚だ乏しいと見なければならぬ。それに對して、議會の側に於いて與黨丈けでなく議會全體の意思が働く仕組みが考案されるならば、この點への多少の安全瓣となるであらう。

五

議會の地位が豫算案に關する限り消極的のものに止まらなければならぬ我國のやうな場合には、假令右に述べたやうな英國式の改善が行はれたとしても所詮それは極めて限定的な範圍の改革に止まらなければならぬ。それを根本的に改むるには政黨内閣制を廢止するか、米國式の三權分立制を採用するかの外はない。何れにしてもデモクラシーの原理を棄てるか、又は議院政治に依らざるデモクラシーを採用するかの外に道はないことになり、政治上は到底許し難いことになる。然らば、デモクラシーは結局國家豫算の膨脹を招き、放漫に流るゝ必然性を有するものと諦むべきであるか。ここにデモクラシーの政治制度に課せられたる難問題がある。

これに答ふる爲めに、再び本文の冒頭に述べたやうな、内閣の内部に於いて大藏省中心の豫算統制に就て考案を新にする必要がある。一省一局の見地からではなく、國家行政を統一的に觀察し得るものは、一國の財務を全體として見渡し得る大藏省を措いて他に見出し難い。しかも、大藏省は各省各局の政策又は事務に就て要する費目に就て査定し、承認する際に一々その各個の政策なり事務なりの内容に立入つて檢覈し得る。この際、どこまで政策なり事務なりの内容に立入り批判すべきか、大藏省の執るべき標準は如何なるものであるか、が考究に値する問題なのである。然し乍ら、大藏省の立場が一國全體の財政的見地から、各個の政策又は行政事務を標準化するに在るべきは明かである。即ち費用の支出に不公平の存せざるやう、無駄の存せざるやう、兼ねて能率の確保を期するにある。かやうな財務的標準化が如何に各個の政策の具體的價値と調和し得るかは、政治家として又行政家として實際の場合に當つて裁量さるべきことであつて、學理の具體的に指示し得る所でない。

大藏省が豫算の編成に當つて査定の手段を通うして各省豫算の統一的標準化を行うた後、前節に述べたるが如き議會の豫算見積精査委員會の批判を仰ぎ、それの批評や報告の中から受容れるべきものは受容れたならば、政府の議會に提出すべき豫算案は更に統制の加はつたものとなるであらう。勿論議會の豫算委員會はその精査委員會の意見に拘束される義務はないのであるが、そこに多少の影響が存することになる。殊に豫算委員會は大綱のみに就て論議し、細目に及ばないのが通例であるから、それから生ずる缺陷が補はれることになる。即ち豫算は編成に際し又は議會提出の以前に於いて、政府部内の統一と議會の超黨派的機關との連絡とを得ることが望ましく且つ必要なのである。日本に於いて行はれる豫算内示會の如き慣行は全く無意義極まるものであつて、何が故に今日その存在を必要とするか解するに苦しむもの

であるが、若し之を改正して合理的な存在とすべしと云ふならば、ここに謂ふ精査委員會の如きなるべく専門的超黨派的な心境を有する議員より成る機關に依つて代位さるべきものと思はれる。

大藏省の豫算に對する統制は、豫算の議定後に於いても重大な役割を有する。何れの國に於いても、英米の如き豫算案が法律案と同様の手續及び形式を執る國に於いても、豫算の議定は支出の承認と見るべきもので、嚴格の意味に於ける支出の命令又は委任ではない。即ち政府は特定の既定數以外は豫算額の範圍内に於いて適當に支出し得るのである。だから、今回政友會の議會が例の豫算内示會で主張した議論などは法律論としては英米に持つて行つても通用しない議論である。ただ大略その限界は政治的に樹立されてゐる。議會の權限が憲法上この點に關し最も直い米國に就て、ウイロビーの語る所に依れば、下院の意思を明かに知り得る款項に就ては、その意思に反せざるやう心掛けねばならぬが、然らざるものは大統領の裁量によつて自由に處斷し得るとされてゐるのである。要は議會の意思が個々の豫算案に如何に現れてゐるかの解釋の問題に歸する。從つて豫算の理想は、正當なる議會の意思が判斷し得られるやうな形式と慣行とを有するに在る。而して云ふまでもなく豫定した金額を費さねばならぬと云ふことが總ての政策又は事業に就て要求されるとは限らない。

かくの如く豫算の議會提出の前後に於いて大藏當局は之れに統制を加へ得る。而して、この外に各省會計に於ける決算に依る事業檢査の統制等と相俟つて財務行政の統制組織は成立つてゐるのである。筆者個人の見解としては、我が議會制度の發達の程度に鑑み、ここ暫く議會の側から、國家豫算の歳出統制の努力が生れ來る希望は少いやうに考へられる。從つて若し我が國家豫算をして、その政策及び行政の能率と進歩とを害せざる範圍に於て、嚴密に監督し得る可能性ありとせば、そは政府機關の側に存するやうに考へられる。即ち直接消費の任に當る機關の反省に俟たねばならぬ。殊にこの問題の意義を自覺する力強き政治家と有能なる行政家とが協力して、内は各消費機關の要求を抑制し、殊に軍部方面の支出に對して制約を加へ、外は利權獵りと地方問題とに沒頭し國政を顧みない政黨の要求を抑止することが望ましいのである。…………

かくて、國家豫算の統制者は結局誰れか、と云ふ本文の主題に對して結論するならば、日本の特種事情は兎も角として理論上は、議會でもなければ政府でもないと答ふるの外はない。眞の統制者は何れの方面にも在り得る。そうしてそれ等の協力が成立つた時に始めて統制は有力となる。要は各個の方面に於ける統制機關の意義を自覺し、各の職能を發揮せしむることにある。今回の如き政費の節約てふ大問題が獨りたま〳〵政府に立つた民政黨のみの手によつて取扱はれ、議會の意思が反映せず、その協力の見えざるは寔に遺憾と言はねばならぬ。我が議會制度の缺陷の一つがここに現れてゐる。又政府がその手にせ

る大藏統制の武器の使用を一時の便法としてでなく、如何に行政上の原理問題として取扱つてゐるかも不明である。筆者は、議會に對すると共に政府に對しても、この國家行政の大問題に就て制度上の缺陷を改善する爲めに努力する必要あることを痛論したいのである。國家の機關は總て或る限度に於いて共通の目的を遂行し、その爲めに妥當な制度を發達せしめねばならぬ筈のものである。そうして二者の間に爭ひが生じて解決がつかない場合には國民は自ら積極的にその裁斷を下す必要がある。而して今やその爭ひの時期は刻々に近づきつゝある。來るべき總選擧に於いて、今回の「實行豫算」に就ての論議が再び繰返されるなら、それを裁判するに足る一つの見地は、「國家豫算の統制者は誰か」と云ふ問題であらうと思ふ。政策論の外に、かうした行政制度に關する立論も實際問題として顧みられてよいと考へる。(十月一日)

第二貧乏物語

河上肇

第七回

聞くところによれば、近頃文部省では、マルクス主義を批判(?)した文獻を集めて刊行する計畫を企て、取り敢えずその第一着手として、大學や專門學校の教授たちに、『右の問題につき意見を有するものは、この際至急にこれを文書に認めてその筋に提出すべし、論點はマルクス主義の如何なる部分に係はるものでも差支なく、紙數にも制限は設けない』といふ意味の、通牒を發したさうである。かねてより忠勤をぬきんでんと待ち構へてゐた教授たちは、自己の有能さを上司に知られうる此の絶好の機會を最も有效に利用するために、昨今おそらくは、その精力をマルクス主義の批判(?)に集中してゐることだらう。果してどんなものが集まるか、また集まつたものを誰が取捨するのか、何にしても面白い計畫が企てられたものだと思つてゐるうちに、『祖國』といふ雜誌の十月號には、京大教授藤井健治郎氏の唯物史觀の批判が現はれた。この號に載すところは、第一節の『唯物史觀の要旨』なるものに止まるが、この範圍においてすら、もし私が教員であつたなら、相當の點を引かなければならぬことがある。その一例を擧げよう。『政治經濟學批判』の『序言』中における謂はゆる唯物史觀の公式なるものは、廣く人口に膾炙(くわいしや)してゐるところであり、現に藤井博士も『最も屢ゝ引用されてゐる文章』としてその一節を引用されてゐるのであるが、不思議にもそれは次ぎのやうな變なものに置き代へられてゐる。

『社會の物質的生產力が或る發達階段に達すれば、既存の生產關係と矛盾するやうになる。……生產力の發展の形態から、それの中に縛られてゐる生產關係は激變する。かくて社會的革命の時代が出現する』。（『祖國』、十月號、九—一〇頁。）

『生產力の發展の形態から、それの中に縛られてゐる生產關係は激變する！』何のことだか分からない。だが、そこの原文は次ぎのやうになつてゐるのである。

Aus Entwicklungsformen der Produktivkräfte schlagen diese Verhältnisse in Fesseln derselben um.

それを直譯すれば、かういふのである。『これらの諸關係（生產諸關係）は、生產諸力の發展諸形態から、その（生產諸力の）桎梏に轉化する。』すなはち、その意味するところは、極めて明白である。一定の着物は子供の發育のため缺くべからざるものであるが、しかしその子供がすでに發育して青年になつたならば、これまでの着物はその發育を妨げる桎梏に轉化する。かくて同じ着物が、有用物から有害物に轉化し、辯證法にいふところの『反對物への轉化』を實現する。これがマルクスの言ふところである。しかるに藤井博士は、『生產關係が生產力の桎梏に轉化する』といふべきところを、『生產力の桎梏中にある生產關係が激變する』といふ意味に（これは何を意味するのだか分らないが）置き代へてゐられるのである。大森義太郎君は『解放』でこれを誤譯として指摘されてゐたが、私はさうは思はない。日本では最も古くから唯物史觀の考察に着手されてをりドイツ語には特に堪能である藤井博士が、かゝる周知の句を今頃誤譯されるはずはあるまい。これは何かの魔がさしたのに相違ないのである。ひそかに考へるに、我國における有名無名の多數の教授たちから文部省へ集まつてくる諸論文も、おそらく皆このやうな××××ものばかりであらう。そのやうなものを××をかけて刊行するよりも、——私は內々で文部省のお役人に智慧を貸すが、——そのうちにこの『物語』も完結するから、內務省のお役人と相談して、今までの××をすつかり×××、これを何百萬部か印刷して全國に配布する方が、遙に得策でありはしないか？

總じて效果的な批判は、批判さるべき對象の完全なる理解の上に立脚せねばならぬ。理解を拒んで批判を要求するは、飲食物を與へずして糞尿を排泄せよと迫まるが如きものである。もしそれ對象の無理解に立脚せる無駄話に至つては、たとひ千萬卷を積むとも、それは實らざる虛花であり、空にうかべる蜃氣樓である。左樣なものがもし現はれたならば、私は一息でこれを吹き消してやらうと、今から待ち構へてゐる。話を寄す、天下の諸教授、幸にこれをつとめよ。

雜談をやめて、物語の本筋にはいらう。

十一、唯物史觀から資本主義的社會の解剖へ

私はこの物語の第四回と第五回とにおいて、唯物史觀の何物たるやを説明した。ところで、この史觀なるものは、マルクスおよびエンゲルスの共著に成る『ドイッチェ・イデオロギー』中の言葉によれば、『人間の歴史的發展に對する觀察から抽象されたところの・最も一般的な・結論の要約』を表現せるものに過ぎないのであり、そして『かゝる抽象物は、それ自身としては、現實的な歴史から引き離されては、全然何等の價値をもたない。それはたゞ、歴史的材料の系統づけを容易ならしめ、その個々の層の順位を暗示するに役立つだけである。それは哲學のやうに〔この場合ヘーゲルの哲學が筆者たちの頭にうかべられてゐたと考へる――河上補〕、一の處方箋または表式を提供し、それに從つて歴史上の諸時代を仕上げることをえせしめるが如きものでは、決してない。困難は、反對に、吾々が過去の時代もしくは現代に關する資料の考察および系統づけに・現實的な叙述に・從事するとき、はじめて起る』のである。(『ドイッチェ・イデオロギー』、ドイツ本、二四一頁。)後年エンゲルスは、シュミットあての手紙(一八九〇年十月二十七日づけ)のなかで、これとほゞ同じことを述べてゐる『一體「唯物論」といふ言葉を、ドイツの多くの若い著作者たちは單なる口頭禪(フラーゼ)に使ふ癖ひがある、すなはち深い研究はしないで、何でも彼でも唯物的にしてしまふ。言葉を換へていふならば、それは唯物的だといつて、それで問題を解決したつもりでゐる。だが、吾々の歴史觀〔すなはち唯物史觀〕は、何よりも先づ研究に際しての手引であつて、似而非(えせ)ヘーゲル主義者流の徒らな體系構成の具ではない。全歴史は新たに研究されねばならぬ。それがためには、吾々は各種社會形態の存在諸條件を、一々について探究しなければならぬ。』(久留間鮫造氏譯『エンゲルスの手紙』、一二―一三頁。)なほマルクスは、その著『政治經濟學批判』の序言において、唯物史觀の公式を叙述するに先だち、それをもつて、彼れの經濟學上の研究にとり『導きの絲〔または指南車〕として役立つたもの』といひ、また『資本論』第二版の跋文においては、前記の序言中における唯物史觀の公式の叙述を指して、『余はそこで余の方法の唯物論的基礎を闡明(せんめい)した』といつてゐる。すなはち唯物史觀は、『たゞ歴史的材料の系統づけを容易ならしめ、その個々の層の順位を暗示するに役立つだけ』のものであり、『研究に際しての手引き』であり、『導きの絲』であり、『方法』である。だから、プレハーノフが『唯物史觀は、吾々をして人間の精神史のすべての問題を直ちに解決するをえせしむるが如き・魔術的な公式を、吾々に提供するものでは決してない

が、しかもそれは、……科學的研究の一の確實なる道を、吾々に指示する』といつたのは、まさに正しい。

そして現代の資本主義的社會に關するマルクス主義の理論は、――從つて資本主義から××××への必然的推移の理論は、――かゝる方法に基づき資本主義的社會を解剖することによつて發見されたものである。かゝる解剖は、『剩餘價値による資本家的生產の秘密の曝露』を齎らした。かゝる秘密の曝露により、現代社會は、社會全體の沒落を避けようとするかぎり、恰も成育した青年が嬰兒時代の衣を脱ぎ棄てゝ新たなる衣を纏はねばならぬと同じやうに、如何にしても從來の資本主義的社會形態を脱ぎ棄てゝ一の新たなる社會形態に推移せねばならぬといふことが、科學的に證明された。だからエンゲルスは、――私がすでにこの物語の第四回の冒頭で述べたやうに、――『唯物史觀と剩餘價値による資本家的生產の秘密の曝露と』をもつて、吾々がマルクスに負ふところの『二つの偉大なる發見』となし、『これらの發見によつて社會主義は科學となつた』と、言つてゐるのである。

唯物史觀は、從來の社會諸形態全般の推移に關する一般的性質を正しく理解してはゐるが、しかしそれのみをもつてしては、この全體が構成されてゐる個別を説明するに不充分である。これらの個別を知るためには、『吾々は、それを自然的もしくは歷史的の聯關から抽出して、それだけを、その特性・その特殊な因果關係・等々に從つて研究しなければならない』。一旦唯物史觀を把握したマルクスが、その後は、それを彼れの研究にとつての『導きの絲』となしつゝ、彼れの精力の大半を現代社會の解剖のために献げ、彼れの主要著作たる・かの尨大なる・『資本論』の完成に努力したのは、そのためである。眞理はすべて具體的である。そして斯かる具體的な眞理のみが吾々の實踐に役立つのである。抽象的な一般理論は、たゞ斯かる具體的な眞理に近づくための一の道具であり手段であり方法であるに過ぎない。その意味からいへば、『資本論』に展開されてゐる理論ですら、資本主義的社會の運動の――その成立・發展・および沒落の――一般的な根本的な筋道を指示するに過ぎない。政治を科學にまで高めたマルクス主義は、如何なる場合にも、一般的な抽象的な理論をもつて、吾々の實踐のために充分なる處方箋となすものではない。それは常に個々の場合に應じて出來うるかぎり具體的な眞理を把握せねばならぬことを要求する。この道理をさへ明かにすれば、マルクスがたゞ唯物史觀を把握したといふだけで決して滿足しなかつた理由が、――從つてまた、小泉信三氏の如く、『唯物史觀と剩餘價値論とでは、そのマルクシズムに取つての意義において遙に輕重がある、前者は重く、後者は輕い』といふが如き主張をなすことの、誤謬であるといふ理由が、――おのづから明か

であらう。

抽象的な理論とその具體的な表現との關聯を說明するために、私は最近ある場所で次ぎのやうな比喩を用ひた。それを再びこゝに利用しよう。——私は數日前、新勞農黨樹立準備會の演說會に出席するため、京都を立つて汽車で名古屋に向つたが、その途中、野州といふ驛の手前頃から、川が左に向つて流れてゐることを發見して、最初の瞬間には、これは變だなと感じた。一般的公式理論からすれば、川は海に向つて流れなければならぬ。しかるに今、海は南のかた——すなはち右手——に横たはつてゐるに拘らず、川は左手の方へ向つて流れてゐるのである。しかし考へて見ると、こゝの地勢は北がずつと低くなつてゐる。だから川は海に向つて流れようとしてゐるのではあるけれども、この場合は全く當面の事情に餘儀なくされて、一見すれば、海とは反對の方向に流れてゐるのである。かくてこの地一帶の川は一旦すべて琵琶湖に落ちる。こゝに斯樣な日本一の大きな湖水が出來てゐるのは、最初からそこに大きな深い凹地がある證據である。水は當面の事情に餘儀なくされて、一應はこの低い方面へ流れてゆくのである。そしてそこの大きな深い凹地を一杯の水でうづめ、汽船の通ふやうな日本一の大湖水をたゝへた後に、やつと出口を見出して淀川となり、大阪灣まできてはじめて海に注ぐのである。——この一例によつても明かなやうに、川はすべて海に向つて流れるといふのは、一般的な抽象的な理論にすぎないのであり、如何なる川といへども決して一直線に海を指して流れてゐるのではない。從つて一定の川が果して如何なる迂餘曲折を經て海に注ぐかの具體的な諸事情に至つては、これを個別について研究するの外ないのである。

唯物史觀は、すべて從來の階級社會が如何にしてその成立・發展・沒落の過程を辿るかについての、最も普遍的な・從つて抽象的な・一般理論を提供するものたるに過ぎない。今この一般理論が現代の資本主義的社會において如何に具體化されるかの問題に至つては、——かゝる問題に遭遇するときに『困難は始めて起る』のだが、——現代社會そのものの存立諸條件につき詳細綿密なる・極めて忍耐強き・分析をなしてからでなければ、理解されうるはずはない。だから、マルクス主義はたゞ唯物史觀の上にのみ立つものではない。マルクスによつて行はれた『資本家的生產の秘密の曝露』こそは、社會主義が科學となるための欠くべからざる構成要素である。

本誌の八月號には、小泉信三氏の『唯物史觀と共產主義的歸結』と題する論文が現はれた。それには次ぎの如く述べてある。（そのうちの一句は前に引用したが、こゝにはその前後を含めて、やゝ長く引用し

ておかう。」

「エンゲルスによれば、唯物史觀と剩餘價値論とが社會主義を科學たらしめたマルクスの二大發見であるといふ。しかしながら、唯物史觀と剩餘價値論とでは、そのマルクシズムに取つての意義において遙に輕重がある。前者は重く、後者は輕い。……

「マルクスの剩餘價値論が敎へるところによれば、資本家の利子利潤、地主の地代は、勞働者の產出した價値の搾取に成るものである。しかしながら彼れは此の勞働搾取を不當として此にその共產主義の論據を求めたのでないことは、わざ〳〵エンゲルスも指摘してゐる通りである。……しからばマルクスの共產主義的要求の根據は何處にあるか。彼れは「これを吾々の目前に日々進行しつゝある資本家的生產方法の必然的崩壞に」求めたのだといふのである。而してこの資本主義必然的崩壞の結論が唯物史觀の上に立てられたものであるのは、言ふまでもないことである。しからば、資本主義崩壞の結論に對して剩餘價値論はどれほどの用をなしてゐるかといふに、その寄與するところは極めて輕少であるやうに見える。

「マルクスの唯物史觀は、一八四七年の「哲學の窮乏」には既に殆んど完成に近い形で現はれてゐるが、……その根本思想は旣にこの原稿の起草せられた時、すなはち一八四五年に把握せられてゐたことが明かである。否な、更にその前の「神聖家族」の一節にも、マルクスは私有財產の制度の消滅をば、富とプロレタリヤとの對立から必然的に生ずる論理的歸結として說いてゐるのである。しかもこの當時における彼れの經濟學的素養は、極めて幼稚不十分なものであつて、未だ剩餘價値論と稱しうべきほどのものを持つてはゐなかつた。大體において、彼れが價値論・剩餘價値論に着想し、これを大成したのは、その共產主義的結論に到達した以後のことであつた、と言つてよからう。……

「本誌前號(「改造」七月號)の論文において、福田博士はマルクスの勞働價値學說が決してマルクシズムの「本營」にはあらざること、これをその本營と考へてその攻擊その排擊に主力を集中することの誤りなるを說かれた。私(小泉氏)は上段述べ來つた理由によつて、結論として博士のこの意見に同感なることを欣幸とする。……とにかくマルクスの價値論・剩餘價値論は、マルクシズムの最高部分を成すものではない。繰り返していふ、「唯物史觀と剩餘價値論とでは、そのマルクシズムにとつての意義において遙に輕重がある。前者は重く、後者は輕い」。……」

私がこゝに問題としようとする點については、私は小泉教授の所論

を相當長く引用したつもりであるが、私は不幸にしてそこに大した論據を見出すことができない。おそらく問題の主要點は、マルクスが『彼れの經濟學的素養が極めて幼稚不十分なものであつて、未だ剩餘價値論と稱しうべきほどのものを持つてゐなかつた』當時に、早くも共産主義者として現はれてゐた、といふ事實にあるらしく思はれるが、もしさうであるならば、しかるかぎりにおいて、彼れの共産主義はまだ科學的に建設され了つてゐない。といふだけのことである。そしてそのことは、唯物史觀の外に『剩餘價値による資本家的生産の秘密の曝露』といふ今一つの發見をもつて、マルクスの手により社會主義がはじめて科學となつたといふ主張と、何等矛盾するものでなく、正にそれに照應するものである。

マルクスが、資本主義社會における剩餘勞働の搾取——資本家階級による賃勞働者階級の勞働の搾取——を、道德論的に『不當』となし、かゝる道德論の上にその『共産主義的要求』を根據づけてゐないことは、小泉教授の言はれてゐる通りである。意見が世界を支配するとの觀念論的見解を徹底的に排斥したマルクスが、かゝる無力な道德論の說教の上にその共産主義を根據づけてゐないことは、當然である。しかしマルクスがその剩餘價値論を資本主義社會の道德的非難のために利用してゐないといふことは、彼れがその剩餘價値論を共産主義の理論的根據としてゐないといふことと、決して同じことではない。

小泉教授の言はれる如く、マルクスの共産主義は、『吾々の眼前に日日進行しつゝある資本家的生産方法の××××』をその根據としてゐる。だが、教授が全く看過されてをり而かも吾々にとつて極めて重要な點は、この『資本家的生産方法の××××』を科學的に證明するためには、マルクスの發見に係はる剩餘價値論が絶對的に必要だといふことである。

小泉教授はいふ、『この資本主義必然的崩壞の結論が唯物史觀の上に立てられたものであるのは、言ふまでもないことである。しからば、資本主義崩壞の結論に對して剩餘價値論はどれほどの用をなしてゐるかといふに、その寄與するところは極めて輕少であるやうに見える。』私の見るところによれば、こゝに教授の誤解が横たはる。古代ギリシヤの哲學者たるヘラクリットは、萬物は流轉すると言つた。これは疑ひなく正しい。そしてこの一般的な見解から、資本主義社會もまた流轉を免れないものだとの大體の見當は引き出される。だがたゞそれだけのことであつて、それが如何なる過程を經て如何なるものに轉化するかの具體的な諸事情に至つては、たゞ萬物は流轉するといふだけの智識で說明されうるものではない。それと同じやうに、唯物史觀を把握した者にとつては、資本主義社會もまた生産諸力と生産諸關係との

矛盾衝突のため×××に××すべきものだとの大體の見當は付くが、しかしそれ以上のより具體的なことは、資本主義社會の內的聯絡を忍耐強く詳細に分析して見なくては分からない。マルクスの價値論・剩餘價値論に基づく資本主義社會の解剖は、それゆゑに、レーニンの言葉に從へば、唯物論と辯證法と共に、『マルクス主義の三つの源泉と構成部分』とを成すものなのである。福田・小泉の兩教授は、今や勞働價値說の攻擊から手を引いて、教授たちが新たにマルクス主義の『本營』だと認めるに至つたところの唯物史觀にその攻擊を集中されんとするものの如くである。だが、唯物史觀と剩餘價値による資本家的生產の秘密の曝露といへる・この二つの偉大なるマルクスの發見は、——言ひ換へれば、マルクスの唯物論と辯證法と資本主義的社會の經濟學的研究といへる・この三つのマルクス主義の構成部分は、——不可分的な一體をなしてをり、その全體を『本營』としてゐる。私は諸教授が遠慮なしにその全體にぶつかられんことを希望しておく。

十二、驚くべき貧富の懸隔

日本における最大の金融資本家の一人たる×××は、一日に一萬圓以上の所得を得てゐる。これは×××の財產から生ずる所得だから、たとひ當主は四五歲の幼兒に代はつたとしても、その所得は變はらないであらう。さういふ金持の存在してゐる我が日本に、他方では、次ぎのやうな生活をしてゐるものがある。——私はこの『物語』の第一回の二において、一通の手紙を揭げた。それには次ぎのやうな一節があつた。『こゝは××××の產地ですから、私の近所にある工場もやはり××××の工場です。…就業時間は朝の六時から夕方の六時まですが、それだけの日給では、男工ですら一ヶ月三十五、六圓にしからないので、殆んど例外なく夜の十時まで引續き殘業をやつてゐるす。だから每日十六時間の勞働です。私の知つてゐる男の人は、約一里ほど離れた×××といふ小さな所から、この××の工場へ自轉車で通つてゐるのですが、彼れは、例へば今日の朝六時に仕事を始めると、今夜はずつと徹夜して仕事を續け、明日の夜十時まで、前後四十時間ぶつ通しに勞働し、それから自轉車で自分の家まで歸り、（つま二ヶ日目の夜はじめて自分の家へ歸るわけです）、床のなかにも這入らずに、ごろねをするのださうです。そしてその翌朝はまた六時までに、自轉車で工場へ歸るのです。これは特別の例外ですが、しかしこれに近い例外はいくらでもあります。家族が多いと、こうまで無理をしなければ、ともかく生きてゆけないのです』。斯樣にして人々は生きんがために自分の生命をすりへしつゝある。

日本では大人が斯樣な無理をしてゐるが、隣りの支那では、工場

の規定がないために、人間の生命はその萌芽のうちに踏みつぶされてゐる。『上海調査委員會は、同市の工業地域における二百七十四工場に、十二歳以下の幼兒が二萬二千人以上働いてゐることを知つた。就業時間は午前六時から午後六時まで、もしくは午後六時から午前六時まで、一日十二時間が普通であるが、しかし委員會は、「終日終夜六歳に足るか足らぬかの幼兒が非常に多勢働いてゐる」のを見た。同市外人居留地の幼年勞働調査委員會は、「幼兒は五歳になれば往々雇はれる」と報告してゐる。……晝間または夜間十二時間働いてもまだ足りないのか、「幼兒たちは往々四六時中立ち働かねばならぬ」と報告書は書いてゐる。……クリスト教青年聯盟國際書記シャーウッド・エディーは、一九二三年支那の勞働狀態を詳細に研究した。……彼れは「アメリカおよびヨーロッパの富豪の家庭で用ひる最も美麗なペルシヤ絨毯を製造する支那の絨毯工場」について語つてゐる。「大人と少年は一日十六時間平均、午前五時半から午後十時まで働いてゐる。少年の大多數は三年間徒弟見習として勤め、その間はたゞ食はして貰ふだけで一文も受け取らぬ。この徒弟見習はたゞ邪道にすぎない。少年たちは、三年間勤め上げてからでも、事業について何等前途が開かれるのではない。見習期間を終へた後は、人力車苦力になつて、一日平均三十錢の稼ぎをなしうるやうになるだけである。北京にゐる五千の人力車夫の稼ぎはこれよりも少い。この仕事を五ヶ年も續けてをれば、彼等は大抵健康をそこね、そして働けなくなる。」……バーチングトンは上海における一熟練工の五人家内の生計費を一ヶ月七十一圓七十錢、不熟練工のそれを四十二圓六十八錢と見積つてゐるが、平均賃銀はこの額の半分にも達しないから、他の家内のものが働かなければ餓死する外はない。――幼兒たちを斯樣に幼少な頃から工場へ追ひやる恐ろしい經濟的壓迫は、もちろん父の賃銀で足りないから來るのである。バーシヴァル・フィンチは、「小供たちは、家計を補ふために、幼少の頃から仕事に就かねばならぬ。多くの場合、全家族が工場にゐる。それは、上海においてすら、平均生活費および一人前の平均收入を考へて見ると、四割の家族は、他に收入の口がなければ、飢餓線以下の生活をせねばならぬ狀態にあるからのことだ。これらの幼兒たちが稼ぎに出るか、それでなければ餓死するより他に途はないのだ」と語つてゐる。』(ドルセン『支那は何處へ往くか?』、蓬台恒治氏譯本、六八――七一頁の間抄錄。)

日本のことには觸れにくいから、私はも少し支那について語らう。近頃公けにされた上杉益喜氏の『仲仕(積卸)苦力の研究』と題するパンフレットを見ると、世界資本主義の重壓のもとに『汗をポタ〳〵と流しながら重荷を擔いで牛の如く步む』仲仕苦力の生活が、さま

ざと眼にうかぶ。先づその賃銀率を見よう。日本の下關では、貨車よりの船積が、一英噸につき五十七錢の割になつてゐる。すなはち下關では、一人一英噸の作業をすれば、それで米一升以上の糧になつてゐるが、營口では、同じ仕事が一米噸につき十五錢の割にしかなつてゐない。すなはちそれだけの作業をしても、粳米二合四勺位しか買へないことになつてゐるのである。『殊にひどいのは、長春の東支滿鐵作業連絡で、毎日何時に作業が始まるやら、今日はどれ位の收入が得られるやら、一切不明』である。これらの苦力(クーリー)は、積込距離が三十メートル前後の場合には、重い荷物を肩にして、『極めて輕快に走るのであるが、六十メートル前後になると、彼等は決して走らない、走りえないのである。汗をボタ〳〵と流しながら牛の如く歩む。寒暖計は零度以下二十度三十度を示してゐる寒天に、なほ濛々と汗煙(あせけむり)を出して働いてゐる彼等である。長春において昭和二年の初春に起つた罷業の如きは、決して苦力の反抗的放埓より來たものでなくて、正に四十噸近くを通日勞働して、疲勞の極一旦おろした腰がどうにも浮かなくなつたものと見られる。』（前掲書、四八頁、抄錄。）

一方には、××××一日に一萬圓以上の收入を得てゐる人があり、他方には、四十時間ぶつ通しに働いて、多勢の家族の糊口をやつと支えてゆく人や、零度以下二十度三十度の寒天に汗をボタ〳〵落しながら、一噸の重荷を運んで、やつと十五錢の收入しか手にすることのできない人などがゐる。前者は×××であり、後者は××××である。後者はその勞働力以外には賣るべき何物をも有たぬ。それを賣ることにより、例へば一噸の石炭を運んで、粳米二合四勺を手に入れるのである。前者はこれらの人々からその勞働力を買ひ入れ、彼等を酷役して『事業』を經營し、それによつて例へば一日に一萬圓づつの金を儲ける。これが××の×××ゐる××××××の××である。——そこでは、富者は資本家として・貧乏人は賃勞働者として・現はれてゐる。そしてこれらの人々の間には、たゞ物の賣買が行はれてゐるだけのやうに見える。賃勞働者は、その勞働力を商品として資本家に賣る。賃銀といふのは、その勞働力の代價のことである。そして彼等は、彼等の商品の代價として受取つた此の貨幣をもつて、彼等の生活資料——それは資本家の手に商品として横たはつてゐるから、一定の代價を拂はねば之を手に入れることができない——を、資本家から買ひ入れる。一旦資本家から受取つた金は、かくて間もなく元の資本家の手に歸る。それを再び取り返さうと思へば、彼等は重ねてその勞働力を資本家に賣らねばならぬ。斯樣なことをいつまで何遍繰り返してゐても、賃勞働者の手に金のたまらぬのは、當然である。だから彼等がいつまで經つても貧乏なのは勿論のこと、體力の弱いものは過勞の

ために健康を害し、賣りうべき唯一の商品たる勞働力をすら賣ることができなくなる。かういふのが賃勞働者の境遇だ。それなら資本家はどうか？　彼れは勞働者から勞働力を買ひ入れると同時に、生産手段たるべき原料や機械やを買ひ入れ、そしてそれらの勞働力や生産手段やを謂はゆる生産過程のなかへ投げ入れ、かくして新たなる商品を作り出す。例へば紡績工を雇ひ入れ、綿花や紡績機械やを買ひ入れ、それらのものから綿絲を作り出し、そして最後にその綿絲を商品として賣るのである。（資本家階級のなかには分業が行はれる結果、種々なる資本家の營んでゐるところは必ずしも同じくない。こゝでは模型的な産業資本家だけについて話を進めてゆく。）だから資本家もやはり商品の賣買をしてゐるのである。しかるに、賃勞働者はいつまで經つても貧乏だが、資本家の方は、――小さなものは段々大きなものに併呑されてゆくが、それは別問題として、――謂はゆる『事業』の經營により利潤を得、そしてその利潤を段々蓄積してゆくから、年數が經てば經つほどその資本は加速度的に增殖されてゆく。かくて一方の極には、×××××一日に一萬圓以上の收入を有する極めて少數の大資本家が現はれ、他方の極には、一噸の重荷を運んでも僅に十五錢しか得られないといふやうな・支那の苦力×××・みじめな・澤山の貧乏人ができる。」見渡すところ、そこにはたゞ商品の賣買が行はれてゐるに過ぎぬやうだが、どうして事態はこんな風に進んでゆくのであらうか？　また事態はいつまでこんな調子で進んでゆくことが出來るのであらうか？　マルクスの成し遂げた『剩餘價値による資本家的生産の秘密の暴露』は、すなはちこれらの問題に對し、明白なる科學的解答を提供するものである。

意見が世界を支配するとの觀念論的な見解を徹底的に排斥したマルクスが、資本家的生産の齎らした配分の××なる××を、――『一方においては少數者の掌中への資本の集中、他方においては大都市への無産大衆の集中』を、――單なる道德論によつて非難することに滿足しなかつたのは、當然である。彼れにとつての問題は、『新たに出現した社會的××をば、現存せる生産の仕方の必然的な結果として・しかしまた同時にその生産の仕方の上に落ちかゝつてゐる××の前兆として・論證することであり、且つこの××せんとする經濟的運動形態の内部において、將來の・かの弊害を廢除する・新たなる・生産および交換の組織を發見すること』であつた。

總じて『一の生産の仕方がその發展の向上的な段階にあるかぎりは、その生産の仕方に適應する配分の仕方のため貧乏鬮を引いてゐる

ものまでが、これを歡迎する。大工業の勃興した當時のイギリスの勞働者がさうであつた。かゝる生産の仕方が社會的にノルマルなものとして止まるかぎり、社會全體の上に配分に關する滿足が行はれてをり、これに對する抗議は支配階級そのものの懷から起り（サン・シモン、フーリエー、オウエン）、しかもそれは被搾取大衆の間に未だ何等の共鳴をも見出さぬのである。けれども問題の生産の仕方が好い加減に下り阪になり、半ば時代後れのものとなり、その存在の諸條件が大部分消え失せてその後繼者がすでに戸口をノックしてゐる頃になると、――さうなると始めて、益々××になりゆく配分が××だと見えるやうになり、時代後れになつた事實から謂はゆる永久の××が叫ばれるやうになる。だが、道德や正義に對する斯かる叫びは、毛筋一本ほども吾々を科學的に押し進める助けとはならない。經濟學は、道義的憤激に關しては、よし如何にそれが尤もなものであらうとも、そこに何等の論據を見出しうるものでなく、たゞ一の徴候を見出しうるに止まる』。（エンゲルス『反デューリング論』、ドイツ本、一五二―一五三頁。河野・林兩氏譯本、二三七―二三八頁。）これをマルクスの言葉に移せば、『かゝる××時代をその時代の意識から判斷するのは、恰もある個人が自分自身のことを何う考へてゐるかによつて其の人を判斷せんとするのと同じで、たゞに不可能なばかりでなく、むしろこの意識なるものが、物質的生活の矛盾から・社會的生産諸力と生産諸關係との間に現存する衝突から・說明されねばならぬのである』。（『政治經濟學批判』序言。）

社會民衆黨の綱領は三項から成つてゐるが、そのうちの二項には『健全なる國民生活』といふ語がある。例へば、その第二項には『我等は資本主義の生産ならびに分配方法に健全なる國民生活を阻害するものありと認めて合法的手段によつて之が改革を期す』としてある。そして島中雄三氏の『宣言解說』を見ると、『社會的正義の觀念をもつて一貫した健全な國民生活を樹立する』といふやうな言葉がある。（『社會民衆黨宣言解說』、三〇頁。）また安部磯雄氏の『綱領解說』を見ると、『富が社會の一部に集まるといふことは、社會の健全なる發達を來すどころか、却てこれを阻害することになる』とか、『科學や藝術の享樂を人民の一部に限るといふことは、社會をして不健全なる狀態に陷らしめるのみでなく、全く人道の精神に反するものである』とかいふやうな言葉があるが、（『社會民衆黨綱領解說』、一三、一六頁。）今かゝる道德論がこれらの諸君によつて叫ばれ、それが被搾取大衆の間に何等かの共鳴を見出しつゝあるならば、そのことは今日の資本家的生産方法がもはや時代後れのものとなり、その後繼者がすでに戸口をノックしつゝある證據である。奴隸制が生産諸力の發展に貢獻しつゝあ

つたかぎりにおいては、ギリシヤの哲學者たちも、これを『社會的正義の觀念』から辯護してゐた。それが道徳的に非難されるやうになつたのは、すでに奴隷制なる生産關係が生産力のそれ以上の發展に對する桎梏に轉化してから後のことであり、畢竟かゝる道徳的意識そのものは、物質的生活のうちに存在する生産關係と生産力との衝突といへる客觀的な現實の反映にすぎなかつたのである。

もし現代における驚くべき××の××に對し、多くの人々がすでに道徳的に憤激を感じつゝあるのであれば、その意識こそは、『物質的生活の矛盾から・社會的生産諸力と生産諸關係との間に現存する衝突から・說明されねばならぬのである』。道徳から經濟が判斷さるべきではなく、逆にその道徳が經濟から說明さるべきものなのである。

だから吾々は、單なる道徳的說教をもつて滿足せず、むしろ『物質的生活の矛盾』が――『生産諸力と生産諸關係との間に現存する衝突』が――如何にして不可避的なものとなつてをり、從つてまたその解決の策が如何に必然的なものとして規定されてゐるかを、專ら經濟學の研究のうちに求めんとするのである。

かゝる研究に對し、唯物史觀はすでにその大體の見込を提供してゐる。吾々は、それを『導きの絲』となしつゝ、生産諸力と生産諸關係との矛盾衝突が資本主義的社會において如何なる具體的な形態をとるかを、現實の事實について詳細に研究せねばならぬ。今マルクスの發見に係はる『剩餘價値による資本家的生産の秘密の暴露』は、實に斯かる研究にとつての基礎である。言ひ換へれば、『剩餘價値に關する學說は、マルクスの經濟理論の礎石である』(レーニン)。私は項を改めて、その大體の話をしよう。

新勞農黨樹立の時期に直面して

その勞働者農民の同盟としての性質および任務に關する一闡明

大山郁夫

一

新勞農黨の合法性獲得のための闘爭は、抗しがたき潮流に押されてかのやうに、異常な底力を以て着々と進捗して來た。全國の戰鬪的勞働者農民の間から擧げられた熱烈なる要求の聲に驅り立てられて、その結黨の時期も、大體十月下旬といふことに、一應決定された。——この決定は稍々後に至つて十一月一日・二日といふことに改められたが。——そうして待たれるその日は、もはや目睫の間に迫つて來た。

かゝる事態を前にして、新勞農黨組織準備會關西地方協議會は、その主催の下に關西の重要諸地點に於て結黨促進・時局批判演說會を開く計畫を立て、そしてそれへの參加のために私（大山）を關西に派遣すべきことを、東京の準備會本部に向つて要請して來た。本部は直ちにこれに應じ、更らに別に名古屋の準備會から來た同樣の要請をも容れて、私の遊說プログラムを組み、九月下旬から十月上旬にかけて、私を關西地方の同志たちの間に送ることを決議した。

かくて私は、九月二十八日に東京を立ち、それから十月六日に再びそこに歸つて來たまでに、京都（九月二十九日および十月二日）、名古屋（九月三十日）、神戶（十月二日）、大阪（十月三日）、堺（十月四日）、及び奈良縣の小泉村（十月五日）に於て、しばらく振りに、關西の同志たちと共に、親しみの深い大衆に接觸する機會を持つた。その間に京都の同志河上が四回も私たちと共同の演壇に立つたことは、私たちに大いなる欣びであつた。

演說會はどこでも、唯ひとつの例外もなく滿員であつた。のみならず、入場しきれない大衆が空しく街上に列を作つて立つてゐたために、私たちが心から詫び入りたいやうな氣持に誘ひ込まれたやうなことさへ、一再ならずあつた。九月三十日の名古屋および十月五日の小泉村に於ての外は、私たちの一行は始終生憎の雨に祟たられ通しであつたが、さうした空模樣などには頓着なく殺到して來た勞働者農民

無產市民の大群は、行く先々の會場を立錐の餘地なきまでに填めつくし、時々刻々堂をゆるがさんばかりの拍手を爆發させて、凄いほどの氣勢を擧げた。

もつとも、京都、神戶、および大阪では、一握りほどの小人數ではあつたが反對派のグループが聽衆の中から現はれて、ビラまきや彌次によつて會場の攪亂を企てたやうな小事件が持ち上がつた。そのうち唯一度京都に於て、九月二十九日の夜に岡崎公會堂で持たれた演說會が、彼等のさうした妨害行動によつて惹き起された數分間のさゝやかなる動搖のために忽ち臨監の警官に乘ぜられ、しかもその騷ぎが鎭まりかけてゐた刹那に『解散』を强制された。その時は我々の側に不覺にもさうした突發事件に對應するための防備手段が講ぜられてゐなかつたために、その演說會は遺憾ながら續行できなかつた。だが、我々のこの最初の無慘な失敗は、その代りに越えて十月二日の午後を期して三條靑年會館で持たれた同市での第二回の演說會の輝やかしき大成功によつて償はれて餘りある結末を以て局を結んだ。

否、それだけが該事件から我々が引き出し得た收穫の全部ではなく、その好影響は延ひて他の諸都市で持たれた演說會の上にまで波及した。それは、我々の遊說の劈頭に於て京都で起つたその小波瀾が、その後の我々の演說會の警備問題に關して、極めて重要なる敎訓を我々に與へたからである。かくて、その次からの各演說會は、精細なる注意を以て組織されて一糸みだれざる規律統制の下におかれた我々自身の警備隊によつて、極度に嚴重に固められることになつた。で、十月二日夜の神戶に於ける演說會、および十月三日夜の大阪に於けるそれに於ても、矢張り小人數の反對派のグループによつて、同じくビラまきや彌次の形に於ける會場攪亂の狂態が演ぜられたが、兩度とも我々の頼母しき警備隊の俊敏果敢なる行動に制止されて、彼等のその折角の企ても、竟に一杯のコップの水の上に立つ波ほどの騷ぎをも持ち上げることが出來なかつたばかりでなく、多分彼等が豫期してゐなかつたであらうやうな反對効果をすら產んだ。この點に關しては、大阪での演說會で見られた光景が、極めて典型的な一例を示した。卽ちその夜約四千の聽衆によつて充たされてゐた中之島中央公會堂內の人浪を背景にして、そこの一角かしこの一隅から一握りの反對派の連中の結果によつて時々持ち上げられた小さき攪亂の渦は、例によつて會場內に水も漏さぬばかりの警戒の陣列を布いてゐた警官隊と相映發して、臨監の中止の連發の叫聲の下に一種の皮肉な對照を示し、兩々相須つて熱心なる聽衆の反感を極度に挑發して、そのために會場內の緊張味が頓みに倍加され、新勞農黨支持の態度の表明としての急霰の如き拍手の響が層一層と瞬間々々に無際限に高められて行つた觀があつた。

かういつた調子で、次々と各地で持たれた演說會は、いづれも皆、豫想以上ともいふべき滿足な効果を十二分に收めた。そして私は、その間始終關西地方の同志たちが惜しみなく私に與へてくれた援助によつて、所定の任務を滯りなく果たした上で、言ひつくしがたい感謝の

念を懷きつゝ、それらの同志に別れを告げて關西をあとにしたのであつた。

それから、歸東の車中に於ても、歸東の後にも、私は絕えず過去一週日の旅行を振り返つて見ては、その間に私が新たに學び取つた教訓の意外に多かつたことを心から喜んだ。私は今、新勞農黨の結黨期を前にして、同黨の使命およびその意義を大衆に向つて語らうとするに際して、まづ私が今回の遊說中に於て得た樣々の生々しき印象から說き始めようとしてゐるのである。

二

既に述べた通りに、私の今回の遊說中、新勞農黨組織準備會關西地方の協議會の主催の下に關西方面の各重要都市で開かれた演說會は、いづれも皆並々ならぬ成功に輝いた。そして、いづれの場合に於ても、演說會に潮の如く集まり來つた大衆のうちには當該都市および附近の勞働者農民無產市民が、必ず壓倒的大多數を占めてゐた。彼等は皆一齊に、新勞農黨の堂々たる出現への懇望を前にして、萬雷の如き萬歲の叫びに聲を合はせることによつて、熱烈なる歡迎の態度を明白に表明したのであつた。この當然の事實は、しかし直接にそれを目擊した私たちを、心の底から愉快にせずにはおかなかつた。

更らに又、各演說會を勇敢に身を以て護つたところの、犧牲的精神そのものの如く見えた我々の警備隊は、その殆んど全部が工場から動員されて來た精鋭なる勞働者たちから編制されてゐたものである。特に大阪の演說會の場合に於て、さうした優秀なる警備隊が二百三十餘名の員數から成り立つてゐた事實は、かうした方面の事情に精通してゐるものにとつては、眞に驚異に値することであらねばならぬ。新勞農黨の樹立が大衆の支持を受けてゐないとか、戰鬪的勞働者の全部から排擊されてゐるとかの逆宣傳を盛に飛ばしてゐたものは、この具體的事實を如何に說明しようとしてゐるか！

更らに、私自身は新勞農黨樹立の提案者らの一人としての立場からも、特にさうした光景を無上の感激を以て見る理由を持つた。何よりも殊に私はそれを通じて、さきに私たちが非常の決心を以て全國の同志たちおよび大衆の批判の前に投げ出したその提案が、それらの同志たちおよび大衆の壓倒的大多數の間に於て、幸にもその不遜を咎められることもなく、本質的にその精神・趣旨に對する共鳴・支持を發見した事實の活きた徵證を見ることが出來たことを感じた。そして私は、單に久しく私の心の上に橫へられてあつた一種の重荷をおろしたやうに感じたばかりでなく、同時に新勞農黨の前途の發展に對する確信を益々强めることが出來た。無論このことは、私以外の二人の提案署名者たちについても、一樣に當て篏めていへることである。

もとより私たちは、提案發表の直後から引き續き、それへの反對聲明が雨の如く降らされた事實を、知りすぎるほど知つてゐる。だが、私たちは初めから、さうした一切の反對聲明が現實の大衆的基礎の上

に立つてゐたものか否かについて、多大の疑惑を挾んでゐたのだ。そのうちに、さうした反對聲明と入れ違へに、今度は贊成聲明の山が準備會假本部の卓上に積まれるやうになつた。それらの贊成聲明は、舊勞農黨時代以來あくまで我々の陣營を支持して來て、我々と共に手を取つて戰つて來た勞農諸團體の多數から送られて來たものである。そして、それらの贊成聲明が一體に反對聲明よりも多少後れて到着する傾向が見られたのは、前者が愼重なる大衆的討論を經た上で作られたためであつたといふ事實が、段々と私たちに明かになり始めた。

かゝる形勢の推移の下に、最近數個月間正規の刊行をしてゐなかつた舊勞農黨時代以來の我々の陣營の機關紙『勞働農民新聞』も、八月中旬には完全に更生して、提案への贊否に關する全國的狀勢が、その紙上に巨細に報道され始めた。それから間もなく、東京に於ける提案贊成の諸團體の代表たちの會議が持たれて、その席上に於て新勞農黨組織準備のための正式の本部および東京地方準備會設立の件が決議され、全國の同志たちに向つてその承認が求められた。それは實に、提案發表の日であつた八月八日から算へて一個月になるかならないかの九月六日のことであつた。全國の同志たちも直ちにその例に倣つて、續々と各地に準備會を組織し始めた。

この點に關する全國的狀勢を茲で詳細に報告するが如きことは、一般の讀者たちにとつては却て煩はしく感じられることであらうし、また特にそれを知りたい人々は『勞働農民新聞』紙上の報道に就くを便とする事情もあるから、茲では一切それを省略することにする。たゞ一般的狀勢の概觀としては、次のことが明確に言ひ得られる。すなはち、我々は最も尊敬する戰鬪的左翼勞働諸團體のうちにも、いまだに提案に對する贊否の表明を保留してゐるもの、および兎も角正式の機關の名に於て——大衆的討論を經た上でのことか否かは全然別問題として——既に公然と反對聲明を發表してゐるものが幾らかはあるといつたやうな、我々には衷心遺憾に感じられる現象も生じてゐない譯ではないが、しかし大局の上から見れば、それらの諸團體の間に於て提案絕對支持の態度を積極的に表明してゐるものが明かに壓倒的大多數を占めてゐる。のみならず、提案反對の態度を持續してゐるものが主として觀念的病症に囚はれてゐる一部少數のインテリゲンツィアの指導下に立つ人々の間に見出される傾向があるに反して、提案を積極的に支持するものは概ね皆現實に鬪爭を續けて來た諸團體に屬する人人であるといふ事實が、我々には明白に看取され得るのだ。

殊に、關西方面の最重要諸都市の大阪、神戶、および京都に於ける多數の有力な戰鬪左翼勞働組合および農民組合が、他に率先して逸早く提案を大衆的討論の下に審議した上で堂々と贊成聲明を發表した事實はどれほど私たちの意を強くしたか、測り知れないのである。かうしたことも、茲で一々詳細に記述するよりは、寧ろ讀者諸君の注意を『勞働農民新聞』紙上の精確なる關係記事に向けるのを便とするが、しかし今全豹の一斑といふ意味で、試みに新勞農黨組織大阪地方準

會の現在に於ける加盟支持諸團體を擧げて見る。それは實に次の通りだ。曰く、大阪金屬勞働者組合。曰く、大阪木材勞働組合。曰く、全大阪勞働組合。曰く、關西革新勞働組合。曰く、大阪足袋工組合有志。曰く、大阪電氣勞働組合有志。曰く、全國農民組合大阪府聯合有志。曰く、大阪市電自助會有志。曰く、水平社有志。——ざつとかういふ調子だ。それに、以上の現在加盟支持諸團體以外にも尙ほ、今後續々來り加はらうとする形勢にある諸團體の數もまた決して少くない模樣である。

だが、實をいへば、かうした單なる表面的な、形式的な記述だけでは、よしそれによつて事實の輪廓だけが髣髴し得られるにしても、その活きて動いてゐるまゝの眞相は、決して具體的に、實感的に把握できるものではない。それをなし得るためには、私たちは是非とも親しくその現實の場面に赴いて、そこで現實に活動してゐる同志たちや大衆に直接に接觸して來なければならない。——から考へては私は、勇み立つて今回の關西遊說の旅程に上ぼつたのであつた。

三

私たちは今回の遊說中に、各地の演說會に於ける光景を通じて、關西地方に於ける勞働者農民無產市民の大衆が、今まさにその堂々たる出現の前夜にある新勞農黨を、如何にはちきれるやうな滿腔の期待を以て熱烈に歡迎しようと用意してゐるかの眞相を、まざ／＼と目のあたりに心ゆくまで見詰めることが出來た。直接に現實の場面に就いて得られたかゝる事實の具體的證明こそは、私たちにとつては、他の何物にもまさつて貴重なる收穫であつた。私たちは殊に、新勞農黨樹立の提案は決して大衆の意志を反映してゐるものでないといふやうなことを千言萬語を以て我々に敎へようと試みてゐる一切の反對聲明が、それを前にして根柢から覆へされて行くのを見た。しかも、かゝる結果が、舊勞農黨時代以來引き續き我々の陣營の全運動の進展の上に於て非常に重要なる役割を演じて來た關西地方の同志たちおよび大衆の間に於て持ち來たされたことによつて、私たちの確信がどれほど强められたことか！　更らに私たちの眼に觸れた反對聲明の或るものは、少くとも全國の戰鬪的勞働者農民大衆は新勞農黨樹立運動を極度に呪つてゐるといふやうな趣旨を書き立てゝゐたが、しかし私たちが見舞つた各地の戰鬪的勞働者農民大衆は、精銳無比の警備隊を組織し、その强力なる援護の下に全運動の効果的な進行を助成したことによつて、斷乎としてさうした妄語に答へた。殊に全國重要工業諸都市の隨一とも見るべき大阪に於ける我々の演說會が、現實に工場から動員されて來た二百三十餘名の勞働者たちから編制された警備隊によつて護られた事實は、優に我々の陣營に對する逆宣傳者流を一擧に蹴飛ばして尙ほ餘りあるものだ。實際それらの屈强なる警備員たちが、甲斐々々しくも隼の如く、三々五々會場を縫うて縱橫に活動しつゝ、彼等の任務を見事に遂行してゐた光景は、我々に向つては一種の悲壯

感をさへ喫つた。私は無限の感謝を以てそれを眺め、何時しか心のうちでひそかに斯う考へてゐる私自身を見出した。『反對派の人々は、よし個人としての提案者たちの頭上にありッたけの惡罵の言葉を積み累ねようとも、提案そのものにかくも熱心に積極的支持の態度を示しつゝあるそれらの戰鬪的勞働者大衆に向つては、後ろ指一つさすことは出來ないであらう』と。

たゞし、前にも記述した通りに、京都、神戸、および大阪に於て、とにかく會場の攪亂を企てた一群の提案反對者たちが現はれたといふことは、多少の程度に私たちの注意を刺激した。もとよりそれは、私たちの豫想以外の何物でもなかつたが、しかもそのことが目のあたりに起つたのを見た時にはさすがに私たちは、言ひやうのない、一種異樣の感じを懷いた。それは、一つには從來反動團體などの襲擊には隨分慣らされて來てゐる私たちではあるが、しかし現在我々と同じく左翼の陣營に屬してゐる人々からあゝした妨害を受けたことは、私たちには全然始めての經驗であつたからでもある。

實際、それらの會場攪亂計畫者たちは、つい先き頃までは、我々とは互に同志と呼びかはしてゐた間柄である。しかるに今や、彼等と我我とは、政治的見解の相違から別々の途を步まなければならないやうになつて來てゐるのである。何といふ急激な變り方だ！　だが、からしたことは、我々が無產階級戰線の上に立つ限り、決して今更らしく珍しがるほどの現象ではなく、今後といへども度々生じて來ないにも限らないものである。だから私たちは、それをどうのからのといふべきではない。

それにしても、彼等の演じた妨害行動が、少くとも外形上、アナ系の集團が好んで用ひ來つた手段と同じ型のものであつたばかりでなく、更らに私たちが今回の遊說中名古屋に行つたときに演說會場外で見た反動團體らしき一群——それは××會員たちだと後に聞いた——の遣り方とも全然一樣であつたといふことは、多少私の心を暗くした。

私はしかし、直ぐ次の如く考へて、氣持を取り直した。すなはち、提案反對派の諸君は、少くともその主義、主張、および理論に於ては、無論アナ系の集團や××會など〻は根本的に立場を異にしてゐるものであり、更らに彼等の鬪爭目標や鬪爭相手が我々のと同じものである以上、彼等が口先きで×××言辭を唱へるだけでなく、いま會場を護つてゐる戰鬪的勞働者農民大衆と同じ樣に、これから先きも現實に鬪爭をつゞけて行く限り、やがては彼等が我々の現在の立場を當面の客觀的狀勢との聯關に於て見て階級的に正しいものとして理解する日が來るであらう。無產階級の進み行く道は複雜多岐であり、かつ紆曲りにも曲りくねつてゐる。で、今日こそ彼等と我々とは別々に相離れて步んでは居るが、しかし他日、道は再び相合して、彼等と我々とがまた新たに溫かく握手する時機が永久に來ないであらうとは、誰れに保證できようぞ！

四

それはそれでいゝにしておいて、尚ほ別に一つの問題がある。さきに私たちが提案を發表した直後に於て一部の反對派のグループが取つた態度は、私たちの甚だ遺憾——私たち自身のためにでなく、彼等のために——としたことであつた。それは無論私たちが、彼等は大局から見て我々と同一の陣營に屬してゐるものだと考へたからのことであつた。私たちはもとより、當面の客觀的狀勢——主體的諸條件の現勢との聯關に於ての——に對する私たちの認識に卽して、私たちが提案中に示した進み方こそが、現在に於て我々の陣營が取るべき唯一の階級的に正しき道であり、更らにまた全國の同志たちおよび大衆もその道に就くことを要求してゐるものとの確信を得たればこそ、敢て不遜の罪を犯してまでも、大膽にもあの提案を發表したのであつた。私たちは無論、私たちの認識や私たちの判斷が常に正鵠を誤まらないものなどゝは、微塵も考へてゐない。さういふ氣違ひじみた考へ方は何時に限らず我々がしてならないことだが、特にあの提案に關しては、その內容が當面の活きた現實問題に觸れてゐるものだけに、私たちの危懼——私たちの不安は、それだけ一層大きかつた。だからこそ私たちは、それが作成されるや否や、卽坐にそれを一齊に全國の同志たちや大衆の前に投げ出して、その寸毫も假借するところなき批判を求めたのである。そして、それが一旦私たちの手を離れて一旦同志たちおよび大衆の討議に附託されてからは、私たちは絕對に靜かに坐して、それに對する審判の下されるのを待つてゐたのだ。そして、私たちには絕對に正しく確信されたその提案の內容といへども、若し同志たちおよび大衆によつて、その間違ひであることが理論的に懇切に指摘證明された上でのことならば、私たちの身が、よしそれがために大地に踏みにじられ泥土に委せられようとも、それは私たちが甘受しなければならない運命であることを、私たちは初めから固く覺悟してゐた。ところが、反對派の諸君が逸早く出した反對聲明の多くのものは、私たちの提案の內容を理論的に克服しようと試みた前に、まづ個人としての提案者たちに向つて、あらゆる惡罵の雨を浴びせかけ、屢ゝ虛構の事實に卽して——私は斷乎としてそれを言ふことを憚らない——人身攻擊をさへ試みたのだ。『裏切り者！』『卑怯者！』『官憲の犬！』『泥沼への轉落！』『白色テラーへの降服！』等々その他無數。彼等は本心からか惡意からかは知らないが提案者たちの心術にまで立ち入つてかくも口汚なく吠え立てたのだ。かうしたことが、我々の×の策謀から出たものならば、私たちはそれを餘りにも當然のことゝ考へたであらう。また、彼等が相當期間私たちと意見を鬪はしてその事實を確めた上、それに應じて兎や角言ひ立てたにしても、私たちは別にそれに對して別に何も言ふ必要を持たなかつたであらう。だが彼等は、何を問ふひまもなく、たゞ一圖に私たちに罵詈雜言の一齊射擊を向けたのだ。かういふことが、今が今まで同志として腕を組んで共に戰つて來

たものに出來ることであらうか？　否！　鬪爭するものにこそ鬪爭するもの丶氣持が解かる筈だ。から考へたとき、私の結論は必然、『彼等が現實に我々と苦難の鬪爭を共にして來たものとは信じられない！』といふことに落ち着くより外に途がなかつたのである。

もとより、彼等の罵辭も、彼等がそれによつて企圖した効果を毫も擧げ得なかつたことは、眼前の事實が充分にそれを證明してゐることであるから、私たちはその點から何事をもいふ必要を持たないがたゞ私たちは斷乎として、彼等がそれによつて示した捨て鉢的な態度が、百パーセント非階級的であることを信ずるが故に、茲で少しくそれを問題とした譯である。

更らにまた反對派の諸君のさうした言動は、皮肉にも新勞農黨を支持する同志たちおよび大衆の熱意を幾倍も高めたやうな、彼等の企圖とは全然反對の効果を齎んだ。それらの同志たちおよび大衆は、反對派の諸君の如く、初めから反對のための反對に出るやうなことはなく、從つて政治的意見の異同を理論的に究明する前に頭から安價な漫罵を放つたやうな眞似をしないで、まづ第一に私たちの提案を大衆的討論の下に置いて自由に胸襟を開いて審議した。私たちは信ずる、か丶る思慮ある態度を以て提案に臨んだ同志たちおよび大衆は、よし結局それに對して理論的に痛烈なる否定的・糺彈的批判を下すことを餘儀なくされたにしたところで、それはそれとして、別に個人としての提案者たちに向つて、少くとも虚構の事實に即する人身攻擊の毒ガスを發射するやうなことなどは決してしなかつたに違ひない。多年雨に嵐に共に手を取つて戰ひ進んで來た同志たちおよび大衆の頼もしさよ！　か丶る信頼すべき人々によつて行はれる階級的裁判の判決にならば、私たちは何時でも無條件的に服從して悔いない用意を持つてゐる。それだけでも私たちには充分に、滿足であるのに更らにそれらの人々が、提案を前に鬪はした自由討議の末に、その趣旨に全幅の贊意を表することによつて、彼等もまた提案者たちと政治的意見を本質的に同じうしてゐるものであることを證明したことを知つたときには、私たちの喜びは必然に二重であつた。

五

言ふまでもなく私たちは、今回の遊說中に各地で持たれた我々の演說會の成功を、無條件的にその外面的盛況によつて測定しようとしてゐるところのものではない。否、私たちは、至るところで我々の演說會に伴つたその外面的盛況が畢竟するに、我々がこの際非常に高く評價する樣々の內面的諸關係の集積的表現であることを知つてゐるが故にこそ、それを我々の演說會の成功の指標として見ようとしてゐるのである。單なる外面的盛況は、我々の眼には一個の無用な贅澤物としてしか映じないのだ。

では、謂ふところの樣々の『內面的諸關係』とは一體何を指してゐるものであるか？

この問題は簡單なる間に合はせの一言で片附けてしまはれるには、餘りに複雑である　それ故に私は、今それを取り上げるに當つて、より外側的な部分から一ト皮づゝ剝いで行つて、最後にその核心を抉くり出す、といつたやうに取り扱ひをしようと思ふ。

まづ第一に、各地で持たれた我々の演說會の外面的盛況を促迫した直接の要因は何であつたか？　それはたゞ聽衆の大群の殺到といふことだけであつたか？　斷じて否！　もとよりこの場合、我々はこの要因を全然度外視することは出來ないが、しかし唯それだけが全部ではなかつた。一般の興行物の開演の場合などには、單に多數の入場者を得たといふことだけで盛況といはれるのが普通であるが、しかし我々が持つ各演說會は、そんなものとは違つて、鬪爭の一形態であり、またその一手段でもあるのだ。それ故に我々の演說會は、單に聽衆の大群がそれに殺到したといふことだけによつて、それが盛況を呈したものとは言へないのだ。さう言へるためには、少くとも、打たば響くやうな緊張味が全場面を支配してゐなければならないのである。

だが、一樣に緊張味といつても、我々の演說會の場合にあつては、興行物の開演の場合に於て見られるが如く、鑑賞の對象に對する好奇心や嘆美心やの滿足もしくは一種の感興といふやうなものから來たものであつては、全然目的から外れてしまふものである。それはまた、普通の學術講演會や政談演說會などで見られるが如く、單に壇上の辯士の雄辯の魅力とか、その談論の技巧とか、その學殖の豐富とか等々によつて惹き起されたものであつても、我々の演說會の場合にあつては、その效果は高々部分的なものにすぎないものとなるのである。

鬪爭の一形態であり、またその一手段でもある我々の演說會に於ける緊張味は何よりも、殊に聽衆の間に鬪爭精神が効果的に激成されれ[illegible]ことから來るものでなければならぬ。さういふ緊張味が全會場を支配してこそ、我々の演說會は始めて盛況を呈したといふことが出來るのでありまた少くともさういふ意味に於て盛況を呈してこそそれは始めて成功したものといふことが出來るのである。

如上の見地から、私たちが、今回の遊說中に各地で持たれた我々の演說會の外面的盛況について語るとき私たちは單に聽衆の大群の殺到といふ一事だけに着眼してゐるものではない。私たちは尙ほそれに加へて、その聽衆の大群の間に充分効果的に激成された鬪爭精神の横溢を見てゐるのであり、更らにそれから生じた會場內の異常の緊張味を見てゐるのである。そして、我々の各演說會は行く先々で、決まつて[illegible]うした意味に於ける外面的盛況を作つたが故に、私たちはそれは非常に成功したと言ふのである。

我々の各演說會に於て聽衆の間に効果的に激成された鬪爭精神の外部的諸表現——嵐の如き拍手、萬雷の如き歡呼、臨監の中止の聲に對する『××！　××！』の抗議、閉會間際の萬歲の唱和、等々——かうした尋常一樣の平凡な事柄については、私は玆で別に何事をも言ふ必要を持たない。たゞ一つ、しかし、聽衆の大群の間に於けるさう

した闘爭精神が、官憲の彈壓的態度と會場攪亂計畫者たちの妨害行動とに對抗して極力會場を護らうとする決意となつて鮮明に表現された一事だけは、私は特に茲でそれを擧げておく義務を感じる。實際私は始終、その光景を涙ぐましい氣持ちで見詰めてゐたのだ。京都で唯一度起つた我々の不覺の大失敗を別にしては、その後の各演說會に於て反對派の妨害行動が持ち上がるたび每に、それは忽ちにして完全に制止されてしまつて、そのあとは全會場が却て、以前よりも嚴肅なる緊張味に包まれて行つた。かうした見事な成果が完全に收穫し得られたのは、無論一部分は我々の誇りである精鋭無比の警備隊の働きによつたものとはいへ、我々は同時にまたそれが熱心なる聽衆の自由意志から出た警備隊への協力に負うたことも決して少くなかつたといふことをも、充分に認めなければならないのである。

おもふに、聽衆が示したかゝる態度――かゝる闘爭精神の表現――は、決して一朝一夕に養はれたものではない。もとより、壇上の辯士――否、闘士――のその場のアジテーションも、直接に、瞬間的に、それを激成することに多くを貢獻したことは言ふまでもないことだが、しかしそれは根本に於ては、舊勞農黨時代以來の我々の陣營の多年の苦難の闘爭の所產でなければならぬ。その多年の苦難の闘爭は、單に我々の陣營內部の幾多の闘士たちを鋼鐵の如くに鍛へ上げたばかりでなく、同時にまた、知らず識らずの間に一般大衆の上にもよき訓練を與へつゝあつたのだ。だから、私たちが我々の演說會に來る聽衆の間に激成されたる闘爭精神の右の如き表現に接したのは、嚴密にいへば決して今回に始まつたことではなく、從來とても一再ならず目擊して來たものである。だが、それは幾度見ても、常に新たに私たちの感激を高潮に導くことを誤まらないものである。

最後に、私たちの今回の遊說中に、特に異常に私の注意を促した一新現象だと私に考へられたことは、演說會場の內外を問はず、私が親しく接觸した勞働者農民大衆の間に、新勞農黨樹立運動をどこまでも自分自身の事として護り立てゝ行かうとする精神が、――更に建設された後の新勞農黨の進路の方向の決定に對して飽くまで意識的に自主的に、積極的に働き掛けようとする意志が、――凄まじき勢を以て生長しつゝある、といふ一事實であつた。尤もかゝる傾向の發生・成長は、既に提案發表後の或る期間に於て多くの勞農諸團體から出された贊成聲明の上にも充分明瞭に讀み取られたものではあるが、しかし私は、今回の遊說中に、私自身が直接にまざ／＼と見た樣々の具體的事實を通じて、それを一層明確に認識することが出來たのだ。そして私は今更らのやうに、間接にそれを文字で讀んだ時と、直接にそれを眼で見た時とを比較して、それが如何に私の感性の上に、その映像の鮮明さの程度を異にして現はれたかを注意しつゝ、非常に愉快に感じた。

私たちは新勞農黨樹立の提案中に、當面の客觀的狀勢との聯關に於て合法政黨の形態を取つた勞働者農民の戰鬪的同盟として出現す

新勞農黨は、その性質および任務から見てその組織形態上あくまで黨内デモクラシーの基礎の上に立つ强力な獨自の指導部を持つたものでなければならないものである、といふ趣旨を特に强調しておいた。更らに提案發表以來、我々の機關紙は、同じ論據から出發して、新勞農黨が向外的に全被壓迫民衆の日常利益と政治的自由獲得とのために大衆的規模に於ける公然の闘爭を効果的に敢行しつゞけて行くためには、それはその實質的基礎を築きあげて行くといふ意味に於て、向内的にどこまでも工場農村に深く廣く根を張つて行かねばならないといふ一點を、反復的に主張して來た。ところが、今回私が久々振りに出門して關西地方の勞働者農民大衆に接するに及んで、私はそれらの大衆が既にさうした一切の理論・一切の主張の精神をしッかりと把握してゐて、しかも上述の通りに、それを一歩々々と實踐の上に移し行きつゝあるのを見た。まことに、必要こそ發明の母である。

勞働者農民大衆が自分たちの政治的組織の上に意識的に、自主的に、積極的に働き掛けようとする能働的意志、およびその普遍化！　これこそは、各地で持たれた我々の演說會の外面的盛況を促迫した内面的諸關係の核心でありその集中點であるものではないか！　そして、さうした事情が現に實在してゐるといふことは、或る意味に於て舊勞農黨時代以來の我々の陣營の多年の苦難の闘爭の成果であると同時に、それは更らにまた、舊勞農黨時代以來の我々の陣營の實證をなして來た勞働者農民の戰闘的同盟の發展形態として出現しようとしてゐる新勞農黨の將來に於ける强力なる活動の展開のための、既に用意された實質的基礎ではないか！

六

勞働者農民の同盟といふ稱呼は、舊勞農黨時代に於て、すでに我々の陣營内の大衆の間に、極めて親しみの深いものになつてゐた。そしてそれに含まれてゐる概念およびその重要なる現實的意義は、當時に於てすでに、それらの大衆によつて、よく把握されてゐた。それは具體的に、舊勞農黨が中心的任務としてゐた全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張とその政治自由の獲得とのための大衆的闘爭との聯關に於て、殊に實踐の上で明確に理解されてゐたのである。卽ち、この大衆的闘爭の遂行に於て、勞働者階級があくまでその主導力として立たなければならないし、また事實上立つてゐるものであるが、しかし同時に、勞働者階級が主導力となつてそれを成功的に、勝利にまで進め得るためには、是非とも農民の參加・協力に須たなければならない。他方、農民が現在因つて以て縛りあげられてゐるところの半封建的搾取の鎖を斷ち切り、更らに土地に對する自分自身の飢渴を最終的に癒やし得るためには何を措いても勞働者階級のみが彼等へ與へ得る支持・援助に頼らなければならない。——と、大體かういつた正しき論據から、勞働者農民の同盟の概念は、舊勞農黨によつて不斷に宣傳され、またそれに對する理解の程度に應じて實踐的に組織および行動の

上に具體化されてゐたものであり、また具體化される努力が拂はれてゐたものでもある。かうした事態は、現在の日本に於て、勞働者農民の同盟を必然不可缺ならしめる實質的基礎が旣に充分に用意されてゐて、唯その組織化を待つばかりの狀態にまでなつて來てゐる事實を、まざ／＼と反映してゐるものである。

舊勞農黨は合法政黨の形態に於て、かゝる意味に於ける勞働者農民の同盟としてその任務を遂行しその鬪爭を進めてゐたものであつた。たゞ當時にあつては、それに對する理解が尙ほ幾分漠然としてゐたものがあり、且つ同黨の組織および活動の方針の上に、今から見れば幾分の缺陷といへるものが尙ほ多量に含まれてゐた結果、同黨はこの方面に於ける强力なる活動の展開の基礎的條件として工場農村に深く廣く根を張ることに充分に成功するに至らずして、その餘りにも短き生涯を終はつたのだ。

かうした關係は、そのまゝ新黨準備會に持ち越され、改訂されようとして竟に改訂されないで過ぎた。

新黨準備會の解散と共に、左翼戰線の全局面が俄然として一變されるや、右の關係もまた、それにつれて根本的に變革されてしまつた。卽ち、その時を契機として、我々の陣營は當時の客觀的狀勢に照應して決然として結黨方針を全部的に放棄し、政治的自由獲得勞農同盟の新形態に移つて行つたのである。

勞農同盟は、その名が示唆する如く、依然として勞働者農民の同盟の實質を持つ鬪爭實體として存續すべきものと規定されはしたが、同時に最早政黨的形態を取るべきものでないと規定され、それから論理の糸を辿つて、獨自の指導部を持たないところの一種のカンパニアの組織であるべきものと規定され、最後にそれに加へて、『鬪爭の過程に於て發展的に解消すべきもの』と規定された。かゝる諸規定は、言ふまでもなくその前後から左翼を風靡し始めたところの、『プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない』といふ理論との聯關に於てなされたものである。

『勞農同盟は鬪爭の過程に於て發展的に解消すべきものだ』といふ理論は、當時の客觀的狀勢の下にあつても、尙ほそれが內包する諸關係に就いて、且つその必然的歸結への見通しの下に於て、また／＼徹底的に論究し拔かれなければならない餘地を充分に存してゐたものであつたが、何にせよ、當時の事態の下に於ては、——尤も今日に於てもそれには大體變はりはないが——さうした種類の問題に對する大衆的討論が完全に封鎖されてゐて、一般的には理論の發展上空前の沈滯狀態が出現してゐた結果、それは左翼陣營に於て、その漠然とした意味に於てのまゝで、殆んど無批判的に受け容れられてゐたのであつた。

だが、理論の發展の問題はどうであれ、事實上の勞農同盟は、二月の下旬ごろから三・四月ごろにかけては、或る程度および範圍に鬪爭を展開してゐたが、しかし四・五月の境を契機として、急に殆んど活

動不能狀態に陥つたのである。それは、四・一六事件を通じて全左翼戰線の上に下された徹底的大打擊の影響のためであつたことは、言ふまでもないことであらう。それ以來勞農同盟は、最早そこかしこでの選擧鬪爭以外には殆んど手も足も出なくなり、しかも選擧鬪爭そのものさへが時と共に段々と困難の度を增して行き、急速にその不可能の限界線にまで迫りつゝあつたやうな有樣であつた。かくて勞農同盟が最初から帶びしめられてゐたカンパニアの組織としてのその任務の遂行は、よし地方的に見て多少の例外はあつたにもせよ、全國的に見れば文句なしに、我々の陣營に於て未だ曾て見られたことのないやうな慘憺たる停頓狀態に移つて行つたのである。それは、勞農同盟がその歷史的任務を遂行しつくしたがためでなくて、最早全然それを遂行することが出來なくなつたためであつた。從つて、勞農同盟そのものに關しては、『發展的に解消』するもしないも、もはや問題でなくなつた。活動の停止するところ、そこに如何なる發展の契機も見出され得るものでない。かゝる狀態の下に於て、勞農同盟は最早、少くともその現形態を一擧に脫却しない限り、發展的に解消するどころでなく、自然的に立ち腐れになるしかなくなつた。かくて今や我々に取つては、勞農同盟の前途への發展の通路の打開のために、何よりも先づ、その形態の轉換策を講ずることが焦眉の急務となるに至つたのだ。そして若し我々が確信してゐる通りに、今こそ勞働者農民の同盟が再び公然の舞臺に躍進して大衆的規模に於ける各種の鬪爭を強力に展開することをその最大の階級的任務とすべきだといふことが眞理だとするならば、勞農同盟のための轉換策は必然に、それをして、當面の客觀的狀勢の下に於て公然と効果的に活動し得しめる形態を具へてゐる勞働者農民の戰鬪的同盟の實體にまでそれを轉化せしめることを中心目的とするものでなければならぬ。

新勞農黨樹立の提案は、そうした中心目的を基準として立てられた勞農同盟のための轉換策――もしくは提案中に用ひられた用語に從すれば『局面打開策』――に關する私案の意味に於て、さきに私たちの手によつて、敢て不遜の譏りをも顧みず、親愛なる全國の同志諸君および大衆の批判の前に獻げられたものであつたのだ。

七

顧みれば、今から約二年半前の春四月に、私が始めて舊勞農黨の使命を帶びて關西地方の大衆に接して以來、私は同地方と東京との間を往復したこと幾度に及んだかを知らない。そしてその間に、私をそこに送つた團體は、幾たびかその名を變へた。それは最初には今言つた舊勞農黨もしくは當時の勞働農民黨であつた。次には新黨準備會であつた。その次には政治的自由獲得勞農同盟であつた。今また私は、新勞農黨組織準備會の名に於て、宣傳のためまたそこにやつて來た。かうした追憶の糸を手繰つてゐると、私は瞬間的に、私の眼前に、その期間に於ける我々の陣營の悲壯な鬪爭の歷史が繪卷物のやうに髣髴と

して展開されて行くのを見る。

更らに想ふ。我々の陣營の名はさういふ風に幾たびも變はつたが、しかしその實體は依然として變らぬ舊勞農黨以來の勞働者農民の戰鬪的同盟である。變つたといへば唯、後に來つたものが常に前に行つたものゝ發展した姿である．といふ一點だけである。そしてそれが、最近の、特に四・一六事件以後の、客觀的狀勢の急激なる變化――主體的諸條件の現勢との聯關に於て――に照應して取らうとしてゐる新形態が、取りも直ほさず、來るべき新勞農黨の姿である。

かくの如く、幾度倒れても直ちに起きあがり、しかも倒れた時に大地から吸收した新しき力を以て、再び起きあがつた時には以前よりも遙かに強く歩武を進めることが出來る不死身の巨漢！ それは我々の陣營の象徴ではないか！ 若し我々が過去の經驗を回想せしめ得る我々の記憶と、現在の具體的事實を目擊せしめ得る我々の眼とに信賴することが出來るならば、我々をして新勞農黨の前途に無限の期待と希望を繋がしめよ！（完）

政界展望台

政友會の將來

馬場恒吾

犬養新總裁

犬養毅氏を總裁に迎へて、政友會は分裂抗爭の時代に入るのではないかと思はれる。犬養を迎へた爲めにさうなると云ふのではなく、今現に分裂抗爭の焰のある處に、犬養を迎へたのは火に油を注ぐ結果にはならぬかと云ふのである。

政友會總裁の詮考に當つて、候補者に數へられたものに、犬養の外に、床次竹二郎、鈴木喜三郎、中橋德五郎の諸氏があつた。鈴木が總裁になれば床次派が分裂すべく、床次が總裁になれば鈴木、中橋が分裂すべき惧れがあつた。此外に表面には現はれなかつたけれども、望月圭介、久原房之助の兩氏も候補者の中に數へられた。此の人々の中の誰れを取つても多少の分裂は免れまいと思はれ、其分裂を避ける唯一つの途として犬養氏を總裁に推した。問題は眞に分裂が避けられたかにある。

現在政友會內部に於ける分離抗爭の情勢は總裁の人選如何に依つて避けられるには餘りに根強き原因から出てゐる。それは或は日本の政黨政治が根底から改革されない限りは無くならない原因とも云へる。即ち政黨內部の親分が子分代議士を自個の私有財産の如く考てゐるからである。

總選擧の時、選擧運動費を出してやる。そして當選した代議士は自分が製造した代議士である。だから己れの所有物だ。他人には指さしをも許さぬ。かうした子分の顔を眺めて親分はニコニコしてゐるのである。同時に他の親分が己れの子分を誘拐しはしまいかと云ふ事に

極度に神經を尖らしてゐる。

經濟的に云ふ所の私有財産制度を否認することは、法律の禁ずるところであるが故に、敢てしないが、代議士の身柄に對する所の親分の私有財産的觀念はどうしても打破しなければならぬ。この議論には誰れも異論はないであらうが、扨事實はとなると、政友會の巨頭はそれぐ＼かうした子分の多きを競つて、互に覇を爭つてゐることは、世間の富豪が各々其財産の多きを爭つてゐるのと少しも異る所がない。今日でも三十名の代議士の子分があれば大臣になれる。子分なければ、如何に優秀な政治家でも大臣になれぬと云はれた。だから政界の巨頭は子分を作らざるを得なかつた。

政黨内部に代議士を私有財産視する氣分が横溢してゐる場合には、さうした私有財産を有たぬものは物の數とも思はれぬ。恰も世間一般の社會では無産者も有産者も人間一人は一人として通用するけれども、有産者仲間の交際に於ては、彼れは幾何の財産を有つかと云ふ事が直ちに問題となる。そして財産の多少に依つて席順が定まる。人は人として評價されずに、其財産によつて評價される。政黨内部の領袖株の評價がそれに似てゐないと、誰れが云はうぞ。

犬養氏にはさうした財産があるか、その點では殆んど無産者である。彼れの革新倶樂部が政友會に合同したとき、彼れは子分十八名かを連れて行つた。「それを世間では犬養が田中に賣つたと云つた。併しそれは酷評であらうと思ふ。元來それらの子分の或者の選擧費は田中から出て居たのではないか。賣つた當人は知らなかつた。併し知る人ぞ知る。金の出所は田中であつたと傳へられてゐる。さうして見れば、犬養は田中の私有財産を預つてゐたので、田中が新店を開くに際して、其財産を取戻した迄である。犬養は金なくしては現代の政黨は遣つて行けないと悲痛な宣言をした。政界の私有財産制の慘酷なる仕打ちを滿喫したとも云へる。

犬養にして若し當年の意氣があるならば、宜ろしく此代議士を私有財産視する制度を打破すべきである。それは有産者のなし得る仕事でなくして、無産者のみがなし得る所ろだ。

何故然らば、政友會巨頭連が犬養を總裁にする事に反對しなかつたかと云へば、さうした子分の競爭に於て、犬養は競爭者ではない。從つて其點に於て犬養を恐れない。殊に今は總選擧が目前に迫つてゐる。其時に際しては、只現金を握つてゐるもの丶みが子分の代議士を作り得る。犬養が幾百萬かの運動資金を作り得べしとは誰れも期待せぬ。從つて巨頭は各自に自分の子分を作る。犬養は演壇を飾る花瓶と同じく、選擧が濟めば物置きに入れて、勝ちは子分を最も多く作り得たもの丶手に歸すると云ふ打算である。

犬養にして眞に政黨首領としての責任を盡くす積りならば、かうした巨頭が個々別々に振り蒔く現金を、一度總裁の手元に納さめしめ、そして候補者には總裁自身の採量に依つて分配すべきだ。さうすれば初めて黨の統制が行はれる。さうでなければ黨は依然として群雄の割

據狀態に置かれて、總裁は只傍觀者の役を勤めるのみになる。

犬養總裁を承認した巨頭連は彼等自身の私有財産を捨てる意志もなく、從つて分裂抗爭の意志をも捨てない。只犬養が彼等の競爭者でない事に信頼したのみである。

如何にして金のなき犬養に金を持たしめるか。自分の子分の世話をするに急なる床次、鈴木、中橋、久原等は、黨の選擧費用として、彼等の軍資金を總裁に提供するものとは思へない。總裁お手元金は別途に作らねばならぬ。

それは舊政友會生へ抜きの幹部が持ち寄りで作るより外はない。兩山本、小泉などの人々がそれをするのである。昔し自由黨の黨首板垣は金無しの總裁であつた。黨費は其部下が持ち寄つた。却つてそれが自由黨をして果敢なる戰鬪をなし得さしめた。其氣分を復活せんとするのが、彼等の所謂政友會更生である。

此話しは犬養の總裁が決定する前からあつた。森幹事長が犬養に總裁就任を求めに、湯河原に往つたとき。犬養が即座に承諾したのは蓋し此間の消息を知つてゐたからであらう。

犬養を暫定總裁と云つたは田中が死ぬる前の事であつた。今は暫定ではなく、恒久的な總裁として推されたのである。所ろで總裁候補を以て自任したる巨頭連は矢張犬養は實質的に暫定だと思つてゐる。そして犬養をば暫らく、彼等自身の野心を掩ひかくす所のカムフラーヂに役立つものと思つてゐる。

竝に犬養は鬪爭する目標は何であるかを示されてゐる。そして彼に鬪爭の資力が與へられる。

殊に犬養の性格はかゝる戰いを鬪ふに最も適してゐる。彼れの過去五十年の政治家としての經歴を見れば、彼れは外に向つて鬪はふよりは、內に向つて鬪ふのが得意であつた。彼は藩閥官僚と戰ふと宣言してゐた。然し寺內內閣の外交調査會に入り、山本權兵衛第二次內閣に入つた事を見ると、必ずしも薩長と手を握らないでもない。內に向つては改進黨以來の同志とは大抵一度や二度は鬪つた。大石正巳、尾崎行雄、河野廣中、島田三郎、關直彦など何れも犬養の政黨運動の犧牲になつた。犬養は黨を大きくするよりは、寧ろ小さくする名人だと云ふ經歴を有してゐる。

田中の遺産たる政友會に採つて、何よりも必要なは清黨運動だ。犬養の辛辣な皮肉、痛快なる毒舌が、眞實に政友會と國家の爲めに有益に使用される時期が來たのである。それで清黨運動が効を奏すれば、喜ぶのは政友會計りでなく、民政黨も喜び、國民も喜ぶ。

次ぎの總選擧

軍人が戰爭を好む如く、代議士は選擧を好む。これは人類の鬪爭心と云ふ本能的なものだ。殊に戰爭が勝てさうな場合には殊に鬪爭心が昂ぶる。その時非戰論を唱へたり、非解散論を唱へると忽ち卑怯者に

せられて了う。

安達内務大臣は民政黨は二百五十名を取つて見せると豪語してゐる。民政黨でない連中でも、或はさうなるかもしれぬとあきらめてゐる。かゝる時節であるが故に、民政黨の闘志盛なる事は當るべからずである。次ぎの議會に政府が挑戰的態度に出るは明白だ。

賣られた喧嘩なら、買はなければならない。政友會は如何に負け戰と知つても戰ふであらう。が併し茲に一つの問題が横はつてゐる。恰かも大蛇が道に横はつた如くに。それは金解禁の問題である。

金解禁に關して、悲觀、樂觀、種々の說が唱へられる。併しそれは悉く假りにかうなつたらと云ふ豫想である。畢竟するに行つて見なければ判らない事に屬する。

假りに最惡の場合を想像しても、吾々はそれが何んだと云ひ度い事柄である。財産家の財産が少しばかり評價を減ぜられやうとも、國民の大多數は失ふべき何物をも有たぬ。何日迄も頭の上に大きな石を吊るされて、『今落すぞ、今落すぞ』と脅かされるよりは、一日も早く落して、其結果がよくとも、惡くとも、其所を出發點として前進するに限る。然るに政府はさうしない。財界動搖の爲めに、政權を奪取せられた記憶がまた新らしく彼等の胸に殘つてゐるからである。

政友會に一つの議論が起りつゝある。それは金解禁は政友會も贊成だ。どうせ行らなければならぬ事なら、早く片付けた方がよい。これは政爭を超越して、濱口内閣を助けてやらう。政爭は一時中止しやうと。

かうして政友會に休戰を申込まるれば、政府は翔し探しである。金解禁は無事に行ひ度い。同時に議會をも解散したい。一つは國の爲めだ。一つは黨の爲めだ。其何れを取るかに迷うであらう。

尤も總選擧も全く國の爲めにならぬとは云へぬ。田中總裁時代に作られたる所の、政友會の不自然の多數を打破して、日本の議會を健全なる基礎の上に立て直ほす。それが金解禁よりも大切だとも云へる。併しそれは解散に依らずとも、犬養新總裁の內部闘爭乃至清黨運動に依つても同じ結果が得られる。總選擧來るや否や、其前に政友會の分裂抗爭時代が始まるや否や、今後の政界は亂を好むもの丶目には、興味の盡きる暇がないであらう。

政友會全面の疑獄

政界には地獄の業火が燃へてゐる。吾々はそれを見まいとして顔をそむけるけれども、疑獄は何の方面にもある。見まいとしても、見ざるを得ない狀態である。

前に司法大臣、鐵道大臣であつた小川平吉氏が收監されたのは氣の毒だ。彼れは政友會總裁の候補者として最も有力な人であつた。若し彼れが金を取つたとすれば、政黨總裁たる資本を作らんとする爲めであつたであらう。彼れを收監するに際して、政府は陛下に奏上して勅裁を得たのである。若し彼れが無罪にでもならば、政府の責任問題が

起る。それは政府も承知してゐる事であるから、彼れを收監する前には何か確かな證據を握つたのであらう。先つさう想像するより外はない。

賞勳局の天岡總裁の事件は事柄は重大であるけれども、今迄に發表された處では政治的の意味が少なく、個人的な利慾が濃厚に働いてゐる。今後もし發展するとしたら、それが政治的になるであらう。

ダンテが地獄廻りをした時の如く、呻めくが如き、訴ふるが如き聲が、何處からともなく聞へて來る。

曰く、彼奴は引張れるぞ、あんな小さな金を諸方から取つては必ず引懸る。儂はそんな小さな口には手を觸れぬ。だから大丈夫だと、かう云ふのはまだ收監されない某前大臣である。小盜罪せられて、大盜免かる云ふ事を自慢してゐる。其良心と共に常識が麻痺してゐる。

曰く、金は取りました。其金は何處へも逃りません。なくなつたのは、途中で落したのです。何故屆けないかて、それを屆けやうと思つてゐるうち、つい忙がしくて忘れてゐました。其内に收監されたので、其儘になつてゐますと、其落したと云ふ金の高が百萬圓にもならう。百萬圓は百圓札を積んで五尺位の高さになる。（尤もこれは推定的に計算したのである）。それ丈けの分量の札束を落したと云ふのも非常識だ。

實業家で疑はれるのは大抵自分で自分の罪を無意識に振れて廻るからだ。或實業家は某大官（名を擧げて）はまだ引張られませんかと、政府の機密を知つてゐる方面にしきりに聞いて步るく。其大官が引張られると自分も危險だと云ふ事を言外に現はしてゐる。さうして疑惑中の人物になる。

甚だしきになると、私が某大官に貸した金は僅か五千圓ですと、皆んなに廣告して步るく、それは五千圓は貸したのであつて、賄賂ではないと云ふ意味である。將來自分が拘引された場合を想像して、豫め自分の行動を辯明して置く積りである。河豚を食つた後に、毒の回るのは今か今かと待つてゐるやうな恐怖狀態に居る。かうした場合の實業家は、個人や勞働者に對するときの實業家とは全く別人の觀がある。

豫審調書が全部發表されると、今政黨總裁にならうと思つてゐるものゝ中にも、少しづゝの飛沫を受けてゐるものがあるかもしれない。尤も司法大臣が參酌して、公訴事件に直接の關係なき豫審調書は之を發表せぬとしたら、其人達は矢張涼しい顏をしてゐる事が出來る。

田中總裁の死は狹心症であつたに違いない。併し政黨に於ける彼れの股肱、政府に於ける彼れの部下がかうした事件に引懸つた事が彼れに無限の煩悶を與へた。そして此煩悶が彼れの死を速めなかつたとは、誰れも斷言出來ない。

疑獄は現世の地獄だ。そして政界全部が地獄だと云ふは、果して事實を誇張した言葉であらうか、政友會の將來は疑獄の發展如何に依つて影響されるが、豈それ政友會のみならんや。吾々は政黨全部と、既成社會の支柱とが、業火の洗禮を浴びる日に直面してゐるのである。

經濟時評

金解禁の時期と其の前後

杉山幹

大正七年以來、十餘年間に亙り、金輸出禁止と云ふ、特殊の經濟的環境の下に置かれたわが國の經濟界は、今や濱口內閣によつて、金の解禁と云ふ大外科的手術を行はれんとしつゝある。濱口內閣は、この手術を行ふの準備として、公私經濟の大緊縮整理を高唱し、既に本年度實行豫算の削減を行ひ、更に明年度豫算の編成もこの緊縮方針を以てなさんと云ふて居る。現內閣の緊縮政策の內容に就ては、世上種々なる論評も行はれて居るが、金解禁の急に迫られて居るわが財界の局面打開策として、現內閣が公私經濟の緊縮整理の方針をとりたる事は當然の處置として識者の一般に認むるところで、且、この政策をとりたる結果、わが財界に及ぼしつゝある影響は、大體に於て順調に展開しつゝありと云ふてもよからう。

◇

◇

金解禁の準備としては、何と云ふても貿易狀態を改善して、國際貸借の均衡を保ち、解禁後に於る正貨の流出を防ぐことは大切である。この點より見て、近來わが國の貿易は大體順調の經路を辿つて居るのは喜ぶべきことである。即ち、濱口內閣が消費節約の宣傳を行つた影響もあつて、輸入は比較的減退の趨勢を示し、輸出は増加の歩調を保つて居る。本年一月以來九月に至るわが國の輸出貿易は、十六億[illegible]千三百萬圓であつて、前年同期に比し、一億四千八百萬圓の増加である。一方、同期間の輸入は、十七億五千八百萬圓であつて、前年同期に比し、これまた約一億圓の増加であるが、入超額は前年同期よりも四千八百萬圓を減じて居る。しかも、貿易の內容を見れば、輸入品中減退したるは、主として國民の消費節約の結果と見らるべきもの多くこれに反し諸原料品の輸入額は、前年同期よりも著しき増加を示しつ

つあるは、わが國の財界が漸次堅實なる方向にむかひつゝあることを示すものと云ふ事が出來やう。尤も近來のわが貿易の好況なるは、對支貿易が一時支那の日貨排斥のために甚しく不況であつた反動として對支輸出が激増した事、並に金解禁を氣構えて米國を始めとし、支那その他のわが國品の販路地に於て思惑買の行はれつゝあること、等によるところもあれば、必ずしも今日の情勢を以て、前途をトする事は早計である。

現に、財界の一部には、本年の出超期は十月を以て終りとし、十一月頃より入超期に入るにあらずやと觀測するものさへある程である。けれども、これ等悲觀材料を考慮しても、本年のわが貿易入超額は、（朝鮮、臺灣の入超一億圓を加へ）二億四五千萬圓を出でまいとは一般の觀測するところである。果して然らば、貿易による國際貸借の改善は、約四五千萬圓に上るものと云ふことが出來る。

◇　◇

貿易以外のわが國際貸借の受取超過額は幾何に達すべきかは、世上の觀測區々なるも、假に大藏省當局の云ふが如く、一億五千萬圓程度に上るものとせば、これに輸出入貿易の評價差額約五千萬圓を加ふれば本年のわが國の國際貸借の純支拂勘定は四五千萬圓となる譯である。この點から見れば、わが國の國際貸借は未だ均衡を失してゐると見ねばならぬ。從つて、金解禁後の金の流出を防ぎ、金本位の維持確立を期せんがためには、更にわが輸出貿易の發展を圖り、入超額の減退を期すると共に、貿易外受取勘定の増加を圖るが爲に、海運その他わが國民の海外發展を企圖するの急に迫られて居るものと云ふべきである。

◇　◇

濱口内閣の成立以來、わが對外爲替は漸騰の趨勢を示し、對米爲替は約三ヶ月間に約四弗昂騰し、今や四十八弗を突破せんとして居る。この爲替回復の原因は、前記の如きわが國際貸借の改善に基くところもとより大なるものあるべきも、金解禁の近く斷行さるゝべきを想し、内外の思惑の致すところも亦少からざるは、何人も認むるところである。この點に就ては、井上藏相の如きも「今日のわが對外爲替相場は、わが財界の實勢より對米爲替に於て約一弗位高きに失して居る」と云ふて居る程である。今後、この爲替の高勢は如何なる經路を辿るかは、政府の方針と内外經濟界の情勢によつて支配さるゝのであるから、俄に豫測する事は困難なるも、現内閣の方針にして變らず、内外財界の現狀が持續せらるゝならば、わが對外爲替は漸騰を續け、遠からざる將來に於て平價に近づくべきは一般の認むるところである。

◇　◇

こゝに於て、わが財界の一部には、政府は明年度豫算の編成を終りたる頃、金の解禁を斷行するであらうとの觀測が行はるるに至つた。政黨者のなすところ、もとより論理を以て判斷し難ければ、或は前記

の豫想は實現さるゝことなしと云ふべからざるも、濱口首相並に井上藏相が組閣以來各所に於て聲明したる金解禁の方針を裏切ることなくんば、本年內に解禁を斷行するが如きはあり得ざる事である。井上藏相は、爲替相場の急激なる昂騰は、財界に打擊を與ふること大なりとして、從來金解禁の卽時斷行に反對し、且、單に爲替相場のみが平價に近附いてもそれが思惑によるところ大なれば解禁は不能であると云ふて居る。しかも、井上氏は前記の如く、現在の爲替相場の昂騰は必ずしもわが國の實勢に卽したものでない事も認めて居る筈である。されば、假にわが對米爲替が今後二三ヶ月間に四十九弗臺に囘復しても直ちに金の解禁を斷行する事は井上氏としては爲し得ざる筈である。少くとも爲替相場が平價に近づいて後、相當期間安定を保ち、井上氏の所謂思惑による囘復にあらざる事を突止めた上でなければ既行し得ぬ筈である。されば、井上氏にして前言を重んずるならば、年內に金の解禁を斷行する事は不可能と見ねばならぬ。

◇　◇

現內閣の當局が從來聲明した金解禁の方針から見て此處二三ヶ月間に解禁困難の事情あるばかりでなく、內外財界の現狀はわが國の金解禁の斷行上、大いに考慮しなければならぬ事は數多ある。金の解禁に際し最も考慮すべきは、解禁後正貨が急激に國外に流出する事なきや否やである。この點に於て、前記の國際貸借の改善は解禁準備として最も大切な譯であるが、この外に內外金利の相異から資金の流出を見ることなきやを注意せねばならぬ。わが國の金融界は地理的に世界の中心市場と隔在し、歐米諸邦の如く國際間の金利の相異から國內資金の流動を見ること甚しからざるも、近年わが金融界にもその傾向漸く顯著になりつゝある今日であるから、この點を全く閑却する事は出來ぬ。しかるに、わが國の金融界の現狀は連年の不景氣と、金融恐慌後の資金偏在の結果、未曾有の金融緩漫の狀態なる一方、米英兩國の金利は近來著しく昂騰し、紐育市場の如きわが市場金利より遙かに高位にあるの現狀である。英米の金利昂騰の趨勢が我國の金解禁後の正貨流出の上に全く無關係であるとは何人も斷言する事は出來まい。われ等は內外金利の現狀に於て、金を解禁すればこれが爲に多額の正貨流出を見るべしとは思はざるも、內外金利の開きが更に增大すれば、正貨の流出を誘ふことなしと安心することは出來ぬ。井上藏相は、內外金利關係からわが國の資金が國外に流出するのは、主として海外に於るわが國の公社債類の買入の徑路を辿るだらうとの觀測をなして居る樣である。內外金利の開きが今日の程度なれば、或は井上氏の觀測どほりであるかも知れぬ。否、寧ろこの方面に對する國內資金の流出すら、海外市場に浮動邦債の少い現狀に於ては、懸念する程の事はなからうと思ふ。けれども、英米の金利が更に昂騰すれば、前記の本邦公社債類ばかりではなく、米國の大藏省證券、倫敦の貿易手形、コール等從來餘りわが國の資本家が投資しなかつた方面に對しても、資金の流出を誘ふことになるかも知れぬ。のみならず、わが國の民間會社が

従來英米に於て借入れたる高利債を內地債に借換えを行ふ事に至るかも知れぬ。この外、金解禁直後、正貨の流出を誘ふのは圓價の回復を見越して金解禁前に、圓の思惑買をなしゐたる資金が、解禁と同時に流出するものである。先年片岡藏相時代金解禁の噂ありたる際、この種の圓思惑は一億圓以上に上つて居つたと傳へられて居る。今日この種の思惑は幾何の金額に上るか、何人も確知する事は困難であるけれども、最低に見積つても五千萬圓を下るまいとの觀測は有力である。果してしからば、今日金の解禁を行はゞ、少くともこの種の資金は國外に流出するを覺悟せねばならぬ。

◇　◇

ふゝる、內外金利の相異によつて生ずる國內資金の流動に備へ、調節するの方策は、わが國の金利政策である。卽ち、外國の金利が高い爲に、わが國內の資金が流出するの恐れある際に、日本銀行の金利を引上げて之を抑制するのである。けれども、金融恐慌後生じた資金偏在に依る日銀の統制力失墜は、舊態依然として今日に及び、日銀が金利を引上げても市場の金利がこれに追隨せざる現狀を以て進まば、金利政策を有効に行ふ事は頗る至難と云はねばならぬ。英國の如きは金解禁の前後に於て、常にこの金利政策を以て資金の流動を調節したのであるが、わが政府はこの點に就て未だ何等の金解禁の準備を進め居らざる觀あるは甚だ不安に堪えざるところである。

◇　◇

金解禁後の正貨流出を防ぐの方法として海外市場にクレヂットを設定すべしとの說もある。英國も解禁に際し米國市場にこれを設定した。けれども、クレヂットの設定は、萬一の用意又は內外の人心に安心を與ふる爲にするなれば有効なるべきも、はじめよりこれによつて國際貸借の決濟をなさんとして設定するなれば、その效果は極めて少く、寧ろわれ等は正貨の流出を自然に委せ、爲替の自然的調節を行はしめた方が、國民經濟の堅實なる發達を圖るの道であると思ふ。

◇　◇

濱口內閣は、金の解禁を當面の主政策として標榜し、輿論の支持を受けつゝあるが、金の解禁は單にこれを斷行するは必ずしも難事ではない。解禁の前後に處するの策を誤まらず、以つてこの難關を打開し解禁後の金本位維持を容易ならしめ、且つ金解禁に伴ふて生ずる財界の打擊例へば失業者の續出等に處して機宜の策を誤らず、國民經濟の堅實なる發達を期するは頗る至難のことである。前記の如く內外の形勢は金の解禁後我が財界に惡影響を及ぼすの恐れある事項多々あるを以つて政府はこれに處するの策を講ずるの急務なるは言を俟たざる所である。金解禁を標榜した濱口內閣の運命は解禁斷行の成績によつて決せられねばならぬ。從つて政府與黨の間に昂まりつゝありと云ふ、金の解禁を政略的に早く解決すべしと云ふが如きは、無責任の甚だしきものであつて、我等は濱口首相の聲明せる如く金の解禁問題は飽くまでも經濟的に解決せんことを勸告せざるを得ない。(四・一〇・九)

東京市財政の過去現在將來

田中廣太郎

一

近時東京市の財政は一體何うであるのか、又何うなるのであらうかが能く人の話柄になるやうである。蓋し東京市は我が帝都であるのに、それが今や財政的破綻に瀕さうとしてゐることが屡ゝ新聞紙等に報道せられるからであらう。

扨東京市の財政は過去に於てどうであつたのであらうか。今それから初めて現在將來に渉る市財政三世物語を少しく試みやう。

扨東京市の過去といつたからとて太田道灌や徳川家康の往昔にまで溯らうとするのではない。明治二十一年四月十七日市町村制が公布せられ、東京市が特別市制とは稱しながら更に角新時代の一自治團體として構成せられたときから調べて見ると、明治二十二年度の歳出總額は僅に八二五、一二二圓に過ぎなかつたのである。固より當時と今日との間には格段なる貨幣價値の相違がある。それを超越してその數字をそのまゝ拉し來つて云爲するのは少しく時代錯誤の感がないでもないが、そうしたむづかしい理窟を拔きにして今日の各都市の豫算と比較して見るに昭和三年度の豫算に依れば大分市が八〇二、一七三圓別府市が八〇七、九九三圓であるからそれよりは稍多く、山形市は八八九、七九九圓、高崎市は八七〇、八九九圓であるから東京市よりは大なる數字の豫算を持つてゐるといふやうなことになるのである。何しろ當時の東京市には今日見るが如き各種の施設も公企業もなかつたことは事實である。即ち其の費額の内譯を檢して見ると左の如くであつた。

區費	一〇八、一九三円
土木費	六〇一、五九六
衛生費	三、四九六
市債費	一、〇二〇
積立金	四〇、六七五
公園墓地費	九、一五二
社會事業費	四、七五六
財産費	五、三九二
養育院費	一、七九四
水道事業費	三四、八三四
其他	一四、二二四

明治三十一年十月一日に東京市の特別市制は撤廢せられ、從來市長助役を置かないで市長の職務は府知事が行ひ、助役の職務は府書記官が兼ね、市參事會は府知事、書記官及名譽職參事會員が組織してゐた制は玆になくなつて全く普通一般の市のやうになつたのであるが、其の完全自治體となつた明治三十一年度の市の歳出額は如何であつたかと云へば三、四五九、〇六四圓、昭和三年度の各都市の豫算で見れば恰度札幌市（三、四五九、四六七圓）、新潟市（三、五八九、一八七圓）と似通つたやうな數字であつたのである。

二

爾來星移り物變つて明治四十四年八月には市內の路面電車と其の兼營の電氣供給事業とを六千四百五十八萬餘圓で買收し以て自ら之を經營することになつたといふやうな一大事業の伸展のあつた外、上下兩水道や、保健衞生設備や、教育施設、社會事業や、市場、公園、墓地、道路橋梁や、將た又河港の設備等各般の施設の經營――それは都會生活をより愉快ならしめ、又は密集生活より生ずる害悪を除去するに必要なる公企業や公共施設の經營を日に進め月に擴げて、遂に今日の如き尨大なる都市經濟となつて仕舞つたのである。

今昭和四年度の當初豫算總額を見るに三〇八、六七九、〇二六圓である。全國都市の昭和三年度豫算總額は七四五、八〇八、二三八圓であるが、東京、京都、大阪、橫濱、神戶及名古屋の六大都市の歳出は六億四百萬圓で全國都市歳出の約八割にも達して居り、東京市の歳出は其の六大都市歳出の半ばに近いといふ有樣なのである。それ故に大業に云へば全國都市財政の狀勢を壓倒的に支配するものは六大都市である。隨つて都市歳出の色彩は略ぼ六大都市に依つて左右され、而かも六大都市中の五大都市が束になつて初めて東京一市と對抗することが出來るのである。

然らば東京市三億有餘萬圓の歳出の內容如何と謂ふに、普通經濟の外左の十八特別會計から成立つてゐるのである。

普通會計	八四、五一九、〇七八円
水道會計	一九、三〇三、〇九六
公衆食堂費會計	九六七、八五六
貸屋會計	八七四、三一四
勞働賃金立替及就職旅費貸付資金會計	二、〇三七、六九六
公債償還金會計	四五、八九三、一九一
職員貸付資金會計	四一四、〇五六
火災共濟金會計	一、一六〇、二四三
用品及工場會計	七、七七六、二四一
復興建築貸付資金會計	四、七六六、八一二
土地區畫整理清算金會計	一四、二〇五、八六〇
養育院會計	六八五、四〇七
電氣軌道事業費會計	四七、四四〇、九五八
電氣供給事業費會計	一三、〇八〇、七六五
乘合自動車事業費會計	五、九一七、四三一

高速度鐵道事業費會計	一六、一一七、五〇〇
電氣事業減債金會計	三四、五八二、六〇四
電氣事業工場勘定及貯藏物品費會計	八、六二二、八〇〇
電氣研究所費會計	三一三、一一八

而して此の中の普通經濟の内容を分解して見て上述の特別會計の費目と合せると、それで東京市が今如何なる事務又は事業に如何なる程度で費用を投じてゐるかゞ略ぼ判るから今普通經濟中の主なる費目だけを擧げて見ると左の如くである。

歳出經常部	
市役所費	一、九三四、八六二円
區役所費	二、一六二、四八一
學事諸費	六、四九二、八八六
道路費	六、五五八、八六二
塵芥掃除費	一、五九三、八八一
河港費	六二二、〇八三
下水道費	九〇七、四八九
療養所費	五八七、三三四
特別給與金	九三四、一一〇
雜支出	五四三、九三六
普通臨時部	
補助金	二、〇三二、六七六
市債費	三、九九五、一四八
繼續費	
隅田川口改良費	二、六三〇、四四二
都市計畫事業街路修築費	三、六一三、九五一
中央卸賣市場分場建設費	一、七九一、〇二六
街路修築並土地整理費	一六、〇四六、三五二
帝都復興費	一五、九八三、二九二
震災復舊費（中等學校建設費等）	四、八六六、四〇三

三

市歳出の增大に隨つて市民の負擔も增加するのは自然の數である。明治二十二年度の市税總額は六〇五、九七一圓で一戸當は二圓、一人當は四十四錢であつたものが、明治三十一年度には市税總額一、一〇八、二五六圓、一戸當三圓五十錢、一人當七十七錢に增し、更に大正七年度乃至大正十一年度の間には一躍五倍も躍進して昭和四年度には二〇、五八九、六八八圓、一戸當四十二圓二十六錢、一人當九圓三十八錢となつて仕舞つたのである。

轉じて市債は如何と見るに明治二十二年度末の市債總額は僅に四十[illegible]八百圓に過ぎなかつたが、明治三十一年度末には六百十六萬圓となり、今や此の八月末現在に於て五一三、四八〇、六六三圓となつてゐる。其の内容を見るに、

普通經濟	二二二、六六〇、五〇五円
水道經濟	五二、五八七、〇五四
電氣經濟	二一一、八七〇、九一五

明治三十一年十月一日に東京市の特別市制は撤廢せられ、從來市長助役を置かないで市長の職務は府知事が行ひ、助役の職務は府書記官が兼ね、市參事會は府知事、書記官及名譽職參事會員が組織してゐた制は玆になくなつて全く普通一般の市のやうになつたのであるが、其の完全自治體となつた明治三十一年度の市の歲出額は如何であつたかと云へば三、四五九、〇六四圓、昭和三年度の各都市の豫算で見れば恰度札幌市(三、四五九、四六七圓)、新潟市(三、五八九、一八七圓)と似通つたやうな數字であつたのである。

二

爾來星移り物變つて明治四十四年八月には市內の路面電車と其の兼營の電氣供給事業とを六千四百五十八萬餘圓で買收し以て自ら之を經營することになつたといふやうな一大事業の伸展のあつた外、上下兩水道や、保健衞生設備や、敎育施設、社會事業や、市場、公園、墓地、道路橋梁や、將た又河港の設備等各般の施設の經營——それは都會生活をより愉快ならしめ、又は密集生活より生ずる害悪を除去するに必要なる公企業や公共施設の經營を日に進め月に擴げて、遂に今日の如き老大なる都市經濟となつて仕舞つたのである。

今昭和四年度の當初豫算總額を見るに三〇八、六七九、〇二六圓である。全國都市の昭和三年度豫算總額は七四五、八〇八、二三八圓であるが、東京、京都、大阪、橫濱、神戶及名古屋の六大都市の歲出は六億四百萬圓で全國都市歲出の約八割にも達して居り、東京市の歲出は其の六大都市歲出の半ばに邇いといふ有樣なのである。それ故に大業に云へば全國都市財政の狀勢を壓倒的に支配するものは六大都市である、隨つて都市歲出の色彩は略ぼ六大都市に依つて左右され、而かも六大都市中の五大都市が束になつて初めて東京一市と對抗することが出來るのである。

拟然らば東京市三億有餘萬圓の歲出の內容如何と謂ふに、普通經濟の外左の十八特別會計から成立つてゐるのである。

普通會計	八四、五一九、〇七八円
水道會計	一九、三〇三、〇九六
公衆食堂費會計	九六七、八五六
貸屋會計	八七四、三一四
勞働賃金立替及就職旅費貸付資金會計	二、〇三七、六九六
公債償還金會計	四五、八九三、一九一
職員貸付資金會計	四一四、〇五六
火災共濟金會計	一、一六〇、二四三
用品及工場會計	七、七七六、二四一
復興建築貸付資金會計	四、七六六、八一二
土地區劃整理淸算金會計	一四、二〇五、八六〇
養育院會計	六八五、四〇七
電氣軌道事業費會計	四七、四四〇、九五八
電氣供給事業費會計	一三、〇八〇、七六五
乘合自動車事業費會計	五、九一七、四三一

高速度鐵道事業費會計	一六、一一七、五〇〇
電氣事業減債金會計	三四、五八二、六〇四
電氣事業工場勘定及貯藏物品費會計	八、六二二、八〇〇
電氣研究所費會計	三一三、一一八

而して此の中の普通經濟の內容を分解して見て上述の特別會計の費目と合せると、それで東京市が今如何なる事務又は事業に如何なる程度で費用を投じてゐるかゞ略ぼ判るから今普通經濟中の主なる費目だけを擧げて見ると左の如くである。

歲出經常部	
市役所費	一、九三四、八六二円
區役所費	二、一六二、四八一
學事諸費	六、四九二、八八六
道路費	六、五五八、八六三
塵芥掃除費	一、五九三、八八一
河港費	六二二、〇八三
下水道費	九〇七、四八九
救療所費	五八七、三三四
特別給與金	九三四、一一〇
雜支出	五四三、九三六
普通臨時部	
補助金	二、〇三二、六七六
市債費	三、九九五、一四八
繼續費	
隅田川口改良費	二、六三〇、四四二
都市計畫事業街路修築費	三、六一三、九五一
中央卸賣市場分場建設費	一、七九一、〇二六
街路修築並土地整理費	一六、〇四六、三五二
帝都復興費	一五、九八三、二九二
震災復舊費(中等學校建設費等)	四、八六六、四〇三

三

市歲出の增大に隨つて市民の負擔も增加するのは自然の數である。明治二十二年度の市稅總額は六〇五、九七一圓で一戶當は二圓、一人當は四十四錢であつたものが、明治三十一年度には市稅總額一、一〇八、二五六圓、一戶當三圓五十錢、一人當七十七錢に增し、更に大正七年度乃至大正十一年度の間には一躍五倍も躍進して昭和四年度には二〇、五八九、六八八圓、一戶當四十二圓二十六錢、一人當九圓[illegible]八錢となつて仕舞つたのである。

轉じて市債は如何と見るに明治二十二年度末の市債總額は僅に四[illegible]八百圓に過ぎなかつたが、明治三十一年度末には六百十六萬圓となり、今や此の八月末現在に於て五一三、四八〇、六六三圓となつてゐる。其の內容を見るに、

普通經濟	二二二、六六〇、五〇五円
水道經濟	五二、五八七、〇五四
電氣經濟	二一一、八七〇、九一五

轉貸債　　二六、三六二、一九〇

此の中で外債は總額一億六千八百七十萬圓弱である。而して其の外既に起債することの豫定が確定的となつてゐるものを合せれば、市債額は實に九億三千四百有餘圓に達せむとしてゐるのである。斯樣に大きな市債を背負つてゐるから今後數十年間は巨額の市債償還を行はなければならぬことになつてゐて、普通經濟に於ては年に千六百萬圓乃至二千百萬圓宛、又電氣經濟に於ては年に二千萬圓乃至三千五百萬圓も償還を行はなければならないといふやうな狀況に在る。

然し之と同時に東京市の財産も殖えて來て、昭和三年度末の財産評價總額五六一、六六三、〇八八圓の多きに上つてゐる。

四

以上で大體東京が自治體として生れ出てから今日に至る迄の財政史中の數字の主要なるものを記し盡した。顧れば東京市の財政は其の規模に於ても又市民の負擔としても隨分進展し增大した譯であるが、其の伸暢は大體順調に行はれ財政的難局に立つたといふが如きことはなかつた。處が此度は寔に財政的危機に逢着したと謂はなければならぬ事態に陷つて仕舞つたのである。尤も特別會計は電氣經濟を除くの外皆自給自足の狀態に在るから別に心配することはないが、普通經濟と電氣經濟とは實際非常なる苦境に立つてゐるのである。

電氣軌道經濟に於ては震災の爲めに千二百餘萬圓の資金を燒盡し、震災直後の應急施設並復興復舊等に七千餘萬圓の經費を投じなければならなくなり、其の財源の殆ど全部は之を公債に需むるの外なきに至つたので今後の元利支拂の負擔は巨大であるのに、他面其の乘車料收入は震災後の戶口の異動、省線電車の貫通や自動車の發達と一般財界の不況等に原因して年一年と減收を續けてゐる有樣である。今如何にして此の局面を打開すべきかは當局の苦心慘憺たる處であるが、その事は別の機會に述べることゝし玆には專ら普通經濟のことを敍するに止めたい。

五

普通經濟は何が故に爾かく窮迫狀態に在るのであるか、其の原因は之を索ねる迄もなく大正十二年關野の大地を搖り動かした大地震であつて、之に加ふるに一般的の財界不振が窮迫の程度を、一層高めたのである。

「人みなのたのしび生きし都はも見渡す限り燒野なりけり」。大厦高樓立並びし帝都は一朝にして焦土と化し又いつの日にか更生しやうとまで一時は思はれたけれど、不撓不屈の我國民性は一瞬の後失望を勇猛心に代へて忽ち復興の大事業に着手したのである。政府と東京市が帝都復興の爲め投ずることゝした費用の總額は約八億であるが、其の中市の分を揭げると左の通りである。

事業ノ種別	事業費總額	財源						
		國庫補助金	市債				繰入金及一般市費	其他
			國庫借入金	預金部借入金	公募債	計		
帝都復興事業費	一三三、九一九、八三四円	四五、九五八、六四九円	—	一、五〇〇、〇〇〇円	八六、四六二、一八五円	八七、九六二、一八五円	—	—
街路修築並土地整理費	一七六、〇六二、九九四	九八、七〇四、三三九	四七、〇七七、八〇〇円	一八、六六六、〇〇〇	一、六四四、三三〇	六七、三八七、三四〇	九、九七一、三一五円（電氣軌道事業費ヨリ）	—
震災復舊費歳入缺陥補塡	三二、八〇七、一五五	—	二四、二三一、三〇〇	一、一四三、〇〇〇	一、七六八、八四〇	二七、一四三、一四〇	四、一〇九、九四六（一般市費）	府補助金 九九六、七五〇円 寄附金 五三〇、八五三 補償金 二六、四六五
震災應急施設費	一五、六四九、六〇〇	—	二、二〇九、七〇〇	一三、四三九、九〇〇	—	一五、六四九、六〇〇	—	—
計	三五八、四三九、五八三	一四四、六六二、九八八	七三、五一八、〇〇〇	三四、七四八、九〇〇	八九、八七四、三六五	一九八、一四一、二六五	一四、〇八一、二六一	一、五五四、〇六八

右の如く震災の爲め市は三億五千有餘萬圓の巨費を要し其の中約半ばに近い國庫補助金を受け得たけれども約二億圓の負債をすることゝなつた。之れが爲め差當り事業期間中は左程の苦しみもなかつたけれど、復興事業玆に終了を告げむとし其の償還期も本年度より開始することゝなつて見れば、其の償還年額實に一〇、九九八、八六〇圓乃至一四、九三七、七五〇圓といふたやうな巨大の額であることが昭和三十三年度迄も續く計算になつてゐるのである。

而して復興事業の竣成に伴つて其の施設の維持管理費の増加することも財政上看過し難き事實である。今國に於て執行しつゝある復興事業が完成すれば之を東京市に引繼ぐことになるのであるが、之に市が執行する復興事業とを併せて見れば道路の新増設面積九十七萬坪、橋梁の新設二百八十三、大小公園五十四、下水道線路の延長増加百二十九萬尺（約百里）、汚水處水場一、喞筒場五、運河五萬四千坪、中央市場一、市立病院五、塵芥處理工場三、區役所十二、託兒場並兒童健康相談所十四、公衆食堂十、質屋七、簡易宿泊所十、公衆浴場二、職業紹介所十二、授産場七等の新造となり、之が爲め市の經常費の増加が昭和五年度は四年度に比し二百數十萬圓を増すやうな計算となつてゐる。

其の外、國に於て執行した復興事業費に對し東京市は分擔金を出さねばならぬことの定めとなつてゐるが、之を負擔することゝなれば其の總額約一億二千萬圓程度になり、之を三十箇年に均分納附するとしても年額四百萬圓に上るのである。

六

翻つて歳入の狀況はどうかと見れば震災の直前大正十一年度の市稅收入決算額は二千三百三十二萬圓であつて、同年度の豫算二千百三十

五萬圓に比し百九十萬圓の自然增收があつたやうな譯であるから震災前の本市財政は餘裕綽々たるものであつた。然るに一朝大震火災に逢ふや急轉直下して十二年度の稅收入は千八十萬圓に激減し、翌十三年度には稍々回復して千六百五十八萬圓となつたが、爾來財界の不況と相俟つて千七百萬圓乃至千八百萬圓內外の間を往來し、昨昭和三年度の如きは却つて減少して千六百八十餘萬圓を收入したに過ぎない。此の實績から考へれば昭和四年度の市稅實收は豫算額（二千五十八萬圓）より約二百萬圓以上は減收となるべき虞がある。

震災後の收入減は獨り市稅のみに止まらない。市有地の如き目下市が抱有してゐる收益財產たるものの總評定價格は八千六百有餘萬圓に上つてゐるが、之は仲々思ふやうに賣れないが爲め容易に現金にはならず、唯徒に市將來の財的潛勢力を表示するに止まつてゐる。斯くして今や歲入缺陷は千七百萬圓に達し支拂資金の調達に少からず困難を感じてゐるのである。

玆に於て東京市財政の根本的樹直しが市の最大重要問題となつて市來前市長の如き一應財政計畫案なるものが樹立された。それに依れば國庫及預金部借入金の元金は總て之を十年間据置き、利子は政府より免除して貰ふか又は補給を受けることとし、復興事業費分擔金の納付は之を免除してもらふこととし、而して新增稅六百十五萬圓を敢行して當面の急に應ずると同時に新規事業として路面改良事業以下一億千九百餘萬圓の事業を行ふ計畫としてあつた。然るに不幸にして市來市長の政府に對する要望は大藏省より一蹴されて仕舞つたので、本年度ははや市が一時借入金までして震災復舊復興事業の爲めの負債の利子仕拂を行ふの餘儀なきに陷り益々市財政は窮迫の極に達したのである。此時偶々市長の更迭となつたのであるが新市長も亦固より此財政的危機を脫するの急務なるを認め新財政計畫案を樹立して政府と市會との兩方面の諒解を求めつゝあるのである。其の財政計畫案は前市長の案に比すれば健實性を持たしめることに努力してゐるのである。市來案に依れば實際とれもしない市稅收入を恰も收納し得るかのやうに見積つてそれで新規事業公債の償還財源にしてゐるが、市の財政整理を爲すに當つて此の如き不確實なる計畫に據ることは不誠意の甚しきものであるので、市稅收入の如きも昭和四年度の實際に徵し明かに收納し得る見込の確實なる處を基礎として計畫を樹ててある。それ故に堀切案は市來案の如くに華かではない。けれども凡そ破產に瀕せむとする經濟の樹直しにさう華かな賜物入のやうな案があるべき筈ものではないであらう。

七

堀切案に依れば國庫借入金の元利並復興事業分擔金は共に全部國から免除を受け、公債公募及預金部借入金の元金は一般收入を以て償還し、利子の大部分は國庫の補給を受けむとするものであるから昭和五年度に於ては政府から合計約千六百萬圓の援助を受けやうとするので

ある。

而して歳入缺陥千七百萬圓は一時之を起債して補塡し之を十年間に償還せむとするのである。それが爲め年額二百三十萬圓を要するが之と復興事業の完成に伴ふ維持管理費の增加額（昭和五年度に於ては約二百八十六萬圓）及市税の減收年額二百萬圓並預金部借入金の元金償還額（昭和五年度は約四十萬圓）合計七百五十餘萬圓の財源を要することゝなるのに對し、經費の緊縮整理で百二十餘萬圓を捻出し、殘額六百三十餘萬圓を新增税に依り支辨しやうとするのである。世間では或は此の新財政計畫案に於て新規事業の全然計上されてゐないのを以て東京市の如き日進月歩の都市を殺すものであると酷評してゐるが、此の計畫案は一應此際新規事業は之を勘考の中に入れることを見合す意味であつて、將來新規事業は絶對に否認するといふのではない。他日政府の財政緊縮政策及非募債政策が緩和され、而して一般財界も景氣が回復し更に新增税に堪へ、或は自然增收が豫想以上に出て、或は又土地の賣却等税外收入に於て增收を計り得る見込が十分立てば其の時には帝都として必要又は有用なる事業又は施設を行はうといふのであつて、現市長が其の第二段の企畫を爲し得る時機は蓋し遠からざる中に到達するであらうことを期することが出來るものと確信してゐる。

然らば東京市財政の將來や如何に！　東京市は果して財政的に「あかるき明日」を持つことが出來るであらうか。先づ第一は政府が財政的援助がどの程度まで得られるか。第二に市會がどの程度まで新增税を認めるかに懸つてゐる。

而して之が理事者の豫期し希望した程度まで行つた處で更に將來は如何といふに、昭和三十三年度迄は震災復興復舊事業公債の元利金支拂の爲約千百萬圓以上を市に於て負擔しなければならず、其の負債償還を全く完濟するには昭和三十六年まで要するのである。それ故に市民の負擔が今日以上に當分輕減せられるやうな時機は到來しないであらう。然し又廣く全國都市の負擔狀態を通觀すると昭和三年度全國都市の市税一人宛平均額は九圓十五錢餘であり、又昭和四年度に於ける六大都市の市税一人當は京都市が十一圓十六錢、大阪市が九圓四十七錢、横濱市が九圓十八錢、神戸市が十二圓四十二錢、名古屋市が七圓十一錢であつて、東京市は既述のやうに一人宛九圓二十八錢である。而して東京市は全國都市に比しても、將た又六大都市に較べても、一人當の富の程度が全國都市の何れにも劣つてゐるといふ程ではないから、負擔の程度に於ても東京市民は特に重いとは稱し難いであらう

他日此の震災の創痍が癒へ、且一般財界の景氣が恢復する秋が來つたならば、東京市は其の財力を充實して各種の新規施設も新規企業も之を企畫施行し、以て光彩陸離たる都市としての活動を爲すこととなるであらう。

斯く考へて見れば「明るい明日」がある譯である。

知らず、果して欣求淨土の念を懐いて市の未來に嘱望し得られるであらうか。

東京市の多產制限

目ざましい進步の眞意義

堺利彥

曾てサンガア夫人が、新マルサス主義の產兒制限論を振かざして日本にやつて來た時、この神聖なる仁道國には、同夫人に對する上陸禁止問題まで起つた。然るに今や、その日本國の首都たる東京市に於いて、白上助役安井社會局長等が大熱心で、「市內八個所の健康相談所」に『多產制限相談係』を設く事になつた。何といふ目ざましい進步だらう。

一體、ナゼ從來、人口制限が反對されたのか。××は多數の××を必要とする。資本家は多數の、賃金の安い、そして屢々失業に甘んずる、勞働者を必要とする。そこで支配階級は、何とか斯とかして、人口制限の傾向を阻止しようとした。それが一面には法律となり、一面には道德論となつて現はれた。

元來、支配階級は、貧乏といふ社會現象に對する自己の責任を廻避する爲に、マルサスの人口論などを歡迎した。曰く、人間に貧乏といふ事のあるのは、畢竟、食物が不足するからだ。文明の進步は食物の產出を增加させるけれども、人口の增加率は食物の增加率よりも大いに高い。だから貧乏を救濟するには人が銘々節制して餘り多く子を產まない樣にする外はないと。この說に依ると、貧乏人が子澤山で貧乏するのは、自業自得である。金持にも、資本家にも、政府にも、その責任はないといふ事になる。誠に好都合な學說である。

所が、更に新マルサス說といふものが現はれた。成るほど、多產は貧乏の原因に相違ない。然し性慾は節制しきれるものでない。だから避姙法を普及させるのが一番だ。健全な有効な避姙の方法を多數の人に敎へさへすれば、貧乏といふ現象は社會から一掃される。そこで彼等は熱心にこの新マルサス主義を宣傳した。サンガー夫人は卽ちその宣傳の使徒であつた。

支配階級は驚いた。舊マルサス主義は自分等の責任を解除してくれて、そして實際には只だ節制を說いたのだから善かつた。節制は幾ら說いても實行が無くて、そして自分等の責任は解除される。こんな結構な事はない。所が新マルサス主義は、それを本氣に考へて實行の避姙法を說きだした。舊マルサスは貧乏の存在を是認したが、新マルサス主義は貧乏の除去を計畫してゐる。支配階級は頗るそれを持てあました。

　そこで彼等は避姙罪惡論を歡迎した。支配階級に歡迎される學者や道德家や宗教家が、續々と現出した。曰く、姙娠分娩は婦人の天職である。婦人がこの天職業を怠れば人類が滅亡する。婦人が子を產む事を厭がる樣な思想は、言語道斷な危險思想である。

　こうなつて見ると、貧乏人は實にまごついた。子澤山の貧乏はお前達の自業自得だ、とお叱りを受けるから、成るほどそうだと思つて、成るべく子を產まない樣にしようとすれば、今度は又、子を產まないのに不道德だとお叱りを受ける。一體、どちらの說に從へば善いのか。然しその、彼等がまごつきながら依然として子澤山の現狀を續ける所に、支配階級の××が存して居たのである。

　つまり支配階級は、二種の學者を使つて、或時は貧乏自業自得說を唱道させ、或時は避姙不道德說を說法させ、時に應じて其の反對した二種の學說を出したり引込めたりさせながら、その間に本當の、自分等の××を×して居たのである。そこで貧乏人が、その二種の學者達の註文に從はうとすれば、結局、貧乏人は子供を澤山產んで、益々貧乏して、そしてそれを自業自得とアキラメて、何んにも不平を云はないのが一番だといふ事になるのであつた。

　そこにサンガア夫人がやつて來たのだから支配階級の間に上陸禁止問題が起つたのも當然であつた。我々から見れば、避姙奬勵一本槍で貧乏除去の大目的が達せられるとは考へられないこと勿論であるが、然し支配階級としては、スワ一大事と騷ぎだしたのも、相當無理のない次第であつた。

　然るに社會の形勢は又漸く一變した。殊に最近、失業者の大增加が餘りの重荷になつて來た。マルサス主義の學說くらゐで支配階級の責任が解除されなくなつた。支配階級は何とかして、曲りなりにでも、多少その問題を解決しないでは、自分達の××と面目が保てなくなつて來た。それほど失業者の數が多大となり、それほど彼等の貧乏の程度が甚だしくなり、それほど彼等の××と、××と××が、强烈になつて來たのである。そこで支配階級、及びその附屬者は、種々の方法と形態と理論を以て、大急ぎで多少の失業對策を講じて居るのである。それが爲には、曾ての上陸禁止などは忘れた樣な顏をして、サンガー說に隨喜渇仰するほどの醜たらくである。

　これが即ち、東京市の『多產制限相談所』の『目ざましい進步』の眞意義である。資本家は今でも、賃金の安い勞働者を必要とするに相違ないが、それは差當り、不足を感じないだけ有り餘つて居る。資本家は又、失業に甘んずる勞働者を必要とするに相違ないが、勞働者が××××、××××××じないと見れば、資本家も多少の方法を講じないでは居られないのである。××も同じく、失業者の多數必要ではあるけれども、それは今の所××の傾向である。

マルクス＝エンゲルス全集 第八卷

剩餘價値學說史 第一卷

第十二回配本
十一月初旬

マルクス經濟學說の精華たる剩餘價値學說史第一卷出づ。

マルクス＝エンゲルスの歿後、此の二巨人の學說の祖述者たるカール・カウツキーによつて整理され一九〇四、五、十年に涉つて公にされたものは、正に剩餘價値學說史全三卷であつた。その中の第一卷たる本書が、在來の諸經濟學說に對する批判に於て價値學說史上に占むる價値に就ては今更呶々の辯を要しない。本書の邦譯によつて讀者はマルクス價値說の眞髓を把握すべきである。

（目次一斑）

第一篇 重農主義者とその二三の先行者及び同時代の人々＝第一章より第十四章まで。
第二篇 アダム・スミスと生産的勞働の旣念＝第一章より第五章まで。
附錄＝生産的勞働の概念。

剩餘價値學說史第三卷は本全集第十一卷として配本濟

東京市芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二番

¥1.50

少しも無駄がない

毎朝の髭剃にバレーを使へば研いて剃る迄唯の五分間
時間がかゝらず手間が省ける、シカモ一枚の刄が半年
保つから費用は僅かで少しも無駄がない

＊　＊　＊

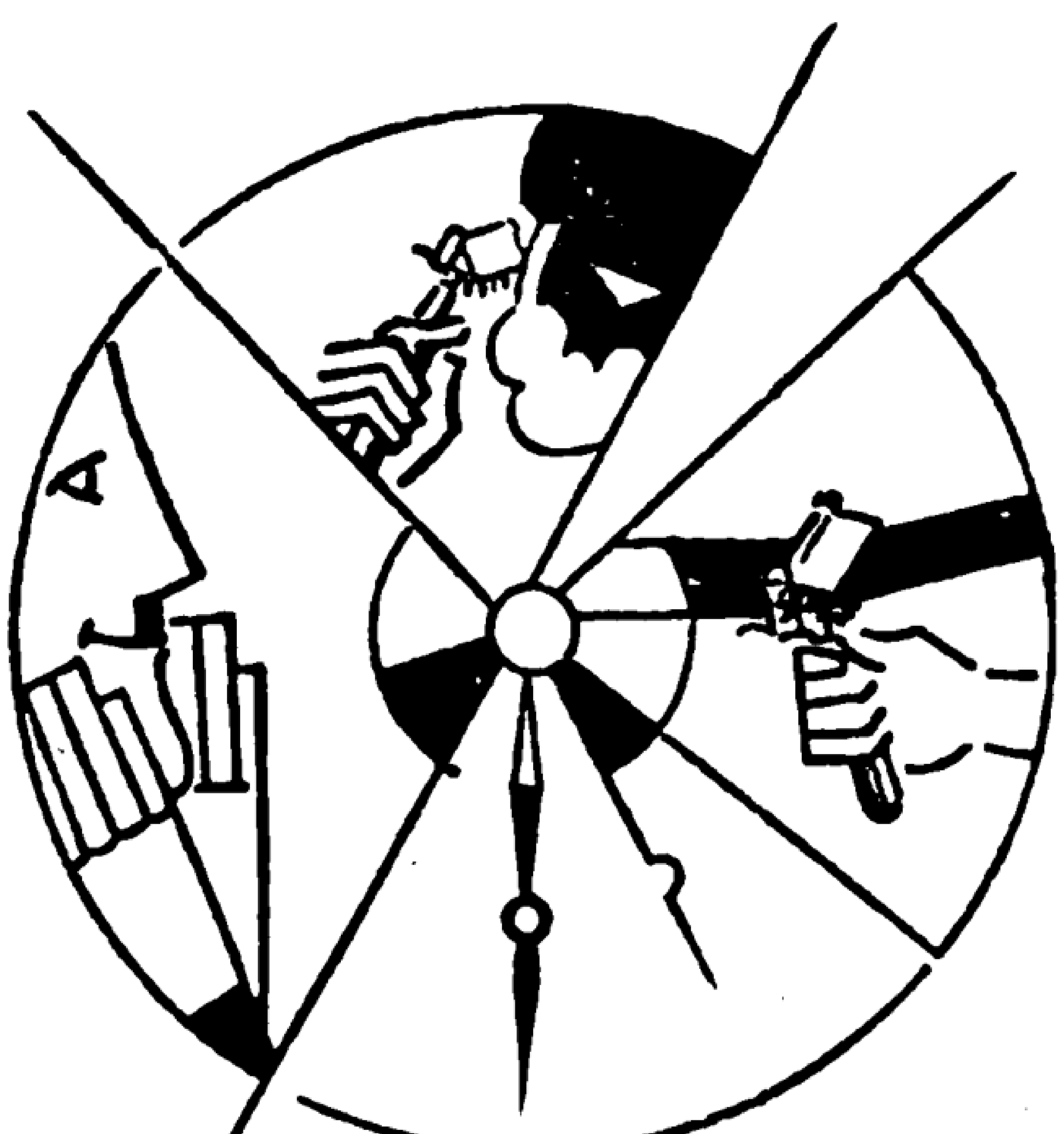
剃刀で研器を兼ねる

バレー自働研安全剃刀

"VALET" Auto Strop Safety Razor

B型　一三・五〇　以上各種
C型　一・五〇　二・〇〇　三・三〇　四・八〇
替刄利用ナイフ（刄一枚付）　・九〇

販賣所　大百貨店著名洋物雜貨金物店等
取次所　改造社代理部



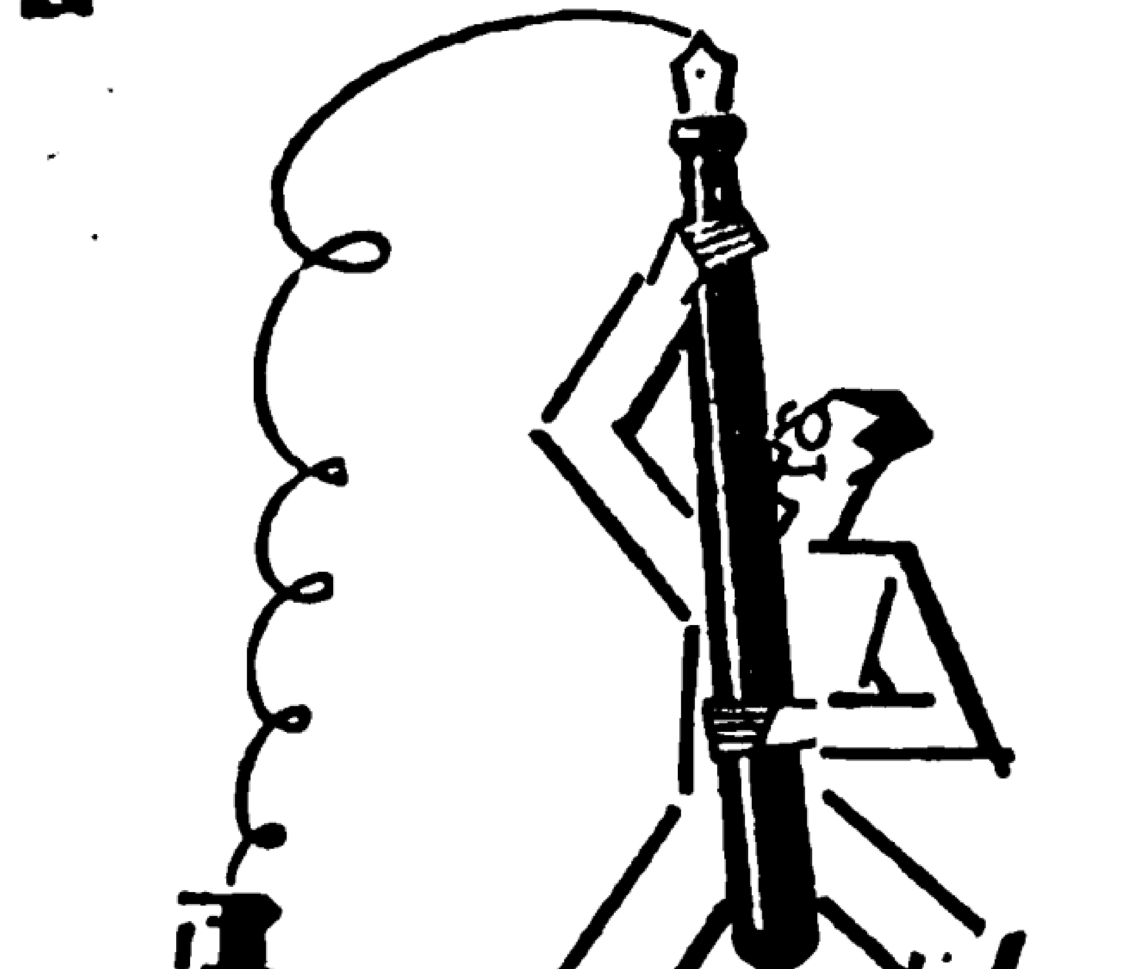
Onoto the Pen

驚嘆すべき耐久力

オノトペンの尖端には驚嘆すべき耐久力がある
アテナインキを適宜に補給すれば天空を快走する如く
縱横無碍一氣に數千語が書上られる

使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆　七圓五拾錢以上
アテナ萬年筆　參圓五拾錢以上
萬年筆用アテナインキ　參拾五錢
送料各十八錢（カタログ進呈）



東京日本橋通

丸善株式會社

大阪　神戸　京都　名古屋
横濱　福岡　仙臺　札幌

東京＝神田・芝三田・早稲田・丸ビル

現代疑獄物語

白柳秀湖

一　概説

明治、大正、昭和と順次に目星しい政治的疑獄の跡を追つて考へて見たゞけでも、過去六十年間、此國を支配した權力の中心が、時代につれて如何に推移して居るかといふことがよく分る。

勿論、茲に、政治的疑獄といふのは、その事件が如何ほどか中央の政局に關係があるものをいふので、坂本龍馬下手人事件、廣澤參議暗殺事件のやうに被害者の人物が大きくても、事件が、全然刑事疑獄として終つたものや、相馬家事件、瀧江田家事件のやうにお家騷動として終つたものは別に考へたい。

明治初年の政治的疑獄事件には、薩閥と長閥との政權爭奪から互に間諜を放つてその罪惡を爬羅し、不正を訐發し合つた形跡の歷然たるものがあり、其間に國民の反閥族的感情や、政黨者流の爲にする所ある宣傳が加はつて、事件を彌怪奇にし、條理を益複雜にして居ることも殆ど疑ひを容れるの餘地がない。國會開設後は事件が多く政黨政派の利權に關し、その特に東京府會、東京市會に關する疑獄の多かつたのは、東京市の消費力が、最も確實にして且つ最も安全なる營利若しくは放資の對象として各派の勢力扶植の目標となつたからであらう。大正以後二大政黨對立の形勢が成ると、薩長の爭ひはその形を變へて三井系對三菱系二大資本閥の爭鬪となり、延いて日本國中の有らゆる對立的勢力を驅つて兩者の孰れかに左袒させなければ措かぬ勢となつて來た。さうして内閣の變る每に、三井畑と三菱畑とから交々疑獄の犧牲を出すやうになつて來た。

先づ明治前半期に於ける薩長兩藩閥の暗鬪時代から見てかゝることとしよう。此時代に於ける疑獄の代表的なものとしては、山城屋事件（明治四年）小野組轉籍事件（明治六年）井上馨尾去澤銅山事件（明治六年）三谷三九郎水油事件（明治六年）藤田組僞札事件（明治十二年）の五つを擧ぐべきであらう。その中で山城屋和助事件は疑獄とまでは行かなかつたが後の三谷三九郎水油事件の伏線としてその概要を紹介して行くこととする。

て、之を消極的に解してゐると見て差支ない。美濃部博士の說く所に從へば、『豫算（の議定）は支出の承認であつて支出の命令ではなく、豫算定額を節約することは、政府の完全な自由である』（帝國大學新聞、九月十六日所載「實行豫算編成と議會の權限」）。又、政治的責任の有無の問題としても、政策を異にする內閣の更迭した以上は、前內閣の提出し、その與黨の力に依つて通過した豫算をその儘遂行し得ないことは明白で、假令これに大規模の變改が加へられたとしても、それは止むを得ない處置とされてゐる。これまでの所では問題はない。

ただ、今回の實行豫算の編成に就いて、新聞紙の論調や學者の議論に於いて、遺憾なり又は不穩當なりとせられてゐる點は、この「實行豫算」の編成が、議會政治立憲政治の本義から見て、臨時議會の召集を行はず、政府の專權を以て行れた所にある。所が、この點に就ても、現在の政府が議會に於いて少數黨であり、且つ臨時議會の招集を行ふことに就ては政治上の情勢を顧慮せねばならず、又臨時議會の招集は議會の解散を伴ふ趨勢にある等種々なる周圍の事情からして、現政府が之を通常議會に讓つたことをも亦止むを得ざるものと是認する議論もある。かくて、結局この「實行豫算」の論爭からして、何が積極的な結論として得られたかを反省して見ると、そこに何物も見出されなかつたと云ふ觀があるのである。

議會政治又は立憲政治の本義から見て、今回の「實行豫算」の編成とその執行とが、臨時議會を招集せずして獨り政府の專權を以てなされたことが、何故に權利の濫用若しくは政治上不穩當なりとせられるのであるか。この點は、序ながら、今少しく吟味をして置く必要がある。再び前陳の美濃部博士の議論を窺ふに、曰く『豫算は、その法律上の性質においては、唯經費の支出の承認であるけれども、政治上からいへば、明かに事業計畫の性質を帶びて居る。政府がある事業の遂行を必要なりと認めて、その經費の承認を議會に要求し、議會が豫算によつてこれを承認したとすれば、假令法律上からいつて議會はその事業の遂行を政府に要求したものでなく、唯その經費を承認したに過ぎないとしても、經費を承認したことは、實質においては事業を承認したことであり、從つてここに事業の計畫が豫定せられたものとなり、政府は政治上の德義として、その承認を得た事業を遂行すべき責任あるものといはねばならぬ』と（前陳論文、但し圏點は筆者の附したもの）。博士は更にこれを別の言ひ方に於いて說いて曰く『法律上からいへば議會が豫算に協算するのは、決して事業に協贊するのではなく、唯經費を承認するだけであるから、その事業を中止したとしても、議會の議決に反するのではなく、改めてその議決を求むべきものでもない。唯政治的道德の問題としては、議會が經費を承認するのは、その事業を必要とするからこそこれを承認するのであり、隨つて經費の承認は暗默には事業の必要を認むることの意思表示を包含するものと見ることを得べく、從つてその事業を中止することは、議會の暗默の意思には反するものとなることは免れない』と（同上、圏點は同じく筆

者の附したもの）。

美濃部博士の所論には、我々の思索を要求する甚だ暗示に富める箇所がある。若し、その箇所を仔細に吟味して見るならば、或は筆者が當面の問題として本文に於いて論及せんとする國家豫算の統制問題に對して、又それに關する政府對議會の立場に對して、一道の光明を點じ、そこから現代日本の有する議會政治、及び豫算制度の缺陷に就て建設的な立法上の改革が示唆されるのではないかと思ふ。即ち議會の經費の承認が實質上事業を承認したことであり、從つてそれは暗默には事業の必要を認むることの意思表示を包含したものである、とするならば、その承認や意思表示が何等法律上の効果を伴ふものでなく、之を無視しても政治道德上明確なる責任の追求に由なき現狀は、確かに制度の不備と言はなければならない。若し又、それが不備ではないと云ふならば、その法律上の効果を伴うてはならぬ、又明確なる政治上の責任を生ぜしむる必要なし、と云ふ他の事情からする積極的の理由を示さなくてはならぬであらう。何れにしても、こは單に臨時議會の招集と云ふ事によつて解決される單なる政治問題ではないと考へる。況してや、臨時議會の招集の有無は、他に斟酌標準すべき政情の存在によつてその是非が考慮されると云ふ現狀に於いてをや。問題はもつと制度上根本的であつて、臨時議會に限らず、總て如何なる形式なるを問はず、議會そのものゝ意思が、豫算制度に對してより明白に法律上も政治上も反映し、その意思に反する場合には一定の法律上及び政治上の効果を伴ひ、それ以外は効果はないと云ふ風に明白にされる仕組みが要求されねばならぬものと思ふ。即ち一定の限界に於いて事理の明白なるやう期待される制度の實現が急務なのであつて、その限界の廣狹何れなるかも決し兼ねるやうな曖昧な論爭が發生する事態が好ましくないのではあるまいか。

三

從來、議會の豫算に對する立場は、歳入豫算に重きを置いた爲めに、歳出豫算に對する關係は消極的なるを免れなかつた。歳入豫算は直接國民の負擔に影響する所大なるを以て國民の代表が之に重を置くは當然であるが、歳入の主たる源泉である所の租税に就ては別に法律に依る定めがあるから、歳入豫算に對するものとしては税外收入のみであつて國民代表の協贊の役割は比較的小さいと見なければならぬ。寧ろ歳出豫算に就てこそ、豫算協贊權の重大なる内容が存在するのである。然るに、何れの國に於ても、議會制度の初期に於ては、この方面の法律又は慣行に不備が多く、議會は多く歳出額の支出承認を與ふる權能又は慣行しか有たぬのが常態である。

この支出承認のみの權能と雖も、政府が超然的官僚内閣である場合には極めて政治上有効に活用されたのである。即ち議會の多數黨は多く政府反對黨であるが故に、出來る丈けその支出承認の額を切り下げることに努め、政府の事業を抑止し、節約の効果を擧げることが出

來た譯である。即ち議會の權能は單に支出額の承認に止まつても、その承認が可及的緊縮的に行はれたが故に、豫算の統制として有効に活用され得たのである。然し乍ら、かやうな政府對議會の關係は本來好ましからざる態様に置かれたものであるから、その統制は合理的根據を缺き、往々にして抑止的禁止的な結果となり、政府の政策及び事務は停頓澁滯せざるを得ない。

之に代つて發達した政黨内閣の時代に入ると、議會の多數黨は通常政府の與黨であるが故に、政府と議會とは歳出豫算の内容に對して大體同一の見解に立てるものである。往年政府の政策が放漫に流れざるやう不斷の監視を行ひ、可及的その支出額の小なるやう緊縮節約を要望した議會は、今や一變して政府の費用支出の原動力を成すに至つたのである。議會の多數を占むる政府黨は、自黨の利益となるやうな政策とそれに伴ふ支出を要求して止まない。寧ろ政府の方が、一國全體の財政能力を見渡し、それを責任を以て處理しなければならぬ地位に在るから、自己の與黨の要求と雖も輕々しく受け容れないと云ふ立場に立つて、議會を牽制しなければならぬと云ふ珍現象を呈してゐるのである。かやうな事態に在つて議會が事實上その多數黨によつて決定する支出最高額の承認と云ふことは、明白に政府の事業計畫に對する承認—寧ろ裏書きと云ふべきであらう—であると共に、豫算の統制手段としては全く無意義なものと化してゐるのである。故に、今回のやうに、議會の形勢に何等の變化もなく、ただ政府が突然他の方面の事情から更迭すれば、反對黨たる小數黨の内閣が朝に立つことになり、それの編成した實行豫算が、議會の多數黨の反對と憤慨とを買ふのは明白な事理である。なぜならそれは議會の與へた意思表示を無視し、その利益を企つて編成された豫算を編成し更へすものであるからである。

そこで、ここに重大な問題が生ずるのである。一方に於いて議會の承認が明に政府の事業計畫への裏書きであり、その意思表示が自己の利益の爲めに企る事業計畫への贊成であるとするならば、他方に於いて政府の更迭によつてその事業計畫たる政策の變化が又當然であり、それに伴ふ實行豫算の編成が如何に大規模に行はれようとも法律上違法でなく、政治上容認されるとするならば、政府と議會との兩者の意思は如何にして兩立するものであらうか。臨時議會の招集によつて、議會そのものゝ變化を齎らす事が手取り早い一方法に違ひないが、それを強制する制度を設けない限り、或は又政府をして常に議會の多數を即時行ふことを有利なりと考へしむる政情の存在を前提としない限り、この矛盾した意思に對する調和の道は制度上は考へられないではないか。

ここに筆者の敢て借問せんと欲する所は、この矛盾を或る程度まで打開し得る制度の立法的改革が行はれ得ないか否かの問題である。それは、既に述べたる如く、政黨内閣の時代になつても依然として官僚内閣の時代の如く、議會をして國家豫算の統制者として何等效果なき

權能――それは寧ろ豫算膨脹の權能である――のみを賦與し、眞に國家豫算の實質的合理的統制を行ひ得る餘地を少しも殘して居らない制度に對する批判の必要である。換言すれば、政府の政策又は事業計畫そのものに對して金錢上の支出を承認するに對して、議會の多數黨のみならず、少數黨の意思をも反映せしむる制度を設けこの制度を通うして政府の事業計畫の實質に或る程度の批評とそれに基く變更を與へしむるならば、政府の提出豫算の內容には議會の意思が政府の政策と衝突しない範圍に於いて加はることゝなる。さうすれば、議會の豫算議定權の性質は、飽くまで單なる支出承認に止まり、それ以上を出ないとするも、政府と議會との間には今日よりは今少しく密接な協力が存在することになり、政府の變更があつても、重大な政策上の變化を伴はない限り、議會の意思は政府によつて尊重せられるであらう。かやうな仕組みは、既に業に晩近各國に於いて實現又は考慮されてゐる所であつて、我國に於いても今回のやうな問題の發生した機會に於いて考慮すべき一問題ではあるまいか。

四

惟ふに、國家豫算の實質上の決定は、政府に依つて爲されてゐる場合と、議院殊に下院に依つて爲されてゐる場合と、この兩者の協力の下に爲されてゐる場合等三つがあり得る。英國の例は第一の場合に屬し、第二の例は曾つて米國に於いて採用せられた所である。同じデモクラシーの國でも、三權分立の制度を採らない議院政治の國にとつては、第一の例に依るのが豫算制度の性質上好ましい。從つて我國が英國の場合の如く、政府が豫算の實質上の決定者であることは我々の贊同を惜まぬ所である。ただ、この二箇の場合の何れに於いても缺陷を免れない所であつて、豫算の統制てふ見地からすれば、どうしても政府と議會とは何等かの仕組みに於いて協力しなければならぬのである。殊に政黨政治の時代に至つてこの必要は益々感ぜられるに至るのである。

現に英國も、歐洲戰前に於いて、豫算の精査に關し、改善すべき所あるを知り、一委員會を設けてその調査をしたことがあつた。戰時の經驗は一層その改善の必要を痛切ならしめ、その結果として一九一八年ハーバート・サムユエルを委員長とする「國家歲出に關する特別委員會」が設けられた。該委員會の報告の一節に次の如く書れてある。曰く『豫算の見積書を議會に提出することは、勿論、有用なことである。それに依つて豫算見積書の包含する金額を公開せしむることになり、その支出に對する責任を確定せしむることになる。それによつて各大臣及び各省の上に間接乍ら影響が及ぶ。なぜならその中の項目を選び出して批議する可能性が存在し得るからである。議定豫算委員會(The Committee of Supply)――英國の豫算委員會は二つに分れ、一つはこの議定豫算委員會であつて、他は財源豫算委員會 (The Committee of Ways and Means) である。前者は歲出豫算の支出に承認を與ふる

委員會で、後者はその支出に對する財源の充當を決定する委員會である。この二個の委員會の決定あつて豫算は法案として通過するものである。筆者註——に於ける討議は政策及び行政の討議として缺くべからざるものではある。しかし歳出豫算案の直接有効な統制と云ふことに關する限り、見積書が提出されなかつたとしても又議定豫算委員會が開會しなかつたとしても別段の變りはない位だと言つても決して過言でない。實の所見積書の大部分は形式的に通過され、年々歳々各會期の終りまで碌々討議もされずに閉ぢられてゐる有様である。各見積書は閉ぢられてゐやうが或はそうで無からうが、提出された時と殆んど同じ形體のまゝで議會の過程を通り脱けて來る仕末である。しかも何れの年でも又どんな項目でも、それによつて提出された豫算案が檢討され修正される機會が有効に與へられないと云ふ辯解は成立たない』と。この委員會の提案の結果として、下院に「豫算見積に關する常設委員會」が設けられることになり、政府の政策從つて信認問題に觸れない限度に於いて歳出の款項に對して減額又は削除を要求し得ることゝなつたのである。この委員會は常設的なものである丈け、比較的黨派的見地を超越した專門的智識を有する議員が委員となつてゐる。その權能は政府の政策に觸れるやうな修正が出來ないから極めて限定されたものであることは明かだが、兎に角議會の意思が政策を離れた立場に於いて政府と協力し得る仕組みであることは注目に値する。殊に議定豫算委員會の討議は政策を中心として行はれ勝ちで、政府反對黨の討論は結局のところ政府を信認するか非かと云ふ政策的動機によつて決定されるから、議會全體としては政府と協力の餘地は存しない。政治的には、これは議會の職能上當然の事であるが、歳出豫算の統制の上から見て財務的技術的には反つて影響がないと云ふことになる。

勿論これは英國のやうな二大政黨對立の國で、政府は一箇の多數黨によつて通常組織されてゐる國に適切な制度であることは云ふまでもない。同じ議會政治の國、即ち政府は下院の多數の信認を受けてゐなければ存續し得ない國でも、小黨分立從つて政府は勢ひ聯合内閣たることを常態とする國にとつては事情は聊か異るであらう。かやうな國に於いては、議會の豫算議定權を今一歩强めて、政府の同意なくしても一定の條件の下に於いて豫算を増額したり新項目を挿入したりする權能が與へられても差支ないであらう。その方が反つて議會政治の目的に叶ふ所以であるかも知れぬ。然し、その場合に於ても、如何にして歳出の節約を企圖し得るかは考慮に値する問題である。獨逸は憲法によつて、正にかやうな議會の權限の大きい類例に屬する國となつたのであるが、最近に於いて議會の豫算議定權を制限せんとする運動が生じて、旺んに論議されてゐるのを見ても、獨逸の制度は安定を得て居らぬ證左がある。要は、政情の如何によつて議會對政府の關係の異ることを考慮に入れつゝ、議會は如何なる權能と制度とによつて豫算の統制を行ふべきであるかを研究せねばならぬのである。現代日本の議會政治の歩みは英國式か獨逸式か、必ずしも斷定を許さざるも

のがあるが、大體に於いて小黨分立に依る聯合制の内閣が寧ろ稀れである事實から考慮して英國式に近いものを判定し得るならば、その政算の指針は英國の夫れを學ぶべきではないかと考へる。

　次に最近に於ける米國の豫算統制制度は、憲法問題としてでなく行政技術の上から我々の參考に値する。米國はもと極端なる三權分立の國として、豫算の決定は實質的に下院の行ふ所であつた。大統領がこれに對して拒否權を有してゐたと云ふ、議會政治の國々とは反對の有樣であつた。然るに歐洲戰爭以前より起つてゐた豫算局設置の運動は遂に戰後になつて具體化するに至り、執政機關たる大統領の下に各省の豫算は統一せられることになり、下院の豫算委員會と相俟つて合衆國の豫算は決定されることゝなつたのである。この制度の下に於ける下院の豫算委員會の職務權限を一考して見ることは甚だ興味がある。米國は三權分立に依る憲法を有する國であつて、政策の立案は議會の有する所であり、その執行のみが大統領の權能とされてゐるが故に政策に伴ふ支出の決定も亦議會の權限に屬する。豫算局の設置後執政府が、豫算案の統一を司るに至つた後に於いても、その豫算に對して議會は法理上如何なる修正變更をも加へ得るのである。從つて我々の問題として考察したいのは、實際どの程度まで議會は政府の立案せる豫算を變更してゐるかと云ふことである。この點に就ては、豫算局の提出にかゝる見積案を精査して、これに承認を與ふる爲めに法案を作成する豫算委員會(Committee of Appropriation)の活動が最も重要な地位を占めてゐる。該委員會の方針は、大體に於いて、政府の豫算案を以て政府所要の支出額の最高を示すものと見做し、その増加を試みず、必要ならば、削減のみを行ふと云ふに在る。しかも、過去數年の事實は、多少の削減は行はれてゐるが、大體に於いて豫算局の作成案が示す總額は、該委員會の採用する所となり、更に議會の法律となつてゐると云ふことを示してゐる。然し、總額の變更は少いが、費目の變更修正は相當多いことを見逃してはならない。兎に角米國は豫算制度に關する限り、豫算局の設置以來は、政府と議會との間に比較的調和のとれた協力が行はれてゐると見て差支ない。(ウイロビー『國家豫算制度』一八六—七頁)

　要するに、各國の政情は夫々に異るが故に、どの制度が最も善いかと云ふことは、その政情に適したものと云ふの外はない。が、しかし政府と議會との間に豫算の統制と云ふことに對して意思の上に又制度を通じて協力と共同とが存しない場合には、必らずその國の財政紀綱はよく行はれないと云ふこと丈けは云ひ得ると思ふ。なぜなら、豫算が放漫になり、國家の財政を危殆に陷らしむるやうな事態を惹起する場合は、必らず政府が放漫政策に傾いてゐるのに對して、その與黨が一層油を注ぐやうな場合であつて、議會は全體としてそれを阻止するを得ないで、結局總選擧によつて國民の判斷に俟つの外はなくなるのである。政府と議會との何れか一つのみが、放漫に流れても他に之を阻止する力があれば、問題はないが、我國のやうな政黨内閣の場合に

於いてはその可能性は甚だ乏しいと見なければならぬ。それに對して、議會の側に於いて與黨丈けでなく議會全體の意思が働く仕組みが考案されるならば、この點への多少の安全瓣となるであらう。

五

議會の地位が豫算案に關する限り消極的のものに止まらなければならぬ我國のやうな場合には、假令右に述べたやうな英國式の改善が行はれたとしても所詮それは極めて限定的な範圍の改革に止まらなければならぬ。それを根本的に改むるには政黨内閣制を廢止するか、米國式の三權分立制を採用するかの外はない。何れにしてもデモクラシーの原理を棄てるか、又は議院政治に依らざるデモクラシーを採用するかの外に道はないことになり、政治上は到底許し難いことになる。然らば、デモクラシーは結局國家豫算の膨脹を招き、放漫に流るゝ必然性を有するものと諦むべきであるか。ここにデモクラシーの政治制度に課せられたる難問題がある。

これに答ふる爲めに、再び本文の冒頭に述べたやうな、内閣の內部に於いて大藏省中心の豫算統制に就て考案を新にする必要がある。一省一局の見地からではなく、國家行政を統一的に觀察し得るものは、一國の財務を全體として見渡し得る大藏省を措いて他に見出し難い。しかも、大藏省は各省各局の政策又は事務に就て要する費目に就て査定し、承認する際に一々その各個の政策なり事務なりの内容に立入つて檢覈し得る。この際、どこまで政策なり事務なりの内容に立入り批判すべきか、大藏省の執るべき標準は如何なるものであるか、が考究に値する問題なのである。然し乍ら、大藏省の立場が一國全體の財政的見地から、各個の政策又は行政事務を標準化するに在るべきは明かである。即ち費用の支出に不公平の存せざるやう、無駄の存せざるやう、兼ねて能率の確保を期するにある。かやうな財務的標準化が如何に各個の政策の具體的價値と調和し得るかは、政治家として又行政家として實際の場合に當つて裁量さるべきことであつて、學理の具體的に指示し得る所でない。

大藏省が豫算の編成に當つて査定の手段を通うして各省豫算の統一的標準化を行うた後、前節に述べたるが如き議會の豫算見積審査委員會の批判を仰ぎ、それの批評や報告の中から受容れるべきものは受容れたならば、政府の議會に提出すべき豫算案は更に統制の加はつたものとなるであらう。勿論議會の豫算委員會はその審査委員會の意見に拘束される義務はないのであるが、そこに多少の影響が存することになる。殊に豫算委員會は大綱のみに就て論議し、細目に及ばないのが通例であるから、それから生ずる缺陷が補はれることになる。即ち豫算は編成に際し又は議會提出の以前に於いて、政府部內の統一と議會の超黨派的機關との連絡とを得ることが望ましく且つ必要なのである。日本に於いて行はれる豫算內示會の如き慣行は全く無意義極まるものであつて、何が故に今日その存在を必要とするか解するに苦しむもの

であるが、若し之を改正して合理的な存在とすべしと云ふならば、ここに謂ふ精査委員會の如きなるべく專門的超黨派的な心境を有する議員より成る機關に依つて代位さるべきものと思はれる。

大藏省の豫算に對する統制は、豫算の議定後に於いても重大な役割を有する。何れの國に於いても、英米の如き豫算案が法律案と同樣の手續及び形式を執る國に於いても、豫算の議定は支出の承認と見るべきもので、嚴格の意味に於ける支出の命令又は委任ではない。即ち政府は特定の既定費以外は豫算額の範圍内に於いて適當に支出し得るのである。だから、今回政友會の議會が例の豫算内示會で主張した議論などは法律論としては英米に持つて行つても通用しない議論である。ただ大略その限界は政治的に樹立されてゐる。議會の權限が憲法上この點に關し最も重い米國に就て、ウイロビーの語る所に依れば、下院の意思を明かに知り得る款項に就ては、その意思に反せざるやう心掛けねばならぬが、然らざるものは大統領の裁量によつて自由に處斷し得るとされてゐるのである。要は議會の意思が個々の豫算案に如何に現れてゐるかの解釋の問題に歸する。從つて豫算の理想は、正當なる議會の意思が判斷し得られるやうな形式と慣行とを有するに在る。而して云ふまでもなく豫定した金額を費さねばならぬと云ふことが總ての政策又は事業に就て要求されるとは限らない。

かくの如く豫算の議會提出の前後に於いて大藏當局は之れに統制を加へ得る。而して、この外に各省會計に於ける統制や會計檢査院に於ける決算に依る事業檢査の統制等と相俟つて財務行政の統制組織は成立つてゐるのである。筆者個人の見解としては、我が議會制度の發達の程度に鑑み、ここ暫く議會の側から、國家豫算の歳出統制の努力が生れ來る希望は少いやうに考へられる。從つて若し我が國家豫算をして、その政策及び行政の能率と進歩とを害せざる範圍に於て、嚴密に監督し得る可能性ありとせば、そは政府機關の側に存するやうに考へられる。即ち直接消費の任に當る機關の反省に俟たねばならぬ。殊にこの問題の意義を自覺する力強き政治家と有能なる行政家とが協力して、内は各消費機關の要求を抑制し、殊に軍部方面の支出に對して制約を加へ、外は利權獵りと地方問題とに沒頭し國政を顧みない政黨の要求を抑止することが望ましいのである。…………

かくて、國家豫算の統制者は結局誰れか、と云ふ本文の主題に對して結論するならば、日本の特種事情は兎も角として理論上は、議會でもなければ政府でもないと答ふるの外はない。眞の統制者は何れの方面にも在り得る。そうしてそれ等の協力が成立つた時に始めて統制は有力となる。要は各個の方面に於ける統制機關の意義を自覺し、各の機能を發揮せしむることにある。今回の如き政費の節約てふ大問題が獨りたま〳〵政府に立つた民政黨のみの手によつて取扱はれ、議會の意思が反映せず、その協力の見えざるは寔に遺憾と言はねばならぬ。我が議會制度の缺陷の一つがここに現れてゐる。又政府がその手にせ

る大藏統制の武器の使用を一時の便法としてでなく、如何に行政上の原理問題として取扱つてゐるかも不明である。筆者は、議會に對すると共に政府に對しても、この國家行政の大問題に就て制度上の缺陷を改善する爲めに努力する必要あることを痛論したいのである。國家の機關は總て或る限度に於いて共通の目的を遂行し、その爲めに妥當な制度を發達せしめねばならぬ筈のものである。そうして二者の間に爭ひが生じて解決がつかない場合には國民は自ら積極的にその裁斷を下す必要がある。而して今やその爭ひの時期は刻々に近づきつゝある。來るべき總選擧に於いて、今回の「實行豫算」に就ての論議が再び繰返されるなら、それを裁判するに足る一つの見地は、「國家豫算の統制者は誰か」と云ふ問題であらうと思ふ。政策論の外に、かうした行政制度に關する立論も實際問題として顧みられてよいと考へる。（十月一日）

第二貧乏物語

河上肇

第七回

聞くところによれば、近頃文部省では、マルクス主義を批判(?)した文献を集めて刊行する計畫を企て、取り敢えずその第一着手として、大學や專門學校の教授たちに、『右の問題につき意見を有するものは、この際至急にこれを文書に認めてその筋に提出すべし、論點はマルクス主義の如何なる部分に係はるものでも差支なく、紙數にも制限は設けない』といふ意味の、通牒を發したさうである。かねてより忠勤をぬきんでんと待ち構へてゐた教授たちは、自己の有能さを上司に知られうる此の絶好の機會を最も有效に利用するために、昨今おそらくは、その精力をマルクス主義の批判(?)に集中してゐることだらう。果してどんなものが集まるか、また集まつたものを誰が取捨するのか、何にしても面白い計畫が企てられたものだと思つてゐるうちに、『祖國』といふ雜誌の十月號には、京大教授藤井健治郎氏の唯物史觀の批判が現はれた。この號に載すところは、第一節の『唯物史觀の要旨』なるものに止まるが、この範圍においてすら、もし私が教員であつたなら、相當の點を引かなければならぬことがある。その一例を擧げよう。『政治經濟學批判』の『序言』中における謂はゆる唯物史觀の公式なるものは、廣く人口に膾炙してゐるところであり、現に藤井博士も『最も屢〻引用されてゐる文章』としてその一節を引用されてゐるのであるが、不思議にもそれは次ぎのやうな變なものに置き代へられてゐる。

『社會の物質的生産力が或る發達階段に達すれば、既存の生産關係と矛盾するやうになる。……生産力の發展の形態から、それの中に縛られてゐる生産關係は激變する。かくて社會的革命の時代が出現する』。(『祖國』、十月號、九一—一〇頁。)

『生産力の發展の形態から、それの中に縛られてゐる生産關係は激變する!』何のことだか分からない。だが、そこの原文は次ぎのやうになつてゐるのである。

Aus Entwicklungsformen der Produktivkräfte schlagen diese Verhältnisse in Fesseln derselben um.

それを直譯すれば、かういふのである。『これらの諸關係(生産諸關係)は、生産諸力の發展諸形態から、その(生産諸力の)桎梏に轉化する。』すなはち、その意味するところは、極めて明白である。一定の着物は子供の發育のため缺くべからざるものであるが、しかしその子供がすでに發育して青年になつたならば、これまでの着物はその發育を妨げる桎梏に轉化する。かくて同じ着物が、有用物から有害物に轉化し、辯證法にいふところの『反對物への轉化』を實現する。これがマルクスの言ふところである。しかるに藤井博士は、『生産關係が生産力の桎梏に轉化する』といふべきところを、『生産力の桎梏中にある生産關係が激變する』といふ意味に(これは何を意味するのだか分らないが)置き代へてゐられるのである。大森義太郎君は『讀賣』でこれを誤譯として指摘されてゐたが、私はさうは思はない。日本では最も古くから唯物史觀の考察に着手されてをりドイツ語には特に堪能である藤井博士が、かゝる周知の句を今頃誤譯されるはずはあるまい。これは何かの魔がさしたのに相違ないのである。ひそかに考へるに、全國における有名無名の多數の教授たちから文部省へ集まつてくる諸論文も、おそらく皆このやうな××××ものばかりであらう。そのやうなものを××をかけて刊行するよりも、——私は內々で文部省のお役人に智慧を貸すが、——そのうちにこの『物語』も完結するから、內務省のお役人と相談して、今までの××をずつかり×××、これを何百萬部か印刷して全國に配布する方が、遙に得策でありはしないか?

總じて效果的な批判は、批判さるべき對象の完全なる理解の上に立脚せねばならぬ。理解を拒んで批判を要求するは、飲食物を與へずして糞尿を排泄せよと迫まるが如きものである。もしそれ對象の無理解に立脚せる無駄話に至つては、たとひ千萬卷を積むとも、それは實らざる虛花であり、空にうかべる蜃氣樓である。左樣なものがもし現はれたならば、私は一息でこれを吹き消してやらうと、今から待ち構へてゐる。話を寄す、天下の諸教授、幸にこれをつとめよ。

雜談をやめて、物語の本筋にはいらう。

十一、唯物史觀から資本主義的社會の解剖へ

私はこの物語の第四回と第五回とにおいて、唯物史觀の何物たるやを說明した。ところで、この史觀なるものは、マルクスおよびエンゲルスの共著に成る『ドイッチェ・イデオロギー』中の言葉によれば、『人間の歷史的發展に對する觀察から抽象されたところの・最も一般的な・結論の要約』を表現せるものに過ぎないのであり、そして『かゝる抽象物は、それ自身としては、現實的な歷史から引き離されては、全然何等の價値をもたない。それはたゞ、歷史的材料の系統づけを容易ならしめ、その個々の層の順位を暗示するに役立つだけである。それは哲學のやうに〔この場合ヘーゲルの哲學が筆者たちの頭にうかべられてゐたと考へる――河上補〕、一の處方箋または表式を提供し、それに從つて歷史上の諸時代を仕上げることをえせしめるが如きものでは、決してない。困難は、反對に、吾々が過去の時代もしくは現代に關する資料の考察および系統づけに・現實的な敍述に・從事するとき、はじめて起る』のである。(『ドイッチェ・イデオロギー』、ドイツ本、二四一頁。)後年エンゲルスは、シュミットあての手紙(一八九〇年十月二十七日づけ)のなかで、これとほゞ同じことを述べてゐる。『一體「唯物論」といふ言葉を、ドイツの多くの若い著作者たちは單なる口頭禪(フラーゼ)に使ふ癖ひがある、すなはち深い研究はしないで、何でも彼(か)でも唯物的にしてしまふ。言葉を換へていふならば、それは唯物的だといつて、それで問題を解決したつもりでゐる。だが、吾々の歷史觀(すなはち唯物史觀)は、何よりも先づ研究に際しての手引であつて、似而非(エセ)ヘーゲル主義者流の徒らな體系構成の具ではない。全歷史は新たに研究されねばならぬ。それがためには、吾々は各種社會形態の存在諸條件を、一一について探究しなければならぬ。』(久留間鮫造氏譯『エンゲルスの手紙』、一二一―一三頁。)なほマルクスは、その著『政治經濟學批判』の序言において、唯物史觀の公式を敍述するに先だち、それをもつて、彼れの經濟學上の研究にとり『導きの絲』(または指南車)として役立つたもの』といひ、また『資本論』第二版の跋文においては、前記の序言中における唯物史觀の公式の敍述を指して、『余はそこで余の方法の唯物論的基礎を闡明(せんめい)した』といつてゐる。すなはち唯物史觀は、『たゞ歷史的材料の系統づけを容易ならしめ、その個々の層の順位を暗示するに役立つだけ』のものであり、『研究に際しての手引き』であり、『導きの絲』であり、『方法』である。だから、プレハーノフが『唯物史觀は、吾々をして人間の精神史のすべての問題を直ちに解決するをえせしむるが如き・魔術的な公式を、吾々に提供するものでは決してない

が、しかもそれは、……科學的研究の一の確實なる道を、吾々に指示する』といつたのは、まさに正しい。

そして現代の資本主義的社會に關するマルクス主義の理論は、――從つて資本主義から××××への必然的推移の理論は、――かゝる方法に基づき資本主義的社會を解剖することによつて發見されたものである。かゝる解剖は、『剩餘價値による資本家的生産の秘密の曝露』を齎らした。かゝる秘密の曝露により、現代社會は、社會全體の沒落を避けようとするかぎり、恰も成育した青年が嬰兒時代の衣を脫ぎ棄てゝ新たなる衣を纏はねばならぬと同じやうに、如何にしても從來の資本主義的社會形態を脫ぎ棄てゝ一の新たなる社會形態に推移せねばならぬといふことが、科學的に證明された。だからエンゲルスは、――私がすでにこの物語の第四回の冒頭で述べたやうに、――『唯物史觀と剩餘價値による資本家的生産の秘密の曝露と』をもつて、吾々がマルクスに負ふところの『二つの偉大なる發見』となし、『これらの發見によつて社會主義は科學となつた』と、言つてゐるのである。

唯物史觀は、從來の社會諸形態全般の推移に關する一般的性質を正しく理解してはゐるが、しかしそれのみをもつてしては、この全體が構成されてゐる個別を説明するに不充分である。これらの個別を知るためには、『吾々は、それを自然的もしくは歴史的の聯關から抽出して、それだけを、その特性・その特殊な因果關係・等々に從つて研究しなければならない』。一旦唯物史觀を把握したマルクスが、その後は、それを彼れの研究にとつての『導きの絲』となしつゝ、彼れの精力の大半を現代社會の解剖のために献げ、彼れの主要著作たる・かの尨大なる・『資本論』の完成に努力したのは、そのためである。眞理はすべて具體的である。そして斯かる具體的な眞理のみが吾々の實踐に役立つのである。抽象的な一般理論は、たゞ斯かる具體的な眞理に近づくための一の道具であり手段であり方法であるに過ぎない。その意味からいへば、『資本論』に展開されてゐる理論ですら、資本主義的社會の運動の――その成立・發展・および沒落の――一般的な根本的な筋道を指示するに過ぎない。政治を科學にまで高めたマルクス主義は、如何なる場合にも、一般的な抽象的な理論をもつて、吾々の實踐のために充分なる處方箋となすものではない。それは常に個々の場合に關して出來うるかぎり具體的な眞理を把握せねばならぬことを要求する。この道理をさへ明かにすれば、マルクスがたゞ唯物史觀を把握したといふだけで決して滿足しなかつた理由が、――從つてまた、小泉信三氏の如く、『唯物史觀と剩餘價値論とでは、そのマルクシズムに取つての意義において遙に輕重がある、前者は重く、後者は輕い』といふが如き主張をなすことの、誤謬であるといふ理由が、――おのづから明か

であらう。

　抽象的な理論とその具體的な表現との關聯を說明するために、私は最近ある場所で次ぎのやうな比喩を用ひた。それを再びこゝに利用しよう。——私は數日前、新勞農黨樹立準備會の演說會に出席するため、京都を立つて汽車で名古屋に向つたが、その途中、野州といふ驛の手前頃から、川が左に向つて流れてゐることを發見して、最初の瞬間には、これは變だなと感じた。一般的公式理論からすれば、川は海に向つて流れなければならぬ。しかるに今、海は南のかた——すなはち右手——に横たはつてゐるに拘らず、川は左手の方へ向つて流れてゐるのである。しかし考へて見ると、こゝの地勢は北がずつと低くなつてゐる。だから川は海に向つて流れようとしてゐるのではあるけれども、この場合は全く當面の事情に餘儀なくされて、一見すれば、海とは反對の方向に流れてゐるのである。かくてこの地一帶の川は一旦すべて琵琶湖に落ちる。こゝに斯樣な日本一の大きな湖水が出來てゐるのは、最初からそこに大きな深い凹地がある證據である。水は當面の事情に餘儀なくされて、一應はこの低い方面へ流れてゆくのである。そしてそこの大きな深い凹地を一杯の水でうづめ、汽船の通ふやうな日本一の大湖水をたゝへた後に、やつと出口を見出して淀川となり、大阪灣まできてはじめて海に注ぐのである。——この一例によつても明かなやうに、川はすべて海に向つて流れるといふのは、一般的な抽象的な理論にすぎないのであり、如何なる川といへども決して一直線に海を指して流れてゐるのではない。從つて一定の川が果して如何なる迂餘曲折を經て海に注ぐかの具體的な諸事情に至つては、これを個別について研究するの外ないのである。

　唯物史觀は、すべて從來の階級社會が如何にしてその成立・發展・沒落の過程を辿るかについての、最も普遍的な・從つて抽象的な・一般理論を提供するものたるに過ぎない。今この一般理論が現代の資本主義的社會において如何に具體化されるかの問題に至つては、——かゝる問題に遭遇するときに『困難は始めて起る』のだが、——現代社會そのものの存立諸條件につき詳細綿密なる・極めて忍耐強き・分析をなしてからでなければ、理解されうるはずはない。だから、マルクス主義はたゞ唯物史觀の上にのみ立つものではない。マルクスによつて行はれた『資本家的生産の秘密の曝露』こそは、社會主義が科學となるための欠くべからざる構成要素である。

　本誌の八月號には、小泉信三氏の『唯物史觀と共産主義的歸結』と題する論文が現はれた。それには次ぎの如く述べてある。(そのうち一句は前に引用したが、こゝにはその前後を含めて、やゝ長く引用し

ておかう。」

「エンゲルスによれば、唯物史觀と剩餘價値論とが社會主義を科學たらしめたマルクスの二大發見であるといふ。しかしながら、唯物史觀と剩餘價値論とでは、そのマルクシズムに取つての意義において遙に輕重がある。前者は重く、後者は輕い。……

「マルクスの剩餘價値論が敎へるところによれば、資本家の利子利潤、地主の地代は、勞働者の產出した價値の搾取に成るものである。しかしながら彼れは此の勞働搾取を不當として此にその共產主義の論據を求めたのでないことは、わざ〳〵エンゲルスも指摘してゐる通りである。……しからばマルクスの共產主義的要求の根據は何處にあるか。彼れは「これを吾々の目前に日々進行しつゝある資本家的生產方法の必然的崩壞に」求めたのだといふのである。而してこの資本主義必然的崩壞の結論が唯物史觀の上に立てられたものであるのは、言ふまでもないことである。しからば、資本主義崩壞の結論に對して剩餘價値論はどれほどの用をなしてゐるかといふに、その寄與するところは極めて輕少であるやうに見える。

「マルクスの唯物史觀は、一八四七年の「哲學の窮乏」には旣に殆んど完成に近い形で現はれてゐるが、……その根本思想は旣にこの原稿の起草せられた時、すなはち一八四五年に把握せられてゐたことが明かである。否な、更にその前の「神聖家族」の一節にも、マルクスは私有財產の制度の消滅をば、富とプロレタリヤとの對立から必然的に生ずる論理的歸結として說いてゐるのである。しかもこの當時における彼れの經濟學的素養は、極めて幼稚不十分なものであつて、未だ剩餘價値論と稱しうべきほどのものを持つてはゐなかつた。大體において、彼れが價値論・剩餘價値論に着想し、これを大成したのは、その共產主義的結論に到達した以後のことであつた、と言つてよからう。……

「本誌前號(「改造」七月號)の論文において、福田博士はマルクスの勞働價値學說が決してマルクシズムの「本營」にはあらざること、これをその本營と考へてその攻擊その排擊に主力を集中することの誤りなるを說かれた。私(小泉氏)は上段述べ來つた理由によつて、結論として博士のこの意見に同感なることを欣幸とする。……とにかくマルクスの價値論・剩餘價値論は、マルクシズムの最高部分を成すものではない。繰り返していふ、「唯物史觀と剩餘價値論とでは、そのマルクシズムにとつての意義において遙に輕重がある。前者は重く、後者は輕い」。……」

私がこゝに問題としようとする點については、私は小泉教授の所論

を相當長く引用したつもりであるが、私は不幸にしてそこに大した論據を見出すことができない。おそらく問題の主要點は、マルクスが『彼れの經濟學的素養が極めて幼稚不十分なものであつて、未だ剩餘價値論と稱しうべきほどのものを持つてゐなかつた』當時に、早くも共產主義者として現はれてゐた、といふ事實にあるらしく思はれるが、もしさうであるならば、しかるかぎりにおいて、彼れの共產主義はまだ科學的に建設され了つてゐない。といふだけのことである。そしてそのことは、唯物史觀の外に『剩餘價値による資本家的生產の秘密の曝露』といふ今一つの發見をもつて、マルクスの手により社會主義がはじめて科學となつたといふ主張と、何等矛盾するものでなく、正にそれに照應するものである。

マルクスが、資本主義社會における剩餘勞働の搾取──資本家階級による賃勞働者階級の勞働の搾取──を、道德論的に『不當』となし、かゝる道德論の上にその『共產主義的要求』を根據づけてゐないことは、小泉教授の言はれてゐる通りである。意見が世界を支配するとの觀念論的見解を徹底的に排斥したマルクスが、かゝる無力な道德論の說教の上にその共產主義を根據づけてゐないことは、當然である。しかしマルクスがその剩餘價値論を資本主義社會の道德的非難のために利用してゐないといふことは、彼れがその剩餘價値論を共產主義の理論的根據としてゐないといふことと、決して同じことではない。

小泉教授の言はれる如く、マルクスの共產主義は、『吾々の眼前に日日進行しつゝある資本家的生產方法の××××』をその根據としてゐる。だが、教授が全く看過されてをり而かも吾々にとつて極めて重要な點は、この『資本家的生產方法の××××』を科學的に證明するためには、マルクスの發見に係はる剩餘價値論が絕對的に必要だといふことである。

小泉教授はいふ、『この資本主義必然的崩壞の結論が唯物史觀の上に立てられたものであるのは、言ふまでもないことである。しからば、資本主義崩壞の結論に對して剩餘價値論はどれほどの用をなしてゐるかといふに、その寄與するところは極めて輕少であるやうに見える。』私の見るところによれば、こゝに教授の誤解が橫たはる。古代ギリシャの哲學者たるヘラクリットは、萬物は流轉すると言つた。これ疑ひなく正しい。そしてこの一般的な見解から、資本主義社會もまた流轉を免れないものだとの大體の見當は引き出される。だがたゞそれだけのことであつて、それが如何なる過程を經て如何なるものに轉ずるかの具體的な諸事情に至つては、たゞ萬物は流轉するといふだけの智識で說明されうるものではない。それと同じやうに、唯物史觀を把握した者にとつては、資本主義社會もまた生產諸力と生產諸關係との

矛盾衝突のため×××に××すべきものだとの大體の見當は付くが、しかしそれ以上のより具體的なことは、資本主義社會の內的聯絡を忍耐強く詳細に分析して見なくては分からない。マルクスの價値論・剩餘價値論に基づく資本主義社會の解剖は、それゆゑに、レーニンの言葉に從へば、唯物論と辯證法と共に、『マルクス主義の三つの源泉と構成部分』とを成すものなのである。福田・小泉の兩教授は、今や勞働價値說の攻擊から手を引いて、教授たちが新たにマルクス主義の『本營』だと認めるに至つたところの唯物史觀にその攻擊を集中されんとするものの如くである。だが、唯物史觀と剩餘價値による資本家的生產の秘密の曝露といへる・この二つの偉大なるマルクスの發見は、――言ひ換へれば、マルクスの唯物論と辯證法と資本主義的社會の經濟學的研究といへる・この三つのマルクス主義の構成部分は、――不可分的な一體をなしてをり、その全體を『本營』としてゐる。私は諸教授が遠慮なしにその全體にぶつかられんことを希望しておく。

十二、驚くべき貧富の懸隔

日本における最大の金融資本家の一人たる×××は、一日に一萬圓以上の所得を得てゐる。これは×××の財產から生ずる所得だから、たとひ當主は四五歲の幼兒に代はつたとしても、その所得は變はらないであらう。さういふ金持の存在してゐる我が日本に、他方では、
ぎのやうな生活をしてゐるものがある。――私はこの『物語』の第
回の二において、一通の手紙を揭げた。それには大ぎのやうな一節が
つた。『こゝは××××の產地ですから、私の近所にある工場もやは
××××の工場です。…就業時間は朝の六時から夕方の六時まで
すが、それだけの日給では、男工ですら一ヶ月三十五、六圓にしか
らないので、殆んど例外なく夜の十時まで引續き殘業をやつてゐ
す。だから每日十六時間の勞働です。私の知つてゐる男の人は、約
里ほど離れた×××といふ小さな所から、この××の工場へ自轉車
通つてゐるのですが、彼れは、例へば今日の朝六時に仕事を始める
と、今夜はずつと徹夜して仕事を續け、明日の夜十時まで、前後四
時間ぶつ通しに勞働し、それから自轉車で自分の家まで歸り、(つま
二ヶ日目の夜はじめて自分の家へ歸るわけです)、床のなかにも這入
ずに、ごろねをするのださうです。そしてその翌朝はまた六時まで
に、自轉車で工場へ歸るのです。これは特別の例外ですが、しかし
れに近い例外はいくらでもあります。家族が多いと、こうまで無理を
しなければ、ともかく生きてゆけないのです』。斯樣にして人々は生き
んがために自分の生命をすりへしつゝある。

日本では大人が斯樣な無理をしてゐるが、隣りの支那では、工場

の規定がないために、人間の生命はその萌芽のうちに踏みつぶされてゐる。『上海調査委員會は、同市の工業地域における二百七十四工場に、十二歳以下の幼兒が二萬二千人以上働いてゐることを知つた。就業時間は午前六時から午後六時まで、もしくは午後六時から午前六時まで、一日十二時間が普通であるが、しかし委員會は、「終日終夜六歳に足るか足らぬかの幼兒が非常に多勢働いてゐる」のを見た。同市外人居留地の幼年勞働調査委員會は、「幼兒は五歳になれば往々雇はれる」と報告してゐる。…晝間または夜間十二時間働いてもまだ足りないのか、「幼兒たちは往々四六時中立ち働かねばならぬ」と報告書は書いてゐる。…クリスト教青年聯盟國際書記シャーウッド・エディーは、一九二三年支那の勞働狀態を詳細に研究した。…彼れは「アメリカおよびヨーロッパの富豪の家庭で用ひる最も美麗なペルシャ絨毯を製造する支那の絨毯工場」について語つてゐる。「大人と少年は一日十六時間平均、午前五時半から午後十時まで働いてゐる。少年の大多數は三年間徒弟見習として勤め、その間はたゞ食はして貰ふだけで一文も受け取らぬ。この徒弟見習はたゞ邪道にすぎない。少年たちは、三年間勤め上げてからでも、事業について何等前途が開かれるのではない。見習期間を終へた後は、人力車苦力になつて、一日平均三十錢の稼ぎをなしうるやうになるだけである。北京にゐる五千の人力車夫の稼ぎはこれよりも少い。この仕事を五ヶ年も續けてをれば、彼等は大抵健康をそこね、そして働けなくなる。」…パーチングトンは上海における一熟練工の五人家內の生計費を一ヶ月七十一圓七十錢、不熟練工のそれを四十二圓六十八錢と見積つてゐるが、平均賃銀はこの額の半分にも達しないから、他の家內のものが働かなければ餓死する外はない。――幼兒たちを斯樣に幼少な頃から工場へ追ひやる恐ろしい經濟的壓迫は、もちろん父の賃銀で足りないから來るのである。パーシヴァル・フィンチは、「小供たちは、家計を補ふために、幼少の頃から仕事に就かねばならぬ。多くの場合、全家族が工場にゐる。それは、上海においてすら、平均生活費および一人前の平均收入を考へて見ると、四割の家族は、他に收入の口がなければ、飢餓線以下の生活をせねばならぬ狀態にあるからのことだ。これらの幼兒たちが稼ぎに出るか、それでなければ餓死するより他に途はないのだ」と語つてゐる。』（ドルセン『支那は何處へ往くか？』、蓬谷恒治氏譯本、六八――七二頁の間抄錄。）

日本のことには觸れにくいから、私はも少し支那について語らう。近頃公けにされた上杉益高氏の『仲仕（積卸）苦力の研究』と題するパンフレットを見ると、世界資本主義の重壓のもとに『汗をポタ〱と流しながら重荷を擔いで牛の如く歩む』仲仕苦力の生活が、さまざま

ざと眼にうかぶ。先づその賃銀率を見よう。日本の下關では、貨車よりの船積が、一英噸につき五十七錢の割になつてゐる。すなはち下關では、一人一英噸の作業をすれば、それで米一升以上の糧になつてゐるが、營口では、同じ仕事が一米噸につき十五錢の割にしかなつてゐない。すなはちそれだけの作業をしても、粳米二合四勺位しか買へないことになつてゐるのである。『殊にひどいのは、長春の東支滿鐵作業連絡で、毎日何時に作業が始まるやら、今日はどれ位の收入が得られるやら、一切不明』である。これらの苦力（クーリー）は、積込距離が三十メートル前後の場合には、重い荷物を肩にして、『極めて輕快に走るのであるが、六十メートル前後になると、彼等は決して走らない、走りえないのである。汗をボタ〱と流しながら牛の如く歩む。寒暖計は零度以下二十度三十度を示してゐる寒天に、なほ濛々と汗煙（あせけむり）を出して働いてゐる彼等である。長春において昭和二年の初春に起つた罷業の如きは、決して苦力の反抗的放埒より來たものでなくて、正に四十噸近くを通日勞働して、疲勞の極一旦おろした腰がどうにも浮かなくなつたものと見られる。』（前掲書、四八頁、抄錄。）

一方には、×××××一日に一萬圓以上の收入を得てゐる人があり、他方には、四十時間ぶつ通しに働いて、多勢の家族の糊口をやつと支えてゆく人や、零度以下二十度三十度の寒天に汗をボタ〱落しながら、一噸の重荷を運んで、やつと十五錢の收入しか手にすること のできない人などがゐる。前者は×××であり、後者は××××であ る。後者はその勞働力以外には賣るべき何物をも有たぬ。それを賣る ことにより、例へば一噸の石炭を運んで、粳米二合四勺を手に入れる のである。前者はこれらの人々からその勞働力を買ひ入れ、彼等を酷 役して『事業』を經營し、それによつて例へば一日に一萬圓づゝの金を儲ける。これが××の×××ゐる×××××の××である。——そこでは、富者は資本家として・貧乏人は賃勞働者として・現はれてゐる。そしてこれらの人々の間には、たゞ物の賣買が行はれてゐるだけのやうに見える。賃勞働者は、その勞働力を商品として資本家に賣る。賃銀といふのは、その勞働力の代價のことである。そして彼等は、彼等の商品の代價として受取つた此の貨幣をもつて、彼等の生活資料——それは資本家の手に商品として横たはつてゐるから、一定の代價を拂はねば之を手に入れることができない——を、資本家から買ひ入れる。一旦資本家から受取つた金は、かくて間もなく元の資本家の手に歸る。それを再び取り返さうと思へば、彼等は重ねてその勞働力を資本家に賣らねばならぬ。斯樣なことをいつまで何遍繰り返してゐても、賃勞働者の手に金のたまらぬのは、當然である。だから彼等がいつまで經つても貧乏なのは勿論のこと、體力の弱いものは過勞の

ために健康を害し、賣りうべき唯一の商品たる勞働力をすら賣ることができなくなる。こういふのが賃勞働者の境遇だ。それなら資本家はどうか？　彼れは勞働者から勞働力を買ひ入れると同時に、生産手段たるべき原料や機械やを買ひ入れ、そしてそれらの勞働力や生産手段やを謂はゆる生産過程のなかへ投げ入れ、かくして新たなる商品を作り出す。例へば紡績工を雇ひ入れ、綿花や紡績機械やを買ひ入れ、それらのものから綿絲を作り出し、そして最後にその綿絲を商品として賣るのである。（資本家階級のなかには分業が行はれる結果、種々なる資本家の營んでゐるところは必ずしも同じくない。こゝでは模型的な産業資本家だけについて話を進めてゆく。）だから資本家もやはり商品の賣買をしてゐるのである。しかるに、賃勞働者はいつまで經つても貧乏だが、資本家の方は、——小さなものは段々大きなものに併呑されてゆくが、それは別問題として、——謂はゆる『事業』の經營により利潤を得、そしてその利潤を段々蓄積してゆくから、年數が經てば經つほどその資本は加速度的に增殖されてゆく。かくて一方の極には、××××一日に一萬圓以上の收入を有する極めて少數の大資本家が現はれ、他方の極には、一噸の重荷を運んでも僅に十五錢しか得られないといふやうな・支那の苦力×××・みじめな・澤山の貧乏人ができる。」

見返すところ、そこにはたゞ商品の賣買が行はれてゐるに過ぎぬやうだが、どうして事態はこんな風に進んでゆくのであらうか？　また事態はいつまでこんな調子で進んでゆくことが出來るのであらうか？　マルクスの成し遂げた『剩餘價値による資本家的生産の秘密の暴露』は、すなはちこれらの問題に對し、明白なる科學的解答を提供するものである。

意見が世界を支配するとの觀念論的な見解を徹底的に排斥したマルクスが、資本家的生産の齎らした配分の××なる××を、——『一方においては少數者の掌中への資本の集中、他方においては大都市への無産大衆の集中』を、——單なる道德論によつて非難することに滿足しなかつたのは、當然である。彼れにとつての問題は、『新たに出現した社會的××をば、現存せる生産の仕方の必然的な結果として・しかしまた同時にその生産の仕方の上に落ちかゝつてゐる××の前兆として・論證することであり、且つこの××せんとする經濟的運動形態の内部において、將來の・かの弊害を除去する・新たなる・生産および交換の組織を發見すること』であつた。

總じて『一の生産の仕方がその發展の向上的な段階にあるかぎりは、その生産の仕方に適應する配分の仕方のため貧乏鬮を引いてゐる

ものまでが、これを歡迎する。大工業の勃興した當時のイギリスの勞働者がさうであつた。かゝる生產の仕方が社會的にノルマルなものとして止まるかぎり、社會全體の上に配分に關する滿足が行はれてをり、これに對する抗議は支配階級そのものの懷(ふところ)から起り（サン・シモン、フーリエー、オウエン）、しかもそれは被搾取大衆の間に未だ何等の共鳴をも見出さぬのである。けれども問題の生產の仕方が好い加減に下(くだ)り阪になり、半ば時代後れのものとなり、その存在の諸條件が大部分消え失せてその後繼者がすでに戶口をノックしてゐる頃になると、――さうなると始めて、益々××になりゆく配分が××だと見えるやうになり、時代後れになつた事實から謂はゆる永久の××が叫ばれるやうになる。だが、道德や正義に對する斯かる叫びは、毛筋一本ほども吾々を科學的に押し進める助けとはならない。經濟學は、道義的憤激に關しては、よし如何にそれが尤もなものであらうとも、そこに何等の論據を見出しうるものでなく、たゞ一の徴候を見出しうるに止まる』。（エンゲルス『反デューリング論』、ドイツ本、一五二―一五三頁。河野・林兩氏譯本、二三七―二三八頁。）これをマルクスの言葉に移せば、『かゝる××時代をその時代の意識から判斷するのは、恰もある個人が自分自身のことを何う考へてゐるかによつて其の人を判斷せんとするのと同じで、たゞに不可能なばかりでなく、むしろこの意識なるものが、物質的生活の矛盾から・社會的生產諸力と生產諸關係との間に現存する衝突から・說明されねばならぬのである』。（『政治經濟學批判』序言。）

社會民衆黨の綱領は三項から成つてゐるが、そのうちの二項には『健全なる國民生活』といふ語がある。例へば、その第二項には、『我等は資本主義の生產ならびに分配方法に健全なる國民生活を阻害するものありと認めて合法的手段によつて之が改革を期す』としてある。そして島中雄三氏の『宣言解說』を見ると、『社會的正義の觀念をもつて一貫した健全な國民生活を樹立する』といふやうな言葉がある。（『社會民衆黨宣言解說』、三〇頁。）また安部磯雄氏の『綱領解說』を見ると、『富が社會の一部に集まるといふことは、社會の健全なる發達を來すどころか、却てこれを阻害することになる』とか、『科學や藝術の享樂を人民の一部に限るといふことは、社會をして不健全なる狀態に陷らしめるのみでなく、全く人道の精神に反するものである』とかいふやうな言葉があるが、（『社會民衆黨綱領解說』、一三、一六頁。）今かゝる道德論がこれらの諸君によつて叫ばれ、それが被搾取大衆の間に何等かの共鳴を見出しつゝあるならば、そのことは今日の資本家的生產方法がもはや時代後れのものとなり、その後繼者がすでに戶口をノックしつゝある證據である。奴隸制が生產諸力の發展に貢獻しつゝあ

つたかぎりにおいては、ギリシャの哲學者たちも、これを『社會的正義の觀念』から辯護してゐた。それが道德的に非難されるやうになつたのは、すでに奴隷制なる生産關係が生産力のそれ以上の發展に對する桎梏に轉化してから後のことであり、畢竟か〻る道德的意識そのものは、物質的生活のうちに存在する生産關係と生産力との衝突といへる客觀的な現實の反映にすぎなかつたのである。

もし現代における驚くべき××の××に對し、多くの人々がすでに道德的に憤懣を感じつゝあるのであれば、その意識こそは、『物質的生活の矛盾から・社會的生産諸力と生産諸關係との間に現存する衝突から・說明されねばならぬのである』。道德から經濟が判斷さるべきではなく、逆にその道德が經濟から說明さるべきものなのである。

だから吾々は、單なる道德的說敎をもつて滿足せず、むしろ『物質的生活の矛盾』が――『生産諸力と生産諸關係との間に現存する衝突』が――如何にして不可避的なものとなつてをり、從つてまたその解決の策が如何に必然的なものとして規定されてゐるかを、專ら經濟學の研究のうちに求めんとするのである。

か〻る研究に對し、唯物史觀はすでにその大體の見込を提供してゐる。吾々は、それを『導きの絲』となしつ〻、生産諸力と生産諸關係との矛盾衝突が資本主義的社會において如何なる具體的な形態をとるかを、現實の事實について詳細に研究せねばならぬ。今マルクスの發見に係はる『剩餘價値による資本家的生産の秘密の暴露』は、實に斯かる研究にとつての基礎である。言ひ換へれば、『剩餘價値に關する學說は、マルクスの經濟理論の礎石である』(レーニン)。私は項を改めて、その大體の話をしよう。

新勞農黨樹立の時期に直面して

その勞働者農民の同盟としての性質および任務に關する一闡明

大山郁夫

一

新勞農黨の合法性獲得のための鬪爭は、抗しがたき潮流に押されてかのやうに、異常な底力を以て着々と進捗して來た。全國の戰鬪的勞働者農民の間から擧げられた熱烈なる要求の聲に驅り立てられて、その結黨の時期も、大體十月下旬といふことに、一應決定された。——この決定は稍々後に至つて十一月一日・二日といふことに改められたが。——そうして待たれるその日は、もはや目睫の間に迫つて來た。

かゝる事態を前にして、新勞農黨組織準備會關西地方協議會は、その主催の下に關西の重要諸地點に於て結黨促進・時局批判演說會を開く計畫を立て、そしてそれへの參加のために私（大山）を關西に派遣すべきことを、東京の準備會本部に向つて要請して來た。本部は直ちにこれに應じ、更らに別に名古屋の準備會から來た同樣の要請をも容れて、私の遊說プログラムを組み、九月下旬から十月上旬にかけて、私を關西地方の同志たちの間に送ることを決議した。

かくて私は、九月二十八日に東京を立ち、それから十月六日に再びそこに歸つて來たまでに、京都（九月二十九日および十月二日）、名古屋（九月三十日）、神戶（十月二日）、大阪（十月三日）、堺（十月四日）、及び奈良縣の小泉村（十月五日）に於て、しばらく振りに、關西の同志たちと共に、親しみの深い大衆に接觸する機會を持つた。その間に京都の同志河上が四回も私たちと共同の演壇に立つたことは、私たちに大いなる欣びであつた。

演說會はどこでも、唯ひとつの例外もなく滿員であつた。のみならず、入場しきれない大衆が空しく街上に列を作つて立つてゐたために、私たちが心から詫び入りたいやうな氣持に誘ひ込まれたやうなことさへ、一再ならずあつた。九月三十日の名古屋および十月五日の小泉村に於ての外は、私たちの一行は始終生憎の雨に祟たられ通しであつたが、さうした空模樣などには頓着なく殺到して來た勞働者農民

無產市民の大群は、行く先々の會場を立錐の餘地なきまでに塡めつくし、時々刻々堂をゆるがさんばかりの拍手を爆發させて、凄いほどの氣勢を擧げた。

　もつとも、京都、神戶、および大阪では、一握りほどの小人數ではあつたが反對派のグループが聽衆の中から現はれて、ビラまきや彌次によつて會場の攪亂を企てたやうな小事件が持ち上がつた。そのうち唯一度京都に於て、九月二十九日の夜に岡崎公會堂で持たれた演說會が、彼等のさうした妨害行動によつて惹き起された數分間のさゝやかなる動搖のために忽ち臨監の警官に乘ぜられ、しかもその騷ぎが鎭まりかけてゐた刹那に『解散』を強制された。その時は我々の側に不覺にもさうした突發事件に對應するための防備手段が講ぜられてゐなかつたために、その演說會は遺憾ながら續行できなかつた。だが、我々のこの最初の無慘な失敗は、その代りに越えて十月二日の午後を期して三條靑年會館で持たれた同市での第二回の演說會の輝やかしき大成功によつて償はれて餘りある結末を以て局を結んだ。

　否、それだけが該事件から我々が引き出し得た收穫の全部ではなく、その好影響は延ひて他の諸都市で持たれた演說會の上にまで波及した。それは、我々の遊說の劈頭に於て京都で起つたその小波瀾が、その後の我々の演說會の警備問題に關して、極めて重要なる敎訓を我々に與へたからである。かくて、その次からの各演說會は、精細なる注意を以て組織されて一糸みだれざる規律統制の下におかれた我々自身の警備隊によつて、極度に嚴重に固められることになつた。で、十月二日夜の神戶に於ける演說會、および十月三日夜の大阪に於けるそれに於ても、矢張り小人數の反對派のグループによつて、同じくビラまきや彌次の形に於ける會場攪亂の狂態が演ぜられたが、兩度とも我々の頼母しき警備隊の俊敏果敢なる行動に制止されて、彼等のその折角の企ても、竟に一杯のコップの水の上に立つ波ほどの騷ぎをも持ち上げることが出來なかつたばかりでなく、多分彼等が豫期してゐなかつたであらうやうな反對効果をすら産んだ。この點に關しては、大阪での演說會で見られた光景が、極めて典型的な一例を示した。卽ちその夜約四千の聽衆によつて充たされてゐた中之島中央公會堂內の人浪を背景にして、そこの一角かしこの一隅から一握りの反對派の連中の結果によつて時々持ち上げられた小さき騷亂の渦は、例によつて會場內に水も漏さぬばかりの警戒の陣列を布いてゐた警官隊と相映發して、臨監の中止の連發の鑿醉の下に一種の皮肉な對照を示し、兩々相須つて熱心なる聽衆の反感を極度に挑發して、そのために會場內の緊張味が頓みに倍加され、新勞農黨支持の態度の表明としての急霰の如き拍手の響が層一層と瞬間々々に無際限に高められて行つた觀があつた。

　かういつた調子で、次々と各地で持たれた演說會は、いづれも皆、豫想以上ともいふべき滿足な効果を十二分に收めた。そして私は、その間始終關西地方の同志たちが惜しみなく私に與へてくれた援助によつて、所定の任務を滯りなく果たした上で、言ひつくしがたい感謝の

念を懷きつゝ、それらの同志に別れを告げて關西をあとにしたのであつた。

それから、歸東の車中に於ても、歸東の後にも、私は絕えず過去一週日の旅行を振り返つて見ては、その間に私が新たに學び取つた敎訓の意外に多かつたことを心から喜んだ。私は今、新勞農黨の結黨期を前にして、同黨の使命およびその意義を大衆に向つて語らうとするに際して、まづ私が今回の遊說中に於て得た樣々の生々しき印象から說き始めようとしてゐるのである。

二

既に述べた通りに、私の今回の遊說中、新勞農黨組織準備會關西地方の協議會の主催の下に關西方面の各重要都市で開かれた演說會は、いづれも皆並々ならぬ成功に輝いた。そして、いづれの場合に於ても、演說會に潮の如く集まり來つた大衆のうちには當該都市および附近の勞働者農民無產市民が、必ず壓倒的大多數を占めてゐた。彼等は皆一齊に、新勞農黨の堂々たる出現への慶望を前にして、萬雷の如き萬歲の叫びに聲を合はせることによつて、熱烈なる歡迎の態度を明白に表明したのであつた。この當然の事實は、しかし直接にそれを目擊した私たちを、心の底から愉快にせずにはおかなかつた。

更らに又、各演說會を勇敢に身を以て護つたところの、犧牲的精神そのものの如く見えた我々の警備隊は、その殆んど全部が工場から動員されて來た精銳なる勞働者たちから編制されてゐたものである。特に大阪の演說會の場合に於て、さうした優秀なる警備隊が二百三十餘名の員數から成り立つてゐた事實は、かうした方面の事情に精通してゐるものにとつては、眞に驚異に値することであらねばならぬ。新勞農黨の樹立が大衆の支持を受けてゐないとか、戰鬪的勞働者の全部から排擊されてゐるとかの逆宣傳を盛に飛ばしてゐたものは、この具體的事實を如何に說明しようとしてゐるか！

更らに、私自身は新勞農黨樹立の提案者らの一人としての立場からも、特にさうした光景を無上の感激を以て見る理由を持つた。何よりも殊に私はそれを通じて、さきに私たちが非常の決心を以て全國の同志たちおよび大衆の批判の前に投げ出したその提案が、それらの同志たちおよび大衆の壓倒的大多數の間に於て、幸にもその不遜を咎められることもなく、本質的にその精神・趣旨に對する共鳴・支持を發見した事實の活きた徵證を見ることが出來たことを感じた。そして私は、單に久しく私の心の上に橫へられてあつた一種の重荷をおろしたやうに感じたばかりでなく、同時に新勞農黨の前途の發展に對する確信を益々强めることが出來た。無論このことは、私以外の二人の提案署名者たちについても、一樣に當て嵌めていへることである。

もとより私たちは、提案發表の直後から引き續き、それへの反對聲明が雨の如く降らされた事實を、知りすぎるほど知つてゐる。だが、私たちは初めから、さうした一切の反對聲明が現實の大衆的基礎の上

に立つてゐたものか否かについて、多大の疑惑を挾んでゐたのだ。そのうちに、さうした反對聲明と入れ違へに、今度は賛成聲明の山が準備會假本部の卓上に積まれるやうになつた。それらの賛成聲明は、舊勞農黨時代以來あくまで我々の陣營を支持して來て、我々と共に手を取つて戰つて來た勞農諸團體の多數から送られて來たものである。そして、それらの賛成聲明が一體に反對聲明よりも多少後れて到着する傾向が見られたのは、前者が慎重なる大衆的討論を經た上で作られたためであつたといふ事實が、段々と私たちに明かになり始めた。

かゝる形勢の推移の下に、最近數個月間正規の刊行をしてゐなかつた舊勞農黨時代以來の我々の陣營の機關紙『勞働農民新聞』も、八月中旬には完全に更生して、提案への賛否に關する全國的狀勢が、その紙上に巨細に報道され始めた。それから間もなく、東京に於ける提案賛成の諸團體の代表たちの會議が持たれて、その席上に於て新勞農黨組織準備のための正式の本部および東京地方準備會設立の件が決議され、全國の同志たちに向つてその承認が求められた。それは實に、提案發表の日であつた八月八日から算へて一個月になるかならないかの九月六日のことであつた。全國の同志たちも直ちにその例に傚つて、續々と各地に準備會を組織し始めた。

この點に關する全國的狀勢を茲で詳細に報告するが如きことは、一般の讀者たちにとつては却て煩はしく感じられることであらうし、また特にそれを知りたい人々は『勞働農民新聞』紙上の報道に就くを便とする事情もあるから、茲では一切それを省略することにする。たゞ一般的狀勢の槪觀としては、次のことが明確に言ひ得られる。すなはち、我々は最も尊敬する戰鬪的左翼勞働諸團體のうちにも、いまだに提案に對する賛否の表明を保留してゐるもの、および兎も角正式の團體の名に於て――大衆的討論を經た上でのことか否かは全然別問題として――既に公然と反對聲明を發表してゐるものが幾らかはあるといつたやうな、我々には衷心遺憾に感じられる現象も生じてゐない譯ではないが、しかし大局の上から見れば、それらの諸團體の間に於て提案絕對支持の態度を積極的に表明してゐるものが明かに壓倒的大多數を占めてゐる。のみならず、提案反對の態度を持續してゐるものが主として觀念的病症に囚はれてゐる一部少數のインテリゲンツィアの指導下に立つ人々の間に見出される傾向があるに反して、提案を積極的に支持するものは槪ね皆現實に鬪爭を續けて來た諸團體に屬する人人であるといふ事實が、我々には明白に看取され得るのだ。

殊に、關西方面の最重要諸都市の大阪、神戶、および京都に於ける多數の有力な戰鬪左翼勞働組合および農民組合が、他に率先して逸早く提案を大衆的討論の下に審議した上で堂々と賛成聲明を發表した事實はどれほど私たちの意を強くしたか、測り知れないのである。かうしたことも、茲で一々詳細に記述するよりは、寧ろ讀者諸君の注意を『勞働農民新聞』紙上の精確なる關係記事に向けるのを便とするが、しかし今全豹の一斑といふ意味で、試みに新勞農黨組織大阪地方準備

會の現在に於ける加盟支持諸團體を擧げて見る。それは實に次の通りだ。曰く、大阪金屬勞働者組合。曰く、大阪木材勞働組合。曰く、全大阪勞働組合。曰く、關西革新勞働組合。曰く、大阪足袋工組合有志。曰く、大阪電氣勞働組合有志。曰く、全國農民組合大阪府聯合有志。曰く、大阪市電自助會有志。曰く、水平社有志。——ざッとかういふ調子だ。それに、以上の現在加盟支持諸團體以外にも尙ほ、今後續々來り加はらうとする形勢にある諸團體の數もまた決して少くない模樣である。

だが、實をいへば、かうした單なる表面的な、形式的な記述だけでは、よしそれによつて事實の輪廓だけが髣髴し得られるにしても、その活きて動いてゐるまゝの眞相は、決して具體的に、實感的に把握できるものではない。それをなし得るためには、私たちは是非とも親しくその現實の場面に赴いて、そこで現實に活動してゐる同志たちや大衆に直接に接觸して來なければならない。——かう考へては私は、勇み立つて今回の關西遊說の旅程に上ぼつたのであつた。

三

私たちは今回の遊說中に、各地の演說會に於ける光景を通じて、關西地方に於ける勞働者農民無産市民の大衆が、今まさにその堂々たる出現の前夜にある新勞農黨を、如何にはちきれるやうな滿腔の期待を以て熱烈に歡迎しようと用意してゐるかの眞相を、まざ〳〵と目のあたりに心ゆくまで見詰めることが出來た。直接に現實の場面に就いて得られたかゝる事實の具體的說明こそは、私たちにとつては、他の何物にもまさつて貴重なる收穫であつた。私たちは殊に、新勞農黨樹立の提案は決して大衆の意志を反映してゐるものでないといふやうなことを千言萬語を以て我々に教へようと試みてゐる一切の反對聲明が、それを前にして根柢から覆へされて行くのを見た。しかも、かゝる結果が、舊勞農黨時代以來引き續き我々の陣營の全運動の進展上に於て非常に重要なる役割を演じて來た關西地方の同志たちおよび大衆の間に於て持ち來たされたことによつて、私たちの確信がどれほど強められたことか！　更らに私たちの眼に觸れた反對聲明の或るものは、少くとも全國の戰鬪的勞働者農民大衆は新勞農黨樹立運動を極度に呪つてゐるといふやうな趣旨を書き立てゝゐたが、しかし私たちが見舞つた各地の戰鬪的勞働者農民大衆は、精鋭無比の警備隊を組織し、その強力なる援護の下に全運動の効果的な進行を助成したことによつて、斷乎としてさうした妄語に答へた。殊に全國重要工業諸都市の隨一とも見るべき大阪に於ける我々の演說會が、現實に工場から動員されて來た二百三十餘名の勞働者たちから編制された警備隊によつて護られた事實は、優に我々の陣營に對する逆宣傳者流を一擧に蹴飛ばして尙ほ餘りあるものだ。實際それらの屈強なる警備員たちが、甲斐々々しくも隼の如く、三々五々會場を繞うて縱橫に活動しつゝ、彼等の任務を見事に遂行してゐた光景は、我々に向つては一種の雄壯

感をさへ喫つた。私は無限の感謝を以てそれを眺め、何時しか心のうちでひそかに斯う考へてゐる私自身を見出した。『反對派の人々は、よし個人としての提案者たちの頭上にありッたけの惡罵の言葉を積み累ねようとも、提案そのものにかくも熱心に積極的支持の態度を示しつゝあるそれらの戰鬪的勞働者大衆に向つては、後ろ指一つさすことは出來ないであらう』と。

たゞし、前にも記述した通りに、京都、神戸、および大阪に於て、たとへ少數であり且つ意外に無力であつたにせよ、とにかく會場の攪亂を企てた一群の提案反對者たちが現はれたといふことは、多少の程度に私たちの注意を刺激した。もとよりそれは、私たちの豫想以外の何物でもなかつたが、しかもそのことが目のあたりに起つたのを見た時にはさすがに私たちは、言ひやうのない、一種異樣の感じを懷いた。それは、一つには從來反動團體などの襲撃には隨分慣らされて來てゐる私たちではあるが、しかし現在我々と同じく左翼の陣營に屬してゐる人々からあゝした妨害を受けたことは、私たちには全然始めての經驗であつたからでもある。

實際、それらの會場攪亂計畫者たちは、つい先き頃までは、我々とは互に同志と呼びかはしてゐた間柄である。しかるに今や、彼等と我我とは、政治的見解の相違から別々の途を歩まなければならないやうになつて來てゐるのである。何といふ急激な變り方だ！だが、かうしたことは、我々が無產階級戰線の上に立つ限り、決して今更らしく珍しがるほどの現象ではなく、今後といへども度々生じて來ないにも限らないものである。だから私たちは、それをどうのかうのといふべきではない。

それにしても、彼等の演じた妨害行動が、少くとも外形上、アナ系の集團が好んで用ひ來つた手段と同じ型のものであつたばかりでなく、更らに私たちが今回の遊說中名古屋に行つたときに演說會場外で見た反動團體らしき一群——それは××會員たちだと後に聞いた——の遣り方とも全然一樣であつたといふことは、多少私の心を暗くした。私はしかし、直ぐ次の如く考へて、氣持を取り直した。すなはち、提案反對派の諸君は、少くともその主義、主張、および理論に於ては、無論アナ系の集團や××會などゝは根本的に立場を異にしてゐるものであり、更らに彼等の闘爭目標や闘爭相手が我々のと同じものである以上、彼等が口先きで×××言辭を唱へるだけでなく、いま會場を蔽つてゐる戰鬪的勞働者農民大衆と同じ樣に、これから先きも現實の闘爭をつゞけて行く限り、やがては彼等が我々の現在の立場を當面の客觀的狀勢との聯關に於て見て階級的に正しいものとして理解する日か來るであらう。無產階級の進み行く道は複雜多岐であり、かつ幾曲りにも曲りくねつてゐる。で、今日こそ彼等と我々とは別々に相離れて歩んでは居るが、しかし他日、道は再び相合して、彼等と我々とがまた新たに溫かく握手する時機が永久に來ないであらうとは、誰れに保證できようぞ！

四

それはそれでいゝにしておいて、尚ほ別に一つの問題がある。さきに私たちが提案を發表した直後に於て一部の反對派のグループが取つた態度は、私たちの甚だ遺憾――私たち自身のためにでなく、彼等のために――としたことであつた。それは無論私たちが、彼等は大局から見て我々と同一の陣營に屬してゐるものだと考へたからのことであつた。私たちはもとより、當面の客觀的狀勢――主體的諸條件の現勢との聯關に於ての――に對する私たちの認識に卽して、私たちが提案中に示した進み方こそが、現在に於て我々の陣營が取るべき唯一の階級的に正しき道であり、更らにまた全國の同志たちおよび大衆もその道に就くことを要求してゐるものとの確信を得たればこそ、敢て不遜の罪を犯してまでも、大膽にもあの提案を發表したのであつた。私たちは無論、私たちの認識や私たちの判斷が常に正鵠を誤まらないものなどゝは、微塵も考へてゐない。さういふ氣違ひじみた考へ方は何時に限らず我々がしてならないことだが、特にあの提案に關しては、その內容が當面の活きた現實問題に觸れてゐるものだけに、私たちの危惧――私たちの不安は、それだけ一層大きかつた。だからこそ私たちは、それが作成されるや否や、卽坐にそれを一齊に全國の同志たちや大衆の前に投げ出して、その寸毫も假借するところなき批判を求めたのである。そして、それが一旦私たちの手を離れて一旦同志たちおよび大衆の討議に附託されてからは、私たちは絕對に靜かに坐して、それに對する審判の下されるのを待つてゐたのだ。そして、私たちには絕對に正しく確信されたその提案の內容といへども、若し同志たちおよび大衆によつて、その間違ひであることが理論的に懇切に指示證明された上でのことならば、私たちの身が、よしそれがために大地に踏みにじられ泥土に委せられようとも、それは私たちが甘受しなければならない運命であることを、私たちは初めから固く覺悟してゐた。ところが、反對派の諸君が逸早く出した反對聲明の多くのものは、私たちの提案の內容を理論的に克服しようと試みた前に、まづ個人としての提案者たちに向つて、あらゆる罵詈の雨を浴びせかけ、屢ゝ虛構の事實に卽して――私は斷乎としてそれを言ふことを憚らない――人身攻擊をさへ試みたのだ。『裏切り者！』『卑怯者！』『官憲の犬！』『泥沼への轉落！』『白色テラーへの降服！』等々その他無數。彼等は本心からか惡意からかは知らないが提案者たちの心術にまで立ち入つてかくも口汚なく吠え立てたのだ。かうしたことが、我々の×の戰術から出たものならば、私たちはそれを餘りにも當然のことゝ考へたであらう。また、彼等が相當期間私たちと意見を鬪はしてその事實を確めた上、それに應じて兎や角言ひ立てたにしても、私たちは別にそれに對して別に何も言ふ必要を持たなかつたであらう。だが彼等は、何を問ふひまもなく、たゞ一圖に私たちに罵詈雜言の一齊射擊を向けたのだ。かういふことが、今が今まで同志として腕を組んで共に戰つて來

たものに出來ることであらうか？　否！　鬪爭するものにこそ鬪爭するものゝ氣持が解かる筈だ。かう考へたとき、私の結論は必然、『彼等が現實に我々と苦難の鬪爭を共にして來たものとは信じられない！』といふことに落ち着くより外に途がなかつたのである。

　もとより、彼等の罵聲も、彼等がそれによつて企圖した効果を毫も擧げ得なかつたことは、眼前の事實が充分にそれを證明してゐることであるから、私たちはその點から何事をもいふ必要を持たないがたゞ私たちは斷乎として、彼等がそれによつて示した捨て鉢的な態度が、百パーセント非階級的であることを信ずるが故に、茲で少しくそれを問題とした譯である。

　更らにまた反對派の諸君のさうした言動は、皮肉にも新勞農黨を支持する同志たちおよび大衆の熱意を幾倍も高めたやうな、彼等の企圖とは全然反對の効果を齎んだ。それらの同志たちおよび大衆は、反對派の諸君の如く、初めから反對のための反對に出るやうなことはなく、從つて政治的意見の異同を理論的に究明する前に頭から安價な漫罵を放つたやうな眞似をしないで、まづ第一に私たちの提案を大衆的討論の下に置いて自由に胸襟を開いて審議した。私たちは信ずる、かゝる思慮ある態度を以て提案に臨んだ同志たちおよび大衆は、よし結局それに對して理論的に痛烈なる否定的・糺彈的批判を下すことを餘儀なくされたにしたところで、それはそれとして、別に個人としての提案者たちに向つて、少くとも虚構の事實に即する人身攻擊の毒ガスを發射するやうなことなどは決してしなかつたに違ひない。多年街に嵐に共に手を取つて戰ひ進んで來た同志たちおよび大衆の頼もしさよ！　かゝる信頼すべき人々によつて行はれる階級的裁判の判決にならば、私たちは何時でも無條件的に服從して悔いない用意を持つてゐる。それだけでも私たちには充分に、滿足であるのに更らにそれらの人々が、提案を前に鬪はした自由討議の末に、その趣旨に全幅の贊意を表することによつて、彼等もまた提案者たちと政治的意見を本質的に同じうしてゐるものであることを證明したことを知つたときには、私たちの喜びは必然に二重であつた。

五

　言ふまでもなく私たちは、今回の遊說中に各地で持たれた我々の演說會の成功を、無條件的にその外面的盛況によつて測定しようとしてゐるところのものではない。否、私たちは、至るところで我々の演說會に伴つたその外面的盛況が畢竟するに、我々がこの際非常に高く評價する樣々の内面的諸關係の集積的表現であることを知つてゐるが故にこそ、それを我々の演說會の成功の指標として見ようとしてゐるのである。單なる外面的盛況は、我々の眼には一個の無用な浮游物としてしか映じないのだ。

　では、謂ふところの樣々の『内面的諸關係』とは一體何を指してゐるものであるか？

この問題は簡單なる間に合はせの一言で片附けてしまはれるには、餘りに複雜である　それ故に私は、今それを取り上げるに當つて、より外側的な部分から一ト皮づゝ剝いで行つて、最後にその核心を抉ぐり出す、といつたやうに取り扱ひをしようと思ふ。

まづ第一に、各地で持たれた我々の演說會の外面的盛況を促迫した直接の要因は何であつたか？　それはたゞ聽衆の大群の殺到といふことだけであつたか？　斷じて否！　もとよりこの場合、我々はこの要因を全然度外視することは出來ないが、しかし唯それだけが全部ではなかつた。一般の興行物の開演の場合などには、單に多數の入場者を得たといふことだけで盛況といはれるのが普通であるが、しかし我々が持つ各演說會は、そんなものとは違つて、闘爭の一形態であり、またその一手段でもあるのだ。それ故に我々の演說會は、單に聽衆の大群がそれに殺到したといふことだけによつて、それが盛況を呈したものとは言へないのだ。さう言へるためには、少くとも、打たば響くやうな緊張味が全場面を支配してゐなければならないのである。

だが、一樣に緊張味といつても、我々の演說會の場合にあつては、興行物の開演の場合に於て見られるが如く、鑑賞の對象に對する好奇心や嘆美心やの滿足もしくは一種の感興といふやうなものから來たものであつては、全然目的から外れてしまふものである。それはまた、普通の學術講演會や政談演說會などで見られるが如く、單に壇上の辯士の雄辯の魅力とか、その談論の技巧とか、その學殖の豐富とか等々によつて惹き起されたものであつても、我々の演說會の場合にあつては、その效果は高々部分的なものにすぎないものとなるのである。

闘爭の一形態であり、またその一手段でもある我々の演說會に於ける緊張味は何よりも、殊に聽衆の間に闘爭精神が効果的に激成されることから來るものでなければならぬ。さういふ緊張味が全會場を支配してこそ、我々の演說會は始めて盛況を呈したといふことが出來るのでありまた少くともさういふ意味に於て盛況を呈してこそそれは始めて成功したものといふことが出來るのである。

如上の見地から、私たちが、今回の遊說中に各地で持たれた我々の演說會の外面的盛況について語るとき私たちは單に聽衆の大群の殺到といふ一事だけに着眼してゐるものではない。私たちは尙ほそれに加へて、その聽衆の大群の間に充分効果的に激成された闘爭精神の横溢を見てゐるのであり、更らにそれから生じた會場内の異常の緊張味を見てゐるのである。そして、我々の各演說會は行く先々で、決まつてかうした意味に於ける外面的盛況を伴つたが故に、私たちはそれは非常に成功したと言ふのである。

我々の各演說會に於て聽衆の間に効果的に激成された闘爭精神の外部的諸表現――嵐の如き拍手、萬雷の如き歡呼、臨監の中止の聲に對する『××！　××！』の抗議、閉會間際の萬歲の唱和、等々――かうした尋常一樣の平凡な事柄については、私は玆で別に何事をも言ふ必要を持たない。たゞ一つ、しかし、聽衆の大群の間に於けるさう

した闘爭精神が、官憲の彈壓的態度と會場混亂計畫者たちの妨害行動とに對抗して極力會場を護らうとする決意となつて鮮明に表現された一事だけは、私は特に玆でそれを擧げておく義務を感じる。實際私は始終、その光景を涙ぐましい氣持ちで見詰めてゐたのだ。京都で唯一度遇つた我々の不覺の大失敗を別にしては、その後の各演說會に於て反對派の妨害行動が持ち上がるたび毎に、それは忽ちにして完全に制止されてしまつて、そのあとは全會場が却て、以前よりも嚴粛なる緊張味に包まれて行つた。かうした見事な成果が完全に收穫し得られたのは、無論一部分は我々の誇りである精鋭無比の警備隊の働きによつたものとはいへ、我々は同時にまたそれが熱心なる聽衆の自由意志から出た警備隊への協力に負うたことも決して少くなかつたといふことをも、充分に認めなければならないのである。

おもふに、聽衆が示したかゝる態度——かゝる闘爭精神の表現——は、決して一朝一夕に養はれたものではない。もとより、壇上の辯士——否、闘士——のその場のアジテーションも、直接に、瞬間的に、それを激成することに多くを貢獻したことは言ふまでもないことだが、しかしそれは根本に於ては、舊勞農黨時代以來の我々の陣營の多年の苦難の闘爭の所産でなければならぬ。その多年の苦難の闘爭は、單に我々の陣營内部の幾多の闘士たちを鋼鐵の如くに鍛へ上げたばかりでなく、同時にまた、知らず識らずの間に一般大衆の上にもよき訓練を與へつゝあつたのだ。だから、私たちが我々の演說會に來る聽衆の間に激成されたる闘爭精神の右の如き表現に接したのは、嚴密にいへば決して今回に始まつたことではなく、從來とても一再ならず目擊して來たものである。だが、それは幾度見ても、常に新たに私たちの感激を高潮に導くことを誤まらないものである。

最後に、私たちの今回の遊說中に、特に異常に私の注意を促した一新現象だと私に考へられたことは、演說會場の内外を問はず、私が親しく接觸した勞働者農民大衆の間に、新勞農黨樹立運動をどこまでも自分自身の事として護り立てゝ行かうとする精神が、——更らに建設された後の新勞農黨の進路の方向の決定に對して飽くまで意識的に、自主的に、積極的に働き掛けようとする意志が、——凄まじき勢を以て生長しつゝある、といふ一事實であつた。尤もかゝる傾向の發生・成長は、既に提案發表後の或る期間に於て多くの勞農諸團體から出された贊成聲明の上にも充分明瞭に讀み取られたものではあるが、しかし私は、今回の遊說中に、私自身が直接にまざ〳〵と見た樣々の具體的事實を通じて、それを一層明確に認識することが出來たのだ。そして私は今更らのやうに、間接にそれを文字で讀んだ時と、直接にそれを眼で見た時とを比較して、それが如何に私の感性の上に、その映像の鮮明さの程度を異にして現はれたかを注意しつゝ、非常に愉快に感じた。

私たちは新勞農黨樹立の提案中に、當面の客觀的情勢との聯關に於て合法政黨の形態を取つた勞働者農民の戰闘的同盟として出現すべき

新勞農黨は、その性質および任務から見てその組織形態上あくまで黨內デモクラシーの基礎の上に立つ强力な獨自の指導部を持つたものでなければならないものである、といふ趣旨を特に强調しておいた。更らに提案發表以來、我々の機關紙は、同じ論據から出發して、新勞農黨が向外的に全被壓迫民衆の日常利益と政治的自由獲得とのために大衆的規模に於ける公然の鬪爭を効果的に敢行しつゞけて行くためには、それはその實質的基礎を築きあげて行くといふ意味に於て、向內的にどこまでも工場農村に深く廣く根を張つて行かねばならないといふ一點を、反復的に主張して來た。ところが、今回私が久々振りに出門して關西地方の勞働者農民大衆に接するに及んで、私はそれらの大衆が既にさうした一切の理論・一切の主張の精神をしッかりと把握してゐて、しかも上述の通りに、それを一歩々々と實踐の上に移し行きつゝあるのを見た。まことに、必要こそ發明の母である。

勞働者農民大衆が自分たちの政治的組織の上に意識的に、自主的に、積極的に働き掛けようとする能働的意志、およびその普遍化! これこそは、各地で持たれた我々の演說會の外面的盛況を促迫した內面的諸關係の核心でありその集中點であるものではないか! そして、さうした事情が現に實在してゐるといふことは、或る意味に於て舊勞農黨時代以來の我々の陣營の多年の苦難の鬪爭の成果であると同時に、それは更らにまた、舊勞農黨時代以來の我々の陣營の實證をなして來た勞働者農民の戰鬪的同盟の發展形態として出現しようとしてゐる新勞農黨の將來に於ける强力なる活動の展開のための、既に用意された實質的基礎ではないか!

六

勞働者農民の同盟といふ稱呼は、舊勞農黨時代に於て、すでに我々の陣營內の大衆の間に、極めて親しみの深いものになつてゐた。そしてそれに含まれてゐる概念およびその重要なる現實的意義は、當時に於てすでに、それらの大衆によつて、よく把握されてゐた。それは具體的に、舊勞農黨が中心的任務としてゐた全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張とその政治自由の獲得とのための大衆的鬪爭との聯關に於て、殊に實踐の上で明確に理解されてゐたのである。即ち、この大衆的鬪爭の遂行に於て、勞働者階級があくまでその主導力として立たなければならないし、また事實上立つてゐるものであるが、しかし同時に、勞働者階級が主導力となつてそれを成功的に、勝利にまで進め得るためには、是非とも農民の參加・協力に須たなければならない。

他方、農民が現在因つて以て縛りあげられてゐるところの半封建的搾取の鎖を斷ち切り、更らに土地に對する自分自身の飢渴を最終的に癒やし得るためには何を措いても勞働者階級のみが彼等へ與へ得る支持・援助に頼らなければならない。――と、大體からいつた正しき論據から、勞働者農民の同盟の概念は、舊勞農黨によつて不斷に宣傳され、またそれに對する理解の程度に應じて實踐的に組織および行動の

上に具體化されてゐたものであり、また具體化される努力が拂はれてゐたものでもある。かうした事態は、現在の日本に於て、勞働者農民の同盟を必然不可缺ならしめる實質的基礎が既に充分に用意されてゐて、唯その組織化を待つばかりの狀態にまでなつて來てゐる事實を、まざ〳〵と反映してゐるものである。

舊勞農黨は合法政黨の形態に於て、かゝる意味に於ける勞働者農民の同盟としてその任務を遂行しその鬪爭を進めてゐたものであつた。たゞ當時にあつては、それに對する理解が尙ほ幾分漠然としてゐたものがあり、且つ同黨の組織および活動の方針の上に、今から見れば幾分の缺陷といへるものが尙ほ多量に含まれてゐた結果、同黨はこの方面に於ける强力なる活動の展開の基礎的條件として工場農村に深く廣く根を張ることに充分に成功するに至らずして、その餘りにも短き生涯を終はつたのだ。

かうした關係は、そのまゝ新黨準備會に持ち越され、改訂されようとして竟に改訂されないで過ぎた。

新黨準備會の解散と共に、左翼戰線の全局面が俄然として一變されるや、右の關係もまた、それにつれて根本的に變革されてしまつた。卽ち、その時を契機として、我々の陣營は當時の客觀的狀勢に照應して決然として結黨方針を全部的に放棄し、政治的自由獲得勞農同盟の新形態に移つて行つたのである。

勞農同盟は、その名が示唆する如く、依然として勞働者農民の同盟の實質を持つ鬪爭實體として存續すべきものと規定されはしたが、同時に最早政黨的形態を取るべきものでないと規定され、それから論理の糸を辿つて、獨自の指導部を持たないところの一種のカンパニアの組織であるべきものと規定され、最後にそれに加へて、『鬪爭の過程に於て發展的に解消すべきもの』と規定された。かゝる諸規定は、言ふまでもなくその前後から左翼を風靡し始めたところの、『プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない』といふ理論との聯關に於てなされたものである。

『勞農同盟は鬪爭の過程に於て發展的に解消すべきものだ』といふ理論は、當時の客觀的狀勢の下にあつても、尙ほそれが內包する諸關係に就いて、且つその必然的歸結への見通しの下に於て、また〳〵徹底的に論究し拔かれなければならない餘地を充分に存してゐたものであつたが、何にせよ、當時の事態の下に於ては、——尤も今日に於てもそれには大體變はりはないが——さうした種類の問題に對する大衆的討論が完全に封鎖されてゐて、一般的には理論の發展上空前の沈滯狀態が出現してゐた結果、それは左翼陣營に於て、その漠然とした意味に於てのまゝで、殆んど無批判的に受け容れられてゐたのであつた。

だが、理論の發展の問題はどうであれ、事實上の勞農同盟は、二月の下旬ごろから三・四月ごろにかけては、或る程度および範圍に鬪爭を展開してゐたが、しかし四・五月の境を契機として、急に殆んど活

動不能狀態に陷つたのである。それは、四・一六事件を通じて全左翼戰線の上に下された徹底的大打擊の影響のためであつたことは、言ふまでもないことであらう。それ以來勞農同盟は、最早そこかしこでの選擧鬪爭以外には殆んど手も足も出なくなり、しかも選擧鬪爭そのもののさへが時と共に段々と困難の度を增して行き、急速にその不可能の限界線にまで迫りつゝあつたやうな有樣であつた。かくて勞農同盟が最初から帶びしめられてゐたカンパニアの組織としてのその任務の遂行は、よし地方的に見て多少の例外はあつたにもせよ、全國的に見れば文句なしに、我々の陣營に於て未だ曾て見られたことのないやうな慘憺たる停頓狀態に移つて行つたのである。それは、勞農同盟がその歷史的任務を遂行しつくしたがためでなくて、最早全然それを遂行することが出來なくなつたためであつた。從つて、勞農同盟そのものに關しては、「發展的に解消」するもしないも、もはや問題でなくなつた。活動の停止するところ、そこに如何なる發展の樞機も見出され得るものでない。かゝる狀態の下に於て、勞農同盟は最早、少くともその現形態を一擧に脫却しない限り、發展的に解消するどころでなく、自然的に立ち腐れになるしかなくなつた。かくて今や我々に取つては、勞農同盟の前途への發展の通路の打開のために、何よりも先づ、その形態の轉換策を講ずることが焦眉の急務となるに至つたのだ。そして若し我々が確信してゐる通りに、今こそ勞働者農民の同盟が再び公然の舞臺に躍進して大衆的規模に於ける各種の鬪爭を強力に展開することをその最大の階級的任務とすべきだといふことが眞理だとするならば、勞農同盟のための轉換策は必然に、それをして、當面の客觀的狀勢の下に於て公然と効果的に活動し得しめる形態を具へてゐる勞働者農民の戰鬪的同盟の實體にまでそれを轉化せしめることを中心目的とするものでなければならぬ。

新勞農黨樹立の提案は、さうした中心目的を基準として立てられた勞農同盟のための轉換策——もしくは提案中に用ひられた用語に則すれば『局面打開策』——に關する私案の意味に於て、さきに私たちの手によつて、敢て不遜の譏りをも顧みず、親愛なる全國の同志諸君および大衆の批判の前に獻げられたものであつたのだ。

七

顧みれば、今から約二年半前の春四月に、私が始めて舊勞農黨の使命を帶びて關西地方の大衆に接して以來、私は同地方と東京との間を往復したこと幾度に及んだかを知らない。そしてその間に、私をそこに送つた團體は、幾たびかその名を變へた。それは最初には今言つた舊勞農黨もしくは當時の勞働農民黨であつた。次には新黨準備會であつた。その次には政治的自由獲得勞農同盟であつた。今また私は新勞農黨組織準備會の名に於て、宣傳のためまたそこにやつて來た。かうした追憶の糸を手繰つてゐると、私は瞬間的に、私の眼前に、その期間に於ける我々の陣營の惡戰苦鬪の歷史が繪卷物のやうに彷彿と

して展開されて行くのを見る。

更らに想ふ。我々の陣營の名はさういふ風に幾たびも變はつたが、しかしその實體は依然として變らぬ舊勞農黨以來の勞働者農民の戰鬪的同盟である。變つたといへば唯、後に來つたものが常に前に行つたものゝ發展した姿である、といふ一點だけである。そしてそれが、最近の、特に四・一六事件以後の、客觀的狀勢の急激なる變化──主體的諸條件の現勢との聯關に於て──に照應して取らうとしてゐる新形態が、取りも直さず、來るべき新勞農黨の姿である。

かくの如く、幾度倒れても直ちに起きあがり、しかも倒れた時に大地から吸收した新しき力を以て、再び起きあがつた時には以前よりも遙かに強く歩武を進めることが出來る不死身の巨漢！　それは我々の陣營の象徴ではないか！　若し我々が過去の經驗を回想せしめ得る我々の記憶と、現在の具體的事實を目擊せしめ得る我々の眼とに信賴することが出來るならば、我々をして新勞農黨の前途に無限の期待と希望を繫がしめよ！（完）

政界展望台

政友會の將來

馬場恒吾

犬養新總裁

犬養毅氏を總裁に迎へて、政友會は分裂抗爭の時代に入るのではないかと思はれる。犬養を迎へた爲めにさうなると云ふのではなく、今現に分裂抗爭の焔のある處に、犬養を迎へたのは火に油を注ぐ結果にはならぬかと云ふのである。

政友會總裁の詮考に當つて、候補者に數へられたものに、犬養の外に、床次竹二郎、鈴木喜三郎、中橋德五郎の諸氏があつた。鈴木が總裁になれば床次派が分裂すべく、床次が總裁になれば鈴木、中橋が分裂すべき惧れがあつた。此外に表面には現はれなかつたけれども、望月圭介、久原房之助の兩氏も候補者の中に數へられた。此の人々の中の誰れを取つても多少の分裂は免れまいと思はれ、其分裂を避ける唯一つの途として犬養氏を總裁に推した。問題は眞に分裂が避けられたかにある。

現在政友會内部に於ける分離抗爭の情勢は總裁の人選如何に依つて避けられるには餘りに根強き原因から出てゐる。それは或は日本の政黨政治が根底から改革されない限りは無くならない原因とも云へる。即ち政黨內部の親分が子分代議士を自個の私有財產の如く考てゐるからである。

總選擧の時、選擧運動費を出してゐる。そして當選した代議士は自分が製造した代議士である。だから己れの所有物だ。他人には指さしをも許さぬ。かうした子分の顏を眺めて親分はニコ／＼してゐるのである。同時に他の親分が己れの子分を誘拐しはしまいかと云ふ事に

極度に神經を尖らしてゐる。

經濟的に云ふ所の私有財產制度を否認することは、法律の禁ずるところであるが故に、敢てしないが、代議士の身柄に對する所の親分の私有財產的觀念はどうしても打破しなければならぬ。この議論には誰れも異論はないであらうが、扨事實はとなると、政友會の巨頭はそれ〲かうした子分の多きを競つて、互に覇を爭つてゐることは、世間の富豪が各々其財產の多きを爭つてゐるのと少しも異る所がない。今日でも三十名の代議士の子分があれば大臣になれる。子分なければ、如何に優秀な政治家でも大臣になれぬと云はれた。だから政界の巨頭は子分を作らざるを得なかつた。

政黨內部に代議士を私有財產視する氣分が橫溢してゐる場合には、さうした私有財產を有たぬものは物の數とも思はれぬ。恰も世間一般の社會では無產者も有產者も人間一人は一人として通用するけれども、有產者仲間の交際に於ては、彼れは幾何の財產を有つかと云ふ事が直ちに問題となる。そして財產の多少に依つて席順が定まる。人は人として評價されずに、其財產によつて評價される。政黨內部の領袖株の評價がそれに似てゐないと、誰れが云はうぞ。

犬養氏にはさうした財產があるか、その點では殆んど無產者である。彼れの革新俱樂部が政友會に合同したとき、彼れは子分十八名かを連れて行つた。「それを世間では犬養が田中に賣つたと云つた。併しそれは酷評であらうと思ふ。元來それらの子分の或者の選擧費は田中から出て居たのではないか。賣つた本人は知らなかつた。併し知る人ぞ知る。金の出所は田中であつたと傳へられてゐる。さうして見れば、犬養は田中の私有財產を預つてゐたので、田中が新店を開くに際して、其財產を取戾した迄である。犬養は金なくしては現代の政黨は遣つて行けないと悲痛な宣言をした。政界の私有財產制の慘酷なる仕打ちを滿喫したとも云へる。

犬養にして若し當年の意氣があるならば、宜ろしく此代議士を私有財產視する制度を打破すべきである。それは有產者のなし得る仕事でなくして、無產者のみがなし得る所ろだ。

何故然らば、政友會巨頭連が犬養を總裁にする事に反對しなかつたかと云へば、さうした子分の競爭に於て、犬養は競爭者ではない。從つて其點に於て犬養を恐れない。殊に今は總選擧が目前に迫つてゐる。其時に際しては、只現金を握つてゐるもの丶みが子分の代議士を作り得る。犬養が幾百萬かの運動資金を作り得べしとは誰れも期待せぬ。從つて巨頭は各自に自分の子分を作る。犬養は演壇を飾る花瓶と同じく、選擧が濟めば物置きに入れて、勝ちは子分を最も多く作り得たもの丶手に歸すると云ふ打算である。

犬養にして眞に政黨首領としての責任を盡くす積りならば、かうした巨頭が個々別々に振り蒔く現金を、一度總裁の手元に納さめしめ、そして候補者には總裁自身の採擇に依つて分配すべきだ。さうすれば初めて黨の統制が行はれる。さうでなければ黨は依然として群雄の[illegible]

據狀態に置かれて、總裁は只傍觀者の役を勤めるのみになる。

犬養總裁を承認した巨頭連は彼等自身の私有財産を捨てる意志もなく、從つて分裂抗爭の意志をも捨てない。只犬養が彼等の競爭者でない事に信頼したのみである。

如何にして金のなき犬養に金を持たしめるか。自分の子分の世話をするに急なる床次、鈴木、中橋、久原等は、黨の選擧費用として、彼等の軍資金を總裁に提供するものとは思へない。總裁お手元金は別途に作らねばならぬ。

それは舊政友會生へ抜きの幹部が持ち寄りで作るより外はない。兩山本、小泉などの人々がそれをするのである。昔し自由黨の黨首板垣は金無しの總裁であつた。黨費は其部下が持ち寄つた。却つてそれが自由黨をして果敢なる戰鬪をなし得さしめた。其氣分を復活せんとするのが、彼等の所謂政友會更生である。

此話しは犬養の總裁が決定する前からあつた。森幹事長が犬養に總裁就任を求めに、湯河原に往つたとき。犬養が卽座に承諾したのは蓋し此間の消息を知つてゐたからであらう。

犬養を暫定總裁と云つたは田中が死ぬる前の事であつた。今は暫定ではなく、恒久的な總裁として推されたのである。所ろで總裁候補を以て自任したる巨頭連は矢張犬養は實質的に暫定だと思つてゐる。そして犬養をば暫らく、彼等自身の野心を掩ひかくす所のカムフラーヂに役立つものと思つてゐる。

茲に犬養は鬪爭する目標は何であるかを示されてゐる。そして彼に鬪爭の資力が與へられる。

殊に犬養の性格はかゝる戰いを鬪ふに最も適してゐる。彼れの過去五十年の政治家としての經歷を見れば、彼れは外に向つて鬪はふよりは、内に向つて鬪ふのが得意であつた。彼は藩閥官僚と戰ふと宣言してゐた。然し寺内内閣の外交調査會に入り、山本權兵衛第二次內閣に入つた事を見ると、必ずしも薩長と手を握らないでもない。內に向つては改進黨以來の同志とは大抵一度や二度は鬪つた。大石正巳、尾崎行雄、河野廣中、島田三郎、關直彦など何れを犬養の政黨運動の犧牲になつた。犬養は黨を大きくするよりは、寧ろ小さくする名人だと云ふ經歷を有してゐる。

田中の遺産たる政友會に採つて、何よりも必要なは清黨運動だ。犬養の辛辣な皮肉、痛快なる毒舌が、眞實に政友會と國家の爲めに有益に使用される時期が來たのである。それで清黨運動が効を奏すれば、喜ぶのは政友會計りでなく、民政黨も喜び、國民も喜ぶ。

次ぎの總選擧

軍人が戰爭を好む如く、代議士は選擧を好む。これは人類の鬪爭心と云ふ本能的なものだ。殊に戰爭が勝てさうな場合には殊に鬪爭心が昂ぶる。その時非戰論を唱へたり、非解散論を唱へると忽ち卑怯者に

せられて了ふ。

安達内務大臣は民政黨は二百五十名を取つて見せると豪語してゐる。民政黨でない連中でも、或はさうなるかもしれぬとあきらめてゐる。かゝる時節であるが故に、民政黨の闘志盛なる事は當るべからずである。次ぎの議會に政府が挑戰的態度に出るは明白だ。

賣られた喧嘩なら、買はなければならない。政友會は如何に負け戰と知つても戰ふであらう。が併し玆に一つの問題が横はつてゐる。恰かも大蛇が道に横はつた如くに。それは金解禁の問題である。

金解禁に關して、悲觀、樂觀、種々の説が唱へられる。併しそれは悉く誤りにかうなつたらと云ふ豫想である。畢竟するに行つて見なければ判らない事に歸する。

假りに最惡の場合を想像しても、吾々はそれが何んだと云ひ度い事柄である。財産家の財産が少しばかり評價を減ぜられやうとも、國民の大多數は失ふべき何物をも有たぬ。何日迄も頭の上に大きな石を吊るされて、『今落すぞ、今落すぞ』と脅かされるよりは、一日も早く落して、其結果がよくとも、惡くとも、其所を出發點として前進するに限る。然るに政府はさうしない。財界動搖の爲めに、政權を奪取せられた記憶がまた新らしく彼等の胸に殘つてゐるからである。

政友會に一つの議論が起りつゝある。それは金解禁は政友會も贊成だ。どうせ行らなければならぬ事なら、早く片付けた方がよい。これは政爭を超越して、濱口内閣を助けてやらう。政爭は一時中止しやうと。

からして政友會に休戰を申込まるれば、政府は痛し痒しである。金解禁は無事に行ひ度い。同時に議會をも解散したい。一つは國の爲めだ。一つは黨の爲めだ。其何れを取るかに迷ふであらう。

尤も總選擧も全く國の爲めにならぬとは云へぬ。田中總裁時代に作られたる所の、政友會の不自然の多數を打破して、日本の議會を健全なる基礎の上に立て直ほす。それが金解禁よりも大切だとも云へる。併しそれは解散に依らずとも、犬養新總裁の内部闘爭乃至清黨運動に依つても同じ結果が得られる。總選擧來るや否や、其前に政友會の分裂抗爭時代が始まるや否や、今後の政界は亂を好むものゝ目には、興味の盡きる暇がないであらう。

政友會全面の疑獄

政界には地獄の業火が燃へてゐる。吾々はそれを見まいとして面をそむけるけれども、疑獄は何の方面にもある。見まいとしても、見ざるを得ない狀態である。

前に司法大臣、鐵道大臣であつた小川平吉氏が收監されたのは氣の毒だ。彼れは政友會總裁の候補者として最も有力な人であつた。若し彼れが金を取つたとすれば、政黨總裁たる資本を作らんとする爲めであつたであらう。彼れを收監するに際して、政府は陛下に奏上して勅裁を得たのである。若し彼れが無罪にでもならば、政府の責任問題が

起る。それは政府も承知してゐる事であるから、彼れを收監する前には何か確かな證據を握つたのであらう。先づさう想像するより外はない。

賞勳局の天岡總裁の事件は事柄は重大であるけれども、今迄に發表された處では政治的の意味が少なく、個人的な利慾が濃厚に働いてゐる。今後もし發展するとしたら、それが政治的になるであらう。

ダンテが地獄廻りをした時の如く、呻めくが如き、訴ふるが如き聲が、何處からともなく聞へて來る。

曰く、彼奴は引張れるぞ、あんな小さな金を諸方から取つては必ず引懸る。儂はそんな小さな口には手を觸れぬ。だから大丈夫だと、かう云ふのはまだ收監されない某前大臣である。小盜罪せられて、大盜免かる云ふ事を自慢してゐる。其良心と共に常識が麻痺してゐる。

曰く、金は取りました。其金は何處へも遣りません。なくなつたのは、途中で落したのです。何故屆けないかて、それを屆けやうと思つてゐるうち、つい忙がしくて忘れてゐました。其内に收監されたので、其儘になつてゐますと、其落したと云ふ金の高が百萬圓にもならう。百萬圓は百圓札を積んで五尺位の高さになる。(尤もこれは推定的に計算したのである)。それ丈けの分量の札束を落したと云ふのも非常識だ。

實業家で疑はれるのは大抵自分で自分の罪を無意識に振れて廻るからだ。或實業家は某大官(名を擧げて)はまだ引張られませんかと、政府の機密を知つてゐる方面にしきりに聞いて歩るく。其大官が引張られると自分も危險だと云ふ事を言外に現はしてゐる。さうして疑惑中の人物になる。

甚だしきになると、私が某大官に貸した金は僅か五千圓ですと、皆んなに廣告して歩るく、それは五千圓は貸したのであつて、賄賂ではないと云ふ意味である。將來自分が拘引された場合を想像して、豫め自分の行動を辯明して置く積りである。河豚を食つた後に、毒の回るのは今か今かと待つてゐるやうな恐怖狀態に居る。かうした場合の實業家は、個人や勞働者に對するときの實業家とは全く別人の觀がある。

豫審調書が全部發表されると、今政黨總裁にならうと思つてゐるものゝ中にも、少しづゝの飛沫を受けてゐるものがあるかもしれない。尤も司法大臣が參酌して、公訴事件に直接の關係なき豫審調書は之を發表せぬとしたら、其人達は失張涼しい顏をしてゐる事が出來る。

田中總裁の死は狹心症であつたに違いない。併し政黨に於ける彼れの股肱、政府に於ける彼れの部下がかうした事件に引懸つた事が彼れに無限の煩悶を與へた。そして此煩悶が彼れの死を速めなかつたとは、誰れも斷言出來ない。

疑獄は現世の地獄だ。そして政界全部が地獄だと云ふは、果して事實を誇張した言葉であらうか、政友會の將來は疑獄の發展如何に依つて影響されるが、豈それ政友會のみならんや。吾々は政界全部と、既成社會の支柱とが、業火の洗禮を沿びる日に直面してゐるのである。

經濟時評

金解禁の時期と其の前後

杉山幹

大正七年以來、十餘年間に亙り、金輸出禁止と云ふ、特殊の經濟的環境の下に置かれたわが國の經濟界は、今や濱口內閣によつて、金の解禁と云ふ大外科的手術を行はれんとしつゝある。濱口內閣は、この手術を行ふの準備として、公私經濟の大緊縮整理を高唱し、既に本年度實行豫算の削減を行ひ、更に明年度豫算の編成もこの緊縮方針を以てなさんと云ふて居る。現內閣の緊縮政策の內容に就ては、世上種々なる論評も行はれて居るが、金解禁の急に迫られて居るわが財界の局面打開策として、現內閣が公私經濟の緊縮整理の方針をとりたる事は當然の處置として識者の一般に認むるところで、且、この政策をとりたる結果、わが財界に及ぼしつゝある影響は、大體に於て順調に展開しつゝありと云ふてもよからう。

◇　◇

金解禁の準備としては、何と云ふても貿易狀態を改善して、國際貸借の均衡を保ち、解禁後に於る正貨の流出を防ぐことは大切である。この點より見て、近來わが國の貿易は大體順調の經路を辿つて居るのは喜ぶべきことである。即ち、濱口內閣が消費節約の宣傳を行つた影響もあつて、輸入は比較的減退の趨勢を示し、輸出は增加の步調を保つて居る。本年一月以來九月に至るわが國の輸出貿易は、十六億一千三百萬圓であつて、前年同期に比し、一億四千八百萬圓の增加である。一方、同期間の輸入は、十七億五千八百萬圓であつて、前年同期に比し、これまた約一億圓の增加であるが、入超額は前年同期よりも四千八百萬圓を減じて居る。しかも、貿易の內容を見れば、輸入品中減退したるは、主として國民の消費節約の結果と見らるべきもの多くこれに反し諸原料品の輸入額は、前年同期よりも著しき增加を示しつ

つあるは、わが國の財界が漸次堅實なる方向にむかひつゝあることを示すものと云ふ事が出來やう。尤も近來のわが貿易の好況なるは、對支貿易が一時支那の日貨排斥のために甚しく不況であつた反動として對支輸出が激増した事、並に金解禁を氣構えて米國を始めとし、支那その他のわが國品の販路地に於て思惑買の行はれつゝあること、等によるところもあれば、必ずしも今日の情勢を以て、前途をトする事は早計である。

現に、財界の一部には、本年の出超期は十月を以て終りとし、十一月頃より入超期に入るにあらずやと觀測するものさへある程である。けれども、これ等悲觀材料を考慮しても、本年のわが貿易入超額は、(朝鮮、臺灣の入超一億圓を加へ)二億四五千萬圓を出でまいとは一般の觀測するところである。果して然らば、貿易による國際貸借の改善は、約四五千萬圓に上るものと云ふことが出來る。

◇　◇

貿易以外のわが國際貸借の受取超過額は幾何に達すべきかは、世上の觀測區々なるも、假に大藏省當局の云ふが如く、一億五千萬圓程度に上るものとせば、これに輸出入貿易の評價差額約五千萬圓を加ふれば本年のわが國の國際貸借の純支拂勘定は四五千萬圓となる譯である。この點から見れば、わが國の國際貸借は未だ均衡を失してゐると見ねばならぬ。從つて、金解禁後の金の流出を防ぎ、金本位の維持確立を期せんがためには、更にわが輸出貿易の發展を圖り、入超額の減退を期すると共に、貿易外受取勘定の増加を圖るが爲に、海運その他わが國民の海外發展を企圖するの急に迫られて居るものと云ふべきである。

◇　◇

濱口内閣の成立以來、わが對外爲替は漸騰の趨勢を示し、對米爲替は約三ケ月間に約四弗昂騰し、今や四十八弗を突破せんとして居る。この爲替回復の原因は、前記の如きわが國際貸借の改善に基くところもとより大なるものあるべきも、金解禁の近く斷行さるゝべきを豫想し、内外の思惑の致すところも亦少からざるは、何人も認むるところである。この點に就ては、井上藏相の如きも「今日のわが對外爲替相場は、わが財界の實勢より對米爲替に於て約一弗位高きに失して居る」と云ふて居る程である。今後、この爲替の高勢は如何なる經路を辿るかは、政府の方針と内外經濟界の情勢によつて支配さるゝのであるから、俄に豫測する事は困難なるも、現内閣の方針にして變らず、内外財界の現狀が持續せらるゝならば、わが對外爲替は漸騰を續け、遠からざる將來に於て平價に近づくべきは一般の認むるところである。

◇　◇

こゝに於て、わが財界の一部には、政府は明年度豫算の編成を終りたる頃、金の解禁を斷行するであらうとの觀測が行はるるに至つた。政黨者のなすところ、もとより常理を以て判斷し難ければ、或は前記

の豫想は實現さるゝことなしと云ふべからざるも、濱口首相並に井上藏相が組閣以來各所に於て聲明したる金解禁の方針を裏切ることなくんば、本年內に解禁を斷行するが如きはあり得ざる事である。井上藏相は、爲替相場の急激なる昂騰は、財界に打擊を與ふること大なりとして、從來金解禁の即時斷行に反對し、且、單に爲替相場のみが平價に近附いてもそれが思惑によるところ大なれば解禁は不能であると云ふて居る。しかも、井上氏は前記の如く、現在の爲替相場の昂騰は必ずしもわが國の實勢に即したものでない事も認めて居る筈である。されば、假にわが對米爲替が今後二三ヶ月間に四十九弗臺に回復しても直ちに金の解禁を斷行する事は井上氏としては爲し得ざる筈である。少くとも爲替相場が平價に近づいて後、相當期間安定を保ち、井上氏の所謂思惑による回復にあらざる事を突止めた上でなければ既行し得ぬ筈である。されば、井上氏にして前言を重んずるならば、年內に金の解禁を斷行する事は不可能と見ねばならぬ。

◇　◇

現內閣の當局が從來聲明した金解禁の方針から見て此處二三ヶ月間に解禁困難の事情あるばかりでなく、內外財界の現狀はわが國の金解禁の斷行上、大いに考慮しなければならぬ事は數多ある。金の解禁に際し最も考慮すべきは、解禁後正貨が急激に國外に流出する事なきや否やである。この點に於て、前記の國際貸借の改善は解禁準備として最も大切な譯であるが、この外に內外金利の相異から資金の流出を見ることなきやを注意せねばならぬ。わが國の金融界は地理的に世界の中心市場と隔在し、歐米諸邦の如く國際間の金利の相異から國內資金の流動を見ること甚しからざるも、近年わが金融界にもその傾向漸く顯著になりつゝある今日であるから、この點を全く閑却する事は出來ぬ。しかるに、わが國の金融界の現狀は連年の不景氣と、金融恐慌後の資金偏在の結果、未曾有の金融緩漫の狀態なる一方、米英兩國の金利は近來著しく昂騰し、紐育市場の如きわが市場金利より遙かに高位にあるの現狀である。英米の金利昂騰の趨勢が我國の金解禁後の正貨流出の上に全く無關係であるとは何人も斷言する事は出來まい。われ等は內外金利の現狀に於て、金を解禁すればこれが爲に多額の正貨流出を見るべしとは思はざるも、內外金利の開きが更に增大すれば、正貨の流出を誘ふことなしと安心することは出來ぬ。井上藏相は、內外金利關係からわが國の資金が國外に流出するのは、主として海外に於るわが國の公社債類の買入の徑路を辿るだらうとの觀測をなして居る樣である。內外金利の開きが今日の程度なれば、或は井上氏の觀測どほりであるかも知れぬ。否、寧ろこの方面に對する國內資金の流出すら、海外市場に浮動邦債の少い現狀に於ては、懸念する程の事はなからうと思ふ。けれども、英米の金利が更に昂騰すれば、前記の本邦公社債類ばかりではなく、米國の大藏省證券、倫敦の貿易手形、コール等從來餘りわが國の資本家が投資しなかつた方面に對しても、資金の流出を誘ふことになるかも知れぬ。のみならず、わが國の民間會社が

從來英米に於て借入れたる高利債を内地債に借換えを行ふ事に至るかも知れぬ。この外、金解禁直後、正貨の流出を誘ふのは圓價の回復を見越して金解禁前に、圓の思惑買をなしゐたる資金が、解禁と同時に流出するものである。先年片岡藏相時代金解禁の噂ありたる際、この種の圓思惑は一億圓以上に上つて居つたと傳へられて居る。今日この種の思惑は幾何の金額に上るか、何人も確知する事は困難であるけれども、最低に見積つても五千萬圓を下るまいとの觀測は有力である。果してしからば、今日金の解禁を行はゞ、少くともこの種の資金は國外に流出するを覺悟せねばならぬ。

◇　◇

かゝる、内外金利の相異によつて生ずる國内資金の流動に備へ、調節するの方策は、わが國の金利政策である。即ち、外國の金利が高い爲に、わが國内の資金が流出するの恐れある際に、日本銀行の金利を引上げて之を抑制するのである。けれども、金融恐慌後生じた資金偏在に依る日銀の統制力失墜は、舊態依然として今日に及び、日銀が金利を引上げても市場の金利がこれに追隨せざる現狀を以て進まば、金利政策を有効に行ふ事は頗る至難と云はねばならぬ。英國の如きは金解禁の前後に於て、常にこの金利政策を以て資金の流動を調節したのであるが、わが政府はこの點に就て未だ何等の金解禁の準備を進め居らざる觀あるは甚だ不安に堪えざるところである。

◇　◇

金解禁後の正貨流出を防ぐの方法として海外市場にクレヂットを設定すべしとの說もある。英國も解禁に際し米國市場にこれを設定した。けれども、クレヂットの設定は、萬一の用意又は内外の人心に安心を與ふる爲にするなれば有効なるべきも、はじめよりこれによつて國際貸借の決濟をなさんとして設定するなれば、その效果は極めて少く、寧ろわれ等は正貨の流出を自然に委せ、爲替の自然的調節を行はしめた方が、國民經濟の堅實なる發達を圖るの道であると思ふ。

◇　◇

濱口内閣は、金の解禁を當面の主政策として標榜し、輿論の支持を受けつゝあるが、金の解禁は單にこれを斷行するは必ずしも難事ではない。解禁の前後に處するの策を誤まらず、以つてこの難關を打開し解禁後の金本位維持を容易ならしめ、且つ金解禁に伴ふて生ずる財界の打撃例へば失業者の續出等に處して機宜の策を誤らず、國民經濟の堅實なる發達を期するは頗る至難のことである。前記の如く内外の形勢は金の解禁後我が財界に惡影響を及ぼすの恐れある事項多々あるを以つて政府はこれに處するの策を講ずるの急務なるは言を俟たざる所である。金解禁を標榜した濱口内閣の運命は解禁斷行の成績によつて決せられねばならぬ。從つて政府與黨の間に昂まりつゝありと云ふ金の解禁を政略的に早く解決すべしと云ふが如きは、無責任の甚だしきものであつて、我等は濱口首相の聲明せる如く金の解禁問題は飽くまでも經濟的に解決せんことを勸告せざるを得ない。（四・一〇・九）

東京市財政の過去現在將來

田中廣太郎

一

近時東京市の財政は一體何うであるのか、又何うなるのであらうかが能く人の話柄になるやうである。蓋し東京市は我が帝都であるのに、それが今や財政的破綻に瀕さうとしてゐることが屢ゝ新聞紙等に報道せられるからであらう。

扨東京市の財政は過去に於てどうであつたのであらうか。今それから初めて現在將來に渉る市財政三世物語を少しく試みやう。

扨東京市の過去といつたからとて太田道灌や徳川家康の往昔にまで溯らうとするのではない。明治二十一年四月十七日市町村制が公布せられ、東京市が特別市制とは稱しながら兎に角新時代の一自治團體として構成せられたときから調べて見ると、明治二十二年度の歳出總額は僅に八二五、一二二圓に過ぎなかつたのである。固より當時と今日との間には格段なる貨幣價値の相違がある。それを超越してその數字をそのまゝ拉し來つて云爲するのは少しく時代錯誤の感がないでもないが、そうしたむづかしい理窟を拔きにして今日の各都市の豫算と比較して見るに昭和三年度の豫算に依れば大分市が八〇二、一七三圓別府市が八〇七、九九三圓であるからそれよりは稍多く、山形市は八八九、七九九圓、高崎市は八七〇、八九九圓であるから東京市よりは大なる數字の豫算を持つてゐるといふやうなことになるのである。何しろ當時の東京市には今日見るが如き各種の施設も公企業もなかつたことは事實である。即ち其の費額の内譯を檢して見ると左の如くであつた。

廳費	一〇八、一九三円
土木費	六〇一、五九六
衞生費	三、四九六
市債費	一、〇二〇
積立金	四〇、六七五
公園墓地費	九、一五二
社會事業費	四、七三六
財産費	五、三九二
養育院費	一、七九四
水道事業費	三四、八三四
其他	一四、二三四

明治三十一年十月一日に東京市の特別市制は撤廢せられ、從來市長助役を置かないで市長の職務は府知事が行ひ、助役の職務は府書記官が兼ね、市參事會は府知事、書記官及名譽職參事會員が組織してゐた制は玆になくなつて全く普通一般の市のやうになつたのであるが、其の完全自治體となつた明治三十一年度の市の歳出額は如何であつたかと云へば三、四五九、〇六四圓、昭和三年度の各都市の豫算で見れば恰度札幌市(三、四五九、四六七圓)、新潟市(三、五八九、一八七圓)と似通つたやうな數字であつたのである。

二

爾來星移り物變つて明治四十四年八月には市內の路面電車と其の竝營の電氣供給事業とを六千四百五十八萬餘圓で買收し以て自ら之を經營することになつたといふやうな一大事業の伸展のあつた外、上下兩水道や、保健衞生設備や、教育施設、社會事業や、市場、公園、墓地、道路橋梁や、將た又河港の設備等各般の施設の經營――それは都會生活をより愉快ならしめ、又は密集生活より生ずる害悪を除去するに必要なる公企業や公共施設の經營を日に進め月に擴げて、遂に今日の如き甚大なる都市經濟となつて仕舞つたのである。

今昭和四年度の當初豫算總額を見るに三〇八、六七九、〇二六圓である。全國都市の昭和三年度豫算總額は七四五、八〇八、二三八圓であるが、東京、京都、大阪、横濱、神戸及名古屋の六大都市の歳出は六億四百萬圓で全國都市歳出の約八割にも達して居り、東京市の歳出は其の六大都市歳出の半ばに近いといふ有樣なのである。それ故に大業に云へば全國都市財政の狀勢を壓倒的に支配するものは六大都市である、隨つて都市歳出の色彩は略ぼ六大都市に依つて左右され、而かも六大都市中の五大都市が束になつて初めて東京一市と對抗することが出來るのである。

扨然らば東京市三億有餘萬圓の歳出の內容如何と謂ふに、普通經濟の外左の十八特別會計から成立つてゐるのである。

普通會計	八四、五一九、〇七八円
水道會計	一九、三〇三、〇九六
公衆食堂費會計	九六七、八五六
貸屋會計	八七四、三一四
勞働賃金立替及就職旅費貸付資金會計	二、〇三七、六九六
公債償還金會計	四五、八九三、一九一
職員貸付資金會計	四一四、〇五六
火災共濟金會計	一、一六〇、二四三
用品及工場會計	七、七七六、二四一
復興建築貸付資金會計	四、七六六、八一二
土地區畫整理清算金會計	一四、二〇五、八六〇
養育院會計	六八五、四〇七
電氣軌道事業費會計	四七、四四〇、九五八
電氣供給事業費會計	一三、〇八〇、七六五
乘合自動車事業費會計	五、九一七、四三一

高速度鐵道事業費會計	一六、一一七、五〇〇
電氣事業減債金會計	三四、五八二、六〇四
電氣事業工場勘定及貯藏物品費會計	八、六二二、八〇〇
電氣研究所費會計	三一三、一一八

而して此の中の普通經濟の內容を分解して見て上述の特別會計の費目と合せると、それで東京市が今如何なる事務又は事業に如何なる程度で費用を投じてゐるかゞ略ぼ判るから今普通經濟中の主なる費目だけを擧げて見ると左の如くである。

歲出經常部	
市役所費	一、九三四、八六二円
區役所費	二、一六二、四八一
學事諸費	六、四九二、八八六
道路費	六、五五八、八六二
塵芥掃除費	一、五九三、八八一
河港費	六二二、〇八三
下水道費	九〇七、四八九
[illegible]發所費	五八七、三三四
特別給與金	九三四、一一〇
雜支出	五四三、九三六
普通臨時部	
補助金	二、〇三二、六七六
市債費	三、九九五、一四八
繼續費	
隅田川口改良費	二、六三〇、四四二
都市計畫事業街路修築費	三、六一三、九五一
中央卸賣市場分場建設費	一、七九一、〇二六
街路修築並土地整理費	一六、〇四六、三五二
帝都復興費	一五、九八三、二九二
震災復舊費(中等學校建設費等)	四、八六六、四〇三

三

市歲出の增大に隨つて市民の負擔も增加するのは自然の數である。明治二十二年度の市稅總額は六〇五、九七一圓で一戶當は二圓、一人當は四十四錢であつたものが、明治三十一年度には市稅總額一、一〇八、二五六圓、一戶當三圓五十錢、一人當七十七錢に增し、更に大正七年度乃至大正十一年度の間には一躍五倍も躍進して昭和四年度には二〇、五八九、六八八圓、一戶當四十二圓二十六錢、一人當九圓二十八錢となつて仕舞つたのである。

轉じて市債は如何と見るに明治二十二年度末の市債總額は僅に四[illegible]八百圓に過ぎなかつたが、明治三十一年度末には六百十六萬圓となり、今や此の八月末現在に於て五一三、四八〇、六六三圓となつてゐる。其の內容を見るに、

普通經濟	二二二、六六〇、五〇五円
水道經濟	五二、五八七、〇五四
電氣經濟	二一一、八七〇、九一五

轉貸債	二六、三六二、一九〇

此の中で外債は總額一億六千八百七十萬圓弱である。而して其の外既に起債することの豫定が確定的となつてゐるものを合せれば、市債額は實に九億三千四百有餘圓に達せむとしてゐるのである。斯樣に大きな市債を背負つてゐるから今後數十年間は巨額の市債償還を行はなければならぬことになつてゐて、普通經濟に於ては年に千六百萬圓乃至二千百萬圓宛、又電氣經濟に於ては年に二千萬圓乃至三千五百萬圓も償還を行はなければならないといふたやうな狀況に在る。

然し之と同時に東京市の財産も殖えて來て、昭和三年度末の財產評價總額五六一、六六三、〇八八圓の多きに上つてゐる。

四

以上で大體東京が自治體として生れ出てから今日に至る迄の財政史中の數字の主要なるものを記し盡した。顧れば東京市の財政は其の規模に於ても又市民の負擔としても隨分進展し增大した譯であるが、其の伸暢は大體順調に行はれ財政的難局に立つたといふが如きことはなかつた。處が此度は寔に財政的危機に逢着したと謂はなければならぬ事態に陷つて仕舞つたのである。尤も特別會計は電氣經濟を除くの外皆自給自足の狀態に在るから別に心配することはないが、普通經濟と電氣經濟とは實際非常なる苦境に立つてゐるのである。

電氣軌道經濟に於ては震災の爲めに千二百餘萬圓の資金を燒盡し、震災直後の應急施設並復興復舊等に七千餘萬圓の經費を投じなければならなくなり、其の財源の殆ど全部は之を公債に需むるの外なきに至つたので今後の元利支拂の負擔は巨大であるのに、他面其の乘車料收入は震災後の戶口の異動、省線電車の貫通や自動車の發達と一般財界の不況等に原因して年一年と減收を續けてゐる有樣である。今如何にして此の局面を打開すべきかは當局の苦心慘憺たる處であるが、その事は別の機會に述べることゝし玆には專ら普通經濟のことを叙するに止めたい。

五

普通經濟は何が故に爾かく窮迫狀態に在るのであるか、其の原因は之を索ねる迄もなく大正十二年關野の大地を搖り動かした大地震であつて、之に加ふるに一般的の財界不振が窮迫の程度を、一層高めたのである。

「一人みなのたのしび生きし都はも見渡す限り燒野なりけり」。大厦高樓立並びし帝都は一朝にして焦土と化し又いつの日にか更生しやうとまで一時は思はれたけれど、不撓不屈の我國民性は一瞬の後失望を勇猛心に代へて忽ち復興の大事業に着手したのである。政府と東京市が帝都復興の爲め投ずることゝした費用の總額は約八億であるが、其の中市の分を揭げると左の通りである。

事業ノ種別	事業費總額	財源						
		國庫補助金	市債				繰入金及一般市費	其他
			國庫借入金	預金部借入金	公募債	計		
帝都復興事業費	一三三、九一九、八三四円	四五、九五八、六四九円	—	一、五〇〇、〇〇〇円	八六、四六一、一八五円	八七、九六一、一八五円	—	—
街路修築並土地整理費	一七六、〇六二、九九四	九八、七〇四、三三九	四七、〇七七、〇〇〇円	一八、六六六、〇〇〇	一、六四四、三四〇	六七、三八七、三四〇	九、九七一、三一五円（電氣軌道繰替ヨリ）	
震災復舊費歳入缺陥補塡	三二、八〇七、一三五	—	二四、二三一、三〇〇	一、一四三、〇〇〇	一、七六八、八四〇	二七、一四三、一四〇	四、一〇九、九四六（一般市費）	府補助金 九九六、七五〇円 寄附金 五二〇、八五五 補償金 三六、四六三
震災應急施設費	一五、六四九、六〇〇	—	二、二〇九、七〇〇	一三、四三九、九〇〇	—	一五、六四九、六〇〇	—	—
計	三五八、四三九、五八三	一四四、六六二、九八八	七三、五一八、〇〇〇	三四、七四八、九〇〇	八九、八七四、三六五	一九八、一四一、二六五	一四、〇八一、二六一	一、五五四、〇六八

右の如く震災の爲め市は三億五千有餘萬圓の巨費を要し其の中約半ばに近い國庫補助金を受け得たけれども約二億圓の負債をすることゝなつた。之れが爲め差當り事業期間中は左程の苦しみもなかつたけれど、復興事業茲に終了を告げむとし其の償還期も本年度より開始することゝなつて見れば、其の償還年額實に一〇、九九八、八六〇圓乃至一四、九三七、七五〇圓といふたやうな巨大の額であることが昭和三十三年度迄も續く計算になつてゐるのである。

而して復興事業の竣成に伴つて其の施設の維持管理費の增加することも財政上看過し難き事實である。今國に於て執行しつゝある復興事業が完成すれば之を東京市に引繼ぐことになるのであるが、之に市が執行する復興事業とを併せて見れば道路の新增設面積九十七萬坪、橋梁の新設二百八十三、大小公園五十四、下水道線路の延長增加百二十九萬尺（約百里）、汚水處水場一、喞筒場五、運河五萬四千坪、中央市場一、市立病院五、塵芥處理工場三、區役所十二、託兒場並兒童健康相談所十四、公衆食堂十、質屋七、簡易宿泊所十、公衆浴場二、職業紹介所十二、授産場七等の新造となり、之が爲め市の經常費の增加が昭和五年度は四年度に比し二百數十萬圓を增すやうな計算となつてゐる。

其の外、國に於て執行した復興事業費に對し東京市は分擔金を出さねばならぬことの定めとなつてゐるが、之を負擔することゝなれば其の總額約一億二千萬圓程度になり、之を三十箇年に均分納附するとしても年額四百萬圓に上るのである。

六

翻つて歳入の狀況はどうかと見れば震災の直前大正十一年度の市税收入決算額は二千三百三十二萬圓であつて、同年度の豫算二千百三十

五萬圓に比し百九十萬圓の自然增收があつたやうな譯であるから震災前の本市財政は餘裕綽々たるものであつた。然るに一朝大震火災に逢ふや急轉直下して十二年度の稅收入は千八十萬圓に激減し、翌十三年度には稍々回復して千六百五十八萬圓となつたが、爾來財界の不況と相俟つて千七百萬圓乃至千八百萬圓內外の間を往來し、昨昭和三年度の如きは却つて減少して千六百八十餘萬圓を收入したに過ぎない。此の實績から考へれば昭和四年度の市稅實收は豫算額(二千五十八萬圓)より約二百萬圓以上は減收となるべき虞がある。

震災後の收入減は獨り市稅のみに止まらない。市有地の如き目下市が抱有してゐる收益財產たるものの總評定價格は八千六百有餘萬圓に上つてゐるが、之は仲々思ふやうに賣れないが爲め容易に現金にはならず、唯徒に市將來の財的潜勢力を表示するに止まつてゐる。斯くして今や歲入缺陷は千七百萬圓に達し支拂資金の調達に少からず困難を感じてゐるのである。

玆に於て東京市財政の根本的樹直しが市の最大重要問題となつて市來前市長の如き一應財政計畫案なるものが樹立された。それに依れば國庫及預金部借入金の元金は總て之を十年間据置き、利子は政府より免除して貰ふか又は補給を受けることとし、復興事業費分擔金の納付は之を免除してもらふこととし、而して新增稅六百十五萬圓を敢行して當面の急に應ずると同時に新規事業として路面改良事業以下一億千九百餘萬圓の事業を行ふ計畫としてあつた。然るに不幸にして市來市長の政府に對する要望は大藏省より一蹴されて仕舞つたので、本年度はもはや市が一時借入金までして震災復舊復興事業の爲めの負債の利子仕拂を行ふの餘儀なきに陷り益々市財政は窮乏の極に達したのである。此時偶々市長の更迭となつたのであるが新市長も亦固より此の財政的危機を脱するの急務なるを認め新財政計畫案を樹立して政府と市會との兩方面の諒解を求めつゝあるのである。其の財政計畫案は前市長の案に比すれば健實性を持たしめることに努力してゐるのである。市來案に依れば實際とれもしない市稅收入を恰も收納し得るかのやうに見積つてそれで新規事業公債の償還財源にしてゐるが、市の財政整理を爲すに當つて此の如き不確實なる計畫に據ることは不誠意の甚しきものであるので、市稅收入の如きも昭和四年度の實際に徵し明かに收納し得る見込の確實なる處を基礎として計畫を樹てゝある。それ故に堀切案は市來案の如くに華かではない。けれども凡そ破產に瀕せむとする經濟の樹直しにさう華かな鳴物入のやうな案があるべき筈のものではないであらう。

七

堀切案に依れば國庫借入金の元利並復興事業分擔金は共に全部國から免除を受け、公債公募及預金部借入金の元金は一般收入を以て償還し、利子の大部分は國庫の補給を受けむとするものであるから昭和五年度に於ては政府から合計約千六百萬圓の援助を受けやうとするので

ある。

而して歳入缺陷千七百萬圓は一時之を起債して補塡し之を十年間に償還せむとするのである。それが爲め年額二百三十萬圓を要するが之と復興事業の完成に伴ふ維持管理費の增加額（昭和五年度に於ては約二百八十六萬圓）及市税の減收年額二百萬圓並預金部借入金の元金償還額（昭和五年度は約四十萬圓）合計七百五十餘萬圓の財源を要すること丶なるのに對し、經費の緊縮整理で百二十餘萬圓を捻出し、殘額六百三十餘萬圓を新增税に依り支辨しやうとするのである。世間では或は此の新財政計畫案に於て新規事業の全然計上されてゐないのを以て東京市の如き日進月歩の都市を殺すものであると酷評してゐるが、此の計畫案は一應此際新規事業は之を勘考の中に入れることを見合す意味であつて、將來新規事業は絶對に否認するといふのではない。他日政府の財政緊縮政策及非募債政策が緩和され、而して一般財界も景氣が回復し更に新增税に堪へ、或は自然增收が豫想以上に出て、或は又土地の賣却等税外收入に於て增收を計り得る見込が十分立てば其の時には帝都として必要又は有用なる事業又は施設を行はうといふのであつて、現市長が其の第二段の企畫を爲し得る時機は蓋し遠からざる中に到達するであらうことを期することが出來るものと確信してゐる。

然らば東京市財政の將來や如何に！　東京市は果して財政的に「あかるき明日」を持つことが出來るであらうか。先づ第一は政府の財政的援助がどの程度まで得られるか。第二に市會がどの程度まで新增税を認めるかに懸つてゐる。

而して之が理事者の豫期し希望した程度まで行つた處で更に將來は如何といふに、昭和三十三年度迄は震災復興復舊事業公債の元利金支拂の爲約千百萬圓以上を市に於て負擔しなければならず、其の負債償還を全く完濟するのには昭和三十六年まで要するのである。それ故に市民の負擔が今日以上に當分輕減せられるやうな時機は到來しないであらう。然し又廣く全國都市の負擔狀態を通觀すると昭和三年度全國都市の市税一人宛平均額は九圓十五錢餘であり、又昭和四年度に於ける六大都市の市税一人當は京都市が十一圓十六錢、大阪市が九圓四十七錢、横濱市が九圓十八錢、神戸市が十二圓四十二錢、名古屋市が七圓十一錢であつて、東京市は既述のやうに一人宛九圓二十八錢である。而して東京市は全國都市に比しても、將た又六大都市に較べても、一人當の富の程度が全國都市の何れにも劣つてゐるといふ程ではないから、負擔の程度に於ても東京市民は特に重いとは稱し難いであらう

他日此の震災の創痍が癒へ、且一般財界の景氣が恢復する秋が臻つたならば、東京市は其の財力を充實して各種の新規施設も新規企業も之を企畫施行し、以て光彩陸離たる都市としての活動を爲すこととなるであらう。

斯く考へて見れば「明るい明日」がある譯である。

知らず、果して欣求淨土の念を懷いて市の未來に憧憬し得られるであらうか。

東京市の多産制限

目ざましい進步の眞意義

堺利彦

曾てサンガア夫人が、新マルサス主義の産兒制限論を振かざして日本にやつて來た時、この神聖なる仁道國には、同夫人に對する上陸禁止問題まで起つた。然るに今や、その日本國の首都たる東京市に於いて、白上助役安井社會局長等が大熱心で、『市内八個所の健康相談所』に『多産制限相談係』を置く事になつた。何といふ目ざましい進步だらう。

一體、ナゼ從來、人口制限が反對されたのか。××は多數の××を必要とする。資本家は多數の、賃金の安い、そして屢々失業に甘んずる、勞働者を必要とする。そこで支配階級は、何とか斯とかして、人口制限の傾向を阻止しようとした。それが一面には法律となり、一面には道德論となつて現はれた。

元來、支配階級は、貧乏といふ社會現象に對する自己の責任を廻避する爲に、マルサスの人口論などを歡迎した。曰く、人間に貧乏といふ事のあるのは、畢竟、食物が不足するからだ。文明の進步は食物の産出を增加させるけれども、人口の增加率は食物の增加率よりも大いに高い。だから貧乏を救濟するには人が銘々節制して餘り多く子を産まない樣にする外はないと。この說に依ると、貧乏人が子澤山で貧乏するのは、自業自得である。金持にも、資本家にも、政府にも、その責任はないといふ事になる。誠に好都合な學說である。

所が、更に新マルサス說といふものが現はれた。成るほど、多産は貧乏の原因に相違ない。然し性慾は節制しきれるものでない。だから避妊法を普及させるのが一番だ。健全な有効な避妊の方法を多數の人に教へさへすれば、貧乏といふ現象は社會から一掃される。そこで彼等は熱心にこの新マルサス主義を宣傳した。サンガー夫人は即ちその宣傳の使徒であつた。

支配階級は驚いた。舊マルサス主義は自分等の責任を解除してくれて、そして實際には只だ節制を說いたのだから善かつた。節制は幾ら說いても實行が無くて、そして自分等の責任は解除される。こんな結構な事はない。所が新マルサス主義は、それを本氣に考へて實行の避妊法を說きだした。舊マルサスは貧乏の存在を是認したが、新マルサス主義は貧乏の除去を計畫してゐる。支配階級は頗るそれを持てあました。

そこで彼等は避姙罪惡論を歡迎した。支配階級に歡迎される學者や道德家や宗教家が、續々と現出した。曰く、姙娠分娩は婦人の天職である。婦人がこの天職業を怠れば人類が滅亡する。婦人が子を產む事を厭がる樣な思想は、言語道斷な危險思想である。

こうなつて見ると、貧乏人は實にまごついた。子澤山の貧乏はお前達の自業自得だ、とお叱りを受けるから、成るほどそうだと思つて、成るべく子を產まない樣にしようとすれば、今度は又、子を產まないのに不道德だとお叱りを受ける。一體、どちらの說に從へば善いのか。然しその、彼等がまごつきながら依然として子澤山の現狀を續ける所に、支配階級の××が存して居たのである。

つまり支配階級は、二種の學者を使つて、或時は貧乏自業自得說を唱道させ、或時は避姙不道德說を說法させ、時に應じて其の反對した二種の學說を出したり引込めたりさせながら、その間に本當の、自分等の××を××して居たのである。そこで貧乏人が、その二種の學者達の註文に從はうとすれば、結局、貧乏人は子供を澤山產んで、益々貧乏して、そしてそれを自業自得とアキラメて、何んにも不平を云はないのが一番だといふ事になるのであつた。

そこにサンガア夫人がやつて來たのだから支配階級の間に上陸禁止問題が起つたのも當然であつた。我々から見れば、避姙奬勵一本槍で貧乏除去の大目的が達せられるとは考へられないこと勿論であるが、然し支配階級としては、スワ一大事と騷ぎだしたのも、相當無理のない次第であつた。

然るに社會の形勢は又漸く一變した。殊に最近、失業者の大增加が餘りの重荷になつて來た。マルサス主義の學說くらゐで支配階級の責任が解除されなくなつた。支配階級は何とかして、曲りなりにでも、多少その問題を解決しないでは、自分達の××と面目が保てなくなつて來た。それほど失業者の數が多大となり、それほど彼等の貧乏の程度が甚だしくなり、それほど彼等の××と、××と××が、强烈になつて來たのである。そこで支配階級、及びその附隨者は、種々の方法と形態と理論を以て、大急ぎで多少の失業對策を講じて居るのである。それが爲には、曾ての上陸禁止などは忘れた樣な顏をして、サンガア說に隨喜渇仰するほどの體たらくである。

これが即ち、東京市の『多產制限相談所』の『目ざましい進步』の眞意義である。資本家は今でも、賃金の安い勞働者を必要とするに相違ないが、それは差當り、不足を感じないだけ有り餘つて居る。資本家は又、失業に甘んずる勞働者を必要とするに相違ないが、勞働者が×××××、×××××じないと見れば、資本家も多少の方法を講じないでは居られないのである。××も同じく、矢張り多數必要ではあるけれども、それは今の所××の傾向である。

マルクス＝エンゲルス全集 第八巻

剩餘價値學說史

第一卷

第十二回配本

十一月初旬

マルクス經濟學說の精華たる剩餘價値學說史第一卷出づ。
マルクス＝エンゲルスの歿後、此の二巨人の學說の祖述者たるカール・カウツキーによつて整理され一九〇四、五、十年に涉つて公にされたものは、正に剩餘價値學說史全三卷であつた。その中の第一卷たる本書が、在來の諸經濟學說に對する批判に於て價値學說史上に占むる價値に就ては今更呶々の辯を要しない。本書の邦譯によつて讀者はマルクス價値說の眞隨を把握すべきである。

（目次一斑）

第一篇 重農主義者とその二三の先行者及び同時代の人々＝第一章より第十四章まで。
第二篇 アダム・スミスと生産的勞働の旣念＝第一章より第五章まで。
附錄＝生産的勞働の概念。

剩餘價値學說史第三卷は本全集第十一卷として配本濟

東京市芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二〇番

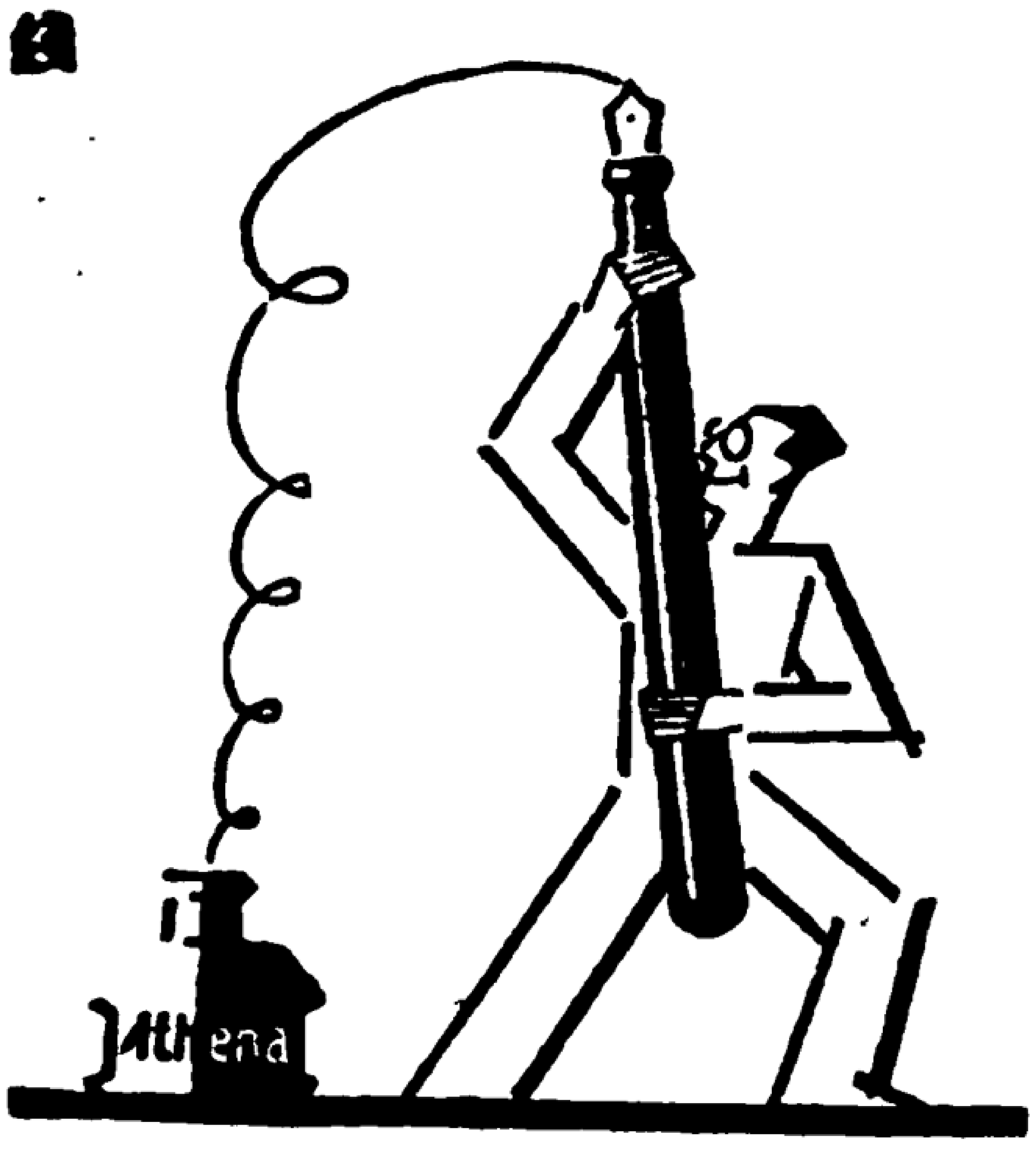
Onoto the Pen

驚嘆すべき耐久力

オノトペンの尖端には驚嘆すべき耐久力がある
アテナインキを適宜に補給すれば天空を快走する如く
縦横無碍一氣に數千語が書上られる

使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆　七圓五拾錢以上
アテナ萬年筆　參圓五拾錢以上
萬年筆用アテナインキ　參拾五錢
送料各十八錢（カタログ進呈）



¥1.50

少しも無駄がない

毎朝の髭剃にバレーを使へば研いで剃る迄唯の五分間
時間がかゝらず手間が省ける、シカモ一枚の刃が半年
保つから費用は僅かで少しも無駄がない

＊　＊　＊　＊

剃刀で研器を兼ねる

バレー自動研安全剃刀

"VALET" Auto-Strop Safety Razor

B型　一三・五〇　以上各種
C型　一・五〇　二・〇〇　三・三〇　四・八〇
替刃利用ナイフ（刃一枚付）・九〇

販賣所　大百貨店著名洋物雜貨金物店等
取次所　改進社代理部



東京＝日本橋通
丸善株式會社
大阪　神戸　京都　名古屋　横濱　福岡　仙臺　札幌
東京＝神田・芝三田・早稻田・丸ビル

現代疑獄物語

白柳秀湖

一　概説

明治、大正、昭和と順次に目星しい政治的疑獄の跡を追つて考へて見たゞけでも、過去六十年間、此國を支配した權力の中心が、時代につれて如何に推移して居るかといふことがよく分る。

勿論、茲に、政治的疑獄といふのは、その事件が如何ほどか中央の政局に關係があるものをいふので、坂本龍馬下手人事件、島津參謀暗殺事件のやうに被害者の人物が大きくても、事件が、全然刑事疑獄として終つたものや、相馬家事件、海江田家事件のやうにお家騷動として終つたものは別に考へたい。

明治初年の政治的疑獄事件には、薩閥と長閥との政權爭奪から互に間諜を放つてその罪惡を爬羅し、不正を訐發し合つた形跡の歷然たるものがあり、其間に國民の反閥族的感情や、政黨者流の爲にする所ある宣傳が加はつて、事件を彌々怪奇にし、條理を益々複雜にして居ることも殆ど疑ひを容れるの餘地がない。國會開設後は事が多く政黨政派の利權に關し、その特に東京府會、東京市會に關する疑獄の多かつたのは、東京市の消費力が、最も確實にして且つ最も安全なる營利若しくは放資の對象として各派の勢力扶植の目標となつたからであらう。

大正以後二大政黨對立の形勢が成ると、薩長の爭ひはその形を變へて三井系對三菱系二大資本閥の爭鬪となり、延いて日本國中の有らゆる對立的勢力を驅つて兩者の孰れかに右袒させなければ措かぬ勢となつて來た。さうして内閣の變る每に、三井畑と三菱畑とから交々疑獄の犧牲を出すやうになつて來た。

先づ明治前半期に於ける薩長兩藩閥の暗鬪時代から見てかゝることとしよう。此時代に於ける疑獄の代表的なものとしては、山城屋事件（明治四年）小野組轉籍事件（明治六年）井上馨尾去澤銅山事件（明治六年）三谷三九郎水油事件（明治六年）藤田組贋札事件（明治十二年）の五つを擧ぐべきであらう。その中で山城屋和助事件は疑獄とまでは行かなかつたが後の三谷三九郎水油事件の伏線としてその概要を紹介して行くこととする。

二　山城屋和助の自殺

明治四年十一月二十九日の朝、陸軍省の一室で山城屋和助と呼ぶ、當時有名な陸軍の御用達が次の如き辭世の歌を遺して見事に自殺して果てた。（和助の歌が不出來なので、改作されたらしいのもある。）

人は死すべき時に死せざればの辭、げに辱しく覺え候

恥れある越後の雪と消ゆる身の
存へてこそ辱しき今日

野村正風

和助時に三十七、これからといふ年輩であつた。

彼はもと野村三千三といひ、長州奇兵隊の一人で、山縣や、前原とひとしくその名を謳はれたものであつた。長州が英米佛蘭四國聯合艦隊に馬關を砲撃された時、前夜紅樓に醉を買つて、戰爭の間に合はず、痛恨の極、自殺して申譯しようとしたが、前原に止められ、君國の爲め死すべき命をながらへて、長州の密偵となり、其後は町人に姿をやつして、江戸、横濱を往來した。彼が横濱南通りに店を開き、陸軍の御用商人となつたのはそんな因縁からであつたといふ。

彼は騎兵隊時代から、高杉晋作等と茶屋酒に凝つた男ほどであつて、派手好きの、洒落な、而も膽玉のしつかりした男であつた。

明治四年の紀元節に日本橋本町の彼の家では日の丸の國旗を出して店頭に掲揚した。當時は今日と違ひ、お役所の外、日の丸の國旗を町家の軒にかけることは出來なかつたので、直に町内の評判となり、邏卒が店頭に來てその僭越を咎め、國旗を引込ませようとしたが和助はいつかな肯ぜず、自ら陸軍省に出かけて行つて、時の陸軍卿たる山縣に迫つて、民家も官衙と同じやうに、祭日には國旗を掲げさせることにしたといふことが傳へられてゐる。

其和助は、諸役所納品原價取調べの用務を帶びて洋行し、巴里に於て同地の豪商某の女と婚約成り、その爲め多くの金錢を浪費した。而もこれが駐外公使の知る所となり、政府に聞知するものがあつたので、陸軍省も後難を懼れ、俄に和助に對して貸付金の返納を迫つて來た。然るに安んぞ知らん、和助が佛蘭西から歸つて見ると留守中番頭等は恣に相場に手を出し、店の金庫に大穴をあけてゐた。されば和助も官金返納に就て、全くその方法に窮し、男の一分が立たぬ所から、陸軍省の一室に自刄したと傳へられて居る。

彼はその自刄を決心した前夜、陸軍の武官に貸付けて置いた借證の證書を、悉く燒き捨てゝ了つた。死人に口なし、どのやうな秘密がその中に在つたであらうか。和助と陸軍當局との關係はどうであつたか、和助の死は長閥の罪惡を一切暗から暗に葬つて了つた。彼の死に依りて國民は彼に依つて聽くべかりし多くの事を逸したのだと當時山縣一派に快からぬ人々は、大に和助の死に同情して、種々な臆説を立てたものであつた。

明治四年といへば、廢藩置縣の行はれた年で、其處には、徴兵主義

を主張する長の山縣及びその一黨と壯兵主義を主張する薩の西郷及びその一黨との間に息づまるやうな確執が行はれて居つた。是より先、西郷は東北鎭定の使命を果して東京に凱旋すると、岩倉、木戸、大久保等の施設する所が氣に入らず、飄然、郷里鹿兒島に歸臥して、また中央の事を意に介せざるものの如くであつた。かゝる間に中央では廢藩置縣の機が熟し、薩長土肥四藩の兵を東京に集中して、此改革を悦ばざる諸侯の叛亂に備へる必要が起り、それには西郷と板垣とを何時までも地方に置くことが出來なかつたので、鹿兒島なる西郷の許には三たびまで勅使が下つて、漸と之を起たせることが出來た。

西郷と板垣とが相携へて上京し、薩長土肥四藩の兵が東京に集中されると、直に廢藩置縣が斷行された。越えて五年七月、西郷は陸軍元帥に任じ、近衛都督を兼ね、山縣は陸軍大輔に補し、薩と長とは都督府と陸軍省とに據つて相對峙する形勢となつた。さうして嚢に征長の役に於ける奇兵隊の勝利以來、高杉、大村の遺策を繼いで熱心な徴兵主義者である山縣と、薩摩武士の傳統の上に立ち、封建的壯兵主義の絶對的信奉者である西郷との間には、かくして刻々或る危機が迫りつゝあつた。さうして山城屋事件は縱令その局面が極めて狹少であつたにしても、極めて意義の深い事件であつた。

三　尾去澤銅山事件と三谷三九郎水油事件

小野組轉籍事件は尾佐竹博士が既にシッカリしたものを書いて居られるので、それを筆者が玆に限られた紙數でザッとした紹介をするは、無意義のやうに思はれる。但し、此事件に關しては、小野組と三井組との關係に就いて、尾佐竹博士の言及して居られぬ方面で別に調べた材料もあるから、機を見て發表したいと思つて居る。

秋田縣鹿角郡の尾去澤銅山は明治の初年舊南部藩の人村井茂兵衞なるものの名義となつて居た。初め南部藩が外國人に債を負ふ時、村井は藩の求めによりその保證に立つた。幾もなく廢藩置縣となり、大藏省が一切の外債を引繼ぐこととなり、村井にその辨償を求めたが、村井は頑として之に應じない。其處で大藏省は斷然村井の尾去澤銅山を差押へ、之を大藏大輔井上馨の昵近者である岡田某に拂下げた。玆に於てか物議が囂然として起つた。

間もなく井上は財政問題で江藤、大隈と衝突して野に下り、澁澤、益田等と提携して實業界に馳驅する用意をして居たが、明治六年、澁澤、益田の兩名を伴つて尾去澤の銅山を視察し、從四位井上馨所有の標柱を建てた。

村井茂兵衞は之を知つて憤慨措く能はず、狀を具して之を裁判所に出訴した。江藤は村井の訴狀を見て大に井上の不法を憤り、司法大丞島本仲道に命じて、嚴重に事實を審按し、井上を縛して、獄に投せんとさへした。處がちやうど其時江藤が征韓論で辭職することゝなつたので政府の形勢が一變し、江藤の意を承けて強硬に井上の處分論を主張した河野敏鎌も司法省から元老院に移され、尾去澤銅山事件は東

京上等裁判所で久しく審理中であつたが、明治八年十二月に至り、維上は罰金三十圓の輕罪で釋放されることゝなつた。

三谷三九郎水油事件といふのは、前掲、山城屋事件の延長と見てもよい事件である。彼此對照して考へると頗る興味が深い。

三谷三九郎の家は江戸にあつて、代々幕府の金方及び諸藩その他諸侯の御用達をなし、江戸十人衆の一に數へられ、三井、小野、島田と並び稱せられた富豪である。其諸藩から矢藏頭人の格を以て遇せられて居たのに見ても、長州との關係の尋常でなかつたことを知ることが出來る。明治の初年大村益二郎が軍務官副知官事となるに及び、三谷組に陸軍の會計御用扱を命じた。

明治五年當主三九郎は年僅に十八で、家事は一切之をその手代に任せて居た。十一月手代伊澤彌七といふものが、大阪の水油五萬四千二百十樽を、代金八十一萬六千八百十六圓五十錢で東京商社の手から買入れた。然るに水油の相場が俄に下落して即時に之を賣却する時は多額の損失を招かなければならぬことゝなつたので彌七は支配人の、南平左衛門と熟議の上、主人三九郎の承諾を得て、明治六年一月十九日その水油を擔保として東京商社から、四十五萬圓を借受け、其内金十五萬圓は同月三十日限り、殘額三十萬圓は翌二月二十五日限り辨濟すべきことを約束した。

然るにその後水油の相場は益々下落して、彌々金融に支障へることとなつたので、彌七はいたく焦慮し、平左衛門にすゝめて、水油を擔保として、他から更に金融を得、一時の急を凌いだ上、相場の立直るのを俟つて双方の債權者に辨償したら宜しからうと云ひ、平左衛門も之に贊成して、手代の樋口泰次郎、藤田次郎兵衛兩人を横濱に遣し、和蘭商社の總代ピストリウスに交渉させた結果、九分金の券（九分金の券といふのは、猶ほ九十圓の受取證といふが如き意味合である。例へば代金百圓の水油を賣買する時、買手より賣手に手附金として十圓を渡し、期日に至り殘金九十圓を支拂つて物品を受取らうとする場合に賣手から買手に渡す受取證の如きがそれである）を證として、更に水油を書入れ、二月四日ピストリウスから十萬圓を借受け、四月四日を以て償還期限と定めた。

主人三九郎は此事を二月十五日頃に至つて始めて平左衛門から話されて驚いたが、契約後でもう何ともすることが出來ぬ。期日に至ると水油の相場は又々下落して手のつけやうがなく、二重書入れのことも暴露して、ピストリウスは三九郎を對手取り、神奈川縣裁判所に訴訟を提起した。裁判所は三九郎、彌七、平左衛門等を召喚して審問の上五月八日水油を競賣に附して、債務を辨償すべき旨申渡した。然るにピストリウスは此判決に滿足せず、直に司法省裁判所に控訴した。

曩には山城屋和助の自殺事件あり、今又三谷三九郎事件あり、而も之と時を同じうして京都には小野組轉籍事件あり、東北には尾去澤銅山事件あり、明治六年は實に政府筋に關係のある疑獄事件で持切りの姿であつた。

四　裁判官忌避の事始

かやうな次第で三谷三九郎事件も世間の評判高く、北米合衆國全權公使兼和蘭全權公使デロングが外務省に出頭して、速にその解決を付けよと迫るに及び、世間の耳目はいやが上にも聳動して、其注意は一齊に三谷家及び之と深い關係のある長閥の上に集中されることとなつた。

然るに、此時毛利家の家職で、廣澤兵助の兄に當る柏村信は、深く三谷三九郎の窮狀に同情し、其友藤井八十衞と俱に代言人兒玉淳一郎を三田の寓に訪ひ、託するに幼弱な三九郎の爲に、その代言の任に當らんことを以てした。兒玉之を諾し、司法省權大判事玉乃世履に面會して、豫めその出廷に關する內諾を得、司法省裁定例に基き、初めて司法省裁判所に出廷して大に司法省部內を驚かせた。此裁判には兒玉の外に中定勝といふものも代言人として出廷した。中は石見國安濃郡太田村の人で、大阪の緒方洪庵の門に學んだ關係から福澤諭吉翁とは至極懇意であつた。明治元年以來、醫員として大阪府假病院に勤めたのが、官途に就いた初めで、明治六年五月までに累進して陸軍二等軍醫正に任じ、從六位に敍せられて居たが軍醫の松本順と衝突して明治七年一月職を辭し、麴町番町に住んで居た。中が三谷三九郎の副代言人となつて出廷したのは、福澤翁の紹介で、兒玉と相識つたからであつた。

兒玉は備後の藩士で、弘化三年五月七日の生れである。初めの名を榮五郎といひ、少時藩の明倫館に學び、慶應の末、長崎に遊學し、鹿兒島藩邸に入りその保護の下に、米國人フルベッキ及び阿波人高橋就正（芳川）に就いて英語を修めた。明治二年六月山口藩から法律視察の命を受けて、北米合衆國に赴き、明治三年十一月一日歸朝して、翌月更に太政官から刑法科の研究を命ぜられ、再び合衆國に赴いてワシントン府裁判所に出入し、司法事務を見習つて六年四月歸朝したのであつた。三田の福澤翁は歐米の新知識として深く兒玉を信じ、賓客として其の邸に延き、呼ぶに先生の敬稱を以てした。

裁判は明治七年二月十九日を以て開かれ、審理は玉乃權大判事が主として之に當つた。兒玉は中と打合せて、先づ三九郎から東京商社に對して違約金を請求すべき正當の理由があるからとて、一時ピアトリウスの訴訟を延期せられたき旨を述べ、ピアトリウスも別に異議の申立をしなかつたので、局面は一轉して三九郎の東京商社に對する違約金請求の訴訟となつた。

當時、東京商社の總頭取は三井八郎右衞門、三井次郎右衞門、小野善助の三人、頭取は深尾總次郎、岩城利兵衞の兩人であつた。本來此訴訟は前の事件とは全く別で、當然第一審裁判所たる東京裁判所に於いて行はるべきものであつたのに、司法省裁判所も平氣で之を受理し、三井側にも異議を申立てるだけの見識がなかつたのは甘いもので、時代がどんなに幼稚であつたかといふことが思はれる。此事件進行中に、三九郎が玉乃世履でない、他の判事から出廷を命

ことがあつたのに、之に應じなかつたとて、裁判所は直に令狀を發し、三九郎を拘留した。兒玉は福澤翁の助力を得て、人身保護の上願書といふものを作り、之を全く筋違ひである東京府知事大久保一翁の許に提出し、それが効を奏して三九郎が歸宅を許されたといふ、今日から見ると想像も及ばぬ珍談がある。兒玉は之に力を得て『掛替の上願書』といふものを提出し、現裁判官は訴答文例第二十條に所謂『曲庇壓制』の嫌ひありとて、忌避の申立をした。之が明治以降裁判所に於ける裁判官忌避の嚆矢で、尾佐竹博士の小野組轉籍事件に於ける『參座制』の研究などと相俟つて、我が法制史上注目すべき事實の一である。

併し此忌避の申立は兒玉代言人にとつては成功のやうで、却つて失敗であつた。兒玉の上願により、權少判事中村元嘉が代つて掛官となると先づ水油の倉庫に臨檢が行はれ、尋いで問題の急所々々に種々の調査が行はれ、明治七年十二月七日、原告の申分相立たずと申渡された。さうして事件は直にピストリウスから三九郎にかゝる控事訴訟の審理に移り、明治八年二月七日、三谷家は遂に身代限りを申渡され、追つて水油の二重書入れをした名義上の責任者として三谷三九郎は贖罪金二圓二十五錢、神奈川裁判所に差出した書類中、二重書入云々の文字は、同裁判所の加筆であると不實を申立てた罪に對して支配人南平左衛門は懲役八十日、（但し、水油二重書入れ事件は懲役六十日重きによりて處斷せらる）又、水油二重書入れの事實上の責任者として手代伊澤彌七は懲役七十日を申渡されて、一件悉く落着した。

後年『二六』が三井攻擊の材料として訐發した三谷三九郎事件なるものは主として三谷が破産を申告されてから後の事件にかゝるものであるが、何分新聞紙の記事であるから何處まで事實かはよく分らぬ。新聞記事の方は『財界太平記』に殆どその全部を載せて置いた。裁判所の記錄によつて發表するのは之が初めてである。彼此參照せられて多少の益ありと信ずる。

五　東京市不正鐵管事件の發端

次に順序から云ふと、藤田組贋札事件を紹介するのであるが、之は自分の手許にある材料が尾佐竹博士の『疑獄難獄』以上に出る自信がないので止めることにする。

さて以上述ぶる所は長閥と薩閥との暗鬪が生んだ明治初年の五大疑獄で、その後明治の中期から末期にかけての疑獄には、司法官弄花事件、星亨收賄事件、東京市鐵管事件、東京市會議員收賄事件、教科書收賄事件、日糖事件、之は疑獄といふのも少し當らぬが、日比谷騷擾事件などがあり、大正から昭和にかけて、海軍收賄事件、大浦兼武瀆職事件、八幡製鐵所事件、木内重四郎豚箱事件、東京市板舟權事件などがある。

右の事件を一々紹介することは、梗概だけでも容易でないから、その中代表的なもの一二を拾て見ることとしよう。

明治二十八年十月三十一日朝、日本鑄鐵會社々長濱野茂は日本橋蠣殼町二丁目の邸宅より突然、東京地方裁判所湯淺判事の手に依りて拘引せられた。それから同會社の會計掛り濱野萬助（茂の養子）支配人大越弘毅、技手監督山本關太郎、技手三上英太郎、職工綾部松太郎、布施榮治、山田作藏、中原清一郎等も拘引せられ、警視廳にて一應取調の上、本田貞次郎を除くの外、凡てその儘拘留せられ、同時に各被告人の家宅に對しては大搜索が行はれた。

尚ほ當日午後湯淺豫審判事は日本鑄鐵會社に出張して、鐵管器械類十八個を押收し、翌十一月一日、警視廳より巡査を派して、日本鑄鐵會社職工監督員東京市水道工手、美川出生士、東京市水道工手佐野喜三郎及び高田和太郎の三名を拘引した。

何事の犯罪ぞ、何事の拘引ぞ、東京市民は驚いたが、その犯罪の內容、拘引の目的は直に分つた。それは日本鑄鐵會社が、東京市を瞞着して居た鐵管の詐僞が暴露し、司法官の活動が開始されたのであつた。

是より先、日本鑄鐵會社は、東京市の註文によつて製作した水道鐵管中、水壓試驗の結果、市からその製作十分ならずとの理由で、却下せられたものを、同會社員に命じ、再び繕ひ直し、密かに檢査濟みの鐵管と引換へさせた。さうしてその鐵管詐僞は次のやうな方法を以て行はれたものであつた。

由來東京市が鐵管の檢査をする時は、先づ鐵壓試驗をなし、若し不完全のものあれば、その鐵管の面に鑄込まれた東京市の記號を破壞して目印となし、合格の管には、右記號の上に、コールタールを塗付し、それで檢査濟と否との區別をすることになつて居た。それから檢査濟の鐵管と雖も、水道事務所から現場へ運搬された後は、技師、技手等をして鐵鎚で其鐵管を叩かせ、瑕疵の有無を調査する上に萬全を期してゐたので、檢査員の眼を瞞着することは容易の事ではなかつたのである。

六　職工長會社の不正を密告す

而も千丈の堤も蟻の穴より崩るゝの譬へのごとく、同會社を解雇された前職工長森田又七の口に依りて恐るべき秘密は暴露された。森田の言に依ると、會社では一旦不合格となつて却下された鐵管に更に記號をはめ込み、その上にコールターを塗抹して、檢査濟みの體裝ひ、夜陰に乘じて之を現場に運び、合格したものと引き換へて居た。かくして持ち歸つた合格の鐵管はそれに鑄込んである番號、例へば、檢査濟千番に、二の字を加へて二千番とし新たにこれを鑄消したるものゝ如く裝つて、再び技師の試驗を求めて居たものである。

此恐るべき秘密が、森田の口から傳はり、東京府知事三浦安の耳に這入つたので、三浦知事は捨て置くべきにあらずとして、直に工事長中島鋭治、事務長保川忠兵衛の二人を現場に遣はして、事實を調査せしめると、果して密告の通りであつたので、此處に市參事會を開きて

その筋へ告發することとなつた。

されば裁判所は此の告訴狀に依りて以上の人々を拘引し、その家宅を捜索し、市ヶ谷邊に散在してゐた二百本餘の鐵管を檢査すると、果して凡そ四分の一、則ち五十本内外は記號若くは番號を後からはめ込んだものであつた。

會社の詐僞は單にそればかりではなかつた。鐵管に附屬する水壓試驗器も頗る不完全なることは東京地方裁判所の命により谷口博士が試驗したことにて證明され、後、湯淺豫審判事、森檢事、伊藤、武東の兩警部、市參事會員谷干城、辻新次、富田鐵之助の諸氏が淀橋給水場に至りて試驗したるに、何れも不完全にして破損若くは龜裂を生じて、一本も完全なものがなかつた。

元來、東京市に對する鑄鐵會社は、鐵管納付の契約履行が出來ぬので、十箇月を條件で延納といふ虫のいゝ願ひを市會に持ち出し、市會の態度案外强硬なるより、前の社長であつた雨宮敬次郎、阿部彦太郎、濱野茂の三人が個人の資格で保證の位置に立ち、豫定日數に完納することが出來ぬ時は、當然契約の本文通り、違約金として二萬九千百圓を沒收すべき筈になつてゐたので、市參事會は直に違約金の外、損害賠償金として五萬三千七百餘圓を計上して、更らに私訴を提起し、會社及び社長濱野の邸宅に財産差押へを執行せしめた。

而して、尙ほ同會社の保證金を全部沒收すべく三浦知事は同會社に對して左の通知を發したのだ。

日本鑄鐵株式會社取締役　雨宮敬次郎

明治二十八年八月三十一日、鐵管請負契約解除の儀申請に對し、同年九月十四日心得方指令置候處、今回其社鑄鐵詐僞の事件たるや、本市の爲め非常の損害を生ぜしめしのみならず、其行爲毫も酌量すべき點なきにより、更に前指令を取消し、且つ其社に於て請負を完結する能はざるものと認むるに付き、契約書第十六條に依り、保證金は全部沒收候條、此旨心得べし。

明治二十八年十一月六日

東京府知事　三浦安

右に對して雨宮は、「拙者は目下事務擔當の事務役に之れなく、何分共御詮議致兼候」と逃げを打つたが、知事の通知に接し、越えて二日、芝紅葉館の鐵道懇話會に臨み、不敵にも一場の演說を試みやうとする刹那、令狀を執行されて、天下の雨敬も空しく鐵窓の人となつた。

七　天下の雨敬を恐喝し損ねた檢事

濱野の家宅捜索で、次のやうな雨敬の手紙が現はれた。

市會の處は之れ迄手を廻はし置きしが、尙ほ足下も十分手を廻はさるべし。尤も常置委員五名へは、其れ〴〵手を廻はし置きたり。其の他七八人は、小生の手先にて必ず賛成せしむるやう取計らふべければ、歸京せよとならば何時にても歸京すべし云々。

此密謀を市會議員長谷川泰か議場に朗讀して佐久間貞一、肥塚龍、芳野世經、小島官吾、鈴木信任等と常置委員の處分を迫り、五人の水道常置委員たる山中隣之助、風間信吉、高雄孫麿、星松三郎、末吉忠晴は責任辭職して世間の口を塞がうとしたが、風間、山中、高雄の三人は水道庶務堀田政叉、岩崎保壽等と共に收賄罪を以て引致さるゝに至つたので、茲に不正鐵管事件は一轉して市會議員の瀆職事件を産み、更に再轉して三浦知事不信任案の提出となり、三月の市會は揉みに揉んだ末、遂に解散となつた。

一方、豫審は進行し、收賄者の中、雨宮敬次郎、島貫、長谷川鐵次郎、石井八五郎、濱野萬助、山本淵太郎、美川田生士、佐野喜三郎、高田和太郎、夏原仲次郎は證據不十分の廉を以て免訴となり、他は悉く公判に移された。

不正鐵管事件は二十九年六月四日初めて公判を開き、續行二十四回、其間殆ど一ケ年の日子を費し、三十年五月十九日に至つて判決申渡しがあつた。此裁判中東京地方裁判所の檢事、森肇正が職權を濫用し、雨敬を恐喝して三千圓を提供させようとして收監されたのは、前に帝國大學工科に教授たりし、工學博士野呂景義か、會社の技師長として、大直管九百十本、大異形管八十二本に對する金額を騙取して居た罪狀と共に社會に烈しい虚脱を投げた。

森檢事收監後は尾崎忠蔵といふ人が之に代り、尾崎檢事鳥取地方裁判所に轉じて後は仲小路廉が之に代つた。又此事件に被告側の辯護士となつたのは、仁杉英、山田喜之助、磯部四郎、岡村輝彦、岡崎正也、立川雲平、飯田宏作、三宅碩夫、原嘉道氏等十九人であつた。

八　二十五年以前の小川射山

最後に目下鐵道疑獄事件で、起訴收監されて居る前鐵道大臣、小川平吉氏が、その大立物の一人であつた日比谷騷擾事件の顛末を紹介することとしよう。小川氏曾て該事件に座して獄に在るの日、其皓皓の志をのべて、『朝出鐵窓歩、秋菊在籬邊、芳郁香不改、傲霜獨依然淵明已去遠、满節有誰憐』と詠じた。此事件も、彼事件も、時はちやうど同じ九月である。さうして彼時も、此時も菊花の清香に繞る所はたい。ひとり小川氏の心懷や如何。今にして日比谷騷擾事件の昔を偲ぶのも決して無益ではあるまい。

奉天の大會戰に、日本海の大勝利に、櫛の歯をひくが如き海陸の快報は、日本國民を驅つて歡喜と興奮とに殆ど狂人の如く狂躁させた。提灯行列は一都の至る所に帝都を火の海と化し、萬歳の聲は津々浦々を震撼して、戰爭の裏に搖動する一切の悲慘な影が怒濤に吞まれる砂上の文字のやうに抹殺し去られる時、誰か幾十日の後にして、光輝燦たる戰勝日本の上に所謂屈辱講和の悲報の齎されることを豫想したであらう。國民の大多數は此講和條約か、現在の戰局から推して戰勝國たる日本の餘力と、戰敗國たる露西亞の地位とを比較した時に日本の贏ち得べき、最大限度の賠償であるといふことを考へることが出來な

かつた。若し此上戰爭を繼續したとして、日本が如何なる不利の地位に陷るべきかに就いて考へて見る餘地はなかつた。六月六日、米國の大統領ルーズヴェルトから提出された講和の勸告は、日本にとつて渡りに船といふよりも寧ろ溺れんとして、最後の努力を努力して居るものの前に投げられた救命の綱であつたといふやうなことは、誰にしても考へて見ることは出來なかつた。

是より先、米國ヌウ・ハンプシヤア州、ポーツマスに於いて日露の講和談判が彼我全權の間に開始せられたのは八月九日からであつた。河野廣中、高橋秀臣、大竹貫一、小川平吉、櫻井熊太郎等は、此談判の成行を憂ふるより、此前後に講和問題同志聯合會といふものを組織し、講和談判に聲援を與ふることを目的として、麹町區內幸町一丁目に其事務所を設けて來たものであるが、八月三十日に到り、講和の成立と其條件とが傳へられると、河野を始めとして會員一同は悲憤禁ずる能はず、三十一日事務所に會合し、有らゆる手段を以て國民の輿論に訴へ、樞密院を動かして御批准の拒絕を奏請し、以て屈辱條約を破棄すべしと決議した。

九月二日に至り河野等の講和問題同志聯合會は、三十一日の決議に基き、九月五日、國民大會を日比谷公園に催し、同會終了後、演說會を兼ねた懇親會を京橋、新富座に於いて開催すべきことを申合せた。準備として、幾旒かの旗幟、輕氣球、花火等が註文された。

處が早くも情勢を探知した警視廳は事前に之を禁止する方針で、時の麹町警察署長向田幸藏といふものが、九月三日、國民大會の委員の一人である高橋秀臣を呼出して、大會を見合すべき旨諭告した。其處で高橋は四日事務所でその旨を他の委員に告げたけれども一人として之に應ずるものがない。

同日午後十一時に到り、委員でない高田三六といふものが發起人となつて、五日の午後一時から、講和問題國民大會を日比谷公園で開催すべき旨、成規の屆出に及んだ。

其處で向田署長は此高田三六なるものに大會禁止の命令を傳へようとしたのであるが、折から高田の所在が不明であつたゝめに之を果すに由なく、五日午前二時（夜半）頃再び高橋秀臣を呼出して大會禁止のことを、他の委員に傳へさせようとした。然るに高橋は此時既に行政執行法によつて、神田警察署に檢束されて居たので、神田署に移牒し、同署から高橋に電話で聯合會の事務所に通達させた。向田署長はかくしてどうやら大會禁止の命令を委員に傳へたもの丶尙ほ不安の感があつたものと見え、警部の荒川德光といふものを內幸町なる講和問題同志聯合會の事務所に遣し、更めて國民大會禁止の旨を委員に傳へさせた。併し此時はもう晩く、殺氣を帶びた大衆は、四方から陸續として日比谷公園に押かけて居た。

九　日比谷公園を閉塞した向田幸藏

明治三十八年九月五日は朝から快晴で、立秋に近い燒けつくやうな

日ざしが、東京の街路をヂリ〳〵と照りつけて居た。屈辱講和の調印を憤る悲痛の色はそれでなくとも人の自殺や、犯罪をそゝり易い、溽暑に苛まれた市民の顔の上にアリ〳〵と讀まれた。

向田麹町警察署長は、河野、大竹、小川等に國民大會を中止するの意志がないことを認めたので、一隊の人夫を率ゐて日比谷公園に到り其正門を始めとして、周圍の五門を閉鎖し、嚴重に木柵を結つて群集を堰止める準備を整へた。

處が群集は折からの炎暑を物ともせず、白地の浴衣の腕をまくり上げ、小倉の袴の股斷を高く取つて潮の如く、各門に押寄せた。洋傘を打振る者、麥藁帽子を舞はすもの、ステッキを翳すもの、喊聲を揚げるもの、(十五字削除)向田署長は此時非常な自信を以て、必ず此群衆を退散させて御目にかゝるべしと、その上官の前に豪語したといふことである。(此時の向田の心理は平民社系統の社會主義者でなければ分らぬ譯がある。)

警視廳が一言の挨拶もなく日比谷公園の六門を閉鎖して、木柵を結つたといふ報知に接した東京市では大に怒り、市長尾崎行雄氏は車を飛ばして内務省に迫り、助役渡邊勘十郎氏も警視廳に談判し、市吏員及び市參事會員は現場に驅けつけて、公道の閉鎖を難じ、障碍物の撤去を要求したけれども、向田署長は頑として之に應じなかつた。

とかくして正午頃になると、公園の周圍に集るものが五六萬の多きに及び、手に手にステッキ、洋傘を打振り、園内に雪崩れ入らんとし、警戒の警官隊と衝突して、事態が漸く惡化しかけた所へ、午後一時頃、國民大會の委員、河野廣中、大竹貫一、小川平吉等が、佃信夫、吉澤不二雄、新里兵吉、金子與吉、川又金次郎、丸山泰太郎、山崎政毅、山中茂市、君島竹次郎、佐々木甫、間宮金太郎等の護衛者しくは旗持に擁せられ、群衆歡呼の裡に威風堂々として公園の正門に立ち向つた。

と見れば河野廣中を中心にして四旒の大旗が、黒い喪章と共に飜飜として、埃つぽい夏の白熱の空に動いて居る。さうして旗の面には、

鬼哭啾々。

億兆一心。

獨使至尊憂社稷。

秦檜可斬。

などの文字がハッキリと讀まれた。(十五字削除)群集が、此騒々しい行列を見て、何條默止すべきであらう。咄然と揚つた鬨の聲と共に數萬の群衆は瓦礫を飛ばし、木柵を破つて狂瀾の如く、園内に雪崩れ込んだ。

曾ては神田錦町署の署長として、青年會館及び錦輝館の演説會に臨監し、社會主義の猛者連から「鬼」と呼ばれた向田署長の縱斷も、園内を固めた堂々たる警官隊の威容も、數萬といふ大群集の前には、旋風に捲かれた木の葉のやうに何處ともなしにケシ飛ばされてしまつ

た。門の脇には櫻井熊太郎も待つて居て、河野等と共に園内に入つた。

園内の會場には講和問題國民大會と大書した大旗が押立てられ、會衆には喪章のついた五千本の小國旗が頒布された。煙火が揚り輕氣球が飛ばされた。

輕氣球には『泣遡天闕』『我に草薙の劍あり』などの文字が鮮やかに尾を曳いて讀まれた。

會場では山田喜之助の發議で河野廣中が會長となり、大竹が開會の辭を述べ、次いで河野が起つて、(一)講和條件反對、(二)政府及び全權委員問責、(三)屈辱條約破棄、(四)戰爭繼續、(五)御批准拒絕奏上の五ヶ條からなる決議文を朗讀し、滿場拍手雷の如く、決議了りて樂隊君ヶ代の國歌を吹奏し天皇陛下及び陸海軍の萬歲を三唱して大會は無事終了を告げた。

一〇 内相官邸の襲擊電車の燒棄

大會終了の後、河野、大竹、櫻井等は講和問題國民大會の旗を押立て、軍樂隊を先頭に哀の曲を吹奏しつゝ隊伍肅々として櫻田門より二重橋外の廣場に出で、天闕を拜して至尊に民意の存する所を訴ふるの意味で萬歲を唱へんとする處へ、警視、宮田景辰の率ゐる警官の一隊が驅付けて解散を命じたので、茲に約二萬の會衆と警官隊との間に激烈な闘爭が始つたけれども、委員等はよく群集を率ゐ、馬場先門から引揚げて鍛冶橋を經、演說會場と定められた新富座に到着したのは午後三時頃であつた。

然るに是より先、京橋警察署では、午後一時頃、先廻りの群衆が押かけて滿場立錐の地なきを見るや、未だ開會せざるに先ちて之に解散を命じたので、聽衆は大に激昂し、茲にも恐ろしい一場の修羅場が現出した。河野等は演說會が既に解散せられたのを知つて直に紅葉館に引揚げ、午後五時から全國有志の懇談會に移つた。

一方日比谷公園では市民の公園を占領して、木柵を結び殆ど(八字削除)國民の意志表示を阻止しようとした警視廳の暴戾が甚たしく(八字削除)近き內務大臣の官邸は忽にして其包圍する所となり、瓦礫は飛び、鐵門は破壞せられ、警官隊は拔劍して民衆の突貫を防いだが、暮色漸く迫るに及び、(九字削除)警官も他の救援を得る望み全く絕え、遂に群集の爲すが儘に任せて傍觀するの止むを得ざるに至つた。乃ち群集は石塀を乘越え、屋根に上つて瓦を剝し、火を放つて其半ばを燒夷した。その時驅付けた蒸氣ポンプ一臺が滅茶々々に破壞せられてから、二箇所の警察本署、六箇所の分署二百二十六箇所の交番所、三箇所の敎會堂、四十七軒の民家、十五臺の電車が燒打せらるゝ間、消防隊は群集を恐れて殆ど手を下し得なかつた。

此日騷擾は夜を徹して全市に及び、電車は燒打せられる。總理大臣の妾は目ざゝれる。講和條件に贊成した『國民新聞』は襲擊される。『國民新聞』の印刷を引受けたといふ噂のあつた秀英舍は破壞せられ

る。交番所は郡部の境に至るまで殆ど餘す所なく燒毀されてしまつた。

(百四字削除)

尚ほ此騷擾は六日の夜に入りて各所の基督教會堂に及び、下谷區徒士町三丁目の下谷教會、下谷區竹町の明星教會、淺草區駒形町の福音傳道教會、淺草區黑船町の英國教會堂等が破壞若しくは燒棄の難に遭つたといふやうなことは、今日の若いものにはチョット想像もつかぬことであらう。六日夜半戒嚴令が施行せられ、市内の要所々々は軍隊が警備の任に當るやうになつてから騷擾は漸く下火になつた。

五日から十三日までの死傷者官吏側四百七十一人、人民側五百五十八人、内、人民側に死者十三名、官吏側には一名もなかつた。此騷擾の後、内務大臣芳川顯正と警視總監安立綱之とは責を負うて職を辭し、麴町警察署長向田幸藏は散々に脂を絞られた上、朝鮮に左遷せられてしまつた。

一一　警視廳の犬看破せらる

事件の後、警視廳は大に犯罪を搜査し、各方面より檢舉したるもの三百餘名の多きに及び、河野、山田、大竹、小川、櫻井等を兇徒聚衆の罪に擬して告發した。時の東京地方裁判所檢事正は奧宮正治といふ人で、檢事安住時太郎を主任とし、杉本時三郎を補助とし、時の豫審の上、豫審を求めしめた。乃ち豫審判事中川當太郎事件を擔當し、十一月十日、河野、山田、大竹、小川、櫻井等を收監した。十二月十九日豫審終結、山田を除き悉く東京地方裁判所の重罪公判に附された。

此公判は判事今村恭太郎が裁判長となり、安住、杉本兩檢事の干與で明治三十九年二月二十六日開廷、辯護人は全國から集まつて一百六十三名の多きに及び、各部署を定めて辯論大に力めた。裁判の進行中、被告の一人である吉澤不二雄なるものが、警視廳の犬であることが暴露し、その反間苦肉の策によつて河野等を陷穽し、無辜を羅織して騷擾の責任を轉嫁しようとしたことが天日の前に暴露されたので被告等に對する國民の同情は更に白熱化した。かくて四月二十一日には同事件の判決があり、河野廣中外十數名の被告は證據不十分の理由で無罪、但信夫外二名は、罪に問ふべき理由なきものとして公訴不受理の言渡しを受けた。

此時日本社會黨の幹部は大部分、電車値上反對運動で、河野等と同じ罪名の下に市ケ谷監獄に收容されて居たが、日比谷騷擾事件の無罪言渡しを聞いて自分達が放免されたかのやうに喜んだ。それは事件の起つた當日の事情が、河野等の場合と全く同じであると信じて居たからである。

(昭和四・一〇・一〇)



冬の海底・魚の戀愛

三浦定之助

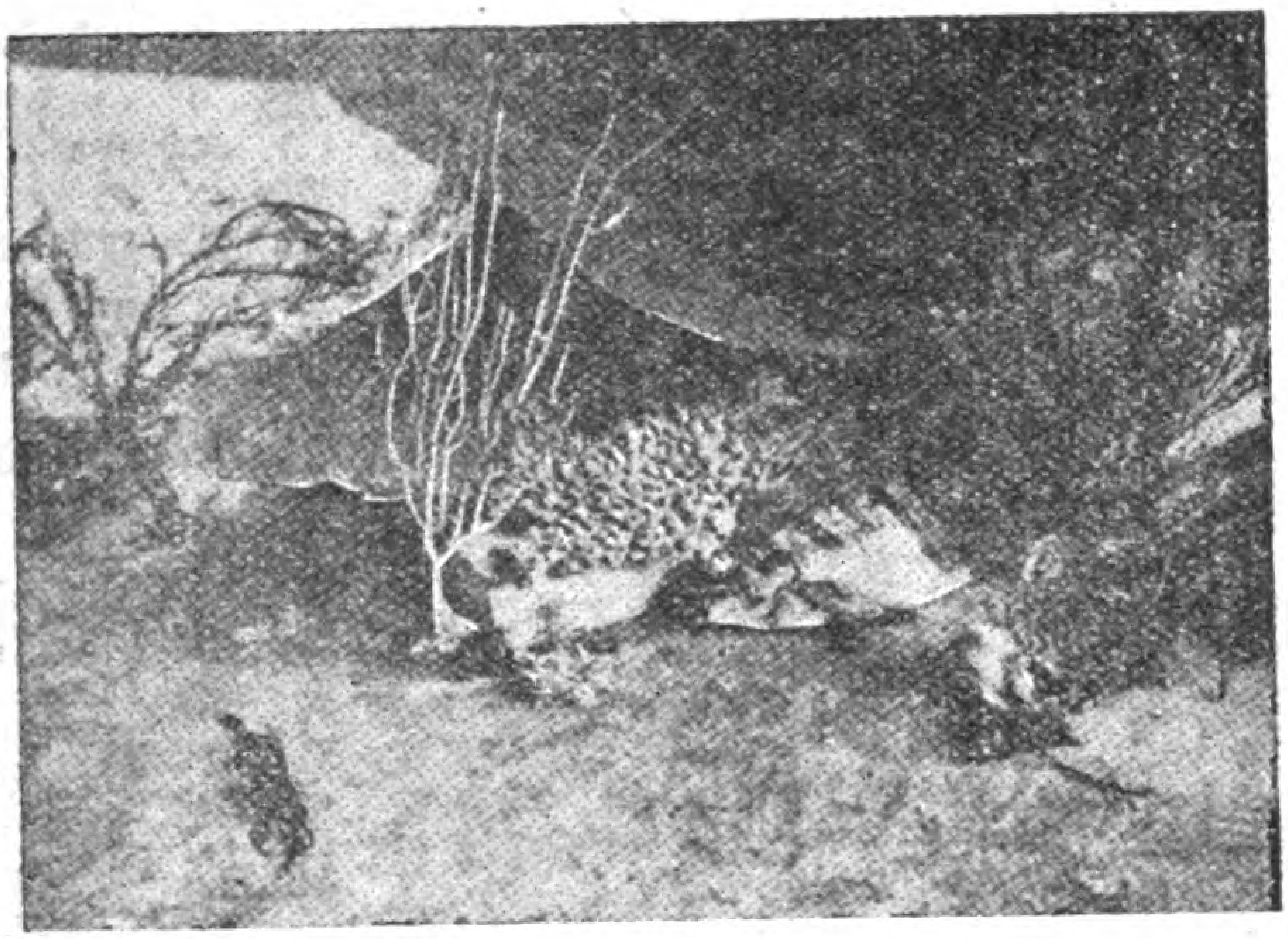
海底の春

青空高く鳴き上るアゲヒバリ、野も山も生氣滿々たる綠蔭に、名も知らない色々の小鳥の樂しい巢籠りの戀のさゝやき。人家では舊暦の五月幟りや、さつき鯉が威勢よく春風に翻へる晩春初夏の頃、一日の旅行を外房廻りや三浦半島廻りと云ふ樣な、外洋の濱邊に試みるならば、砂濱邊一帶に隙き間もない程乾燥された色々の海藻の磯臭いが、然し充分に漁村氣分を味ふことが出來るであらう。又滿月新月の頃ならば、大干潮に露出した岩礁又は其附近には時ならぬ濱の人出を見るであらう。干上つた岩礁を歩いて海藻を切り集める人。小船で淺い所の海藻を長柄の鎌で切り取るもの。又は海藻を滿載して横付けされた船から濱へ運ぶ者。海藻の藪を刈り取られ匿れ場を失ふて逃げ廻はる樣々の魚やたこやさざえなど追ひ廻る小供の群れ。きやつ〳〵と喜び叫ぶ聲、手を上げて船を呼ぶもの、友を呼ぶ者等騷々しいだらうが、此處は濱邊で岩に崩るゝ怒濤と、強き潮風に消されて空に鳴き亘るかも、めの聲だけが時々聞えるのみ。忽ちにして濱邊の彼方此方に海藻の山が積み上げられる。斯して一度干上つた海水が再び滿々と押し寄せて來る頃、食料となるもの、製藥原料となるもの、又肥料となるもの等に分られて乾燥されるのである。此海藻の採集は春の若菜摘みや、蕨

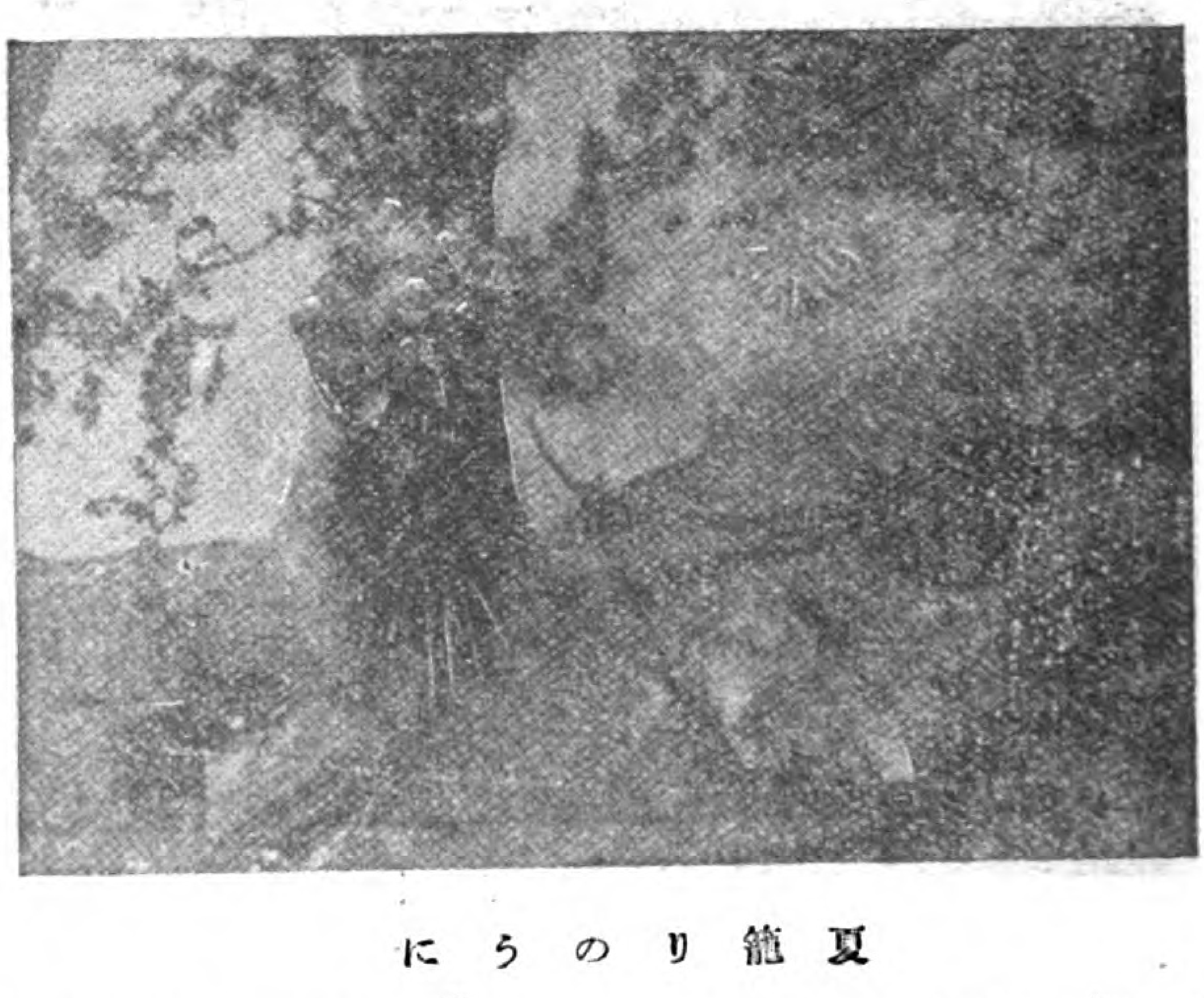


刈り取られた海藻の山

取りと違ひ、秋の稲の苅取りや麥の苅取りの如く、充分實り切つたものを好時期に苅りとるのである。即ち此初夏緑蔭の時が海底の秋であつて、充分に發育を終つた凡ての海藻は、梅雨の頃から暴風の大浪が來る毎にどし／＼洗ひ流されて仕舞ふ。酷暑の頃は凡ての岩礁が一藻もなく坊主になり、又來ん年に發育すべき根基だけが堅く岩面に附着してゐる。又老年の海藻（四五年生）は弱はくなつてゐるから、大浪の爲めに根こそぎ洗ひ去られて仕舞ふので、海水浴に行き時化跡の濱邊を散歩するならば、此等の海藻を澤山見ることが出來やう。斯して八月九月の頃は、陸上に於ける冬枯れの状況に、海底では夏枯れとなるのである。海松菊面石珊瑚類似の動物（石植物類似）は淋しき冬の枯枝の如く峨々たる海底岩礁に枝を差し伸べ、海藻の間に自由に身を匿す磯魚類は、全身を掩ふ能はず半身を露はし、僅かなる海松や菊面石又は岩の割れ目等に不安らしく身を忍ぶ。又陸上に春來りて青葉繁れば、色々の昆虫や其他の虫類が食餌を求めて繁殖し、又それを食餌として愛らしき小鳥飼育の爲に、遙々と美しき渡り鳥が來り、冬枯の到來を知る頃ともなれば何處ともなく去る。そして虫類は卵となり越多の準備をする樣に、海底では夏枯の來るや小さき虫共は潮蔭、岩の割れ目、石の下、丈夫なる海草根株の下などそれ／＼匿れ家を



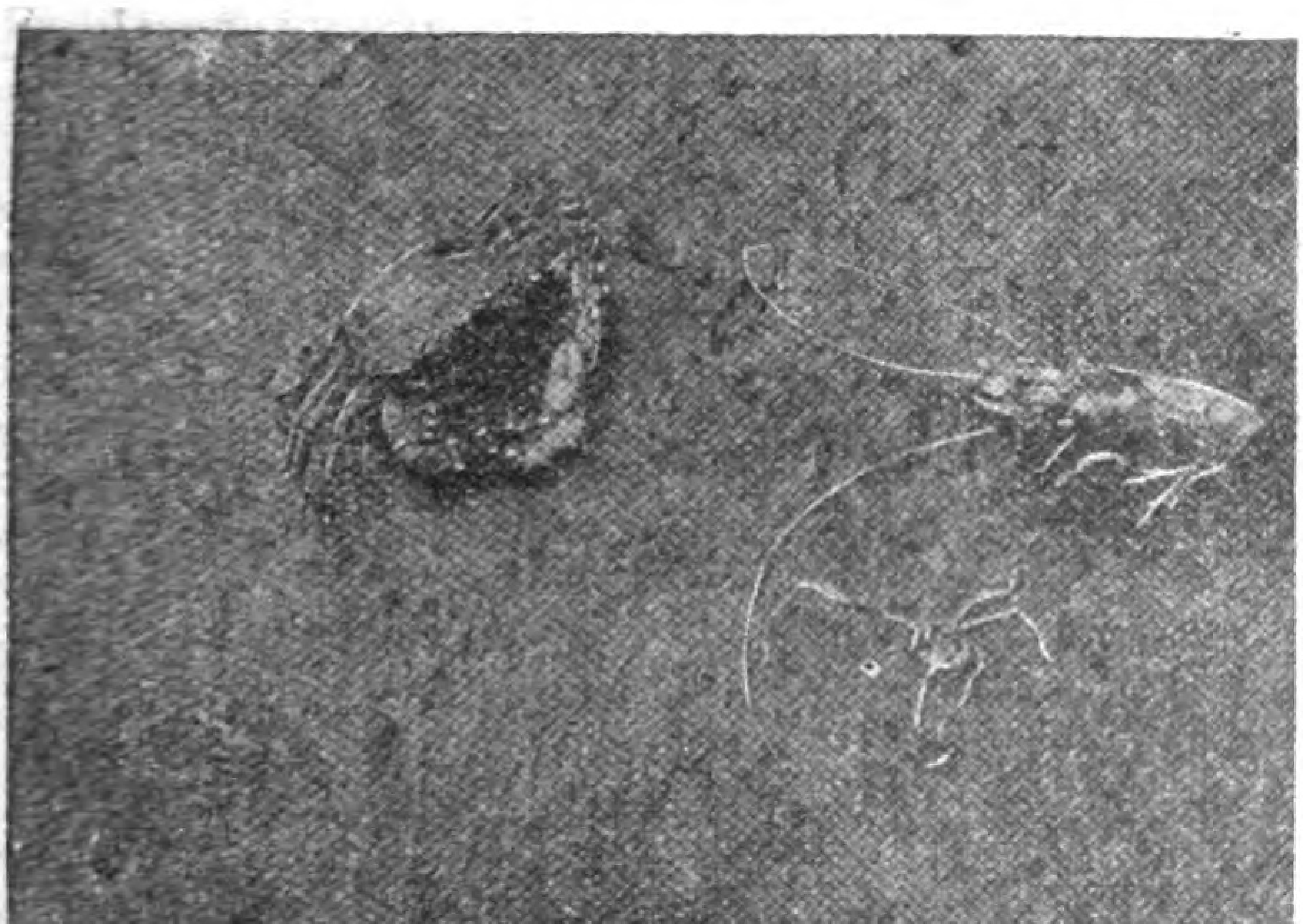
魚（たまき）中央が海うちわ　左海松



夏籠りのうらに

め、又は巣を營みて漸く生活を支へてゐる。蟲を餌料とする渡り鳥の如く、沖合から産卵、仔魚飼育の爲め、又は生活の爲め集つてゐた回游魚共は、此の夏枯れを豫知して何れにか去つて仕舞ふ。海底に兀立せる岩、冬の落ち葉の如く、僅かばかり生ひ繁れる泥色の枯れかゝりたる海草、落ち栗いがの如くざら〱として居るウニ、千余本の毒刺を自由に動かして害敵ござんなれと潜水夫を迎ふるも可笑しい。又は陸上の蛇やかはずの冬眠して食を採らず、不動の儘越冬する如く、海底にもなまこの如く岩の割れ目や石の下等に恰も石の如く固く小さく縮少して、夏眠をするものも亦多い。俗に石なまこと云つて食ふに堪えないもの、磯付魚と云うて、自由に廣く回游し、餌料を求めず常に岩礁の間に居る魚共は日に〱生活區域を狹められ、よせえび、かにの様な甲殼類も同様であるから、此處に弱肉強食、優勝劣敗の猛烈なる格闘か各所に演ぜられる様になるは勿論である。

陸上の晩秋、最も淋しき哀愁の時期、十一月頃になり、毎朝の霜白く、鳴く虫もなく、枯枝を吹く北風寒き冬景色の頃、海底には一陽來春して萬物が蘇生するのである。泥褐色の岩礁は何んとなく黄色を呈し、元氣よき黄緑色（かじめわかめの如き）。てんぐさの如き紫赤色の海藻の新芽は續々と發生する。即ち春霞に黒ずんだ山々に青々とした草木の新芽を見るに相當する。嚴冬となるに從ひ其成長愈々盛んになり、長き海藻岩面を掩ひ、十尺も十五尺もある長大なる軸の頂上に陸上のやしの如く扇形に葉を繁茂させるものもある。又昆布などの様に五〇尺も一〇〇尺も伸びるもの。又ほんだわらは十尺も十五尺も[illegible]く、寸隙もない濃密なる海藻の藪を爲し、如何なる鈎も網も、大なる害敵猛魚の近寄るを許さぬので、小魚は嬉々として安住の匿れ家となすものもある。然しながら海底では陸上と異なり、花の開く藻など一本もなく、石炭層時代の如く凡て胞子を以て繁殖する、唯いそぎんちやく（大なるは直徑一尺もあり）とてんぐさなどは、とさかの如紅一點を飾り、巨大なる海松にからみつく海蛇など鬱闘するものばかり。浮かれて歌ふ魚もない。默々として靜かなもの。



くるまえび

海底、砂泥底に於ける蠕虫の如き、毛虫の如き、其發育最も盛んにして酷暑の候に産卵發生せる、えびやかにの仔魚共は今を書き入れ時と

盛んに食ひ廻はり、併せて親かにや親えびの肉味は愈々肥滿し、佳良となり、尻尾を泥中に埋めて棘刺多くて、害敵の接近を許さざる頭だけを出して、糸ひとでなどを貪り喰ふくるまえびも呑氣である。蓋し夏の生殖時期には食物も捕らずに戀物語りに浮き身をやつし、併せて昨年來窮屈になつた甲冑を脫ぎ捨てゝ、新たに大きい武裝をした之等の甲殼類は、肉の充實のために喰ひ氣一方夜も晝も之れ足らざる程である。

陸上の昆虫類の如く、嚴冬を越す爲めに產卵するものは海底魚にはないので、魚類は產卵後間もなく孵化（二晝夜乃至三晝夜）するがゆゑに彼等は生命を賭して一生一度の戀の場面を呈するのである。二三を紹介すれば、

あわびの片戀ひ

陸上の晩秋海底の早春の時に、色々の仔魚達ちが生れ出るが、あわびなども其一である。每年四月頃から怪物の樣な潛水夫に海藻の根を分け岩の下石の下の匿れ家をも隈なく探され、身動きのならぬ彼等は、親子兄弟見付け次第に剝ぎ捕られる。幸ひに此の厄を免れたものは、十月から產卵期に入るので、彼等の片戀を碍げまいと云ふ解つたやり方でなく、實はあわびを增殖する爲めに產卵を碍げないと云ふ人間慾から採鮑が禁止されるのであわびも始めてのんびりとした生活に入る、と云ふわけでもあるまいが、今迄の石の下や岩礁の棚から出で、岩や石の表面を這ひ廻はり美味しい海藻の新芽を食て步るく。四月以來十月迄散々に潛水鬼に荒された彼等は、行きずりに戀の相手を見付け出すは容易でない。況んや不自由な殼、不完全な足、凹凸極まりなき岩礁、海底の浪や潮の流れ等を想像する丈けでも、彼等は意中の相手に出會する機會を偶然に、見出す迄の旅行は如何に困難であることか。況んや美肉の持主なる彼等には、害敵は到る處に伏さつて居るのである。



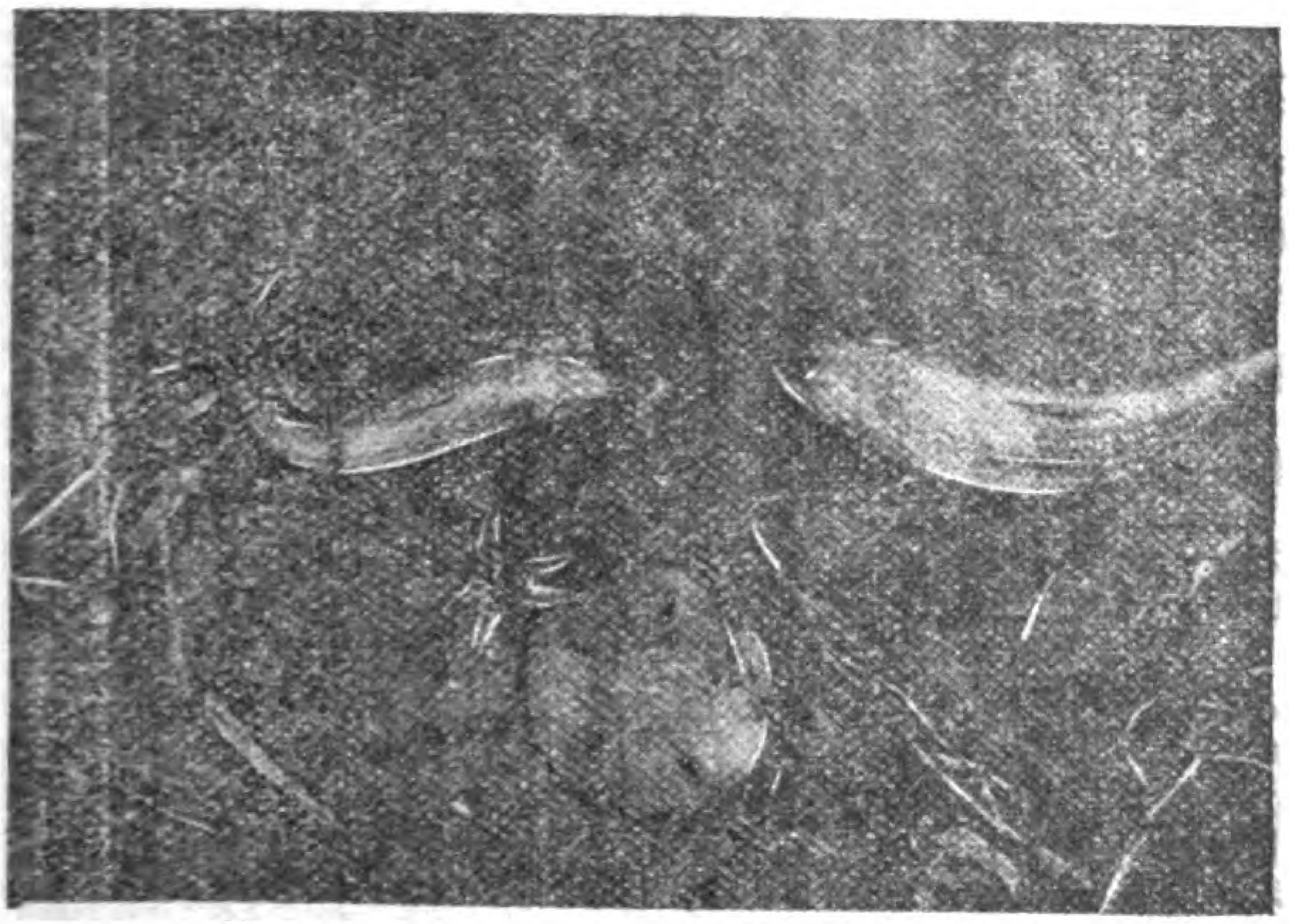
上圖はたこがあわびを喰べて居る處である。冬から春には彼等あわびの背殼には一尺も二尺もある海藻が一杯に發育するのであるが、夏枯の爲め之等の荷物を皆捨てゝ仕舞ふたのは彼等の戀の旅行に天の與へた唯一の惠みである。辛らい旅行の後、彼等は偶

に出會する。如何にも嬉しそうにかたつむりの頭の様な所から眞黒い長い二本の觸角を伸ばしてばた／＼動かしながら互ひに相觸れる。握手と云ふ圖！　だがそのまゝ互ひに相分れて行つて仕舞ふ見向きもしない。扨て之れを捕つて腹中を見ると不思議。共に精子だ。男性の雄あわびだ。最高の人間が如何見ても外見からは雌雄を判別する事が出來ないのに、彼等は如何して一見して相知るのだらう。扨て翌日から潜水子は毎日あわびの戀の場面を見るべく海底に出掛けるが、中々見つからない。鮑を見付ける事さへ容易でない。時は大正十一年小生當時館山に於て、潜水病の爲め足腰も立たない不具の身で、之が探況として北風寒き秋の海に潜水するのだ。よし！　近所に高の島の實驗場があつて其沖合はあわびの禁漁區で澤山居る。海深は淺く浪は穩かなり。自然的な戀の場面に出會する望みなどはない。潜水して十個ばかりあわびを採つて持て行き、探して居ると戀の道行きをして居る樣な大あわびに出會する。先づ袋中の一つを取りて戀の見合ひをさせ樣と云ふのだ。先づ觸角をブラ／＼してゐるあわびに近づくと忽ち驚いて全部を殼の内に引込めて仕舞ふ。其頭の方五寸ばかりの所に先一ケをとりて岩礁上に差し向ひに置く、自らは遠く離れて悠々見物としやれ込んで居る。間もなく一方は殼を上げて觸角ばた／＼例の如く、斯くして居る内に一方も角を出して歩るき出す相觸れるや相分れて見向きもしない。扨て男同士か？　斯くする事、三四回の後漸く戀の相手と合うたらしい。彼等頭を相接する程つけて盛んに觸角で撫り合ひが始まる。何んと云ふ亂暴な戀の打ち明け方だ。暫時にして別れて仕舞ふ。而して其附近のあわびの附着し易い樣な餘り凹凸のない所にぴつたりと坐を占める。斯くして再び合ふのを見ない。天氣晴穩の潮流早からざる時、靜かに離れて見て見ると、殼背の穴から白い煙の如きものを立てゝ居る。何れが雌雄か解らないが、先日の小生の媒介せる戀間志は依然として少しも動かない最初の儘の場所だ。兩方供盛んに白粉を噴き出して居る。之れが產卵だ。一尺ばかり上方迄白煙の如く見るが段段薄すくなつて消え何者も見えない。斯くして無數の精子卵子は相合して親あわびの殼背とか岩面とかに付着するのである。あわびの結婚媒介は斯程に困難である。だから採鮑されたる漁場の如きは戀の相手を得る事能はず、行き疲れて岩礁の蔭に唯一人淋しく白煙を出して產卵して居るのが多いのである。其卵子は何處に行きて受精するやらせぬのやら。潜水夫が近づけば直ちに引き込んで三十分や一時間では產卵など始めないが、雌雄相並べるものは五分ばかりで再び貝殼を上げて產卵する。戀の相手を捕へて仕舞ふともう三十分待たうが一時間待たうが、放卵などはしない。再び捕へたあわびを元の場所に付着ると間もなく放卵を始めるが、一度捕へられたものは殼を引き締め產卵卵どころぢやない。時しも、六尺ばかり向うに好餌ござんなれと意地惡るそうなたこ入道が探し廻つて居る。之れ以上の戀の邪魔をさせまいとしてたこ入道を突指し捕へて上船す。

鮭の戀

日本内地で秋から冬にかけての代表的な魚は鮭である。カムチャツカなどでは夏捕れるが我が國では晩秋である。此頃になると何處の沖合から來るか分らないが大河の注ぐ海岸へ群を爲して集まつて來る。之迄何處の海底に發育するか誰にも分つて居ない。露領のカムチャツカで彼程澤山捕れた鮭も、子供から成魚になる迄何處に居るか解つて居ないのだ。鮭ばかりでない鰊も分つて居ない。斯程な群を爲して大漁される魚の原籍や寄留海底が分らないのだ。他の魚などは勿論解らない。鮭は海中では他の魚に比して野呂馬な魚だ。海で之を捕へる方法なども甚だ容易である。但し彼の終生の墓地を探すとか、又他方面から見ると其本能に驅られて戀の活劇の舞臺を探すとかして、河川に入りて逆上る頃となると甚だ敏捷となる。鮭の卵子精子は淡水に入ると急にどし〳〵發育する。三日もすると全るで見違へる樣にお腹が大きくなる。此限られた時間に於て彼等の子孫をより良く發育させる爲めに何百里ともある急流を出來る丈け上らなければならないのだ。勿論食物などあらう筈もない不眠絶食で、戀の奴が急流をものともせず、ぐん〳〵上つて結婚式へと急ぐのである。小生は大正九年バルチザンの年潜水器を以て露領黑龍江に遊んだ事があるが、彼の樣な長大な河になると三百里も五百里も上るものが澤山ある。此大河を如何に多く急流を逆上るかと云ふ事は如何に彼等の結婚式が他より盛大であるか、又他方面から云ふと彼等のお葬ひが如何に他より盛大であるかと云ふ事を示すのである。彼の産卵は卽ち死であつて再び海へ歸つて後世安樂に暮さうなんて考へは毛頭ない。扨て彼等の結婚式を見物に出掛けよう！ 妊婦臨月に至り不眠不休で急流を逆り、行く〳〵戀の道行きを樂しんで來るのは一對の雌雄又は四五疋團の事もある。愈愈産氣が催してやり切れなくなると、河瀬の淺い膝位の所に砂礫又は砂底に乘り上げる。互ひに協同して尻尾で圓るい穴を掘る。諸君は斯樣な尻尾などで砂に穴を掘るは甚だ困難であらう、スコップでも以てやりたいと同情するだらうが、見て居ると何の事もない。十分を要すると完全に出來て仕舞ふ。潜水子が成る丈け大きな穴を造つて鮭を呼び寄せて捕つてやらう位な積りで、スコップを以て河底に穴掘りに行つた。何んと云ふ馬鹿な事だ。小石混りの河底にスコップなど通りはしない。漸くスコップ一杯位の砂を掬ひ取つたと思ふとき水で洗はれて其上に砂など殘りはしない。今度は馬鹿な道具を捨てゝ兩足を踏張りて兩手を開いて並べて鮭の尾の如くして河底をあをり、その形で穴を掘るのだ。鮭の眞似をすると二尺位の穴を掘るのは朝飯どろか三分も要すると出來て仕舞ふ。吾々は海の常識に如何に缺けてるかと云ふ一例だ。話は横道に外れたが樂しい結婚式場が出來上ると、彼等の産卵が始まる。此頃になると彼等は無我無中だから潜水夫など動きさへしなければ平氣で産卵する。一疋は穴の中に居る、他の一は後方より勢よくズン〳〵泳いで穴の中の待つてる魚に臨月のお腹を打付け

て行き過ぎる、其度毎に產卵される。之れは雌雄共交互に行はれる。三尾四尾の群の事もある。斯うなると穴の中に二疋も居る。斯くして產卵一段落となるや砂で埋めて流失しない樣にして置く。產卵中其附近にやまめとかきうりなど云ふ小さい(五六寸)河魚が眞黑になつて集まつて居る。鮭の卵子の御馳走に預る爲めだ。之等橫道者を追ひ拂ふともせず平氣で產卵して居る。勿論穴の周圍を泳ぎ回はる事が追ふ樣な事にもなるが、彼等は中々逃げはしない。若しも眞に追拂ふ氣ならば彼の鋭い齒、曲がつた鼻の大きい口で直ちに彼等小魚を皆殺しにするだらう。而して埋めた卵の塚の上に雌雄二疋の魚が立ち番をして居る。產卵を終るや彼等の衰弱は目立ちて甚だしい。人が行くと逃げて行く、再び去ると又塚上に來る、扨て何か目標しでもあるのか潜水夫は河底の塚の表面を散々に搔き廻して、何等舊面影がない樣にして置いて、唯木枝を立てゝ潛水子の目標しとして置く。やがて來るのを見て居るならば彼等鮭は 何等迷はずに自分の家に歸る如く塚の上に來りてピッタリ止まる。彼等を導くものは埋められた卵から何か香でも出るのか? 今度は甚だ慘酷ではあるが母性愛から埋めた仔を潛水子が手で掘り返へして卵など皆河流に押し流して、きうりなんて野菜の樣な名前の小魚の御馳走にして仕舞つた。念入りに流されて一卵もない上に目標を立てゝ置く。今度は鮭先生何も賴る處はないだらうと思つて居ると、何んの事だ、以前と變る事なく少しも迷はないピッタリ其位置に止まつて居る。四五日して尾鰭はボロ〳〵に切れ肉は油氣も味もなく朽木を嚙む如く、遂には眞直ぐに立つて居る事も出來ない樣になりふら〳〵しても熱心に立ち番をする。小生は最後迄は見る事出來ずして歸國の止む無きに至つたが、聞く處によると害敵のてふざめとか十尺もあるなまずなどから喰はれるか死んで流れてその內に小魚に喰はれるか、斯くて樂しき結婚場は母性愛の家となり、又一轉して墓場となるのである。動物學者の云ふ母性愛の偉大さ、それは死を以て守る彼等に考ふる餘地もないが彼等は母性愛なんて事は知らないらしい。惡戯者が卵を取り去つたのだ。母性愛の目的物はないのだ。何故斯樣な所にまご〳〵して居るのか(?)汝馬鹿か? こゝに只一つの答あるのみ、本能の命ずる儘に彼の一生を終るのである。



とらぎす

魚類では產卵期になると、戀の道連れ二人連れと云

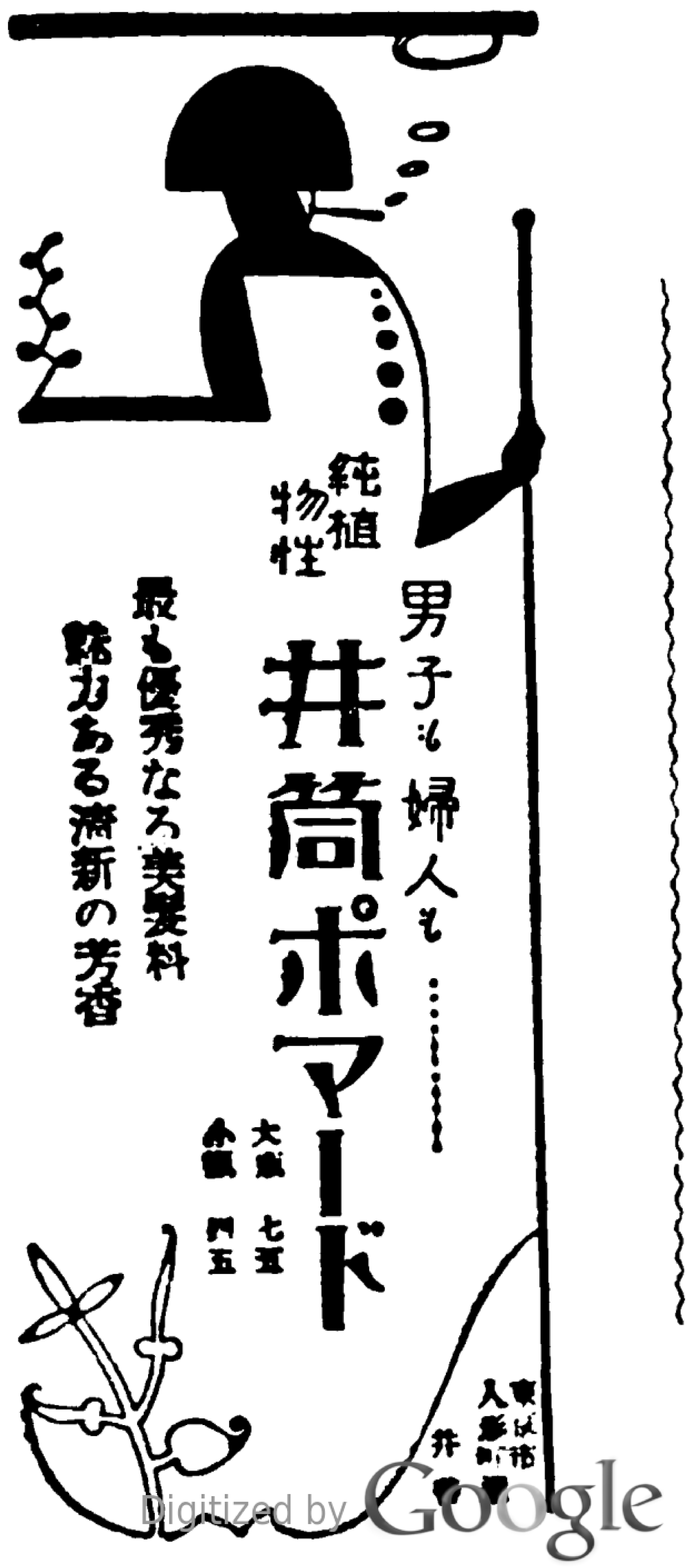
ふ様な連中がまれにあるが、常から年中に夫婦気取りの魚が唯一つ居る。とらぎす俗にとらんぼうである。之れは房州邊でも澤山居る。潜水子が彼等の戀の邪魔を爲すべく追ひ廻す、一旦は離れ〳〵に引き離し相手の姿も見えないが、暫時すると何處かの逢引の暗號でもあるのか、何處からともなく以前の相手が相尋ね寄り添つて泳いで行く。

さんまの戀

玆に寫眞など掲げずとも鮭やさんまを知らぬものはない。吾々プロ連のお得意の魚だ。之れも秋の魚の代表的浮れ家である。夜長くなるから略するが秋刀魚の濡物語りは只無茶苦茶に濃厚に相寄り、猛烈なるだんすの一鬪を終りて、附近海藻に其子を附着して知らぬ顔で今日は仙台、明日は房州、扨て又紀州と、辻々で盆踊りをやつて歩るくにも相似て居る。尚ほ海の魚には斯様なだんす屋が大部分を占めて居るのである。ぶりもにしんもさばも皆此モボ・モガの連中である。如何に適當な舞臺を背景としてだんすをやるかと云ふ事が、彼等子孫永續の唯一つの方法である。卵は生れて一人で育つて行く。親の厄介になる様なものは一人もない。親を見た仔魚もなければ仔魚を見た親魚もない。仙台沖でのだんす場で仔供が生れた頃は、親共はずん〳〵下つて房州沖か紀州沖に居る。唯戀の道行き楽しいだんすをやつて歩るいて居る。其處等邊のモボ連の潜む所でもあらうが、然し彼等のダンスは決死の大事業だ。漁業者は右ダンス場を漁場と云ふて大きい網を持て待

て居る。大鯨や大ふかなど色々な害敵が変はる〴〵襲ひ来り彼等の難合を待つて居るのである。

結局するにあわびの片戀や、鮭の母性愛の權化の様な人類道徳にも符號する様な魚も居るし、又さんま其他の如きだんす屋もあるが、前二者は近年段々と衰亡せんとしつゝありて、鮭の人工増殖に巨額の経費を支出したり、あわびの漁獲制限等多大の保護を受けて居るにも不拘、其衰亡の兆は依然として變はらない。然し後者の如きだんす屋は極力文明機械を利用して漁獲せられ仔魚の漁獲より親魚の漁獲迄何等制限されて居ない、勿論何等増殖設備なんて人類のお世話になつて居ない連中であつて、海中に於ける同族繁殖の方法としてはだんすは確[illegible]者の一人である。尚ほ將來日本國民の食肉の大部を供給するものは之等海中のだんす屋連中であらうと思はれる。



プロレタリアの映畫

岩崎昶

1.

課せられた論題は、プロレタリアの映畫、である。

從つて、僕はこの小論に於て、プロレタリア映畫運動そのものに就いては敢て觸れない。第一、今與へられてゐるだけの紙面では、プロレタリア映畫運動の廣汎な全面に對する總括的な見透しは勿論、プロレタリアの映畫に就いての簡潔なスケッチさへ充分には展開し得ないのである。

唯、讀者にして、プロレタリア映畫運動とは、以下叙述する樣な映畫製作及び上映のみを指示するのではなく、映畫從業員組合、檢閲制度改正運動、文筆による批評的乃至理論的活動、等、の各種の分野を包含してゐて、他のすべての藝術行動と等しく、政治的並に經濟的鬪爭と緊密に結合し聯關しつゝあるものたることを理解されゝば宜しい。

以下、僕は、最少の紙面に最大の効用を賦與する唯一の方法として、數個の項目を列擧する。理論的展開や説明の不足から、これがある論文の單なる目次と傍註の如き觀を呈したとしても、止むを得ない その十分なる描寫に至つては、これを他日の機會に讓るの他はない。

2.

「理論のみあつて、作品のない藝術運動」、この言葉が、過去二三年に亘つて、嘲笑と反動的惡意とを以てプロレタリア映畫運動に對して浴せられて來た。しかも、嘲笑と、反動的惡意とを除いて發言された時、この言葉は、現在に於ても尚充分の妥當性を持つた批難であり得る。

即ち、プロレタリア映畫に關する最初にして最大の問題は、その製作上の困難、及び上映上の阻害でなる。即ち作品が生れ得ず、生れ得てなほ發表され得ない、といふ事情である。

それは既に幾度も論者に依つて指摘されて來た通り、資本主義、並に檢閲制度、の二重の桎梏である。映畫の如く産業主義的な藝術にあつては、生産資本を支配することなしには、一個の作品すら創作することが出來ないし、檢閲制度を左右し得ない限り一卷のフイルムをも上映することが出來ない。――これはプロレタリア映畫運動に關する限りの最も初歩的な認識である。

3.

プロレタリアートにとつて、斯くの如くに不利な製作條件にも拘はらず、また、一方、文學、演劇等、他の藝術部に比して遙かに苛酷峻嚴なる××の壓力にも拘らず、映畫の戰線が放棄されず、放棄されないのみか、却つ

て徧く重視されるに至つたのは、では、何故であるか。我々がかゝる困難な戰列を、斷乎として維持し強化せんと努めるのは、果してその努力に値するであらうか。

これに對する答は、映畫に内在する二つの特性的な可能性、即ちその大衆性とその直觀性との中に、明白に肯定的に與へられてゐる。

映畫は文學の如く言語的國境によつて狹められてゐない。無數の複製によつて劇場の數百倍數千倍の觀衆を同時に持つことが出來る。概念ではなく形象によつて語られる言葉の力強さは、、、、、をして次の如く叫ばせてゐる。

「映畫製作を鞏固に發展させ、特にプロレタリア映畫を都市大衆に、さらに大規模に農村に、接近させねばならぬ。あらゆる藝術の中で、最も重要なのは映畫である。」(レーニン。)

「映畫はブルジョアジーの下にあつては、、、、、、し、、、、するための最も力強い手段である。そして、反對に、我々の手に於いては、映畫はヴ、、、、、、、、、、と、最も廣汎なる勞働者大衆啓蒙との強力なる武器であり得るし、また、あらねばならないのである。」(ジノヴイエフ。)

4

プロレタリア藝術運動の一翼としての、映畫運動の可能性が認識され出したのは、極めて最近のことに屬してゐる。

ウイリー・ミユンツエンベルクに依れば、一九一二年チユーリヒの會議に於て、プロレタリアートの立場から、映畫の利用の問題が、指導者達の間に論議された時、その論議の結論は、勞働者及びその家族をして如何なる映畫からも遠ざけること、映畫をボイコットすること、であつた。

「吾々は、映畫の中に眠つてゐる、、、、立場に於いての偉大なる文化的可能性を發展させなければならぬ。」(クララ・ツエトキン。)

その他、表現こそ異なれ、効果に於て相等しい幾多の發言が、プロレタリア映畫のためになされたのは、大戰以後、しかも、、、、以後のことであつた。

この方面に關しては、いふまでもなく、ソヴエートの映畫製作者が先頭を切つたし、また現在でも先頭を切つてゐる。本當の意味の、徹底的にプロレタリア的な映畫といふものは、未だ曾てこの國以外では製作されたことがなかつた。エイゼンシテイン、プドフキン、ヴエルトフ、等の映畫藝術家はその確固たるイデオロギーと、それにもまして驚く可き技術的優秀さとを以て、全世界にショックを與へた。併し乍ら、ソヴエート映畫は、その與へたショックの強さの故に、その強さに比例する反動を以て、今や、、、、、、、、、、、、れつゝある。財政的苦境の底にもがいてゐる。その苦境は、一九二八年のソヴエート中央委員會に於て、ルナチヤルスキーをして次の如く叫ばしめてゐる。

「我々が財政的に充分に鞏固な地位を占める以前にあつては、映畫をプロパガンダに利用することは不可能なのである。」

かうして、一歩の退却が、ソヴエート映畫の政治的宣傳の上で、行はれた。

資本主義と、ブルジョワ政府との二重の監視の下にある他の諸國に於けるプロレタリア映畫運動の道は更に苦澁を極めてゐる。

獨乙に於ては、プロレタリアートは、ソヴエート映畫の自由を獲得し、急進的な映畫同盟を組織し、左翼的映畫雜誌を發行してゐるだけに、フランス、イギリス、等の諸國に比すれば、狀態は良好だと言はなければならない。しかも、映畫の製作に至つては、「織所」「ヴルデンブルクの饑饉」、その他二三の實寫映畫を擧げ得るに過ぎない。

一九二八年六月、日本プロレタリア映畫聯盟の結成が、日本に於ける本來のプロレタリア映畫運動の第一歩であつた。勿論、映畫理論の隆盛、所謂「ことば」の多さに於て、恐らく世界に冠たるに恥ぢないであらうこの國に於ては、それ以前にも二三の急進的映畫人によつて無產階級映畫論なるものが提唱されなかつた筈はない。唯、それ等は一括して運動と稱す可く余りに分散的であり、個人的であり、消極的であり、更に言へば、空論的であつたのである。日本プロレタリア映畫聯盟はその後半歳にして解體の止むなきに至つてはゐるが、しかも、分散を集中し、個人を組織化し、その活動を黨との關聯の下に齎らさうと企てたその意圖は、それが結果に於ては所期の目的を遂げ得なかつたにもせよ、日本のプロレタリア映畫運動の第一頁に特筆さる可き充分の權利を持つてゐる。

併し乍ら、この聯盟の仕事は、主として餘りに論理的でありすぎるきらひがあつた。解體後、その指導分子はナップ映畫部に合流し、より現實的に果敢に鬪爭することを學び、一九二八年十二月ナップ再組織に際して、獨立して、日本プロレタリア映畫同盟と改稱した。その綱領、及び活動方針に就いては、玆に紹介し且つ檢討す可き紙面を有しないから省略するが、要するに冒頭に記した通りの、プロレタリア映畫運動全般を當面の任務として活動しつゝある唯一の團體なのである。その綱領の最も重要なる項が「プロレタリア映畫の生產上映のために闘ふ。」と云事は言ふでもないが。そして、僕のこの小論の取扱ふ可き範圍もその一項にのみ限定されてゐるのであるか。

5.

ブルジョワ社會組織の中に於ける、プロレタリア映畫の生產が、資本によつて必然的に制約される事實は前述した。從つて、プロレタリアートに依つて製作す可き映畫の種類にも一定の限度の存することを注目しなければならない。

ブルジョワ映畫に於て、最も普遍的で効果的な型は所謂劇映畫、卽ち、作者によつて豫め構成されたストーリーを持ち、劇的な緊張を主眼とし、俳優を使用した映畫である。數千年來、ドラマティックな藝術に對して最も敏感であり續けて來た人間の感覺型態を勘定に入れた時、劇映畫は、その宣傳力、煽動力に於て最も强烈なものである。プロレタリア映畫に於ても、事情の許す限りこの型の映畫に主力が注がれなければならない。併し乍ら、それは、事情の許す限り、なのである。そして、多くの場合、プロレタリアートにとつて

は、事情が許さない、のである。劇映畫のために、ともすれば必要な撮影所、セット、ライト、等の諸設備、それらの設備を支配する少なからざる資本、有能なる俳優を得ることの困難、等が我々の途に横はる。

從つて、現在の情勢から論じて、我々は實寫映畫の使用、實寫映畫のかくれたる機能の剩す處なき開發、を注目の焦點としなければならない。これには、第一に、確固たる階級的觀點から時事を撮影し批判したニュース、リール、第二に、實寫斷行の排列編輯によつてプロレタリア的論理を組み立てたモンタージュ・フイルム、第三に大衆教育のための文化映畫、が大別される。

これ等は、殊に小型映畫の發達と相俟つて比較的容易に實行し得るものであり、又現に前記の日本プロレタリア映畫同盟の闘士、技術家達によつて、實行されてゐるのである。

6.

プロレタリア映畫の過程に於いて、製作とその上映とは切り離して個別的に考へることが出來ない。また、上映とその觀客對象とは切り離して考へることが出來ない。

それ故、製作す可き映畫の性質、及び其任務に就いて、それ〴〵の範圍が定まつてゐる。

最も重要であり、最も本來的なプロレタリア映畫は、勿論、勞働者農民を對象とするそれである。併し乍ら純粹に慰安娯樂用のブルジョア映畫の合法的映寫は別問題としてアジテーション、プロパガンダ、のための作品上映は、現行檢閲制度のもとにあつては、全く非合法的持ち込みによる外はない。これは目下の處最も便利な方法として小型映畫によつて行はれてゐるが故に、一時にスタンダードフイルムの如く多數の觀客を收容することが出來ない。この缺點を補ふためには、工場組合、その他の集會へ能ふ限り屢々出動する移動映寫隊が組織されなければならないし、また小規模乍ら既に組織されてもゐる。

これに反して、量的な大衆性と合法性とに惠まれてゐるのが、第二種の映畫である。これは中間層、小市民知識階級、未組織大衆に働きかけるのを目標としてゐるが故に、普通の商業映畫の假面の下に、合法性限界内に於て、、、、、、宣傳を行ふものであるが、それが積極的な役割を果す可く余りに微溫的であるの故を以て、この種の映畫の効果を過小評價することは戒められなければならない。これは主として、所謂、、映畫の形に於て生産されるが、その生産を促さんがためには、商業的撮影所に於ける製作者、從業員の意識水準を高めるための諸種の運動、組合、研究會の組織、フラクションの活動、等、等、が絶えず活潑に行はれなければならない。（我々は未だ「灰燼」や「生ける人形」に凱歌を奏してはならない。）

プロレタリア映畫製作上映に就いては未だになさる可き多くのことが殘されてゐる。

小型映畫利用法の研究、（最近では、大勢は五ミリを捨て、一六ミリに赴いてゐる。）映畫運動家の技術の獲得、映技術家の意識化檢改運動、映畫從業員同盟の強化、――併し乍ら、最早與へられた紙面も盡きた。それ等は、プロレタリア映畫運動を全般的に取扱ひ得る他の機會に論じたいと思ふ。

ロシアは何故一週を五日にしたか

荒川實藏

讀者諸君は、最近の各新聞紙上に掲載された外電によつて、ロシアでは一週を以て五日となし、四日間を勞働日とし、一日を休息日とする新暦制が十月一日よりロシア全土にわたつて採用され、これと同時に各産業機關及び各學校は、所謂「連續的勞働週間」なるものが採用されたことを知られたゞらう。これは實に露國暦制の根本的變革であるのだ。しかしこの簡單な報道だけでは、この一週五日制が如何なる意義を有するか理解し難く、單に四日働けば一日休めるといふのだから、働くものに取つてはすこぶる付きの福音であると漠然と感ずるに過ぎないであらう。

ロシアの一週五日制については、尙ほ詳報を手にしないけれども、知つてゐる限りに於いて稍詳しく説明し、次いでこの新制度の實施が、なぜ可能であつたかを考究しよう。

新法によれば、一年を通じて合計五日間の革命休日を除く外、三百六十日は無休で仕事が行はれるわけである。次に如何に曜日を數へるかと云ふに、一年を三百六十日となし、五日間の革命休日を算入せず、勞働者を初め一般從業員は交代勤務で五日毎に休を取るのである。從つて、一年中に七十二回の休日と五日間の革命休日と合せば七十七日休めるわけである。一週七日制では、一年に五十二日の日曜日があるのだから、今まで日曜日以外の休日が二十五日あつたとすれば、一年中に働く日數は同じとなり、若しそれより少なかつたとすれば、休みが多くなつてくるわけである。序に、ロシアでは以上述べた休日以外に、過激勞働に從事してゐる勞働者には一年中に一ケ月、その他の勞働者には半ケ月の休暇があるが、これは新制度の實施後も變らない。更にまた右新制度の實施と同時に、各官公署では七時間勤務制が採用され、産業方面の勞働時間は現在通り八時間或は七時間であるが、遠からず七時間制の實現を見るだらうことを附言して置きたい。

一週五日制の内容は、不完全ながら、以上の説明で大體及び知り得るであらう。勞農當局は、この新制度の實施によつて國内の各種商工業、文化、教育その他の公共機關の活動を一新し、國家的能率をあげると同時に、失業問題に向つても解決の一助とせんとしてゐるのである。極めて卑近な例ではあるが、新制度の下では、芝居、活動寫眞クラブ、圖書館その他に於いては今までの如く日曜と休日に特に入場者多く混雜するやうなことなく、大體毎日平均して入場者を持つことゝなるであらう。

けれども、かやうな點が主要な問題でなくして、國家的能率の増進と失業問題解決の一

助が最も重大な問題であるのだ。今や合理化の問題は、日本及びその他の資本家的諸國家のみではなく、ソヴエート・ロシアにとつても當面せる重大問題の一つなのだ。ロシアの一週五日制は合理化の問題と關聯してゐるのである。そして、ソヴエート・ロシアに於ける合理化に關する問題と資本家的諸國家に於ける合理化に關する問題は、本質的にはソヴエート經濟と資本家的經濟のあらゆる根本的問題と關聯してゐるのである。

十一月革命の第十二週年記念日を迎へようとして居るロシアでは、年一年と建設事業が進捗してゐる。一例を擧げれば、最近一ヶ年間に於ける産業の發達は二一%であつて、豫定の二〇%よりも一%凌駕した位である。然るに大部分の資本家的諸國家では、慢性的な不景氣に苦しめられてゐるのである。そこで資本家等は必死となつて、この苦境を切り拔けやうとしてゐるのだ。けれども戰後に於ける資本家等にとつて、技術の改良は、合理化の根本的方法となり得なくなつた。その結果は、勞働賃銀の低下、勞働時間の延長、失業、勞働强度の增大、勞働者の困窮化等々を伴ふのである。之れに反して、ソヴエート・ロシアに於ける合理化にあつては、その利益は勞働者階級に歸するのである。もう一度繰返へして云へば、ソヴエート・ロシアに於ける合理化は、勞働者數を增大し、勞働賃銀を値上げし、勞働時間を短縮し、勞働者大衆の生活水準を向上せしめるのである。

この見地に立つて、今度ロシアで實施された一週五日制を考究する時には、その意義、目的及び結果が容易に推論し得るのである。

かくの如き一大變革は、ソヴエート・ロシアの如き經濟組織の下に於いてのみ可能であり、またその利益と福祉は勞働者自身の享有するところとなるのである。

この新制度の實施によつて、今まで毎日曜及び五日間の革命休日を除くその他の休日に於いて、全然休止してゐた工場その他の諸機關が、五日以外の三百六十日間無休で運轉するのであるから、それによる生産力の增大は實に巨大なものとなるであらう。

更に新制度は失業問題の解決に大きい效果を齎らすであらう。

ロシアにも失業者がある、二年前の統計によると、百四十萬人あつた。これは莫大な數ではあるが、一億四千六百萬の人口を有してゐるロシアでは、他の資本家的諸國家に於けるが如くに深刻ではないのだ。それだけではない。資本家的諸國家では、産業に從事してゐる勞働者の總數が絶えず減少してゐるが、ロシアでは反對に、それが增大してゐるのだ。毎年産業は失業者を吸收してゐても、農村から都市へやつてくる出稼人が、失業者の基本的要素を作るのである。連續的勞働週間制は農民の都市集中防止といふ姑息的な失業防止策ではなくして、彼等農民を産業に吸收し、益々産業を發達せしめ、同時に失業問題解決の一助となるのである。

要するに、ロシアでは、勞働生産力の增大は、勞働者の利益となり、從つて、一週五日制の實施が可能となつたのだ。

(一九二九・一〇・二)

早稲田大學論

大宅壯一

一

封建制度の廢墟の上に、絶對的な中央集權的國家組織が確立して以來「朝」「野」といふ二つの對立概念が生れて、それが極く最近に到るまで、世人の頭を或る程度まで支配してゐた。もつとも、今では、與黨に對する「在野黨」といつたやうなブルジョア政治界の用語に、辛うじてその形骸をとゞめてゐるくらゐのもので、かゝる官僚主義的な概念に捉はれてゐる人は少いであらう。しかしながら、それは日本の近代政治思想を說明する上には、非常に便利な言葉である。

教化機關としての早稲田大學のこれまでの傾向や色彩は、大體において、この「野」といふ一語でもつて說明することが出來はしないかと思ふ。數年前に出た永井柳太郎氏の演說集に、「野聲」といふ題がついてゐたことを憶えてゐるが、この「野」的傾向は、單に早稲田系の政治家若くは政論家にほゞ共通した特色であるのみならず、文藝、思想を初め、すべての文化的分野において、早稲田系人物の大部分を濃厚に彩つてゐるやうである。そしてそれは、一般民衆にとつては、又私個人にとつても、隨分懷しい、親しみ深い色調であつた。

故大隈重信侯が早稲田大學を創立した動機は、侯が××××の××にふれ、「朝」的生活を斷念して、「野に下る」決意をしたことから來てゐるといはれてゐる。果してそれが事實であるかどうかは、私の知りうる範圍外であるが、大隈侯自身が民衆の間に持ちつゞけてゐた「人氣」を、早稲田大學が或る程度まで受けついでゐることは、確かに事實である。

大隈侯は、明治大正を通じて、もつとも民衆に親しまれた政治家の一人であるが、今日なほ早稲田大學が、他のいづれの大學にも見られない一種特別の親しみをもつて民衆に迎へられてゐることは、野球その他のスポーツ・ファンを觀察すれば、一番よくわかると思ふ。

或る大學チームが、他の大學チームと試合をする場合に、ファンが

自分と關係の深い方を應援するのは當然であるが、その大學とは何の關係もない觀衆の間に、支持者の多いことにかけては、早稻田大學に及ぶものはない。それはあながち早稻田が、多くのスポーツにおいて覇權を握つてゐるからではなくて、それよりも早稻田大學のもつてゐる傳統的な民衆的傾向に基づいてゐるのである。

これまでの早稻田大學は、官僚の養成所であつた帝國大學に對立する存在として、「權威」に叛逆する、でなければ少くとも、それから解放されたものとして、一般に印象せられてゐた。私自身も、今から十數年前、「危險思想」の廉をもつて地方の中學を追放されたとき、まづ第一に私の頭に浮んで來たのは、「自由の學園」早稻田大學であつた。もつとも私は、家庭の事情で上京することが出來なくて、自宅から通學の出來る京都の高等學校に入學したのであるが、それでもかなり長い間、早稻田に入學したいといふ希望をすてなかつたものである。

又、早稻田大學の「野」性は、「朝」に對する政治的意味ばかりでなく、都會的洗練性に對する農村的素朴性をも含んでゐる。この點からいつて、早稻田大學は、都市ブルヂョアを背景とする慶應義塾とはつきり對立してゐる。

概して早稻田の學生は、地方の地主階級の子弟が多いやうである。以前私は、或る思想團體の主事のやうな仕事をしてゐた頃、安部磯雄氏等と共にしばしば地方講演に出かけたことがあるが、地方の有力者の間に早稻田大學出身者の多いのには、いつも驚かされたものである。

この早稻田大學の野性的な素朴さは、早稻田系人物の思想、早稻田系作家の作品、早稻田の學生の服裝などから、早稻田大學を中心とする附近一帶の雰圍氣にまで、よく現れてゐる。野球においても、早稻田チームがいつまでたつても田舍染みてゐることは、普くファンの認めるところである。

だが、この田舍くさい素朴性の底には、いやに高く構へてゐる帝國大學や、お上品な紳士風の慶應義塾のもたない、力強い何物かを藏してゐる。そしてそれがこれまでの早稻田大學の身上であつた。

ところで、この「力強い何物か」は、果して今日の早稻田大學にしつかりと保存されてゐるであらうか？

しかし、それについてのべる前に、早稻田大學が日本の近代文化に何を貢獻したか、一應檢討してみるのが順序であらう。

二

官界及び官學における帝大系勢力の壓倒的なことは、今更いふまでもない。又財界における慶應閥の地位は、遠く早稻田の及ぶところではない。

官界からも財界からも閉め出しを食つたものが、驥足を展べるところは、それらと對立するところの文化的分野であることは明らかである。あらゆる方面において、アカデミズムと峻鋭に對立してゐるとこ

ろに、ワセダイズムの面目がある。

早稻田の「野」的傾向は、早稻田の學問的、思想的、文學的特色であるのみならず、すべての文化的分野の中で、この傾向と特に密接に結びついてゐる方面にあつては、早稻田系人物の活躍は、その量において、その質において、目覺ましいものがある。

例へば、これまで「輿論」といふ形式において、官僚に對する一大敵國を形づくつてゐた新聞界における早稻田派の勢力は、まつたく壓倒的であつた。從來の官學的見地から見れば、「最高學府」に學んだものゝ第一の目的は、まづ高等文官試驗をパスして官界に乘り出し、書記官から知事を經て、未來は内閣の椅子を獲得することであつて、新聞記者といふやうなものは、落伍者のする仕事だと考へられてゐたのである。もつとも、デモクラシー運動以後、一般に民衆的風潮が著しく擡頭すると共に、一方では資本主義が行きづまつて、官界や財界に滿員符が掲げられるやうになり、その結果帝大その他の諸大學からも、新聞記者志望者が殺倒して來たけれど、夙にこの方面に多くの優秀な先驅を送り出してゐる早稻田派の勢力は、今なほ牢固として拔くべからざるものがある。

現に、例へば、有識層にもつとも多くの讀者を有し、最大の權威をもつて日本の新聞界に君臨してゐる東京朝日新聞のみについていつても、編輯局の首腦者は、ほとんどすべて早稻田大學出身者である。私の記憶に殘つてゐる主だつた人達だけを擧げてみても、緒方竹虎(編輯局長)、美土路昌一(編輯局主幹)、牧野輝智(編輯局主幹)、野村秀雄(政治部長)石川六郎(校閲部長)、土岐善麿(調査部長)、小高吉三郎(運動部長)、坂崎坦(學藝部長)等々、まつたく數へ切れぬくらゐである。その他の諸新聞においても、東京朝日ほどではないが、早稻田系は他のすべての大學を壓してゐる。大阪朝日の編輯局主幹岡野養之助、同整理部長原田讓二、每夕の編輯局長御手洗辰雄等、一流どころをすぐつただけでも、かなりな數にのぼるほどだから、「新聞年鑑」にでもよつて全國的な調査をすれば、大變なものになるであらう。

單に新聞界ばかりでなく、雜誌、出版等一般ヂャーナリズムを通じて、いたるところで早稻田系の人々が著しく活躍してゐる。増田義一を社長とする實業之日本社と早稻田との關係は、今更述べるまでもない。中央公論社などは、島中社長を初め、社員は二三を除いて全部早稻田出身者である。その他、各種の出版事業に從事してゐる人々の過半數は、早稻田系であるといつても差支ないであらう。まつたくこれまでの早稻田の政、經、商、文の各科は、總括してジャーナリストを養成するための機關であつたかの如く見えるくらゐである。

出版事業は、同じ産業部門の中でも、一般民衆ともつとも密接に結びついてゐるものである。從つてヂャーナリストたる第一の資格は、民衆心理を俊敏に洞察する能力をもつてゐることである。早稻田大學出身者が、ヂャーナリズムの世界において、かくの如く壓倒的勢力を占めてゐるといふ事實は、官界及び財界における雄飛を他の大學によ

つて阻まれてゐたといふ消極的理由に基づくばかりでなく、大隈侯以來の「野」的精神の一つの現はれであると見做すべきである。

もつとも最近は、帝大その他からもすぐれたヂャーナリストが續々出て來て、現に東京朝日などでも、近き將來において編輯主權は、それらの人々に移るであらうといはれてゐるが、それは早稲田派の沒落を意味するといふよりも、漸次各大學の個性が崩れて、質的に平均して來た結果に歸すべきであらう。

三

次に文藝界であるが、こゝでも早稲田派の勢力は、少くとも量的には、他のすべての大學を凌駕してゐる。

元來、文藝そのものが一種の「野性」である。官途について榮達した人々や、財界に確實な地位を築いてゐる人々、及びそれらのエピゴーネンの間から、すぐれた文藝が生れる筈がない。

早稲田派は、文藝の世界においても、帝大派のアカデミズムや、慶應派の都會的耽美主義などに對立して、大體において「野」的傾向を濃厚に示してゐる。

早稲田派文藝のもつとも重要なる特色は、つねに何等かの點において、大衆と密接に結びついてゐることである。獨善的孤高性や個人主義的頽廢から解放されてゐることである。從つてこれまで早稲田には、時代が廚川白村をその中から追ひ出したやうな「象牙の塔」は最初からなかつた。

若し坪内逍遙が帝大の教授であつたならば、日本の文壇は、市河三喜式の「沙翁評註」だけしか得られず、彼はその晩年を「倫理學」のために費し、今頃は「思想善導」をもつて勅選議員の下地をつくつてゐたかも知れない。同樣に島村抱月が帝大出身で、その研究室に留つたとすれば、松井須磨子とのあの美しいローマンスがなくなり、彼の家庭悲劇もまぬがれたであらうが、その代り日本の新劇運動の成長がどれだけおくれたか知れないであらう。

日本文學史上における早稲田派の全盛期は、三年半の海外留學生を了へて歸朝した抱月を中心として、「早稲田文學」が再刊され、オール・ワセダの峻嶺を盡く網羅して「文藝百科全書」といふ歷史的な大著を完成したころである。當時、明治評論界の泰斗高山樗牛並に「作家の帝王」尾崎紅葉が相ついで沒し、早稲田派の勢力は、まさに全文壇を壓するの概があつた。

抱月の死後、「早稲田文學」が相馬御風の手に移り、御風が行きづまつて、郷里に退くに及び、さしもの早稲田派もつひに解體してしまつた。そしてその後の文壇においては、同系の作家評論家のほとんどすべてを、同一旗印のもとに糾合するといふやうな現象は、再び見られなかつた。

御風の引退は、單に御風個人の文學的、思想的行きづまりを意味するのみならず、「文學」の內部における階級的分解作用の萌芽を、われ

われはその中に見出すことが出來るのである。

御風は、文學的教義においては、自然主義から一歩も出てゐないにもかゝはらず、時代の風潮におされて、理想主義的傾向にも動かされ、トルストイその他の人道主義にも共鳴し、更に進んで、當時の流行トピックであつた「社會問題」を通じて、社會主義思想にも或る程度の同情を表明せざるを得なくなつて來たのである。彼はこの內部的分裂に際して、方向を見失ひ、つひに芭蕉や良寛に逃避してしまつたが、この分解作用は、漸次全文壇に波及し、さまざまな紆餘曲折を經て、近年つひに、ブルヂョア文學とプロレタリア文學の二大對立にまで到達したのである。

秋田雨雀と小川未明の無政府主義的人道主義は、その過渡期における一現象であるが、同じ「人道主義」でも、學習院若くは帝大系の「白樺」派のそれと違つて、個人主義的、英雄主義的傾向の著しく稀薄な點は、やはり前記のワセダイズムの反映と見るべきであらう。

プロレタリア文學運動における早稻田派の地位及び功蹟は、私が說明するまでもない。プロレタリア文學理論の二大先驅者たる平林初之輔、靑野季吉の名をあげただけでもうすでに十分である。

もつとも早稻田系の文士も、主として中流以上の家庭に育つたインテリゲンチヤである點で變りがないから、創作的分野においては、理論的分野におけるほど、プロレタリア的傾向が鮮明に現れてゐないけれど、左翼への「轉向作家」の多いことにかけては、早稻田派は決して負けを取らないであらう。ブルジョア的水準を拔いたプロレタリア小說を初めて日本の文壇にもたらしたといはれる葉山嘉樹氏の如きも、かつて早稻田大學に籍をおいたことがあるといふことは、甚だ興味のある事實である。

その外、文壇早稻田派のいま一つの特色は、苦勞人が多いといふことである。これは、以前の早稻田文科の變則的制度の賜物であつて正則の教育を受けずに、さまざまな生活を經て來た人が、中途で志を立てゝ「大學」に入り、文學を學ぶことを許されてゐたからである。このことは、加能作次郞、細田源吉、谷崎精二等の作品の傾向と、帝大や慶應出の作家のそれとを比較してみれば、はつきりわかるであらう。

ところで、現在の早稻田の文科はどうかといふに、遺憾ながら、あらゆる意味において、早稻田的特色が日に〳〵失はれつゝあるやうである。片上伸が亡くなり、吉江喬松が生氣を失ひ、中村吉藏が時代との交渉を失ひ始めた近頃の早稻田の文科は、高等師範と大した變りがなささうである。文學史ではなくて、生きた文學を講義しさうな人は見當らず、新興文學は、新歸朝の宮島新三郞を通じて、辛うじて一脈のつながりを見出してゐるのみである。又講師の職にある平林初之輔の論鋒が、最近頓に尖鋭を缺くにいたつたのは、近く同大學から洋行するための準備の意味も含まれてゐるといはれてゐるが、それは單なる噂にすぎないとしても、最近における同大學の著しい反動的傾向を

傳へるものであつて、過去の輝かしい傳統のために、まことに嘆かはしい次第である。

四

最後に、思想界、わけても最近の社會思想界における早稻田系人物の目ざましい活躍は、前にのべた「野」的傾向の近代化され、尖鋭化された事實を具體的に示すものである。

嚴密な意味における日本の近代思想は、デモクラシーの運動と共に起つたともいへるのであるが、帝大の吉野作造と共にこの運動をリードした大山郁夫の活動は、今なほわれ〳〵の記憶に新たなるところである。吉野作造は、帝大教授としては珍らしい存在であるが、それでも早稻田の大山郁夫とは、面白い對照である。いづれも基督教出身の人道主義者であり、それまでヂヤーナリズムを通じて「民衆」と結びついてゐた點では同型であるが、前者が間もなく「實踐」から足を洗つて、「明治文化研究」にのがれたのに反し、後者は時代と共に尖鋭化して行つて、最近「左翼社會民主々義」の方へ退却したとはいへ、一時は××主義を指導精神とする非合法政黨にあつて、「われらの輝ける委員長」の役割まで演ずるにいたつたといふことは、單に兩者の個性の相異ばかりでなく、彼等のバックをなしてゐる兩大學の特質にも、幾分影響されてゐるといへるであらう。

日本の「獨立勞働黨」をもつて任じてゐる社會民衆黨における黨首安部磯雄の地位は、萬一彼を失ふならば、同黨の對社會的勢力は半減するであらうといふ同黨幹部某の言葉が、明らかに語つてゐる。彼が最近まで早稻田大學の教職にあつたといふことは、彼の講ずる經濟學その他がどんなに陳腐なものであつたにせよ、同大學に對する社會的印象に、どんな影響を與へてゐたかは、想像するに難くない。

勞農派の理論的指導者としての猪俣津南雄、鈴木茂三郎等は、あまりに知られすぎてゐる。前者は、早稻田系の人としては珍らしく、緻密な、アカデミックな傾向を帶びた思想家であるが、もし彼が官學の人であつたならば、いつまでも書齋と講壇から離れないで、これまで彼が獲得した程度の「實踐」にすら到達することがむづかしかつたであらう。

日本大衆黨及び全日本農民組合においては、三宅正一、稻村隆一、淺沼稻次郎、田所輝明等、主として元の建設者同盟系の人々が中心となつて活動してゐる。わが國における農民運動の開拓者としての三宅、稻村、淺沼の三人は、帝大出の勞働運動家を代表する麻生久、棚橋小虎、赤松克麿の三人と共に、わが社會運動界の二つの珍らしいトリオを成してゐるが、前者は後者に比して、極めて粗朴で、インテリゲンチヤ的要素が稀薄で、いかにも農民運動家らしく、野性旺溢してゐるからいつて、典型的な「早稻田つ子」だともいへるであらう。

又小僧から叩きあげてわが國における「實證經濟學」のパイオニアとなつた高橋龜吉及びその後繼者で最近亡くなつた北昤吉等も、

稲田派ならでは見られない人物である。

その他、左は×××××の最高幹部の一人で、去年の大檢擧に際して×××の×××××に成功したが、最近××で××されて××に××されて來た×××から、右は舊日本農民黨の指導者で、最近無産階級運動から完全に追放された平野力三にいたるまで、わが社會思想界を代表する各派の首腦部が、ほとんどすべて早稲田系の人々によつて形成せられてゐるといふ事實は、わが近代思想史上において、早稲田大學がいかに大きな役割を演じたかを物語るものである。

しかしながら、これらの人々は、過去の早稲田が生んだか、或は過去の早稲田に關係した人々であつて、現在においては、さうした傾向が跡方もなく消え失せてしまつたばかりでなく、ますく\その反對の方向に向つて進みつゝあるのである。

現在、ワセダ・イデオロギーを代表してゐる「思想家」としては、學校政治家以外の何者でもない「常務理事」××××の支配下に、もつとも硬化した意識的反動家×××があり、時代離れのした觀念的哲學者××××があり、左翼から脱落して信用恢復のために忠勤を拔んでゝゐる×××××があり、文化的自由主義から百パーセント反動にまで墮ちて行つた××××があり、去年の總選擧に、實業同志會から立候補して見事に落選した××××があり、單なる新聞雜誌業者にすぎない××××がある。

かくて早稲田は何處へ行く？　それは說明するまでもないであらう。

五

ヂャーナリズム、文藝、思想の各分野における早稲田派の檢討は、これで大體終つた。外にまだ政治界、財界、及び理工科的方面にも言及しなければならないのであるが、それは私の智識と關心の範圍以外であるし、それに豫定の頁もすでに盡きたから、大急ぎで結論に移らう。

最近のやうに　わが國の資本主義が、高度の發展段階に達し、階級對立が尖鋭化すると共に　單に早稲田大學ばかりでなく、私立大學一般が、創立當初の自由主義的傾向を喪失し　漸次反動化して行くことは、自然の勢であつて、一人や二人の力で阻止しうるものではない。たまく\早稲田大學は　創立者の政治的立場に基づいて、より多く自由主義的傾向を有し、それを比較的長く保持してゐたために最近における急激なる反動化が、特別に目立つのである。もつとも大學當局者の立場からいへば、それが目立てば目立つほど、その轉換を社會に強く印象せしめる上に、より効果的なわけである。

今後、日本の各私立大學は、アメリカにおけると同樣に、背後に特定の巨大なる財閥をもたなければ經營し得なくなるであらう。早稲田は、大隈侯時代から鑛山王古河と密接に結びついてゐたが　今後は大學それ自體が、同一資本家によつて經營されてゐる日刊新聞や日刊紙

命など、共に、一大商事會社の一部たらんとする傾向を示してゐる。

そればかりではない。新大學令の發布によつて、文部省は　各私立大學を官立同様、その完全なる支配下におくことに成功した。

かくて「自由の學園」早稻田大學も、漸次その特色を失ひ、支配階級よりの嚴重なる劃一的拘束を受ける點では官立と變りがなく、官立よりも國庫の補助が少いが故に、設備（教師の質を含む）の點では官立に劣り、結局、近き將來において、「二流帝大」と化し去るであらう。

目下、早稻田大學校友會では、貴族院の代表的策士である伯爵松平賴壽を委員長として、「高田總長古稀祝賀」記念に、三十五萬圓の寄附金を募集してゐるが、その幹事の一人である私の知人の語るところによれば、この前、同大學が××と協力して「早稻田學生新聞」に強制廢刊を命じて、學生間に非常な動搖が生じたとき、大山郁夫を校友會より除名する案が　同幹事會に提出されたさうである。もつともそれは議決されなかつたさうであるが、單なるこの一事實をもつても、現在早稻田大學を包んでゐる空氣がどんなものか、はつきりわかるであらう。

世界プロレタリア文學展望

最近のソヴエート文學

米川正夫

最近のソヴエート文學を一語に評すれば、無風的沈靜時代といふ事が出來よう。しかしそれは再世界の荒涼たる廢墟の間から、鬱勃たる生命が一時に湧出して、若々しい力が百花繚爛の壯觀を呈した二十三年頃や、文壇の右翼と左翼の爭鬪が國家的重大さを帶びたる事件となつて、文學界思想界の全部を興奮し動搖せしめた二十五年あたりと比べての話しで、多くの新作家が相ついで擡頭して、自己獨特の言葉を語り、新しい何ものかをロシヤ文學に寄與せんとしてゐる點から言へば、今日のソヴエート文壇の沈靜は、明日の飛躍を孕んだ準備時代であるとも見られる。四年前に共産主義國家に於ける自己の正統的位置を主張して、同伴者に對する高壓的排撃を要求したプロレタリヤ作家も、藝術の世界における優越はたゞ自由競爭によつてのみ得らるべきであるといふ、共産黨中央委員會の決議の正しさを認めて、默々として辛抱づよく表現の技巧を習得する態度を取つて來たし、批評界の方でも新興文學の礎石となるべき重要な問題は、ほとんど論じ盡くされたので、もう文壇全體を震撼さすやうな論爭も見られなくなつた。では既に一般に公認せられた個々の綱目を、より周到に、より精細に檢覈して完全な仕上げを與へるといふ事が、批評家に殘された任務となつてゐる。つまりロシヤの國そのものが爭鬪時代を終へて、より穩健な平和的建設の道程に入つたのと同じやうに、ソヴエート文學もそれと步調を合はせて、じみな『年期奉公』の時期を送りつゝあるものと言つてよからう。

先に述べた如き趨勢に伴ふ必然の現象としては、過去に於けるロシ

ヤ文學の最高標準たるトルストイ、ドストエーフスキイに對する興味と鑽研、それから更に進んでその模倣である。殊にトルストイは、表現主義的様式化の衰微と、本格的寫實主義への復歸といふ一般大勢のために、若いプロレタリヤ作家の前に絶對的權威として君臨してゐるの如き觀がある（但し藝術家名人としてのトルストイであることは言ふまでもない）。新しく現れる若いプロレタリヤ作家の作品で、トルストイの影響の指摘されないものは數へるほどしかない、から言つて甚しい誇張ではあるまい。從來プロレタリヤ文學の最高達成と許されてゐる、ファヂェーフの『壊滅』なども其の顯著な例の一つである。今パリに亡命してゐる新貴族主義の作家イヷン・ブーニンなども、その純粹な藝術的天分によつて、ソヱート文學に少からぬ追隨者を出しつゝある。（彼はザイツェフと共に國立出版局から著作集を出してゐる、亡命作家中少數の例外である。）

しかし文學作品のテクニツクとイデオロギイを、截然と區分して取り扱ふことは不可能であるから、舊ブルジュア文學のプロレタリアート（部分的にはプロレタリヤ作家）に與へ得る有害な影響といふことは、批評家の間で絶えず論爭の題目となつてゐる。最近評壇の權威者たるポロンスキイはこの問題を論じて、文學作品の影響は單に作品そのものの含んでゐるイデオロギイによつてのみ決定せられるものでなく、讀者の心理とイデオロギイもこの決定を左右する重大なる要素であると言つたために、プロレタリアートはブルジュア藝術の惡影響に對して、免疫性を有してゐる、從つてあらゆる反動文學の流行を許容する妄論であるとして、極左の批評家から猛烈な攻擊を受けた。しかしポロンスキイの所說は、單に作品と讀者の間の心理的相關交渉を極めようとする、學術的研究の一端を暗示したもので、檢閱の撤廢などといふ政策上の意見を主張したのでないことは無論である。がそれにも拘らず、彼の舊文學に對するこの提議は、A・ボグダーノフ時代の單純粗暴な否定論に比べると、プロレタリヤ文學論の著しい進步と深化を語つてゐる。

在來のプロレタリヤ文學を充たしてゐた、マルクシズム綱領の假面にしか過ぎない肯定的人物、共產主義的善玉の型から脫して、本當の溫い血の通つてゐる生きた人間を創り出すこと、これが今日のソヱート文壇全體に共通の憧れであり惱みである。そしてこの要求を多少なりとも充たした作品は、忽ち批評家や讀者に一つの事件として取り入れられ、競つて論爭の題目とせられる。最近もつとも多く新聞雜誌の論壇を賑はした作品は、パフメーチエフの『マルテインの犯罪』、パンフエーロフの『ブルスキイ』、ショーロホフの『靜かなドン』、オヨーシヤの『羨望』、スリヨートフの『斷絕』などであらう。パフメーチエフの『マルテインの犯罪』は、革命戰の鬪士であり指導者である主人公が、責任回避の行爲に對する悔恨に責められて自殺する、その心理的分析を主題としたもので、多くの評家にプロレタリヤ文學の逸品をもつて許された長篇力作であるが、あまりに自己反省的な弱々しい

主人公の性格も、ドストエーフスキイを眞似て及ばざること遠いくどくどしい心理描寫も、血と焰の渦卷いてゐた同胞戰時代のチナミックと矛盾した不自然さを感じさせる。スリョートフの『斷絕』も同じく内部的分裂に惱む國内戰の戰士を主人公としたものであるが、新進中の新進ともいふべきこの年若い作家の方に、より多くの眞實みと新鮮さが認められ、いろ〳〵な意味における缺點にも拘らず、輝かしい將來を期待させる。

しかしさういふハンデイキヤップをつけないで、本當に生きた人間を示すことに成功した作品は、ユーリイ・オリョーシヤの『羨望』であるといふに躊躇しない。この小說も共產主義者を主人公に選んでゐるけれど、前二者のごとく革命の動亂時代を背景にした所謂『戰爭もの』でなくて、文化的建設の時代に於ける平和の鬪士を描いてゐる。その點から言つても、『羨望』は今日の讀者により強くアッピールする力を有してゐる。物語の筋は極めて單純で、バービチエフなる主人公が零落した知識階級の醉漢を拾ひ上げて、自分の家へ引き取つて世話をしてやる事にしたところ、この食客はかへつて恩人に對して羨望を感じ、心から彼を憎むやうになる——といふ極めて單純なものであるけれど、通常人の氣づかぬ意外な微細を掴まへて、簡潔な筆觸でこれを表現する驚くべき才能、物の本質を突かねばやまぬ清新な譬喩、作者の批判を隱しながら作中人物の目を通して行つた心理解剖の鋭さ自然さ。——これら一切のものが見事に肉づけされた「生きた人間」を紙上に躍動させ、呼吸させてゐるのである。それからオリョーシヤの現代的都會的な文體も、見のがすことの出來ない特色である。ロシヤ文學に珍らしく輕快で、明るい、瀟洒たる感じの漲つてゐるところは、現代フランス文學の尖端と一味相通ずるものがあるけれど、フランスの作家の持つてゐる享樂的、頹廢的な匂ひは少しもなくて、引き緊まつた男性的なチナミックな調子で一貫してゐる。これは正しく新興ロシヤ文學が到達した疑ふ餘地のない成功である。ピリニヤークの文章がソヴエート文學に與へた影響は小さからぬものであるが、その平面交錯主義に基づく混沌味から全く離れて、明快な繪畫的手法を開拓したオリョーシヤの功績は、高い評價を受けて然るべきであらう。

オリョーシヤの『嫉妬』に劣らぬ成功を贏ち得た力作は、ショーロホフの『靜かなドン』である。ドン河地方のコサックの生活を題材としたこの長篇は、まづ主題の取り扱ひ方に新しみを見せてゐる。これまでロシヤ文學に現れたコサックは、ゴーゴリの『タラス・ブリーバ』にしてもトルストイの『コサック』にしても、この民族の華やかな英雄的浪漫的の側面しか示してゐなかつたが、ショーロホフは始めて彼らの經濟生活、勞働生活、家庭生活などを、ほとんど遺憾なきまでに遍く描破して、その眞の姿を讀者の前に展開して見せてくれた。この大作の中に現れて來る人物は、鈍重な中農階級、貴族階級、軍人、インテリゲンチヤ、革命的叛逆的傾向を萠した貧農階級といつた風に、コサック民族の各段階を抱擁してゐる上に、ドン河をはじめ、南方の

曠原、野獸の生活などの新鮮な美しい描寫に充ち溢れて、一つの雄大壯麗な叙事詩を現出してゐる『靜かなドン』の基調をなしてゐる氣分は、生に對する歡喜と悦ばしき生命の肯定といふ言葉で要約することが出來やう。この氣分は屢々トルストイ的な廣い意味における人類愛に押し擴げられてゐる。のみならず、生の肯定を表現する作者の藝術方法にも、著しくトルストイの感化が窺はれる。時とすると全然トルストイの模倣と認めなければならないやうな所さへある。けれども、ショーロホフの藝術をトルストイのそれと區別する明瞭な相違點は、彼が眞の意味の農民作家だといふことである。農民の階級から出たショーロホフは、自分の作品の對象としたドン地方農民の世界を、自分の魂と同じくらゐによく知り拔いてゐる。農民の人生觀、その感情、思想、言葉、傳統——すべてが彼の本質の一部をなしてゐるものであるから、彼は作中人物の目をもつて見、作中人物の心をもつて感じたばかりでなく、それを叙述する文體まで農民の言葉から有機的に組織したショーロホフ獨自の文體なのである。この武器によつて彼はトルストイの力強い影響を克服して、ソヴエートロシヤの農民文學に一時期を劃する、この大作を完成したのである。

パンフエーロフの『ブルスキー』(貧農組合の名)も農村に於ける有産階級と無産階級の爭闘を描いた長篇で、ショーロホフの『靜かなドン』と共に農民文學の右翼を形づくるものと言はれてゐる。農民文學の右翼中で最も才能ある作家として定評を得てゐるのはクルイチコフである。彼が右翼と目されてゐるのは、農村に殘存してゐる強い過去の精神の表現者として、終始一貫してゐるがためであるが、もうこれ以上この作家について敷衍する餘裕を持たぬ。たゞ一つ附言して置きたいのは傑作『穴熊』の作者レオーノフが最近發表した『百姓奇談』と題する一聯の短篇小説のことである。彼は從來ドストエーフスキーの直系を繼いだ作家の如く見なされてゐたが、これらの短篇に於いては、觀照の態度から言つても文體から言つても、むしろプーニンとの類似點がより多く指摘される。文學生活の第一歩から豐かな天賦によつて一流の作家の列に伍したレオーノフは、この『百姓奇談』によつて更により高い藝術境に達した事を證明した。その表現は一層緊縮して彈力性を增し、ヂナミツクな力さへ現はして來て、そこに描かれた人物は一人々々、くつきりと鮮かに浮き彫りにされ、藝術的完成の力によつて殆ど一種のシムボルとしての意義さへ獲得してゐるが、しかし作全體の支配調は、貧窮と不幸と無知の闇に包まれてゐる農村に對する、絶望的なペシミズムである。それとほゞ同樣の事が、現代ロシアの作家中もつとも華々しい名聲を有してゐる、フセヲーロド・イワノフについても言ひ得る。簡潔な素描的表現の權威と稱せられる彼の近業は(敢て農村を描いたものとのみ限らないが)不思議な目に見えぬ暗い衝動に引かれて、或ひは愚かしい、或ひは狂人めいた無意味な行爲を重ねて、つひに同じくらゐ無意味な最後を遂げる、變態精神患者のやうな人物を描いたものばかりである。そして無

論作品全體を塗り上げてゐる色彩は、救ひのない人生に對する恐怖と不安である。從つてイワノフもレオーノフと同樣、マルクシストの批評家から反動作家の極印を打たれるやうになつた。

最近本誌に掲載せられた『狼の掟』の作家ピリニヤークは、誰よりも早くからブルジョア的傾向の顯著な作家として、プロレタリヤ派の非難攻擊を浴びて來たが、發賣禁止の厄を受けた『消されない月の話』でスターリンに關するモデル問題を惹起して以來、反革命作家とさへ呼ばれるやうになつた。『狼の掟』も本國ロシヤでは遂に發表することを許されなかつたらしく、脫稿以來一年餘になる今日まで發表せられないでゐる。しかし藝術作品の影響とその感受の問題は、前に引いたポロンスキイの言つてゐる通り、非常に複雜な重大な問題で、極めて愼重な態度で研究しなければならぬ事である。單に抽象的な理論を尺度で決定し去るべく、文藝作品はあまりに微妙な有機的綜合であり過ぎる。ある特定の政府の政綱に一致しないといふ事は、必ずしもその作品の民衆に對する意義が否定的な、有害なものであるといふ結論に導くとは限らない。今春ピリニヤークが全露作家同盟の會長の選に際し、スギールスキイの跡を襲つてその要職を占めるに到つた事實は、單なる事務上の一變動に過ぎないもので、作家としての彼の價値に何ら重きを加へはしないかも知れぬが、彼が今秋出版する豫定になつてゐる長篇力作が、まだ完成に程遠い夏の頃から、旣に英佛獨三箇國の國語に飜譯するべく、權利讓渡の契約が成立したといふことは、ピリニヤークの作家的名聲が一部の人の傳へるごとく、危く消滅に瀕してゐるのでないといふ證明にはなるであらう。彼が己れの創作の一轉機を劃さうと意氣ぐんで、二月以來寢食を忘れて沒頭してゐるこの長篇は、彼自身の言葉によれば「美しき未來」をテーマとしたもので、ドネープル河電化工事などの文化建設の活動を取り入れて、生きたロシヤの社會的運動に接觸しようとする眞劍の試みださうである。彼はこれまで多少すねもの的心理に傾いてゐたらしく、それが彼の藝術を狹くしてゐたやうに思はれるが、この力作によつて更に濶然と開けた新しい創作の大道に入ることが衷心から期待される。

英米に於ける左傾文學

北村喜八

この小論は、英米のプロレタリア作家——嚴密に言へば、プロレタリアート的傾向の幾分なりを持つてゐる作家——の四五に就て、記述するに留めなければならない。

出來うるならば、次のやうな順序によつて、英米に於けるプロレタリア文學を論じてみたいのである——即ち、かかる文學を生長發展せしめるところの社會的諸條件、そして、その文學的活動がどの程度にまで活躍してゐるかの現狀、及び、個々の作家の地位と特質について。併し、さうした關係に於て論ずべく、不幸にして私は十分な材料を持つてゐない。

十分な材料を持つてゐない理由は、必ずしも私の不勉強によるものではない。十分な材料を得ることが出來ないほど、しかく英米のプロレタリア文學は、表面に現はれた活躍をしてゐない。寧ろ、プロレタリア文學と稱せられるほどの文學がないと言つた方が適切かも知れない。

言ふまでもなく、アメリカとイギリスとは世界最大の資本主義帝國である。前者が資本主義の爛熟期を示してゐるのに反して、後者は資本主義の衰微の徵候を見せてゐるが、兩者とも合理化政策によつて、左翼運動の進出を阻害してゐるので、その無產運動は右翼的であり社會民主々義的である。從つて、そこにはプロレタリア文藝運動の活潑な活動をなしうるだけの社會的基礎がつくり出されてゐない。勞農ロシアに於ける文學的活動は、殆ど大部分プロレタリアート文學に集中され、ドイツに於ては左翼文藝は、生々とした活氣を呈し、日本に於ても、この數年の勞働運動の加速度的成長は、プロレタリア文學に關する論爭を活氣づけ、それが作品の創作的活動をも盛んならしめたが、それらに比較すれば、英米に於けるプロレタリア文學の活動は遙かに遲れてゐると言はざるを得ない。

この點、英米プロレタリア文學は問題の對象とすべく未だ十分な要を持つてゐないとも言へる。併し、勞働運動に於ける左翼分子の活躍と、それが未組織大衆とに結びつき、それによつて生ずる社會情勢の變化は、プロレタリア文學を成長せしめずに置かないだらうことは豫想出來るのである。

イギリス文學に於て、吾々は、社會主義的傾向（時としては改良主義程度でしかないが）を持つ老大家の一群を知つてゐる。即ち、バアナアド・シヨオ、エチ・ジ・ウエルズ、ジイ・ケイ・チエスタアトン、ジヨン・ゴオルズワアジ等である。併し、それらは新しいプロレタリア文學の花を咲かしめる一塊の土壤となり得ても、それを創造し、或は指導するには、もう既に、あまりに微溫的な存在たることは免かれない。では、新時代の作家でそれに代るものがあるだらうか。吾々は、若い作家の中から、次の名前を拾ひ出すことが出來る。即ち、ダグラス・ゴルドリング、シ・ケイ・マンロウ、女流作家レベッカ・ウエスト、それからアイルランド文學者として、ライアム・オフレエアテイ、シヨオン・オケシイ等である。

世界大戰は、帝國主義戰爭の慘禍と不合理を、人々の胸に强く銘

つけた。大戰の最中、それに反對する氣運が起るところに起つた。ここに階級的利害のために戰ふといふ稍明確な意志ではないにしろ、帝國主義戰爭反對の色彩の濃厚な作品が現はれた。さうした傾向にある作品として、ゴルドリングの戯曲「自由のための戰」と、マンロウの長篇戯曲「噂」がある。

「自由のための戰」は、イギリスに於ける上演禁止を豫想して、草稿をスイスにある某新聞記者に送つて飜譯させてゐる位である。戯曲の事件は一九一八年の夏の出來事を取扱つてゐる。大戰が長引いて、前途の豫想のつかない暗澹たる時代の空氣である。ゴルドリングはこの戯曲の序文に於て、次のやうに言つてゐる。「或る國々では、プロレタリア運動は一つの形態を取りつつあるが、他の國々では、それは非常に異つた性質を帶びてゐる。ロシアに於てはボルシエヴイキ、アイルランドに於ては獨立運動、ドイツに於てはスパルタカス團、英米に於ては勞働運動が、戰爭の四年間に於ける悪影響を受けながらも尙人間性と理想を失はない男女のために、次第に元氣を盛り返しつつあつた。物質主義のために凍りつき、資本の貪婪さのために無氣力になつた世界へ、生命と愛の種子が再び播かれたのである。平和論者、トルストイアン、コミユニスト、ボルセヴイスト、クエカー教徒、アイルランド革命黨員、スパルタキスト、トレエド・ユニオニスト等、いづれもその根柢をなす精神は一つである。それは、歴史を通じて、人類の進步に際して、殉難者や先驅者を感動せしめて來た精神である。かうした種々の種類の人々や團體は、過去と永久に見切りをつけて、兄弟が兄弟を殺す四年間の戰爭の邪惡な組織を破壞しようとする努力に於て、結びついてゐた。いづれも、忍耐と、新しい日の曙を待つ希望とをもつて、前途を見てゐたのである。」更に彼はかう言つてゐる——イギリスでは勞働運動に對する軍國主義の攻勢が激しいが、社會主義への動向を持つたインテリゲンツイアは決して少なくない。かうした時に當つて、演劇は、インタナシヨナリズム、同胞的精神、戰爭呪咀の思想を、自由に表現しうる大きい媒介物である。……

これに依つても分るやうに、彼の思想は急進化してはゐるが、一面人道主義的な點のあるのを見逃すわけには行かない。併し、保守的なイギリスに、かうした作家のあることは些か注目に價する。

マンロウも亦、純粹にプロレタリヤ作家と呼ぶことは出來ないだらう。併し、戰爭後の新時代の作家であることは、「噂」一篇によつても十分に立證しうる。「噂」に於ては、帝國主義戰爭のからくりがリアリスチツクな筆致によつて、巧みに描き出されてゐる。大資本の掛引は國際間の戰爭を惹起し、政治家、外交官、實業家などの數多くの人物がそこに登場して、大資本に操られて動いてゐる。そこには個人の生涯や運命は踏みにぢられて顧られない。たゞあるものは、資本の無慈悲な要求だけである。この作では、階級對立のはつきりした姿は示されてゐないが、大きな構想のうちに、、、、、、の暴露がなされてゐる。

レベッカ・ウエストは、マルクス主義的立場に立つて、よく論じ、よく書く。時代意識のつよい幾つかの小說の外、最近論集「奇妙な必要」によつて、自分の藝術觀を語り、現代のイギリス作家を論じてゐる。中でも、最近問題視されてゐる「ユリシイズ」の作者ジョイスを論ずるあたり、才氣潑溂たるものがある。この女流作家は、「どつこい、生きてる」の上演に際して作者のエルンスト・トルレルがロンドンへ來れば、逸早く彼に會見したり、アメリカの「ブックマン」に毎號、イギリス文壇の通信を書いたり、なかなか活躍してゐる。併し、彼女の創作や評論から感じるものは、急進化した小市民的インテリゲンツイアの傾向であることは否めない。

アプルランドのショオン・オケシイと、ライアム・オフレエアテイとを、プロレタリア作家として擧げることには、かなりの異論もあらうと思ふ。併し、二人とも最近のアイルランド文學に於ける新時代の作家として、第一線に立つてゐる。

オケシイは、日傭人として、或は街上に、或は工場に働いてゐた經歷から匍ひ上つて來ただけに、生れながらのプロレタリートである。勿論、彼は讀むことも書くことも出來なかつた。たゞ父が遺して行つた一箱の書物によつて、こつこつ勉强した。そして、初めて書いた戲曲を、グレゴリ夫人の許へ持つて行つた時には、それは、亂暴な字を書きなぐつてあるので、とても讀めない原稿だつた。グレゴリ夫人はそれを書き直さした。彼は書き直すのに一年かかつた。やつと出來あがつたのが「義勇兵の影」である。それは直ちに上演された。

彼は、アイルランドの民族的詩人であるイエイツの象徴的な神秘主義とは、明かに對照的な作風を持つてゐる。彼の描くものは、ダブリンの裏長屋であり、アイルランド獨立運動に奔走する革命的鬪士であり、集團的な生活である。プロレタリア文學としての意識水準は低いが、プロレタリア作家の一人に數へられないことはない。

オフレエアテイは、今年三十二歳だが、五つの長篇に、數多くの短篇を書いて、小說家としてこの名聲に於て、オケシイに優るとも劣らぬものがある。「スパイ」「刺客」などの題名によつても窺ひ知ることが出來るやうに、二十磅の金のために、同志を裏切つて警官に引き渡した男の話や、革命家の心理などを描き出してゐる。彼にあつては、教養の高さや知的な纎細さは藥にしたくもなく、非常に大衆的な作風を持つてゐる。彼など、左傾的な傾向にある作家として、たしかに未來を感じさせる。

さて、今度は輪廓的な紹介の筆を、アメリカ文學へ移さなければならぬ。

現代のアメリカ文學は、一言にして言へば、ブルジョアジイの文學であるが、最早、西歐やイギリスの文學の模倣を脱して、アメリカ獨自のものをつくりつつあると共に、アメリカ生活の批判、アメリカ生活の新しい方面への努力の閃いてゐるのは見逃せない。併し、それは、

非常にプチ・ブル的な、自由主義な角度から眺められたものである。

例へば、人氣作家のシンクレア・ルウイスにしても、シャウッド、アンダアスンにしてもさうである。アンダアスンの如きは、その小說の幾つかに於て、貧乏人の生活を同情を以て描いてゐるが、それは決してプロレタリア・イデオロギイによつて書かれてはゐないのである。

然し、アメリカ文學のかうした一般的情勢にも拘らず、その底から新しい文學としてのプロレタリア文學が擡頭しつつあることは、事實である。かうした傾向にある作家として、アプトン・シンクレア、フロイド・デル、詩人として、カアル・サンドバアリ、ヴェイチェル・リンジイ、ロバアト・フロストなどの名を擧げなければならない。

アプトン・シンクレアは、アメリカの持つ世界的なプロレタリア作家であつて、今更、ここに紹介する必要もない程である。彼にあつては、あらゆる藝術は「宣傳」であり、彼の作品は階級鬪爭の一武器である。初期の彼は、思ひあがつた自稱天才であり、社會惡に對する憤激も、かなり空想的であつたが、機會を捉へては勞働者に接近し、その勞働狀態を調査したり、或は炭坑罷業を視察したりすることによつて、社會主義作家としての彼の視野は廣くなり、批判は辛辣になつて來た。その數多くの暴露小說に於て、現代アメリカの資本主義文明の機構を解剖、批判し、又、評論集「黄金藝術」「金が書く」に於て、世界文學とその作家を縱橫に論じてゐる演劇の方面に於ても、自らプロレタリア劇團を組織したり、數篇の戲曲を書いたりしてゐるが、戲曲はその小說や評論に比較すると、遙かに見劣りがする。

このシンクレアが、アメリカで一番優れた批評家だと、十五年間も言ひ續けてゐる男に、フロイド・デルがゐる。彼は貧困の家庭に育つたので、早くから勞働に從事しなければならなかつた。かうした若い日の體驗は彼の文名を高めた「世間知らず」の中に、生き生きと描かれてゐる。彼が文筆生活にはひつたのは、シカゴに出て、「イヴェニング・ポスト」の文藝記者になつた時からであつて、現在はアメリカのコミュニストの文藝雜誌「新群集」の編輯に携はつてゐる。

「批評家としての彼は、趣味と、眼識と、廣汎な讀解力と、作家の意圖を見究める熟練さとを持つてゐる。彼は、大概の文筆の士に缺けてゐる二つの分野——近代心理學と革命的な經濟學とを知つてゐる。それ故に、他の人間ならまごまごしてゐるやうな問題を、容易に理解し判斷することが出來るのである。

併し、一個の人間にとつて、これだけでは十分でない。が、フロイドは小說家としても世間に知られてゐて、それによつて生計を立ててゐる。この感受性に富んだ藝術家が、この世の中に當惑し、それに適合しようとしながらも、自分の心の姿を正しく描いて行くなら、自分は、彼と個人的に話する時と同じ興味を以て、彼の後について行かう。」——これが若いフロイド・デルに對するシンクレアの表現である。アイルランドのオフンエアテイと共に、將來の期待をかけ得る新しい作家であらうと思ふ。

前にも一寸述べたアンダアスン、それから戲曲家としてのユウジン・オニイルは、勞働者の生活を描き出すのに、優れた筆を持つてゐる。併し、アンダアスンにあつては、勞働者――ことに放浪的なルンペンな勞働者を取扱ひ、さうした人間に對して温い同情を示してゐるが、新しいはつきりしたイデイオロギイを缺いてゐるために、最近の作品は特に、暗い憂欝な色彩を帶びて來てゐる。オニイルに於ては、その初期の作品は、彼の體驗の綴られたものが多かつたために、海上勞働者――水夫や火夫が、生き生きと描き出されてゐた。併し、最近のものは、戲曲としての構成は愈々巧みになつたが、取扱はれる世界は小市民層のそれであつて、一種象徴的な傾向を現はして來た。

この二者などは、プチブル文學としての新しい一つの頂點を示すものであつて、作者がイデイオロギイ的に轉換しない限り、今や沒落への最初の一歩を踏み出してゐるものと言はなければならない。

現代アメリカの詩人の一群については、書くべきことが少くない。併し、そのうちでも、社會主義詩人サンドバアクは、新しい傾向を持つ詩人としてのみではなく、アメリカ詩壇の間でも高く評價さるべき一人である。彼は貧困の間に生長して、色々の勞働に從事しただけあつて、その詩は、自由詩の形式を用ゐ、勞働者のスラングを混へ、力強いリズムで、勞働を、生活を、產業の都市シカゴを歌ふのである。

俺は民衆だ――大衆だ――群集だ――集團だ。
この世の偉大な仕事の凡てが、俺の手で創られたのを知つてるか。
俺は勞働者で、發明者で、この世の着物と食物を造り出す人間だ。
俺は歷史の流を見守る見物だ。（「俺は民衆だ」（一九一六年）の一節）

彼は、民衆の姿を、集團の力を、勞働の誇りを、力強く唄ふ一面、ミシガン湖の自然――湖上に浮ぶ舟を、風を、霧を、波を、歌ふのである。

霧

霧は小さな猫の足元へ流れる。
淀んで、港や
默つて蹲る街を見下ろし、
それから、向うへ流れて行く。（一九一六年）

このサンドバアクの他、農民の生活を歌ふロバアト・フロスト、デモクラチツクな詩風を持つヴエイチエル・リンジイも亦、アメリカの生んだ新しい詩人である。

「リンジイは尊敬するに足る男だ」とシンクレアは言つてゐる。彼は、放縱な生活を送つて自己の名を汚すやうなことは決してしない。自分の詩を聽衆に讀み聞かせることによつて、乏しい生活の糧を得て、質素な暮しをしてゐるのである。その詩に於て、言葉の使驅はホイットマンよりも自由で大膽で、民衆的で、俗謠を巧みに取入れて、音樂的なリズムを作り出してゐる。

以上のやうに、英米に於けるプロレタリア文學は、未だ一つの纏つた運動として社會の表面へ現はれて生氣ある活躍を見せてゐないが、

級對立の尖鋭化と、それに伴ふ社會情勢の變化は、かうした文藝運動を促進させずにはおかないだらう。さうした時が來た場合、初めて、社會現象の一つとして、又、文學史上に於ける一つの波として、プロレタリア文學運動を、全體的な姿に於て論じなければならない。

フランスは不活潑だ

小牧近江

ロシヤのやうに、ドイツのやうに、そしてまた、現在の日本のやうにプロレタリア文學の活潑な國の眼を通して見るなら、ことに日本人の愛する理論方面に於て、フランスの意氣は實にあがらない。それは、最近、石川湧氏によつて紹介されたマルク・イッコウイッチ著『史的唯物論より見たる文學』―春陽堂版―を見てもわかる。原著者マルク・イッコウイッチ氏はその譯者が照會中である通り、マルクス主義の理論家であることは動かされないとしても、どんな經歴の人物か、たゞそれがジュネーヴでものされてゐるといふだけで、フランス人であるか、どうかも分つてゐない。が、とにかくフランス語で書かれたマルクス主義文學論の纏つたものとしては近頃われわれの知る限りで、これあるだけだ。實に寂りがないほどのさびしさだ。

しかも、著者のわれわれの便宜になつてくれたのは文學に於ける史的唯物論の適用性を系統的に組立ててくれたことであつて、その藝術理論はむしろすでに日本の先進論客によつて論じつくされてゐるの感なきにしも非ずである。ただ、一つ注目に價すると思はれるところは、彼の藝術科學、つまり藝術觀の分析法である。すなはち、マルク・イッコウイッチ氏は觀念論的（ヘーゲル）社會學的（先驅者としてデュ・ボス僧正、それからテーヌ）と、そして最後のマルクス主義的藝術觀の間にフロイド的藝術觀を取入れてゐることだ。この點、ここ數年來問題になつたルイ・アラゴン、アンドレ・ブルトンその他の諸、超現實主義のジェネラションにとつてなくてならない分解と云へやう。

しかしながら、總じて今日のフランス文壇は、我われの思ふところでは、まだまだマルクス主義觀までは進んでゐないやうだ。といふのは、この國のブルジョア的乃至はプティ・ブルジョア的文壇の悩みは未だにブルジョア思想崩潰の瀬戸際にもがいてゐるからなのだ。從つ

て、この國の右翼文藝陣は日本のそれのやうに總退却もしてゐないし、又無抵抗主義でもない。それどころか、廣い意味のブルジョア文化と社會の維持擁護のためには、地中海文明とドイツ文明の提携敢へて辭せずとなすものにアンリ・マシイス氏あり、ヨーロッパの經濟同盟を提唱するものにガストン・リウ氏がある。すなはち、前者はカトリック教とギリシヤ・ラテン文化の旗の下にヨーロッパ、否、全世界のブルジョア思想の大同團結を高唱してゐるのだ。カトリック派作家のフランソア・モオリヤック氏などはむろんこの仲間で、彼いはく「余は共産主義とはどんなものだか知らない。が、それを聞くだけでぞつとする。」と。それがまた大した意氣込なのだ。そして、この大同團結主義も、ロカルノ文學も場合によつては同じ保守派の頑迷派、反獨主義のアクション・フランセエズとは手を切つてもかまはぬと云ふ態度なのだ。

されば『モンド』誌（バルビュス主宰の週刊）の新らしい評論家オギュスタン・ハラビヒは言つてゐる。

「今日ほど思想の（ブルジョア思想の）裏切と擁護が問題にされてゐることがない」と。

事實、この數年ほど『ブルジョア』の問題が論ぜられたことがない。一九二四年、ジョアネが『佛蘭西ブルジョアの禮讃』を世に問うてこの方、『ブルジョア』に對する新らしい解釋がとかく問題になつた。これを高踏派のアルベール・チボーデ氏にいはせると、さつとこんなものだ。「古い意味での『ブルジョア』はすでに清算されてゐる。殊に十九世紀はブルジョアジイに對する社會的、文學的總攻擊の時代だつた。從つて、當時フロベールの下した定義『ブルジョアとは下劣にものを考へる人間』とは今は通用しない。今日では經濟をぬきにして何にもかも考へられない。そこで『ブルジョアとはブルジョアらしい生活をしてものを考へる人間』といふことになる。だが、さうした生活の出來る人間が今日の經濟狀態でどれだけゐるだらう？」といふことになると、どつこいチボーデ氏の言ひ分はややテーヌの階級無視論に近いものになつて來る……

かうしたところへ、投げつけたのがエムマニュエル・ベール氏の『ブルジョア思想の死』である。氏は純然たる知識階級である。コムミュニストでもなんでもない。それどころか、今のところ甚だ煮え切らない思想人でもある。が、それはそれとして、主題がはつきりしてゐるやう、『ブルジョア思想の死』は說明をまつまでもない。若いインテリゲンチヤの挽歌でもあり、保守主義者への新人の回答でもあるのだ。が、これとても底を割つて見ればオギュスタン・アバリュの言ふやうに、つまりはドリユウ・ラ・ロシエルや、ジヤン・ゲアノと同じく極めて常識的な、進步的な思想人の逃路で、內心は反動に倦きた自個の思想的不安と混亂の告白にすぎない。ただ、後者のゲアノだけはわづかに階級鬪爭を肯定してゐる位のもので、さればとていづれも未來に對するかくとした信念がない。彼らは所有階級の存在はこれを認め

るけれど、その階級こそやがて新らしい時代、從つて、その文化を創造するところの選出であることまではつきりしないのだ。そこまでは突進出來ぬのである。フランスにはこの他、ユーモアやアンヌイから來てゐる革命思想家？が多い。

かうした客觀狀勢に目下のフランス文壇がある。從つて、左翼陣もさうした現實の思想戰に論陣を張つてゐるやうなわけなのだ。とても、我れらの現狀からは想像されぬ悠長さである。が、そこにはフランス文化のながい傳統と脫け切れない殼のあることも察してやらなければならない。何しろ、レーニンもいつたやうに、世界には幾多の革命はあつたが、自國の文化を一世紀半も君臨させた點でひとり大革命と僭稱出來るものは、過去に於て、（現在にはロシアがある）フランスあるだけだ。しかも、そのフランスの今日の若いジェネラションはさうした文化の孫か曾孫にあたるのだから、その根强さは察するにあまりある。

それにまた、どうしたものか、この國には多數の農民作家や地方作家があるのに、そのくせ勞働者出身の作家は見當らない。この數ケ月以來、一寸問題になつたマキシミリアン・ゴーチエ氏、あるひは純然たるプロレタリア作家とは言はれないまでも、一八三〇年代の產業の勃興を主題とした彼の『力』などもいはゞ知識階級臭ひのある作品である。その點、この國のプロレタリア文藝陣を一人で脊負つてゐるかのやうなアンリ・バルビュスにせよ、ヴァイアン・クーチュリエにしろ、三木清氏のいはゆる新しい解釋での啓蒙作家であつても、藏原氏のいふプロレタリア・レアリズムの作家ではない。疾に寂寞の感に堪へないものがある。

もしそれ、この國からそのバルビュスの存在をとつたら、左翼派は全く火の消えたやうであるといつても過言であるまい。しかも、そのバルビュスも最近はむしろ作家といふよりも、反帝國主義運動に、反ファシズム運動に、寧日ない活動家である。バルビュスは言行一致の思想家である點、フランスといふよりはむしろ世界のプロレタリア文藝運動の誇りだといつていい。

クラルテ運動については幾度か紹介してゐることであるからここでは省く。マーツア著『現代歐洲の藝術』藏原惟人、杉本良吉兩氏譯―叢文閣版―によれば、クラルテ運動の他にアンリ・ギルボーと雜誌『明日』の歷史的役割を書いてゐる。ギルボーはむしろドイツとロシアに知られてゐることゝ思ふ。日本でも彼の『僞らざるレーニン傳』によつて一部の仲間に知られてゐるが、彼はもとデナミズムの詩人であり、アンチ・ミリタリス作家であつたことが知られてない。だが、彼の最も大きな仕事はヨーロッパ戰爭の眞最中ジュネーヴから禁斷の左翼雜誌『明日』を發刊したことで、マルセル・マルチネはここから生れたといつていゝ。レーニンとの交遊も知られるところだ。彼は亡命國スイスから追放され、フランス本國政府からは死刑の宣告をうけてゐる。

る。その點、この國のプロレタリア文藝運動を一人で背負つてゐるかの

やうなアンリ・バルビュスにせよ、ガブリエル・シュヴァリエにしろ、



つて製販せ
し

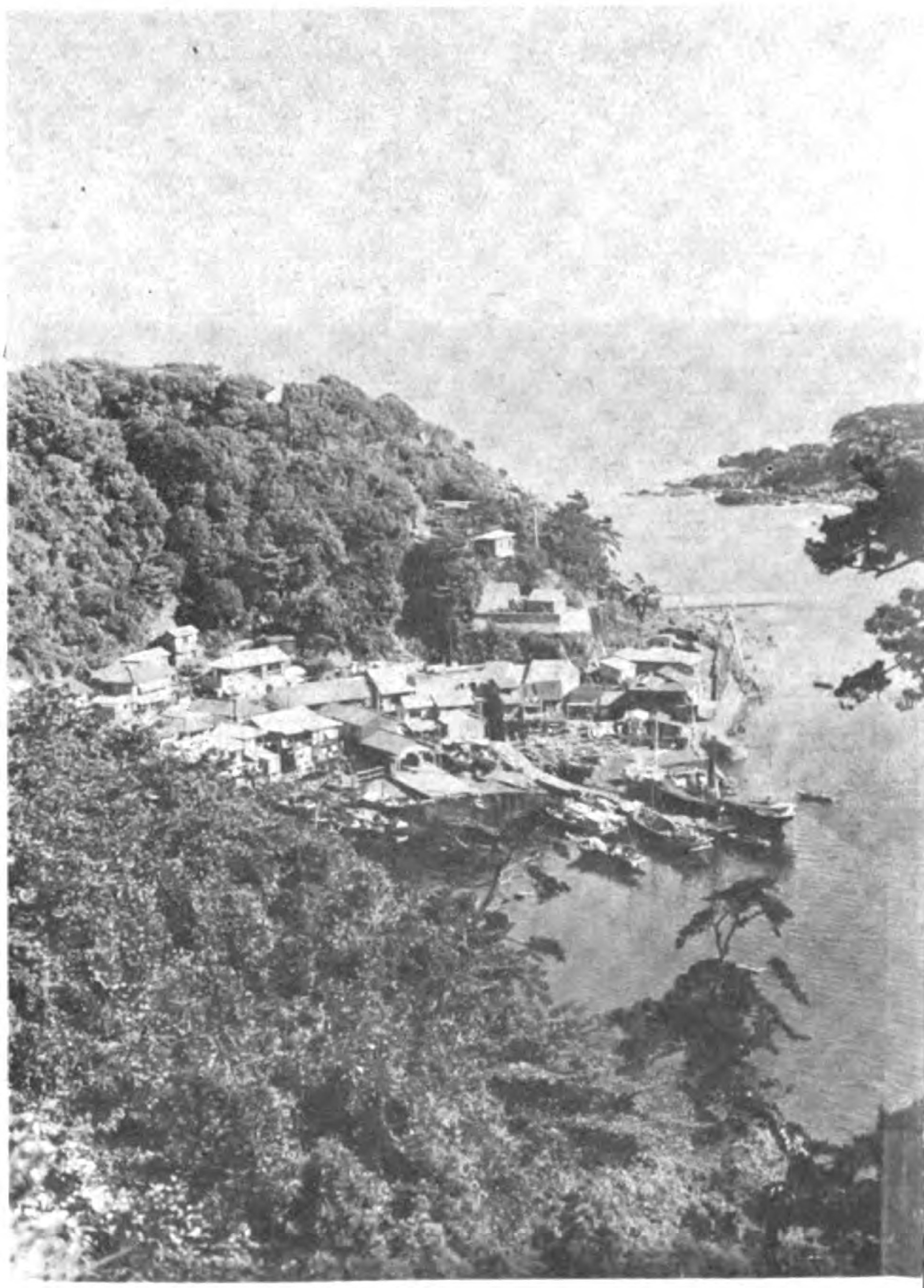
豫約募集

系

……け寧ろ多分に大衆的な内容を含むもの……

航空班

改造社航空班は御國飛行學校長伊藤酉夫氏を班長に一等飛行士熊川良太郎氏を主任操縦士とし三菱式R1—2型「改造號」を全國の空に飛ばして新井康弘氏の撮影せる獨特の航空寫眞を各卷に滿載する。これ出版界空前の壯擧で、常に營利を捨て大衆を本位とする我社のみの企畫し能ふ所だ。



……つて製版せし

解說

寫眞各卷五百乃至六百面に對し學界の權威者と藝術家が悉く署名せし詳細懇切なる解說を附す。

主張は現代地理學の原則を格守する事に依つて嚴格に經緯される點に存する。讀者は茲に單調無味な幾何圖形を見る代りに變化多く興味深き線の巧なる交錯、即ち繪畫を見、而もそこに一貫したフイロソフイーを認めるであらう。科學の大衆化は決して學者の閑問題ではない。然し乍らその漫然たる通俗化は科學の墮落を意味する。改造社は曾てアインスタイン教授を招聘し、難解なる相對性原理をすら大衆化するに成功した功勞者である。勿論今回の企てに於てもその成功は期して待つ可きであらう。特に此計畫に對し細心の注意と周到なる用意を怠らぬ一例として、掲載の寫眞の如きも特に同社所屬の飛行機と特設の寫眞班に依り最も嶄新而も嚴格に地理的なる撮影を試みつゝある事を附記する丈けで充分であらう。予は此の企が年來の主張と一致し且つ壯なる故に其の實行に參加したのである。

なほ、これと相前後してパリに發刊されたのがウーランス（フラマン人とも云はれる）の『貧しき人々』マルセン・ミレの『生きる』等の小册だつたが二人とも今は顔を見せない。

さうなつて來ると、ますます新人の拂底だ。それは最近の『モンド』を手にする何人も氣づかれることと考へるが、この國プロレタリア文學に人なきものか、毎號外國の左翼の紹介ばかりで、肝腎のフランスの現狀は物足りない程手薄である。理論鬪爭も豫告されてる程はなばなしく展開されてない。

ただ　ゾラ全集の決定版を刊行されたことを機會にプロレタリア作家としてのゾラを再吟味されてゐることが眼立つ。もつとも、これは左翼雜誌に限つたことではなく　右翼にも面白い現象になつてゐるのだが。

その一つの現れは、最近フランスに於ける公立圖書館の閲覽統計だ。右によると、作家として第一位がエミル・ゾラ、第二位がデュマ、次はヴィクトール・ユーゴーの順である。そこで、コメディア紙がこん度は一般投票を募つて見たところ、右翼と、ブルジョア文學とその擁護である主催側のコメデア紙には御氣の毒なことに、ここでもゾラは斷然第一位だつた。

これに反してアメリカではモオパッサンの短篇が第一位だつたといふ。しかも、そのモオパッサンは腐敗した社交階級の描寫の他に、フランスでは早くからアンチ・ミリタリストとしての左翼パンフレットの宣傳に使はれてゐる。

ブルジョア文學が他に見られない程頑強であるフランスに於て、これらのことは何を語るだらうか？、

フロベールを、ゾラを、モオパッサンを再吟味して見なければならぬのはただにフランスのプロレタリア作家のみだらうか？

最近ドイツ・プロレタリア文學の傾向

村山知義

かういふ課題を與へられたが、私は此の問題については甚だ知る所が少ない。知らないでも「やつてゆける」事は皆知らないと言ふ程度である。

で、此處に書きつけることは、それの紹介でも批評でもなく、感想

程度のものであるより仕方がない。

私は嘗て獨逸の表現派の文學のとりこになつた。要するにそれは頭の上に醜怪な、、、、のおつかぶさつてゐる日本と獨逸の小ブルヂョアジーの絶望的反抗に於ける握手であつた。その頃獨逸のプロレタリアートは既に政治的にはめざましく闘爭しつつあつたが文化水準に迄は頭を突き出して居らず、一方日本のプロレタリアートは政治闘爭の端緒的條件をさへ獲得して居なかつたのである。

その頃から十年がたつた。

獨逸は今や、サヴエート・ロシアを除いては世界で最も力強いプロレタリアの黨を持つてゐる。しかもなほそこのプロレタリア文學はインテリゲンツのそれと、勞働者のそれとが、一方は傳統的なむづかしい顰めつ面を持ち、一方が初歩的な幼稚さを持つてゐて、より高いプロレタリア文學への發展のスタートさへもの一歩手前にゐるらしく思はれる。

この遅れ加減は獨逸人の文學的才能を決して疑はせるものではなく、その罪は、いまだにあのカイゼル獨裁時代の「世界に冠たる獨逸國」を國歌とし、殺人鬼ヒンデンブルグを大統領としてゐる獨逸社會民主々義者一味の肩の上に歸せらるべきである。

一方サウエット・ロシアの文學がこの十年間にどんなに歴史的な歩みを歩んだかを想ひ合はせて見よ。

プロレタリアがその日々の闘爭を立派な藝術に迄まとめ上げる暇を持つてゐないこと、文學の野に於いてもまた暴虐な政治的壓迫が死力を盡してその成長を阻んでゐることは、革命前の國のうちでは最もおくれてはゐるが、しかし、サウエート・ロシアとくらべては遙かに遲れた文學をしか獨逸に與へてゐない。

サウエート・ロシアにはプロレタリア文學のホネムーンが來ようとし、獨逸には産道を出ようとする胎兒の苦しみがある。

カール・アウグスト・ウヰツトフオーゲルや、ヨハンネス・ロバート・ベッヒヤー等のインテリゲンチヤ出身の人々の作品と、ベルタ・ラスク、ワルター・トロッペンツ、ハンス・ロールベール等勞働者出身の人々の作品との間には、日本に於ける兩者の差よりも甚しい溝がある。

これは恐らく獨逸の勞働者が日本のそれよりも、積極的にプロレタリア文學を要求し利用する機會が多いからであらう。日本でもやつと最近になつて、飽きつぽく、氣むづかしく、無限に移り氣な小ブル讀書階級や批評家と縁の切れた移動劇場用脚本や、プロレタリアびいわや落語や小唄や狂言や童話や講談が産み出され初めた。

例へばベルタ・ラスクの三十五景から成るレビュウ・ドラマ、「サウエート・ロシアを襲ふ毒瓦斯」や一五二五年の農民一揆を扱つた戯曲「トーマス・ミュンツエル」や獨逸と露西亞の勞働婦人のために書かれた十六景から成る「解放」やトロッペンツの「政治的諷刺的レビュウ「破斷の華」や工場細胞新聞的傳聲、「白蟻」やハンス・ロールベ

ールのシユプレツヒコール「リープクネヒト・ルクセンブルグ・レーニン」やは獨逸共産青年同盟教育部から出版され、黨の機關誌「ローテ・フアーネ」の讀者の各地域班の催しその他で、勞働者自身の手で充分に利用されてゐる。

成程これ等の作品は粗野であり、幼稚である。それがもつと立派なものになることには誰一人異議はない。しかしながらその進歩は決して小ブル讀書階級や觀劇階級からの絶え間ないセンセエションの要求に應じるためになされるのでは斷じてない。

——プロレタリア文學もそろそろもつと新しい形式を生まんもんかなあ。

——ちつとも珍らしくないぢやないか、これぢや失禮ながらプロレタリアに與へる効果が疑はれるねえ。

などといふ。お尻の下に戰旗とプレハーノフ論を敷いて木のベンチの堅さを防いでラグビーを見てゐる傍觀者諸君の御親切なる忠告はプロレタリア文學にブレーキを掛ける以外の何物でもない事を我々は最近益々痛感させられてゐる。

口やかましい批評家先生の多い獨逸でもプロレタリア文學はからいふ連中のために随分迷惑したらうと思はれる。

さて最近私はエリヒ・マリア・ルマルクの「西部戰線異狀なし」を讀んだ。これは無論嚴密な意味ではプロレタリア小說とは云ひ難いであらう。しかし私はその單純さ、素朴さに心を打たれた。戰ひの慘虐さ、戰ひに對する憎惡はそのため一層深き彫りされて迫つて來た。これに對して同じく世界大戰を取扱つた小說に、裁判事件で有名なベツヒヤーの「(CHCl=CH),As或ひは唯一の正當なる戰爭」がある。此處では憎むべきものは最大限度の憎惡をもつて、慘しい光景は最大限度の慘しさをもつて、描き盡されてゐる。毒瓦斯を吸ひ込まれて「皮膚の上には痒ゆいブツブツが、氣管や咽喉には敗血性的脫疽狀の腫物が出來始め、血の混つた嘔吐が出、肺は水を一杯吸ひ込んだ海綿のやうに膨れあがる」兵士達の微細を極めた描寫は物凄い極みである。

私はこの二つのすぐれた戰爭小說の優劣を云々しようと云ふのではない。ただ、後者にはたつた一つ、素朴さが缺けてゐる。

これこそは永い間下づみになり、しいたげられ、、、、階級のものが、初めて、ノロノロと牛のやうに起き上がり、しつかりと、を眼の中に摑まへ、除々に手を伸ばし出す。その時にこの人々の胸の中からこそ滲み出るものである。そしてこれこそは味方に元氣を與へ、、、させるものである。

私は「西部戰線異狀なし」がさういふ小說であると云ふのではない。それはその作者の意識の低さと、多分の通俗小說的手法の點を暴露にも拘らず、素朴さの勝利を暗示してゐると云ふのである。

すぐれた老女性作家ヘルミニア・ツール・ミユーレンはごく解りよい筆致で、多數の童話を書いてをり、「なぜなの?」と「小さいペーター」と「眞

理の城」等が邦譯されてゐるが、私は、曾てトルストイの童話がその目的に役立つた程、彼女の目的のために役立ち得るとは考へられない。

トルストイの宗教童話は、彼が伯爵であるにも拘らず、奇蹟的と思はれる程に農民の心と密接して書かれてゐるが、ミユーレンのプロレタリア童話には素朴さがない。

ベルタ・ラスクは「サウエート・ロシアを襲ふ毒瓦斯」の序文で次のやうに述べてゐる。

——これは性急に描きとばされた現代のスケッチである。遅過ぎないうちに民衆の眼をそれに開かせやうとして書き付けられたプロレタリアの生活と反動の勢力の生のままの解剖圖である。——

この性急さが、、、、、、プロレタリア藝術家を困難な矛盾に陷れる。

それは見物人的讀者諸君や批評家諸君に叱られる迄もなく、プロレタリア自身との密着に於いて、プロレタリア作家の等しく感じてもがいてゐる所である。

すぐお隣りのロシアでは、既にドシンと腰を落着けたプロレタリア作家の大群がその働きの成果を次々に見せてゐるではないか。

獨逸ではサウエート・ロシアの優れた作品の翻譯も日本よりも多いだらうし　また日本では絶對に見られぬ優れたロシアの映畫が續々と流れ込んでゐるではないか（在伯林の千田是也からのレポに依ればプドフキンの傑作「アジアを襲ふ嵐」は伯林でのロング・ラン三ケ月に及び　全獨逸で五百の常設館が目下同時に上映中だと云ふ）。

政治的闘爭も我々の國に於けるよりも遙かに遠く進展してゐる。

彼等のプロレタリア作家の「性急さ」を我々は全く我が身に引きくらべて推察することが出來る。

洒落れた尖端的寫眞家モホリー・ナギー教授は「近代的機械文明の生んだ驚嘆すべき藝術形式たる映畫をみぢめな手工業的方法で拵へなければならないのはたまらぬ事だ」と云つてバウハウス工藝美術學校を逃げ出した。

だが我々はみぢめな手工業的方法しか殘されてゐない所では　寧んでみぢめな手工業的方法を擇るし、擇つてゐる。

素晴しい映畫工業を持つ獨逸の同志にとつては　みぢめさは我々の場合よりも十倍も强調され、しかも立派なサウエート・ロシアの映畫は流れ込んで來てゐるのだ。

獨逸のプロレタリア文學がめざましい進展をしないとすれば　それはこれらの様々の原因からである。

我々は獨逸の同業者に、かうして特別の親しみを覺える。

早く相互の交渉をもつと密接にしたいものだ。

日本國稅概說

青木得三

總說

玆に日本國稅といふのは地方稅と對立する意味である。日本の國家歳入歳出各約十七億、其の半ばは租稅收入である。

日本國稅の種類は(一)所得稅(二)地租(三)營業收益稅(四)資本利子稅(五)相續稅(六)鑛業稅(七)登錄稅(八)兌換銀行券發行稅(九)酒稅(十)淸凉飮料稅(十一)砂糖消費稅(十二)織物消費稅(十三)取引所稅(十四)狩獵免許稅(十五)骨牌稅(十六)印刷稅の各種である。

其の中で主要なるもの（一千萬圓以上の收入のあるもの）は(一)(二)(三)(四)(五)(七)(九)(十)(十二)(十三)の十種であるから順次之を說明する。

(一)所得稅（年收約二億圓）

所得稅は日本（正確に云へば所得稅法施行地——所得稅法は朝鮮、臺灣及樺太等には之を施行しない）に住所を有し又は一年以上居所を有する者が之を納める義務がある。但し日本に住所又は一年以上居所を有しないでも(イ)日本に資産又は營業を有するとき(ロ)日本に於て公債、（公債の中國債は所得稅を課せられない）社債又は銀行預金の利子若くは貸付信託の利益の支拂を受けるとき(ハ)日本に本店又は主たる事務所を有する法人から利益若くは利息の配當、剩餘金の分配又は利益若くは剩餘金の處分たる賞與若くは賞與の性質を有する給與を受けるときは、所得稅を納める義務がある。

所得稅をかけられる所得は三種に大別せられる、第一種は法人の所得、第二種は前述(ロ)及(ハ)の所得、第三種は第二種に屬しない個人の所得である。（貸付信託といふのは信託會社の引受けた金錢信託であつて信託財産の運用方法を預入れ又は貸付けのみに限定したものである。）

所得稅の稅率は所得の種類に依つて違ふ。第一種の所得は之を甲乙丙に分けて甲の普通所得に付ては日本に本店又は主たる事務所を有する法人であれば百分の五、有しない法人であれば百分の十である。乙の超過所得に付ては超過所得金額を次の各級に區分し遞次に各稅率を適用する。即普通所得金額中資本金額に對し年百分の十の割合を以て算出した金額を超ゆる金額に付ては百分の四、百分の二十を超ゆる金額に付ては百分の十、百分の三十を超ゆる金額に付ては百分の二十である。丙の淸算所得に付ては淸算所得を次のやうに區分し各稅率を適用する。積立金又は所得稅をかけられない金額より成る金額に付ては百分の五、其の他の金額に付ては百分の十である。

法人の普通所得といふのは各事業年度の總益金から總損金を控除したものである。法人の普通所得が當該事業年度の資本金額に對し年百分の十の割合を以て算出した金額を超過するときは、其の超過金額を以て法人の超過所得とする。法人が解散した場合に於て其の殘餘財産の價額が、解散當時の拂込株式金額又は出資金額を超過するときは、其の超過金額を以て法人の淸算所得とする。

第二種の所得に對する稅率は前述(ロ)の中公債の利子に付ては百分の四、其の他に付ては百分の五、(ハ)に付ては百分の七半である。

第三種の所得に對する所得稅は所得金額を次の各級に區分し遞次に各稅率を適用して之を賦課する。

千二百圓以下の金額	百分の〇・八
千二百圓を超ゆる金額	百分の二
千五百圓を超ゆる金額	百分の三
…………	…………
四百萬圓を超ゆる金額	百分の三十六

尤も第三種の所得は千二百圓に滿たないときには所得稅を課せないのである。

(二) 地租(年收約七千百萬圓)

地租を納める義務のある者は(一)質權の目的たる土地に付ては質權者(二)百年より長い存續期間の定ある地上權の目的たる土地に付ては地上權者(三)其の他の土地に付ては所有者である。

地租の稅率は宅地に付ては地價百分の二半田畑に付ては百分の四半、其の他の土地に付ては百分の五半である。但し北海道に於ける宅地以外の土地の地租は當分左の稅率に依ることになつて居る、卽田畑に付いては百分の三、二、其の他の土地に付いては百分の四である。地價といふのは土地臺帳に揭げてある價額で、明治初年に日本全國に亘つて調査して決定したものである。尤も宅地に付ては明治四十三年に全國に亘つて地價を修正した。

地租を免除せられる土地は次の如くである

(一) 道府縣市町村其の他勅令を以て指定する公共團體(例へば水利組合)に於て公用又は公共の用に供する土地(但し借料を取つて貸付けてある土地は此の限でない)(二)府縣市町村其の他勅令を以て指定する公共團體が公用又は公共の用に供すべきものと定めた其の所有地(但し一年內に公用又は公共の用に供しないときは此の限でない)(三)府縣社地、鄉村社地、招魂社地(但し借料を取つて貸付けてある土地は此の限でない)(四)墳墓地(五)用惡水路(六)鐵道用地、軌道用地、運河用地(七)保安林(八)公衆の用に供する道路。

(三) 營業收益稅(年收約五千萬圓)

營業收益稅は法人及個人に對してかけるものであるが、法人に付ては日本に本店、支店其の他の營業場を有する營利法人には營業の種類如何を問はず營業收益稅をかける。個人に付ては日本に營業場を有し次に揭げる營業を爲す場合に營業收益稅をかける。(一)物品販賣業(動植物其の他普通に物品と稱しないものの販賣を含む)(二)銀行業(三)無盡業(四)金錢貸付業(五)物品貸付業(物品の意味は(一)と同一である)(六)製造業(瓦斯電氣の供給、物品の加工修理を含む)(七)運送業(運送取扱を含

む)(八)倉庫業(九)請負業(十)印刷業(十一)出版業(十二)寫眞業(十三)席貸業(十四)旅人宿業(下宿を含み木賃宿を含まず)(十五)料理店業(十六)周旋業(十七)代理業(十八)仲立業(十九)問屋業。

營業收益税は營業の純益に付之を賦課するのであるが、法人の純益は各事業年度の總益金から總損金を控除した金額に依り、個人の純益は前年中の總收入金額から必要の經費を控除した金額に依る。個人の純益金額四百圓に滿たないときは營業收益税をかけない。又次に揭げる營業の純益には營業收益税をかけない、(一)政府の發行する印紙切手類の賣捌(二)度量衡の製作(三)自己の採掘し又は採取した鑛物の販賣(四)新聞紙法に依る出版(五)外國に在る營業場に於て爲す營業(六)法人の漁業又は演劇興行(七)個人の自己の收穫した農產物、林產物、畜產物若くは水產物の販賣又は之を原料とする製造(但し特に營業場を設けて爲す販賣又は製造を除く)。

營業收益税の税率は法人に付て百分の三・六、個人に付て百分の二・八である。

(四) 資本利子税(年收約千五百萬圓)

資本利子税は日本に於て資本利子の支拂を受ける者にかけられるので、資本利子税をかけられる資本利子は次のものである。甲種は公債、社債、產業債券若は銀行預金の利子又は貸付信託の利益で、乙種は第三種の所得に付納税義務を有する者の第三種の所得中營業に非ざる貸金又は預金の利子である。資本利子の計算は甲種に付ては支拂を受くべき金額に依り、乙種に付ては前年中の收入金額に依る。

甲種の資本利子中、次に揭げるものは資本利子税をかけない、(一)所得税法其の他の法律に依り第二種所得税をかけられない者の支拂を受ける利子(例へば北海道府縣市町村其の他命令を以て指定する公共團體、神社、寺院、祠宇、佛堂及民法第三十四條に依り設立した法人には所得税をかけない)(二)貯蓄債券又は復興貯蓄債券の利子。

資本利子税の税率は資本利子金額の百分の二である。

(五) 相續税(年收約二千萬圓)

日本に在る財產に付て相續が開始したときには、開始地が日本に在ると否とを問はず、又被相續人若くは相續人が日本臣民たると否とを問はず、相續税をかける。尤も被相續人が日本に住所を持つて居るときは次に揭くる(一)(二)(三)の財產に相續税をかけるが、住所を持つて居らないときは(一)(二)のみにかける。(一)日本に在る動產及不動產(二)日本に在る不動產の上に存する權利(三)其の他の財產權

相續財產の價格は相續開始の時の價格に依るのであるが、課税價格が家督相續に在つては五千圓、遺產相續に在つては千圓に滿たないときは相續税をかけない。軍人軍屬の戰死又は戰爭の爲受けた傷痍疾病に起因した死亡に因り相續開始した時は相續税をかけない。

相續税は課税價格を多くの級に區分し、其の各區分に對し相續人の種類に從つて遞次に各税率を適用して之を課する。相續人の種類といふのは、家督相續に在つては(一)相續人が被相續人の家族たる直系卑屬であるとき(二)

相續人が被相續人の指定した者、民法第九八二條に依り選定せられた者、被相續人の家族たる直系尊屬又は入夫であるとき（三）相續人が民法第九八五條に依り選定せられた者であるときの三の場合に依り各税率が違ふ、遺産相續に在つては（一）相續人が直系卑屬であるとき（二）相續人が配偶者又は直系尊屬であるとき（三）相續人が其の他の者であるとき三の場合に依り各税率が違ふ。例へば一萬圓の相續財産の税額は家督相續の（一）の場合に五五圓（二）の場合に六五圓（三）の場合に九〇圓、遺産相續の（一）の場合に一二八圓（二）の場合に一五三圓（三）の場合二二二圓である。

（六）**登錄税**（年收約五千五百萬圓）

登錄税は（一）不動産に關する登記を受けるとき（二）船舶に關する登記を受けるとき（三）鐵道抵當原簿又は軌道抵當原簿に登錄を受けるとき（四）工場財團登記簿、鑛業財團登記簿又は漁業財團登記簿に登記を受けるとき（五）船舶の登錄を受けるとき（六）商事會社其の他營利を目的とする法人が登記を受けるとき（七）辯護士名簿に登錄を受けるとき（八）醫師、藥劑師、獸醫、蹄鐵工が官簿に登錄を受けるとき（九）海員が官簿に登錄を受けるとき（十）著作權に關し登錄を受けるとき（十一）特許に關し登錄を受けるとき（十二）意匠に關し登錄を受けるとき（十三）實用新案に關し登錄を受けるとき（十四）商標に關し登錄を受けるとき（十五）鑛業權に關し鑛業原簿に登錄を受けるとき（十六）砂鑛業に關し砂鑛業原簿に登錄を受けるとき（十七）漁業權又は入漁權に關し免許漁業原簿に登錄を受けるときに賦課せられる租税であつて、税率は種々雜多である。

（七）**酒税**（年收約二億圓）

日本の酒税は（一）酒造税（二）酒精及酒精含有飲料税（三）麥酒税の三種に分れる。

酒類を製造する者には其の造石數に應じ次の割合を以て造石税をかける、之が酒造税である。第一種、酒精分二十三度以下の濁酒、一石には三十六圓。第二種、酒精分二十三度以下の清酒、白酒及酒精分三十度以下の味淋燒酎、一石に付四十圓。第三種、酒精分三十度を超え四十五度以下の燒酎、一石に付第二種の金額に酒精分三十度を超える一度毎に一圓五十錢を加へた金額（例へば四十五度の燒酎は六十二圓五十錢）。第四種、酒精分二十三度を超える清酒、濁酒、白酒、酒精分三十度を超える味淋及酒精分四十五度を超える燒酎、一石に付酒精分一度毎に一圓八十錢（例へば四十六度の燒酎は八十二圓八十錢）。

酒類といふのは清酒、濁酒、白酒、味淋、燒酎の五種である。酒類を製造しようとする者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者には、一石に付原容量百分中純酒精の容量一箇毎に一圓八十錢の割合を以て、其の石數に應じて造石税をかける、但し一石に付四十二圓の割合を下ることはない、之が酒精及酒精含有飲料税である。尤も葡萄酒及果實酒には酒精含有飲料税をかけない。酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

麥酒を製造する者には一石に付二十五圓の割合を以て其の造石數に應じ造石税をかける之が麥酒税である。麥酒を製造しようとする者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

（八） 砂糖消費税（年收約八千萬圓）

内地消費の目的を以て製造場又は保税地域から引取られる砂糖、糖蜜及糖水には砂糖消費税をかける、消費税の割合は次の通である

一 砂糖

第一種 砂糖の色相が和蘭標本第十一號未滿の砂糖

甲 樽入黒糖 百斤に付一圓

乙 樽入白下糖（但し分蜜したもの、白下糖以外の砂糖に加工して製造したもの及全部又は一部の新式機械に依り製造したものを除く） 百斤に付二圓

丙 其の他のもの百斤に付二圓五十錢

第二種 砂糖の色相が和蘭標本第十八號未滿の砂糖 百斤に付五圓

第三種 砂糖の色相が和蘭標本第二十二號未滿の砂糖 百斤に付七圓三十五錢

第四種 砂糖の色相が和蘭標本第二十二號未滿の砂糖 百斤に付八圓三十五錢

第五種 氷砂糖、角砂糖、棒砂糖其の他類似のもの 百斤に付十圓

二 糖蜜

第一種 氷砂糖を製造するときに生ずる糖蜜

甲 糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の七十を超えないもの 百斤に付三圓

乙 其の他のもの 糖分を蔗糖として計算した重量百斤に付 八圓三十五錢

第二種 其の他の糖蜜

甲 糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の六十を超えないもの 百斤に付一圓

乙 其の他のもの百斤に付二圓五十錢

三 糖水 百斤に付七圓三十五錢

（九） 織物消費税（年收約四千萬圓）

織物には織物消費税をかける、但し綿織物にはかけない、綿織物といふのは全重量百分中九十五以上の綿を以て組成し、絹、人造絹金屬絲、金屬箔、漆糸又は漆箔を交ない織物である。織物消費税の税率は織物の價格の百分の十である。

（十） 取引所税（年收約千萬圓）

取引所税には取引所營業税と取引税との二種がある。取引所には賣買手數料の收入金額の百分の十五の割合に依り取引所營業税をかける、但し會員組織の取引所にはかけない。

取引所に於ける賣買取引であつて差金の授受に依つて決濟を爲し得るものには其の賣買の各約定金額に對し次の税率に依り取引税をかける。

第一種 地方債證券又は社債券の賣買取引

甲 七日以内の期限を以て履行期と爲すべき取引に屬するもの 萬分の〇・六

乙 其の他のもの 萬分の一

第二種 有價證券の賣買取引

甲 萬分の一・五

乙 萬分の二・五

第三種 商品の賣買取引萬分の二・五

國債證券の賣買取引には取引税をかけない。（完）

（四、九、二二）

島津日向守

東秀雄

七

床の花瓶には、天竺牡丹の白が生けてある。軸のお家流は孝明天皇の御宸翰にて、次がソノ全文なのである。

「過日はかねて隣州よりの篤筍等差遣り下され先づ以て忝なく存候。即ち開き見候處何れも過分の御品大にびつくり。日々用ひ候には宜敷すぎ候事と存候。然々珍敷仕立方萬端賞々大に喜悦限りなく候。宜敷御禮申入候。又々御序の節は宜敷喜悦の段御傳へ希入候」

先年皇居炎上のお見舞として、齊茂は近衛右府を通じ、篤筍一樽、金子五千両、黄金作りの太小一腰、ソレに鳳笙「鈴蟲」一管を献上したが、右御宸翰はその時、近衛家に賜はつたものである。皇室の式微に就ては、幼い頃からつねに祖父茂問に教へられてゐたので、尾張大納言初め、當路の要閥などにも幾度となく、ソノ事に付き、考慮を求めて來たのであつたが、近衛家から右御宸翰が、彼の手許に届けられた時には、流石に胸が溢れるのだつた。

風熱の爲め四五日前から、この部屋に伏せると同時に、かけ替へさしたのが、その軸である。寝床は床の方を枕にして、のべてある。熱苦しいからと言つて、蚊帳はワザと取外させたので、白羽二重の彼の寝姿は、ソツクリむきだしに横はつた。名香の香りが四邊に滿ち〳〵てゐる。蟬時雨の城山を吹きあげる薫風が、ソヨ〳〵窓口から忍び入るたびに、枕許に置忘られた楷行文字の本の頁が、囁きながら起伏した。

ツイ今し方まで西條吉彌を枕邊ちかく呼んで、主従二人心ゆくまで御宸翰に現はれ給ふ大御心の畏こさに泣浸り、忠勤を誓つて後、郡方書役時代の吉彌の、領内宮之城村に於る人助けの隠れた政績など激賞し、シンミリと政道物など語りながら、當座の褒美だとあつて、自らの題書に成る

「智者如太陽。仁者如大地。勇者如大海。勇者如大濤。芸者如太虚」の半折を取らせたとした彼であるが、今は唯斯々と眠りこけて、静かな糸のやうな鼾息が、細々と續いてゐた。

齊茂は夢を見た。

血潮のやうた執念の火が、瞋恚の焔を立てながら、烈々と燃え狂つてゐる。燃料の豆がらは釜の下に咆哮し、釜の中の苛豆は、沸り立つ湯玉の間をノタウチながら、悲しい聲で泣きさけぶ。

「ハテナ？」

齊茂は急いで眼をこすつた。不審にたえないさまである。だが、再び眼を見開いた時には、四邊の情景はモハヤすつかり、變つてゐた。

「ヤヤッ！」

ソコは綺羅を盡した王宮の一隅である。スペテが支那の三國時代の風俗だつた。上段の玉座に控へたのは、タシカに魏の文帝にちがひない。なぜかヒドク不機嫌な顔である。そこから十歩ほど向ふに、一人の重臣が帝に對して、悄然と頭を垂れて佇んでゐる。文帝の弟で今は東阿王の曹植だつた。

「朕は愚か者ぢや。今まで汝の鬼才を存ぜずにゐた。鳳輦の窓口から忍び入る雄風に、京童の口ずさむ謠聲を聞いた時、朕が心は轉動した。文帝に過ぎつる物が何とやらで、汝の詩才がその一つだそうな！したが朕とて、位苟くも九五の尊を極める身である。潔よく不明を天下に謝する前に、何よりも先づ、事の眞否を檢ためなければ相成らぬ！」

「――――！」

植は悵然として語もない。

「で、早速ながら、朕は汝に厳命する！ よいか、ソコから朕に向つて七步だけ、はこんでみよ。唯七步だぞ！」

「――――！」

「まだある。重要な問題は、五言七言何れにても苦しうない。唯詩一篇だけ賦することだ。但しソノ七步をはこぶ間にだぞ！ よくわかつたらうな？」

「は！」

「巧く參れば、それでよし！ 萬に一つも仕損じたら、嚴そかに殺め申し聞け置く。朕の佩刀は、スグさま汝の手足を分つであらう！さ、もはや一刻も猶豫まかりならぬぞ。いざ進まれいッ！」

文帝の最後の語が、雷霆のやうに轟いたと、殆んど時を同じうして、東阿王の切なげな步武は、こくそくとして刻まれた。

「それ七步だ！」

傲然と勝ちほこるやうな文帝の聲だつたが、ソノ刹那、東阿王の脣をふるはしながら、玉振のやうに朗々と冴え渡る吟聲は、左の言であつた。

「煮レ豆持作レ羹。漉レ豉以爲レ汁。
萁在二釜底一然。豆在二釜中一泣。
本是同根生。相煎何太急」

ソノ切々たる詩韻が、十六善神の私語みたやうに、人間本來の靈魂に優しく、併しながら嚴そかに呼びかけた時、黄金作りの佩劍は文帝

手のを離れて、戛然と床上に叩きつけられてゐた。飛鳥の翔みたやうに兩手ひろげて、玉座を飛降りるなり、ヒシと東阿王の可憐な姿を抱〆めると、兄弟二人の面には、瀧津瀬のやうに、潸々と涙が流れつゞけた。腸をかきむしるやうな、悲痛な哭聲がわなゝき起つた時、齊茂はハタと惡夢から目ざめてゐた。

「おう！」

この嘆息の内容は、ふくざつである。うす眼にとぢられた瞳の底には、異母弟齊久との疎ましい關係が、思ひうかべられて來た。彼は自分自身の思ひ僻んだ心から、事毎に横車を兄に推さうとばかりする、ソノ齊久の反省なさが、寂しかつた。妾腹に宿させられた者の、皆が皆もつ淺ましき宿命とは知るものゝ、ソレが爲め無明業障の人間の姿が、やるせなく想へぬことは、ないのである。系圖の上では、高祖惟宗忠久は、丹後の局の胎内から出た、征夷大將軍源頼朝の落胤である。將軍の骨肉疎害の殘忍さは、史乘の記する所であつた。

「惡くしたら、血汐のセイかも知れないな！」

彼は憮然として、嘆息した。豆を煮たがる豆からも惡いが、豆がらを焚付けようとばかりする人々の心なさが、彼には一等悲しかつた。

暗くのみ結ぼうれゆく心の内には、愛はしげな幻のみが寄り集かつた。要耳月は數ケ月以前から、持病の癪を今も尚臥せりつゞけてゐるのであるが、近衛右府の愛女と生れて、あはよくば、雲の上にも甕を比べたであらう、やんごとなき身分だけに、之まで幾度となく、眼に餘るほどの痛ましい慘劇の舞臺に、泣かされてばかり來た、ソノ酷たらしい運命を思ひやると、流石に聖賢の心緒も、麻の如く亂れて來ない譯には、ゆかぬのだつた。

「持病の起りは、月若と菊姫の夭折からだつた！」

ウッかり呟やきに成つて現はれるまでに、彼の嘆きはせまつてゐる。ソノ子供らの病死を、世間では口々に何者かの呪ひだと噂し合つてゐるらしい。あの頃までは何の馬鹿なと耳にさへ入れずに來たが、そう言へば、如何にも不思議な病態であつた。それに！　近來からの將監一味の叛逆ぶりは、驕りといへば人もなげなる露骨さである！

「では、やつぱり、さうだつた、のかな？」

不覺の憾みが、潮のやうにさして來た。

何の罪とがもなく、無益な犠牲にそなへられた小さな二人の、哀れにもいぢらしすぎる面かげを、熟々と思ひうかべて、彼の父性はしどろだつた。

（だが、もしもそれさへ、大君の御爲であると言へるなら、まだ浮む瀬もあらう！　ソンな風にも、考へれば考へられるやうぢやな！）

ボロリ、涙が一雫だけ、眼尻からコメカミへすべり落ちた。彼は涙の中から、ジッと人間相剋の相を見つめてゐる。それは、どんな考へてみても、だが、どれもかも、みんな一個のアヤツリ人形でしかないやうだつた。背後に動くものは、眼に見えぬ黒い大きな手！　人天を超越した無限絶對の宇宙意志、ソレである。順逆、向背、集散、離

令、利欲、我執、何一つとして人間個々の意力では、どうにも出來ないのだと思ふと、心の前に突付けられるものは、唯々悲しい「宿命」の鞭に追ひ立てられゆく、無力の「二足獸」の蹌踉たる群列のみであつた。

「憎んでならうか！」

彼は沁々と、詠嘆的に獨りごちた。

「我れ人ともに、哀れにヤルせない、業感の人生なのでは、ないのか！」

かほどまで、おし深まり、おし高められた心の世界では、善惡も邪正も、所謂普遍妥當性などいふ、平面板上に羅在し批判すべき、相對的なものでは、決してなかつた。ソレらは元來からして絶對的なもの、否、それよりも寧ろ、宿命的因縁からのみ、各自が各自の個性の中に發見し、抱持すべき性質の物だつた。だから彼は、自らの見解と道とを尊ぶと共に、又ソノ同じ敬虔謙虚な心を返して、他人の見解と道とにも、敬意をさゝげた。自分自身の靈魂を汚す、さもしい利己の小慾をさへ外にすれば、だから、將監一味齊久一派の作爲主義作爲逆動にも、彼の心はうなづけた。

彼の面は、見る／＼玉のやうな光に潤はうて來た。ニッコリ微笑みながら、朗らかに彼の脣は微吟する。

「悠々五十年。功罪付ス雲烟ニ」

一代の襃貶、千載の毀譽。ソンなことなどドウでもよいのだ。ソンなことではない。要は唯「まごころ」一つ！ ――ただそれ一つの問題なのである！

八

「煎じ藥だな！」

「ハイ！」

齊茂は八重子の手から、お庭燒の茶碗を取上げて、立上る湯氣に見入つてゐる。天井裝飾の硝子玉には、煌々と不思議な電氣の光が、輝やいた。恐らく我國、開闢以來のレコードであらう。ソノ不可思議な機械作業の技師長とても、齊茂自身だつたのである。騷擾の中にゐても朗けさを失はぬ所は、祖父齊彬ソックリだつた。彼は忙中の閑に乘じて、硝子の製造にも熱心し、寫眞技術の習得にも沒頭したりした。

窓の外には、夕闇が仄かである。

「少しマダ熱いな！」

呟やきながら、脣を茶碗の縁へ附けようとした。

「アレッ！ い、いけませぬ！」

八重子の脣が、戰のき叫んだ。

「なぜだな！」

ゆつくらした調子である。

「な、なぜでも――」

「ワン！」

彼女の眞蒼な面に、狼狽の色を見つめながら、暫くソノ後を待つたが、それ限り話は途絶えてしまつた。

「ハハハ！」

さりげなく、うち笑ひはしたものゝ、彼の顔色は急に引きしまつて、しまつてゐる。

「お殿様！」

ソレは藪から棒に、改まつた聲であつた。

「何と申す？」

「あのう――！」

一伍一什を、アケスケにぶちまける覺悟で、口は切つたものゝ、それだけ言つてしまつてから、グッと詰つた。考へれば、成程まだどちらとも、明言出來かねる事ではある。痛々しい女心が傷つき易い柔らかな胸の内側で、小禽のやうに、バタつき悶えた。

考へてみると、さつきの父良白の顔色といひ、スペテの容子が、たしかに尋常ではなかつた。骨肉の間に悲しい秘密を抱く者のみに、見出される特種の憂欝と、大それた陰謀に與する者のみに許される、不安にそよぐ陰惡な瞳の、激しい光とを結合はしてみたゞけで、彼女の頭にはモハヤ一切が、解つたやうに思はれてはゐたものゝ、扨てイザとなると、口に出してはなかなかソレと、言へぬのだつた。

（君の生命と父の生命！　父の生命と臣の道――！）

いろいろな想念が、頭の中に渦巻きあふれた。遣場のない當惑が、瞳の底でタジろいだ。

「ハッハッハッ！」

齋茂はだしぬけに、笑ひだした。八重子の不得要領な沈默に對してよりも、寧ろ、自分自身の馬鹿々々しい、疑心暗鬼に對してだつた。藥碗の手ざはりでは、モハヤ藥も飲み心地に冷めてゐる。決然と唇に寄せ附けた時、八重子の手の先が、白魚のやうに空を跳ねた。いきなり藥を奪はれた驚きを、沈默の疑惑に托して、ソコからジッと女のたゞならぬ面色を見まもつたが、スデにその時、藥の碗は空だつた。一滴のこらずあほり終つた彼女は、ニッコリ面をほゝ笑まして、ソノ時初めて厳かに

「お殿様！」

と、呼びかけた。

「お驚き遊ばしたことゝ、お察しいたしますが、ドウぞお赦し遊ばしませ！　之れには深い事情のあることゆえ、委しくお話を申上げねばなりませぬが、ソレよりも、今暫らくの間さへ、お待ちくださりますれば、スペテは何事も明らかになることゝ、存じます！」

哀れに悲しい聲だつたが、それでゐて、どこかに一念の力強さの潜んだやうな聲だつた。

「八重子！」

冷厳石のやうな沈默を破つて、初めて齋茂が、だしぬけに口を開つた。彼女の一切の容子で、彼にはモハヤ、謎のすべてが解けてしまつ

て、ゐるらしかつた。

「お前は俺の、身代りに立つ氣だな!」

「ホホホ!」

寂しい、けれども滿足の微笑と共に、夕顏のやうに淸く匂やかなソノ唇頰には、歡びの涙が滂沱として流れおちた。激發した仄かな苦悶が彼女の心身を捉へた時、齊茂の病軀はいつの間にかハヤ、寢床から滑り出して、シッカリ彼女を抱支へてゐた。

「テモ、不愍な奴! 苦しいだらうな?」

顏色を白まして靜かに聞くと、八重子はニッコリ冠りを振るのだつた。腕の中で、二三度大うねりを打つた恐ろしい苦惱が、グッと胸先へ突上げて來るのを、下脣くひしめながら、懸命な死力で戰つてゐたが、不可抗な衝動がいきなり上下の脣を、おし開けた瞬間、カッと云ふ音と共に、土器色の口脇からゴボッと溢れ出たのは、どす黑いどろどろの血糊だつた。彼女は半ば喪心しかけながらも、ソコは平素の嗜みから、ありくと恐懼の色を滿面に漲らして、主君の抱擁の中から、身を外にモガき出そうとあせるのだ。限りなき愛憐の眼で、齊茂はソレをいぢらしく眺めながら、淚ぐみながら、益々強く抱きすくめて、着物の袖で靜かに口脇の血糊を拭き、右手の掌でソコこゝと撫でさすつてやるのである。と、八重子の瞳に異樣の光が、仄かに生々と燃え輝やいて來た。

「お殿樣! 八重ほどこの世に、仕合者はござい ませぬ!」

感動にみちたソノ語は、もはや一身を委ぬべき者へ、委ねた者の心安さで燒付けられてゐた。彼女はモハヤ齊茂の抱擁と介抱から、逃れようなどゝはしないのだつた。

「それほどまでに! では、お前は——?」

嘗て一度も心にとめぬことであつたが、彼女のさつきからの仕草も言ひ草! 戀より外の何物でもないと解つてみると、齊茂の胸も燃えて來た。

「ハイ!」

吃々たる問ひへの答へは、かすれかけた、けれども冴々とした聲だつた。ソレは如何にも生命がけの告白らしく、別段面を袖に掩はんとさへしなかつたが、それでも流石に女心の消えも入り度い面はゆさはあると見え、晒し物のやうに全く血の氣を失つたソノ面にも、思ひなしか、ホンノリとほの色の光が、たまゆらの瞳を掠めたやうだつた。

齊茂は心の中で、嵐のやうな物すごい衝動と戰ひつゞけてゐたが、いきなり脣を彼女のそれにおし附けると、力限りに彼女の體を締めつけた。夢ましく閉ぢられた女の眼尻からは、潸々として涙が溢れる。

「八重子!」

脣を離してから、齊茂は切なげに呼んだ。

「言へ。申殘すことが、あらう?」

「ドウぞ、お憐くもございませうが、妾の愚かな父を、お赦しなされ

てくださりませ！　父はアレでも、決して悪黨ではございません。スペテは持ち前の臆病からで、ございます！」

ソノ聲は夢のやうに、儚なかつた。

「安心いたせ！　その儀シカと承知致したぞ」

「コノ、ご鴻恩は、生々世々——！」

「それよりも、まだ外に何か、申すことでもないだらうな？」

八重子は、靜かに冠りをふつて

「お殿樣へのみ、獻げてゐました生命をば、父とは言へ、他し人の爲めに捨てゝしまひますのが、タッタ一つの思ひ殘りで、ございます！」

「イヤ！」

と、言ひかけて、齊茂は急に語を途切つた。恐ろしい痙攣が、だしぬけに彼女を捉へたからである。

外には狂風一陣！　滿山の木々の梢の騷音にうち續いて、バラ〳〵ッと打ちつける庇の雨音！　部屋の光が俄かに冴え返つて、ホー〳〵と啼く梟の聲の、千切れ〳〵に聞えるなど、哀別離苦の惱みを、イヤが上にも、深めてゐた。

九

巍々たる花崗の高石塀の内側から、柱時計の音がチーンと聞えて來た。二時半らしい。遠吠の犬の聲さへない靜かな夏の夜空には、銀砂子みたやうに無數の星か、チカ〳〵とまたゝき交して、百二都城の眠りを照した。ソノ白々と星晴れた空の下に、黒々と默し横たはるのは、城山である。

塀の外は、木かげになつてゐて、暗い。

と、ピタッと、どうやら人の足音らしい氣配がして、だしぬけに曲者の黒い影が、塀の根に身を附けながら、地べたを這ふやうにして、門の所へ近づいて來る。よく見ると、ソレが一人どころか、十數人の影である。地虫の聲が一度に止んでしまつたのも、氣味の悪い取合せだつた。

勤王派一味でも、殊に大山帶刀を盟主とする少壯兵兒の一團は、かねて將監一味の佐幕派を、一徹の血氣から不倶戴天の仇にしてゐた。月若君兄妹の夭折に伴ふ流言に觸れた時、彼等は已に事を謀らうとしたのだつたが、それがどうして解つたものか、瀧川靜馬に呼びとめられて、眼玉の飛出すくらゐ、帶刀は叱られた。

「それぢやと、申して！」

「イヤ！　大鵬の志は燕雀にはわからぬ。御殿のミ心を、我々風情で忖度するのは、マチガヒだ」

いきり立つ心も、靜馬の先驅らしい圓滿な說得で、手もなく容らされた帶刀ではあるが、今度フトした機會で、娘八重子の死に關する目付の涙の告白を、コノ二つの耳に聞取つてしまつた以上、一刻も生けておけぬのは島津將監と其一味だつた。だが、闖々たる屋敷の

て、これほどの陰謀を抱くに就ては、ソコに必ず何等かの偉大なる背景が、なければならない。帯刀の考へでは、それを齊久母子だと見たのである。言ふまでもなく、今夜の曲者はその壯士の一團だつた。彼等は一擧先づこの母子二人を弑殺して、奸雄島津將監の肝膽を寒からしめんとするのであるが、ソレを斬姦の血祭りに疾風迅雷將監以下の姦黨を、一人餘さず屠り盡さうと言ふのが、全體の手筈だことは、勿論である。

一つの人影が飛鳥のやうに、裡門の簷に手をかけた。が、ダッとぬれ手拭の物に當るやうな怪しげな物音と共に、「ウーン！」と唸いて、その人影はドタリと地ベタに、落ちくづれた。

「ヤヤヤ！」

この意外至極な椿事出來には、流石に一同肝を潰したモヤウだつたが、帯刀は獨りひそかに下唇を喰ひしめたまゝ、ニヤリ笑つてゐる。ホンの瞬瞬のことではあつたが、かの紫電の流れにも似た、物すごき殺刄のかげにチヤンと丸に十文字の袖の紋所を、見とめて置いた。

「叱！」

ソレは「動くな」の合言葉である。帯刀は嚴そかにその一語を同志に殘して、單身コンモリとした木かげの闇に猪突した。

「エーイッ！」

凄絶無比の、示現流の氣合！

眞向みぢんの鋭い太刀風を、颯とかはして横に拂つた得意の燕返し！　相手の曲者もさることながら、帯刀流石に一流の達人だつた。ガツキと受止めた相手の刀身から、パッと火花が赤く散る。

「將監様！」

「わかつたな！」

覆面の二人は鍔ぜりの間に、眼と眼を見合せて、ニヤリと笑ふ。

「ドウぢや、驚いたらう？　汝等の來るのを、待つてゐたのぢや」

將監は言ふ。呑んだ態度である。

「お前だけは、きれいにお洗ひ置きで、ござりませうな？」

帯刀の一語も、不敵だつた。

「猪口才なことを、申すな！」

「ハッハッハ！」

だが、帯刀が「打入り」の合言葉「イン」に答へて、同志の面々がソレとばかりに犇めき立つた時、將監の呼子に應じて、ゾロゾロ木かげから立ち現れた覆面の一團を眼にとめると、流石に帯刀一味の心にも、驚きと不安とが掠めすぎずには、居らなかつた。物すごい修羅の繪卷が展開されたのは、次の瞬間からであつた。

塀の内側は、二之丸の館邸である。

尋常ならぬ物の氣配に、眠つてゐた三郎齊久はパッチリ眼を見開いたが、ソノ時外面から傳はり來たのは、陰慘なる殺陣の氣合だつた。

「ヤ！」

むつくり刎ね起きて、褥の上に端坐すること、稍しばし！

「ハテなあ？」

吐息のやうに呟いて眼を閉ぢようとしたが、何か思當りでもしたやうに、俄かに「ウン！」とうなづいて、忽ち眼を見開くのだつた。

「日頃重富は、ゴ用心召されいと申し居つた！　不逞の徒が妄動を初めさうだといふことも、話の端に香はせ居つたぞ！　或ひは？」

彼はハツタと、屋外を睨みつける容子をした。兄齊彬とは、體も小粒で色も淺黑く、相貌にも福々しい圓滿さが缺けてゐる。だが、上反つた一文字のうす脣、尖り鼻、鬼上りの太眉、秀でた角額、爛々たる眼光、スベテは悉く、短慮と、慓悍と、負けじ魂と、利かぬ氣と、そして奇才の象徵だつた。年頃は三十內外!?

「だが、何しにコノ我輩が、身邊を警戒しなければ、ならないのか？何しに他人の怨みなど受けねばならぬのか？」

どんなに考へてみても、彼にはソレが解せないのだ。

（勿論我輩は佐幕主義ぢや！　兄上の信條には反する！　だが、兄上は兄上、我輩は我輩である！　一寸の虫にも五分の魂、何で又我輩が一々、兄上の指金通り、動かねばならないのか？　わからぬ！　トンとわからぬ？）

彼は心で不平つてゐる。

事實、齊久としてみれば、無理もないことであつた。將監側こそ齊久を盟主のつもりで、色々と之まで策動もし、危ない綱わたりもして來たが、齊久の方ではソンなことなど、ゆめ與り知らぬことであり、又與からうともしないことで、あつたらう。彼は性格から言つても、容易に人を容れたり、他に與したりするやうな男では、ない筈だつた。妻子からさへ、はなれてゐた。

ソノ狷狂の性格を誰よりもヨク知つてゐるのが、母お由井である。そしてソノ性格の半面を裹返せば、鵜の毛の先ほどの不正不純も、めつたにさし許さぬ、生一本の激しい氣性だつたが、彼女はそれも心得込んでゐた。將監一味との結托についても、だからこそ彼女は今日が日までツイぞ一度も、彼の前では噯にすらも出さないのだつた。

と、だしぬけにべり〳〵と、雨戶を引裂く音がする。

「ヤ！」

スックと立上つた寢卷姿には、朱鞘の枕刀が左手に握りしめられてゐた—ー「奇人一不」なのである。有明の灯を消すと、障子の開く音が闇中に聞えた。

「誰奴ぢやッ！」

いきなりサツと雨戶を引開けると、齊久の大喝が怒氣をふくんで誰何した。

お由井の眼ざめは、ソレからいくらも經たなかつた。たゞならぬ鯉

氣の肉薄を感ずるなり、彼女の顏色は變つてゐた。かねぐ〵將監から、ソレとなく幾度も注意のあつたことではあるが、その度ごとにマサカと高をくゝつてゐたら！　彼女は褥から立ち上つた。廊下づた

ひに齊久の寢室を訪づれてみると、居ない！　空洞の光の中には蛻の殼のみが目に附いた。

「オヤ！」

でも、まさか？　と思つてゐた瞬間、斷末魔の悲鳴が、庭から筒ぬけに聞えて來た。

「タ、タ、たはけ者奴が！」

　勝ちほこつたやうな、甲高なソノ罵聲が、まぎれもない齊久の聲だとわかると、彼女は我を忘れて緣側へまろび出た。雨戸の隙から庭面を眺めやると、泉水の周りには覆面の曲者どもが、犇めきながら入亂れて斬結ぶ。仄々とした夜明前の薄明を幸ひに、ソコから齊久を物色してみたが、ダメだつた。

「これはやつぱり？――ドウやら、それにちがひはない！　さて――如何いたしたものであらう？」

　とつおひつ、思案にくれてゐると、忽ち耳に附いたのは、たしかに馬蹄の音である。之は帶刀の妾芳江の密告に由り、スハこそ一大事と、乘馬で馳著けた左衞門であつたが、時すでに遲かつた。お由井は恐らくそこに佇ずんだまゝ、次第に近づく馬蹄の音に耳を澄ました。馬上から門前の亂鬪者に、何か大聲で呼びかけてゐる聲を、國老の伊集院だとたしかめ得た時、彼女は悸としてよろめいた。

「とう〳〵最後の日がやつて來た！　ソウだ、審きの日が今來たのだ！　さ、おとなしく未練なく死にませう！　みんな身から出た錆、自業自得、誰を恨みる餘地とても、ないのです！」

　よろ〳〵と部屋の内を、廊下へ橫ぎる間にも、彼女の頭の中では、哀歡を極めつくした劇的な自らの一生が、走馬燈の繪みたやうに明滅した。智慮なき母性の煩惱から、將監の誘惑に乘せられたのも、我が可愛ゆさ故であつたが、半頃から已に前非を悔ひそめた彼女が、ズルズルと行掛りに引ずられて、こゝまで來たのは、將監の默々たる威嚇の恐さゆゑだつた。亡き夫へも、思へば申譯ないことであるが、せめての手土産には、この切ない懺悔とても何程かは役立つやうに思はれる。ソノ心證としても、今の場合自訴は必要な處置である。それに、不愍な庶子齊久に對する、異母兄齊茂の心を和らげる爲にも、倘若干の效果は乾度ある筈だつたから、ソコに心がめぐり附くと、自盡の覺悟は、いとも自然に決まるのだつた。彼女は初めて深々と呼吸が出來た。ペシヤンコにおしせばまつた胸に、ソノ時寬ろぎが來たのであらう。

　白無垢の襲ねに端然と襟を正して、佛壇の間に膝まづいた彼女の姿は、神々しいまでに落著いてゐる。心靜かに香木を焚きくべて瞑目を閉ぢた面には、寂しい微笑さへも漂ふた。錦の袋にしまつた懷劍を、白木の三方から取上げて鞘を拂ふと、夏尙寒き三條の小鍛治宗近の銳刄が、彼女の精根をしびれさす。魅られたやうな潤んだ瞳が、悧然とソレに見入ると、燭臺の灯が急きたてゝもするかのやうに、ソノ焰をば、ソ、クサとさゆらがした。

齊久は愁然と自分の部屋へ戻つて來た。戸の隙間からのうす光が、そこらを仄々と白ましてゐる。朱鞘の大刀を提げ立つ眼は血走つて、寢卷の前はハダけてゐた。袵に袖に眞赤な返り血が、緋鹿の子模様を沁みつかせてゐるのが、一室の空氣を息詰るほど引緊めた。虫の知らせか、フト母のことが氣に成つた。大刀を床脇の刀架に置いて、ツカツカと廊下の方へ立去つて行つた。

佛壇の間には、名香の匂ひがあふれてゐた。朱に染まつて突つ俯した、冷たい母の死體を見つめた時、彼はソックリ石に化けた。七情の世界を越えた不可思議な靜心の緊張だつた。伊集院のさつきの言葉の端でも、大凡の事情は窺ひ知られたが、三方の上の母の遺書を讀んでから、事の次第が初めて呑みこめた。スベテは自分に對する母の盲愛が原因だつたのかと思ふと、兄齊茂の面かげが、朝日に打向ふほどに心眩ゆく思ひ浮べられる。ソレにしても、母を咎める心には毛頭成れないで、却つてその罪ふかき心根ゆえに、思慕の念ひが、限りなく深められ、募りゆくのであつた。柱時計が四時を打つのを聞いた時、ハラリ、たつた一雫だけ涙が落ちた。

「弱つたな！　サテ、兄上に何と申したら、よいであらう？」

恩愛の涙かと思へば、さにはあらで、ソレは何處までも、負けじ魂よりの憤涙だつた。

一〇

「殿！」

左衞門の聲は上釣つて、どもつて、顫えてゐた。

「――――？」

齊茂は默然として左衞門を見つめる。病上りの窶れが、沈んだ瞳にも潜められた。左衞門はやう〳〵のことで、今曉の出來事の一伍一什を上申して後、

「寔に、面目次第も、ござりませぬ！」

と、言つた。おろ〳〵聲である。齊茂は、何とも言はなかつた。

「ウーン！」

たゞ、それだけである。

重苦しい沈默が、二人の呼吸を息苦しく、引緊めてゆくのである。

「如何、取扱つたもので、ござりませう？」

やがて、左衞門は言ふ。

「――――？」

答へはない。寂たる書院の窓々には、はや朝の光が匂ひみち、城山の樟の杜からは、鵯の啼聲が聞えて來た。

沈默が又つゞいた。左衞門は氣が氣でない。だが、シビレを切らしながら、氣長に待つた。

「左衞門！」

やゝしばらくして、齊茂は口を切つた。

「ハ！」

左衞門は、片唾を吞む。

「仕方はない！　喧嘩兩成敗ぢや！　不埒な奴等ではあるが、差料一味へも同樣、切腹を申付けたぞ！」

「ハーハツ！」

特に將監等に言及しないのは、餘りにソレが理非明白すぎる爲であらう。

「だが、のう左衞門！　彼等は、誠忠無二の、者どもぢや！」

「御意！」

左衞門は、歡びに夢中だつた。

「後は何れも、手厚くして、取らせいよ！」

「ハハーツ！　畏こまり、たてまつる！」

老眼の感涙は、滴々落ちて疊に音を立てた。鞠躬如として退出しゆく後姿を、齊彬は茫然と夢のやうに眺める。

「取れば憂し、取らねば物の數ならぬ
　捨つべきものは、弓矢なりけり！」

胸息を引きよせて、一人の靜寂におし凝ると共に、彼の脣を迸つたのは、この國風の詠嘆であつた。

安政四年秋、齊彬は藩中の士卒を天保山に召集して、洋式の調練を統督してゐたが、乘馬「三日月」が松の切株に躓づいた爲め、アハヤと思ふ間に轉落して、後頭部をしたゝか岩角に叩きつけた。英醫ウイリアムの手當で、一時の急は救つたものゝ、ソノ後の經過は、日毎に惡い一方だつた。

病室に充てられた所は、磯邸の別館の一室である。今朝ほど松かげを映してゐた、表の明り障子も、夕方からは陰氣くさく翳つてしまつて、樓門の彼方からの秋汐の叫び聲が、うす暗い部屋の空氣を、僅なげに顫はしてゐる。

齊彬は今日も唯昏々と、褥の上に眠りつゞけた。十重二十重に侍立てた、綳帶のかげの氣高い面には、誰の目にもスグそれとうなづかれるであらう「死の影」がアリ／＼と色濃く漂ひみちてゐるのである。

わざ／＼遠い英吉利から、專門技師を招聘して、ソノ邸内の南隅に建てさした、我國最初の蒸汽紡績所の、あの賑々しい機械の騷音を聞かぬのも、今日でモハヤ幾日に成るであらう！　窓々の鐵の扉は、何れも閉ぐとざされて、寂々たる秋山を背景に天そゝり立つ、煙を吐かぬ赤煉瓦の大煙突の悲哀は、ふかい！

英醫ウイリアムが、病室へは入つて來た。寢床の枕べちかく丸燈臺の灯がともつて、窓の障子には月かげが、スヽキ尾花を描いてゐる。サラ／＼と吹過ぎた風の間に、こほろぎの聲の冷々と聞え來るのも、秋の哀れをふかめてゐた。

「ドクトル？」

診察が終ると、齊久は待ちかねたやうに、容態を目で聞いて見た。

ウイリアムは、唯右手を左右にうち振るのみ。

「ホープレス？」

齊久の聲は用心ぶかく、低かつた。

「イエス、アイ、アム、ベリー、ソーリ！」

ウイリアムの答も、細々と小暗い。

「ハハハ！」

齊茂が、だしぬけに笑つたので、列座の人々は、夢でも見てゐる積りだつた。だが、齊茂は目ざめてゐたのである。

「齊久！」

と、呼ぶ。

「ハ！」

齊久は我を忘れて、にぢり寄る。

「大分、英語が物に成つたね！」

「えツ！」

齊久は、ギクリとした。

（何もかも聞かれて、しまつたのか！）

「だが、俺の餘命は、モハヤ後十分だ！」

「何を、仰せられまする！」

「イヤ！ 御身等には解らぬ。靈魂の神秘と申すので、あらう！ 俺にはソレが、よく解る！」

齊久は愁然と、語もなくうなだれてしまつた。

「後は萬事、御身にたのんだぞ！ ソレに就て、尚々名殘を、惜しみたいのだが、急いで、盃の用意を、してはくれまいか！」

「ハ！」

齊久は、スグ盃と酒とを命じた。

侍女の手から盃を取つて、波々酒を溢らせると、齊茂はグビッ綺麗に、それを空けた。

「いざ！」

献された盃を受けて、齊久の手は小刻みにうち顫ふ。

「ゴ返盃！」

「オ！」

齊茂は手を差出したが、彼は盃と共に齊久の手を握ると、グッと力づよく緊めつけた。最後の努力の悲しさが、ソコから犇々と傳はつて來る。汪然たる感動に胸が塞がつた齊久の選んだ道は、骨も折れよと兄の手を、強く〱握り返すことだけだつた。彼が泣聲を心から外に出してしまつたのは、後にも先にも、ソノ時限りであつたと云ふ。

一門以下の近臣たちが、近々と次々に名殘を惜しみ終つた頃、總のやうにとぼ〱と、ソコへ顔を見せたのは、主膳老であつた。ワザ〱上意で召されたのであるが、下手の端に兩手つかへて平伏すると、心をおし包むものは、唯々過去の非行の恥かしさと、殿の慈恩の忝けなさとであつた。

「主膳では、ないか？ 苦しうない。近う！」

「ハハーッ！」

主膳はモハヤ、周圍や面目に拘づらつては居れなかつた。彼はッ、

ツ、ツーと病蓐ちかくまで、にぢり出て行つた。

「祖父上や父上に、言傳などはあるまいな？」

ソレ聞くと、主膳はモハヤ堪に耐へなかつた。がばと疊に突伏すなり、ワツと泣聲を立てながら、感動の中にうち顫えて、ゐるのである。

「犀月どのは、居やるか？」

「ハイ！」

すべり出した彼女の顔色は、木の葉のやうに青々とふるえてゐた。

「泣いては、たもるまいぞ！」

潸々たる涙をソノ面に感ずるなり、齊茂はやるせなげに言ふ。

「ぢやと、申して！」

「イヤ、世は夢ぢや！ のう犀月殿。生れた者はやがて、皆死なねば相成らぬ！ 簡單な道理ぢやが、なかなかソレが、解り難いのぢや！」

「ハイ！」

「だが、宿命は、我等二人を、祝つてくれた！ 悲しい數々の、試みを下されたのは、コノ至上の眞理を、悟らせよう爲の、天の御心ぢや！」

「初めて、よく解りまして、ございます！」

「ソレ聞いて、俺も安心！ 心置なく、眼がつぶられると、いふものぢや！」

ソレは悲しい語であつた。ウイリアムが慶ましく死を宣した時、靜かな泣聲が室にみちた。

「眞暗だ！ 何もかも眞暗闇ぢや！」

左衛門の顫え聲の唸きが、臨終の耳へは入ると、齊茂は惱ましげに、又瞼を開けた。

「嘆くではない。ソレが諸行無常の、姿ではないか。だが、日輪が西山に沒した後には、軈て月輪が、東山に上るのぢや、世に闇はない。あるのは、銘々の愚かさ、だけぢや！」

急に頭が、ガクリと低れたので、犀月と齊久とが、いきなり左右から抱付いて、語をかけてみると、命根は已に盡きてゐた。

「オー・マイ・デア・ゴッド！」

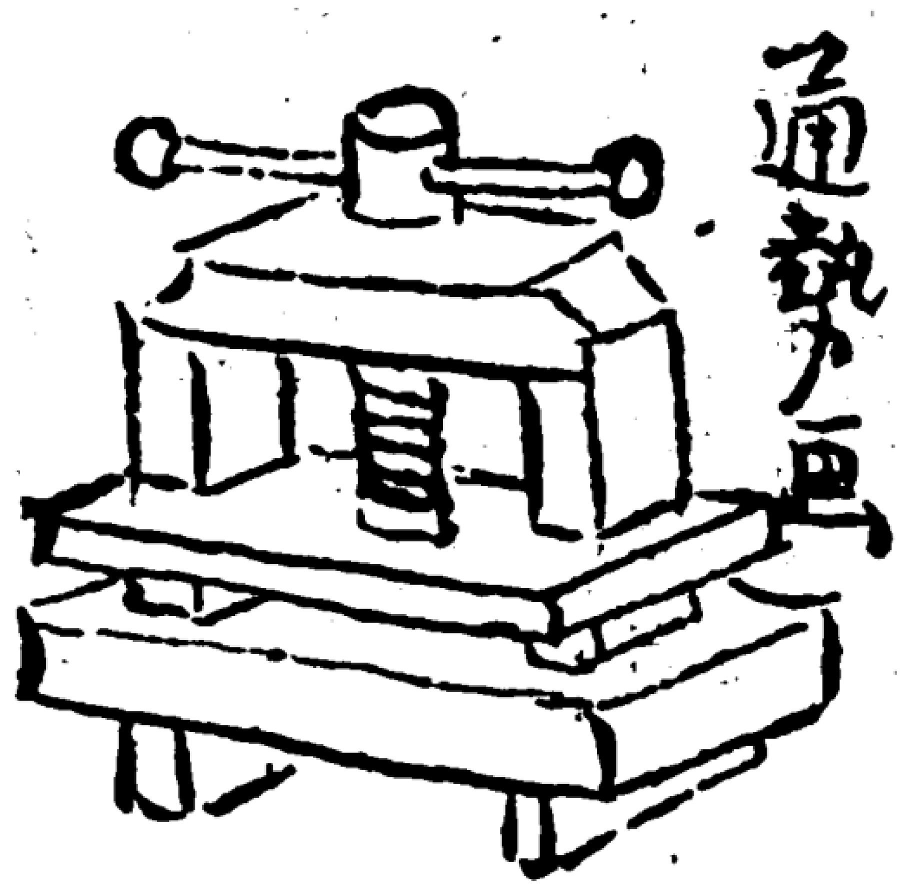
ウイリアムは、改まつた一室の泣聲の中に、兩手を胸高に組合せて、天を仰いで叫ぶのだつた。

「汝の忠實な下僕ウイリアムは、滿腔の誠意もて、余の肉眼の前に、尊き奇蹟をアリアリと示し給へる、我が萬能の父ゴッドの膝下に、最大の尊敬と感謝を表したてまつる！」

後の部分は、ソウいふ意味の語だつたが、ソレは齊久にも、よくは解らなかつた。しめやかな名香のかほりが、滿ち滿ちた部屋の中には、逆さに立てた金屏の面に、百目ろうそくの沈んだ光が、ぬれぬれと紫に滲んで見える。お通夜の第一夜の限りなき悲しさは、深べの秋の夜ゆゑにも、一段と骨にまで沁みゆくのだつた。

「コンコン！ コンコン！」

屋後の雜木山から聞えるのは、狐の聲らしい。うら悲しくサシ俯向いた人々には、誰一人面をあげて顧みる者も、ないのである。（完）



貧民の世界

—三河島のトンネル長屋について—

里村欣三

三ノ輪から王子行きの電車に乗つて博善社前で下車すれば、その邊の一帶が有名な三河島の貧民窟である。千軒長屋とも、トンネル長屋とも謂はれる。

直ぐ近くには博善社の火葬場があり、東京市の汚水處分池がある。人を燒く臭ひと、汚水の惡臭がプンプンと風に漂つてゐる。

三ノ輪から火葬場へ行く大通りには、日に何十回となく金ピカの葬儀自動車と、白い棺桶が通過する。またはボロ半纒に白い上衣をひつかけた葬儀人夫の群れが、行列を崩してゲラゲラ笑ひながら花束と供物を捧げて通る。

すると、その度に頭をザンギリにした白痴らしい娘が跣足のまゝで、露路裏から發作的に駈け出して來たり、頭の鉢の歪んだ子供たちが、燒芋屋の軒下からパッと蒼蠅のやうに群れ立つて殺到したりする……。

この憂鬱な大通りに區切られた裏街一帶の地域が、養豚場よりももつと汚濁した惡臭と、混亂した騒々しい雰圍氣をもつ千軒長屋の貧民窟である。戸數は千二三百軒と謂はれてゐるが、その戸數の七倍に餘る一萬人に近い人口が抱擁されてゐるのだから驚く。

私たちが何かの役人でゞもあるやうに、ブラリとこの地域に足を踏み入れた瞬間に、先づ度膽を拔かれるのは、髮の亂れた女房や腹の出ばつた出臍の汚ない子供達の群れが、駄菓子屋や煮賣屋の軒先きに群集して暴徒のやうに立ち騒いでゐる光景である。或ひは炭俵の敷いてあるジメジメと泥濘る横丁で、い、い、ひろめ屋の剽輕な口上を包圍してゐる群集の異様な風態と、泥まびれな跣足である。または狹い巷路を水だらけにして、尻を端し折つた女房連が共同栓を取巻いて、人通りの中で公然とボロ半纒や赤い腰卷を洗濯したり、虫の喰つた菜ッ葉をすゝいだりしてゐる光景であらう。

そしてこれらの混亂した雑多な情景を押し包んで、何んとも得體の知れない音響が、騒然と空に渦巻いてゐる。私たちは忽ちにこの雑多

た音聲が、無數の赤ン坊の泣聲であり、喚めき聲であり、内職の鎚を打つ音であり、怒號であり、齒入屋の鼓の音……と云つた無數の器物と人間の聲の綯ひ合つた複音であるのに氣付く。

若しも私たちがものゝ十分間も注意深く、この騷々しい狹路に彳んでゐたならば、ひろめ屋の樂隊に飽いた子供たちや、洗濯を濟ませた女房連が、それぞれ漬物屋の空樽を積んだ露路へ、掃き溜めを置いた八百屋の横丁へと吸ひ込まれて行く姿を認めるであらう。

この人間一人がやつと肩を擦めて通り拔けられる露路の兩側にこそ、トンネル長屋と謂はれる一棟三十軒づゝ位な棟割長屋が向ひ合つて行列してゐるのだ。押しつぶされたやうな便利瓦の低い屋根で、煤け返へつた寄木造りの小屋である。下水のない通路は梅雨上りのやうに泥濘つてゐて、太陽の光りが射さないのは勿論、空氣さへもが永久に動かないで、ぢつと澱んでゐるやうに思はれる。

このトンネルのやうに薄暗い長屋の中では、軒から落ちて來る僅かな光線を頼りにして、腰の曲かつた老人や眼の惡い女房が、麻絲を綯つたり、下駄の台を削つたり、ボール箱を貼つたりしてゐる。または病みほゝけた病人が死人のやうに倒れてゐるか、額の蒼白い産後の女房が、鼠のやうにボロ布を掻き集めて寢轉がつてゐる姿が見られる。

私たちが無遠慮にこの長屋の露路へ闖入して行つても、彼等には私たちの無作法を怒鳴りつけたり、とがめだてしたりするだけの意力も勇氣もない。ちらつと白らけた眼をあげて、盜むやうに睨らむだけである。

この長屋一戸の疊數は、三疊、四疊半、六疊の三種類で、普通には便所も押入れもない。隣りとの堺が粗末な壁のところもあれば、板で仕切つて壁紙を貼つただけのところもある。下駄を脱ぐ三尺ばかりの土間が、台所と一緒になつてゐるので雨でも降ると、こゝの女たちは傘をさして煮炊きをしなければならない。便所は五軒に一つ位ゐた割合ひで別棟になつてゐて、朝晩の混雜はまるで戰場のやうな有樣である。

この豚小屋よりも粗末な長屋の家賃が、一戸最低一圓五十錢から最高八圓くらゐまでゞある。そしてこゝに住む人々のうち七割までが自由勞働者である。後の三割がテキヤ、行商人、乞食、オン坊と云つた種類の貧民が占めてゐる。

長い雨でも降りつゞくと、大抵が天氣稼業の勞働者であるから、忽ち一杯の粥も啜れない人間が出て來る。鍋を賣る。蚊帳を賣る。股引半纏までハタイてしまふ。そして最後には賭博である。十錢の金で七人の家族が腹を滿すためには、ボロイ賭博で勝つより外に方法ない。博奕に敗けると、最後には日限を切つて、、まで賭けるといふ話がある位ゐだ。

希望も意氣も失つた敗殘者の群れが、最後に求めるものは酒と賭博である。夜、幾らかの金を握つた勞働者の群れが歸つて來ると、にわかにこの長屋は生々と活氣づいて來る。白い烟がもうもうと立ち罩め

て、味噌汁の匂ひや、飯のふける匂ひがそこいら中に漲ぎる。豆腐屋が呼び込まれる。裸足の子供が徳利を抱へて、露路の中から飛び出して來る。赤ン坊を背負つた女房が笊をさげて米屋へ驅け込む。酒に醉ひつぶれた亭主が、喚めく、怒鳴る……。

この日暮れ時の瞬間こそ、暗鬱な千軒長屋に潑溂とした生命が甦へる時である。煤けた長屋の中では、坐り切れるだけの頭數が温い食物の湯氣に包まれて、旺盛な食慾を滿してゐる。横丁の酒屋では、空樽に腰をかけた鼻の赤い立ン坊がコップ酒を呷つてゐる、と云つた調子である。

この千軒長屋の中央に、三ツ木通りと云ふのがある。酒屋、菓子屋、下駄屋、米屋、魚屋……といつたあらゆる日用必需品を賣りさばいてゐる「銀座通り」である。日暮れ時になると、銅貨や銀貨をチヤラつかせた長屋の人々が、暴動のやうに押し合ひ、揉み合つて品物を買ひ爭ふのだ。

この通りには活動寫眞館も、寄席も、支那ソバ屋も、呉服屋もある。千軒長屋の住民にとつては全くの銀座通りである。彼等は松屋で十圓もする帶を買ふかはりに、こゝで色の褪めた二圓の帶を買ふ。一斤五十錢もする松魚節のかはりに、一本十二錢位ゐな鯖節で我慢する。そして彼等は決して、銀座とか上野とかへは出て行かない。成るたけ彼等の慾望と、必要をこゝだけで滿さうとするのだ。

何故と云つて、三越へ自動車を乘りつける貴婦人位ゐに、こゝの商人が乞食や土方の女房を大切にするからだ。そして一圓もつかへば、二十圓も散財した位ゐの裕福な氣持になれるからだ。

彼等は彼等に相應する世界を、千軒長屋と呼ばれる貧民窟の一劃に建設してゐるのだ。少くとも自分たちに住みよい世界を造つて、そこに安住しやうとしてゐるのだ。「一度千軒長屋へ落ちれば足が洗へない」と言ふ。それは底知れず墮落するために足が洗へないといふ意味ではなくて、こゝに落ち着けば、住みよくて、暮らしよくて、他の社會へ出て行く氣がしなくなるからである。

一棟の長屋には、必らず長屋頭と呼ばれる古參者がゐる。ドブから便所の掃除の指圖、喧嘩口論の仲裁、職業の世話からお葬式の世話まで燒いてくれる古女房がゐる。新規に移つて來たものには長屋の習慣や規則を教へ、長屋一統の指揮命令を與へるのが彼女である。この長屋頭によつて、長屋の秩序と統制が保たれてゐるのだ。しかしこの長屋頭の中には、よく家主の手先きに使はれて借家人を虐待する因業な婆がゐるが、そんな情け知らずの鬼婆は長屋中の團結で直ぐに追ひ出されて了ふから昔のやうなことはない。

こんな話がある、建鐵會社に勤めてゐた職工が、こゝの千軒長屋に住んで食ふものも食はずに永い間辛抱して貯金をためた。彼は肺病で會社を首になつてから、その貯金で一棟の長屋を建てた。そして自分でもその一軒に住んで、家賃のあがりで裕福に暮らすやうになつた。彼等には女房と三人の子供があつた。ところが彼は因業極まる吝嗇漢で、

自分の女房子供にすら滿足な食物をあてがはない。女房と子供は亭主が貯金をためて、この長屋を建てるまでには、碌すつぽに飯を喰はされたタメシがなかつた。そして亭主の望み通りに長屋も建てられたし、少しは生活の餘裕も出來たのだから、亭主の吝嗇坊もやまつて人並な食物位ゐは食はしてくれるだらうと思つてゐたが、彼の吝嗇と强慾はいよいよ募るばかりで、着るものも着せず、食ふものも食はせないといふ始末だ。この亭主の强慾な非道を怒つて、長屋の連中が早速に家賃の不納同盟を結んだ。すると間もなく女房は女房で、亭主の吝嗇に愛想をつかして三人の子供を殘したまゝ家出をした。女房がゐなくなると、長い間の營養不良で、末の子供が死にかゝつた。その上に長屋の連中が頑として家賃を拂はないので、亭主は全く弱り切つた。そのうちに子供が死んだ。

『家賃は兎も角、子供の葬式だけは出させてくれませんか』と、亭主は遂ひに長屋の連中に兩手をついて頼み込んだが、

『何を寢呆けてるんだい。どつさり貯金が出來てゐるだらう。貯金を出せばいゝぢやないか！』と、まるで相手にもされなかつた。そこで亭主はすつかり自暴自棄になつて、長屋の連中を燒き殺すつもりで、自分の長屋に火を放つた。そして自分も一緒に燒け死ぬつもりで、二人の子供を背中に結へつけたまゝに死んだ子供と枕を並べて寢てゐたが、生憎夜警の巡査に見つかつて火は消され、自分は放火罪に問はれた事件があつた。

この事件でも解るやうに、こゝの長屋の連中は直ぐに團結する。壁一重に住んでゐて、お互がみんな一軒のうちの家族同志のやうに、何事にも距りなく親密に結び合つてゐるからだと思ふ。

大概の、、、ならばこの千間長屋へ遁げ込んでくれば、長屋の連中が直ぐに、、てくれる。若しこゝの人間が外で、、、、ても遁げ戻つてくれば、みんなで、、、しまふから容易に、、が擧らない。彼等には彼等自身の世界と法律があるから、無意識に治外法權を主張するのである。彼等の社會と、他の社會とはまるつきり別なものだといふ觀念が强くこびりついてゐて、彼等も、そしてまた世間でもこの「貧民窟」の人間を特殊なものに取り扱つて不思議に感じてゐない。

千軒長屋には種々雜多な人間がゐる。「、、、」も居れば「ヒロイ」もゐる。が、こゝの區域だけでは決して盜みも掏摸ひもしない。こゝの長屋から追ひ立てられるのを恐れるからであり、また彼等の特別な道義心からでもあらう。

それから貧民窟とさへ言へば、まるで不潔の代名詞のやうに呼ばれてゐるが、しかし不潔なのは下水の設備や建物の不完全なのが原因で、貧民窟の女くらゐ洗濯と下水の掃除をコマメによくやる女房はない。組や順番を作つて、毎日のやうに便所と下水の掃除をしてゐる。若し三日も放つたらかして置いたら、五軒に一つの便所は踏みどころもない位ゐに汚れてしまふであらうし、下水のドブは溢れて臺所の下駄を浚つてしまふ。

生身の體を資本に働いてゐる彼等は、世間の想像以上に病氣を恐れる。神經過敏であると思はれる位ゐに、衞生思想をもつてゐる。ボロを纏ひ、素足で歩き、安物を買つて喰ふ外觀から想像すれば、甚だ非衞生的に考へられるが、しかし彼等は決してさうではない。食物には注意するし、病氣の豫防にも心掛けてゐる。この千軒長屋では、こゝ五年間一人の流行病患者が出なかつたと言はるのでも明かだ。流行病は反對に、山ノ手方面から毎年のやうに發生するから皮肉だ。

王子の酵素會社の附近に「お助け長屋」といふのがある。王子町の肉屋である松下留三郎といふ特志家がもつてゐる長屋であるが、こゝの長屋を借りる條件は、第一に衞生に氣をつけること、それから喧嘩口論をしないことである。

また貧民窟の最も美しい特長は、お互が非常に親密で人情に厚い點であらう。この點は他の社會には見られない、最も美しい習慣である。長屋全體と同時に貧民窟の全體が、一つの大きな共同生活であるから、お互が何事にも結束して起ち、一人の不幸には共同の責任を分ち合つて行くのだ。こゝでは氣心のよくないもの、性質の悪い人間は直ぐに擯き出されてしまふ。またこゝに永く住まうと思へば、隣近所から憎まれては一日も住めない。長屋は壁一重の仕切だけであるし、水道も便所も物干竿も凡てが共同であるから、必然に仲よく長屋のつき合ひをしなければ住んでゐられなくなるのである。

誰もがその日その日を働かなければ、食つて行けない人間の集りであるから、女房が病氣で亭主が出掛けて留守にしても、隣の女房が看病してくれるし、身寄のない老人が死ねば長屋中で葬つてくれる。

『誰のためでもない、お互のためと、自分のためでさあ……。』と、彼等は言ふ。全く彼等は順番にお互の世話になつて、安らかに死んで行くのだ。――その心持が誰の胸にも強く生きてゐるのだ。

貧民窟！　これは人生の敗殘者の群團であり、社會の落伍者の最後の世界であることに間違ひはない。しかし社會のあらゆる壓迫に虐げられ、生活の困苦に押しつぶされた人々が、最後に、そして必死の努力で守り得たものが、この千軒長屋の部落であると思ふと、私は不思議な感激に衝たれる。――

どこの貧民窟にも必らず一、二の社會事業家やキリスト教徒が入り込んで、貧民の救濟と教化に努力してゐる。この三河島の千軒長屋にも鈴木益平氏がある。

大島の牧場主から一念發起して、裸一貫でこの千軒長屋に飛び込んで來たキリスト信者で、熱烈な社會淨化の理想を說いて、六年間をこゝで惡戰苦鬪して來た人物である。現に町民から推されて三河島町の町會議員である。そして「淨化團」を組織して、專ら貧民の教化事業に盡されてゐると聞いてゐる。

しかし私はこれらの熱烈な信仰家のあらゆる努力にかゝはらず、貧民の救濟と、及び貧民の教化事業のすべては徒勞であると思ふ。何故ならば、彼等のすべては資本主義社會の組織に堪へ得ないで、貧民窟

に落ちぶれて來た人々であり、また同時に彼等の生きるための最後の世界がこの貧民窟であつたから。そしてこゝの社會を除いて、勞働の不能者、老廢者、白痴、失業者の群れが、恥も外聞も見榮もなしに他に生き得られる場所がないからである。

彼等はこの場所を捨てゝ、資本主義社會の何處にも行くところがない。、、、、、、が存續する限りに於て、、、、、は殖え、千軒長屋はいよいよ擴大するばかりである。

最近この千軒長屋は東京府に買收されて、近代的なアパートになるさうだ。現に最惡の長屋から順々に取拂はれてゐるが、しかし移轉問題と立退料の問題で大ぶんに紛糾してゐると聞く。小商人は商賣があがつてしまふし、五階六階の建物になつたのでは長屋に住み馴れた人間には不自由でならない。猿江裏の貧民窟もアパートになつたが、住民の不平は絶えないやうだ。昔し通りの住みよい、暮しよい習慣が破壊されて、生活が困難なものになつてゐるから無理がない。それは爲政者が貧民窟を掃蕩するのが根本の目的で、彼等の生活に根ざした生活を改善するための施設ではないからである。貧民窟を追はれた彼等は、アパートへ入らないで別の土地へ逃げて行く。そしてそこで彼等は新らしい貧民窟の建設を始める。何んと大きな皮肉ではないか！

三河島の千軒長屋のうち八百五六十軒は、三河島建物興産株式會社の所有である。この會社の、、は、、、、、と稱する大山カンで、強慾非道な家主である。十四五年前に坪一錢五厘の沼地を買ひあげて、こゝに千軒長屋を建てたのであるが、貧民救濟に名をかたつて今日に至るまで莫大な脱税を企てゝゐた事實が暴露して、最近大きな醜聞になつてゐる。私はこの問題にも觸れたいと思つたが、紙數がないから省略して別の機會に割愛する。

新刊紹介

◇**カール・マルクス**（ラスキ著、服部辨之助譯、原著者はロンドン大學の教授、マルクス及びマルクシズムの一批判書で、殊に著者の立場からマルクス主義の誤謬の判示が目立つ。譯筆は杉森孝次郎氏の推奬するところ、東京麹町内幸町内幸ビル、理想社、價七十錢）

◇**プロレタリア意識の下に**（田邊一予歌集、無産者歌人叢書の一、病中吟の悲痛をとる、東京本郷森川町一、紅玉堂、價五十錢）

◇**ロシヤ大革命の前夜**（大竹博吉監輯・ロシア大革命の裏面史譯選輯の第四輯、東京麹町内幸町一ノ五ロシア問題研究所、價三圓）

◇**戰爭の生物學**（山本宣治全集第一卷）**産兒調節論**（同上第六卷）前者は獨逸の非戰論者ニコライの名著の譯で五百三十頁定價二圓、後者は無産者的立場から産兒調節を平易に高調したもの、定價一圓五十錢、東京本郷湯島ロゴス書院發行）



私の性質に就いて

藤田嗣治

私は明治十九年、東京の牛込の側の江戸川の大曲で生れました。連日の雨で、川の水が増して、庭の金魚等が流されたのを未だ覺えてゐます。

たつた昨晩、岡田の八千代さんから耳にしたお話ですが、丁度其の後新小川町に住んでゐた時分、従妹の八千代さんが、私の額に鋏をつき立てたので、大變家のものに叱られたさうです。又、家のものが、私を鴨居にぶら下るやうにしたので、小さい手でしつかりつかまつて居ればいゝものを、つい手離したため、落下して私の口が横に裂けて、二針許り縫つたことがありました。これは私も覺えて居ります。そういふ場合、私は餘りワイ〳〵泣きませんでした。痩せ我慢が強かつたので御座いませう。

女姉妹の中に生れた私の父は、また女の兒を二人續けてさづかりました。三番目に男の子が生れました。これが私の兄で御座います。女ばかりの家庭で、私の兄は非常に大事にされ、實のところ、甘やかに育てられました。その翌年生れた私は男の子ですが、もう後繼の御用もないので、兄とは變つて、別に大事にはされませんでした。父が灣に勤めに向ひましたので、兄は母、私は祖父母に育てられました。おぢいさん子でありました。

お祖父さんは綿密家で、えらく器用な性でしたので、その側で、それを見眞似に私もしたのでせうか、或は血つながりの理けでしたか、私も器用でした。兄がお客さまから戴いた玩具などを欲しいとは申しませんで、そつと見て置いて、自分でそのやうなものを作りました。玩具は皆自分で作りました。

始終木の上に登つて、一人で遊ぶことを覺えました。高い所へ、誰も來られないのを非常に喜んで、上から又高い天許り眺めてゐました。學校へ行つても、また木登りで、先生からお叱言を頂いて居りました。斯うして、一人で樂んだり、苦るしんだりして、氣にもせずに居りました。

四つの頃から畫を白紙の上に書き始めました。一本の線でも自分が書き損つたと思ふと、再びなぞるのが嫌ひで、紙をすぐ取り替へました。その反古紙でお祖父さんは、家の會計の出入帳とか、住所名簿とかを作つてをりました。眞黒になつて遊んでゐた時分でも、紙の上だ

けは清れいなものを望んでゐたらしいのです。

服裝が美しい譯であつたか、海軍大將には直ぐにでもなりたかつたので、繪は勿論、軍艦を澤山畫きました。間もなく、手妻師を見てから、手妻師になりたくなり、いろいろ手妻を工夫し考へて、家内の人人を驚かしたりして樂しんで居りました。

よく考へて見ますと、小さい時からの性質が、今でも殘つて居ります。たとへ人前で、ハイ左樣ですと言つて、同意を稱へても、腹の中では反對して自信した通りを守つて、決して他人に影響されぬ氣分です。それは手の筋にまで現れてゐるさうです。

口論辯解も大嫌ひですし、人の惡口を云ふことも、羨望と言ふことも知らず、人は人、俺れは俺れといふことだけで、一人で生きることを知つて居ります。世間と全く別交渉です。おとなしい性質のやうですが、その實、怒る時は自分でも恐ろしいと思ふほど、非常に怒りまして、人も殺し兼ねない相で、又人殺しの線も手相にあるとのこと故、非常に自分で氣を付けてゐます。一生に一二度は怒り度いものですが、えらい敵打ちの樣なことになるだらうと考へて、その時毎に忍耐して、他日を待つて居ります。忍耐力は人の何倍もあります。だから喜んで苦るしいことを探して居ります。樂しみといふことをのぞまぬ性です。尤も必要なサンシビリチーは、極度と言つていゝ樣に鋭いと人に言はれもし、自分も信じてゐます。そして意志を佛蘭西で充分に養成したので、ボロンテとサンシビリチーと相待つて行くと、非常な仕事も出來る譯となつた樣です。

自分を研究して自分を知る事が非常に大事なのです。餘りお人が好すぎて丸い人よりも、腹に一物あつて、一癖ある人の方が、何か一仕事しでかす樣です。

新刊紹介

◇**唯物論史中卷**（フリイドリヒ・アルバアト・ランゲ著・川合貞一譯補・さきに上卷を出した續篇で第四篇十八世紀の唯物論、第二卷カント以後の唯物論史に入り近世哲學自然哲學に及ぶ大著の好評である。東京日本橋區通二丁目丸善株式會社・價五圓參拾錢）

◇**新興川柳論**（田中五呂八著・小樽市稲穗町東一丁目七・川柳氷原社・定價壹圓二十錢）

◇**閃光**（詩集社同人の詩華集・東京市外野方町上沼袋七三・詩集社發行・定價壹圓）

◇**土の上・水の上**（櫻井忠溫著・歐洲旅行記「蛙がノコノコと諸國を這ひ廻り、レンズに收めたフイルムがこの『土の上・水の上』です。」――著者序文の一節。東京京橋南紺屋町實業之日本社・定價貳圓）

◇**英國勞働黨のイデオロギー**（河合榮治郎著・東京京橋第一相互館千倉書房・價五十錢）

◇**文學理論の諸問題**（平林初之輔著・最近三年間に發表された著者の文藝論集、日本文壇の主要な文學理論問題は殆んど殘らず取り上げられてゐる。發行所同前・價一圓八十錢）

ミハレフスキイ著◇荒川實藏譯

經濟學入門

四六判上製

定價壹圓八十錢

送料二十二錢

最新刊

マルクス主義の立場から書かれた經濟學入門で、原書は勞農露國の諸學校で廣く用ゐられてゐる評判の名著。價値貨幣剩餘價値等經濟學上の重要理論を學ぶに先だち、實際問題によりて十分な豫備知識を與へ、幾多の繪畫圖表によりて興味を惹き理解を助ける等、初めて經濟學を學ばんとする人々にとつて間然する所なき入門書であり、一般研究者にとつては最新最良の新興經濟學解說書である。譯文は內容と相俟つて平易明快である。

上篇實際の部　(一)資本家的社會に於ける生產　(二)勞働力　(三)經營主　(四)貨幣及び信用　(五)商業

下篇理論の部　(六)價値　(七)貨幣　(八)剩餘價値　(九)利潤、生產價格　(十)地代　(十一)勞働賃銀　(十二)資本家的蓄積と恐慌　(十三)資本主義の成熟と崩壞　(附)索引

ブルガコフ著
島野三郎譯

經濟哲學

(四六判上製 クロース)

定價貳圓五十錢

送料廿二錢

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

豫約出版

ゴーリキイ全集

全廿四卷

一册壹圓貳拾錢

ロシアでゴーリキイは どんなに讀まれてゐるか

現代露西亞の讀者にとつて、ゴーリキイは絶大な感化力と[illegible]とを持つてゐる。この事實を何よりも雄辯に語つてゐるのは、ゴーリキイの作品に關する圖書館の閲覽統計である。レニングラード市立中央圖書館の統計に依れば、その所藏する書籍の著者二千七百人の內、多少とも讀者を有する者は僅かに七百人であり、殘りの二千人は全然讀者の注意の範圍外にある。七百人の中でも毎日讀まれてゐる著者は、僅かに三十八人に過ぎない。此の三十八人の中で、最も大多數の要を見てゐるのはゴーリキイの作だけである。この圖書館で昨年その閲覽者に交附した書籍の統計は、ゴーリキイの作品が一千五百卷、トルストイが七百七十二卷、ドストエーフスキイが五百五十六卷であつた。この數字は、ゴーリキイの作品が總ての讀書階級に最も多く愛讀されてゐることを語るものである。このゴーリキイの千五百卷の閲覽者を更に種別すると、學生九百九十六人、從業員二百三十三人、勞働者百四人である。しかしこれは中央圖書館の統計であつて、市外もしくは場末の勞働區域になると、勞働者の數が遙かに増して來る。更に又、レニングラードの金屬工組合の文化部で特に六人の大文豪に就いて調べた結果によると、金屬工の間で最も多く愛讀されてゐるのは、矢張りゴーリキイが第一位で、その次がトルストイであつた。更に千九十四人の金屬工に就いて、ゴーリキイの作品中特にその愛讀書の回答を募つたところ、『母』の愛讀者五百三十四人、『幼年時代』が四百三十七人、短篇集が三百八十七人、『アルタモノフ家の事件』が三百四十三人、『人々の中』が三百十一人、『フォルマ・ゴルデーエフ』が三百一人、『オクロフ町』が二百二十二人といふ結果を見た。（昇曙夢氏ゴーリキイ評傳）

第三回配本

昇曙夢譯（第四卷）

フォマ・ゴルデーエフ

曾て人間であつた人々

「フォマ・ゴルデーエフ」は翁の最初の長篇傑作として既に世界文壇で定評があり。「曾て人間であつた人々」は翁の壯年時代、最も數奇な生活をした放浪時代に接觸した人々を描いた實錄的傑作である。

配本濟

第一回配本（第七卷）

長岡義夫譯

母

◇

第二回配本（第十九卷）

米川正夫譯

アルタモーノフ一家

附 ゴーリキイ評傳（昇曙夢）

東京芝區愛宕下町
改造社

エミル・ゾラ著・三上於菟吉譯

ゾラ叢書

獸人

第一編

世界文學の白眉・巨人ゾラ傑作中の第一位!!
見よ!絢爛たる愛慾の姿を!熱情を!眞實を!

狂はしい渦捲く情痴の世界である。變態に歪んだ愛慾と血なまぐさい罪惡に混沌と糜爛した頽廢の世界である。あくことのない淫逸、放埓な狂態の限りをつくした生活。見よ!文明の暗黒面に亂舞する「獸人」の赤裸々な一群を!これぞ人間罪業の極だ。しかも、巨人ゾラの絢煥たる筆鋒の奥底に儼として流れる深玄な人道的觀念、彼の魂を生涯燒き焦した人間愛——これらが渾然と融合してこゝに世界的名作としての完璧を示して遺憾ない。

(附錄)エミル・ゾラ略傳

最新刊

四六判・背皮・天金函入
上製五百五十三頁

定價貳圓
送料廿四錢

發行所 改造社
東京芝區愛宕下町
振替東京 四〇二

本庄榮治郎編（最新刊）

日本交通史の研究

菊判上製・天金美本・五七四頁・地圖及寫眞四葉入

定價 參圓五十錢
送料 廿七錢

材を徳川時代の交通制度の特殊的研究に取つた本書は、前人未踏の根本資料に遡つて、克明、詳細にその歴史的發展を探究し、從來の通俗學說に對して忌憚なき批判を加へたる創見的理論の展開である。日本交通史に關する著者夫々の綿密周到なる検討の精華は、附錄日本經濟史文献一覽と共に日本經濟史の一面を覗ふに足る最近の快著である。

目次

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

新刊批評

本庄榮治郎博士編『日本交通史の研究』を讀む

島田孝一

本庄榮治郎博士の編纂に係る『日本交通史の研究』が上梓せられて吾等の机上を飾るやうになつたことは、吾々交通經濟の研究に多少の交渉を有する者にとつて絶大の喜びである。

本庄博士は去る大正十五年度の學年に於て、京都帝國大學の經濟學部内に經濟史の演習を擔任せられることゝなつたのであるが、その場合學生及二三の有志を集め一定の項目に就て先づ學生が參考書から研究したものを報告せしめこれに對して討論をなし批評を行ふと云ふ方法を採用したのである。當時その演習に參加した人々が最近に至つて京都經濟史研究會と云ふものを組織し種種の題目に就て研究を行ひ資料の蒐集にも努力して居られると云ふ、而してその研究によつて生れ出た論文、資料等が學界を益する價値あるものである場合にはこれを同會の紀要として出版することに定められたのである。本書は即ち京都經濟史研究會紀要の第一册として現はれたものである。

本書は菊判で本文四百四十八頁、他に附錄八十一頁を含む。收められた長短九編の論文は總て吾國の交通史に關する研究であつて、而もその殆ど總ては德川時代に於ける交通史に關する論文である。

德川時代はその殆ど全期を通じて鎖國の時代であつた。從て對外的交通は吾國として見るべきものは尠いのであるが、國内の交通は參覲交代の制度の存在の爲に、或は江戸と上方との兩中心地を連絡する必要の爲に次第に發達し來つたのは疑を容れない事實である。而して一方陸上交通の分量が増加するに從て常備の人馬を以てしたのでは到底交通需要に應じ能はざる場合も生ずるのであるから、かゝる場合に近郷の村落から人馬を徴發することが行はれたのであつてこれが助郷の制度である。本書に收められた大山敷太郎氏の『助郷と農民生活』黒羽兵治郎氏の『草津宿の助郷に就て』及び『明治政府の助郷政策』黒正巖博士の『助郷に基く農民の紛爭』井筒弄氏の『大垣藩百疋傳馬制度』等は各方面から助郷の制度に對して行はれた研究であつて何れも根本的史料に基く貴重な論文である。又德川幕府は街道の要所に關所を設けて街道を往來する旅客に對して警察的取締を徹底的に行ふことに努めたものであるが大山敷太郎氏の論文『姫街道の研究、附、氣賀の關所について』は本街道を離れ婦女子の多く往來する裏道の上に設けられた關所に關する研究である。更に

又徳川時代は前述の如く對外的交通の禁止せられて居た時代であるから水上交通としては內水路又は沿岸航路の上に於てのみ船舶の活動を考へる事が出來たに過ぎない。國內の諸河川は次第に浚渫又は開鑿が行はれたのであるが又同時に幕府は軍事的又は警察的取締の爲に殊更に橋梁を架せず渡し船又は徒涉によつて河川を横斷せしめた場合は尠くない。東海道の大井川の如きはその代表的場合である。平松弘氏の『大井川步涉越制度』はこの徒涉に關する研究である。徳川時代の沿岸航海のあるものは廻船と稱して定期航海の形式を備へるまでに發達して居たのであるが、この時代の末期卽ち弘化時代以後には綿番船、酒番船の如きが發達し荷主はその船舶の速力の大なることを欲して止まざる狀態を現出した。和田篤憲氏の『番船と新酒取引の慣例』は主として西宮を中心とする酒番船に關する研究である。本書に收められた論文が右の如く徳川時代を中心とする關係に編者本庄博士は『徳川時代の交通概觀』と云ふ論文を掲げて同時代に於ける交通の概況を示して居られる。

以上の如く本書は主として徳川時代の交通に關して實蹟を踏査し、文獻を蒐集する等總て實證的研究を基礎としこれによつて當時の交通狀態を檢討し隨所に卓見を示して居るのであつて、編者が企てた目的意識たる日本交通史の研究の一部は本書に於て充分の成功を收めたものと見ることが出來る。徳川時代の交通に密接の關係を有する『傳馬』『宿』『關所』『助郷』『廻船』等の研究は本書によつて一段の進步を示すことになつたのは疑を容れない。而も史料の正確にして豐富なる點、從來比較的等閑に附せられて居た問題を綜合せる點等に對しては滿腔の敬意を拂ふと共に學徒の好參考書として推奬せらるべきものであると信ずる。且卷末に附せられた凡そ八十頁に亘る附錄――『昭和二年及び三年に於ける日本經濟史文獻一覽』――は本庄博士著『日本經濟史文獻』正編及び續編に續くものとして本邦經濟史の研究者を益することの僅少でないのを思はせる。筆者は玆に於て曾てペンシルヴエニア大學に在學の當時ジヨンソン教授を中心として十數名の學生が交通經濟學上の諸問題について報告し批評しあうた當時の愉快な光景を想起せざるを得ない。眞の意味に於ける大學生たる氣持を味ふ爲には適當の指導教授の下に各自が一定の題目について研究しこれについて忌憚なき批評を加へるのを以て第一とすると共に研究上の效果を大ならしめ且充分の興味を有し得るものと信ずる。本書の編者本庄博士も亦京都帝國大學經濟學部に於ける經濟史の演習が教授と學生との間に、又學生相互の間に如何に親密の度を高め、研究心を旺盛ならしめたかを述べて居られる。本書が此の如き研究及び談笑の中から生れ出たことは特に興味深いものである。然しながら日本交通史の研究はこれによつて盡きたと云ふわけではない。これを機會に將來益〻この方面の研究の進められることを希望して止まないも

のである。（一九二九・一〇・七）（東京市芝區愛宕下町四ノ六改造社發行・定價參圓五十錢）

北原白秋氏著
詩集『海豹と雲』

日夏耿之介

北原白秋君から貰つた詩集「海豹と雲」を評せと頼まれたが、非常に素晴らしいか、非道く拙惡かでなければ批評などするものではないので、紹介的批評なら詩壇その人に乏しからぬ樣だが、引受けた後で理屈は愚であるから、自分の文學史的觀點に立つた感想を述べる。

北原君も隨分と長い事詩作をつゞけてゐるが、この集で見ると未だ大いに迷つてゐるやうだ、而も、英姿颯爽として迷つてゐるやうだ。元來が形から這入る北原君だから（念の爲にことはるが、この文句は說明で、輕視ではない。）さかんにポウズを作る。ピタリと極まれば、知人並に喜ぶのだが殘念乍ら昭和四年の北原君を髣髴させるポウズは作つてくれて居らぬ。

「觀想の秋」では（その後何か詩集があつたやうだが失念した）寂に淨まらうと構へたが、かなりな所で橫に外れて了つた。而も、こんな所は同君の內心にとつてはウソの少い所であるから、今度の集の「月夜孟宗の圖」にもその詩境を覗つてゐるが、かへつて「觀想の秋」時代よりも佳くない。「冬眠」の章にもそんな感情が溢いてゐるが、こゝにも佳篇は一つもない。「風を祭る」章の「鋼鐵風景」の如きは空疎な內容を外形の建築によつて重厚ならしめんとして完全に失敗した作である。こんなトリツクは今の青臭い少年詩人の最新派體にはウンとあるが、北原君がこんな幼稚な企てに低迷してゐるとは慮外である。

元來が、わざと形式に倚りかゝり、泥み、もて扱ひ、寧ろ一言にして言へば玩弄してゐるその間に、漂渺たる詩念の風趣が自ら泛び上ると言つたところに北原君の身上があるのだが、それにはドツシリ構へて彫心鏤骨しなくてはダメだ。北原君は切りに風韻の神とか苦吟の傷眼とかいふ言葉を序文で連發してゐるが、內容を見ると全然裏腹である。空疎な虛喝に終つてゐる。華美な生活を止めて武藏野の茅舍へでも引込まなくては、觀想の冬を迎へる事は出來ない。この苦言をひとつ是非肯いて貰はう。まともから物申して怒る人物とも思はぬから序乍ら言つてをくのである。「父と母」の古調は畢竟三十年前の清白に如かぬ。「海豹と雲」の章は皆詩魂がさら〳〵と浮いてゐてわるい。「五月の夜の空」も二昔前に露風や柳虹や東明が拙劣な試作をした「印象詩」の拙なる再說である。リフレエンは大概坪がはづれてゐる。「月光の谿」「螢に」のそれが例だ。「われは見き」の終二行にも北原式鬼面嚇人がある。

要するに八年初めて世に問ふ物としては預言的何の迫力もない。たゞ「童話の月」

法人の普通所得といふのは各事業年度の總益金から總損金を控除したものである。法人の普通所得が當該事業年度の資本金額に對し年百分の十の割合を以て算出した金額を超過するときは、其の超過金額を以て法人の超過所得とする。法人が解散した場合に於て其の殘餘財産の價額が、解散當時の拂込株式金額又は出資金額を超過するときは、其の超過金額を以て法人の淸算所得とする。

第二種の所得に對する稅率は前述(ロ)の中公債の利子に付ては百分の四、其の他に付ては百分の五、(ハ)に付ては百分の七半である。

第三種の所得に對する所得稅は所得金額を次の各級に區分し遞次に各稅率を適用して之を賦課する。

千二百圓以下の金額	百分の〇・八
千二百圓を超ゆる金額	百分の二
千五百圓を超ゆる金額	百分の三
…………	…………
四百萬圓を超ゆる金額	百分の三十六

尤も第三種の所得は千二百圓に滿たないときには所得稅を課せないのである。

(二) 地租(年收約七千百萬圓)

地租を納める義務のある者は(一)質權の目的たる土地に付ては質權者(二)百年より長い存續期間の定ある地上權の目的たる土地に付ては地上權者 (三)其の他の土地に付ては所有者である。

地租の稅率は宅地に付ては地價百分の二半田畑に付ては百分の四半、其の他の土地に付ては百分の五半である。但し北海道に於ける宅地以外の土地の地租は當分左の稅率に依ることになつて居る。卽田畑に付いては百分の三、二、其の他の土地に付いては百分の四である。地價といふのは土地臺帳に揭げてある價額で、明治初年に日本全國に亘つて調査して決定したものである。尤も宅地に付ては明治四十三年に全國に亘つて地價を修正した。

地租を免除せられる土地は次の如くである(一)國府縣市町村其の他勅令を以て指定する公共團體(例へば水利組合)に於て公用又は公共の用に供する土地(但し借料を取つて貸付けてある土地は此の限でない)(二)府縣市町村其の他勅令を以て指定する公共團體が公用又は公共の用に供すべきものと定めた其の所有地(但し一年内に公用又は公共の用に供しないときは此の限でない)(三)府縣社地、鄕村社地、招魂社地(但し借料を取つて貸付けてある土地は此の限でない)(四)墳墓地(五)用惡水路(六)鐵道用地、軌道用地、運河用地(七)保安林(八)公衆の用に供する道路。

(三) 營業收益稅(年收約五千萬圓)

營業收益稅は法人及個人に對してかけるものであるが、法人に付ては日本に本店、支店其の他の營業場を有する營利法人には營業の種類如何を問はず營業收益稅をかける。個人に付ては日本に營業場を有し次に揭げる營業を爲す場合に營業收益稅をかける。(一)物品販賣業(動植物其の他普通に物品と稱しないものの販賣を含む)(二)銀行業(三)無盡業(四)金錢貸付業(五)物品貸付業(物品の意味は(一)と同一である)(六)製造業(瓦斯電氣の供給、物品の加工修理を含む)(七)運送業(運送取扱を含

む）(八)倉庫業(九)請負業(十)印刷業(十一)出版業(十二)寫眞業(十三)席貸業(十四)旅人宿業（下宿を含み木賃宿を含まず）(十五)料理店業(十六)周旋業(十七)代理業(十八)仲立業(十九)問屋業。

營業收益稅は營業の純益に付之を賦課するのであるが、法人の純益は各事業年度の總益金から總損金を控除した金額に依り、個人の純益は前年中の總收入金額から必要の經費を控除した金額に依る。個人の純益金額四百圓に滿たないときは營業收益稅をかけない。又次に揭げる營業の純益には營業收益稅をかけない、(一)政府の發行する印紙切手類の賣捌(二)度量衡の製作(三)自己の採堀し又は採取した鑛物の販賣(四)新聞紙法に依る出版(五)外國に在る營業場に於て爲す營業(六)法人の漁業又は演劇興行(七)個人の自己の收穫した農產物、林產物、畜產物若くは水產物の販賣又は之を原料とする製造（但し特に營業場を設けて爲す販賣又は製造を除く）。

營業收益稅の稅率は法人に付て百分の三・六、個人に付て百分の二・八である。

(四) 資本利子稅（年收約千五百圓）

資本利子稅は日本に於て資本利子の支拂を受ける者にかけられるので、資本利子稅をかけられる資本利子は次のものである。甲種は公債、社債、產業債券若は銀行預金の利子又は貸付信託の利益で、乙種は第三種の所得に付納稅義務を有する者の第三種の所得中營業に非ざる貸金又は預金の利子である。資本利子の計算は甲種に付ては支拂を受くべき金額に依り、乙種に付ては前年中の收入金額に依る。

甲種の資本利子中、次に揭げるものは資本利子稅をかけない、(一)所得稅法其の他の法律に依り第二種所得稅をかけられない者の支拂を受ける利子（例へば北海道府縣市町村其の他命令を以て指定する公共團體、神社、寺院、祠宇、佛堂及民法第三十四條に依り設立した法人には所得稅をかけない）(二)貯蓄債券又は復興貯蓄債券の利子。

資本利子稅の稅率は資本利子金額の百分の二である。

(五) 相續稅（年收約二千萬圓）

日本に在る財產に付て相續が開始したときには、開始地が日本に在ると否とを問はず、又被相續人若くは相續人が日本臣民たると否とを問はず、相續稅をかける。尤も被相續人が日本に住所を持つて居るときは次に揭げる(一)(二)(三)の財產に相續稅をかけるが、住所を持つて居らないときは(一)(二)のみにかける。(一)日本に在る動產及不動產(二)日本に在る不動產の上に存する權利(三)其の他の財產權。

相續財產の價格は相續開始の時の價格に依るのであるが、課稅價格が家督相續に在つては五千圓、遺產相續に在つては千圓に滿たないときは相續稅をかけない。軍人軍屬の戰死又は戰爭の爲受けた傷痍疾病に起因した死亡に因り相續開始した時は相續稅をかけない。

相續稅は課稅價格を多くの級に區分し、其の各區分に對し相續人の種類に從つて遞次に各稅率を適用して之を課する。相續人の種類といふのは、家督相續に在つては(一)相續人が被相續人・家族たる直系卑屬であるときに

相續人が被相續人の指定した者、民法第九八二條に依り選定せられた者、被相續人の家族たる直系尊屬又は入夫であるとき(三)相續人が民法第九八五條に依り選定せられた者であるときの三の場合に依り各税率が違ふ、遺産相續に在つては(一)相續人が直系卑屬であるとき(二)相續人が配偶者又は直系尊屬であるとき(三)相續人が其の他の者であるとき三の場合に依り各税率が違ふ。例へば一萬圓の相續財産の税額は家督相續の(一)の場合に五五圓(二)の場合に六五圓(三)の場合に九〇圓、遺産相續の(一)の場合に一二八圓(二)の場合に一五三圓(三)の場合に二二二圓である。

(六) 登錄税(年收約五千五百萬圓)

登錄税は(一)不動産に關する登記を受けるとき(二)船舶に關する登記を受けるとき(三)鐵道抵當原簿又は軌道抵當原簿に登錄を受けるとき(四)工場財團登記簿、鑛業財團登記簿又は漁業財團登記簿に登記を受けるとき(五)船舶登錄を受けるとき(六)商事會社其の他營利を目的とする法人が登記を受けるとき(七)辯護士名簿に登錄を受けるとき(八)醫師、藥劑師、獸醫、蹄鐵工が官簿に登錄を受けるとき(九)海員が官簿に登錄を受けるとき(十)著作權に關し登錄を受けるとき(十一)特許に關し登錄を受けるとき(十二)意匠に關し登錄を受けるとき(十三)實用新案に關し登錄を受けるとき(十四)商標に關し登錄を受けるとき(十五)鑛業權に關し鑛業原簿に登錄を受けるとき(十六)砂鑛業に關し砂鑛業原簿に登錄を受けるとき(十七)漁業權又は入漁權に關し免許漁業原簿に登錄を受けるときに賦課せられる租税であつて、税率は種々雜多である。

(七) 酒税(年收約二億圓)

日本の酒税は(一)酒造税(二)酒精及酒精含有飲料税(三)麥酒税の三種に分れる。

酒類を製造する者には其の造石數に應じ次の割合を以て造石税をかける、之が酒造税である。第一種、酒精分二十三度以下の濁酒、一石には三十六圓。第二種、酒精分二十三度以下の清酒、白酒及酒精分三十度以下の味淋燒酎、一石に付四十圓。第三種、酒精分三十度を超え四十五度以下の燒酎、一石に付第二種の金額に酒精分三十度を超える一度毎に一圓五十錢を加へた金額(例へば四十五度の燒酎は六十二圓五十錢)。第四種、酒精分二十三度を超える清酒、濁酒、白酒、酒精分三十度を超える味淋及酒精分四十五度を超える燒酎、一石に付酒精分一度毎に一圓八十錢(例へば四十六度の燒酎は八十二圓八十錢)。

酒類といふのは清酒、濁酒、白酒、味淋、燒酎の五種である。酒類を製造しようとする者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者には、一石に付原容量百分中純酒精の容量一箇毎に一圓八十錢の割合を以て、其の石數に應じて造石税をかける、但し一石に付四十二圓の割合を下ることはない、之が酒精及酒精含有飲料税である。尤も葡萄酒及果實酒には酒精含有飲料税をかけない。酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

麥酒(ビール)を製造する者には一石に付二十五圓の割合を以て其の造石數に應じ造石税をかける之が麥酒税である。麥酒を製造しようとする者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

(八) 砂糖消費税(年收約八千萬圓)

內地消費の目的を以て製造場又は保税地域から引取られる砂糖、糖蜜及糖水には砂糖消費税をかける、消費税の割合は次の通である

一 砂糖

第一種 砂糖の色相が和蘭標本第十一號未滿の砂糖

甲 樽入黑糖 百斤に付一圓

乙 樽入白下糖(但し分蜜したもの、白下糖以外の砂糖に加工して製造したもの及全部又は一部の新式機械に依り製造したものを除く) 百斤に付二圓

丙 其の他のもの百斤に付二圓五十錢

第二種 砂糖の色相が和蘭標本第十八號未滿の砂糖 百斤に付五圓

第三種 砂糖の色相が和蘭標本第二十二號未滿の砂糖 百斤に付七圓三十五錢

第四種 砂糖の色相が和蘭標本第二十二號未滿の砂糖 百斤に付八圓三十五錢

第五種 氷砂糖、角砂糖、棒砂糖其の他類似のもの 百斤に付十圓

二 糖蜜

第一種 氷砂糖を製造するときに生ずる糖蜜

甲 糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の七十を超えないもの 百斤に付三圓

乙 其の他のもの 糖分を蔗糖として計算した重量百斤に付 八圓三十五錢

第二種 其の他の糖蜜

甲 糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の六十を超えないもの 百斤に付一圓

乙 其の他のもの百斤に付二圓五十錢

三 糖水 百斤に付七圓三十五錢

(九) 織物消費税(年收約四千萬圓)

織物には織物消費税をかける、但し綿織物にはかけない、綿織物といふのは全重量百分中九十五以上の綿を以て組成し、絹、人造絹金屬絲、金屬箔、漆糸又は漆箔を交ない織物である。織物消費税の税率は織物の價格の百分の十である。

(十) 取引所税(年收約千萬圓)

取引所税には取引所營業税と取引税との二種がある。取引所には賣買手數料の收入金額の百分の十五の割合に依り取引所營業税をかける、但し會員組織の取引所にはかけない。

取引所に於ける賣買取引であつて差金の授受に依つて決濟を爲し得るものには其の賣買の各約定金額に對し次の税率に依り取引税をかける。

第一種 地方債證券又は社債券の賣買取引

甲 七日以內の期限を以て履行期と爲すべき取引に屬するもの 萬分の〇・六

乙 其の他のもの 萬分の一

第二種 有價證券の賣買取引

甲 萬分の一・五

乙 萬分の二・五

第三種 商品の賣買取引 萬分の二・五

國債證券の賣買取引には取引税をかけない。(完) (四、九、一二)

相續人が被相續人の指定した者、民法第九八二條に依り選定せられた者、被相續人の家族たる直系卑屬又は入夫であるとき（三）相續人が民法第九八五條に依り選定せられた者であるときの三の場合に依り各税率が違ふ、遺産相續に在つては（一）相續人が直系卑屬であるとき（二）相續人が配偶者又は直系尊屬であるとき（三）相續人が其の他の者であるとき三の場合に依り各税率が違ふ。例へば一萬圓の相續財産の税額は家督相續の（一）の場合に五五圓（二）の場合に六五圓（三）の場合に九〇圓、遺産相續の（一）の場合に一二八圓（二）の場合に一五三圓（三）の場合二二二圓である。

（六）登錄税（年收約五千五百萬圓）

登錄税は（一）不動産に關する登記を受けるとき（二）船舶に關する登記を受けるとき（三）鐵道抵當原簿又は軌道抵當原簿に登錄を受けるとき（四）工場財團登記簿、鑛業財團登記簿又は漁業財團登記簿に登記を受けるとき（五）船舶の登錄を受けるとき（六）商事會社其の他營利を目的とする法人が登記を受けるとき（七）辯護士名簿に登錄を受けるとき（八）醫師、藥劑師、獸醫、蹄鐵工が官簿に登錄を受けるとき（九）海員が官簿に登錄を受けるとき（十）著作權に關し登錄を受けるとき（十一）特許に關し登錄を受けるとき（十二）意匠に關し登錄を受けるとき（十三）實用新案に關し登錄を受けるとき（十四）商標に關し登錄を受けるとき（十五）鑛業權に關し鑛業原簿に登錄を受けるとき（十六）砂鑛業に關し砂鑛業原簿に登錄を受けるとき（十七）漁業權又は入漁權に關し免許漁業原簿に登錄を受けるときに賦課せられる租税であつて、税率は種々雜多である。

（七）酒税（年收約二億圓）

日本の酒税は（一）酒造税（二）酒精及酒精含有飲料税（三）麥酒税の三種に分れる。

酒類を製造する者には其の造石數に應じ次の割合を以て造石税をかける、之が酒造税である。第一種、酒精分二十三度以下の濁酒、一石には三十六圓。第二種、酒精分二十三度以下の清酒、白酒及酒精分三十度以下の味淋燒酎、一石に付四十圓。第三種、酒精分三十度を超え四十五度以下の燒酎、一石に付第二種の金額に酒精分三十度を超える一度毎に一圓五十錢を加へた金額（例へば四十五度の燒酎は六十二圓五十錢）。第四種、酒精分二十三度を超える清酒、濁酒、白酒、酒精分三十度を超える味淋及酒精分四十五度を超える燒酎、一石に付酒精分一度毎に一圓八十錢（例へば四十六度の燒酎は八十二圓八十錢）。

酒類といふのは清酒、濁酒、白酒、味淋、燒酎の五種である。酒類を製造しようとする者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者には、一石に付原容量百分中純酒精の容量一箇毎に一圓八十錢の割合を以て、其の石數に應じて造石税をかける、但し一石に付四十二圓の割合を下ることはない、之が酒精及酒精含有飲料税である。尤も葡萄酒及果實酒には酒精含有飲料税をかけない。酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

麥酒を製造する者には一石に付二十五圓の割合を以て其の造石數に應じ造石税をかける之が麥酒税である。麥酒を製造しようとする者は製造場一箇所每に政府の免許を受けなければならぬ。

（八）砂糖消費税（年收約八千萬圓）

內地消費の目的を以て製造場又は保税地域から引取られる砂糖、糖蜜及糖水には砂糖消費税をかける、消費税の割合は次の通である

一　砂糖

第一種　砂糖の色相が和蘭標本第十一號未滿の砂糖

甲　樽入黑糖　百斤に付一圓

乙　樽入白下糖（但し分蜜したもの、白下糖以外の砂糖に加工して製造したもの及全部又は一部の新式機械に依り製造したものを除く）　百斤に付二圓

丙　其の他のもの百斤に付二圓五十錢

第二種　砂糖の色相が和蘭標本第十八號未滿の砂糖　百斤に付五圓

第三種　砂糖の色相が和蘭標本第二十一號未滿の砂糖　百斤に付七圓三十五錢

第四種　砂糖の色相が和蘭標本第二十一號未滿の砂糖　百斤に付八圓三十五錢

第五種　氷砂糖、角砂糖、棒砂糖其の他類似のもの　百斤に付十圓

二　糖蜜

第一種　氷砂糖を製造するときに生ずる糖蜜

甲　糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の七十を超えないもの　百斤に付三圓

乙　其の他のもの　糖分を蔗糖として計算した重量百斤に付　八圓三十五錢

第二種　其の他の糖蜜

甲　糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の六十を超えないもの　百斤に付一圓

乙　其の他のもの百斤に付二圓五十錢

三　糖水　百斤に付七圓三十五錢

（九）織物消費税（年收約四千萬圓）

織物には織物消費税をかける、但し綿織物にはかけない、綿織物といふのは全重量百分中九十五以上の綿を以て組成し、絹、人造絹金屬絲、金屬箔、漆糸又は漆箔を交ない織物である。織物消費税の税率は織物の價格の百分の十である。

（十）取引所税（年收約千萬圓）

取引所税には取引所營業税と取引税との二種がある。取引所には賣買手數料の收入金額の百分の十五の割合に依り取引所營業税をかける、但し會員組織の取引所にはかけない。

取引所に於ける賣買取引であつて差金の授受に依つて決濟を爲し得るものには其の賣買の各約定金額に對し次の税率に依り取引税をかける。

第一種　地方債證券又は社債券の賣買取引

甲　七日以內の期限を以て履行期と爲すべき取引に屬するもの　萬分の〇・六

乙　其の他のもの　萬分の一

第二種　有價證券の賣買取引

甲　萬分の一・五

乙　萬分の二・五

第三種　商品の賣買取引萬分の二・五

國債證券の賣買取引には取引税をかけない。（完）

（四、九、一二）

相續人が被相續人の指定した者、民法第九八二條に依り選定せられた者、被相續人の家族たる直系尊屬又は入夫であるとき（三）相續人が民法第九八五條に依り選定せられた者であるときの三の場合に依り各税率が違ふ、遺産相續に在つては（一）相續人が直系卑屬であるとき（二）相續人が配偶者又は直系尊屬であるとき（三）相續人が其の他の者であるとき三の場合に依り各税率が違ふ。例へば一萬圓の相續財産の税額は家督相續の（一）の場合に五五圓（二）の場合に六五圓（三）の場合に九〇圓、遺産相續の（一）の場合に一二八圓（二）の場合に一五三圓（三）の場合二二二圓である。

（六）登錄税（年收約五千五百萬圓）

登錄税は（一）不動産に關する登記を受けるとき（二）船舶に關する登記を受けるとき（三）鐵道抵當原簿又は軌道抵當原簿に登錄を受けるとき（四）工場財團登記簿、鑛業財團登記簿又は漁業財團登記簿に登記を受けるとき（五）船舶の登錄を受けるとき（六）商事會社其の他營利を目的とする法人が登記を受けるとき（七）辯護士名簿に登錄を受けるとき（八）醫師、藥劑師、獸醫、蹄鐵工が官簿に登錄を受けるとき（九）海員が官簿に登錄を受けるとき（十）著作權に關し登錄を受けるとき（十一）特許に關し登錄を受けるとき（十二）意匠に關し登錄を受けるとき（十三）實用新案に關し登錄を受けるとき（十四）商標に關し登錄を受けるとき（十五）鑛業權に關し鑛業原簿に登錄を受けるとき（十六）砂鑛業に關し砂鑛業原簿に登錄を受けるとき（十七）漁業權又は入漁權に關し免許漁業原簿に登錄を受けるときに賦課せられる租税であつて、税率は種々雜多である。

（七）酒税（年收約二億圓）

日本の酒税は（一）酒造税（二）酒精及酒精含有飲料税（三）麥酒税の三種に分れる。

酒類を製造する者には其の造石數に應じ次の割合を以て造石税をかける、之が酒造税である。第一種、酒精分二十三度以下の濁酒、一石には三十六圓。第二種、酒精分二十三度以下の清酒、白酒及酒精分三十度以下の味淋燒酎、一石に付四十圓。第三種、酒精分三十度を超え四十五度以下の燒酎、一石に付第二種の金額に酒精分三十度を超える一度毎に一圓五十錢を加へた金額（例へば四十五度の燒酎は六十二圓五十錢）。第四種、酒精分二十三度を超える清酒、濁酒、白酒、酒精分三十度を超える味淋及酒精分四十五度を超える燒酎、一石に付酒精分一度毎に一圓八十錢（例へば四十六度の燒酎は八十二圓八十錢）。

酒類といふのは清酒、濁酒、白酒、味淋、燒酎の五種である。酒類を製造しようとする者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者には、一石に付原容量百分中純酒精の容量一箇毎に一圓八十錢の割合を以て、其の石數に應じて造石税をかける、但し一石に付四十二圓の割合を下ることはない、之が酒精及酒精含有飲料税である。尤も葡萄酒及果實酒には酒精含有飲料税をかけない。酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

麥酒（ビール）を製造する者には一石に付二十五圓の割合を以て其の造石數に應じ造石税をかける之が麥酒税である。麥酒を製造しようとする者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

（八）砂糖消費税（年收約八千萬圓）

內地消費の目的を以て製造場又は保税地域から引取られる砂糖、糖蜜及糖水には砂糖消費税をかける、消費税の割合は次の通である

一　砂糖

第一種　砂糖の色相が和蘭標本第十一號未滿の砂糖

甲　樽入黑糖　百斤に付一圓

乙　樽入白下糖（且し分蜜したもの、白下糖以外の砂糖に加工して製造したもの及全部又は一部の新式機械に依り製造したものを除く）　百斤に付二圓

丙　其の他のもの百斤に付二圓五十錢

第二種　砂糖の色相が和蘭標本第十八號未滿の砂糖　百斤に付五圓

第三種　砂糖の色相が和蘭標本第二十二號未滿の砂糖　百斤に付七圓三十五錢

第四種　砂糖の色相が和蘭標本第二十二號未滿の砂糖　百斤に付八圓三十五錢

第五種　氷砂糖、角砂糖、棒砂糖其の他類似のもの　百斤に付十圓

二　糖蜜

第一種　氷砂糖を製造するときに生ずる糖蜜

甲　糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の七十を超えないもの　百斤に付三圓

乙　其の他のもの　糖分を蔗糖として計算した重量百斤に付　八圓三十五錢

第二種　其の他の糖蜜

甲　糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の六十を超えないもの　百斤に付一圓

乙　其の他のもの百斤に付二圓五十錢

三　糖水　百斤に付七圓三十五錢

（九）織物消費税（年收約四千萬圓）

織物には織物消費税をかける、但し綿織物にはかけない、綿織物といふのは全重量百分中九十五以上の綿を以て組成し、絹、人造絹金屬絲、金屬箔、漆糸又は漆箔を交ない織物である。織物消費税の税率は織物の價格の百分の十である。

（十）取引所税（年收約千萬圓）

取引所税には取引所營業税と取引税との二種がある。取引所には賣買手數料の收入金額の百分の十五の割合に依り取引所營業税をかける、但し會員組織の取引所にはかけない。

取引所に於ける賣買取引であつて差金の授受に依つて決濟を爲し得るものには其の賣買の各約定金額に對し次の税率に依り取引税をかける。

第一種　地方債證券又は社債券の賣買取引

甲　七日以內の期限を以て履行期と爲すべき取引に屬するもの　萬分の〇・六

乙　其の他のもの　萬分の一

第二種　有價證券の賣買取引

甲　萬分の一・五

乙　萬分の二・五

第三種　商品の賣買取引萬分の二・五

國債證券の賣買取引には取引税をかけない。（完）

（四、九、一二）

相續人が被相續人の指定した者、民法第九八二條に依り選定せられた者、被相續人の家族たる直屬尊屬又は入夫であるとき（三）相續人が民法第九八五條に依り選定せられた者であるときの三の場合に依り各稅率が違ふ、遺產相續に在つては（一）相續人が直系卑屬であるとき（二）相續人が配偶者又は直系尊屬であるとき（三）相續人が其の他の者であるとき三の場合に依り各稅率が違ふ。例へば一萬圓の相續財產の稅額は家督相續の（一）の場合に五五圓（二）の場合に六五圓（三）の場合に九〇圓、遺產相續の（一）の場合に一二八圓（二）の場合に一五三圓（三）の場合二二二圓である。

（六）登錄稅（年收約五千五百萬圓）

登錄稅は（一）不動產に關する登記を受けるとき（二）船舶に關する登記を受けるとき（三）鐵道抵當原簿又は軌道抵當原簿に登錄を受けるとき（四）工場財團登記簿、鑛業財團登記簿又は漁業財團登記簿に登記を受けるとき（五）船舶の登錄を受けるとき（六）商事會社其の他營利を目的とする法人が登記を受けるとき（七）辯護士名簿に登錄を受けるとき（八）醫師、藥劑師、獸醫、蹄鐵工が官簿に登錄を受けるとき（九）海員が官簿に登錄を受けるとき（十）著作權に關し登錄を受けるとき（十一）特許に關し登錄を受けるとき（十二）意匠に關し登錄を受けるとき（十三）實用新案に關し登錄を受けるとき（十四）商標に關し登錄を受けるとき（十五）鑛業權に關し鑛業原簿に登錄を受けるとき（十六）砂鑛業に關し砂鑛業原簿に登錄を受けるとき（十七）漁業權又は入漁權に關し免許漁業原簿に登錄を受けるときに賦課せられる租稅であつて、稅率は種々雜多である。

（七）酒稅（年收約二億圓）

日本の酒稅は（一）酒造稅（二）酒精及酒精含有飲料稅（三）麥酒稅の三種に分れる。

酒類を製造する者には其の造石數に應じ次の割合を以て造石稅をかける、之が酒造稅である。第一種、酒精分二十三度以下の濁酒、一石には三十六圓。第二種、酒精分二十三度以下の淸酒、白酒及酒精分三十度以下の味淋燒酎、一石に付四十圓。第三種、酒精分三十度を超え四十五度以下の燒酎、一石に付第二種の金額に酒精分三十度を超える一度毎に一圓五十錢を加へた金額（例へば四十五度の燒酎は六十二圓五十錢）。第四種、酒精分二十三度を超える淸酒、濁酒、白酒、酒精分三十度を超える味淋及酒精分四十五度を超える燒酎、一石に付酒精分一度毎に一圓八十錢（例へば四十六度の燒酎は八十二圓八十錢）。

酒類といふのは淸酒、濁酒、白酒、味淋、燒酎の五種である。酒類を製造しようとする者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者には、一石に付原容量百分中純酒精の容量一箇每に一圓八十錢の割合を以て、其の石數に應じて造石稅をかける、但し一石に付四十二圓の割合を下ることはない、之が酒精及酒精含有飲料稅である。尤も葡萄酒及果實酒には酒精含有飲料稅をかけない。酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者は製造場一箇所每に政府の免許を受けなければならぬ。

麥酒（ビール）を製造する者には一石に付二十五圓の割合を以て其の造石數に應じ造石稅をかける之が麥酒稅である。麥酒を製造しようとする者は製造場一箇所每に政府の免許を受けなければならぬ。

（八） 砂糖消費稅（年收約八千萬圓）

內地消費の目的を以て製造場又は保稅地域から引取られる砂糖、糖蜜及糖水には砂糖消費稅をかける、消費稅の割合は次の通である

一 砂糖

第一種 砂糖の色相が和蘭標本第十一號未滿の砂糖

甲 樽入黑糖 百斤に付一圓

乙 樽入白下糖（但し分蜜したもの、白下糖以外の砂糖に加工して製造したもの及全部又は一部の新式機械に依り製造したものを除く） 百斤に付二圓

丙 其の他のもの百斤に付二圓五十錢

第二種 砂糖の色相が和蘭標本第十八號未滿の砂糖 百斤に付五圓

第三種 砂糖の色相が和蘭標本第二十一號未滿の砂糖 百斤に付七圓三十五錢

第四種 砂糖の色相が和蘭標本第二十二號未滿の砂糖 百斤に付八圓三十五錢

第五種 氷砂糖、角砂糖、棒砂糖其の他類似のもの 百斤に付十圓

二 糖蜜

第一種 氷砂糖を製造するときに生ずる糖蜜

甲 糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の七十を超えないもの 百斤に付三圓

乙 其の他のもの 糖分を蔗糖として計算した重量百斤に付 八圓三十五錢

第二種 其の他の糖蜜

甲 糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の六十を超えないもの 百斤に付一圓

乙 其の他のもの百斤に付二圓五十錢

三 糖水 百斤に付七圓三十五錢

（九） 織物消費稅（年收約四千萬圓）

織物には織物消費稅をかける、但し綿織物にはかけない、綿織物といふのは全重量百分中九十五以上の綿を以て組成し、絹、人造絹金屬絲、金屬箔、漆糸又は漆箔を交へない織物である。織物消費稅の稅率は織物の價格の百分の十である。

（十） 取引所稅（年收約千萬圓）

取引所稅には取引所營業稅と取引稅との二種がある。取引所には賣買手數料の收入金額の百分の十五の割合に依り取引所營業稅をかける、但し會員組織の取引所にはかけない。

取引所に於ける賣買取引であつて差金の授受に依つて決濟を爲し得るものには其の賣買の各約定金額に對し次の稅率に依り取引稅をかける。

第一種 地方債證券又は社債券の賣買取引

甲 七日以內の期限を以て履行期[illegible]すべき取引に屬するもの 萬分の〇・六

乙 其の他のもの 萬分の一

第二種 有價證券の賣買取引

甲 萬分の一・五

乙 萬分の二・五

第三種 商品の賣買取引萬分の二・五

國債證券の賣買取引には取引稅をかけない。（完）

（四、九、一二）

稻田派ならでは見られない人物である。

その他、左は×××××の最高幹部の一人で、去年の大檢擧に際して×××の××××に成功したが、最近××で××されて××に××されて來た×××から、右は舊日本農民黨の指導者で、最近無産階級運動から完全に追放された平野力三にいたるまで、わが社會思想界を代表する各派の首腦部が、ほとんどすべて早稻田系の人々によつて形成せられてゐるといふ事實は、わが近代思想史上において、早稻田大學がいかに大きな役割を演じたかを物語るものである。

しかしながら、これらの人々は、過去の早稻田が生んだか、或は過去の早稻田に關係した人々であつて、現在においては、さうした傾向が跡方もなく消え失せてしまつたばかりでなく、ますます〳〵その反對の方向に向つて進みつゝあるのである。

現在、ワセダ・イデオロギーを代表してゐる「思想家」としては、學校政治家以外の何者でもない「常務理事」××××の支配下に、もつとも硬化した意識的反動家×××があり、時代離れのした觀念的哲學者××××があり、左翼から脱落して信用恢復のために忠勤を抜んでゝゐる××××があり、文化的自由主義から百パーセント反動にまで墜ちて行つた×××があり、去年の總選擧に、實業同志會から立候補して見事に落選した××××があり、單なる新熟語製造業者にすぎない××××がある。

かくて早稻田は何處へ行く? それは說明するまでもないであらう。

五

チャーナリズム、文壇、思想の各分野における早稻田派の檢討は、これで大體終つた。外にまだ政治界、財界、及び理工科的方面にも言及しなければならないのであるが、それは私の智識と關心の範圍以外であるし、それに豫定の頁もすでに盡きたから、大急ぎで結論に移らう。

最近のやうに わが國の資本主義が、高度の發展段階に達し、階級對立が尖鋭化すると共に 單に早稻田大學ばかりでなく、私立大學一般が、創立當初の自由主義的傾向を喪失し 漸次反動化して行くことは、自然の勢であつて、一人や二人の力で阻止しうるものではない。たま〳〵早稻田大學は 創立者の政治的立場に基づいて、より多く自由主義的傾向を有し、それを比較的長く保持してゐたために最近における急激なる反動化が、特別に目立つのである。もつとも大學當局者の立場からいへば、それが目立てば目立つほど、その轉換を社會に強く印象せしめる上に、より効果的なわけである。

今後、日本の各私立大學は、アメリカにおけると同様に、背後に特定の巨大なる財閥をもたなければ經營し得なくなるであらう。早稻田は、大隈侯時代から鑛山王古河と密接に結びついてゐたが 今後は大學それ自體が、同一資本家によつて經營されてゐる日日印刷や日日新

命など、共に、一大就職會社の一部たらんとする傾向を示してゐる。

それはかりではない。新大學令の發布によつて、文部省は　各私立大學を官立同樣、その完全なる支配下におくことに成功した。

かくて「自由の學園」早稻田大學も、漸次その特色を失ひ、支配階級よりの嚴重なる劃一的拘束を受ける點では官立と變りがなく、官立よりも國庫の補助が少いが故に、設備（敎師の質を含む）の點では官立に劣り、結局、近き將來において、「二流帝大」と化し去るであらう。

目下、早稻田大學校友會では、貴族院の代表的策士である伯爵松平賴壽を委員長として、「高田總長古稀祝賀」記念に、三十五萬圓の寄附金を募集してゐるが、その幹事の一人である私の知人の語るところによれば、この前、同大學が××と協力して「早稻田學生新聞」に强制廢刊を命じて、學生間に非常な動搖が生じたとき、大山郁夫を校友會より除名する案が　同幹事會に提出されたさうである。もつともそれは議決されなかつたさうであるが、單なるこの一事實をもつても、現在早稻田大學を包んでゐる空氣がどんなものか、はつきりわかるであらう。

世界プロレタリア文學展望

最近のソヴエート文學

米川正夫

最近のソヴエート文學を一語に評すれば、無風的沈靜時代といふ事が出來よう。しかしそれは露世界の荒涼たる廢墟の間から、欝勃たる生命が一時に湧出して、若々しい力が百花燎亂の壯觀を呈した二十三年頃や、文壇の右翼と左翼の爭鬪が國家的重大さを帶びたる事件となつて、文學界思想界の全部を興奮し動搖せしめた二十五年あたりと比べての話しで、多くの新作家が相ついで擡頭して、自己獨特の言葉を語り、新しい何ものかをロシヤ文學に寄與せんとしてゐる點から言へば、今日のソヴエート文壇の沈靜は、明日の飛躍を孕んだ準備時代であるとも見られる。四年前に共産主義國家に於ける自己の正統的位置を主張して、同伴者に對する高壓的排撃を要求したプロレタリヤ作家も、藝術の世界における優越はたゞ自由競爭によつてのみ得らるべきであるといふ、共産黨中央委員會の決議の正しきを認めて、默々として辛棒づよく表現の技巧を習得する態度を取つて來たし、批評界の方でも新興文學の礎石となるべき重要な問題は、ほとんど論じ盡くされたので、もう文壇全體を震撼さすやうな論爭も見られなくなつた。今日は既に一般に公認せられた箇々の綱目を、より周囲に、より精細に檢覈して完全な仕上げを與へるといふ事が、批評家に殘された任務となつてゐる。つまりロシヤの國そのものが爭鬪時代を終へて、より困難な平和的建設の道程に入つたのと同じやうに、ソヴエート文學もそれと步調を合はせて、じみな『年期奉公』の時期を送りつゝあるものと言つてよからう。

先に述べた如き事情に伴ふ必然の現象としては、過去に於けるロシ

十九世紀の貴族精神たるトルストイ、ドストエーフスキイに對する興味と憧憬、それから更に進んでその模倣である。殊にトルストイは、表現主義的様式化の衰微と、本格的寫實主義への復歸といふ一般大勢のために、若いプロレタリヤ作家の前に絶對的權威として君臨してゐるの如き觀がある（但し藝術家名人としてのトルストイであることは言ふまでもない）。新しく現れる若いプロレタリヤ作家の作品で、トルストイの影響の指摘されないものは數へるほどしかない、から言つて甚しい誇張ではあるまい。從來プロレタリヤ文學の最高達成と許されてゐる、ファヂェーフの『壞滅』なども其の顯著な例の一つである。今パリに亡命してゐる新寫實主義の作家イヴン・ブーニンなども、その純粹な藝術的天分によつて、ソヹート文學に少からぬ追隨者を出しつゝある。（彼はザイツェフと共に國立出版局から著作集を出してゐる、亡命作家中少數の例外である。）

しかし文學作品のテクニツクとイデオロギイを、截然と區分して取り扱ふことは不可能であるから、舊ブルジュア文學のプロレタリアート（部分的にはプロレタリヤ作家）に與へ得る有害な影響といふことは、批評家の間で絶えず論爭の題目となつてゐる。最近評壇の權威者たるポロンスキイはこの問題を論じて、文學作品の影響は單に作品そのものの含んでゐるイデオロギイによつてのみ決定せられるものでなく、讀者の心理とイデオロギイもこの決定を左右する重大なる要素であると言つたために、プロレタリアートはブルジュア藝術の惡影響に對して、免疫性を示してゐる、從つてあらゆる反動文學の跋扈を許容する妄論であるとして、極左の批評家から猛烈な攻撃を受けた。しかしポロンスキイの所説は、單に作品と讀者の間の心理的相關交渉を極めようとする、學術的研究の一端を暗示したもので、檢閲の撤廢などといふ政策上の意見を主張したのでないことは無論である。が、それにも拘らず、彼の舊文學に對するこの提議は、A・ボグダーノフ時代の單純粗暴な否定論に比べると、プロレタリヤ文學論の著しい進歩と深化を語つてゐる。

在來のプロレタリヤ文學を充たしてゐた、マルクシズム綱領の傀儡にしか過ぎない肯定的人物、共産主義的英雄の型から脱して、本當の温い血の通つてゐる生きた人間を創り出すこと、これが今日のソヹート文壇全體に共通の憧れであり惱みである。そしてこの要求を多少なりとも充たした作品は、忽ち批評家や讀者に一つの事件として取り入れられ、競つて論爭の題目とせられる。最近もつとも多く新聞や雜誌の論壇を賑はした作品は、バフメーチエフの『マルテインの犯罪』、パンフェーロフの『ブルスキイ』、ショーロホフの『靜かなドン』、オリヨーシヤの『羨望』、スリヨートフの『隔絶』などであらう。バフメーチエフの『マルテインの犯罪』は、革命戰の鬪士であり指導者である主人公が、責任回避の行爲に對する悔恨に責められて自殺する、その心理的分析を主題としたもので、多くの評家にプロレタリヤ文學の逸品をもつて許された長篇労作であるが、あまりに自己反省的な弱々しい

主人公の性格も、ドストエーフスキイを眞似て及ばざること遠いくどくどしい心理描寫も、血と焔の渦巻いてゐた同胞戰時代のヂナミックと矛盾した不自然さを感じさせる。スリョートフの『斷絶』も同じく內部的分裂に惱む國內戰の戰士を主人公としたものであるが、新進中の新進ともいふべきこの年若い作家の方に、より多くの眞實みと新鮮さが認められ、いろ〳〵な意味における缺點にも拘らず、輝かしい將來を期待させる。

しかしさういふハンデイキヤツプをつけないで、本當に生きた人間を示すことに成功した作品は、ユーリイ・オリヨーシヤの『羨望』であるといふに躊躇しない。この小說も共產主義者を主人公に選んでゐるけれど、前二者のごとく革命の動亂時代を背景にした所謂『戰爭もの』でなくて、文化的建設の時代に於ける平和の鬪士を描いてゐる。その點から言つても、『羨望』は今日の讀者により强くアッピーにルする力を有してゐる。物語の筋は極めて單純で、バービチエフなる主人公が零落した知識階級の醉漢を拾ひ上げて、自分の家へ引き取つて世話をしてやる事にしたところ、この食客はかへつて恩人に對して羨望を感じ、心から彼を憎むやうになる——といふ極めて單純なものであるけれど、通常人の氣づかぬ意外な微細を掴まへて、簡潔な筆觸でこれを表現する驚くべき才能、物の本質を突かねばやまぬ淸新な觀察、作者の批判を隱しながら作中人物の目を通して行つた心理解剖の銳さ自然さ。——これら一切のものが見事に肉づけされた「生きた人間」を紙上に躍動させ、呼吸させてゐるのである。それからオリヨーシヤの現代的都會的な文體も、見のがすことの出來ない特色である。ロシヤ文學に珍らしく輕快で、明るい、瀟洒たる感じの漲つてゐるところは、現代フランス文學の尖端と一味相通ずるものがあるけれど、フランスの作家の持つてゐる享樂的、頹廢的な匂ひは少しもなくて、引き緊まつた男性的なヂナミックな調子で一貫してゐる。これは正しく新興ロシヤ文學が到達した疑ふ餘地のない成功である。ピリニヤークの文章がソヱート文學に與へた影響は小さからぬものであるが、その平面交錯主義に基づく混沌味から全く離れて、明快な繪畫的手法を開拓したオリヨーシヤの功績は、高い評價を受けて然るべきであらう。

オリヨーシヤの『嫉妬』に劣らぬ成功を贏ち得た力作は、ショーハホフの『靜かなドン』である。ドン河地方のコサックの生活を題材としたこの長篇は、まづ主題の取り扱ひ方に新しみを見せてゐる。これまでロシヤ文學に現れたコサックは、ゴーゴリの『タラス・ブリバ』にしてもトルストイの『コサック』にしても、この民族の華やかな英雄的浪漫的の側面しか示してゐなかつたが、ショーロホフは始めて彼らの經濟生活、勞働生活、家庭生活などを、ほとんど遺憾なきまでに遍く描破して、その眞の姿を讀者の前に展開して見せてくれた。この大作の中に現れて來る人物は、鈍重な中農階級、貴族階級、軍人、インテリゲンチヤ、革命的叛逆的傾向を藏した貧農階級といつた風に、コサック民族の各段階を抱擁してゐる上に、ドン河をはじめ、南方の

曠原、野獸の生活などの新鮮な美しい描寫に充ち溢れて、一つの偉大壯麗な敍事詩を現出してゐる『靜かなドン』の基調をなしてゐる氣分は、生に對する渴望と悅ばしき生命の肯定といふ言葉で要約することが出來やう。この氣分は屢々トルストイ的な廣い意味における人類愛に押し擴げられてゐる。のみならず、生の肯定を表現する作者の藝術方法にも、著しくトルストイの感化が窺はれる。時とすると全然トルストイの模倣と認めたければならないやうな所さへある。けれども、ショーロホフの藝術をトルストイのそれと區別する明瞭な相違點は、彼が眞の意味の農民作家だといふことである。農民の階級から出たショーロホフは、自分の作品の對象としたドン地方農民の世界を、自分の魂と同じくらゐによく知り拔いてゐる。農民の人生觀、その感情、思想、言葉、傳統——すべてが彼の本質の一部をなしてゐるものであるから、彼は作中人物の目をもつて見、作中人物の心をもつて感じたばかりでなく、それを敍述する文體まで農民の言葉から有機的に組織したショーロホフ獨自の文體なのである。この武器によつて彼はトルストイの力強い影響を克服して、ソヴェートロシヤの農民文學に一時期を劃する、この大作を完成したのである。

パンフエーロフの『ブルスキー』（貧農組合の名）も農村に於ける有產階級と無產階級の爭鬪を描いた長篇で、ショーロホフの『靜かなドン』と共に農民文學の左翼を形づくるものと言はれてゐる。

農民文學の右翼中で最も才能ある作家として定評を得てゐるのはクルイチコフである。彼が右翼と目されてゐるのは、農村に殘存してゐる遠い過去の精神の表現者として、終始一貫してゐるがためである。が、もうこれ以上この作家について敷衍する餘裕を持たぬ。たゞ一つ附言して置きたいのは傑作『穴熊』の作者レオーノフが最近發表した『百姓奇談』と題する一聯の短篇小說のことである。彼は從來ドストエーフスキーの直系を繼いだ作家の如く見なされてゐたが、これらの短篇に於いては、觀照の態度から言つても文體から言つても、むしろプーニンとの類似點がより多く指摘される。文學生活の第一歩から豐かな天賦によつて一流の作家の列に伍したレオーノフは、この『百姓奇談』によつて更により高い藝術境に達した事を證明した。その表現は一層緊縮して彈力性を增し、ヂナミックな力さへ現はして來て、そこに描かれた人物は一人々々、くつきりと鮮かに浮き彫りにされ、藝術的完成の力によつて殆ど一種のシムボルとしての意義さへ有してゐるが、しかし作全體の支配調は、貧窮と不幸と無知の闇に包まれてゐる農村に對する、絕望的なペシミズムである。それとほゞ同樣の事が、現代ロシアの作家中もつとも華々しい名聲を有してゐる、フセヺーロド・イワノフについても言ひ得る。簡潔な素描的表現の極致と稱せられる彼の近業は（敢て農村を描いたものとのみ限らないが）不思議な目に見えぬ暗い衝動に引かれて、或ひは愚かしい、或ひは狂人めいた無意味な行爲を重ねて、つひに同じくらゐ無意味な最後を遂げる、夢遊病患者のやうな人物を描いたものばかりである。そして無

論作品全體を塗り上げてゐる色彩は、救ひのない人生に對する恐怖と不安である。從つてイワノフもレオーノフと同樣、マルクシストの批評家から反動作家の極印を打たれるやうになつた。

最近本誌に掲載せられた『狼の掟』の作家ピリニヤークは、誰よりも早くからブルジョア的傾向の顯著な作家として、プロレタリヤ派の非難攻撃を浴びて來たが、發賣禁止の厄を受けた『消されない月の話』でスターリンに關するモデル問題を惹起して以來、反革命作家とさへ呼ばれるやうになつた。『狼の掟』も本國ロシヤでは遂に發表することを許されなかつたらしく、脫稿以來一年餘になる今日まで發表せられないでゐる。しかし藝術作品の影響とその感受の問題は、前に引いたボロンスキイの言つてゐる通り、非常に複雜な重大な問題で、極めて愼重な態度で研究しなければならぬ事である。單に抽象的な理論を尺度で決定し去るべく、文藝作品はあまりに微妙な有機的綜合であり過ぎる。ある特定の政府の政綱に一致しないといふ事は、必ずしもその作品の民衆に對する意義が否定的な、有害なものであるといふ結論に導くとは限らない。今春ピリニヤークが全露作家同盟の會長改選に際し、スギールスキイの跡を襲つてその要職を占めるに到つた事實は、單なる事務上の一變動に過ぎないもので、作家としての彼の價値に何ら重きを加へはしないかも知れぬが、彼が今秋出版する豫定になつてゐる長篇力作が、まだ完成に程遠い夏の頃から、既に英佛獨の諸國の國語に飜譯するべく、權利讓渡の契約が成立したといふことは、ピリニヤークの作家的名聲が一部の人の傳へるごとく、危く消滅に瀕してゐるのでないといふ證明にはなるであらう。彼が己れの創作の一轉機を劃さうと意氣ぐんで、二月以來寢食を忘れて沒頭してゐるこの長篇は、彼自身の言葉によれば「美しき未來」をテーマとしたもので、ドネープル河電化工事などの文化建設の活動を取り入れて、生きたロシヤの社會的運動に接觸しようとする眞劍の試みださうである。彼はこれまで多少すねもの的心理に傾いてゐたらしく、それが彼の藝術を狹くしてゐたやうに思はれるが、この力作によつて更に酒脫と開けた新しい創作の大道に入ることが衷心から期待される。

英米に於ける左傾文學

北村喜八

この小説は、英米のプロレタリア作家——嚴密に言へば、プロレタリアート的傾向の幾分なりを持つてゐる作家——の四五に就て、記述するに留めなければならない。

出來うるならば、次のやうな順序によつて、英米に於けるプロレタリア文學を論じてみたいのである——即ち、かかる文學を生長發展せしめるところの社會的諸條件、そして、その文學的活動がどの程度にまで活躍してゐるかの現狀、及び、個々の作家の地位と特質について。併し、さうした關係に於て論ずべく、不幸にして私は十分な材料を持つてゐない。

十分な材料を持つてゐない理由は、必ずしも私の不勉強によるものではない。十分な材料を得ることが出來ないほど、しかく英米のプロレタリア文學は、表面に現はれた活躍をしてゐない。寧ろ、プロレタリア文學と稱せられるほどの文學がないと言つた方が適切かも知れない。

言ふまでもなく、アメリカとイギリスとは世界最大の資本主義帝國である。前者が資本主義の爛熟期を示してゐるのに反して、後者は資本主義の衰微の徴候を見せてゐるが、兩者とも合理化政策によつて、左翼運動の進出を阻害してゐるので、その無産運動は右翼的であり社會民主々義的である。從つて、そこにはプロレタリア文藝運動の活潑な活動をなしうるだけの社會的基礎がつくり出されてゐない。勞農ロシアに於ける文學的活動は、殆ど大部分プロレタリアート文學に集中され、ドイツに於ては左翼文藝は、生々とした活氣を呈し、日本に於ても、この數年の勞働運動の加速度的成長は、プロレタリア文學に關する論爭を活氣づけ、それが作品の創作的活動をも盛んならしめたが、それらに比較すれば、英米に於けるプロレタリア文學の活動は遙かに遲れてゐると言はざるを得ない。

この點、英米プロレタリア文學は問題の對象とすべく未だ十分な發を持つてゐないとも言へる。併し、勞働運動に於ける左翼分子の活躍と、それが未組織大衆とに結びつき、それによつて生ずる社會情勢の變化は、プロレタリア文學を成長せしめずに置かないだらうことは豫想出來るのである。

イギリス文學に於て、吾々は、社會主義的傾向（時としては改良主義程度でしかないが）を持つ老大家の一群を知つてゐる。即ち、バアナアド・ショオ、エチ・ジ・ウエルズ、ジイ・ケイ・チエスタアトン、ジヨン・ゴオルズワアジ等である。併し、それらは新しいプロレタリア文學の花を咲かしめる一塊の土壤となり得ても、それを創造し、或ひは指導するには、もう既に、あまりに微温的な存在たることは免れない。では、新時代の作家でそれに代るものがあるだらうか。吾々は若い作家の中から、次の名前を拾ひ出すことが出來る。即ち、ダグラス・ゴルドリング、シ・ケイ・マンロウ、女流作家レベッカ・ウエスト、それからアイルランド文學者として、ライアム・オフレエアテイ、シヨオン・オケシイ等である。

世界大戰は、帝國主義戰爭の慘禍と不合理を、人々の胸に強く植え

つけた。大戰の最中、それに反對する氣運が漲るところに起つた。ここに階級的利害のために戰ふといふ程明確な意志ではないにしろ、帝國主義戰爭反對の色彩の濃厚な作品が現はれた。さうした傾向にある作品として、ゴルドリングの戲曲「自由のための戰」と、マンロウの長篇戲曲「噂」がある。

「自由のための戰」は、イギリスに於ける上演禁止を豫想して、草稿をスイスにある某新聞記者に送つて獨譯させてゐる位である。劇の事件は一九一八年の夏の出來事を取扱つてゐる。大戰が長引いて、前途の豫想のつかない暗澹たる時代の空氣である。ゴルドリングはこの戲曲の序文に於て、次のやうに言つてゐる。「或る國々では、プロレタリア運動は一つの形態を取りつつあるが、他の國々では、それは非常に異つた性質を帶びてゐる。ロシアに於てはボルシエヴイキ、アイルランドに於ては獨立運動、ドイツに於てはスパルタカス團、英米に於ては勞働運動が、戰爭の四年間に於ける惡影響を受けながらも尚人間性と理想を失はない男女のために、次第に元氣を盛り返しつつあつた。物質主義のために凍りつき、資本の貪婪さのために無氣力になつた世界へ、生命と愛の種子が再び播かれたのである。平和論者、トルストイアン、コミユニスト、ボルセヴイスト、クエカー教徒、アイルランド革命黨員、スパルタキスト、トレエド・ユニオニイスト等、いづれもその根柢をなす精神は一つである。それは、歴史を通じて、人類の進歩に際して、殉難者や先驅者を感動せしめて來た精神である。かうした種々の種類の人々や團體は、過去と永久に見切りをつけて、兄弟が兄弟を殺す四年間の戰爭の邪惡な組織を破壞しようとする努力に於て、結びついてゐた。いづれも、忍耐と、新しい日の曙を待つ希望とをもつて、前途を見てゐたのである。」更に彼はかう言つてゐる——イギリスでは勞働運動に對する帝國主義の攻勢が激しいが、社會主義への動向を持つたインテリゲンヴイアは決して少なくない。かうした時に當つて、演劇は、インタナシヨナリズム、同胞的精神、戰爭呪咀の思想を、自由に表現しうる大きい媒介物である。……

これに依つても分るやうに、彼の思想は急進化してはゐるが、一面人道主義的な點のあるのを見逃すわけには行かない。併し、保守的なイギリスに、かうした作家のあることは些か注目に價する。

マンロウも亦、純粹にプロレタリヤ作家と呼ぶことは出來ないだらう。併し、戰爭後の新時代の作家であることは、「噂」一篇によつても十分に立證しうる。「噂」に於ては、帝國主義戰爭のからくりがリアスチックな筆致によつて、巧みに描き出されてゐる。大資本の對立は國際間の戰爭を惹起し、政治家、外交官、實業家などの數多くの人物がそこに登場して、大資本に操られて動いてゐる。そこには個人の生涯や運命は踏みにぢられて顧られない。たゞあるものは、資本の無慈悲な要求だけである。この作では、階級對立のはつきりした姿は示されてゐないが、大きな構想のうちに、、、、、、の暴露がなされてゐる。

レベッカ・ウエストは、マルクス主義的立場に立つて、よく論じ、よく書く。時代意識のつよい幾つかの小說の外、最近論集「奇妙な必要」によつて、自分の藝術觀を語り、現代のイギリス作家を論じてゐる。中でも、最近問題視されてゐる「ユリシイズ」の作者ジョイスを論ずるあたり、才氣潑溂たるものがある。この女流作家は、「どつこい、生きてる」の上演に際して作者のエルンスト・トルレルがロンドンへ來れば、逸早く彼に會見したり、アメリカの「ブックマン」に每號、イギリス文壇の通信を書いたり、なかなか活躍してゐる。併し、彼女の創作や評論から感じるものは、急進化した小市民的インテリゲンツイアの傾向であることは否めない。

アプルランドのショオン・オケシイと、ライアム・オフレエアテイとを、プロレタリア作家として擧げることには、かなりの異論もあらうと思ふ。併し、二人とも最近のアイルランド文學に於ける新時代の作家として、第一線に立つてゐる。

オケシイは、日傭人として、或は街上に、或は工場に働いてゐた經歷から伺ひ上つて來ただけに、生れながらのプロレタリートである。勿論、彼は讀むことも書くことも出來なかつた。たゞ父が遺して行つた一箱の書物によつて、こつこつ勉强した。そして、初めて書いた戲曲を、グレゴリ夫人の許へ持つて行つた時には、それは、亂暴な字を書きなぐつてあるので、とても讀めない原稿だつた。グレゴリ夫人はそれを書き直さした。彼は書き直すのに一年かかつた。やつと出來あがつたのが「義勇兵の影」である。それは直ちに上演された。

彼は、アイルランドの民族的詩人であるイエイツの象徵的な神秘主義とは、明かに對照的な作風を持つてゐる。彼の描くものは、ダブリンの裏長屋であり、アイルランド獨立運動に奔走する革命的鬪士であり、集團的な生活である。プロレタリア文學としての意識水準は低いが、プロレタリア作家の一人に數へられないことはない。

オフレエアテイは、今年三十二歲だが、五つの長篇に、數多くの短篇を書いて、小說家としてこの名聲に於て、オケシイに優るとも劣らぬものがある。「スパイ＝刺客」などの題名によつても窺ひ知ることが出來るやうに、二十磅の金のために、同志を裏切つて警官に引き渡した男の話や、革命家の心理などを描き出してゐる。彼にあつては、教養の高さや知的な纖細さは藥にしたくもなく、非常に大衆的な作風を持つてゐる。彼など、左傾的な傾向にある作家として、たしかに未來を感じさせる。

さて、今度は輪廓的な紹介の筆を、アメリカ文學へ移さなければならぬ。

現代のアメリカ文學は、一言にして言へば、ブルジョアジイの文學であるが、最早、西歐やイギリスの文學の模倣を脫して、アメリカ獨自のものをつくりつつあると共に、アメリカ生活の批判、アメリカ生活の新しい方面への要望の閃いてゐるのは見逃せない。併し、それも、

非常にプチ・ブル的な、自由主義な角度から眺められたものである。例へば、人氣作家のシンクレア・ルウイスにしても、シヤウツド、アンダアスンにしてもさうである。アンダアスンの如きは、その小說の幾つかに於て、貧乏人の生活を同情を以て描いてゐるが、それは決してプロレタリア・イデオロギイによつて書かれてはゐないのである。

然し、アメリカ文學のかうした一般的情勢にも拘らず、その底から新しい文學としてのプロレタリア文學が擡頭しつつあることは、事實である。かうした傾向にある作家として、アプトン・シンクレア、フロイド・デル、詩人として、カアル・サンドバアリ、ヴエイチエル・リンジイ、ロバアト・フロストなどの名を擧げなければならない。

アプトン・シンクレアは、アメリカの持つ世界的なプロレタリア作家であつて、今更、ここに紹介する必要もない程である。彼にあつては、あらゆる藝術は「宣傳」であり、彼の作品は階級闘爭の一武器である。初期の彼は、思ひあがつた自稱天才であり、社會惡に對する憤激も、かなり空想的であつたが、機會を捉へては勞働者に接近し、その勞働狀態を調査したり、或は炭坑罷業を視察したりすることによつて、社會主義作家としての彼の視野は廣くなり、批判は辛辣になつて來た。その數多くの暴露小說に於て、現代アメリカの資本主義文明の機構を解剖、批判し、又、評論集「黃金藝術」「金が書く」に於て、世界文學とその作家を縱橫に論じてゐる演劇の方面に於ても、自らプロレタリア劇團を組織したり、數篇の戲曲を書いたりしてゐるが、戲曲はその小說や評論に比較すると、遙かに見劣りがする。

このシンクレアが、アメリカで一番優れた批評家だと、十五年間言ひ續けてゐる男に、フロイド・デルがゐる。彼は貧困の家庭に育つたので、早くから勞働に從事しなければならなかつた。かうした若い日の體驗は彼の文名を高めた「世間知らず」の中に、生き生きと描かれてゐる。彼が文筆生活にはひつたのは、シカゴに出て、「イヴニング・ポスト」の文藝記者になつた時からであつて、現在はアメリカのコミユニストの文藝雜誌「新群集」の編輯に携はつてゐる。

「批評家としての彼は、趣味と、眼識と、廣汎な讀書力と、作家の意圖を見究める熟練さとを持つてゐる。彼は、大概の文筆の士に缺けてゐる二つの分野――近代心理學と革命的な經濟學とを知つてゐる。それ故に、他の人間ならまごまごしてゐるやうな問題を、容易に理解し判斷することが出來るのである。

併し、一個の人間にとつて、これだけでは十分でない。が、フロイドは小說家としても世間に知られてゐて、それによつて生計を立てゐる。この感受性に富んだ藝術家が、この世の中に當惑し、それに適合しようとしながらも、自分の心の姿を正しく描いて行くなら、自分は、彼と個人的に話する時と同じ興味を以て、彼の後について行かう。」――これが若いフロイド・デルに對するシンクレアの表現である。アイルランドのオフレエアテイと共に、種々の批評をかけ得る新らしい作家であらうと思ふ。

前にも一寸述べたアンダアスン、それから戲曲家としてのユウジン・オニイルは、勞働者の生活を描き出すのに、優れた筆を持つてゐる。併し、アンダアスンにあつては、勞働者——ことに放浪的なルンペンな勞働者を取扱ひ、さうした人間に對して温い同情を示してゐるが、新しいはつきりしたイデイオロギイを缺いてゐるために、最近の作品は特に、暗い憂欝な色彩を帶びて來てゐる。オニイルに於ては、その初期の作品は、彼の體驗の綴られたものが多かつたために、海上勞働者——水夫や火夫が、生き生きと描き出されてゐた。併し、最近のものは、戲曲としての構成は愈々巧みになつたが、取扱はれる世界は小市民層のそれであつて、一種象徴的な傾向を現はして來た。

この二者などは、プチブル文學としての新しい一つの頂點を示すものであつて、作者がイデイオロギイ的に轉換しない限り、今や沒落への最初の一歩を踏み出してゐるものと言はなければならない。

現代アメリカの詩人の一群については、書くべきことが少くない。併し、そのうちでも、社會主義詩人サンドバアクは、新しい傾向を持つ詩人としてのみではなく、アメリカ詩壇の間でも高く評價さるべき一人である。彼は貧困の間に生長して、色々の勞働に從事しただけあつて、その詩は、自由詩の形式を用ゐ、勞働者のスラングを混へ、力強いリズムで、勞働を、生活を、産業の都市シカゴを歌ふのである。

　俺は民衆だ——大衆だ——群集だ——集團だ。
この世の偉大な仕事の凡てが、俺の手で創られたのを知つてるか。
　俺は勞働者で、發明者で、この世の着物と食物を造り出す人間だ。
　俺は歷史の流を見守る見物だ。(「俺は民衆だ」(一九一六年)の一節)

彼は、民衆の姿を、集團の力を、勞働の誇りを、力強く唄ふ一面、ミシガン湖の自然——湖上に浮ぶ舟を、風を、霧を、波を、歌ふのである。

霧

霧は小さな猫の足元へ流れる。
淀んで、港や
默つて蹲る街を見下ろし、
それから、向うへ流れて行く。(一九一六年)

このサンドバアクの他、農民の生活を歌ふロバアト・フロスト、デモクラチツクな詩風を持つヴエイチエル・リンジイも亦、アメリカの生んだ新しい詩人である。

「リンジイは尊敬するに足る男だ」とシンクレアは言つてゐる。彼は、放縱な生活を送つて自己の名を汚すやうなことは決してしない。自分の詩を聽衆に讀み聞かせることによつて、乏しい生活の料を得て、質素な暮しをしてゐるのである。その詩に於て、言葉の使驅はホイットマンよりも自由で大膽で、民衆的で、俗語を巧みに取入れて、音樂的なリズムを作り出してゐる。

以上のやうに、英米に於けるプロレタリア文學は、未だ一つの組織運動として社會の表面へ現はれて生氣ある活躍を見せてゐないが、階

級對立の尖鋭化と、それに伴ふ社會情勢の變化は、かうした文藝運動を促進させずにはおかないだらう。さうした時が來た場合、初めて、社會現象の一つとして、又、文學史上に於ける一つの波として、プロレタリア文學運動を、全體的な姿に於て論じなければならない。

フランスは「不活潑だ

小牧近江

ロシヤのやうに、ドイツのやうに、そしてまた、現在の日本のやうにプロレタリア文學の活潑な國の眼を通して見るなら、ことに日本人の愛する理論方面に於て、フランスの意氣は實にあがらない。それは、最近、石川湧氏によつて紹介されたマルク・イッコウイッチ著『史的唯物論より見たる文學』―春陽堂版―を見てもわかる。

原著者マルク・イッコウイッチ氏はその譯者が照會中である通り、マルクス主義の理論家であることは動かされないとしても、どんな經歴の人物か、たゞそれがジュネーヴでものされてゐるといふだけで、フランス人であるか、どうかも分つてゐない。が、とにかくフランス語で書かれたマルクス主義文學論の纒つたものとしては近頃われわれの知る限りで、これあるだけだ。實に類りがないほどのさびしさだ。

しかも、著者のわれわれの便宜になつてくれたのは文學に於ける史的唯物論の適用性を系統的に組立ててくれたことであつて、その藝術理論はむしろすでに日本の先進論客によつて論じつくされてゐるの感なきにしも非ずである。ただ、一つ注目に價すると思はれるところは、彼の藝術科學、つまり藝術觀の分析法である。すなはち、マルク・イッコウイッチ氏は觀念論的（ヘーゲル）社會學的（先驅者としてデュ・ボス僧正、それからテーヌ）と、そして最後のマルクス主義的藝術觀の間にフロイド的藝術觀を取入れてゐることだ。この點、この數年來問題になつたルイ・アラゴン、アンドレ・ブルトンその他の若い超現實主義のジェネラションにとつてなくてならない分解と云へやう。

しかしながら、總じて今日のフランス文壇は、我われの思ふところでは、まだまだマルクス主義觀までは進んでゐないやうだ。といふのは、この國のブルジョア的乃至はプティ・ブルジョア的文壇の惱みは未だにブルジョア思想崩潰の瀨戸際にもがいてゐるからなのだ。從つ

て、この國の右翼文壇陣は日本のそれのやうに總退却もしてないし、又無抵抗主義でもない。それどころか、廣い意味のブルジョア文化と社會の維持擁護のためには、地中海文明とドイツ文明の提携敢へて辭せずとなすものにアンリ・マシイス氏あり、ヨーロッパの經濟同盟を提唱するものにガストン・リウ氏がある。すなはち、前者はカトリック教とギリシヤ・ラテン文化の旗の下にヨーロッパ、否、全世界のブルジョア思想の大同團結を高唱してゐるのだ。カトリック派作家のフランソア・モオリヤック氏などはむろんこの仲間で、彼いはく「余は共産主義とはどんなものだか知らない。が、それを聞くだけでぞつとする。」と。それがまた大した意氣込なのだ。そして、この大同團結主義も、ロカルノ文學も場合によつては同じ保守派の頑迷派、反獨主義のアクション・フランセエズとは手を切つてもかまはぬと云ふ態度なのだ。

　されば、『モンド』誌（バルビュス主宰の週刊）の新らしい評論家オギュスタン・ハラビヒは言つてゐる。

「今日ほど思想の（ブルジョア思想の）裏切と擁護が問題にされてゐることがない」と。

　事實、この數年ほど『ブルジョア』の問題が論ぜられたことがない。一九二四年、ジョアネが『佛蘭西ブルジョアの禮讚』を世に問うてこの方、『ブルジョア』に對する新らしい解釋がとかく問題になつた。これを高踏派のアルベール・チボーデ氏にいはせると、ざつとこんなものだ。「古い意味での『ブルジョア』はすでに清算されてゐる。實に十九世紀はブルジョアジイに對する社會的、文學的總攻擊の時代だつた。從つて、當時フロベールの下した定義『ブルジョアとは下劣にものを考へる人間』とは今は通用しない。今日では經濟をぬきにして何にもかも考へられない。そこで『ブルジョアとはブルジョアらしい生活をしてものを考へる人間』といふことになる。だが、さうした生活の出來る人間が今日の經濟狀態でどれだけゐるだらう？」といふことになると、どつこいチボーデ氏の言ひ分はややテーヌの階級無視論に近いものになつて來る……

　かうしたところへ、投げつけたのがエムマニュエル・ベール氏の『ブルジョア思想の死』である。氏は純然たる知識階級である。コムミュニストでもなんでもない。それどころか、今のところ甚だ煮え切らない思想人でもある。が、それはそれとして、主題がはつきりしてゐるやう、『ブルジョア思想の死』は說明をまつまでもない。若いインテリゲンチヤの挽歌でもあり、保守主義者への新人の回答でもあるのだ。が、これとても底を割つて見ればオギュスタン・アバリュの言ふやうに、つまりはドリュウ・ラ・ロシエルや、ジヤン・ゲアノと同じく極めて常識的な、進步的な思想人の遁辭で、內心は反動に倦きた自個の思想的不安と混亂の告白にすぎない。ただ、後者のゲアノだけはわづかに階級鬪爭を肯定してゐる位のもので、されぱとていづれも未來に對するかくとした信念がない。彼らは勞働階級の存在はこれを認め

るけれど、その階級こそやがて新らしい時代、從つて、その文化を創造するところの選手であることまではつきりしないのだ。そこまでは突進出來ぬのである。フランスにはこの他、ユーモアやアンヌイから來てゐる革命思想家？が多い。

かうした客觀狀勢に目下のフランス文壇がある。從つて、左翼陣もさうした現實の思想戰に論陣を張つてゐるやうなわけなのだ。とても、我れらの現狀からは想像されぬ悠長さである。が、そこにはフランス文化のながい傳統と脱け切れない殼のあることも察してやらなければならない。何しろ、レーニンもいつたやうに、世界には幾多の革命はあつたが、自國の文化を一世紀半も君臨させた點でひとり大革命と僭稱出來るものは、過去に於て、（現在にはロシアがある）フランスあるだけだ。しかも、そのフランスの今日の若いジエネラションはさうした文化の孫が曾孫にあたるのだから、その根强さは察するにあまりある。

それにまた、どうしたものか、この國には多數の農民作家や地方作家があるのに、そのくせ勞働者出身の作家は見當らない。この數ケ月以來、一寸問題になつたマキシミリアン・ゴーチエ氏、あるひは純然たるプロレタリア作家とは言はれないまでも、一八三〇年代の產業の勃興を主題とした彼の『力』などもいはゞ知識階級臭ひのある作品である。その點、この國のプロレタリア文藝陣を一人で背負つてゐるかのやうなアンリ・バルビユスにせよ、ヴァイアン・クーチユリエにしろ、三木淸氏のいはゆる新しい解釋での啓蒙作家であつても、藏原氏のいふプロレタリア・レアリズムの作家ではない。俄に寂寞の感に堪へないものがある。

もしそれ、この國からそのバルビユスの存在をとつたら、左翼派は全く火の消えたやうであるといつても過言であるまい。しかも、そのバルビユスも最近はむしろ作家といふよりも、反帝國主義運動に、反ファシズム運動に、寧日ない活動家である。バルビユスは言行一致の思想家である點、フランスといふよりはむしろ世界のプロレタリア文藝運動の誇りだといつていい。

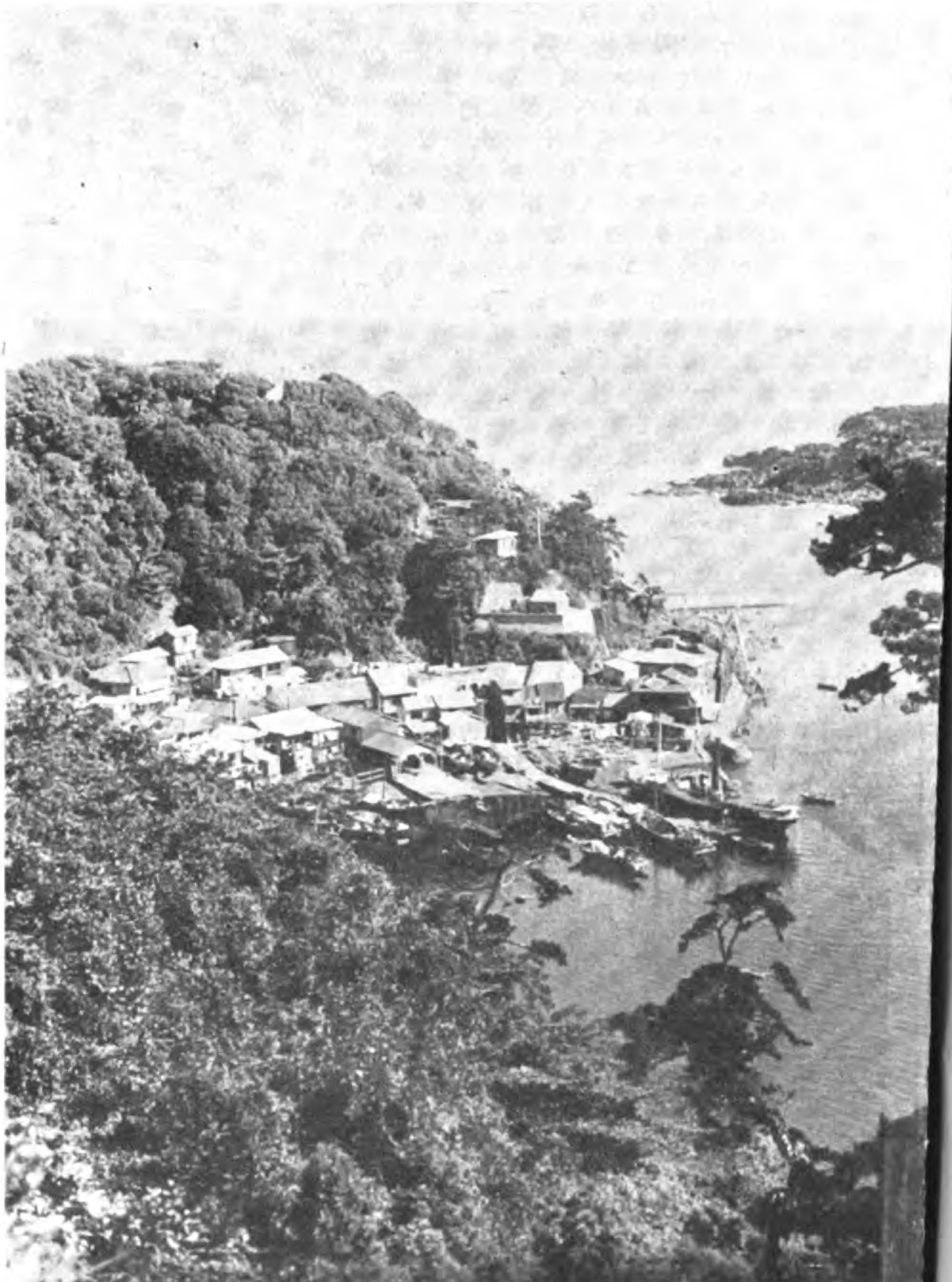
クラルテ運動については幾度か紹介してゐることであるからここでは省く。マーツア著『現代歐洲の藝術』藏原惟人、杉本良吉両氏譯—戰文閣版—によれば、クラルテ運動の他にアンリ・ギルボーと雜誌『明日』の歷史的役割を書いてゐる。ギルボーはむしろドイツとロシアに知られてゐることゝ思ふ。日本でも彼の『僞らざるレーニン傳』によつて一部の仲間に知られてゐるが、彼はもとデナミズムの詩人であり、アンチ・ミリタリス作家であつたことが知られてない。だが、彼の最も大きな仕事はヨーロッパ戰爭の眞最中ジユネーヴから禁斷の左翼雜誌『明日』を發刊したことで、マルセル・マルチネはここから生れたといつていゝ。レーニンとの交遊も知られるところだ。彼は亡命國スイスから追放され、フランス本國政府からは死刑の宣告をうけてゐる。



つて製販せ
し

豫約募集

系



つて製版せし

解説

寫眞各巻五百乃至六百面に對し學界の權威者と藝術家が悉く署名せし詳細懇切なる解説を附す。

航空班

改造社航空班は御國飛行學校長伊藤酉夫氏を班長に一等飛行士熊川良太郎氏を主任操縦士とし三菱式R―2型「改造號」を全國の空に飛ばして新井康弘氏の撮影せる獨特の航空寫眞を各巻に滿載する。これ出版界空前の壯擧で、常に營利を捨て大衆を本位とする我社のみの企畫し能ふ所だ。

主張は現代地理學の原則を格守する事に依つて嚴格に經緯される點に存する。讀者は玆に單調無味な幾何圖形を見る代りに變化多く興味深き線の巧なる交錯、卽ち繪畫を見、而もそこに一貫したフイロソフイーを認めるであらう。科學の大衆化は決して學者の閑問題ではない。然し乍らその漫然たる通俗化は科學の墮落を意味する。改造社は曾てアインスタイン教授を招聘し、難解なる相對性原理をすら大衆化するに成功した功勞者である。勿論今回の企てに於てもその成功は期して待つ可きであらう。特に此計畫に對し細心の注意と周到なる用意を怠らぬ一例として、揭載の寫眞の如きも特に同社所屬の飛行機と特設の寫眞班に依り最も嶄新而も嚴格に地理的なる撮影を試みつゝある事を附記する丈けで充分であらう。予は此の企が年來の主張と一致し且つ壯なる故に其の實行に參加したのである。

なほ、これと相前後してパリに發刊されたのがウーランス（フラマン人とも云はれる）の『貧しき人々』マルセン・ミレの『生きる』等の小册だつたが二人とも今は顔を見せない。

さうなつて來ると、ますます新人の拂底だ。それは最近の『モンド』を手にする何人も氣づかれることと考へるが、この國プロレタリア文學に人なきものか、毎號外國の左翼の紹介ばかりで、肝腎のフランスの現狀は物足りない程手薄である。理論闘爭も豫告されてる程はなばなしく展開されてない。

ただ　ゾラ全集の決定版を刊行されたことを機會にプロレタリア作家としてのゾラを再吟味されてゐることが眼立つ。もつとも、これは左翼雜誌に限つたことではなく　右翼にも面白い現象になつてゐるのだが。

その一つの現れは、最近フランスに於ける公立圖書館の閲覽統計だ。右表によると、作家として第一位がエミル・ゾラ、第二位大デュマ、次はヴイクトール・ユーゴーの順である。そこで、コメデイア紙がこん度は一般投票を募つて見たところ、右翼と、ブルジョア文學との擁護である主催側のコメデア紙には御氣の毒なことに、ここでもゾラは斷然第一位だつた。

これに反してアメリカではモオパッサンの短篇が第一位だつたと云ふ。しかも、そのモオパッサンは腐爛した社交階級の暴露の他に、フランスでは早くからアンチ・ミリタリストとしての左翼パンフレットの宣傳に使はれてゐる。

ブルジョア文學が他に見られない程頑強であるフランスに於て、これらのことは何を語るだらうか？、

フロベールを、ゾラを、モオパッサンを再吟味して見なければならぬのはただにフランスのプロレタリア作家のみだらうか？

最近ドイツ・プロレタリア文學の傾向

村山知義

かういふ課題を與へられたが、私は此の問題については甚だ知る所が少ない。「知らないでも一やつてゆける」事は皆知らないと言ふ程度である。で、此處に書きつけることは、それの紹介でも批評でもなく、感想

程度のものであるより仕方がない。

私は嘗て獨逸の表現派の文學のとりこになつた。要するにそれは頭の上に醜陋な、、、のおつかぶさつてゐる日本と獨逸の小ブルヂョアジーの絶望的反抗に於ける哀愁であつた。その頃獨逸のプロレタリアートは既に政治的にはめざましく鬪爭しつつあつたが文化水準に迄は頭を突き出して居らず、一方日本のプロレタリアートは政治鬪爭の基礎的條件をさへ獲得して居なかつたのである。

その頃から十年がたつた。

獨逸は今や、サヴェート・ロシアを除いては世界で最も力強いプロレタリアの黨を持つてゐる。しかもなほそこのプロレタリア文學はインテリゲンツのそれと、勞働者のそれとが、一方は傳統的なむづかしい澁めつ面を持ち、一方が初歩的な幼稚さを持つてゐて、より高いプロレタリア文學への發展のスタートさへもの一歩手前にゐるらしく思はれる。

この離れ加減は獨逸人の文學的才能を決して疑はせるものではなく、その罪は、いまだにあのカイゼル獨裁時代の「世界に冠たる獨逸國」を國歌とし、殺人鬼ヒンデンブルグを大統領としてゐる獨逸社會民主々義者一味の肩の上に歸せらるべきである。

一方サウエット・ロシアの文學がこの十年間にどんなに歴史的な歩みを歩んだかを思ひ合はせて見よ。

プロレタリアがその日々の鬪爭を立派た藝術に迄まとめ上げる力を持つてゐないこと、文學の野に於いてもまた暴虐な政治的壓迫が死力を盡してその成長を阻んでゐることは、革命前の國のうちでは最もすぐれてはゐるが、しかし、サウエート・ロシアとくらべては遙かに遲れた文學をしか獨逸に與へてゐない。

サウエート・ロシアにはプロレタリア文學のホネムーンが來ようとし、獨逸には産道を出ようとする胎兒の苦しみがある。

カール・アウグスト・ウヰットフオーゲルや、ヨハンネス・ロバート・ベッヒヤー等のインテリゲンチヤ出身の人々の作品と、ベルタ・ラスク、ワルター・トロッペンツ、ハンス・ロールベール等勞働者出身の人々の作品との間には、日本に於ける兩者の差よりも甚しい溝がある。

これは恐らく獨逸の勞働者が日本のそれよりも、積極的にプロレタリア文學を要求し利用する機會が多いからであらう。日本でもやつと最近になつて、飽きつぽく、氣むづかしく、無限に移り氣な小ブル讀書階級や批評家と縁の切れた移動劇場用脚本や、プロレタリアびいや落語や小唄や狂言や童話や講談が産み出され初めた。

例へばベルタ・ラスクの三十五景から成るレビュウ・ドラマ、「サウエート・ロシアを襲ふ毒瓦斯」や一五二五年の農民一揆を扱つた戲曲「トーマス・ミュンツエル」や獨逸と露西亞の勞働婦人のために書かれた十六景から成る「解放」やトロッペンツの「政治的諷刺的レビュウ「[illegible]の華」や工場[illegible]、「[illegible]」やハンス・ロールベ

ールのシュプレッヒコール「リープクネヒト・ルクセンブルグ・レーニン」や獨逸共產青年同盟敎育部から出版され、黨の機關誌「ローテ・ファーネ」の讀者の各地域班の催しその他で、勞働者自身の手で充分に利用されてゐる。

成程これ等の作品は粗野であり、幼稚である。それがもつと立派なものになることには誰一人異議はない。しかしながらその進步は決して小ブル讀書階級や觀劇階級からの絕え間ないセンセエションの要求に應じるためになされるのでは斷じてない。

——プロレタリア文學もそろそろもつと新しい形式を生まんもんかなあ。

——ちつとも珍らしくないぢやないか、これぢや失禮ながらプロレタリアに與へる効果が疑はれるねえ。

などといふ。お尻の下に戰旗とプレハーノフ論を敷いて木のベンチの堅さを防いでラグビーを見てゐる傍觀者諸君の御親切なる忠告はプロレタリア文學にブレーキを掛ける以外の何物でもない事を我々は最近益々痛感させられてゐる。

口やかましい批評家先生の多い獨逸でもプロレタリア文學はかういふ連中のために隨分迷惑したらうと思はれる。

さて最近私はエリヒ・マリア・ルマルクの「西部戰線異狀なし」を讀んだ。これは無論嚴密な意味ではプロレタリア小說とは云ひ難いであらう。しかし私はその單純さ、素朴さに心を打たれた。戰ひの慘虐さ、戰ひに對する憎惡はそのため一層深き彫りされて迫つて來た。これに對して同じく世界大戰を取扱つた小說に、裁判事件で有名なベッヒャーの「$(CHCl=CH)_3As$ 或ひは唯一の正當なる戰爭」がある。此處では憎むべきものは最大限度の憎惡をもつて、慘しい光景は最大限度の慘しさをもつて、描き盡されてゐる。毒瓦斯を吸ひ込まれて「皮膚の上には痒ゆいブツブツが、氣管や咽喉には敗血性的脫疽狀の腫物が出來始め、血の混つた嘔吐が出、肺は水を一杯吸ひ込んだ海綿のやうに膨れあがる」兵士達の微細を極めた描寫は物凄い極みである。

私はこの二つのすぐれた戰爭小說の優劣を云々しようと云ふのではない。ただ、後者にはたつた一つ、素朴さが缺けてゐる。

これこそは永い間下づみになり、しいたげられ、、、、階級のものが、初めて、ノロノロと牛のやうに起き上がり、しつかりと、を眼の中に掴まへ、除々に手を伸ばし出す。その時にこの人々の胸の中からこそ滲み出るものである。そしてこれこそは味方に元氣を與へ、、、、させるものである。

私は「西部戰線異狀なし」がさういふ小說であると云ふのではない。それはその作者の意識の低さと、多分の通俗小說的手法の惡影響にも拘らず、素朴さの勝利を暗示してゐると云ふのである。

すぐれた老女性作家ヘルミニア・ツール・ミューレンはごく解りよい筆致で、多數の童話を書いてをり、「なぜなの？」「小さいペーター」「頓

理の城」等が翻譯されてゐるが、私は、嘗てトルストイの童話がその目的に役立つた程、彼女の目的のために役立ち得るとは考へられない。

トルストイの宗教童話は、彼が伯爵であるにも拘らず、奇蹟的と思はれる程に農民の心と密接して書かれてゐるが、ミューレンのプロレタリア童話には素朴さがない。

ベルタ・ラスクは「サウエート・ロシアを襲ふ毒瓦斯」の序文で次のやうに述べてゐる。

——これは性急に描きとばされた現代のスケッチである。遅過ぎないうちに民衆の眼をそれに開かせやうとして書き付けられたプロレタリアの生活と反動の勢力の生のままの解剖圖である。——

この性急さが、、、、、、プロレタリア藝術家を困難な矛盾に陥入れる。

それは見物人的讀者諸君や批評家諸君に叱られる迄もなく、プロレタリア自身との密着に於いて、プロレタリア作家の等しく感じてゐる所である。

すぐお隣りのロシアでは、既にドシンと腰を落着けたプロレタリア作家の大群がその働きの成果を次々に見せてゐるではないか。

獨逸ではサウエート・ロシアの傑れた作品の飜譯も日本よりも多いだらうし　また日本では絶對に見られぬ優れたロシアの映畫が續々と流れ込んでゐるではないか。（在伯林の千田是也からのレポに依ればプドフキンの最近の傑作「アジアを襲ふ暴風雨」は伯林でのロング・ラン三ケ月に及び　今獨逸で五百の常設館が目下同時に上映中だと云ふ）。

政治的闘爭も我々の國に於けるよりも遙かに遠く進展してゐる。

彼等のプロレタリア作家の「性急さ」を我々は全く我が身に引きくらべて推察することが出來る。

洒落れた尖端的自由藝術家モホリー・ナギー教授は「近代的機械文明の生んだ發展すべき藝術形式たる映畫をみぢめな手工業的方法で拵へなければならないのはたまらぬ事だ」と云つてバウハウス工藝美術學校を逃げ出した。

だが我々はみぢめな手工業的方法しか殘されてゐない所では　喜んでみぢめな手工業的方法を握るし、握つてゐる。

素晴しい映畫工業を持つ獨逸の同志にとつては　みぢめさは我々の場合よりも十倍も強調され、しかも立派なサウエート・ロシアの映畫は流れ込んで來てゐるのだ。

獨逸のプロレタリア文學がめざましい進展をしないとすればそれはこれらの様々の原因からである。

我々は獨逸の同業者に、かうして特別の親しみを覺える。

早く相互の交渉をもつと密接にしたいものだ。

日本國稅概說

青木得三

總說

茲に日本國稅といふのは地方稅と對立する意味である。日本の國家歲入歲出各約十七億、其の半ばは租稅收入である。

日本國稅の種類は（一）所得稅（二）地租（三）營業收益稅（四）資本利子稅（五）相續稅（六）鑛業稅（七）登錄稅（八）兌換銀行券發行稅（九）酒稅（十）清涼飲料稅（十一）砂糖消費稅（十二）織物消費稅（十三）取引所稅（十四）狩獵免許稅（十五）骨牌稅（十六）印刷稅の各種である。

其の中で主要なるもの（一千萬圓以上の收入のあるもの）は（一）（二）（三）（四）（五）（七）（九）（十）（十二）（十三）の十種であるから順次之を說明する。

（一）所得稅（年收約二億圓）

所得稅は日本（正確に云へば所得稅法施行地――所得稅法は朝鮮、臺灣及樺太等には之を施行しない）に住所を有し又は一年以上居所を有する者が之を納める義務がある。但し日本に住所又は一年以上居所を有しないでも（イ）日本に資産又は營業を有するとき（ロ）日本に於て公債、（公債の中國債は所得稅を課せられない）社債又は銀行預金の利子若くは貸付信託の利益の支拂を受けるとき（ハ）日本に本店又は主たる事務所を有する法人から利益若くは利息の配當、剩餘金の分配又は利益若くは剩餘金の處分たる賞與若くは賞與の性質を有する給與を受けるときは、所得稅を納める義務がある。

所得稅をかけられる所得は三種に大別せられる。第一種は法人の所得、第二種は前述（ロ）及（ハ）の所得、第三種は第二種に屬しない個人の所得である。（貸付信託といふのは信託會社の引受けた金錢信託であつて信託財產の運用方法を預入れ又は貸付けのみに限定したものである。）

所得稅の稅率は所得の種類に依つて違ふ。第一種の所得は之を甲乙丙に分けて甲の普通所得に付ては日本に本店又は主たる事務所を有する法人であれば百分の五、有しない法人であれば百分の十である。乙の超過所得に付ては超過所得金額を次の各級に區分し遞次に各稅率を適用する。即普通所得金額中資本金額に對し年百分の十の割合を以て算出した金額を超ゆる金額に付ては百分の四、百分の二十を超ゆる金額に付ては百分の十、百分の三十を超ゆる金額に付ては百分の二十である。丙の清算所得に付ては清算所得を次のやうに區分し各稅率を適用する。積立金又は所得稅をかけられない金額より成る金額に付ては百分の五、其の他の金額に付ては百分の十である。

法人の普通所得といふのは各事業年度の總益金から總損金を控除したものである。法人の普通所得が當該事業年度の資本金額に對し年百分の十の割合を以て算出した金額を超過するときは、其の超過金額を以て法人の超過所得とする。法人が解散した場合に於て其の殘餘財産の價額が、解散當時の拂込株式金額又は出資金額を超過するときは、其の超過金額を以て法人の淸算所得とする。

第二種の所得に對する稅率は前述(ロ)の中公債の利子に付ては百分の四、其の他に付ては百分の五、(ハ)に付ては百分の七半である。

第三種の所得に對する所得稅は所得金額を次の各級に區分し遞次に各稅率を適用して之を賦課する。

千二百圓以下の金額	百分の〇・八
千二百圓を超ゆる金額	百分の二
千五百圓を超ゆる金額	百分の三
…………	…………
四百萬圓を超ゆる金額	百分の三十六

尤も第三種の所得は千二百圓に滿たないときには所得稅を課せないのである。

(二) 地租(年收約七千百萬圓)

地租を納める義務のある者は(一)質權の目的たる土地に付ては質權者(二)百年より長い存續期間の定ある地上權の目的たる土地に付ては地上權者(三)其の他の土地に付ては所有者である。

地租の稅率は宅地に付ては地價百分の二半田畑に付ては百分の四半、其の他の土地に付ては百分の五半である。但し北海道に於ける宅地以外の土地の地租は當分左の稅率に依ることになつて居る、卽田畑に付いては百分の三、二、其の他の土地に付いては百分の四である。地價といふのは土地臺帳に揭げてある價額で、明治初年に日本全國に亙つて調査して決定したものである。尤も宅地に付ては明治四十三年に全國に亙つて地價を修正した。

地租を免除せられる土地は次の如くである

(一)道府縣市町村其の他勅令を以て指定する公共團體(例へば水利組合)に於て公用又は公共の用に供する土地(但し借料を取つて貸付けてある土地は此の限でない)(二)府縣市町村其の他勅令を以て指定する公共團體が公用又は公共の用に供すべきものと定めた其の所有地(但し一年内に公用又は公共の用に供しないときは此の限でない)(三)府縣社地、鄕村社地、招魂社地(但し借料を取つて貸付けてある土地は此の限でない)(四)墳墓地(五)用惡水路(六)鐵道用地、軌道用地、運河用地(七)保安林(八)公衆の用に供する道路。

(三) 營業收益稅(年收約五千萬圓)

營業收益稅は法人及個人に對してかけるものであるが、法人に付ては日本に本店、支店其の他の營業場を有する營利法人には營業の種類如何を問はず營業收益稅をかける。個人に付ては日本に營業場を有し次に揭げる營業を爲す場合に營業收益稅をかける。(一)物品販賣業(動植物其の他普通に物品と稱しないものの販賣を含む)(二)銀行業(三)無盡業(四)金錢貸付業(五)物品貸付業(物品の意味は(一)と同一である)(六)製造業(瓦斯電氣の供給、物品の加工修理を含む)(七)運送業(運送取扱を含

む）(八)倉庫業(九)請負業(十)印刷業(十一)出版業(十二)寫眞業(十三)席貸業(十四)旅人宿業（下宿を含み木賃宿を含まず）(十五)料理店業(十六)周旋業(十七)代理業(十八)仲立業(十九)問屋業。

營業收益稅は營業の純益に付之を賦課するのであるが、法人の純益は各事業年度の總益金から總損金を控除した金額に依り、個人の純益は前年中の總收入金額から必要の經費を控除した金額に依る。個人の純益金額四百圓に滿たないときは營業收益稅をかけない。又次に揭げる營業の純益には營業收益稅をかけない、(一)政府の發行する印紙切手類の賣捌(二)度量衡の製作(三)自己の採掘し又は採取した鑛物の販賣(四)新聞紙法に依る出版(五)外國に在る營業場に於て爲す營業(六)法人の漁業又は演劇興行(七)個人の自己の收穫した農産物、林産物、畜産物若くは水産物の販賣又は之を原料とする製造（但し特に營業場を設けて爲す販賣又は製造を除く）。

營業收益稅の稅率は法人に付て百分の三・六、個人に付て百分の二・八である。

(四) 資本利子稅（年收約千五百圓）

資本利子稅は日本に於て資本利子の支拂を受ける者にかけられるので、資本利子稅をかけられる資本利子は次のものである。甲種は公債、社債、産業債券若は銀行預金の利子又は貸付信託の利益で、乙種は第三種の所得に付納稅義務を有する者の第三種の所得中營業に非ざる貸金又は預金の利子である。資本利子の計算は甲種に付ては支拂を受くべき金額に依り、乙種に付ては前年中の收入金額に依る。

甲種の資本利子中、次に揭げるものは資本利子稅をかけない、(一)所得稅法其の他の法律に依り第二種所得稅をかけられない者の支拂を受ける利子（例へば北海道府縣市町村其の他命令を以て指定する公共團體、神社、寺院、祠宇、佛堂及民法第三十四條に依り設立した法人には所得稅をかけない）(二)貯蓄債券又は復興貯蓄債券の利子。

資本利子稅の稅率は資本利子金額の百分の二である。

(五) 相續稅（年收約二千萬圓）

日本に在る財産に付て相續が開始したときには、開始地が日本に在ると否とを問はず、又被相續人若くは相續人が日本臣民たると否とを問はず、相續稅をかける。尤も被相續人が日本に住所を持つて居るときは次に揭げる(一)(二)(三)の財産に相續稅をかけるが、住所を持つて居らないときは(一)(二)のみにかける。(一)日本に在る動産及不動産(二)日本に在る不動産の上に存する權利(三)其の他の財産權。

相續財産の價格は相續開始の時の價格に依るのであるが、課稅價格が家督相續に在つては五千圓、遺産相續に在つては千圓に滿たないときは相續稅をかけない。軍人軍屬の戰死又は戰爭の爲受けた傷痍疾病に起因した死亡に因り相續開始した時は相續稅をかけない。

相續稅は課稅價格を多くの級に區分し、其の各區分に對し相續人の種類に從つて遞次に各稅率を適用して之を課する。相續人の種類といふのは、家督相續に在つては(一)相續人が被相續人の家族たる直系卑屬であるとき(二)

相續人が被相續人の指定した者、民法第九八二條に依り選定せられた者、被相續人の家族たる直系尊屬又は入夫であるとき（三）相續人が民法第九八五條に依り選定せられた者であるときの三の場合に依り各稅率が違ふ、遺產相續に在つては（一）相續人が直系卑屬であるとき（二）相續人が配偶者又は直系尊屬であるとき（三）相續人が其の他の者であるとき三の場合に依り各稅率が違ふ。例へば一萬圓の相續財產の稅額は家督相續の（一）の場合に五五圓（二）の場合に六五圓（三）の場合に九〇圓、遺產相續の（一）の場合に一二八圓（二）の場合に一五三圓（三）の場合二二二圓である。

（六）登錄稅（年收約五千五百萬圓）

登錄稅は（一）不動產に關する登記を受けるとき（二）船舶に關する登記を受けるとき（三）鐵道抵當原簿又は軌道抵當原簿に登錄を受けるとき（四）工場財團登記簿、鑛業財團登記簿又は漁業財團登記簿に登記を受けるとき（五）船舶の登錄を受けるとき（六）商事會社其の他營利を目的とする法人が登記を受けるとき（七）辯護士名簿に登錄を受けるとき（八）醫師、藥劑師、獸醫、蹄鐵工が官簿に登錄を受けるとき（九）海員が官簿に登錄を受けるとき（十）著作權に關し登錄を受けるとき（十一）特許に關し登錄を受けるとき（十二）意匠に關し登錄を受けるとき（十三）實用新案に關し登錄を受けるとき（十四）商標に關し登錄を受けるとき（十五）鑛業權に關し鑛業原簿に登錄を受けるとき（十六）砂鑛業に關し砂鑛業原簿に登錄を受けるとき（十七）漁業權又は入漁權に關し免許漁業原簿に登錄を受けるときに賦課せられる租稅であつて、稅率は種々雜多である。

（七）酒稅（年收約二億圓）

日本の酒稅は（一）酒造稅（二）酒精及酒精含有飲料稅（三）麥酒稅の三種に分れる。

酒類を製造する者には其の造石數に應じ次の割合を以て造石稅をかける、之が酒造稅である。第一種、酒精分二十三度以下の濁酒、一石には三十六圓。第二種、酒精分二十三度以下の淸酒、白酒及酒精分三十度以下の味淋燒酎、一石に付四十圓。第三種、酒精分三十度を超え四十五度以下の燒酎、一石に付第二種の金額に酒精分三十度を超える一度毎に一圓五十錢を加へた金額（例へば四十五度の燒酎は六十二圓五十錢）。第四種、酒精分二十三度を超える淸酒、濁酒、白酒、酒精分三十度を超える味淋及酒精分四十五度を超える燒酎、一石に付酒精分一度毎に一圓八十錢（例へば四十六度の燒酎は八十二圓八十錢）。

酒類といふのは淸酒、濁酒、白酒、味淋、燒酎の五種である。酒類を製造しようとする者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者には、一石に付原容量百分中純酒精の容量一箇毎に一圓八十錢の割合を以て、其の石數に應じて造石稅をかける、但し一石に付四十二圓の割合を下ることはない、之が酒精及酒精含有飲料稅である。尤も葡萄酒及果實酒には酒精含有飲料稅をかけない。酒精又は酒精を含有する飲料を製造する者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

麥酒を製造する者には一石に付二十五圓の割合を以て其の造石數に應じ造石税をかける之が麥酒税である。麥酒を製造しようとする者は製造場一箇所毎に政府の免許を受けなければならぬ。

(八) 砂糖消費税(年收約八千萬圓)

內地消費の目的を以て製造場又は保税地域から引取られる砂糖、糖蜜及糖水には砂糖消費税をかける、消費税の割合は次の通である

一 砂糖

第一種 砂糖の色相が和蘭標本第十一號未滿の砂糖

甲 樽入黑糖 百斤に付一圓

乙 樽入白下糖(但し分蜜したもの、白下糖以外の砂糖に加工して製造したもの及全部又は一部の新式機械に依り製造したものを除く) 百斤に付二圓

丙 其の他のもの百斤に付二圓五十錢

第二種 砂糖の色相が和蘭標本第十八號未滿の砂糖 百斤に付五圓

第三種 砂糖の色相が和蘭標本第二十二號未滿の砂糖 百斤に付七圓三十五錢

第四種 砂糖の色相が和蘭標本第二十二號未滿の砂糖 百斤に付八圓三十五錢

第五種 氷砂糖、角砂糖、棒砂糖其の他類似のもの 百斤に付十圓

二 糖蜜

第一種 氷砂糖を製造するときに生ずる糖蜜

甲 糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の七十を超えないもの 百斤に付三圓

乙 其の他のもの 糖分を蔗糖として計算した重量百斤に付 八圓三十五錢

第二種 其の他の糖蜜

甲 糖分を蔗糖として計算した重量が全重量の百分の六十を超えないもの 百斤に付一圓

乙 其の他のもの百斤に付二圓五十錢

三 糖水 百斤に付七圓三十五錢

(九) 織物消費税(年收約四千萬圓)

織物には織物消費税をかける、但し綿織物にはかけない、綿織物といふのは全重量百分中九十五以上の綿を以て組成し、絹、人造絹金屬絲、金屬箔、漆糸又は漆箔を交ない織物である。織物消費税の税率は織物の價格の百分の十である。

(十) 取引所税(年收約千萬圓)

取引所税には取引所營業税と取引税との二種がある。取引所には賣買手數料の收入金額の百分の十五の割合に依り取引所營業税をかける、但し會員組織の取引所にはかけない。

取引所に於ける賣買取引であつて差金の授受に依つて決濟を爲し得るものには其の賣買の各約定金額に對し次の税率に依り取引税をかける。

第一種 地方債證券又は社債券の賣買取引

甲 七日以內の期限を以て履行期と爲すべき取引に屬するもの 萬分の〇・六

乙 其の他のもの 萬分の一

第二種 有價證券の賣買取引

甲 萬分の一・五

乙 萬分の二・五

第三種 商品の賣買取引萬分の二・五

國債證券の賣買取引には取引税をかけない。(完)

(四、九、一二)

島津日向守

東 秀雄

七

床の花瓶には、天竺牡丹の白いのが生けてある。軸のお家流は孝明天皇の御宸翰にて、次がソノ全文なのである。

「過日はかね一薩州よりの御所望等送り下され先づ以て忝なく存候。即ち開き見候處何れも過分の御品大にびつくり。日々用ひ候には宜敷すぎ候事と存候。然々珍敷仕立方萬端篤々大に喜悦限りなく候。宜敷御禮申入候。又々御序の節は不堪喜悦の段御傳へ希入候」

先年皇居炎上のお見舞として、齊彬は近衞右府を通じ、羅紗一卷、金子五千兩、黄金作りの大小一腰、ソレに鳳笙「鈴蟲」一管を献上したが、右御宸翰はその時、近衞家に賜はつたものである。皇室の式微に就ては、幼い頃からつねに祖父重豪に教へられてゐたので、尾張大納言始め、當路の要人などにも幾度となく、ソノ非に付き、考慮を求めて來たのであつたが、近衞家から右御宸翰が、彼の手許に届けられた時には、流石に胸が濫れるのだつた。

風熱の爲め四五日前から、この部屋に伏せると同時に、かけ替へさしたのが、その軸である。寢床は床の方を枕にして、のべてある。熱苦しいからと言つて、蚊帳はワザと取外させたので、白羽二重の彼の寢姿は、ソツクリむきだしに横はつた。名香の香りが四邊に滿ち〳〵てゐる。蟬時雨の城山を吹きあげる薫風が、ソヨ〳〵窓口から忍び入るたびに、枕許に置忘られた懷行文字の本の頁が、囁きながら起伏した。

ツイ今し方まで側係吉彌を枕邊ちかく呼んで、主従二人心ゆくまで御宸翰に現はれ給ふ大御心の畏こさに泣浸り、忠勤を誓つて後、郡奉行役時代の吉彌の、領内宮之城村に於る人助けの隠れた政績など談笑し、シンミリと政道談など語りながら、當座の褒美だとあつて、自らの題詩に成る「智者如太陽。仁者如大地。忠者如大海。勇者如大濤。業者如太虛」の半折を取らせたとした彼であるが、今は唯昏々と眠りこけて、靜かな鼾のやうな寢息が、細々と續いてゐた。

齊茂は夢を見た。

血潮のやうな執念の火が、瞋恚の焔を立てながら、烈々と燃え狂つてゐる。燃料の豆がらは釜の下に咆哮し、釜の中の青豆は、沸り立つ湯玉の間をノタウチながら、悲しい聲で泣きさけぶ。

「ハテナ？」

齊茂は急いで眼をこすつた。不審にたえないさまである。だが、再び眼を見開いた時には、四邊の情景はモハヤすつかり、變つてゐた。

「ヤヤッ！」

ソコは綺羅を盡した王宮の一隅である。スベテが支那の三國時代の風俗だつた。上段の玉座に控へたのは、タシカに魏の文帝にちがひない。なぜかヒドク不機嫌な顔である。そこから十歩ほど向ふに、一人の重臣が帝に對して、悄然と頭を垂れて佇んでゐる。文帝の弟で今は東阿王の曹植だつた。

「朕は愚か者ぢや。今まで汝の鬼才を存ぜずにゐた。鳳輦の窓口から忍び入る雄風に、京童の口ずさむ謠聲を聞いた時、朕が心は轉動した。文帝に過ぎつる物が何とやらで、汝の詩才がその一つだそうな！したが朕とて、位苟くも九五の尊を極める身である。潔よく不明を天下に謝する前に、何よりも先づ、事の實否を檢ためなければ相成らぬ！」

「――――！」

植は悵然として語もない。

「で、早速ながら、朕は汝に嚴命する！ よいか、ソコから朕に向つて七歩だけ、はこんでみよ。唯七歩だぞ！」

「――――！」

「まだある。重要な問題は、五言七言何れにても苦しうない。唯詩一篇だけ賦することだ。但しソノ七歩をはこぶ間にだぞ！ よくわかたらうな？」

「は！」

「巧く參れば、それでよし！ 萬に一つも仕損じたら、嚴そかに誡め申し聞け置く。朕の佩刀は、スグさま汝の手足を分つであらう！さ、もはや一刻も猶豫まかりならぬぞ。いざ進まれいッ！」

文帝の最後の語が、雷霆のやうに轟いたと、殆んど時を同じうして、東阿王の切なげな歩武は、こくそくとして刻まれた。

「それ七歩だ！」

傲然と勝ちほこるやうな文帝の聲だつたが、ソノ刹那、東阿王の脣をふるはしながら、玉振のやうに朗々と冴え渡る吟聲は、左の五言であつた。

「煮レ豆持作レ羹。漉レ豉以爲レ汁。
萁在二釜底一然。豆在二釜中一泣。
本是同根生。相煎何太急」

ソノ切々たる詩韻が、十六善神の私語みたやうに、人間本來の靈魂に優しく、併しながら嚴そかに呼びかけた時、黄金作りの佩劍は文帝

手のを離れて、戛然と床上に叩きつけられてゐた。飛鳥の翔みたやうに両手ひろげて、玉座を飛降りるなり、ヒシと東阿王の可憐な姿を抱〆めると、兄弟二人の面には、瀧津瀬のやうに、潸々と涙が流れつゞけた。腸をかきむしるやうな、悲痛な哭聲がわなゝき起つた時、齊茂はハタと悪夢から目ざめてゐた。

「おう！」

この嘆息の内容は、ふくざつである。うす眼にとぢられた瞳の底には、異母弟齊久との疎ましい關係が、思ひうかべられて來た。彼は自分自身の思ひ僻んだ心から、事毎に横車を兄に推さうとばかりする、ソノ齊久の反省なさが、寂しかつた。妾腹に宿させられた者の、皆が皆もつ淺ましき宿命とは知るものゝ、ソレが爲め無明業障の人間の姿が、やるせなく思へぬことは、ないのである。系圖の上では、高祖惟宗忠久は、丹後の局の胎内から出た、征夷大將軍　源　頼朝の落胤である。將軍の骨肉疎害の殘忍さは、史乘の記する所であつた。

「悪くしたら、血汐のセイかも知れないな！」

彼は憮然として、嘆息した。豆を煮たがる豆がらも悪いが、豆がらを焚付けようとばかりする人々の心なさが、彼には一等悲しかつた。

暗くのみ結ぼうれゆく心の内には、憂はしげな幻のみが寄り集かつた。妻犀月は數ケ月以前から、持病の癪で今も伺臥せりつゞけてゐるのであるが、近衛右府の愛女と生れて、あはよくば、雲の上にも翼を比べたであらう、やんごとなき身分だけに、之まで幾度となく、眼

に飾るほどの痛ましい惨劇の幕切に、立たされてばかり來た、ソノ酷たらしい運命を思ひやると、流石に聖雄の心緒も、麻の如く亂れて來ない譯には、ゆかぬのだつた。

「持病の起りは、月若と菊姫の夭折からだつた！」

ウツかり呟やきに成つて現はれるまでに、彼の嘆きはせまつてゐる。ソノ子供らの病死を、世間では口々に何者かの呪ひだと噂し合つてゐるらしい。あの頃までは何の馬鹿なと耳にさへ入れずに來たが、そう言へば、如何にも不思議な病態であつた。それに！　近來からの將監一味の叛逆ぶりは、驕りといへば人もなげなる露骨さである！

「では、やつぱり、さうだつた、のかな？」

不覺の懼みが、潮のやうにさして來た。

何の罪とがもなく、無益な犠牲にそなへられた小さな二人の、哀れにもいぢらしすぎる面かげを、熟々と思ひうかべて、彼の父性はしどろだつた。

（だが、もしもそれさへ、大君の御爲であると言へるなら、まだ浮む瀬もあらう！　ソンな風にも、考へれば考へられるやうな）

ポロリ、涙が一雫だけ、眼尻からコメカミへすべり落ちた。彼は涙の中から、ジッと人間相剋の相を見つめてゐる。それは、どんなに考へてみても、だが、どれもかも、みんな一個のアヤツリ人形でしかないやうだつた。背後に動くものは、眼に見えぬ黒い大きな手！　人天を超越した無限絶對の宇宙意志、ソレである。順逆、邪正、作故、隆

合、和敬、清寂　何一つとして人間個々の努力では、どうにも仕方ないのだと思ふと、心の前に突付けられるものは、唯々悲しい「宿命」の鞭に追ひ立てられゆく、無力の「二足獸」（蹌踉たる群列のみであつた。

「憎んでならうか！」

彼は沁々と、詠嘆的に獨りごちた。

「我れ人ともに、哀れにヤルセない、業感の人生なのでは、ないのか！」

かほどまで、おし深まり、おし高められた心の世界では、善惡も邪正も、所謂普遍妥當性などいふ、平面板上に檢査し批判すべき、相對的なものでは、決してなかつた。ソレらは元來からして絕對的なもの、否、それよりも寧ろ、宿命的因緣からのみ、各自が各自の個性の中に發見し、敬拜すべき性質の物だつた。だから彼は、自らの見解と道とを尊ぶと共に、又ソノ同じ敬虔謙虛な心を返して、他人の見解と道とにも、敬意をさゝげた。自分自身の靈魂を汚す、さもしい利己の小慾をさへ外にすれば、だから、將監一味齊久一派の作爲主義作爲道にも、彼の心はうなづけた。

彼の面は、見る〳〵春のやうな光に潤はうて來た。ニツコリ微笑みながら、朗らかに彼の唇は微吟する。

「悠々五十年。功罪付二吳姬一」

一代の榮辱、千載の毀譽。ソンなことなどドウでもよいのだ。ソンなことではない。要は唯「まごころ」一つ！　たゞそれ一つの問題なのである！

八

「煎じ藥だな！」

「ハイ！」

齊茂は八重子の手から、お庭燒の茶碗を取上げて、立上る湯氣を見入つてゐる。天井裏の硝子玉には、煌々と不思議な電氣の光が、輝やいた。恐らく我國、開闢以來のレコードであらう。ソノ不可思議な機械作業の技師長とても、齊茂自身だつたのである。暗澹の中にゐても朗けさを失はぬ所は、祖父齊興ソツクリだつた。彼は忙中の閑に乘じて、硝子の製造にも熱心し、寫眞技術の習得にも沒頭したりした。

「少しマダ熱いな！」

窓の外には、夕闇が仄かである。

呟やきながら、唇を茶碗の緣へ附けようとした。

「アレツ！　い、いけませぬ！」

八重子の唇が、戰のき叫んだ。

「なぜだな！」

ふつくらした娘子である。

「な、なぜでも——」

「ワン！」

彼女の頓寄な面に、狼狽の色を見つめながら、暫くソノ後を待つたが、それ限り話は途絶えてしまつた。

「ハハハ！」

さりげなく、うち笑ひはしたものゝ、彼の顔色は急に引きしまつて、しまつてゐる。

「お殿様！」

ソレは藪から棒に、改まつた聲であつた。

「何と申す？」

「あのう――！」

一伍一什を、アケスケにぶちまける覺悟で、口は切つたものゝ、それだけ言つてしまつてから、グッと詰つた。考へれば、成程まだどちらとも、明言出來かねる事ではある。痛々しい女心が傷つき易い柔らかな胸の内側で、小禽のやうに、バタつき悶えた。

考へてみると、さつきの父良白の顔色といひ、スペテの容子が、たしかに尋常ではなかつた。骨肉の間に悲しい秘密を抱く者のみに、見出される特種の憂欝と、大それた陰謀に與する者のみに許される、不安にそよぐ険悪な瞳の、激しい光とを結合はしてみたゞけで、彼女の頭にはモハヤ一切が、解つたやうに思はれてはゐたものゝ、扨てイザとなると、口に出してはなかく\ソレと、言へぬのだつた。

(君の生命と父の生命！　父の生命と臣の道――――！)

いろ\/\な想念が、頭の中に渦巻きあふれた。遣場のない當惑が、瞳の底でタジろいだ。

「ハッハッハッ！」

齊茂はだしぬけに、笑ひだした。八重子の不得要領な沈黙に對してよりも、寧ろ、自分自身の馬鹿々々しい、疑心暗鬼に對してだつた。藥碗の手ざはりでは、モハヤ藥も飲み心地に冷めてゐる。決然と唇に寄せ附けた時、八重子の手の先が、白魚のやうに空を跳ねた。いきなり藥を奪はれた驚きを、沈黙の疑惑に托して、ソコからジッと女のたゞならぬ面色を見まもつたが、スデにその時、藥の碗は空だつた。一滴のこらずあほり終つた彼女は、ニッコリ面をほゝ笑まして、ソノ時初めて厳かに

「お殿様！」

と、呼びかけた。

「お聽き遊ばしたことゝ、お察しいたしますが、ドウぞお赦し遊ばしませ！　之れには深い事情のあることゆえ、委しくお話を申上げねばなりませぬが、ソレよりも、今暫らくの間さへ、お待ちくださりますれば、スペテは何事も明らかになることゝ、存じます！」

哀れに悲しい聲だつたが、それでゐて、どこかに一念の力強さの、潜んだやうな聲だつた。

「八重子！」

冷酸石のやうな沈黙を破つて、初めて齊茂が、だしぬけに口を割つた。彼女の一切の容子で、彼にはモハヤ、謎のすべてが解けてしまつ

て、ゐるらしかつた。

「お前は俺の、身代りに立つ氣だな！」

「ホホホ！」

寂しい、けれども滿足の微笑と共に、夕顏のやうに淸く仇やかなソノ頰邊には、歡びの淚が滂沱として流れおちた。激發した仄かな苦悶が彼女の心身を捉へた時、齊茂の病軀はいつの間にかハヤ、寢床から滑り出して、シツカリ彼女を抱支へてゐた。

「テモ、不愍な奴！ 苦しいだらうな？」

顏色を白まして靜かに聞くと、八重子はニツコリ冠りを振るのだつた。膽の中で、二三度大うねりを打つた恐ろしい苦惱が、グツと胸先へ突上げて來るのを、下脣くひしめながら、懸命な死力で戰つてゐたが、不可抗な衝動がいきなり上下の顎を、おし開けた瞬間、カツといふ音と共に、土器色の口脇からゴボツと溢れ出たのは、どす黑いどろどろの血糊だつた。彼女は半ば喪心しかけながらも、ソコは平素の嗜みから、あり〱と恐懼の色を滿面に漲らして、主君の抱擁の中から、身を外にモガき出そうとあせるのだ。限りなき愛憐の眼で、齊茂はソレをいぢらしく眺めながら、淚ぐみながら、益々強く抱きすくめて、着物の袖で靜かに口脇の血糊を拭き、右手の掌でソコヽと撫でさすつてやるのである。と、八重子の瞳に異樣の光が、仄かに生々と燃え輝やいて來た。

「お殿樣！ 八重ほどこの世に、仕合者はございませぬ！」

感動にみちたソノ語は、もはや一切を委ねべき者へ、委ねえた者の心安さで裏付けられてゐた。彼女はモハヤ齊茂の抱擁と介抱から、逃れようなどヽはしないのだつた。

「それほどまでに！ では、お前は――？」

曾て一度も心にとめぬことであつたが、彼女のさつきからの仕草、言ひ草！ 戀より外の何物でもないと解つてみると、齊茂の胸も燃えて來た。

「ハイ！」

吃々たる問ひへの答へは、かすれかけた、けれども冴々とした聲だつた。ソレは如何にも生命がけの告白らしく、別段面を袖に掩はんとさへしなかつたが、それでも流石に女心の消えも入り度い面はゆさはあると見え、晒し物のやうに全く血の氣を失つたソノ面にも、思ひなしか、ホンノリとばら色の光彩が、たまゆらの瞬を掠めたやうだつた。

齊茂は心の中で、嵐のやうな物すごい衝動と戰ひつゞけてゐたが、いきなり脣を彼女のそれにおし附けると、力限りに彼女の體を抱きしめつけた。夢ましく閉ぢられた女の眼尻からは、滴々として淚が落ちる。

「八重子！」

脣を離してから、齊茂は切なげに呼んだ。

「言へ。申殘すことが、あらう？」

「ドウぞ、お憎くもございませうが、妾の愚かな父を、お赦しなされ

てくださりませ！　父はアレでも、決して悪黨ではございません。スペテは持ち前の臆病からで、ございます！」

ソノ聲は夢のやうに、儚なかつた。

「安心いたせ！　その儀シカと承知致したぞ」

「コノ、ご鴻恩は、生々世々――！」

「それよりも、まだ外に何か、申すことでもないだらうな？」

八重子は、靜かに冠りをふつて

「お殿様へのみ、献げてゐました生命をば、父とは言へ、他し人の爲めに捨てゝしまひますのが、タッタ一つの思ひ殘りで、ございます！」

「イヤ！」

と、言ひかけて、齊茂は急に語を途切つた。恐ろしい痙攣が、だしぬけに彼女を捉へたからである。

外には狂風一陣！　滿山の木々の梢の騷音にうち續いて、バラ〱ッと打ちつける庇の雨音！　部屋の光が俄かに冴え返つて、ホー〱と啼く梟の聲の、千切れ〱に聞えるなど、哀別離苦の惱みを、イヤが上にも、深めてゐた。

九

巍々たる花崗の高石塀の内側から、柱時計の音がチーンと聞えて來た。二時半らしい。滿吠の犬の聲さへない靜かな夏の夜空には、銀砂子みたやうに無數の星が、チカ〱とまたゝき交して、百二都城の明りを照した。ソノ白々と星晴れた空の下に、黑々と默し横たはるのは、城山である。

塀の外は、木かげになつてゐて、暗い。

と、ピタッと、どうやら人の足音らしい氣配がして、だしぬけに曲者の黑い影が、塀の根に身を附けながら、地べたを這ふやうにして、門の所へ近づいて來る。よく見ると、ソレが一人どころか、十數人の影である。地虫の聲が一度に止んでしまつたのも、氣味の惡い取合せだつた。

勤王派一味でも、殊に大山帶刀を盟主とする少壯兵兒の一團は、かねて將監一味の佐幕派を、一徹の血氣から不倶戴天の仇にしてゐた。月若君兄妹の夭折に伴ふ流言に觸れた時、彼等は已に事を謀らうとしたのだつたが、それがどうして解つたものか、瀧川靜馬に呼びつけられて、眼玉の飛出すくらゐ、帶刀は叱られた。

「それぢやと、申して！」

「イヤ！　大鵬の志は燕雀にはわからぬ。御殿のミ心を、我々風情で忖度するのは、マチガヒだ」

いきり立つ心も、靜馬の先輩らしい圓滿な說得で、手もなく參らされた帶刀ではあるが、今度フトした機會で、娘八重子の死に關する具臣の涙の告白を、コノ二つの耳に聞取つてしまつた以上、一刻も怠けておけぬのは島津將監と其一味だつた。だが、巍々たる鬪城の主を以

て、これほどの陰謀を抛くに就ては、ソコに必ず何等かの偉大なる背景が、なければならない。帶刀の考へでは、それを齊久母子だと見たのである。言ふまでもなく、今夜の曲者はその壯士の一團だつた。彼等は一擧先づこの母子二人を弑殺して、奸雄島津將監の肝膽を寒からしめんとするのであるが、ソレを斬姦の血祭りに疾風迅雷將監以下の姦黨を、一人餘さず屠り盡さうと言ふのが、全隊の手筈だことは、勿論である。

一つの人影が飛鳥のやうに、櫺門の際に手をかけた。が、ダツとぬれ手拭の物に當るやうな怪しげな物音と共に、「ウーン！」と唸いて、その人影はドタリと地べタに、落ちくづれた。

「ヤヤヤ！」

この意外至極な椿事出來には、流石に一同肝を潰したモヤウだつたが、帶刀は獨りひそかに下唇を喰ひしめたまゝ、ニヤリ笑つてゐる。ホンの轉瞬のことではあつたが、かの紫電の流れにも似た、物すごき殺刄のかげにチヤンと丸に十文字の袖の紋所を、見とめて置いた。

「山！」

ソレは「動くな」の合言葉である。帶刀は嚴そかにその一語を同志に殘して、單身コンモリとした木かげの闇に猪突した。

「エーイツ！」

凄絶無比の、示現流の氣合！

眞向みぢんの鋭い太刀風を、颯とかはして横に拂つた得意の瀧返し！　相手の曲者もさることながら、帶刀流石に一流の達人だつた。ガツキと受止めた相手の刀身から、パツと火花が赤く散る。

「將監樣！」

「わかつたな！」

覆面の二人は鍔ぜりの間に、眼と眼を見合せて、ニヤリと笑ふ。

「ドウぢや、驚いたらう？　汝等の來るのを、待つてゐたのぢや」

將監は言ふ。存んだ態度である。

「お前だけは、きれいにお洗ひ置きで、ござりませうな？」

帶刀の一語も、不敵だつた。

「猪口才なことを、申すな！」

「ハツハツハ！」

だが、帶刀が「打入り」の合言葉「イン」に答へて、同志の面々がソレとばかりに犇めき立つた時、將監の呼子に應じて、ゾロ〳〵と木かげから立ち現れた覆面の一隊を眼にとめると、流石に帶刀一味の心にも、驚きと不安とが掠めすぎずには、居らなかつた。物すごい修羅の繪卷が展開されたのは、次の瞬間からであつた。

塀の內側は、三之丸の館邸である。

尋常ならぬ物の氣配に、眠つてゐた三郎齊久はパッチリ眼を見開いたが、ソノ時外面から傳はり來たのは、陰慘なる殺陣の氣合だつた。

「ヤ！」

むつくり刎ね起きて、褥の上に端坐すること、稍しばし！

「ハテなあ？」

吐息のやうに呟いて眼を閉ぢようとしたが、何か思當りでもしたやうに、俄かに「ウン！」とうなづいて、忽ち眼を見開くのだつた。

「日頃重富は、ゴ用心召されいと申し居つた！　不逞の徒が妄動を始めさうだといふことも、語の端に香はせ居つたぞ！　或ひは？」

彼はハッタと、屋外を睨みつける容子をした。兄齊茂とは、體も小粒で色も淺黑く、相貌にも福々しい圓滿さが缺けてゐる。だが、上反つた一文字のうす脣、尖り鼻、尻上りの太眉、秀でた角額、爛々たる眼光、スベテは悉く、短慮と、慓悍と、負けじ魂と、利かぬ氣と、そして奇才の象徴だつた。年頃は三十内外!?

「だが、何しにコノ我輩が、身邊を警戒しなければ、ならないのか？　何しに他人の怨みなど受けねばならぬのか？」

どんなに考へてみても、彼にはソレが解せないのだ。

（勿論我輩は佐幕主義ぢや！　兄上の信條には反する！　だが、兄上は兄上、我輩は我輩である！　一寸の虫にも五分の魂、何で又我輩が一々、兄上の指金通り、動かねばならないのか？　わからぬ！　トンとわからぬ？）

彼は心で不平つてゐる。

事實、齊久としてみれば、無理もないことであつた。將監側こそ齊久を盟主のつもりで、色々と之まで策動もし、危ない綱わたりもして來たが、齊久の方ではソンなことなど、ゆめ與り知らぬことであり、又與からうともしないことで、あつたらう。彼は性格から言つても、容易に人を容れたり、他に與したりするやうな男では、ない筈だつた。妻子からさへ、はなれてゐた。

ソノ猾狂の性格を誰よりもヨク知つてゐるのが、母お由井である。そしてソノ性格の半面を裏返せば、鵜の毛の先ほどの不正不純も、めつたにさし許さぬ、生一本の激しい氣性だつたが、彼女はそれも呑込んでゐた。將監一味との結托についても、だからこそ彼女は今日が日までツイぞ一度も、彼の前では噯にすらも出さないのだつた。

「ヤ！」

と、だしぬけにベリ／＼と、雨戸を引裂く音がする。

スックと立上つた寢卷姿には、朱鞘の枕刀が左手に握りしめられてゐた。「薩摩人一不」なのである。有明の灯を消すと、障子の開く音が闇中に聞えた。

「誰奴ぢやッ！」

いきなりサッと雨戸を引開けると、齊久の大喝が怒氣をふくんで誰何した。

お由井の眼ざめは、ソレからいくらも經たなかつた。たゞならぬ殺氣の肉薄を感ずるなり、彼女の顏色は變つてゐた。かねぐ＼將監から、ソレとなく幾度も注意のあつたことではあるが、その度ごとにマサカと高をくゝつてゐたら！　彼女は褥から立ち上つた。廊下づた

ひに齊久の寢室を訪づれてみると、居ない！　空洞の光の中には藻脱の殼のみが目に附いた。

「オヤ！」

でも、まさか？　と思つてゐた瞬間、斷末魔の悲鳴が、庭から徐ぬけに聞えて來た。

「タ、タ、たはけ者奴が！」

勝ちほこつたやうな、甲高なソノ罵聲が、まぎれもない齊久の聲だとわかると、彼女は我を忘れて緣側へまろび出た。雨戸の隙から庭面を眺めやると、泉水の周りには覆面の曲者どもが、犇めきながら入亂れて斬結ぶ。仄々とした夜明前の薄明を幸ひに、ソコから齊久を物色してみたが、ダメだつた。

「これはやつぱり？――ドウやら、それにちがひはない！　さて――如何いたしたものであらう？」

　とつおひつ、思案にくれてゐると、忽ち耳に附いたのは、たしかに馬蹄の音である。之は帶刀の妻芳江の密告に由り、スハこそ一大事と、乘馬で馳著けた左衞門であつたが、時すでに遲かつた。お由井は暫らくそこに佇ずんだまゝ、次第に近づく馬蹄の音に耳を澄ました。馬上から門前の亂鬪者に、何か大聲で呼びかけてゐる聲を、國老の伊集院だとたしかめ得た時、彼女は慘としてよろめいた。

「とう〳〵最後の日がやつて來た！　ソウだ、裁きの日が今來たのだ！　さ、おとなしく未練なく死にませう！　みんな身から出た錆、自業自得、誰を恨みる餘地とても、ないのです！」

　よろ〳〵と部屋の内を、廊下へ横ぎる間にも、彼女の頭の中では、哀歡を極めつくした劇的な自らの一生が、走馬燈の繪みたやうに明滅した。智慮なき母性の煩惱から、將監の誘惑に乘せられたのも、我が可愛ゆさ故であつたが、中頃から已に前非を悔ひそめた彼女が、ズルズルと行掛りに引ずられて、こゝまで來たのは、將監の默々たる威嚇の恐さゆゑだつた。亡き夫へも、思へば申譯ないことであるが、せめての手土産には、この切ない懺悔とても何程かは役立つやうに思はれる。ソノ心證としても、今の場合自盡は必要な處置である。それに、不愍な庶子齊久に對する、異母兄齊茂の心を和らげる爲にも、倘若干の效果は恰度ある筈だつたから、ソコに心がめぐり附くと、自盡の覺悟は、いとも自然に決まるのだつた。彼女は初めて深々と呼吸が出來た。ベシヤンコにおしせばまつた胸に、ソノ時寬ろぎが來たのであらう。

　白無垢の襲ねに端然と襟を正して、佛壇の間に膝まづいた彼女の姿は、神々しいまでに落著いてゐる。心靜かに香木を焚きくべて瞑目を閉ぢた面には、寂しい微笑さへも漂ふた。錦の袋にしまつた懷劍を、白木の三方から取上げて鞘を拂ふと、夏尙寒き三條の小鍛冶宗近の銘刄が、彼女の精根をしびれさす。魅られたやうな潤んだ眸が、悵然とソレに見入ると、燭臺の灯が急きたてゝもするかのやうに、ソノ焔をば、ソヽクサとさゆらがした。

齊久は愁然と自分の部屋へ戻つて來た。戸の隙間からのうす光が、そこらを仄々と白ましてゐる。朱鞘の大刀を提け立つ眼は血走つて、寢卷の前はハダけてゐた。裃に袖に眞赤な返り血が、緋鹿の子模樣を沁みつかせてゐるのが、一室の空氣を息詰るほど引緊めた。虫の知らせか、フト母のことが氣に成つた。大刀を床脇の刀架に置いて、ツカツカと廊下の方へ立去つて行つた。

佛壇の間には、名香の匂ひがあふれてゐた。朱に染まつて突つ俯した、冷たい母の死體を見つめた時、彼はソックリ石に化けた。七情の世界を越えた不可思議な靜心の緊張だつた。伊集院のさつきの言葉の端でも、大凡の事情は覗ひ知られたが、三方の上の母の遺書を讀んでから、事の次第が初めて呑みこめた。スベテは自分に對する母の盲愛が原因だつたのかと思ふと、兄齊茂の面かげが、朝日に打向ふほどに心肢ゆく思ひ浮べられる。ソレにしても、母を咎める心には毛頭成れないで、却つてその罪ふかき心根ゆえに、思慕の念ひが、限りなく深められ、募りゆくのであつた。柱時計が四時を打つのを聞いた時、ハラリ、たつた一雫だけ涙が落ちた。

「弱つたな！　サテ、兄上に何と申したら、よいであらう？」

恩愛の涙かと思へば、さにはあらで、ソレは何處までも、負けじ魂よりの憤涙だつた。

一〇

「殿！」

左衛門の聲は上釣つて、どもつて、顫えてゐた。

「——？」

齊茂は默然として左衛門を見つめる。病上りの窶れが、沈んだ眸にも潛められた。左衛門はやう／＼のことで、今曉の出來事の一伍一什を上申して後、

「實に、面目次第も、ござりませぬ！」

と、言つた。おろ／＼聲である。齊茂は、何とも言はなかつた。

「ウーン！」

たゞ、それだけである。

重苦しい沈默が、二人の呼吸を息苦しく、引緊めてゆくのである。

「如何、取扱つたもので、ござりませう？」

やがて、左衛門は言ふ。

「——？」

答へはない。寂たる書院の窓々には、はや朝の光が匂ひみち、城山の樟の杜からは、鵯の啼聲が聞えて來た。

沈默が又つゞいた。左衛門は氣が氣でない。だが、シビレを切らしながら、氣長に待つた。

「左衛門！」

やゝしばらくして、齊茂は口を切つた。

「ハ！」

左衛門は、片唾を呑む。

「仕方はない！　喧嘩兩成敗ぢや！　不愍な奴等ではあるが、禿刀一味へも同樣、切腹を申付けたぞ！」

「ハーハツ！」

特に將監等に言及しないのは、餘りにソレが理非明白すぎる爲であらう。

「だが、のう左衛門！　彼等は、誠忠無二の、者どもぢや！」

「御意！」

左衛門は、歔びに夢中だつた。

「後は何れも、手厚くして、取らせいよ！」

「ハハーツ！　畏こまり、たてまつる！」

老眼の感涙は、滴々落ちて疊に音を立てた。鞠躬如として退出しゆく後姿を、齊彬は茫然と夢のやうに眺める。

「取れば憂し、取らねば物の數ならぬ
　捨つべきものは、弓矢なりけり！」

胸息を引きよせて、一人の靜寂におし浸ると共に、彼の脣を迸つたのは、この國風の詠嘆であつた。

安政四年秋、齊彬は藩中の士卒を天保山に召集して、洋式の調練を統督してゐたが、乘馬「三日月」が松の切株に躓づいた爲め、アハヤと思ふ間に轉落して、後頭部をしたゝか岩角に叩きつけた。英醫ウイリアムの手當で、一時の急は救つたものゝ、ソノ後の經過は、日毎に惡い一方だつた。

病室に充てられた所は、磯邸の別館の一室である。今朝ほど松かげを映してゐた、表の明り障子も、夕方からは陰氣くさく翳つてしまつて、樓門の彼方からの秋汐の咽び聲が、うす暗い部屋の空氣を、傷なげに顫はしてゐる。

齊彬は今日も唯昏々と、褥の上に眠りつゞけた。十重二十重に卷立てた、繃帶のかげの氣高い面には、誰の目にもスグそれとうなづかれるであらう「死の影」がアリ〱と色濃く漂ひみちてゐるのである。

わざ〱遠い英吉利から、專門技師を招聘して、ソノ邸内の南隅に建てさした、我國最初の蒸汽紡績館の、あの騒々しい機械の騒音を聞かぬのも、今日でモハヤ幾日に成るであらう！　窓々の鐵の扉は、何れも固くとざされて、寂々たる秋山を背景に天そゝり立つ、煙を吐かぬ赤煉瓦の大煙突の悲哀は、ふかい！

英醫ウイリアムが、病室へは入つて來た。寢床の枕べちかく丸行燈の灯がともつて、窓の障子には月かげが、スヽキ尾花を描いてゐる。サラ〱と吹過ぎた風の間に、こほろぎの聲の冷々と聞え來るのも、秋の哀れをふかめてゐた。

「ドクトル？」

診察が終ると、齊久は待ちかねたやうに、容態を目で聞いて見た。

ウイリアムは、唯右手を左右にうち振るのみ。

「ホープレス？」

齊久の聲は用心ぶかく、低かつた。

「イエス、アイ、アム、ベリー、ソーリ！」

ウイリアムの答も、細々と小暗い。

「ハハハ！」

齊茂が、だしぬけに笑つたので、列座の人々は、夢でも見てゐる積りだつた。だが、齊茂は目ざめてゐたのである。

「齊久！」

と、呼ぶ。

「ハ！」

齊久は我を忘れて、にぢり寄る。

「大分、英語が物に成つたね！」

「エッ！」

齊久は、ギクリとした。

(何もかも聞かれて、しまつたのか！)

「だが、俺の餘命は、モハヤ後十分だ！」

「何を、仰せられまする！」

「イヤ！ 御身等には解らぬ。靈魂の神秘と申すので、あらう！ 俺にはソレが、よく解る！」

齊久は愁然と、語もなくうなだれてしまつた。

「後は萬事、御身にたのんだぞ！ ソレに就て、沁々名殘を、惜しみたいのだが、急いで、盃の用意を、してはくれまいか！」

「ハ！」

齊久は、スグ盃と酒とを命じた。

侍女の手から盃を取つて、波々酒を盛らせると、齊茂はグビ〳〵
麗に、それを空けた。

「いざ！」

献された盃を受けて、齊久の手は小刻みにうち顫ふ。

「ゴ返盃！」

「オ！」

齊茂は手を差出したが、彼は盃と共に齊久の手を握ると、グッと
力づよく緊めつけた。最後の努力の悲しさが、ソコから犇々と傳はつ
て來る。汪然たる感動に胸が塞がつた齊久の選んだ道は、骨も折れよ
と兄の手を、強く〳〵握り返すことだけだつた。彼が泣聲を心から外
に出してしまつたのは、後にも先にも、ソノ時限りであつたと云ふ。

一門以下の近臣たちが、近々と次々に名殘を惜しみ終つた頃、終の
やうにとぼ〳〵と、ソコへ顔を見せたのは、主膳老であつた。ワザ〳〵
上意で召されたのであるが、下手の端に兩手つかへて平伏すると、心
をおし包むものは、唯々過去の非行の恥かしさと、殿の慈恩の忝けな
さとであつた。

「主膳では、ないか？ 苦しうない。近う！」

「ハハーッ！」

主膳はモハヤ、周圍や面目に拘づらつては居れなかつた。彼はッ、

ツ、ツーと病褥ちかくまで、にぢり出て行つた。

「祖父上や父上に、言傳などはあるまいな？」

ソレ聞くと、主膳はモハヤ座に耐へなかつた。がばと疊に突伏すなり、ワツと泣聲を立てながら、感動の中にうち顫えて、ゐるのである。

「犀月どのは、居やるか？」

「ハイ！」

すべり出した彼女の顔色は、木の葉のやうに青々とふるえてゐた。

「泣いては、たもるまいぞ！」

潸々たる涙をソノ面に感ずるなり、齊彬はやるせなげに言ふ。

「ぢやと、申して！」

「イヤ、世は夢ぢや！　のう犀月殿。生れた者はやがて、皆死なねば相成らぬ！　簡單な道理ぢやが、なか〱ソレが、解り難いのぢや！」

「ハイ！」

「だが、宿命は、我等二人を、祝つてくれた！　悲しい數々の、試みを下されたのは、コノ至上の眞理を、悟らせよう爲の、天の御心ぢや！」

「始めて、よく解りまして、ございます！」

「ソレ聞いて、俺も安心！　心置なく、眼がつぶられると、いふものぢや！」

ソレは悲しい語であつた。ウイリアムが慶ましく死を宣した時、靜かな泣聲が室にみちた。

「眞暗だ！　何もかも眞暗闇ぢや！」

左衛門の顫え聲の唸きが、臨終の耳へは入ると、齊彬は惱ましげに、又瞼を開けた。

「嘆くではない。ソレが諸行無常の、姿ではないか。だが、日輪が西山に沒した後には、軈て月輪が、東山に上るのぢや、世に闇はない。あるのは、銘々の愚かさ、だけぢや！」

急に頭が、ガクリと低れたので、犀月と齊久とが、いきなり左右から抱付いて、語をかけてみると、命根は已に盡きてゐた。

「オー・マイ・デア・ゴッド！」

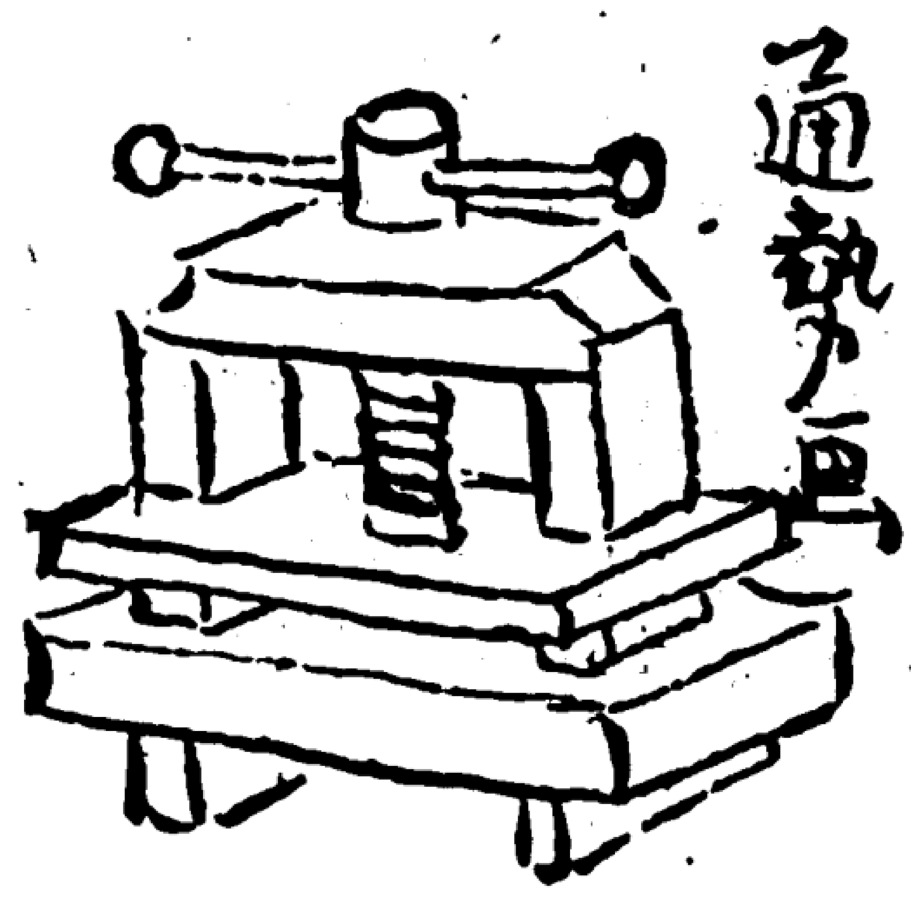
ウイリアムは、改まつた一室の泣聲の中に、兩手を胸高に組合せて、天を仰いで叫ぶのだつた。

「汝の忠實な下僕ウイリアムは、滿腔の誠意もて、余の肉眼の前に、最も尊き奇蹟をアリ〱と示し給へる、我が萬能の父ゴッドの膝下に、最大の尊敬と感謝を表したてまつる！」

後の部分は、ソウいふ意味の語だつたが、ソレは齊久にも、よくは解らなかつた。しめやかな名香のかほりが、滿ち〱た部屋の中には、逆さに立てた金屏の面に、百目ろうそくの沁んだ光が、ぬれ〱と紫に滲んで見える。お通夜の第一夜の限りなき悲しさは、沍寒の秋の夜ゆえにも、一段と骨にまで沁みゆくのだつた。

「コン〱！　コン〱！」

屋後の雑木山から聞えるのは、狐の聲らしい。うら悲しくサシ俯向いた人々には、誰一人面をあげて顧みる者も、ないのである。（完）



貧民の世界

―三河島のトンネル長屋について―

里村欣三

三ノ輪から王子行きの電車に乗つて博善社前で下車すれば、その邊の一帶が有名な三河島の貧民窟である。千軒長屋とも、トンネル長屋とも謂はれる。

直ぐ近くには博善社の火葬場があり、東京市の汚水處分池がある。人を燒く臭ひと、汚水の惡臭がフンプンと風に漲ぎつてゐる。

三ノ輪から火葬場へ行く大通りには、日に何十回となく金ピカの葬儀自動車と、白い棺桶が通過する。またはボロ半纏に白い上衣をひつかけた葬儀人夫の群れが、行列を崩してゲラゲラ笑ひながら花束と供物を捧げて通る。

すると、その度に頭をザンギリにした白痴らしい娘が跣足のまゝで、露路裏から發作的に駈け出して來たり、頭の鉢の歪んだ子供たちが、燒芋屋の軒下からパッと蒼蠅のやうに群れ立つて殺到したりする……。

この憂鬱な大通りに區切られた裏街一帶の地域が、養豚場よりももつと汚濁した惡臭と、混亂した騒々しい雰圍氣をもつ千軒長屋の貧民窟である。戸數は千二三百軒と謂はれてゐるが、その戸數の七倍に餘る一萬人に近い人口が抱擁されてゐるのだから驚く。

私たちが何かの役人でゞもあるやうに、ブラリとこの地域に足を踏み入れた瞬間に、先づ度膽を拔かれるのは、髮の亂れた女房や腹の出ばつた出臍の汚ない子供達の群れが、駄菓子屋や煮賣屋の軒先きに群集して暴徒のやうに立ち騒いでゐる光景である。或ひは[illegible]の數であるジメジメと泥濘る横丁で、いゝひろめ屋の飄輕な口上を包圍してゐる群集の異様な風態と、泥まびれな跣足である。または狹い袋路を[illegible]らけにして、尻を端し折つた女房連が共同栓を取巻いて、人通りの中で公然とボロ半纏や赤い腰巻を洗濯したり、虫の喰つた菜ッ葉をすゝいだりしてゐる光景であらう。

そしてこれらの混亂した雜多な情景を押し包んで、何んとも得體の知れない音響が、騒然と空に渦巻いてゐる。私たちは忽ちにこの雜多

た音響が、無數の赤ン坊の泣聲であり、喚めき聲であり、內職の槌を打つ音であり、怒號であり、齒入屋の鼓の音……と云つた無數の器物と人間の聲の綯ひ合つた複音であるのに氣付く。

若しも私たちがもの丶十分間も注意深く、この騷々しい狹路に彳んでゐたならば、ひろめ屋の樂隊に飽いた子供たちや、洗濯を濟ませた女房連が、それぞれ漬物屋の空樽を積んだ露路へ、掃き溜めを置いた八百屋の横丁へと吸ひ込まれて行く姿を認めるであらう。

この人間一人がやつと肩を窄めて通り拔けられる露路の兩側にこそ、トンネル長屋と謂はれる一棟三十軒づゝ位な棟割長屋が向ひ合つて行列してゐるのだ。押しつぶされたやうな便利瓦の低い屋根で、煤け返へつた寄木造りの小屋である。下水のない通路は梅雨上りのやうに泥濘つてゐて、太陽の光りが射さないのは勿論、空氣さへもが永久に動かないで、ぢつと澱んでゐるやうに思はれる。

このトンネルのやうに薄暗い長屋の中では、軒から落ちて來る僅かな光線を頼りにして、腰の曲がつた老人や眼の惡い女房が、麻繩を綯つたり、下駄の台を削つたり、ボール箱を貼つたりしてゐる。または病みほゝけた病人が死人のやうに倒れてゐるか、顏の蒼白い産後の女房が、鼠のやうにボロ布を掻き集めて寢轉がつてゐる姿が見られる。

私たちが無遠慮にこの長屋の露路へ闖入して行つても、彼等には私たちの無作法を怒鳴りつけたり、とがめだてしたりするだけの意力も勇氣もない。ちらつと白らけた眼をあげて、盜むやうに睨らむだけである。

この長屋一戸の疊數は、三疊、四疊半、六疊の三種類で、普通には便所も押入れもない。隣りとの堺が粗末な壁のところもあれば、板で仕切つて壁紙を貼つただけのところもある。下駄を脱ぐ三尺ばかりの土間が、台所と一緒になつてゐるので雨でも降ると、こゝの女たちは傘をさして煮炊きをしなければならない。便所は五軒に一つ位ゐな割合ひで別棟になつてゐて、朝晩の混雜はまるで戰場のやうな有樣である。

この豚小屋よりも粗末な長屋の家賃が、一戸最低一圓五十錢から最高八圓くらゐまでゞある。そしてこゝに住む人々のうち七割までが自由勞働者である。後の三割がテキヤ、行商人、乞食、オン坊と云つた種類の貧民が占めてゐる。

長い雨でも降りつゞくと、大低が天氣稼業の勞働者であるから忽ち一杯の粥も啜れない人間が出て來る。鍋を賣る。蚊帳を賣る。股引半纏までハタイてしまふ。そして最後には賭博である。十錢の金で七人の家族が腹を滿すためには、ボロイ賭博で勝つより外に方法がない。博奕に敗けると、最後には日限を切つて、、まで賭けるといふ話がある位ゐだ。

希望も意氣も失つた敗惨者の群れが、最後に求めるものは酒と賭博である。夜、幾らかの金を握つた勞働者の群れが歸つて來ると、にわかにこの長屋は生々と活氣づいて來る。白い燈がもうもうと立ち罩め

て、味噌汁の匂ひや、飯のふける匂ひがそこいら中に漲ぎる。豆腐屋が呼び込まれる。裸足の子供が徳利を抱へて、露路の中から飛び出して來る。赤ン坊を背負つた女房が、笊をさげて米屋へ驅け込む。酒に醉ひつぶれた亭主が、喚めく、怒鳴る……。

この日暮れ時の瞬間こそ、暗鬱な千軒長屋に潑溂とした生命が甦へる時である。煤けた長屋の中では、坐り切れるだけの頭數が、溫い食物の湯氣に包まれて、旺盛な食慾を滿してゐる。横丁の酒屋では、空樽に腰をかけた鼻の赤い立ン坊が、コップ酒を呷つてゐる、と云つた調子である。

この千軒長屋の中央に、三ツ木通りと云ふのがある。酒屋、菓子屋、下駄屋、米屋、魚屋……といつたあらゆる日用必需品を賣りさばいてゐる「銀座通り」である。日暮れ時になると、銅貨や銀貨をチヤラつかせた長屋の人々が、暴動のやうに押し合ひ、揉み合つて品物を買ひ爭ふのだ。

この通りには活動寫眞館も、寄席も、支那ソバ屋も、呉服屋もある。千軒長屋の住民にとつては全くの銀座通りである。彼等は松屋で十圓もする帶を買ふかはりに、こゝで色の褪めた二圓の帶を買ふ。一斤五十錢もする松魚節のかはりに、一本十二錢位ゐな鯖節で我慢する。そして彼等は決して、銀座とか上野とかへは出て行かない。成るたけ彼等の慾望と、必要をこゝだけで滿さうとするのだ。

何故と云つて、三越へ自動車を乘りつける貴婦人位ゐに、こゝの路

人が乞食や土方の女房を大切にするからだ。そして一圓もつかへば、二十圓も散財した位ゐの裕福な氣持になれるからだ。

彼等は彼等に相應する世界を、千軒長屋と呼ばれる貧民窟の一劃に建設してゐるのだ。少くとも自分たちに住みよい世界を造つて、そこに安住しやうとしてゐるのだ。「一度千軒長屋へ落ちれば足が洗へない」と言ふ。それは底知れず墮落するために足が洗へないといふ意味ではなくて、こゝに落ち着けば、住みよくて、暮らしよくて、他の社會へ出て行く氣がしなくなるからである。

一棟の長屋には、必らず長屋頭と呼ばれる古參者がゐる。ドブから便所の掃除の指圖、喧嘩口論の仲裁、職業の世話からお葬式の世話まで燒いてくれる古女房がゐる。新規に移つて來たものには長屋の習慣や規則を敎へ、長屋一統の指揮命令を與へるのが彼女である。この長屋頭によつて、長屋の秩序と統制が保れてゐるのだ。しかしこの長屋頭の中には、よく家主の手先きに使はれて借家人を虐待する因業な婆がゐるが、そんな情け知らずの鬼婆は長屋中の團結で直ぐに追ひ出されて了ふから昔のやうなことはない。

こんな話がある、建鐵會社に勤めてゐた職工が、こゝの千軒長屋に住んで食ふものも食はずに永い間辛抱して貯金をためた。彼は肺病で會社を首になつてから、その貯金で一棟の長屋を建てた。そして自分もその一軒に住んで、家賃のあがりで裕福に暮らすやうになつた。彼には女房と三人の子供があつた。ところが彼は因業極まる吝嗇で、

自分の女房子供にすら滿足な食物をあてがはない。女房と子供は亭主が貯金をためて、この長屋を建てるまでには、碌すつぽに飯を喰はされたタメシがなかつた。そして亭主の望み通りに長屋も建てられたし、少しは生活の餘裕も出來たのだから、亭主の吝嗇坊もやまつて人並な食物位ゐは食はしてくれるだらうと思つてゐたが、彼の吝嗇と強慾はいよいよ募るばかりで、着るものも着せず、食ふものも食はせないといふ始末だ。この亭主の強慾な非道を怒つて、長屋の連中が早速に家賃の不納同盟を結んだ。すると間もなく女房は女房で、亭主の吝嗇に愛想をつかして三人の子供を殘したまゝ家出をした。女房がゐなくなると、長い間の榮養不良で、末の子供が死にかゝつた。その上に長屋の連中が頑として家賃を拂はないので、亭主は全く弱り切つた。そのうちに子供が死んだ。

『家賃は兎も角、子供の葬式だけは出させてくれませんか。』と、亭主は遂ひに長屋の連中に兩手をついて賴み込んだが、

『何を寢呆けてるんだい。どつさり貯金が出來てゐるだらう。貯金を出せばいゝぢやないか！』と、まるで相手にもされなかつた。そこで亭主はすつかり自暴自棄になつて、長屋の連中を燒き殺すつもりで、自分の長屋に火を放つた。そして自分も一緒に燒け死ぬつもりで、二人の子供を背中に結へつけたまゝに死んだ子供と枕を並べて寢てゐたが、生憎夜警の巡査に見つかつて火は消され、自分は放火罪に問はれた事件があつた。

この事件でも解るやうに、こゝの長屋の連中は直ぐに團結する。壁一重に住んでゐて、お互がみんな一軒のうちの家族同志のやうに、何事にも距りなく親密に結び合つてゐるからだと思ふ。

大概の、、、ならばこの千間長屋へ逃げ込んでくれば、長屋の連中が直ぐに、、てくれる。若しこゝの人間が外で、、、、ても逃げ歸つてくれば、みんなで、、、しまふから容易に、、が擧らない。彼等には彼等自身の世界と法律があるから、無意識に治外法權を主張するのである。彼等の社會と、他の社會とはまるつきり別なものだといふ觀念が強くこびりついてゐて、彼等も、そしてまた世間でもこの「貧民窟」の人間を特殊なものに取り扱つて不思議に感じてゐない。

千軒長屋には種々雜多な人間がゐる。「、、、」も居れば「ヒロイ」もゐる。が、こゝの區域だけでは決して盗みも掠奪ひもしない。こゝの長屋から追ひ立てられるのを恐れるからであり、また彼等の特別な道義心からでもあらう。

それから貧民窟とさへ言へば、まるで不潔の代名詞のやうに呼ばれてゐるが、しかし不潔なのは下水の設備や建物の不完全なのが原因で、貧民窟の女くらゐ洗濯と下水の掃除をコマメによくやる女房はない。組や順番を作つて、毎日のやうに便所と下水の掃除をしてゐる。若し三日も放つたらかして置いたら、五軒に一つの便所は踏みどころもない位ゐに汚れてしまふであらうし、下水のドブは溢れて臺所の下駄を浚つてしまふ。

生身の體を資本に働いてゐる彼等は、世間の想像以上に病氣を恐れる。神經過敏であると思はれる位ゐに、衞生思想をもつてゐる。ボロを纏ひ、素足で歩き、安物を食つて喰ふ外觀から想像すれば、甚だ非衞生的に考へられるが、しかし彼等は決してさうではない。食物には注意するし、病氣の豫防にも心掛けてゐる。この千軒長屋では、こゝ五年間一人の流行病患者が出なかつたと言はるのでも明かだ。流行病は反對に、山ノ手方面から毎年のやうに發生するから皮肉だ。

王子の酸素會社の附近に「お助け長屋」といふのがある。王子町の肉屋である松下留三郎といふ特志家がもつてゐる長屋であるが、こゝの長屋を借りる條件は、第一に衞生に氣をつけること、それから喧嘩口論をしないことである。

また貧民窟の最も美しい特長は、お互が非常に親密で人情に厚い點であらう。この點は他の社會には見られない、最も美しい習慣である。長屋全體と同時に貧民窟の全體が、一つの大きな共同生活であるから、お互が何事にも結束して起ち、一人の不幸には共同の責任を分ち合つて行くのだ。こゝでは氣心のよくないもの、性質の惡い人間は直ぐに撥き出されてしまふ。またこゝに永く住まうと思へば、隣近所から憎まれては一日も住めない。長屋は壁一重の仕切だけであるし、水道も便所も物干竿も凡てが共同であるから、必然に仲よく長屋のつき合ひをしなければ住んでゐられなくなるのである。

誰もがその日その日を働かなければ、食つて行けない人間の集りであるから、女房が病氣で亭主が出拂つて留守にしても、隣の女房が看病してくれるし、身寄のない老人が死ねば長屋中で葬つてくれる。『誰のためでもない、お互のためと、自分のためでさあ……。』と、彼等は言ふ。全く彼等は順番にお互の世話になつて、安らかに死んで行くのだ。──その心持が誰の胸にも強く生きてゐるのだ。

貧民窟！　これは人生の敗慘者の群團であり、社會の落伍者の巣窟の世界であることに間違ひはない。しかし社會のあらゆる壓迫に虐げられ、生活の困苦に押しつぶされた人々が、最後に、そして必死の努力で守り得たものが、この千軒長屋の部落であると思ふと、私は不思議な感慨に衝たれる。──

どこの貧民窟にも必らず一、二の社會事業家やキリスト教徒が入り込んで、貧民の救濟と教化に努力してゐる。この三河島の千軒長屋にも鈴木益平氏がある。

大島の牧場主から一念發起して、裸一貫でこの千軒長屋に飛び込んで來たキリスト信者で、熱烈な社會淨化の理想を抱いて、六年間をこゝで惡戰苦闘して來た人物である。現に町民から推されて三河島町の町會議員である。そして「淨化團」を組織して、專心に貧民の教化事業に盡されてゐると聞いてゐる。

しかし私はこれらの熱烈な信仰家のあらゆる努力にかゝはらず、貧民の救濟と、及び貧民の教化事業のすべては徒勞であると思ふ。何故ならば、彼等のすべては資本主義社會の組織に堪へ得ないで、貧民窟

に落ちぶれて來た人々であり、また同時に彼等の生きるための最後の世界がこの貧民窟であつたから。そしてこゝの社會を除いて、勞働の不能者、老廢者、白痴、失業者の群れが、恥も外聞も見榮もなしに他に生き得られる場所がないからである。

彼等はこの場所を捨てゝ、資本主義社會の何處にも行くところがない。、、、、、、が存續する限りに於て、、、、、は殖え、千軒長屋はいよいよ擴大するばかりである。

最近この千軒長屋は東京府に買收されて、近代的なアパートになるさうだ。現に最惡の長屋から順々に取拂はれてゐるが、しかし移轉問題と立退料の問題で大ぶんに紛糾してゐると聞く。小商人は商賣があがつてしまふし、五階六階の建物になつたのでは長屋に住み馴れた人間には不自由でならない。猿江裏の貧民窟もアパートになつたが、住民の不平は絶えないやうだ。昔し通りの住みよい、暮しよい習慣が破壞されて、生活が困難なものになつてゐるから無理がない。それは爲政者が貧民窟を掃蕩するのが根本の目的で、彼等の生活に根ざした生活を改善するための施設ではないからである。貧民窟を追はれた彼等は、アパートへ入らないで別の土地へ逃げて行く。そしてそこで彼等は新らしい貧民窟の建設を始める。何んと大きな皮肉ではないか！

三河島の千軒長屋のうち八百五六十軒は、三河島建物興業株式會社の所有である。この會社の、、は、、、、、と稱する大山カンで、強慾非道な家主である。十四五年前に坪一錢五厘の沼地を買ひあげて、こゝに千軒長屋を建てたのであるが、貧民救濟に名をかゝたつて今日に到るまで莫大な脫稅を企てゝゐた事實が暴露して、最近大きな問題になつてゐる。私はこの問題にも觸れたいと思つたが、紙數がないから省略して別の機會に割愛する。

新刊紹介

◇**カール・マルクス**（ラスキ著、服部辨之助譯、原著者はロンドン大學の教授、マルクス及びマルクシズムの一批判書で、殊に著者の立場からマルクス主義の誤謬の判示が目立つ。譯筆は杉森孝次郎氏の推奬するところ、東京麴町内幸町内幸ビル、理想社、價七十錢）

◇**プロレタリア意識の下に**（田邊一子歌集、無產者歌人叢書の一、病中吟の悲痛をとる、東京本郷森川町一、紅玉堂、價五十錢）

◇**ロシヤ大革命の前夜**（大竹博吉監輯・ロシア大革命の裏面史譯選輯の第四輯、東京麴町内幸町一ノ五ロシア問題研究所、價三圓）

◇**戰爭の生物學**（山本宣治全集第一卷）**產兒調節論**（同上第六卷）前者は獨逸の非戰論者ニコライの名著の譯で五百三十頁定價二圓、後者は無產者的立場から產兒調節を平易に高調したもの、定價一圓五十錢、東京本郷湯島ロゴス書院發行）



私の性質に就いて

藤田嗣治

私は明治十九年、東京の牛込の側の江戸川の大曲で生れました。連日の雨で、川の水が増して、庭の金魚等が流されたのを未だ覺えてゐます。

たつた昨晩、岡田の八千代さんから耳にしたお話ですが、丁度其の後新小川町に住んでゐた時分、從妹の八千代さんが、私の額に鋏をつき立てたので、大變家のものに叱られたさうです。又、家のものが、私を鴨居にぶら下るやうにしたので、小さい手でしつかりつかまつて居ればいゝものを、つい手離したため、落下して私の口が横に裂けて、二針許り縫つたことがありました。これは私も覺えて居ります。そういふ場合、私は餘りワイ〳〵泣きませんでした。痩せ我慢が強かつたので御座いませう。

女姉妹の中に生れた私の父は、また女の兒を二人續けてさづかりました。三番目に男の子が生れました。これが私の兄で御座います。女ばかりの家庭で、私の兄は非常に大事にされ、實のところ、甘やかに育てられました。その翌年生れた私は男の子ですが、もう後繼の御用もないので、兄とは變つて、別に大事にはされませんでした。父が臺灣に勤めに向ひましたので、兄は母、私は祖父母に育てられました。おぢいさん子でありました。

お祖父さんは綿密家で、えらく器用な性でしたので、その側で、それを見眞似に私もしたのでせうか、或は血つながりの理けでしたか、私も器用でした。兄がお客さまから戴いた玩具などを欲しいとは申しませんで、そつと見て置いて、自分でそのやうなものを作りました。玩具は皆自分で作りました。

始終木の上に登つて、一人で遊ぶことを覺えました。高い所へ、誰も來られないのを非常に喜んで、上から又高い天許り眺めてゐました。學校へ行つても、また木登りで、先生からお叱言を頂いて居りました。斯うして、一人で樂んだり、苦るしんだりして、氣にもせずに居りました。

四つの頃から畫を白紙の上に書き始めました。一本の線でも自分が書き損つたと思ふと、再びなぞるのが嫌ひで、紙をすぐ取り替へました。その反古紙でお祖父さんは、家の會計の出入帳とか、住所名簿とかを作つてをりました。眞黒になつて遊んでゐた時分でも、紙の上だ

けは清れいなものを望んでゐたらしいのです。

服装が美しい譯であつたか、海軍大將には直ぐにでもなりたかつたので、繪は勿論、軍艦を澤山畫きました。間もなく、手妻師を見てから、手妻師になりたくなり、いろいろ手妻を工夫し考へて、家内の人人を驚かしたりして樂しんで居りました。

よく考へて見ますと、小さい時からの性質が、今でも殘つて居ります。たとへ人前で、ハイ左樣ですと言つて、同意を稱へても、腹の中では反對して自信した通りを守つて、決して他人に影響されぬ氣分です。それは手の筋にまで現れてゐるさうです。

口論辯解も大嫌ひですし、人の惡口を云ふことも、羨望と言ふことも知らず、人は人、俺れは俺れといふことだけで、一人で生きることを知つて居ります。世間と全く別交渉です。おとなしい性質のやうですが、その實、怒る時は自分でも恐ろしいと思ふほど、非常に怒りまして、人も殺し兼ねない相で、又人殺しの線も手相にあるとのこと故、非常に自分で氣を付けてゐます。一生に一二度は怒り度いものですが、えらい敵打ちの樣なことになるだらうと考へて、その時毎に忍耐して、他日を待つて居ります。忍耐力は人の何倍もあります。だから喜んで苦るしいことを探して居ります。樂しみといふことをのぞまぬ性です。尤も必要なサンシビリチーは、極度と言つていゝ樣に鋭いと人に言はれもし、自分も信じてゐます。そして意志を佛蘭西で充分に養成したので、ボロンテとサンシビリチーと相待つて行くと、非常な仕事も出來る譯となつた樣です。

自分を研究して自分を知る事が非常に大事なのです。餘りお人が好すぎて丸い人よりも、腹に一物あつて、一癖ある人の方が、何か一仕事しでかす樣です。

新刊紹介

◇**唯物論史中巻**（フリイドリヒ・アルバアト・ランゲ著・川合貞一譯補・さきに上巻を出した續篇で第四篇十八世紀の唯物論、第二巻カント以後の唯物論史に入り近世哲學自然哲學に及ぶ大著の好評である。東京日本橋區通二丁目丸善株式會社・價五圓參拾錢）

◇**新興川柳論**（田中五呂八著・小樽市稻穗町東一丁目七・川柳氷原社・定價壹圓二十錢）

◇**閃光**（詩集社同人の詩華集・東京市外野方町上沼袋七三・詩集社發行・定價壹圓）

◇**土の上・水の上**（櫻井忠温著・歐洲旅行記「蛙がノコ〳〵と諸國を這ひ廻り、レンズに收めたフイルムがこの『土の上・水の上』です。」——著者序文の一節。東京京橋南紺屋町實業之日本社・定價貳圓）

◇**英國勞働黨のイデオロギー**（河合榮治郎著・東京京橋第一相互館千倉書房・價五十錢）

◇**文學理論の諸問題**（平林初之輔著・最近三年間に發表された著者の文藝論集、日本文壇の主要な文學理論問題は殆んど殘らず取り上げられてゐる。發行所同前・價一圓八十錢）

ミハレフスキイ著◇荒川實藏譯

經濟學入門

四六判上製

定價壹圓八十錢

送料二十二錢

最新刊

マルクス主義の立場から書かれた經濟學入門で、原書は勞農露國の諸學校で廣く用ゐられてゐる評判の名著。價値貨幣剩餘價値等經濟學上の重要理論を學ぶに先だち、實際問題によりて十分な豫備知識を與へ、幾多の繪畫圖表によりて興味を惹き理解を助ける等、初めて經濟學を學ばんとする人々にとつて間然する所なき入門書であり、一般研究者にとつては最新最良の新興經濟學解說書である。譯文は內容と相俟つて平易明快である。

上篇實際の部 （一）資本家的社會に於ける生產 （二）勞働力 （三）經營主 （四）貨幣及び信用 （五）商業

下篇理論の部 （六）價値 （七）貨幣 （八）剩餘價値 （九）利潤、生產價格 （十）地代 （十一）勞働賃銀 （十二）資本家的蓄積と恐慌 （十三）資本主義の成熟と崩壞 （附）索引

ブルガコフ著 島野三郎譯

經濟哲學

（四六判上製クロース）

定價貳圓五十錢 送料廿二錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

エミル・ゾラ著・三上於菟吉譯

ゾラ叢書

獸人

第一編

世界文學の白眉・巨人ゾラ傑作中の第一位!!
見よ!絢爛たる愛慾の姿を!熱情を!眞實を!

狂はしい渦捲く情痴の世界である。變態に歪んだ愛慾と血なまぐさい罪惡に混沌と糜爛した頽廢の世界である。あくことのない淫逸、放埒な狂態の限りをつくした生活。見よ!文明の暗黒面に亂舞する「獸人」の赤裸々な一群を!これぞ人間罪業の極だ。しかも、巨人ゾラの絢煥たる筆鋒の奥底に儼として流れる深玄な人道的觀念、彼の魂を生涯燒き焦した人間愛――これらが渾然と融合してこゝに世界的名作としての完璧を示して遺憾ない。

(附錄)エミル・ゾラ略傳

最新刊

四六判・背皮・天金函入
上製五百五十三頁

定價貳圓
送料廿四錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

本庄榮治郎編

日本交通史の研究

（最新刊）

菊判上製・天金美本・五七四頁・地圖及寫眞四葉入

定價　參圓五十錢
送料　廿七錢

材を徳川時代の交通制度の特殊的研究に取つた本書は、前人未踏の根本資料に遡つて、克明、詳細にその歴史的發展を探究し、從來の通俗學說に對して忌憚なき批判を加へたる創見的理論の展開である。日本交通史に關する著者夫々の綿密周到なる檢討の精華は、附錄日本經濟史文獻一覽と共に日本經濟史の一面を覗ふに足る最近の快著である。

目次

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

新刊批評

本庄榮治郎博士編『日本交通史の研究』を讀む

島田孝一

本庄榮治郎博士の編纂に係る『日本交通史の研究』が上梓せられて吾等の机上を飾るやうになつたことは、吾々交通經濟の研究に多少の交渉を有する者にとつて絶大の喜びである。

本庄博士は去る大正十五年度の學年に於て、京都帝國大學の經濟學部內に經濟史の演習を擔任せられることゝなつたのであるが、その場合學生及び二三の有志を集め一定の項目に就て先づ學生が參考書から研究したものを報告せしめこれに對して討論をなし批評を行ふと云ふ方法を採用したのである。

當時その演習に參加した人々が最近に至つて京都經濟史研究會と云ふものを組織し種種の題目に就て研究を行ひ資料の蒐集にも努力して居られると云ふ。而してその研究によつて生れ出た論文、資料等が學界を益する價値あるものである場合にはこれを同會の紀要として出版することに定められたのである。本書は即ち京都經濟史研究會紀要の第一册として現はれたものである。

本書は菊判で本文四百四十八頁、他に附錄八十一頁を含む。收められた長短九編の論文は總て吾國の交通史に關する研究であつて、而もその殆ど總ては德川時代に於ける交通史に關する論文である。

德川時代はその殆ど全期を通じて鎖國の時代であつた。從て對外的交通は吾國として見るべきものは尠いのであるが、國內の交通は參覲交代の制度の存在の爲に、或は江戶と上方との兩中心地を連絡する必要の爲に次第に發達し來つたのは疑を容れない事實である。而して一方陸上交通の分量が增加するに從て常備の人馬を以てしたのでは到底交通需要に應じ能はざる場合も生ずるのであるから、かゝる場合に近鄕の村落から人馬を徵發することが行はれたのであつてこれが助鄕の制度である。本書に收められた大山敷太郎氏の『助鄕と農民生活』黑羽兵治郞氏の『草津宿の助鄕に就て』及び『明治政府の助鄕政策』黑正巖博士の『助鄕に基く農民の紛爭』井箆弃氏の『大垣藩百足傳馬制度』等は各方面から助鄕の制度に對して行はれた研究であつて何れも根本的史料に基く貴重な論文である。又德川幕府は街道の要所に關所を設けて街道を往來する旅客に對して警察的取締を徹底的に行ふことに努めたものであるが大山敷太郞氏の論文『姫街道の研究、附、氣賀の關所について』は本街道を離れ婦女子の多く往來する裏道の上に設けられた關所に關する研究である。更に

又德川時代は前述の如く對外的交通の禁止せられて居た時代であるから水上交通としては內水路又は沿岸航路の上に於てのみ船舶の活動を考へる事が出來たに過ぎない。國內の諸河川は次第に浚渫又は開鑿が行はれたのであるが又同時に幕府は軍事的又は警察的取締の爲に殊更に橋梁を架せず渡し船又は徒渉によつて河川を横斷せしめた場合は尠くない。東海道の大井川の如きはその代表的場合である。平松弘氏の『大井川步渉渡制度』はこの徒渉に關する研究である。德川時代の沿岸航海のあるものは廻船と稱して定期航海の形式を備へるまでに發達して居たのであるが、この時代の末期即ち弘化時代以後には綿番船、酒番船の如きが發達し荷主はその船舶の速力の大なることを欲して止まざる狀態を現出した。和田篤憲氏の『番船と清酒取引の慣例』は主として西宮を中心とする酒番船に關する研究である。本書に收められた論文が右の如く德川時代を中心とする關係上編者本庄博士は『德川時代の交通概觀』と云ふ論文を掲げて同時代に於ける交通の概況を示して居られる。

以上の如く本書は主として德川時代の交通に關して實蹟を踏査し、文獻を蒐集する等總て實證的研究を基礎としこれによつて當時の交通狀態を檢討し隨所に卓見を示して居るのであつて、編者が企てた目的意識たる日本交通史の研究の一部は本書に於て充分の成功を收めたものと見ることが出來る。德川時代の交通に密接の關係を有する『傳馬』『宿』『關所』『助鄉』『廻船』等の研究は本書によつて一段の進步を示すことになつたのは疑を容れない。而も史料の正確にして豐富なる點、從來比較的等閑に附せられて居た問題を綜合せる點等に對しては滿腔の敬意を拂ふと共に學徒の好參考書として推奬せらるべきものであると信ずる。且卷末に附せられた凡そ八十頁に亙る附錄——『昭和二年及び三年に於ける日本經濟史文獻一覽』——は本庄博士著『日本經濟史文獻』正編及び續編に續くものとして本邦經濟史の研究者を益することの僅少でないのを思はせる。筆者は茲に於て曾てペンシルヴェニア大學に在學の當時ジョンソン教授を中心として十數名の學生が交通經濟學上の諸問題について報告し批評しあうた當時の愉快な光景を想起せざるを得ない。眞の意味に於ける大學生たる氣持を味ふ爲には適當の指導教授の下に各自が一定の題目について研究しこれについて忌憚なき批評を加へるのを以て第一とすると共に研究上の效果を大ならしめ且充分の興味を有し得るものと信ずる。本書の編者本庄博士も亦京都帝國大學經濟學部に於ける經濟史の演習が教授と學生との間に、又學生相互の間に如何に親密の度を高め、研究心を旺盛ならしめたかを述べて居られる。本書が此の如き研究及び談笑の中から生れ出たことは特に興味深いものである。然しながら日本交通史の研究はこれによつて盡きたと云ふわけではない。これを機會に將來益よこの方面の研究の進められることを希望して止まないも

のである。(一九二九・一〇・七)(東京市芝區愛宕下町四ノ六改造社發行・定價參圓五十錢)

北原白秋氏著

詩集『海豹と雲』

日夏耿之介

北原白秋君から貰つた詩集「海豹と雲」を評せと賴まれたが非常に素晴らしいか、非道く拙惡かでなければ批評などするものではないので、紹介的批評なら詩壇その人に乏しからぬ樣だが、引受けた後で理屈は愚であるから、自分の文學史的觀點に立つた感想を述べる。

北原君も隨分と長い事詩作をつゞけてゐるが、この集で見ると未だ大いに迷つてゐるやうだ、而も、英姿颯爽として迷つてゐるやうだ。元來が形から這入る北原君だから(念の爲にことはるが、この文句は說明で、輕視ではない。)さかんにポウズを作る。ピタリと嵌まれば、知人並に喜ぶのだが殘念乍ら昭和四年の北原君を髣髴させるポウズは作つてくれて居らぬ。

「觀想の秋」では(その後何か詩集があつたやうだが失念した)寂に淨まらうと構へたが、かなりな所で横に外れて了つた。而も、こんな所は同君の內心にとつてはウソの少い所であるから、今度の集の「月夜孟宗の圖」にもその詩境を覗つてゐるが、かへつて「觀想の秋」時代よりも佳くない。「冬眠」の章にもそんな感情が谿いてゐるが、こゝにも佳篇は一つもない。「風を祭る」章の「鋼鐵風景」の如きは空疎な內容を外形の建築によつて重厚ならしめんとして完全に失敗した作である。こんなトリックは今の青臭い少年詩人の最新派體にはウンとあるが、北原君がこんな幼稚な企てに低迷してゐるとは慮外である。

元來が、わざと形式に倚りかゝり、泥み、もて扱ひ、寧ろ一言にして言へば玩弄してゐるその間に、淵渺たる詩念の風趣が自ら泛び上ると言つたところに北原君の身上があるのだが、それにはドッシリ構へて彫心鏤骨しなくてはダメだ。北原君は切りに風韻の神とか苦吟の傷痕とかいふ言葉を序文で連發してゐるが、內容を見ると全然裏腹である。空疎な虛喝に終つてゐる。華美な生活を止めて武藏野の茅舍へでも引込まなくては、觀想の冬を迎へる事は出來ない。この苦言をひとつ是非肯いて貰はう。まともから物申して怒る人物とも思はぬから所作ら言つてをくのである。「父と母」の古調は畢竟三十年前の清白に如かぬ。「海豹と雲」の章は皆詩魂がさらさらと浮いてゐてわるい。「五月の夜の空」も二昔前に露風や柳虹や東明が拙劣な試作をした「印象詩」の拙なる再說である。リフレエンは大概坪がはづれてゐる。「月光の谿」、「螢に」のそれが例だ。「われは見き」の終二行にも北原式鬼面嚇人がある。

要するに八年初めて世に問ふ物としては預言的何の迫力もない。たゞ「童話の月」

の初數章は作者は輕く見てゐるやうだが將來の同君のゆく道を指す、今のところ唯一の方向で、同君を注意するとすれば先づ此邊りに止めを指すより外仕方があるまい。「二月と美衝」の如きそれである。（東京市神田區今川小路アルス發行・定價四圓八十錢）

小泉信三氏著

『リカアドオ研究』を讀む

石濱知行

本書は、著者が大正九年刊せられた『社會問題研究』及び大正十二年に刊せられた『價値論と社會主義』に次いで、著者の經濟學理論史に關する研究を集輯して刊行せられたものである。本書所載の諸論文は、すでに、三田學會雜誌、思想等の誌上に發表せられたものである。いま一卷としてまとめらるるに及んで、著者のリカアドオ研究がやゝ體系的にうかがはれる。

劈頭は「正統派學派總説」であつて、アダム・スミス、マルサス、リカアドオ、ジヨン・スチユアート・ミル、及びそれらの人々の學說と關係ある人々の學說の核心を簡單に述べて、正統學派學說史上に於けるリカアドオの地位を認識する一助としてゐる。

次は「リカアドオの價値論」である。リカアドオは、財を不可增財及び可增財の二つに分けて、主として後者の可增財乃ち「人の勤勞の働きによつてその分量を增加し得またその生產に競爭が無制限に作用するごとき財」の交換價値を價値論の對象とし、それに對して勞働價値說、生產價費値說を打立てたのである。著者の研究は、その間の經緯を明にしたものである。

「リカアドオの地代論」は、リカアドオの學說のうち重要なる地位を占むる較差地代說の研究であつて、本書所載の他の論文「較差地代說と絕對地代說」と一緒にして、リカアドオの地代論とそれに對するロードベルトゥス、マルクス等の反對說をうかがふことを得る。

次の「リカアドオの通貨論」は、時事問題に關して言及せられた彼の貨幣數量說にもとづく貨幣論の研究である。「リカアドオの機械論」は、產業革命の結果として發生した機械が勞働者に及ぼす影響を論じたものである。リカアドオの價値論及び地代論は彼の學說のうちの重要なる理論的部分であり、從つて從來日本に於いてもそれに關するすぐれた研究も發表せられてゐる。しかし、この理論を實際問題に適用した特殊研究である彼の貨幣論及び機械論等については、日本に從來研究がすくない。この意味に於いて私はこの二つの章を非常に面白く通讀した。殊に機械論に於いて リカアドオがバールトンの影響をうけて、『機械採用のために人間勞働の一部分が不用となることは認めた。しかれども、彼れはかくの如くにして職を離れた勞働者は容易に他に職を求むることを得べく、究極機械採用の前と後とに於いて、需要せらるる勞働量には增減なく、勞

働者もが地主資本家とともに機械の發明に由る物價低落の恩澤に浴するの利益のみがあつて、失ふところがないと認めたやうである。」(本書、四八一頁)といふ見解から「その地主及び資本家の境遇に關するかぎりにおいては遂に變易することがなかつたが、勞働者に關する部分は熟考を重ねたる結果謬見として之を放棄するに至つた。彼れは機械の人間代用が、しばしば勞働階級のためにはなはだ有害なることを認むるに至つたのである。…彼れは社會の總所得の增加は、その純所得の增加と並行し、隨て地主資本家が所得の源泉たる基金(Fund)と勞働者が所得を仰ぐところの基金とは同時に增加するものと思つたが、今地主資本家のために基金が增加すると同時に、勞働者のための基金の減少することあり得べきを認めたのである。」(本書、四八三―四八四頁)といふ見解にまで轉化し來つた徑路は、非常に興趣が深い。ここまで來ると、マルクスの資本の有機的構成論より出でた相對的人口論の理論とまさに一歩である。リカアドオをして、今日の產業の合理化運動の實相を見せしめたならば、變改したる自說のますます確實なるを認識するに至つたであらうと思はれる。

本書を紹介してゐるうちに、いつしか制限の紙數を超過した。よつてたゞ一言。本書は「研究」であるから、從つて原著者及びその反對說乃至後繼者の學說を忠實に紹介するにとゞまつて、筆者たる小泉氏のそれに對する意見をきくこと甚だすくないのは殘念である。例へば「リカアドオの機械論」に於いて著者はリカアドオの理論が變じたことを述べ、それとともにマルクスの學說を述べられたのは甚だ結構であるが、それについて、著者は學問上如何に考へられるか。その點が、筆者としてきゝたいと思ふところである。(東京市神田區一ツ橋通鐵塔書院發行・定價參圓六拾錢)

新刊紹介

◇**青朽葉**　(窪田空穗著・國民文學叢書第十六編で、著者最近約三年間の作歌集である。心境は愈々澄みきつてゐる。東京牛込新小川町二ノ四神谷書店發行・定價貳圓)

◇**大アマゾンを探る**　(古屋敏惠著・實地探檢から生れたアマゾン研究・牛込早稻田鶴卷町四百三・タイムス社發行・價參圓五十錢)

◇**股旅草鞋**　(長谷川伸著・春の劇壇で異常な好評を受けた股旅草鞋、轉寸以下十二編を輯め、何れにも氏の心魂を打ち込んだ第二戲曲集・東京市麴町區下六番町一〇・平凡社發行・定價金壹圓參拾錢)

◇**石榑茂歌集**　(石榑茂著・新興短歌壇の鬪士たる著者の全面容はこの一卷に盛られてある著者は本歌集を歌壇への置土產として、新しき研究の野に突進すると、跋で云つてゐる。歌壇が快著である。東京丸ノ内昭和ビル・日本評論社發行・定價壹圓貳拾錢)

◇**詩集美しき喪失**　(西條八十著・「砂金」「見知らぬ愛人」に次ぐ著者の第三詩集、大正十一年以後今日に到るまでの作品殆んどすべてを收めた美しい詩集である。東京牛込區新小川町二ノ四神谷書店發行・定價參圓五十錢)

總選擧を前にした無産政黨の陣營

鈴木茂三郎

一

政友會總裁田中義一の頓死は、次期議會の解散を決定的ならしめ、總選擧と言ふ波紋をゑがく一石を投じた感がある。

疑獄と清黨、內紛と後任總裁、政友會は之れが爲めに混亂と動搖を、捲き起すであらうが、今や無産階級の犧牲を代償として遂行されんとする金輸解禁準備、産業合理化等に於ける諸政策に成功しつゝ、ブルジョアジーの信任を集中し得たる濱口民政黨政府が、その對立物たる政友會のかかる混亂、動搖の機會を見逃すほど寛容で無いことは明らかで、濱口民政黨政府は、次期議會の解散と總選擧を斷行するであらうが、かゝるとき無産政黨の陣營はどうか。

社會民衆黨はその一大支柱たる勞働總同盟の中堅勢力なる大阪聯合會が、本部の除名に抗爭しつゝ分裂反對同盟を組織せるがために、危機をはらんで今秋の年次大會を迎へんとしてゐる。また清黨運動のために滿身創痍を浴びて起てる日本大衆黨も、分裂反對と除名取消のために闘ふ「分反派」運動を內藏するために、之れ又、臨時大會を開き得ないで、すでに初冬の年次大會に直面してゐる。

そして、舊左翼陣營にあつては、四・一六事件後、指導者を喪へる××黨のために、身を挺して自からその指導に當る可く期待されたる大山、河上の諸氏は、「合法制の最大限の利用」といふ、左翼としては超ゆ可からざる限度、鐵柵を飛び超え、身を躱していはゆる合法主義の安全陣地に退き、近く殘存勢力をまとめて新勞農黨を結成せんとしてゐる。しかしそれは、大山氏等の姿態が如何なるものであらうとも、そこに參集する大衆は、苦鬪の坩堝から投げ出された左翼的大衆である。彼等は必ずや、試驗濟みのこれら指導者の持つその他多くの誤謬をも、やがて清算するであらうが、いづれにするも漸やくにして結成の過程にあるものである。

無産政黨の陣營、斯くの如くにして、帝國主義ブルジョアジーの政治勢力と抗爭し、選擧戰をいかにして成功的に闘ひ得やうか。

元來が、總選擧準備戰を第一期、選擧闘爭を第二期、選擧後の組織

運動を第三期戰とすれば、今日もはや第一期戰が戰はれてゐなければならぬ筈であるに、無產各黨とも選擧鬪爭方針さへ確立されてゐないのである。

或は候補者數は社民黨は四五名、大衆黨は四〇名、新勞農黨は約三〇名を、總選擧戰におくり出すと稱してゐる。然り、稱してゐる。そも〳〵何處に、百餘名を立たしめる地盤らしい地盤を持つと言ふのか。前回の總選擧に於ける立候補者總數は八二名であつたが、そのうち半數は舊勞農黨の候補者であつたのである。

然るに、その地盤たりし東京、香川、愛媛、北海道、鹿兒島、靜岡、山梨、群馬及び山宣を選出したる京都第二區の現狀を視よ、支配階級の彈壓の下に、形骸をとどめないほど、無慘や、踏み躪られたではないか。そして、京都市、廣島、岩手、千葉、奈良は地方政黨として、秋田、山口、福岡、兵庫、高知、又は東京、京都、大阪の一部は、大衆黨分反派として、現實に舊勢力を維持し擴大しつゝあるほか、殘存勢力をひろひ集めて新勞農黨の下に結成されんとするものは、大阪、新潟の外、京都、岡山、佐賀、東京、北海道、青森等の殘花一輪の勢力にとどまるものである。

舊勞農黨の地盤がすでに然りである。大衆黨は「分反」と舊民憲を除けば、日勞黨の舊態に、群馬、山梨、高知等に、何程かを增大したに過ぎない。ひとり社民黨は東京、八幡、川崎、大阪の市議戰にめざましき凱歌をあげ、大阪、山梨、長野、神奈川、高知等に黨勢を伸張せしめたので、おそらくは此の黨が候補者數は第一位であらうことは確かだが、だが、と云つて無產黨陣營より總數百名を、選擧戰に立たしめることはもとより至難である。

二

だが、ともあれ、相當には鬪ひ得る、そして豫想さる可き候補者と參考資料を先づ、次ぎに揭げよう。

東京、

		前回の總選擧得票	總選擧後に行はれたる同黨の市、府縣選擧得票	前回總選擧の當選者の最低得票
第一區	○堺利彥（大衆黨分反派）	ナシ	三、三六九（牛込、四谷）	六、三三一
第二區	安部磯雄（社民黨）	三、三七三	四、〇四二（小石川）	七、四七一
第三區	○阿部温知（社民黨）	ナシ	一、三三二（京橋）	八、七〇〇
第四區	○馬島僴（社民黨）	三、五八一	二、八三三（本所）	四、二〇四
	○淺沼稻次郎（大衆黨）	ナシ	一、一九八（深川）	同
	○×××（勞農同盟）	三、六八一	—	同
第五區	加藤勘十（大衆黨）	一〇、一九九	二、七五五	一三、五六八
	○松岡駒吉（社民黨）	二、七二一	二、六六八	同
	○×××（新勞農黨）	三、八六五	四九〇	同
第六區	松谷與二郎（大衆黨）	一三、四六八	三、〇五七	一七、四二五
	○×××（社民黨）	五、九六八	四、三五五	同

	○中西伊之助(大衆黨分反派)	ナシ	―	同
京都				
第一區	水谷長三郎(勞大黨)	八、七八一	二、一九〇	八、三三七
	○奥村甚之助(新勞農黨)	ナシ	不明	同
大阪				
第一區	○田萬淸臣(社民黨分反派)	五、七七七	五、八一七(港區)	七、三〇一
第二區	○栗須七郎(大衆黨分反派)	ナシ	七八七(浪花)	同
	○×××(社民黨)	ナシ	―	同
第三區	西尾末廣(社民黨)	三、一三六	七、三一四(西尾・大矢計)	八、六六三
	○大矢省三(社民黨分反派)	ナシ		同
第四區	鈴木文治(社民黨)	一九、六六七	一〇、〇〇八(鈴木・山内計)	九、九一九
	○山内鐵吉(社民黨分反派)	ナシ		同
	○小岩井淨(新勞農黨)	七、一二〇	二、六七五(東成)	同
	阪本孝三郎(大衆黨)	五、一九三	三、六七六	同
第五區	杉山元治郎(大衆黨)	一〇、七七三	―	一二、三三三
兵庫				
第一區	河上丈太郎(大衆黨)	七、八二三	三、三〇三	七、四七七
	○靑柿善一郎(大衆黨分反派)	ナシ	一、五四三	同
	○×××(社民黨)	七九一	一、八三九	同
第二區	米窪滿亮(社民黨)	六、〇九七	―	一〇、一一〇
第三區	吉田賢一(大衆黨)	八、六八九	―	一〇、九三五
神奈川				
第一區	岡崎憲(社民黨)	一三、五三三	―	一三、六五〇
	○金井芳次(大衆黨)	ナシ	―	同
	神道寛次(新勞農黨)	六、七四一	―	同
第二區	片山哲(社民黨)	五、八四一	―	一三、三三八
	川島不二郎(地方黨)	八、三一五	―	同
新潟				
第一區	○長谷川寛(社民黨)	ナシ	―	一四、一七〇
第二區	布施辰治(勞農同盟)	八、八六八	―	一三、〇八九
	○上村進(新勞農黨)	ナシ	―	同
	○玉井潤次(舊農民黨)	九、五六一	―	同
第三區	○×××(大衆黨)	五、四六三	―	一三、九六四
群馬				
第一區	須永好(大衆黨)	五、二三〇	―	一一、四九七
	○桑島定助(社民黨)	ナシ	―	同
千葉				
第一區	○岡野節夫(千葉勞農黨)	ナシ	―	一五、九七五
第二區	○×××(前同)	七、〇八五(×××・竹尾計)	―	一五、九九二
	竹尾弌(新勞農黨)		―	
	○佐藤祐之助(社民黨)	ナシ	―	同
栃木				

第一區	麻生 久(大衆黨)	五、八二〇	—	一一、八九七
奈良				
全區	○× × ×(大和統一無產)	八、七七九	—	一一、〇〇二
山梨				
全區	○北澤新次郎(社民黨) ○× × ×(舊農民黨)	八、七八六	—	一五、一六六
長野				
第二區	小山壽夫(社民黨)	ナシ	—	一八、〇二一
第三區	藤森成吉(勞農同盟)	六、九一六	—	一四、五二六
	○野溝 勝(社民黨)	ナシ	—	同
宮城				
第一區	赤松克麿(社民黨)	六、〇七六	—	一二、六〇六
岩手				
第二區	泉國三郎(岩手無產黨)	三、八八五	—	一六、二六八
山形				
第二區	白旗松之助(大衆黨)	六、二八五	—	一四、七三三
秋田				
第一區	○× × ×(大衆黨分反派)	二、九九五	—	一六、七〇二
岡山				
第一區	○山上武雄(大衆黨)	五、一五四	—	一一、九七〇
高知				
第一區	○安藝 盛(大衆黨)	ナシ	—	一六、三四三
愛媛				
第二區	○升谷正吉(大衆黨)	ナシ	—	一三、四一七
福岡				
第二區	淺原健三(大衆黨)	二三、〇一五	五、二九九(八幡)	一〇、六二八
	龜井貫一郎(社民黨)	一三、九六二	四、七九〇(八幡)	同
第三區	○丸山敬次郎(社民黨)	ナシ	—	九、八一九
第四區	小池四郎(社民黨)	三、一七三	—	一三、七八八
	○三輪壽壯(大衆黨)	ナシ	—	同

備考、(1)○印は新候補、(2)×印は候補者未定、(3)大衆黨分反派とあるは日本大衆黨分裂反對全國實行委員會、(4)社民黨分反派とあるは、總同盟分裂反對同盟系、(5)鳥取、島根、北海道、其他不明の地方は省略す

以上の表に依て語らう。

東京の第一區は、かつては菊池寛氏の地盤だつたが、わが社會運動の元老堺利彥氏に、社民黨は敬意を拂つて對立候補をあげないと見られる。第五區の加藤、松岡兩氏の對立は、血を以つて爭ふであらう。そして選擧ファンの全關心を集中するであらう。

第六區の社民黨は、鶴藤五郎氏（府議）を戰鬪に從つて詰腹を切らせ、宮崎龍介氏を白蓮夫人を背景としてここに移植し、宮崎氏の第四區を馬島ドクトルに提供するものと見られる。

大阪は第四區に於て、鈴木氏に對して山内氏、第三區に於て西尾氏に對して大矢氏が、決然と立つであらう。しかし、鈴木、西尾兩氏は妥協に努力してゐる。

新潟の第二區では、布施、上村兩氏の血戰が演出されやうも知れぬ。上村氏の郷里は第三區だが、新勢農黨の地盤は第二區にある。と言つて布施氏にとつては前回の總選擧に、死んだ須貝快天と鬪つて、刺し違へた古戰場で、止むに止まれぬものがある。

そして、最も興味あることは、大山郁夫氏が何處にその地盤を求めるかにある。

第一に、氏の追求しなければならぬ途は香川第二區に再び三度び立つて、破壞された組織を再建することである。が、これは、氏の胸を燃やしつゝあるあこがれの議會への登龍門につゞく道ではない。

第二の途は、總選擧の慘ましい敗戰後、氏のめざしてゐた東京第四區――本所、深川――に突進することだが、之れは勞農同盟に奪はれてゐる。第三は早稻田大學の學生ファンをねらつて東京第一區、市電自治會その他の若干の勢力を探り求めて居住地なる第五區、その何れかに立つことだが、前者は社民黨でさへ敬意を表せんとする堺氏との對立となり、後者は加藤、松岡兩氏の土俵で、しかも亦、大山氏を以てするも、到底兩氏の得票に及ばざる貧弱な地盤である。第四は京都第一區の奧村氏か大阪第四區の小岩井氏の地盤である。果して氏は何處に、選擧場を試みんとするか、

次ぎには當落の豫想如何が、殘された問題だが、もとより當落を決する條件は、（一）選擧地盤に於ける組織勞働者、農民の結成力、影響力としての智識階級、小ブルジョアの勢力、（二）民政黨の地盤か政友會その他の地盤か、そのブルジョア黨候補者の如何、（三）候補者の人物、（四）運動資金、（五）無產黨對立の情勢、選擧協定の成否、（六）選擧鬪爭方針、殊に日常鬪爭がよく遂行されてゐるか怎うか、等である。

が、併し乍ら、現在の狀勢の下に、右の表に現れた限りに於て、現在の無產黨七代議士のうち、京都の水谷氏、大阪の西尾氏は、餘程の苦戰と言はねばならぬ。

西尾氏は大矢氏の立つ限り、甚だ危險である。水谷氏の勝敗は奧村氏のために、どれだけ喰はれるかにあるが、大衆黨、社民黨との協定が成立するなら絕對安全である。

右の表中に於て、當選圈の上下に、頭を突き上げると見られるは、

東京、堺利彥、安部磯雄、馬島僴、加藤勘十、松谷與二郎、松岡駒吉、

京都、水谷長三郎、奧村甚之助、

大阪、田萬淸臣、大矢省三、小岩井淨、鈴木文治、山內鐵吉、杉山元治郎、栗須七郎、

兵庫、河上丈太郎、

神奈川、岡崎憲、片山哲、

新潟、布施辰治、

山梨、北澤新太郎、
福岡、淺原健三、龜井貫一郎、小池四郎、

そのうち堺、安部、馬島、田萬、小岩井、大矢、鈴木、杉山、片山、淺原、龜井、の諸氏は番狂はせを演じない限り安全である。河上氏は香柿氏との對立を解消しなければ危ぶない。大山氏が大阪第四區に立てば、鈴木、山内氏が喰はれる。

なほ、賀川豐彥氏を神戶、大阪、又は東京第四區から、かつぎあげんとして大衆、社民兩黨から、氏にさぐりを入れてゐるが、立つ氣色は見えないとある。

三

前回の總選擧の戰績によれば、

	得票數	%	當選人員(得票)
政友會	四、二四四、三八五	四二・九	二一七人(三、二七三、四七六)
民政黨	四、二五六、〇一〇	四三・一	二一六人(三、三五六、二四六)
實同	一六六、二五〇	一・六	四人(　五三、三二三)
革新	八一、三二四	・八	三人(　三六、五九九)
無產	四六二、二八八	四・五	八人(　一二三、一五九)
中立	六五五、九三九	六・六	一八人(　二五三、一八八)

即ち無產黨の得票は四分五厘にすぎなかつたのである。

我々が選擧戰にのぞむ原則的な規準は、廣汎な無產大衆を、何によりも先づブルジョア政治勢力の影響から闘ひとることである。そして之れを反帝國主義ブルジョアジーの戰線に動員することである。であるとすれば、現在の制限選擧制の下にあつては――無產黨でも當選するには二千圓の保證金を別にするも五千圓から一萬圓を要する――望ましい候補者を得ることは最も困難だとするも、出來得るだけ多くの候補者をあげ、候補者は共通の反ブルジョアジーの闘爭目標即ち共通のスローガンの下に戰はねばならぬ。例へば、

（一）廿歲以上の男子、婦人に對する普選の獲得
（二）言論、集會、結社の徹底的自由と壓迫法令撤廢
（三）軍備の徹底的縮少、
（四）有產階級には高率累進稅、無產階級には惡稅の廢止
（五）失業者の生活に對する國庫保證、
（六）勞働者、農民に對する一切の社會立法の制定、

その他、無產大衆の鬱然としてその胸臆に醱酵しつゝある不平、不滿を、端的に表現するなら、それは無產各黨の共通のスローガンたることが出來る。

そして、かゝる共通のスローガンは無產各黨の選擧協定によつて、更らに選擧闘爭を効果的ならしめることが出來る。

我々は、言ふ迄もなく、單なる當選第一主義を奉ずるものでは無いにしても、當選に興味と期待を全身的に投げかけてゐる一般大衆の面前に演出されるところの選擧舞臺であり、また議會に於ける利用價値の最大限を獲得するためにも、多く當選せしめなくてはならぬ。無產黨議員が、かうした利用價値を、どれだけ議會に於て實現して見れる

かはともかくとして、前回の總選擧に於ても、選擧協定不成立のために、現實的に左の如く失敗の苦盃を嘗めさせられてゐる。嘗めさせられたものは、候補者や黨幹部ではなくて無產大衆なのである。

落選したる無產黨對立選擧區、

	無產候補數	無產總得票	當選者最低得票
東京、第四區	二人	六、四二〇	四、二〇四
第五區	三	一六、七七六	一三、五六五
第六區	四	二六、一八三	一七、四一三
大阪、第一區	二	九、〇七五	七、三〇一
第四區	二	一二、三一九	九、九一九
兵庫、第二區	二	一一、〇〇四	一〇、〇四〇
新潟、第二區	二	一八、四三〇	一三、〇八九
北海道、第四區	二	八、三〇六	七、三八三
神奈川、第一區	二	一九、三〇八	一三、六一六
第二區	二	一四、一五五	一二、三二六

もつと端的に言へば、無產政黨陣營の分立、對立をなくして、反ブルジョア政治勢力に統一することである。さうなれば共通のスローガンも選擧協定の問題もおこらない。また他の方面から言へば、帝國主義ブルジョアジーの政治勢力に對する、階級的對立的な存在としてこの明確な無產階級政治勢力の統一的な結成體が、一般大衆の眼前に強大な力として行動してをらないそのことが、無產黨の總得票タッタ四分五厘と言ふ慘めさと、ブルジョア黨に凱歌を奏せしめたる根本的な要因であつて、かくて、無產大衆をブルジョア政治勢力の下に眠り込ませ、敵の陣營に追ひ込み、我々が選擧戰にのぞむ原則的な規準を踏みはづす結果に陷つてゐるのである。

が、しかし乍ら、わが無產階級は幸ひにも、總選擧に直面して、かうした無產階級政治勢力の統一への強力な推進機として現在三つの勢力を持つ。一とつは地方政黨戰線統一協議會――京都、奈良、廣島、千葉、岩手の地方無產黨――また一とつは我々の日本大衆黨分裂反對全國實行委員會、他の一とつは、社民黨大會に無產政黨の統一を叩きつけるであらうところの勞働總同盟の組合戰線の統一を目標とする分裂反對同盟の強大な勢力である。

大衆黨の「分反」と、總同盟の「分反運動」は、一とつは左翼の陣營より、一とつは右翼の陣營よりおこされた幹部に對する除名と分裂の防止のために抗爭する直接的には關聯のない偶然な一致を目標にするところの二つの別個な勢力である。

いかに別個な勢力なるにせよ、地方政黨協議會の戰線統一運動、共に、いづれも統一主義に當面の重要な行動基準を追求しつゝある勢力である。此の三つの統一への勢力は、それ〴〵の方向に、選擧戰に先行して、強力な運動を無產政黨の陣營に展開するであらう。

それ故に、總選擧戰に對するここに述べたところの私の想定より實戰にのぞんでは一段と、それによつて無產政黨の陣營のために、實際には有利な戰蹟を記錄し得るであらう。

政友會內の勢力分野

永川俊美

一、壘の上で死んだ田中

自由黨の總師板垣退助は、岐阜の有志懇談會に臨んだが、相原某の兇刄にたふれ『板垣死すとも自由は死せず』と叫んだ（明治十五年四月）。その後政友會が亂暴をやる頃まで生き永らへると、時人は『自由は死すとも板垣死せず』と與太くるやうになつた。

政友會を作つた伊藤博文は、鮮人刺客安重根の刄に斃まつてハルピンの露と消えた（明治四十二年十月廿六日）。政友會を興した原敬は、京都で開く豫定であつた政友會の近畿大會に臨むため、東京驛頭に立つた時中岡艮一にやられた（大正十年十一月五日）共に劇的の死であつた。

田中義一は武將である。武將としては愛嬌があり、人に憎まれぬ男であつたため人から殺されやうとは思はなかつたが、せめて政戰の途上で死なしたかつた。それが壘の上で死んだ（昭和四年九月廿日）。

彼は昭和四年の七月政變で、總理大臣は辭めたが、政黨總裁は辭めないまゝで死んだのであるから、後任總裁問題がゴッタがへしたのも無理はない。田中の前に政友會總裁をやつた高橋是淸は『命がないなら出て行つて呉れろ』と言へば『そうか』と言つて總裁の椅子を立ち去る『財界動亂の後始末で困るから大藏大臣になつて呉れろ』と言へば、一ぺん總理大臣をやつたことはケロリと忘れたやうな顏をして、田中の下に平大臣をつとめる。それが濟むと『モウ俺には用事はないよ』と言つて、自分の後釜へ三土を据ゑてサッサと隱居をする。人の進退として、彼が如く淡白であり、彼が如く垢ぬけしたのは珍らしかつた。

田中も『總理を辭める時には、總裁も辭めて萩へ歸るのだ』といふことは、彼が總理大臣になりたての時から時に上つて居た。だから總理大臣としてはウンと思ひきつて仕事をする腹だといふことであつた。ところが田中にして見れば、名は政黨の總裁でも實、小舅が多くて思ふやうに腕が揮へなかつたのは同情に値する。

總理を辭めたから、いよ〳〵總裁も辭めるだらうとは、一般に信

られて居たが、腹心の久原などから『モ一度總選擧戰をやらなければ……』と言はれると、ツイ其の氣になつて總裁の椅子に頑張つて居たのは、進むことを知つて退くことを知らぬ武將ではあつたと今更ながら惜まれる。

二、生前から清黨運動

田中の治政二ヶ年を通じて、特色の一とせられたのは、彼の人事行政であつた。誰が何と言つても『おらに任せろ』で我を突つ張つたが、久原房之助（遞相）でも山梨半造（朝鮮總督）でもあまり感服されなかつた。勝田主計（文相）、木下謙次郎（關東長官）は兎も角、池上四郎（政務總監）、天岡直嘉（賞勳局總裁）、松本剛吉（勅選）と數へ立てて見ると、彼がそれほど力瘤を入れるだけの値打のあるものは殆んどなかつた。民政黨內閣の安達謙藏や江木翼は、先づこの總裁周圍のものに眼をつけ、綱紀肅正といふ看板を掲げて、大分ほじくり初めた。政友會にとつて一番痛かつたのは賣勳事件であつた。賣勳事件の摘發には田中も神經を尖らしたといふことだが、一方政友會の面々に言はして見れば賣勳疑獄や朝鮮疑獄に連座して居るものは、田中總裁直系のものだ。こんな總裁を戴いて、政友會は總選擧に臨むことは出來ぬから『田中排斥』の氣運は動き初めた。それに小川平吉が之も〇〇疑獄で收容されたので『清黨運動』は漸く勢ひを得た。天岡の收容、小川の收容、山梨にまつはる風聞には、流石の『おらが大將』も胸を痛めたに違ひない。持病の狹心症が起つたのも、その主なる原因ではなかつたかと思はれる。

併し田中に辭めて貰ふとしても、サテ後任問題になると、容易に見當がつかなかつた。これが黨內の大勢を制することが出來なかつた故以であり、田中が頑張つた故以でもあるが、『田中排斥』の一騷動は、早晩免れないところであつた。田中が溘焉として病沒したのは、追ひ出されて、慘めな死を遂げるより彼としてまだ幸福であつたと言へると同時に、政友會は先づ田中を退かせる第一步の紛亂から救はれたものとも云ひ得る。

三、群雄割據の政友會

田中の後には長老株の犬養毅が滿場一致で後任總裁に推戴された。併しそれまでには、血で血を洗ふやうな內紛が捲き起された。實際田中亡き後の政友會は群雄割據の有樣であつた。長老株といふところには高橋是清、犬養毅が居る。岡崎邦輔も居れば、元田肇が居る。それから床次竹二郎、鈴木喜三郎、中橋德五郎、山本條太郎、小川平吉、望月圭介、山本悌二郎、水野錬太郎、三土忠造、久原房之助、勝田主計、織田清兵衞、秦豐助、高橋光威、粕谷義三、松本孫右衞門といつた顏ぶれが居並ぶ。小泉策太郎もひそかに復黨の機を伺ふといふ有樣だ。上に原敬でも存命統率して居れば、政友會も全盛時代であらうが、在野黨になつて黨首を失つた直後と來て居るから、幹部間に葛藤

を來すのは理の當然だ。之等の老人連の外に黨内の中堅とも見らるべきものには、鳩山一郎、森格、前田米藏、秋田淸、山崎達之助、吉植庄一郎、廣岡宇一郎、東武、内田信也、熊谷直太、堀切善兵衞、大口喜六、濱田國松、大内暢三、上埜安太郎等が銘々各自の立場を考へながら新總裁を擔がふとし、又有象無象の陣笠連に至るまで親分をかついで新總裁の品定めをやらうといふのであるから、黨首問題が紛糾を極めたのは無理がない。こう云ふ時に、後藤新平がまだピン〳〵して居たならば、彼は政友總裁の地位を覘うたであらう。晩年には田中と床次の橋わたしをしたこともあるが、も早や盍鳩として逝つた。田健次郎は一頃後藤と肩を並べ、『政友會の爲なら』といふ氣もあつたが、之また老い果て、玉川の閑居に顧問官の椅子を抱いて居るに過ぎぬ。伊東巳代治はその昔伊藤博文と自由黨と手を握らせやうとしたこともあり、今でも民政黨よりは政友會の方に愛著の念を持つてゐる。田中が黨首に推される頃には『金の七百萬圓もあれば政友會が買へるがなあ』と洩らしたことがあつた。が何と言つても彼は官僚の古手で時代向きではない、それに、、、、、の風聞はあり、金を集める趣味はあつても散ずる趣味は持ち合せがないとのことであるから問題にならなかつた。平沼騏一郎も鈴木喜三郎の先蹤であり、現に樞密院副議長をつとめて居るから、ちよつと言ひ出しかけたものもないではないが、陰性でパッと來ぬところから立ち消えとなつた。こう見て來ると新總裁として黨外に之を求めても、一人の適任者がない。矢ツ張り黨内からその一人を拔いて之を盛り立てる外に道がなかつた。

四、床次と鈴木の對立

望月圭介は黨内に總裁候補者が多いのは人材が多い證據ではないかと空氣焔を擧げたが、候補者の多いのはつまり傑出した人材が一人もないといふことを證據立てるものだ。

小川平吉はこれといふ乾兒はないが、黨生え拔きで戰鬪力が强いところから、一方の鬪將であり、自分も田中内閣時代から副總理を氣取つて居た。例の疑獄五十萬圓の大金も黨に投げ込まれた話を聞かぬところから見れば、彼もまた次の總裁を狙つて焦り過ぎたのではあるまいか。法の裁くところを見ねば分らぬが、黨首問題はおろか、政治的立場まで棒に振つた形である。山本條太郎、中橋德五郎、と、もつともらしい顏ぶれもないではないがまだ一黨の總裁といふ譯にはいかぬ。諸勢力の中で頭角を現はすものと言へば床次竹二郎と鈴木喜三郎だ。鈴木喜三郎の麾下は所謂鈴木系といつて、田中の生前から總裁更迭、清黨運動を起して居た。その中心人物は鈴木が亡妻の舍弟にあたる鳩山一郎で、鳩山は森格、内田信也、宮田光雄等と能く、宮田は昨今失意の境にあり、また森は政友會幹事長の現職に居るところから露骨なことも出來なかつたやうだが、鳩山と内田は盛んに運動をやつた。鈴木系では御大喜三郎を黨首に推したいのは山々であるが、世間態を憚つたものか、先づ犬養擁立といふ作戰であつた。犬養の政治的

經歷、手腕は何人も之を認むるところで、正面から彼をいかんといつて反對するものはなかつた。併し腹の底ではどうしても犬養でなければならぬと考へるものは極めて少數で、大多數は床次竹二郎を適任者とした。黨首運動者の色わけは今後の政友會を觀る上にも必要であるから、その最も顯著なるもの二三を示せば大體次の通りである。

1、犬養派（イ）秋田清等の舊革新系で黨外の古島一雄も動いた、（ロ）鳩山一郎等を急先鋒とする鈴木系、（ハ）山崎達之輔、東武、山口義一等の純理派、（ニ）前閣僚中では鈴木喜三郎、山本悌二郎、久原房之助

2、床次派（イ）榊田清兵衛、大内暢三等の舊新黨俱樂部系、（ロ）元田肇、川村竹治等の床次同情者、（ハ）島田俊雄、松浦五兵衛、若尾璋八、高橋光威、廣瀨德久其他地方團體中の床次派、（ニ）前閣僚中では水野錬太郎、三土忠造其他

3、中立派　岡崎邦輔、山本条太郎、中橋德五郎、望月圭介其他多數

もつとも、久原房之助は田中の生前政友會と新黨俱樂部との提携運動に奔走し、昨秋御大典當時より往復した關係もあり、床次派を以つて見られて居たが、田中の死後逸早く京都に西園寺を訪問してから立派な犬養派になつてしまつた。また岡崎邦輔は終始一貫床次の同情者であり、その復歸をすゝめ之を大成させやうとして居たが、黨內の大勢を看破したのか十月七日高橋邸の顧問會に臨む時には犬養推戴論者となつて居た。こんな風だから、犬養派——（鈴木派）床次派といふも特殊の關係にあるものの外は風の吹きまはしで大勢に順應したのである。有體に言へば腹の中では床次を推すものが過半數であつた。老人株にも前內閣僚中にも平黨員の中にも、鈴木、犬養よりは床次といふものの方が遙かに多かつた。それが何故床次の落選となり犬養が月桂冠を得たかと言へばそれには二つの理由がある第一は世論の道德的制裁の結果である。床次は之といふ抱負識見はなくとも、その政治的經驗において、風采において、また金ばなれの點において總裁たるの貫祿を備へて居る。たゞ總理大臣の影を逐うて彼の歩むところ、足が地に着かない。政友會から政友本黨へ、民政黨へ、新黨俱樂部へと轉々し、尾羽うち枯して政友會に復歸したのである。その政治的節操の缺乏が彼を台なしにしたのである。

犬養もその點から言へば政治的典型ではなかつた。藩閥と戰ひ軍閥と戰つた彼、自由黨——政友會を向うに廻して惡戰苦鬪した彼が、寺內を救け、山本權兵衛內閣に入り、最後には『金がないから』と言つて政友會の軍門に降り、古島一雄と共に一旦は政界を隱退する腹まで決めたのであるから、大きな顏はされるはずがないが、併しそれは初期議會以來四十年間を通じての事である。之を床次が大正十三年以來僅々六ケ年の間に轉々として政界巡禮をやつたものと同一視するわけにはゆくまい。

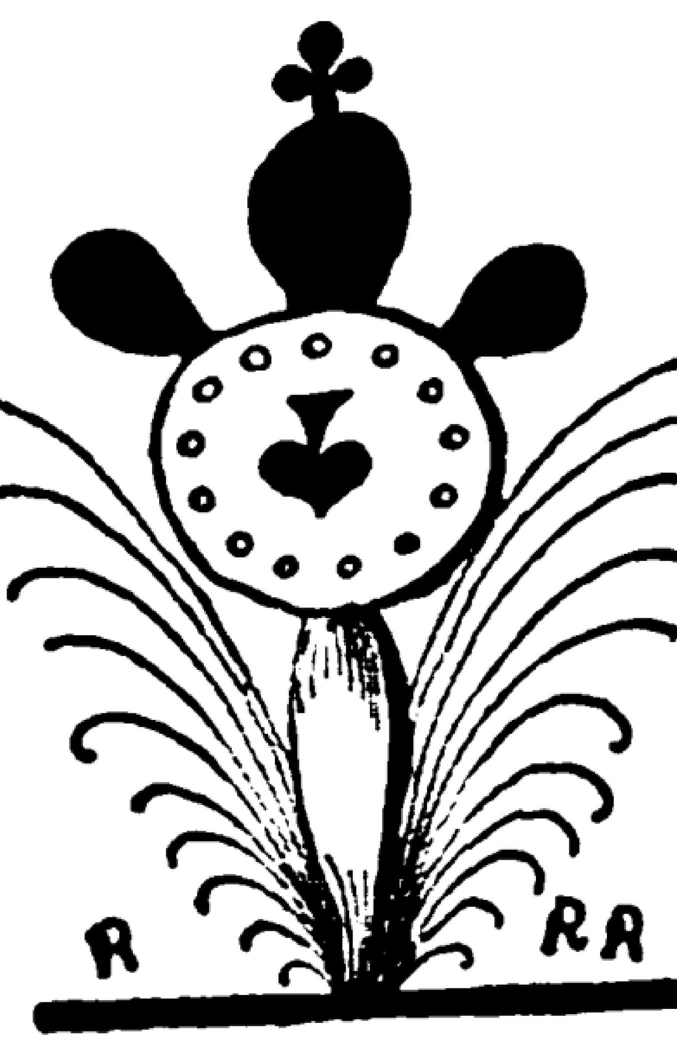
第二は鈴木派の作戰が巧妙を極めたからでもある。即ち鈴木派では疑獄事件の頻發等で政友會が不人氣になつて居るので、先づ清黨運動更

生運動にあつらへ向きの犬養をかつぎ出し、床次派の氣勢を挫かんとした。床次派では歸り新參の結果積極的には何等手を出すことが出來なかつた。床次は鈴木、水野、望月等と一緒に伊勢の遷宮祭に行つて居るし、秋田は喘息で健康を害して自宅に引き籠つて居た。それに黨首運動を試むれば却つて黨內の反感を買ふといふので僅かに政友會の同志を通じて情報の蒐集につとめたに過ぎない。それでも大勢が床次派に傾かうとすると、犬養（鈴木）床次の對立狀態を見て、床次とはかねて不和の間柄にある中橋派が蹶起して漁夫の利を占めやうとさへした。鈴木派は決戰の間際に『床次が總裁になるのでは意外の犧牲者を出すであらう』と宣傳し、また東京組その他で犬養擁立を決議さしたので、分裂をいとひ、圓滿解決を念願とする調停役の老人連（顧問會）は、この際無理をせぬやうにといつて鈴木派、初期の作戰たる犬養擁立と漕ぎつけたのであつた。

五、諸勢力交錯前途多難

昭和四年十月八日、湯河原溫泉の天の屋別館に幹事長森恪の訪問を受けた犬養毅は『老骨でお役に立つならば』と言つて二つ返事で總裁就任を引き受けた。犬養に反對するものの中には多年の政敵だつたといふものもあつた。彼は鬪士ではあるが何となくとつつきにくいといふものもあつた。老齡で思ひ切つた活動が出來まいといふものもあつた。併し多數の黨員中彼の總裁たることに最も不安を感じたのは、彼が貧乏で軍資金が出來まいといふことであつたに相違ない。だが之は間違ひだ。それは今時の政黨に金を出す連中は床次だから出す、犬養だから出さぬといふ遣り口ではない。何々總裁に差し出すのではなくして政友會に出すのだ。多少程度の差こそあれ、三井でも三菱でも政友會はおろか民政黨にも出して居るではないか。殊に彼は福澤の門下生として交詢社系統に多數の知己を有つて居る。福澤桃介はイの一番に彼を助けると申し出て居るといふ話だ。池田成彬、藤原銀次郎、武藤山治もこの方面のチヤキ〱であらう。それに今度の總選擧なら、外から寄附を求めるまでもない。床次竹二郎が出す。鈴木喜三郎が出す。中橋德五郎が出す。山本条太郎が出す。山本悌二郎が出す。その他誰も彼も出來るだけの軍資金はひねり出すにきまつて居る。それはどうせ敗け軍の選擧ではあらうけれども、政友會內における地步の確保の爲めである。黨本部に出す金は少くても內々で自分の乾兒どもに出す金は積り積つて民政黨に劣るまい。

犬養はあの氣性だから、一旦總裁を引き受けた以上は死ぬまで戰ふであらう。全く氣を以つて生きて居る程だから灰になるまで猶晚年を飾らんとするに違ひない。けれども彼は七十五だ。そこが鈴木が犬養を推し、床次が犬養で泣き寢入るところだ。犬養門下が如何に暫定總裁でないと頑張つても、彼に十年も二十年もの政治的活動を望むことは出來ない。そこで鳴りを靜めた群雄どもが一齊に勢力の養成をやるのだ。內訌は潛行し深刻化して行くものと見なければならぬ。政友會の前途が多難なる所以である。（四・一〇・八）



女は匂ひなり

丸木砂土

女は匂ひなり

改造社の「世界大衆文學全集」第十五卷に入れてある、アニタ・ルウス女史作「殿方は金髪がお好き」を讀まれた方は、この日記の愛すべき主人公が、花の巴里の見物に、第一に何に驚嘆したか御承知の筈だ。それは外でもない、この巴里は抑々あのコチイが香水を拵へてゐる處だといふ事である。今日の女にとつて、巴里はナポレオンの墓やサロンの繪で記憶されるよりも、毎日肌身離さないコチイの香水で生きてくるのである。それ程香水は女の生活の一部になつてきてゐる。

日本でも女が香料を軀から離さない例は、昔の女が匂ひ袋又は匂ひ玉といふものを、帶に垂らした風があつた。香合せや、兜に香料を焚き籠めたといふ風流は男にもあつたが、今日では匂ひによる人生といふものは、女の一生そのものを意味すると考へても好い位だ。香水の匂ひと花の薫りに包まれた生活は、女の最憧憬する一生に違ひない。從つて女の匂ひそのものは、直ちに女の象徴よりも、女自身であると見て好い位である。然らばその女の匂ひを、もう少し嗅ぎ分けてみよう。

匂ひによる女の區別

女の匂ひの學術的研究が最進歩したのは、勿論佛蘭西である。その中でも最重要な文獻は、千八百二十一年に出版されたキャアデ・ドボオの「女と力の雰圍氣に就て」で、これは獨逸ではゲエテも愛讀した處だ。その説によると、美人が男に及ぼす印象は、顏や滑な膚や上品な動作ではなくして、その體から出る特有の發散物であるとし、之を「女の雰圍氣」と名付けてゐる。それから千八百八十六年にオオギユスタン・ギヤロパンが「女の匂ひ」といふ研究を發表して、戀愛は匂ひの中にのみあり、と斷言した。即ち女の匂ひを嗅ぐと、その女の生きた匂ひが、嗅いだ男の軀を浸して、飽和するといふ説である。

そこで女の匂ひはどう大別されるかといふと、今日までは之を、肌

の匂ひ、髮の匂ひ、（削除）それから之は重要な區別ではないけれども、口の匂ひと分けてある。尤もギヤロパンの說によると、生れ乍らにして麝香の匂ひを具へてゐる女も、珍しくないさうである。さういふ女は湯に入る事一時間に及ばないで、既にその湯が麝香の匂ひを放つとされてゐる。最珍しいのは、龍涎香の匂ひをさせる女で、麝香の匂ひよりも、この方が遙に男には愛せられるといふ事である。かういふ龍涎香の柔い匂ひの女は、灰白色を帶びた金髮の女に見る處で、栗色の髮の女にもこの匂ひを嗅ぐ事もあるが、栗色の髮の女には、寧ろ菫の匂ひが多いといふ事である。ブリユネットの女には、黑檀の匂ひが多い。男の方から見ると、菫や麝香の匂ひを愛する男は、性質も優しく忠實ださうで、從つて明るいブロンドや暗いブロンドの髮の女は、男の心を攫へてゐる事が、ブリユネットの女よりも長いといふ事になる。例の「殿方は金髮がお好き」といふ小說は、自ら女の匂ひの偉力をも物語つてゐる譯である。

印度の匂ひ

ところが之をカマストラの國印度の昔の文書によつて區別されてゐる處を見ると、印度の女を大別して、蓮の花の匂ひの女、色美しき女、蝸牛のやうな女、象のやうな女の四つにしてゐる。ところがこの區別は、さすがに色欲の國印度丈あつて、夫々女（削除）の匂ひによる區別なのである。蓮の花の匂ひの女は、まるめろの實の如き乳房と、赤い睡蓮の花びら（削除）である。色美しき女は、金色の（削除）、乳房厚く、（削除）蝸牛のやうな女は、（削除）象のやうな女は、體大く、髮堅にして、恰も（削除）象の耳から流れ出る液の匂ひを放つといふ事である。

香料による女の匂ひ

かくの如くに匂ひと情欲との關係は、今更言ふ丈野暮であらう。ルイ十五世の寵姬であつた一世の妖婦ド・バリイ夫人が、この纖細なるルイを手玉にとる爲には、あらゆる秘戯を凝らしたものだが、その中にはこの女が特に（削除）、意を用ひて塗り籠めた香料の發散力が、大なる力を持つてゐたと言はれてゐる位である。（削除）、香料を塗り籠めるといふ事は、決してバリイ夫人の發明ではない。これは遠く埃及の古い昔に發してゐる。或る人は之を說明して、古埃及時代の一夫多妻主義から生じる性欲的競爭の結果、（削除）夫をわが傍に誘ふ必要があつたからだと言つてゐる。三千年以上を經た昔のパピルス處方書といふものに、女の爲の小さい球の處方があるさうである。

埃及に於けるこの馥郁たる女の（削除）薰りは、後世まで埃及の習慣となつて傳へられたが、これは又西洋にも亞剌比亞の醫者によつて輸入されたらしい。フロレンスで發見された文書で、トロツラクといふ女醫者が第十一世紀に書いたものに、この事が載つてゐて、女性後

興期時代には、香料を塗り籠める外に、一種の婦人用、、まで出來て、遂には男までこの種の、、の、、をするやうになつたさうである。殊にフランク一世の時代には、床屋と風呂屋が、かういふ、、の、、を行つたさうだ。十八世紀の華麗時代にもかういふ風習の行はれた事は、レチフ・ド・ラ・ブレトンヌの小説「反ヂュスチイヌ」やサアドの小説によく現れてくるので分る。勿論かういふ女の（削除）特に好く匂はすばかりでなく、口にある物を含んで、口を開けば芳香を漂はす風習も、遠く希臘羅馬から、今日日本の「カオール」に及んでゐる。番紅花、薔薇その他の香料を入れた口ゆすぎの水が用ひられ、沒藥乳香を飲み、嫉妬心の強い希臘人は、女を外出させる前に、玉葱を嚙ましたとさへ言はれてゐる。

香水風呂といふものも、希臘の詩に出てくるが、「最流行を極めたのは、十八世紀である。殊に「マリイ・アントアネット式洗盤」といふ淺い風呂桶が、この香料風呂に使用され、牛乳、巴旦杏、櫻草水、薔薇香水、メロンの汁等が用ひられた。ギャロパンはかういふ香水風呂が、女の腰に特に良く利くと推賞してゐる。

香水風呂の次に、花風呂といふものがある。花風呂は巴里の女に愛せられたものだが、これは玉の肌に花の匂ひを沁みこませるばかりではない、生きてゐる花の薫りが、女の膚を刺戟し力強くすること、シヤンパンの風呂と同樣だといふ事である。花風呂には二種類ある。一つは風呂桶を熱しておいて、その中に花を摘み入れ、一時間ばかりその花の中に體を横にしてゐるのである。もう一つは熱湯の中に花を投して茹でて、その水で湯を使ふのである。

寢床へ香料を撒くやり方は、少しも珍しくはない。戰前の巴里で、ある客好きの侯爵夫人が大勢の女を招いて、その一人一人の寢床の枕の下に、夫々その女の好む香料の匂ひ袋を入れてもてなしたといふ有名な話がある。

匂ひ手袋といふものは、文藝復興期時代の發明品だが、伊太利から佛蘭西へ輸出されたものである。西班牙製のものは匂ひが強過ぎて、はめてゐると頭痛がしたさうである。中にはこの匂ひ手袋を、消毒に使つた例も出來てきた。英國ではエリザベタ女王が匂ひ手袋の愛好者で、この手袋を穿めた肖像を描かしたといふ凝り屋であつた。手袋には龍涎香や菫の匂ひが好んで用ひられたさうである。

話は違ふが、部屋や客間を匂はすといふ事も、敢て驚くには足りない。今日でも人いきれと煙草の匂ひの籠もつたのを消す爲に、サロンで香水を撒くが、チヤアルス七世の時に、ブルグンドのフイリップ候の宴會では、子供の立像を据ゑて、それに薔薇の香水の小便をさせたといふ話がある。食事の間オレンヂの香水の噴水を噴き上げさせたといふ事も、千六百八十一年の記錄にある。中には芝居の舞臺を匂はすとか、詩人が詩を朗讀する時に、その詩の内容に合はした香水を撒くといふ事も行はれた。その外宮廷、劇場、舞踏會で、香水をふり撒くのは、當り前の話である。千八百九十七年にブダペストのオペラ座

で、ハスライテルといふ作者の「赤い靴」といふ舞踊劇をやつた時に、舞臺の美事さに加へて、「薔薇のワルツ」が初まると、見物席悉くが白薔薇の匂ひ馥郁と薫つたさうである。宮廷に麝香の匂ひを散らした例は、シツレルの「たくみと戀」第一幕第六場に出てくる。

花そのものが、女の性欲を刺戟する爲に用ひられた例は、古代羅馬以後いくらでもあるが、それは花の匂ひが元來酒の酔ひを覺まして、同時に性欲の衝動を高めるものだからである。女への贈物に花束が用ひられるのは、決して美しい花を捧げる爲ばかりではない。マンテガツツアに向つて、或る女がかういふ事を言つたさうである。

「わたくしは花の匂ひを嗅ぎますと、何か罪でも犯してゐるやうな好い心持になるんでございますよ。」

肌の匂ひ

そこで香料による匂ひよりも、もつとぢかに來る匂ひを嗅いでみよう。そこで先づ鼻に入るものは、女の肌の匂ひである。肌の匂ひは勿論汗と脂肪による匂ひであるが、この汗の匂ひが時として麝香の匂ひに變る事は、ギヤロパンの說の通りに敢て珍しくない。肌の匂ひで最も強いのは、腋の下である。腋の下の匂ひは、不潔な女では牡羊の匂ひがするが、身綺麗にしてゐる女の場合では、これを大氣に曝すと、薑又は麝香の匂ひを放つものである。それは今日西洋を旅行された日本人の多く經驗された處であらう。不潔な女の牡羊の匂ひは堪らないばかりでなく、その匂ひの沁みた肌着を抛り出すと、仔猫さへも羊と思つて飛びつくとさへ言はれてゐる位だ。

腋の下に續いては、肩、胸、襟筋の匂ひである。殊に襟筋といふ部分は、人間の體で髮の生へてゐる部分と生へてゐない部分との境目で、(削除)である。モオパツサンはこの襟筋を以て、最も接吻に好い處だと言つてゐる。獸が獲物を捕へる場合にも頸を嚙むのは、この部分の刺戟によるものと言はれ、牡馬が牝馬を愛撫するのに、頸を嗅ぎ又は嚙むのも之と同樣である。

髮の匂ひ

髮の匂ひは、鳥でいへば羽根の匂ひであらう。エエゲルといふ人の說によると、極樂鳥とか雉とかの長い美しい羽根は、ダアヰンの信じた如くに、單に雌の目を引き寄せる爲ばかりではなくして、そこから微妙な薫りを發散して、雌の情欲を刺戟するのだと言つてゐる。人間に就ても同樣であらう。獨逸には「髮ある處、悅びあり」といふ諺がある。僕等の日常生活に就てみても、長い髮、捲いた髮、濃い髮の男は、女の目には、いかくり頭や、薄い髮や、滑かな髮の男よりも遙に情欲的に映る事は確であらう。これはその濃い色と強い力にのみ因るのでなくして、その豐富な髮の匂ひに因るものが多い。相愛する男女が互に髮を玩ぶとか、母親が子供の髮を嚙むとかは、まぎれもない愛の確證であらう。女に就ても、その長い髮は「肉體の花瓣

いはれる位に匂ひの機關なのである。殊に（削除）女の髮はオゾンの匂ひを發するさうである。

髮は女の榮えなり、とは基督の言葉である。けれどもその髮さへも短く捨ててしまつたのは近代斷髮婦人である。女の斷髮がたとへ斷髮美として新しい女性美を創造しながらも、男を誘惑すべき匂ひの機關を、次第に顧みなくなつてゆく處に、斷髮の新しい意義もある筈だ。

口の匂ひ

口の匂ひは性慾的な匂ひではない。これは寧ろ趣味的な匂ひである。接吻が口の匂ひとどういふ關係にあるか、これは敢て僕の研究を俟つ迄もない。

匂ひと年齢

女の匂ひが、その年齢によつて變化する事は、（削除）例へば處女時代と夫婦時代と老年時代とは全く異る。處女の匂ひは、純潔無臭、春の日光の如きものとなるに反して、それが戀を知るに及んで、次第に匂ひの量と質を增し、殊に結婚後になつては、（削除）、眞の濃厚猛烈な「女の匂ひ」の時代に入るのである。それが年をとると共に、一種の乾燥した匂ひになつて、ある人はこれを枯葉の匂ひと同じものだと言ひ、ギヤロパンは年をとつた女の匂ひを、乾いた薔薇の花びらの匂ひ又はすがれた菩提樹の花に比べてゐる。いづれも決して不愉快な匂ひではない。

時間と天候

女は花のやうだ。その最も美しい甘い匂ひは、朝と夕暮時が、最も多く發散されるものだと言はれてゐる。尤も女によつては、夜になつて最も強い匂ひを放つものである。夜になつて初めて開く花があるやうなものであらう。天候も決してゆるがせに出來ない。暴風雨のくる前、蒸し暑い空氣なぞの場合には、特に女の匂ひは濃くなる。

體付

痩せた女が肥つた女に比べて、匂ひの著くないのは、皮膚が乾燥してゐるからであらう。男の好みが何に多いか、言ふには及ぶまい。

髮の色

西洋の女で最も強い匂ひを放つ女は、赤い髮の女だと言はれてゐる。クララ・ボウの映畫「赤い髮」といふ映畫は、殘念ながら見落したが、何かこの邊の關係はないものか、是非知りたいものだ。ギヤロパンの區別によると、髮の色と女の匂ひの強さが次第に薄くなつてゆく關係は次の如くである。

一、黑んぼ、白黑の混血
二、黑いブリユネット、肌の色濃きもの

三、黒いブリュネット、肌白きもの、但し筋、腕、腰、膝を除く
四、黒いブリュネット、肌白く、靜脈微に光り、髪に光澤あるもの
五、明きブリュネット
六、暗いブロンド
七、明るいブロンド

これは黒檀の匂ひから麝香の匂ひへの順序だが、赤い髪の女は全く特別で、この中へは數へる事が出來ない。

氣候

熱帶の花の匂ひは、溫帶寒帶の花よりも強く薫る。ゲエテの所謂人間の花に於ても、全く同じだ。

食物と藥品

動物の肉の匂ひは食物によつて甚だ異る。鳩に肉を食はせて飼ふと、猛禽と同じ匂ひの肉となるさうである。肉食をする人が菜食する人よりも強い匂ひであることは、この例でも明である。又藥品によつても人の匂ひは變化する。肝油を飲む人の汗は、鑵詰の鰮の匂ひがし、硫化加里は硫化水素の匂ひの汗を出し、燐酸亞鉛は葱の匂ひをさせるさうである。アルコホルも之に近い。

衣服

人の着る衣服は又肌の匂ひと關係が深い。すべて黒い色のものには、肌の匂ひを増すものである。黒、藍、赤、紫の順序で、その力は減つて行く。黄に至つては甚だ薄く、白い色のものとなると、殆ど肌の匂ひを考へさせない。衣服の質も勿論重大だ。例へば羊毛製のものと絹のものは、木綿や麻に比べると、肌の匂ひを増すものである。尤も羊毛製のものは汗をかく事が多くて、從つて好い薫りを害する事が無いでもない。

氣質

悦び、苦痛、安心、怒り等の心持が、女の匂ひを變化させる事も明である。憂鬱な氣質の女の匂ひは、決して愉快なもので有り得ない。涙も餘り溢れ出ると、しまひにはいくらか膠に風の匂ひが混じてくるさうである。

その外(削除)女の軀の匂ひを變化させる事も、一般に認められてゐる處だ。エエゲルの說によると、(削除)女は、古い酪を思はせる匂ひを放つさうである。その間の女は、決して花に水をやるなと言はれるが、その間の匂ひで折角の花の匂ひが臺無しになるからであらう。又、、も之に關係があるが、猶く研究の要はあるまい。唯おもしろいことには、希臘の哲學者デモクリトは、余程この點について銳敏な鼻を持つてゐたものらしい。ヒポクラテスが或る日一人の女を連れてデモクリトを訪問した處が、この賢人はこの女に處女としての

結婚をしたさうである。ところがその翌日又同じ女と連れ立つてデモクリトの處に出掛けると、今度は妻としての結婚をしたさうである。この二日の間にヒポクラテスが何をしたか、デモクリトはちやんと女の匂ひで嗅ぎつけてしまつたのである。こんな人にかゝつては敵はない。盲人が外に出た留守に、娘が（削除）歸つてみて（削除）知つた例はいくらもある。

かういふ女の匂ひが人生の悲劇を生み出した例はいくらもあらう。腋香が離縁の原因となり、口臭が夫婦不和の基となつた話は、日本でもいくらもある處である。

文學に現れたる女の匂ひ

文學に現れたる人の匂ひを見ると、或る例外を除いては、悉く女の匂ひに盡きてゐる。これを見ると男は匂ひに對して、女よりも敏感であり、且女の匂ひが男を刺戟する事尠からぬ事が分る。

僕は香氣の文學として、第一に舊約聖書の雅歌の全篇を擧げたいと思ふ。この八章から成る短い雅歌は、殆ど世に稀なる匂ひの詩である。花嫁の衣裳の香氣は、レバノンの香氣の如く、その頰は馨しき花の床の如く、その鼻の氣息は林檎の如く匂ひ、その香膏の馨は、すべての香物よりすぐれてゐる。園に生ひいづるものは、番紅花、菖蒲、桂枝さま〴〵の乳香の木と沒藥、蘆薈一切の貴とき香物である。「北風よ起れ、南風よ來れ、わが園を以てこの香氣を揚げよ」といふ句さへある。雅歌全篇は、馥郁たる花香の世界と美しき體の匂ひに滿ち充ちたる詩に外ならない。

スピイゲルベルヒといふ人の記した古代埃及の歌にこんな句がある。

　われ日々君が衣を洗ふ男となりたや、
　頭巾の油の汚れを洗ひつゝ
　君が匂ひをわれ吸はんとぞ思ふ。

女の體臭そのものが、好い匂ひの具體化したものだといふ觀念は、古い東洋の思想らしい。それが東洋から西洋に傳つたものだと言はれてゐる。波斯の詩にも、薔薇、麝香、素馨の匂ひ、春風の匂ひとして歌はれ、詩人モンタナビの句に「かの女の唇は、夏の微風よりも匂ふ」とあり、「アラビヤ夜話」の中にも、女の好い匂ひの口といふ言葉がある。クロアチアの歌に「何よりも美しい匂ひの歌」といふのがあつて、女の胸の匂ひを褒め稱へた男が、それは何の匂ひかといふと、女は答へて

　わが優しき君よ若き勇士よ
　わが胸の匂ひは
　まるめろならず、橙ならず
　麥わら菊ならず、うめ椿ならず
　若き乙女の魂の薫りにこそ

と歌つてゐる。ホメエルの「イリアッド」には、アンドロマクが男

を「匂ふ腕」に抱くとあり、ずつと後世になつて、沙翁になると「ロメオとジユリエツト」の中に、嗅ぐ事によつて愛を生じるの句がある。佛蘭西のシヤトブリアンは「アタラ」の中で、髪の匂ひの不思議な效果に就て述べ、獨逸のシツレルは、腐つた林檎の匂ひを嗅ぐと、最も美しい詩的情趣が湧いてきた事は、有名な話である。その「ドン・カルロス」第五幕には「お前の匂ひは人を殺す」の句がある。グリルパルツエル、ハイネ、メリケなぞの獨逸詩人も、いづれも女の匂ひの詩を書いてゐる。

エドモン・ゴンクウルの小説「ラ・フオオスタン」の中で、女優がアナンダアル卿へ、自分の胸を嗅がせる處がある。

「あなた、嗅いでゐらつしやるの。何を嗅いでゐらつしやるの」

「撫子の花です」

「それから」

「あなたの肌です」

といふ對話がある。

同じくゴンクール兄弟の小説「ルネ・モオペラン」に出てくる女は、色男と別れる時に必ず幾度か自分の手で男の頭の髪をかき亂しておいて、急いでその手に手袋をはめて家に歸る。それから次の日もくる日も、(削除)、己れの手を洗ひもせずに私に嗅いでは、愛する情夫の髪の匂ひを吸ふ、といふ事が書いてある。

ユイスマンスの小説「逆に」の中に出てくる侯爵は、匂ひの狂信者で、多くの香料によつて「匂ひの交響樂」を作り出す人である。自分の部屋に種々の匂ひを吹き散らして、更に輝く人間の匂ひと獸の匂ひに近いものを加へた。(削除)、扮飾した女を戀はせるからださうである。トルストイも嗅覺と性慾生活との關係を心得てゐる。「戰爭と平和」の中で、ピエル伯爵が急にヘレネ王女と結婚の決心をしたのは、舞踏會でこの王女の匂を嗅いだのが動機である。「コザツク」の中でもエロシユカ伯父の話にこの男の匂ひがついてこない事がない。

最後に女にかけても驚くべき好色家であつたゲエテはどうかと見ると、勿論女の匂ひを嗅ぎ逃してはゐない。「フアウスト」第一部で、メフイストはフアウストを唆し「あの女の匂ひの籠つた中で思ふ存分眺めて」といひ、マルガレエテの部屋に忍び込んで、この小さい女部屋の匂ひを嘆賞した。ところが妙な事には、「フアウスト」第二部では、女が男の匂ひに鼻をうごめかす處がある。男の匂ひが女の心に及ぼす効果を描き出した點について、「フアウスト」第二部は誠に稀有の作品であると言つて好い。その中でフオルキアスが踊る美少年を評して「前春のかほりがしますよ。皇后様にずつと近く寄つたものでは、パリス丈がたつた一人さういふ好い匂ひをさせたのですよ」と言つてゐる。この美少年パリスの近付いてくるのを見て、

若い女(感激して)香の煙に交つて、何だか匂つて參りますわね。胸の奥までせい／＼するやうな匂ひですわ。

最も年をとつた女。あれは若い人の盛りの時の匂ひですよ。あ、

て若い人の體の中で、不老不死の藥となつて、あたり一面に擴げるのですよ。

パリスの姿は、多くの女を飜弄した若きゲエテの姿であらう。

日本の文學で、女の匂ひを扱つたものは、何といつても田山花袋の「蒲團」であらう。もつと性欲的匂ひの強い描寫は、谷崎潤一郎の作品にも見えてゐる。

ボオドレエルとゾラ

かういふ文學的作品に現れた女の匂ひの外に、作家自身全くこの匂ひに溺れたものがある。それは二人とも佛蘭西人の詩人ボオドレエルと小說家ゾラである。

ボオドレエルの情熱は、殆ど猫に對する愛と、匂ひに對する愛とに區別出來る、とさへ言つた人がある。この詩人は匂ひの中に一切の世界を夢見たと共に、ノルダウの言葉によれば、女をその匂ひの感覺と共に愛したのである。（削除）匂ひはボオドレエルを全く陶醉的歡樂の中に誘ひ、あらゆる昔の記憶を蘇らせ、樂園の幻想をまじなひ出したものである。「惡の華」第二十三章の「エキゾオチツクの匂ひ」の詩の如きは、この例であらう。殊にボオドレエルの愛したものは、女の髮の匂ひである。

「長く、長く、君が髮の匂ひを嗅がしめよ。渇ける者泉の水を吸ふが如くに、わが面を君が髮の中に埋めしめよ。匂へる手帛の如くにわが手をして君が髮をもて遊ばしめよ。……君が髮の燃ゆる深淵の中に、煙草と阿片と砂糖の交りたる匂ひを呼吸す……」

といふ一節は、この詩人の「散文詩」に出てくる言葉である。「惡の華」第二十四章の「髮」の詩に至つては、この詩人の幻想を最も明にしたものであらう。

小說家ゾラに至つても、全く匂ひの作家である。千八百九十七年にドクトル・タルヂフといふ人が匂ひと性的行爲との關係を論文に書く前に、女を誘惑する香料とか、女の智能とその愛する香料との關係とか、いろいろの質問の手紙を出してゐるが、それに答へたゾラの手紙の一節に、

「わたしの僅かばかりの研究は、女の持つてゐる特有自然の匂ひに限られてゐるが……わたしの斷言出來る點は、匂ひの感覺といふものは、自然が男を捉へて、種族保有に備へしめる誘蹄の一種だといふ事である。……人工的香料は、裝身具と同じやうに、男に對して女が計畫した誘惑である……女が男よりも多くの香料を用ひる事は、身よりも多く身を飾ると同樣である事を、わたしは信じてゐるが、それは智能の程度に應じて向上し、從つて爛熟の境に入り、遂には頽廢の程度に至るべき證據になると思ふ。もし匂ひの感覺が一種の頽廢であるとすれば、そんな現象は社會のどの階級にも見出される處である」

と言つてゐる位である。佛蘭西の小說で、匂ひの描寫は、ゾラに至つてその語彙を窮くべき程豐富にしたものと見られてゐる。その描寫

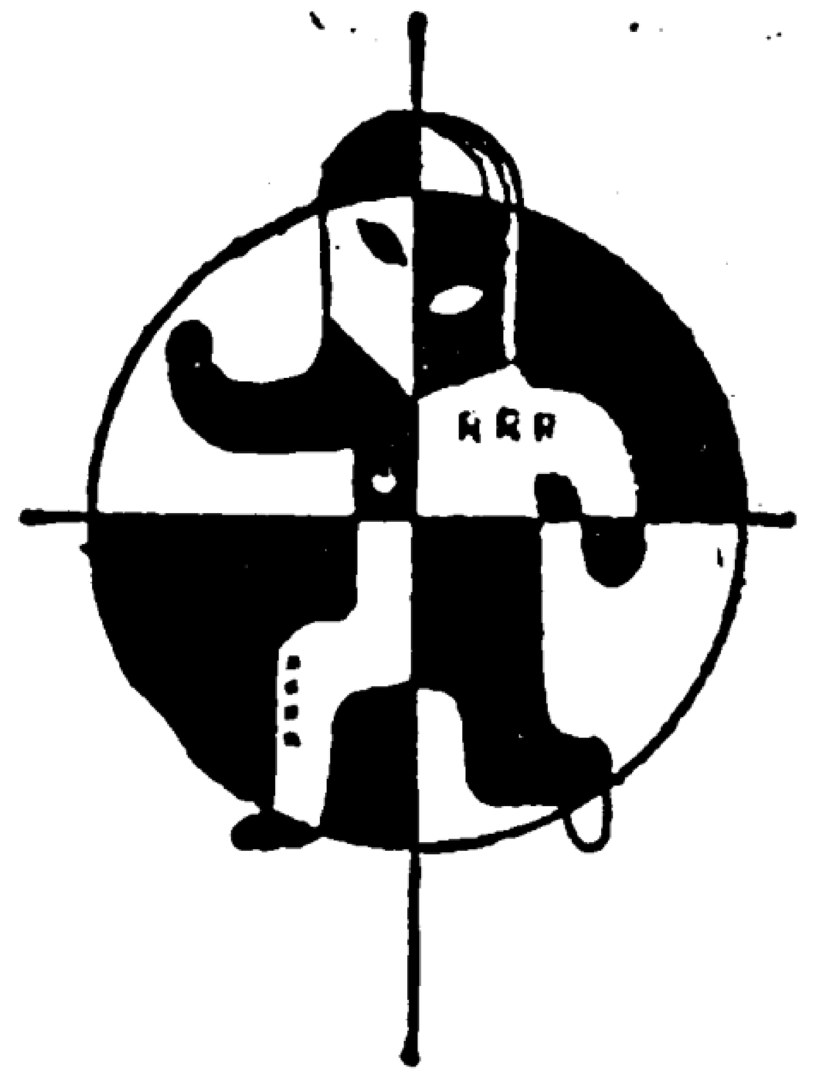
が微妙な匂ひの陰影にまで立入つた例は、「ルウゴン・マッカル叢書」の諸篇の至る所に見出される。人の匂ひは勿論年齢と健康によつて區別され、性格、苦悶、性癖によつて影響されてゐる。この叢書に出てくる男女は一人として夫々特有の匂ひを持つてゐないものはない。從つて千八百八十九年にはレオポルド・ベルナアル先生が「ゾラの小説に現れたる匂ひ」といふ研究まで出してゐる。ベルナアルはゾラのこの感覺を肉體上の構造から來てゐるとしてゐる。ゾラの肖像をいくら見ても、先づ鼻が目に付く。その鼻は大く、肉がたつぷりついて、幅も廣い。殊に著しいのは鼻の孔で、それは震へ乍ら、周圍の雰圍氣を吸ひ込んでゐるやうに見える、とベルナアルは說いてゐるのである。

匂ひの嫌ひな人々

これ程偉大なる詩人と小說家に愛せられる匂ひも、哲學者には、甚だ輕蔑されてゐる。プラトオはその國家論の中で、芳香を以て精神的愉悅と同じ階級においてゐるが、近代に至つてはカントもショオペンハウエルも、みな匂ひの感覺を以て、人間の感覺の中の最下等なものにしてゐる。文化の高い人種は目と耳の感覺が進んでゐるに對して、野蠻人は鼻の感覺が銳いからであらう。ロンブロオゾオは文化といふものは先づ第一に裸の人間に着物を着せる事に進んで、その爲に男女の體の自然の匂ひは、昔こそ甚だ大なる性欲的重要性を持つてゐたのが、今日では全く失ひつつあり、從つて視覺と觸覺とが性欲的印象を喚び起す大事なものとなり、女の唇と乳房とが好色器官に代つてきた、と言つてゐる。モルの如きは人工的香料は決して大なる性欲的意義を持つものではない、寧ろ性的匂ひを隱蔽し排除するものだと斷言してゐる。マンテガッツアは戀愛論の中で、芳香といふものに對する熱情的好みは、我々の上に善良なる道德的影響を及ぼすものでなかの温きくすぐる如き芳香の波に身を委ねる者は、強い純潔な男らしさに對する力を鍛へる事が出來なくなつて、人生の果實を最後の一滴に至るまで絞り出してしまふものだ、とさへ言つてゐる。

多くの哲學者と學者の嗅いだ匂ひは、嫌厭の感を與へるものである。詩人と小說家の嗅いだ匂ひは、漂へる「匂ひの交響樂」である。

「殿方は金髮がお好き」の主人公は、そんなこはい哲學者の名前なぞどうでもよくて、正直にコチイの吸ふ巴里の空氣を嗅いで狂喜してゐる。淸爽たる樅の葉の匂ひと、ヘリオトロオプの寢部屋の匂ひと、僕にしてみると、矢張り後の方の匂ひが嗅ぎたい。(昭和四年十月)



モンパルナス界隈

岩田豊雄

モンマルトルからモンパルナスへ

歐羅巴戰爭は世界の地圖の色を變へたが、巴里の地圖の色をも變へた。事實、合衆國廣場とか、東京通りとか、新しい町の名を生んだ。しかし、これは單に名を變へただけで、鋪道の石ひとつ動かしたわけではない。單に都會の儀禮を果したにすぎない。しからば、巴里生活に地理的變更を起したものを何かと云へば、それはあの「世界的な」モンマルトルが、北から南へ一直線に步き出して、セエヌ左岸のモンパルナスへ足を止めたことである。

勿論、モンマルトルにはまだ多くの燈火と音樂と女が殘つてる。ミユジツクホールと踊場と旗亭はその繁昌を續けてる。赤い風車は威勢よく廻轉し、白い廣場は人馬絡繹してゐる。モンマルトルの外貌に何等の變化はない。少くとも外國人の眼には變化はない。だから、アメリカ人、オランダ人、スペイン人、チエツコ・スロバツコ人、アフリカ人、印度人、中華民國人、日本帝國人なぞの散步は、遙かに佛蘭西人を凌ぐのである。

有名な踊場「パルタバラン」の前へ、一人の日本人が立つならば、赤い詰襟服の玄關ボオイは、金切聲で叫ぶだらう、夜の拾時でも。

——オハヨ、オハヨ。イラツシヤイ！

すべて戰爭以後のことである。フランが下落してからのことである。アメリカの小學教師は、暑中休暇に國內で避暑するよりも、巴里へ遊びに行く方が經濟的だと云つてる。とにかく夥しい外國人が巴里へ流れ込み、或者は瞬間的に、或る者は永續的にモンマルトルを占領した。まづホテルが占領され、アパアトメントが占領され、料理屋とキヤフエと遊場が占領された。(もつとも、外國人ばかりが橫行したわけでもなく、佛蘭西人の大小成金も片棒擔つていいのだが、とかく外國人と云ふものは眼に立つのである)

一體モンマルトンは古い區邑で、大通りは雜踏しても、裏町は閑然

としてものわびた家々が多く、勤人、隠居夫婦、自由職業の人たちが好んで集り、質素な巣を營んでゐた。

外國人と成金の來襲は、家賃と物價の暴騰を來したので、接客業者以外のモンマルトルの住民はぞろぞろと退却しはじめた。そのなかに畫家、詩人、批評家等――藝術家諸君の混つてたことは、モンマルトルにとつて不覺千萬と云はねばならない。

モンマルトルにはモンマルトル氣質があつた。斜にかぶつた鳥打帽の下から捲毛を跳ね上げ、眞赤な幅廣の胴卷をきりりと締めたアパッシュ風の若者に表れた勇み肌氣分、黒衣黒帽黒襟飾の喪服のやうな姿で終日キヤフヱの卓に蟠り、アブサントの臭氣ぷんぷんたる文士畫家に表れた藝術家氣分。それら二つが妙な工合に融合して、モンマルトル氣質と云ふべき「都會の野趣」をつくつた。就中、藝術家はこの土地の名物として考へられ、來り住む者甚だ多く、その制作、取材、集會の場所として選ばれた。文學キヤフヱ「黒猫」「ナポリタン」は當時の有名な藝術家及びその亞流を以て、毎夜繁昌した。いろいろな新運動がそこから生れた。ロオトレクとクウルトリイヌとアントワヌの仕事は、當時のモンマルトルのキヤバレやキヤフヱの空氣に、重大な關係を持つてゐる。世紀末のモンマルトルは、巴里の機關車であり、巴里の徽章であつた。その指導的な、新鮮な趣味は、多くの巴里人を吸引した。モンマルトルの黄金時代は、その時分のことだつた。藝術家殖民地の榮えた間のことだつた。

しかし時代は移つた。戰爭はあらゆるものに括弧を劃いた。モンマルトルに渦卷いてゐた世紀末藝術は完全に過去のものになつた。ことに似而非藝術家の族生はモンマルトルの人氣を落した。そこへ前述の物價騰貴が始つた。藝術家は續々として、風車の山を見捨てた。落ち行く先は河向うのモンパルナスであつた。なぜモンパルナスを選んだかと云ふに、或る批評家は「ちやうどその頃南北地下線が開通したからだ」と冗談を云つてるが、既に戰前モンパルナスの一角には、藝術的雰圍氣が漾つてゐないことはなかつた。それは學問町として古い傳統を持つ、拉典區に隣接してゐたためかも知れない。キヤフヱ・リラ（委しく云へばクロズリイ・デ・リラ）なるものがあつて、ヴヱルレヱヌなぞを古い顧客とし、ポオル・フオルに依つて毎火曜詩人の小集が催されてゐた。リユクサンブウル公園と、南の大墓地の間に挾まれて、閑靜で、さうして物價の安い界隈であつた。モンマルトルの藝術家――ことに安價なるアトリヱの必要に迫られた畫家たちは、悉くこの土地へ移つた。モンパルナスはモンマルトルに代つて、藝術家の巣になつた。山から山へ――藝術家はアルピニストである。

しかし、奇なるかな！　モンパルナス界隈は藝術家の移住以後、俄然として繁昌地となつた。勿論、畫學校が所々に興り、畫商、額縁屋が續々開店したには相違ないが、そんなことよりも、夜ともなれば巴里の八方から雅客がモンパルナスへ足を聯ねるのである。

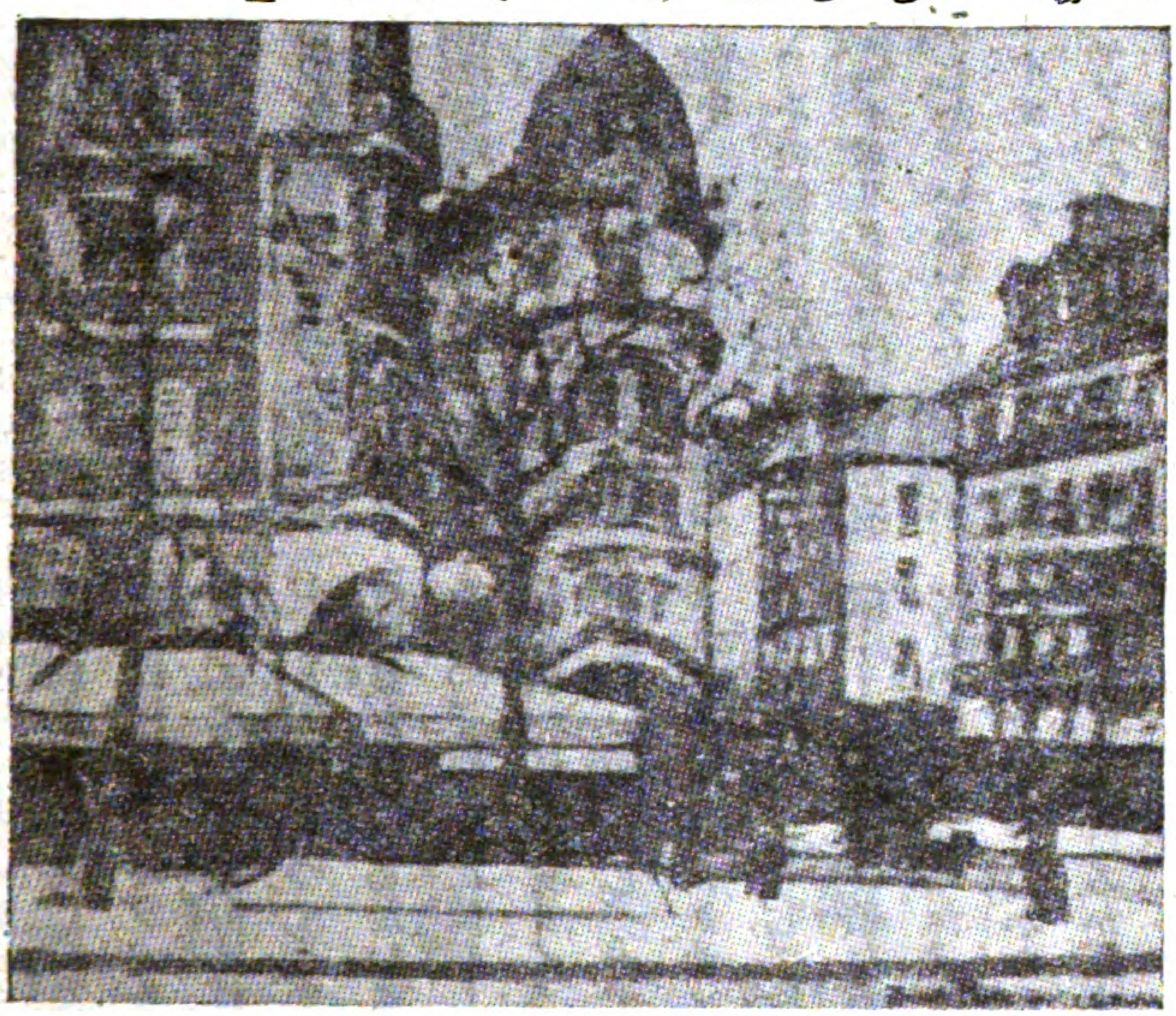
モンパルナス・ア・ラ・モオド！

それが巴里人の合言葉になつた。場末のモンパルナスは、一躍して巴里のモンパルナスになつた。それまで名も知れなかつたキヤフヱ・ロトンドやキヤフヱ・ドオムは、巴里の流行キヤフヱとして忽然活況を呈した。さうして新しい幾多のキヤフヱ、料理店、アメリカン・バア、舞踏場「夜の函」が大通りや横丁に開かれ、ジヤズが吠え、夜の女が群り、宛然として新モンマルトルを開展した。讀者にして片假名の行列に興味を持たるゝならばこの界隈の有名なキヤフヱを擧げただけでも、「ラ・ロトンド」、「ドーム」「リラ」、「ジヨツキイ」、「ラ・シゴオニユ」、「シエ・レ・ヴイカン」、「モナコ」「ショプ・ヴヱジユリヱンヌ」「ロザリイ」「グランド・シヨオミヱエル」「ル・ストリクス」「セレクト」「クウポオル」「ル・ダンゴ」「ル・ヴヱルテイジユ」……まだ後に十五六ある。

「ラ・ロトンド」

チヤアリイ・チヤプリンが戰後の歐羅巴を訪ねた時、巴里で一番足繁く通つたのはキヤフヱ・ロトンドであつた。カルパンチヱがデンプシイを誘つたのも「ラ・ロトンド」であつた。リンバアグの横斷飛行祝賀會の開かれたのも「ラ・ロトンド」であつた。それから、ちよいと待つてくれ――レニン、トロツキイ、ルナチヤルスキイの通つたのも、「ラ・ロトンド」であつた。勿論これは近頃の話ではない。戰前のモンパルナスは獨逸人や露西亞人が非常に多く住んでゐた。キヤフヱ・ドームの給仕は佛蘭西語よりも獨逸語を多く喋つたさうだ。亡命客が住みよかつたほど、モンパルナスは場末だつたのだ。レニンやトロツキイ等が「ドーム」や「ロトンド」の客であつたことは、佛蘭西のコムミユニスト、ラツポポオルの記憶に依る。

ラ・ロトンドはそんな名譽を持つてる。モンパルナスと云ふと、誰もが「ラ・ロトンド」を思出す。キヤフヱ・ド・パリは昔の夢で、今は多くのツーリストがノートル・ダムと等しく「ラ・ロトンド」へ參詣する。モンパルナス人種は勿論ここへ屯ろする――然らざれば家に寢てゐる。商敵「ドーム」との間に、時として盛衰はあるが、「ラ・ロトンド」の名の方が一般的であることは、何人も異論がな



ラ・ロトンド

い。實にこの店に於てこの土地の縮圖を見ることができる。

「ラ・ロトンド」も昔は小さな平凡なバア・キヤフエだつたが、その頃の經營者リブロンと云ふ男が變り者で、貧乏文士には無代で飲ましたり、金に困つた畫家から繪を買つたりすることが評判となり、アポリネエルやジヤコブ等の詩人、ピカソやヴラマンク等の畫家が時々足を運んだことが、そもそもこのキヤフエに特殊な風格を與へる最初の原因だつた。

戰後畫家の群がモンパルナスへ集つた頃、繪が賣れなくて困つた連中が、キヤフエへ繪を陳列させることを考へついた。「ラ・ロトンド」の陳列繪は殊に價値あるものが多かつた。これは今迄のキヤフエに類例のない事で大に人氣を湧かした。安くて良い繪が買へるので、ついぞ今迄モンパルナスなぞへ足を向けた事のない富豪たちが、僞名で買ひにきたりした。ちやうどその頃、「ラ・ロトンド」は大改築を行つて、キヤフエの階上に、食堂、アメリカン・バア、グリルルーム及び夜明しのダンシングを開いた。いづれもこの土地らしい「藝術的」な、特殊な裝飾を施し、食器を選び、包厨を吟味した。これがために「ラ・ロトンド」には、エトワアル方面のブルジヨアや貴族の客を迎へ始めた。店の格は一段と上り、ロオルス・ロイスやヴオアザンが駐車し、夥しい三鞭酒が拔かれるやうになつた。ひとり「ラ・ロトンド」のみならず、附近の同業者は皆これに倣つて新裝を施し、且つ續々として新店が開かれ、いづれも清潔で、近代的で、場末の面影を一掃した。

しかし「ラ・ロトンド」の地階のキヤフエは、依然としてボヘミアンの家である。ただ、そこに集ろ多くの藝術家が、モンマルトル時代の彼等といかに異つたことよ。長髮だとか、ボヘミアン・ネクタイと云ふやうなものは、何處を探しても見當らない。たまたま蓬のやうな髮の持主がゐても、その襟首は青々と剃つてある。華手な蠟染めのポオシエツト、チヨツキの代りにスヱエタ、荒いホームスパン、赤ボツクスの短靴、ロイド眼鏡……。悉くスポーツ趣味だ。アメリカ趣味だ。そのなかに女が多くなつたのも目に立つ。女畫家、女詩人——眉毛を落して、縱長に口紅を塗つて、髮は勿論男振りで、申し合せたやうに、煙草を喫つてる。

さうしてまた、なんと夥しいエトランジエの群だらう！

「ラ・ロトンド」へ行くと世界各國の言葉が聞かれる——ただ佛蘭西語を除いては。さう云つた皮肉家があるくらゐ實際いかなる時でも、あの暗い凹字形の地階を占める客は、少くとも半分は外國人である。ただモンマルトルをうろつく外國人と違つて、巴里に腰を落付け、できれば巴里で最後の息を引取りたいコスモポリツトである。さうしてその全部が藝術家と稱する人々である。

彼等は大部分佛貨の下落後潮の如く押寄せてきて、悉くモンパルナス界隈へ住居した。モンパルナスの空氣も特色も、彼等なしには成立しない。實際彼等外國藝術家に限つて、エクサントリツクな風采を

したがるのだ。適例と云つては悪いが、藤田嗣治君の如きは、其境地の位置から云つても、その代表者だらう。その他、男装をしたり、眉毛を剃つたり、ハッピイ・コオトを着たりするのは、必ずアメリカかスカンヂナビアの女藝術家だ。モンパルナスとして缺くべからざる装飾品である。

しかしこれは佛蘭西人――ことに保守派の文人に、好感を與へてゐない。一九二五年に「ラ・ヴォロンテ」誌が現在のモンパルナスに就て、諸家の解答を求めたら、アンリ・ド・レニエは、

――余はモンパルナス停車場以外に、あの界隈に用がない。

また小説家アンリ・シャンプリイは、

――やや遠い紐育の郊外でせう、アメリカ人が大勢遊んでるから。

滑稽作家のカミに到つては、

――モンパルナス？……知りません。僕は外國旅行が嫌ひでね。

とにかくコスモポリチシスムは、モンパルナスの第一次的性格だ。

話はまた元に戻るが、なぜ人は多く「ラ・ロトンド」に集るのであらうか。酔を購ひにくる者は、かふいふキヤフエへは來ない。第一、酔と云ふことはアンチ・モダニズムである。或る日本の藝術家があつて、この人は大島の着物を着て平氣で往來を歩く人だつたが、「ラ・ロトンド」で痛飲して、とうとう素裸になつてしまつた。しかし折角の快挙も、この近代的ボヘミアン・キヤフエの空氣にはあまり調和しなかつたやうだ。

女を求めに「ラ・ロトンド」に赴くものも、ほんの一部分にすぎまい。「ラ・ロトンド」を事務所の代りにする――これは大分あるやうだ。畫家や文士が、小さな用件や面會を果すのに使はれる。その次ぎが倶樂部――それも談話専門の倶樂部だ。キヤフエでトランプをしたり、將棋を指したりすることは巴里全體としてもよほど流行らなくなつてるが、「ラ・ロトンド」ほど會話の盛んなところも少ない。つまりそれだけ常連の多い證據だが、同時に近代的キヤフエの相をも示してゐる。實に「ラ・ロトンド」の印象は、扉を排すると共に聞える、がやがやがやがやと云ふ人聲であり、濛々たる煙草のけむりである。そのがやがやがやが世界各國の言葉に依る藝術家のゴシップであり、モデルの噂であり、戀の口説であり、アトリエ拂底の話であり、標榜延期の話であることと、その濛々たる紫煙のなかから、ぐるりの壁に掛廻した新様式な繪畫と奇抜な舞踏會のポスターと、鼻眼鏡のストラヴィンスキイの顔、オパール色のコクトオの顔、前髪にロイド眼鏡のフジタの顔、フリエズの顔、ユトリロの顔がちらつくところに、「ラ・ロトンド」があるのだ。

モンパルナシエンヌ

いつも若く、晴やかに、戰前のモデル氣質を護つてる果実人のアイイシヤ。

小柄のブロンドで、陽氣で、お侠で、すべてのモンパルナス人種

の顔を知つてる、キキと云ふ綽名の女。

男の帽子を被り、男の背廣を着て、乗馬鞭を持つて歩く、フアノと云ふ女――裝飾畫家。

それから「プチト・マルセル」と云ふ女。

彼女等は夜の女でもなければ、また勿論正しい女でもなく、有名なモンパルナスの藝術家と友達交際で話をし、夕方から夜明けまで、キヤフエからバア、「夜の函」を歩き廻つて、日を送つてる女だ。それぞれ綽名を持つてる名物女だ。メード・イン・モンパルナスの女だ。

彼女等の前身は大抵この土地のモデルで、アトリエ廻りをしてる時代に、既に風變りなモデルとして評判になつてた女だ。相當怜悧な女たちで、少々ぐらゐ「藝術を談ずる」こともでき、勝氣で、非打算的で、滿幅のボヘミアン氣質を備へてゐる。いづれも美人ではないが、態度や服裝に於て、この土地のシツクを示してゐる。シヤンゼリゼエあたりの女風俗――ごてごて趣味、寶石趣味、毛皮趣味を尻目にかけて、大にスポーチブな截斷美を誇つてるのである。

モデル氣質と云ふものは、たしかにモンパルナスの女の特色だらう。普通キヤフエへ出張して客を探しにくるやうな女にも、着物の好みや着こなしに、さう云ふものが感じられる。この土地にはモデル市の歴史もあり、事實、現在のモデルの數は非常なもので、そのなかには夜の女を兼業する者もあるだらう。とにかく前に云つたやうな名物女の氣風なり趣味なりは、濃いなり淡いなりに、この土地の女を[illegible]をいちいち染めつけてゐる。

「モンパルナス情話」をすこし――。

それは實に、このモダンな藝術殖民地にふさはしからぬことであるが、西洋に珍らしい「情死」が二度も起つてる。

そのひとつは、モンパルナスで最も突飛な家とされてる「ジヨツキイ」と云ふキヤバレのピアニストの、白耳義人の男と、やはりお抱への歌手ジヤニイと云ふ女とが、相共に毒を仰いで死んだ。これは一昨年のことだが、今年になつてもう一つ出來た。しかもそれに維那の劇詩人ホフマンスタアルの死が結びついてると云ふのである。

ホフマンスタアルの息子が巴里へ遊學してるうちに、モンパルナスの歌姫マルセル・サンチイユなる女と戀に落ちた。ところがマルセルは肺病で死んでしまつた。小ホフマンスタアルは直ちにその後を追つて自殺を遂げた。さうしてその時既に病床に在つた父翁は、愛子の死の衝動に依つて、遽かに死期を早めるに至つたと云ふのである。

そのマルセル・サンチイユなる女が、もし前記の「プチト・マルセル」だとすると、彼女も「ジヨツキイ」の女だから、あの外壁に大きなカメレオンが這つてる繪を描いたキヤバレは、甚だ不吉な家と云ふことになる。

しかし、こんな可憐な情話が澤山あるわけでもない。モンパルナスの繁昌を知つて、モンマルトや拉典區から流れ込む女が多いさうだから、天文台廣場あたりの薄暗がりに立つてる女たちは、恐らく最も可

僞でない情話を諸君に囁くだらう。

藝術家舞踏會

モンパルナスの東の端れに、「ビユウリエ」と云ふ舞踏場がある。一八三八年から續いてるセヌ左岸第一の大舞踏場で、戰前までは拉典區の學生や勞働者を常得意とする、民衆的娛樂場だつたが、モンパルナスの發展に連れて、美々しく改築され、多くのブルジョアを迎へるやうになつた。

「ビユウリエ」には度々モンパルナスの藝術家が主催する舞踏會が開かれる。それは必ずしも彼等の享樂を目的とせず、「漂泊民モンパルナス」とか、「共和國モンパルナス」とか云ふ藝術家共濟組合の資金を集めたり、示威をすることが動機となる。それ故入場料をかなり高くする代りに、有名な畫家の作品の福引なぞがある。

冬から初夏にかけて、モンパルナスのキヤフエに、假裝舞踏會の美しいポスターが現れる度に、畫家やモデルは多くの切符を背負はされて、パトロンや友達の所を步き廻り、それを賣りつける。多く賣ることはひとつの自慢である。藝術家の假裝舞踏會は、他に見られない奇拔な扮裝や、美しい趣向が見られるので、人氣がある。

さういふ晩の「ビユウリエ」の前は、供待ちの高級車が玉蟲の群のやうに列び、後から後から乘込んでくる假裝の人を見やうとして、群集が黑山をなしてる。紳士淑女はマントオ・ド・ソアレで深く身を包んでゐるが、畫家たちのうちにはタキシにも乘らず、假裝のまま平氣で步いてくるのもあるから、群集が歡呼を擧げてこれを彌次る。

「ビユウリエ」のなかは廣いので、五百人くらゐの人は裕に踊れる。ジヤズ・バンドとオケストラと二組で交代に奏樂する。九時くらゐから踊り始めるが、人の最も出盛るのは夜半近くである。

とにかく普通の服裝をしてるのは、幹事とバアの給仕だけで、後は殘らず假裝に隱れてる。それもピエロやコロンビヌの月並な姿は少く、舞臺扮裝そのままの手の込んだものが多い。近東風の王子でも、印度の舞姬でも、支那の娘でも、希臘の戰士でも、假髮から靴の尖まで、念入りに道具を整へてる。

女がアパッシュになつたり、男が娼婦の姿になつたりするのは一番手輕るであらう。

孔雀に扮して、手に持つた糸を引くと、本物の美しい羽根がお尻のあたりで一時に擴がる衣裳を見たことがある。それは男だが、きらきら輝く靑い鱗のついた肉襦袢を着て、美事に蛇の感じを出した女も見た。

一番奇拔だつたのは、一對の男女が殆んど裸身で、男は全身に金箔を塗り、金糸の假髮を頂き、女は銀箔を塗り、銀絲の假髮を頂き、相抱いて踊つてる姿だつた。觸ると手が冷たいと思はれるほど、完全に金屬化した男女だつた。

突飛な扮裝をするのは畫家――ことに若い畫家やモデルである。假

假裝舞踏會は大抵投票が行はれ、最上の假裝者が選ばれ、その名が新聞に發表される。さうして當分モンパルナスの話草になる。少しでも名を賣りたい彼等は、この機會を忘れないのである。だから一月も前から、頭を捻ねくり、手間を厭はず假裝の支度を始める。

夜半を過ぎると、そろそろ醉漢も出てくる。かういふ場合には、徹底的に飲む人間が多い。それに藝術家舞踏會の時は、收入を殖やすためにバアも彼等の仲間で引受けるので、義理としても飲まざるをえない。

曉近くなると、きまつて女の泥醉者が一人二人現れる。彼女は胴揚げをされ、シャンパンの雨を浴せられる。花時の飛鳥山あたりでもさうだが、醉つた彼女と云ふものは必ず、、を厄介にしたがる——女性はナチュラリストなのだらう、元來。

しかしそれも、藝術家舞踏會でなければ見られない風景に相違ない。

×

モンパルナスの過去や、その特色ある町々の姿——ことに「リュウ・ド・ラ・ゲエテ」のことは是非書きたかつたのだが、時間なく、後日に讓る。僕の述べたところは、極く表面的なモンパルナスの面影で、巴里人はそれを「新モンパルナス」とも云ひ、また「僞モンパルナス」とも云ふ。いづれにせよ、最近この土地が巴里の歡樂郷として尖端に立つことは事實である。

さうして、その繁昌の原因を辿ると、また此處に全くも同じ言葉を繰返さねばならない——藝術家、藝術家、藝術家と。彼等が去つてモンマルトルが寂れ、彼等が來つてモンパルナスが榮へた。我國に於て新開地の發展は、三業組合が先驅となるを常とする。巴里の藝術家は、まさにその職分を果してゐるわけだが、藝術家と藝妓——文字的には、少くとも、似てゐなくもない。

嫌でない情話を諸君に囁くだらう。

藝術家舞踏會

モンパルナスの東の端れに、「ビュウリエ」と云ふ舞踏場がある。一八三八年から續いてるセエヌ左岸第一の大舞踏場で、戰前までは拉典區の學生や勞働者を常得意とする、民衆的娛樂場だつたが、モンパルナスの發展に連れて、美々しく改築され、多くのブルジョアを迎へるやうになつた。

「ビュウリエ」には度々モンパルナスの藝術家が主催する舞踏會が開かれる。それは必ずしも彼等の享樂を目的とせず、「漂泊民モンパルナス」とか、「共和國モンパルナス」とか云ふ藝術家共濟組合の資金を集めたり、示威をすることが動機となる。それ故入場料をかなり高くする代りに、有名な畫家の作品の福引なぞがある。

冬から初夏にかけて、モンパルナスのキャフエに、假裝舞踏會の美しいポスターが現れる度に、畫家やモデルは多くの切符を背負はされて、パトロンや友達の所を歩き廻り、それを賣りつける。多く賣ることはひとつの自慢である。藝術家の假裝舞踏會は、他に見られない奇拔な扮裝や、美しい趣向が見られるので、人氣がある。

さういふ晩の「ビュウリエ」の前は、供待ちの高級車が玉蟲の群のやうに列び、後から後から乘込んでくる假裝の人を見やうとして、群集が黑山をなしてる。紳士淑女はマントオ・ド・ソアレで深く身を包んでゐるが、畫家たちのうちにはタキシにも乘らず、異形のまま平氣で歩いてくるのもあるから、群集が歡呼を擧げてこれを彌次る。

「ビュウリエ」のなかは廣いので、五百人くらゐの人は裕に踊れる。ジャズ・バンドとオオケストラと二組で交代に奏樂する。九時くらゐから踊り始めるが、人の最も出盛るのは夜半近くである。

とにかく普通の服裝をしてゐるのは、幹事とバアの給仕だけで、後は殘らず假裝に隱れてる。それもピエロやコロンビヌの月並な姿は少く、舞臺扮裝そのままの手の込んだものが多い。近東風の王子でも、印度の舞姫でも、支那の娘でも、希臘の戰士でも、假髮から靴の尖まで、念入りに道具を整へてる。

女がアパッシュになつたり、男が娼婦の姿になつたりするのは一番手輕るであらう。

孔雀に扮して、手に持つた糸を引くと、本物の美しい羽根がお尻のあたりで一時に擴がる衣裝を見たことがある。それは男だが、きらきら輝く青い鱗のついた肉襦衣を着て、美事に蛇の感じを出した女も見た。

一番奇拔だつたのは、一對の男女が殆んど裸身で、男は全身に金粉を塗り、金糸の假髮を頂き、女は銀箔を塗り、銀絲の假髮を頂き、相抱いて踊つてる姿だつた。踊ると手が冷たいと思はれるほど、完全に金屬化した男女だつた。

突飛な扮裝をするのは畫家――ことに若い畫家やモデルである。假

装舞踏會は大抵投票が行はれ、最上の假裝者が選ばれ、その名が新聞に發表される。さうして當分モンパルナスの話草になる。少しでも名を賣りたい彼等は、この機會を忘れないのである。だから一月も前から、頭を捻ねくり、手間を厭はず假裝の支度を始める。

夜半を過ぎると、そろそろ醉漢も出てくる。かういふ場合には、徹底的に飲む人間が多い。それに藝術家舞踏會の時は、收入を殖やすためにバアも彼等の仲間で引受けるので、義理としても飲まざるをえない。

曉近くなると、きまつて女の泥醉者が一人二人現れる。彼女は胴揚げをされ、シャンパンの雨を浴せられる。花時の飛鳥山あたりでもさうだが、醉つた彼女と云ふものは必ず、、を厄介にしたがる——女性はナチユラリストなのだらう、元來。

しかしそれも、藝術家舞踏會でなければ見られない風景に相違ない。

×

モンパルナスの過去や、その特色ある町々の姿——ことに「リユウ・ド・ラ・ゲエテ」のことは是非書きたかつたのだが、時間なく、後日に譲る。僕の述べたところは、極く表面的なモンパルナスの面影で、巴里人はそれを「新モンパルナス」とも云ひ、また「僞モンパルナス」とも云ふ。いづれにせよ、最近この土地が巴里の歡樂郷として尖端に立つことは事實である。

さうして、その繁昌の原因を辿ると、また此處に亢くも同じ言葉を繰返さねばならない——藝術家、藝術家、藝術家と。彼等が去つてモンマルトルが寂れ、彼等が來つてモンパルナスが榮へた。我國に於て新開地の發展は、三業組合が先驅となるを常とする。巴里の藝術家はまさにその職分を果してるわけだが、藝術家と藝妓——文字的には、少くとも、似てゐなくもない。



秋の山をたづねて

吉田絃二郎

九月十七日はちやうど仲秋の明月にあたるといふので信濃の山の人たちは芒を切り、朝から月見の支度をしてゐた。

一茶の句を藉るまでもなく、昔から信濃は月の名所である。千曲、犀川の流れが一つに流れ合ふ善光寺平の水に映る仲秋の明月の影を姥捨の山から見おろす感じはまた格別であるにちがひないが、高原の國であり、山の國である信濃の月は何處にゐて眺めても他に見られない月の光りと美しさをもつてゐる。恐らくその原因の一つは海遠く、山澄み、空の色が深いせいであらう。

十五日の朝……といつてもまだ午前三時であつた。わたくしは山に登る時の習慣として、いざ山に登るとなればほとんど眠れないほどに興奮することがある。いつも山に登る朝は三時ころには起きて裏の落葉松の中で飯盒飯を焚く。その日も飯盒飯を焚いて夜の明けきらぬうちに家を出た。

前の澤で水鷄が鳴いてゐる。水鷄は夏も五月雨のころ鳴くものとばかり思つてゐたが、九月に入つてもまだ鳴いてゐる。無論五月雨ころに鳴くのと、秋ちかくなつて鳴く水鷄とは種類もちがふさうだが、思ひなしかこのころのは聲も低くわびしい。

十五日の朝淺間の根腰を越えて、上信の國境を六里ヶ原に入つて秋草をながめた。六里ヶ原は南に淺間、北に白根を控へた大廣野である。この前たづねたころは天明の淺間の大噴火にもたゞ一軒燒け殘つたとつたへられてゐる別去の茶屋があつたが、今は二三年前の雪の日の噴火に燒けて新らしいバラック建になつてゐる。

別去の茶屋あたりまでは數年前までは熊も出て來た話を聽いたが、今は自動車も通ふほどになつたので、熊が好くといふ淺間葡萄は昔の

まゝにみのつてゐるが、熊の話はめつたに聽かれなくなつた。

六里ヶ原を横切つて秋草の花を見てのかへりに わたくしは不圖上信國境あたりの大空を見上げた。こんなに美しい空、こんなにも深い色の大空があり得べきものであらうか。わたくしは幾度かさう思つては立ち停り、空を見上げた。

海の潮風が吹かないせいもあらう。山の高いせいもあらう。ともかく上州から信濃にかけての高原の空の色はいひやうもなく深く、清く、みがき出されてゐる。信濃の月の名はいささかの誇張もなく恐らく天下無比であらう。

×

十七日の明月を見るといふたのしみは、數日前から每夜空を仰ぐことを忘れさせなかつた。十五日の夜も月は落葉松の林の中に蒼白い光りを投げてゐた。十六日の夜もほとんど雲もなき月の光りを落葉松のなかに浴びることができた。

「明月を見るならば碓氷の峠まで歩いて行つてのことだ。」と思つたので、沓掛から輕井澤を通りすぎて碓氷峠まで歩くことにした。避暑の客たちはほとんど歸つてしまつたので、廢墟の中をたどるやうな心で芒の中を步まなければならぬこともあつた。貸馬と書いた札を懸けた馬小屋には三四頭の馬が秣を喰んでゐた。

舊輕井澤の出外れ、峠へかゝらうとするすこし手前の老木の下に芭蕉の「馬をさへながむる雪のあしたかな」の碑がある。碓氷峠にかゝることに忘れかねる句碑である。

「今日こそ空には一點の雲もない！」峠にゆき着いて見晴し台の上に立つた刹那、わたくしたちは子供のやうになつて空といふ空をながめた。妙義から榛名赤城までがすでに夕暮の色をこめてゐる。西の空には八ヶ嶽、さらに遠く穗高、槍ヶ岳までが明かな輪廓を描いてゐる。淺間はいただきの代までが拾はれさうに映つてゐる。

待つてゐた明月はまだ夕陽の落ちきらぬ間に忽然利根川の白い流れの上に淺黄幕に懸つた舊劇の月のやうな色と形であらはれてゐた。日が暮れて、いくらかの間を置いて地平線の上に徐々にあらはれて來る滿月を想像してゐたわたくしたちには、いささかあつけなさを感じさせないわけにはゆかなかつた。

山の上はあまり寒いので、碓氷權現の社家町の方へ行つて火を焚いてもらふことにした。裏の藤棚にはまだ岐阜提灯などがつるしてあつた。藤棚の下に女が持つて來てくれた木を焚いてあたゝまりながら、わたくしたちは月をながめた。妙義も榛名も月の下に沈んだ恰好で、山の腰あたりには靄ともなく、雲ともなくほんのりと山をつゝむ山氣がたゞよひはじめてゐた。殊に妙義の怪奇的な曲線を描いた「巖角斷層」が月光を浴びて銀のごとく、鐵のごとくそゝり立つてゐる風情は碓氷の月をして一層神秘的にさへ感じさせた。利根の流れが月の下に杳然として漂ふ。しかしそれも間もなく消えて、野といふ野は一樣に黝く、空のみが秋らしく澄みに澄み、磨きに磨かれてゆく。

地に違うて一つの焚かきたゝく。二つとなり三つとなり、十となり、二十となる。

「高崎ですよ。」

「前橋、富岡、それから高崎のさらに向うに一つの大きな火が見えませう。あれが熊谷の火ですよ。」焚火をめぐつてこんな會話が取りかはされる。

運ばせて來た行厨が開かれる。けさ南の松山で狩つた初茸が煮られてゐる。酒を掬む。天下の秋はわたくしたちばかりのものである。

「こんな雲一つない明月といふものは信濃では十年に一度もありません」と社家町の老婆はいふ。いかにも信濃らしき明月である。高山の明月である。話は偶然にも見晴し茶屋の老婆のことに移る。十日ばかり前わたくしは霧の深い日、見晴し茶屋の老婆の店に憩うて茶を飲んだことがあつた。今夜も獨り一人で信濃上野の國境の月を眺めてゐるであらうと思つてゐた。

「あれは輕井澤のお祭の夜碓氷峠を歩いてゐて腦貧血で死にましたよ」と社家町の老婆はいふ。今夜は獨り一人眺むる山の月もないのかと思ふと無情な感慨もわく。

わたくしたちは峠を下りて、二里ばかりの道をふたゝび沓掛の方へ歩いて歸つた。淺間のいたゞきにはめづらしくいつもの白い噴煙も見えなかつた。近道をするためにわたくしたちはキャベツ畑のなかを横切りながら幾度か仰いでは月をながめた。キャベツ畑の隅にはキャベツや木炭を積んだバラック建の倉庫があつた。數年前の秋田舍廻りの旅役者が來てそこの倉庫のなかで芝居を打つたことがあつた。お姫さまに扮した若い女が舞臺衣裳のまゝキャベツ畑を歩いてゆくのを見たこともあつた。その可笑しさを思ひ出しながらわたくしは淺間を見た。淺間は秋よりも靜かに明月の光りを浴びてゐた。

「あんまり月がいゝでとても眠れない。一層のことこのまゝ淺間の根腰をまはつて六里ヶ原までのして見るか」などといふ男もあつた。

わたくしは家に歸つてもなほ寢るのが惜しかつたので落葉松の下を歩きながら月を眺めた。雪よりも白く野菊が咲いてゐた。

×

突然夢を破られた。屋根も壁ももみくちやにされるほどの激震である。空といふ空、地といふ地が摧け、裂け、落ちる音であらうか。わたくしは寢卷のまゝで飛び起きて北の縁側の雨戸を明けた。淺間は爆發である。仲秋の明月は照つてゐた。いかにも靜かに。

北の半天が爆煙のために眞つ暗になつてゐた。暗い柱が幾千尺の高さに登つてゐた。暗い柱をめぐつて、或ひは暗い柱の懐から幾十條の青い電光が走つてゐた。幾百千尺の高さに打ち上げられた石と石が相搏つ音が凄じい光りを誘ふ。明月の夜の靜寂な空を壞る爆音の凄じさはまさに天空の嵐といふべきであらうか。地の底一面に湧きかへる熔岩の煮え立つ音であらうか、地を搖り、山を動かし、空に谺して響く。まことに名状しがたい無氣味さである。山の人たちは噴火口を御

釜と呼ぶ。いかにも思ひつきな呼び方である。噴火口全體が、否、淺間の山全體が一つの釜となつて、岩を煮、熔岩を沸かしてゐる。岩の煮立つ音が秋の夜の空にこだまして萬馬の空を駈けるよりもなほ凄じい響を立てゝゐる。山は吐息するやうに唸つては熔岩を吐き出す。そのたんびに空は鳴動する。稻妻、空に相搏つ石、火山のスロープを跳躍しつゝ落ちてゆく火石、碎くる火岩、見る間に淺間はいふまでもなく、谿をへだてた前掛山も石尊山も一面の火の石につゝまれてしまつた。方幾里の間ことごとく火の石に掩はれてしまつた。幸ひわたくしの家は落葉松のなかの一軒家であるために人聲も聽かなかつたが、沓掛の町では女子供の泣きさわぐ聲が悲慘であつたといふことを後で聽いた。爆發とともにわたくしたちの胸に泛かんだのは夜の十時ころ家の横を通つて淺間に登つて行つた人たちのことであつた。小諸口からもまた登山者があつたにちがひない。そんなことを考へてゐると天に冲して燃え立つてゐる爆煙の恐ろしさが犇々と胸に迫つて來る。庭の草の中に石の落ちて來る音がする。壯觀といへばまことに壯觀であるが、山に登つた人たちのことを考へれば悲愴きはまりなきものである。一臺の自動車が沓掛から峰の茶屋に走つて行つた。これも後で聽いたことであるが峰の茶屋の娘は沓掛の自動車屋にかしづいて來てゐるといふことであつた。嫁の里の安否を氣づかつた男は自動車を運轉してまだ石の降つてゐるなかを沓掛から峰の茶屋まで飛んで行つたのであつた。午前三時ごろであつた。七十幾歳の依田老人が沓掛の方からわたくしたちの安否を氣づかうてたづねて來てくれた。歸りに老人は溫泉に浸されて夜明けちかくまで六里ヶ原で熊を撃つた話などを若い者たちに噺してきかせてゐた。

夜が明けると淺間はいつもの靜かな淺間であつた。熔岩の一部分が燃えてゐるほかは山の肌もいつものやうになめらかであつた。

「峰の茶屋では石が飛んで來て屋根や床を突き拔いたほどだつたので、親子五人が抱き合うて泣いてゐたといひます。」上州から繭を積んだ馬を曳いて來た男は噴火のことなどは忘れたやうな顏をして通りすぎて行つた。

二日前淺間の根腰を越えて、六里ヶ原に歩いた時わたくしは峰の茶屋で五人の子供たちが、大きな空箱の中に入り、上から糸立を冠つて笑ひながら寒い風を避けてゐるのを見た。わたくしはその時のことを思ひ出しながら馬子の噺を聽いてゐた。正午ころには峰の茶屋まで行つた輕井澤の若い配達夫が拳大の石を拾つて來てくれた。石はまだ硫黄の香がしてゐた。

十八日の空は飽くまでも晴れてゐた。庭の落葉松の幹には、胸の眞つ赤な啄木が來てさかんに木を啄いてゐた。山は死よりも靜かであつた。

×

十九日の朝は雨が降つてゐた。午後の二時の汽車で信濃大町から山案内の茂市が來るといふ電報であつた。雨の中を沓掛の驛まで出か

てゆく。茂市はきよとんとして雨の中に下りた。

「山はどうだらう？」雨の中を歩きながらわたくしは山のことをたづねた。

「今年は早雪でな、十三日に立山は眞つ白でした。十四日には爺ヶ岳も、蓮華も眞つ白になりました。」

「出發がすこしおくれたかな……」

「山に登るのはすこしおくれたやうですが、途中まででもお伴しませう。」茂市は淺間の爆發のことは知らなかつた。相かはらずのんきな山男である。

雨がひどく、霧が深いので外にも出られず、茂市は温泉に浸つては秋の山をながめてゐた。

二十日も雨であつた。わたくしたちは雨のなかをリウクサツクを背負つて汽車に乘つた。

小諸あたりでは蕎麥の花が眞つ白に咲いてゐた。千曲川が霧の底に眞つ白な渦卷をなして流れてゐた。

小諸の古城も、上田の古城も雨に濡れてゐた。わづかに取りのこされた城の石垣、矢倉の一部分も靜かな秋の雨に濡れてかへつて懐かつた。わたくしは古城を見るたんびに茂市に指さして見せた。茂市はそのたんびに「あゝさうかな」と朴直な視線を向けた。秋の雨は行く先、來る驛ごとに冷たく降つてゐた。

姥捨を越ゆるころから日は暮れかゝつてゐた。旅役者の群がどかどかと汽車のなかに驅け込んで來た。いつの間にか秋の雨に見入つて眠りこけてゐるものもあつた。

明科で大雨のなかを大町行きの自動車に乘りかへて、眞つ暗な道を走つた。大町に着いたのは九時ちかくであつた。雨は夜つぴてどしや降りであつた。

二十一日の朝も雨であつた。

こけら葺きの屋根、石を載せた屋根から屋根へとつゞく大町はなつかしい信濃の山の町の一つである。懐しい糸魚川街道が北から南へ走つてゐる。その街道を中心に行儀よく山の町は並んでゐる。老木があり、高瀬川の磧があり、湖水があり、雪をいたゞいた鹿島槍や爺ヶ岳があり、いかにも落ちついた町である。對山館の三階の欄干に凭れて街を眺めてゐるとしみじみと旅のこゝろも湧く。松茸やしめぢを並べた店頭に秋の雨がけさもしとしとと降りつゞいてゐる。この前大町をたづねた時はわたくしはしづかな時雨の中に筧の音を聽いたことを記憶してゐる。

雨を冒してわたくしたちは大町を出た。大町から松本、松本からさらに島々までは電車である。今年の秋は登山者の絶えたころを見はからつて燕から、大天井、槍に出て初雪の山を越ゆるつもりであつたが、雪は十日以前から降つてゐてすこし危險だといふことであつたので急に計畫を改めて先づ上高地に入ることにした。

島々からは奈川渡を經て中の湯まで自動車が通ふやうになつてゐ

た。上高地入りもこれではあまり樂すぎると思つた。

連日の雨で梓川の水も濁つてゐた。島々から稻核と、山路にかゝるにつれて雨は一層はげしくなつて來た。崖がくづれ自動車を下りて歩かなければならぬこともあつた。谿が深く、山が急峻なために自動車に乘つてゐてもしばしばひやりとさせられることがある。谿の紅葉が點々と燃えはじめてゐる。

奈川渡で自動車を乘りかへるために一時間餘も待たなければならなかつた。待合所の人たちは將棋をさしてゐる。雨はますます降りしきる。懸崖の紅葉は炎よりも赤い。中の湯行きの自動車に乘つて出發する。紅葉はさらに赤くなる。水が澄み、雨は小降りになる。中の湯から一里半の山徑は燒岳に沿うて歩かなければならぬ。淺間の爆發を見たばかりの者にはあまりいゝ氣持ちではない。燒ケ岳は靜かに燃えてゐた。河童橋の畔の旅舍五千尺にたどりついたのは薄暮であつた。宿の人が氣をきかせて運んでくれた大盥のすゝぎ湯に冷えきつた足を入れた刹那はさすがに古風な旅をうれしいと思つた。

この前上高地をたづねたをりは島々から大あらしの中を德本峠を越えて夜の十時すぎに五千尺に着いたが、上高地に來るたんびに不思議に雨に緣がある。五千尺の窓に凭れて梓川の礫と水楊の並木を越えて穗高の雪溪に魂を奪はれてゐる間に日は暮れてしまつた。今夜もひつきりなしにはげしい雨の音である。

夜に入つて提灯の火が雨の中を走り、やがて消えた。中の湯まで出かけて行つた若者を探すためである。あらしの中を走りゆく提灯の火は何となくものすごいうちにも寂しいものである。

二十二日の明け方から山はあらしになつた。穗高も明神獄も雲につつまれてゐる。時に黝い岩山の姿を雲の上にあらはす。

九時ごろになつて俄にあらしが止み、空が晴れて來た。穗高の懸岩を縫うて幾十條の瀧が落ちる。走る。碎ける。飛ぶ。銀のごとく雲をへだてゝかゞやく。わたくしは雨の日の穗高を愛する。雨上りの穗高を愛する。

見よ、見よ。わたくしは叫んだ。

雪と雲の間に火に燃ゆる紅葉が。雪と岩の間に、岩と草の間に、大空に縣つて紅葉が燃ゆる。空は飽くまでも深く、高く、青く。紅葉は大空に縣つて燃えてゐる。見よ、見よ。わたくしは叫ぶ。

わたくしたちは明神池を見るつもりで五千尺を出かけた。小梨平の片側には水車の音が箭のやうに響いてゐる。山鳩が飛び、駒鳥が鳴いてゐる。

梓川の丸木橋をわたつて取つ付きのところに嘉門次爺の小屋がまだとりのこされてゐる。この前たづねたころは小屋のまはりに蔦うるしの花が雪のごとく吹いてゐた。

明神池の岩の上で飛驒に歸つて行くといふ商人らしい男と一緒になつて朝の山をながめた。

空はすつかり晴れてしまつた。駒鳥は澤といふ澤、溪といふ溪に鳴

きはじめた。わたくしたちは牧場を歩いた。さらに二三十の丸木橋をわたつて槍見河原まで歩いて行つてしまつた、あまりに水が美しく、山の紅葉が燃え、空が青いので。……槍ヶ嶽は黝い岩山の姿を天にそびえさしてゐた。はじめてそこの河原に立つて槍を見た日、涙を落したことなどを思ひ出した。

日が暮れて五千尺に歸つた。五千尺の主丸山氏も松本から夕方山に歸つて見えた。丸山氏に相談して明日の朝槍ヶ嶽に登ることに決める。案内二人に米四升、味噌、醤油、罐詰、夜具、木炭二貫目を運ばせることにする。

二十三日　三時には眼がさめた。星がまたゝいてゐる。大町からつれて來た茂市のほかに五千尺の案内人を連れる。松下といふ新らしき青年である。かれは默々として山を歩む。いかにも忠實なる青年である。岩山の男らしき男である。

「いゝお天氣だ……」日本晴れの秋日和である。駒鳥はけさも澤から澤に鳴き、溪から溪に囀る。一溪を横切るごとに駒鳥の聲を聴く、一澤を見出すごとに駒鳥の唄を聴く。山に登ることはうれしい。しかし澤に來、溪に來るごとに駒鳥の聲を聴くのもうれしいことである。幾度か足をとゞめては澤の駒鳥を聽き、尾根の紅葉を仰ぎ、雪溪をながむる。栗鼠が跳び、野兎が走る。

秋の山はまつたく登山者の姿を絶つ。うれしいことの一つである。山の靜さがとりもどされ、山の高さがとりもどされ、山は靜寂のうちにかの女のまことの相をとりもどしてゐる。

一の股の小屋も、槍澤の小屋もとざされてゐる。紅葉のみが燃えてゐる。雪を待つ白樺の林には駒鳥が鳴いてゐる。

赤澤の根腰を越え、大喰と中岳を眞正面に受けて一時間も歩めば、鳥桔梗、岩桔梗、うさぎ菊、龍膽が夏のさかりのお花畑の名殘をとゞめて咲いてゐる。薄雪草はやゝ終りにちかい。わたくしたちはごろごろの石道にしやがんで岩の間の木の實を摘む。二三日前に降つたばかりの初雪がほんのりと雪溪の古雪を化粧してゐる。

坊主の小屋には播隆上人（？）の石像が岩の間に置かれてゐる。昔の坊さまはえらいものだと思ふ。道もなく、案内もない時代によくもこの山奥にたどりついたものだと思ふ。

大鷲が西岳の方から槍をかすめて大喰の岩にかくれる。

殺生小屋の戸を明け、茂市と松下青年が夜の支度をする。小屋の前の天水溜には氷が張つてゐた。松下青年は氷の水を掬つて米を洗ひはじめた。富士も見え、赤石も見え、八ヶ嶽も見える。小屋の直後の槍の穂先が今にも落ちかゝつて來さうである。

夜の空は殊にうつくしかつた。一萬尺の岩山にたゞ一人立つて大空を見上げてゐる自分自身の姿に氣附いた刹那、おののきに似た感じもわいた。岩も黝く、空も黝く、わたくし自身の姿も岩のごとく冷たく黝かつた。

星の數の無限なる。天の無限なる。槍の沈默の深さ。おぞましさ、

靜さ、神秘さ。孤獨たるわが魂の寂さ。

八時ころであつた。わたくしははじめて落石の音を聽いた。中岳であらうか。赤澤であらうか。奧穗高であらうか。

沈默そのもの〻山の靜寂を破つて遠い嵐のごとき落石の音が響く。嵐よりも遠く、嵐よりも近く、やがて嵐よりも遠く消えてゆく落石の音は、秋の山の神秘の一切をこめて暗に消えてゆく。あたかも滅びゆく人間の魂の行方を聯想させるやうに。

落石の響は一萬尺の空をかすめて秋の谷遠く、やがて暗い溪の底に吸ひこまれるやうに消えてゆく。

十分或ひは二十分の間を置いてはものすごき落石の音がつゞく。山の吐息のごとく、山の死滅のごとく。一切の偉大なるもの〻最後の日が刻まれてゆくわびしさをこめて。

二十四日　午前三時ころからふたゝび山の岩のくだけ落ちる音がつづいた。

「落石だなあ……」茂市と松下青年が暗のなかで語つてゐる眠さうな聲が聞えた。

落石の響は空をかすめて、遠い溪に消えてゆく。わたくし自身の魂を誘ふやうに。

「寒い、實に寒い……」と誰かゞいふ。茂市が屋根裏のやうな寢床から下りて來てわたくしの枕もとに炭火を焚きはじめた。

夜が明けかけて來た。

落石につゞいてはげしい雷鳴がはるかた下の溪に響く。

「雪が降つて來ましたよ」と松下青年が土間の隅の方から聲をかける。わたくしは起きて行つた。松下青年は氷の張りつめた水を掬んでは朝の仕度を急いでゐる。

「昨夜は槍の絶頂の月をながむるつもりでゐたが、月が出ないうちに眠つてしまつたが、けさはこの雪が……」茂市はきよとんとして谷から大喰、中岳をうづめた雪をながめてゐた。

「早う山を下りんことにやあぶない……」茂市は暗い顏をしてゐた。見てゐる間に雪は三寸になり、四寸になつた。「もしこの勢で半日もつゞけられた日には……」そんなことを考へてゐると不安な想像がわいて來て仕方がなかつた。

「出來るだけたくさん喰べて置くに限る。」そんなことを語りながらわたくしたちは味噌汁を飯にかけては無理に喰つた。

幾度か窓を明けては空をながめた。

この冬有名な登山家が落ちて死んだ奧穗高のピイクも見えなくなつた。中岳も見えず、直ぐ眼の前の大喰も雪あらしにつゝまれてしまつた。

「雷鳥ですよ。雷鳥が鳴いてゐます。」

「親鳥を呼んでるのでせう。」

わたくしたちは耳をかたむけて、雪あらしの中にわびしく響いて來る雷鳥の聲を聽いた。

——一九二九・一〇——

蘇峰自叙傳（追憶記）

蘇峰　德富猪一郎

第三十九　大同團結に反對す

予の行路は、必ずしも自動車で京濱國道を走るが如く、滑らかではなかつた。『國民之友』はその隆盛になるに從つて、反動若くは反對の勢力を激起した。或は國粹保存黨と云ひ、或は國權黨と云ふ保守主義者側からは異端視せられ、又た耶蘇教の臭味在りとて、僧侶若くは神官の仲間からも攻撃せられた。しかのみならず、當局側からは又た過激なる反對黨視せられてゐた。

×　×　×

然るに又た此際一の出來事があつた。それは後藤象二郎伯の大同團結だ。明治二十年十月三日後藤伯は在野の重なる人士七十餘名を三緣亭に招き、一大晩餐會を催し、その席上に於て、慷慨悲憤の演說をした。予もその時は『國民之友』社長兼主筆として招かれた。その席上には自由黨、其他改進黨の或る面々、其他政黨以外の學者、論客等もあつた。珍らしく三鞭酒などの馳走が出て、來客の中には麥酒にしては餘りに沸騰するなどゝ訝つた者もある程で、寔に盛宴であつた。

是を手初めとして後藤伯は、明治二十一年の春からそろ／＼政治運動を開始した。而して彼の所說は極めて粗大であつたが、兎も角も帝國は目今危急存亡に瀕してゐる。西伯利亞鐵道も追々建設せらるゝ。此際主義、主張の異同などを問ふべきでない。須らく一致團結して、此の危急を救はねばならぬといふ事であつた。

此の如くにして明治政府、即ち薩長政府に對する攻撃の總同

盟運動は、後藤伯に依つて出で來つた。自由黨の面々は保安條例にて、二十里の先に孰れも退去を喰ひ、今更ら一寸手も足も出で兼ねる有樣であつたから、その空虚に乘じて、後藤伯の大同團結は風行雲集の勢ひを以つて天下を席捲した。後藤伯は明治二十一年四月二十二日福島縣に於ける、東北七州會を初めとして東北から北陸道に遊説し、而して九州などもその風を望んでこれに應じたから、殆んど天下を擧げて後藤伯の大傘下に集まらざるものは無つた。

斯くて明治二十二年二月十一日、帝國憲法發布の當日、後藤伯が馬車に乘つて參內するや、これを見たる群集は、孰れもその馬車を擁して、『後藤伯萬歲』を唱へ、後藤伯は恰も一種のヒーローとなり、『後藤伯出ずんば蒼生を如何せん』と云ふ有樣であつた。

× × ×



伯爵後藤象二郎氏

唯だ予は當初から後藤伯その人の所説に餘り感服せず。且つその人物に就いて多少疑ふところあり、寧ろ此の運動には批評的の態度を持してゐた。而して大隈侯の率ゆる改進黨も、明治二十一年二月、大隈侯が外務大臣として入閣したるが爲に、その主力は自重して動かなかつた。此の如くにして予等の態度と改進黨主力の態度とは、大同團結に對しては、期せずして一致する樣になつた。予が矢野文雄君等と最も親しく提携したのは、此時であつたと思はる丶。

× × ×

扨九州に於ては從來九州改進黨なるもの出で來り、自由黨にも、改進黨にも屬せず。九州は九州にて別個の團結を成してゐたが、此の大同團結に就いては、從來自由黨の臭味の連中は、擧げてそれに加入する者多く、唯だ熊本縣に於ける山田武市、福岡縣に於ける野田卯太郎、永江純一の徒斷乎として動かず。此の如くにして九州もそ

の進歩主義者の中に、大同派と非大同派と自ら分裂する姿となつた。而して予が野田、永江、殊に野田大塊との政治的交際は、實に此の運動から初まつたと云つても差支へあるまい。

× × ×

當時の野田は未だ福岡縣の熊本縣に境する大牟田に於ける地方的有志家に過ぎなかつたが、彼は當時からなかなかの働者にて、熊本に於ける山田武甫君一派と相ひ策應して、大同團結の九州に於ける運動を殆んど防止した。これには斯く申す予も聊か一臂の力を致し、予の代表者として、阿部無佛翁が專らその事に任じた。

× × ×

併然予等の豫見の通り、後藤伯は危急存亡を踏臺として、二十二年三月三日には黑田内閣に入り、遞信大臣となつた。此に於て大同團結に隨喜し、後藤伯に謳歌したる連中も、今更ら呆氣にとられて、何れも尻餅をつかんばかりの有樣であつたのは、如何にも氣の毒千萬であつた。

第四十　井上侯と予

話代つて、井上侯は明治二十年の條約改正問題に破れて、その職を退き、二十二年にはその[illegible]は政敵にして、以前は政友であつた大隈侯が入閣の間もなく、再び黑田内閣の農商務大臣となつたが、そはその志でなく、しかも勃々たる雄心は自ら制する所以を知らず。此に於てか得意の歐化主義は一變して、同志者の糾合となり、一方に於ては農事改良として、頻りに大農論を振り廻し、他方に於ては自治論を提唱し、政治の要は地方制度より手をつけねばならぬと云ふ事にて、遂に世間では、『井上は自治黨なるものを組織するもの』と認めらるゝに至つた。是れには獨逸流儀の青木周藏子の鼓吹が預りて力大に居た。

× × ×

扨予は少年時代に、曾て井上侯を知り、而して新島先生の同志社大學運動にて、屢々面會し、斯くて井上侯は予に向つて、多少のインテレストをとるやうになり、新島先生を介して予に洋行を奬めらるゝ事となつた。今こそ洋行など云うても、新橋から大森に行くのと殆んど違はぬが、當時に於てはなかなかたいした事であつた。予も食指聊か動かんでもなかつたが、つらつら考ふるに、一度井上侯の恩惠を蒙むれば、一生關係が出

來、出來ても差支へはないが、井上侯は或人の說に依れば、鬼子母神であつて、時としてはその子を懐に入れて愛撫し、時としてはその子を取りて喰ふと云ふやうなる事にて、首尾克く侯と關係を保つ事は困難であると考へ、折角の厚意ではあるが、『國民之友』の用事にて、應じかぬる旨を新島先生に告げて、體よく斷つて貰うた。しかも屢々井上侯の邸に出入するの止むなきに至つたから、世間からは自然斯く認められ、當時須藤南翠氏が『改進新聞』に揭げたる小說には、予と當時日報社長にして、『東京日日』の主筆なる關直彥君を小說中の人物に書込んだと云ふ事であつたが、果して然るや否やは、予が保證するところではない。

第四十一　衆議院議員たることを求めず

予は實際の政治運動は好まなかつたが、併し政治そのものは頗る好物であつて、須臾も政治を離れる事が出來ず。その爲に漸次に實際の運動にも主役ではなかつたが、加役として多少の努力をした。即ち明治二十二年の春、地方自治制の實施せらるゝに際し、予は父の執山田武甫君と共に熊本に歸へり、全縣下を遊說した。これは單に地方自治制に對し、地方人士の耳目を聰明ならしむると云ふばかりでなく、山田翁等にとつては、翌年行はるべき第一回の帝國議會に於ける、衆議院議員總選擧の準備であつたかも知れない。

予は固より政黨員ではなかつたが、當時に於ては恐らくは政黨員以上の熱心を以つて働いたであらうと思ふ。若し予が議員たるべき野心があつたならば、第一期の總選擧には、年齡が未だ三十歲に滿たずして致方なきも、次回からは差支なければ、豫じめその地盤を作るべきであつた。しかも予には初からその考がなかつたから、それ等の事は一切度外に置き、殆んど萬遍なく山田翁と共に巡回演說をした。

（昭和四年六月二十日、民友社に於て）

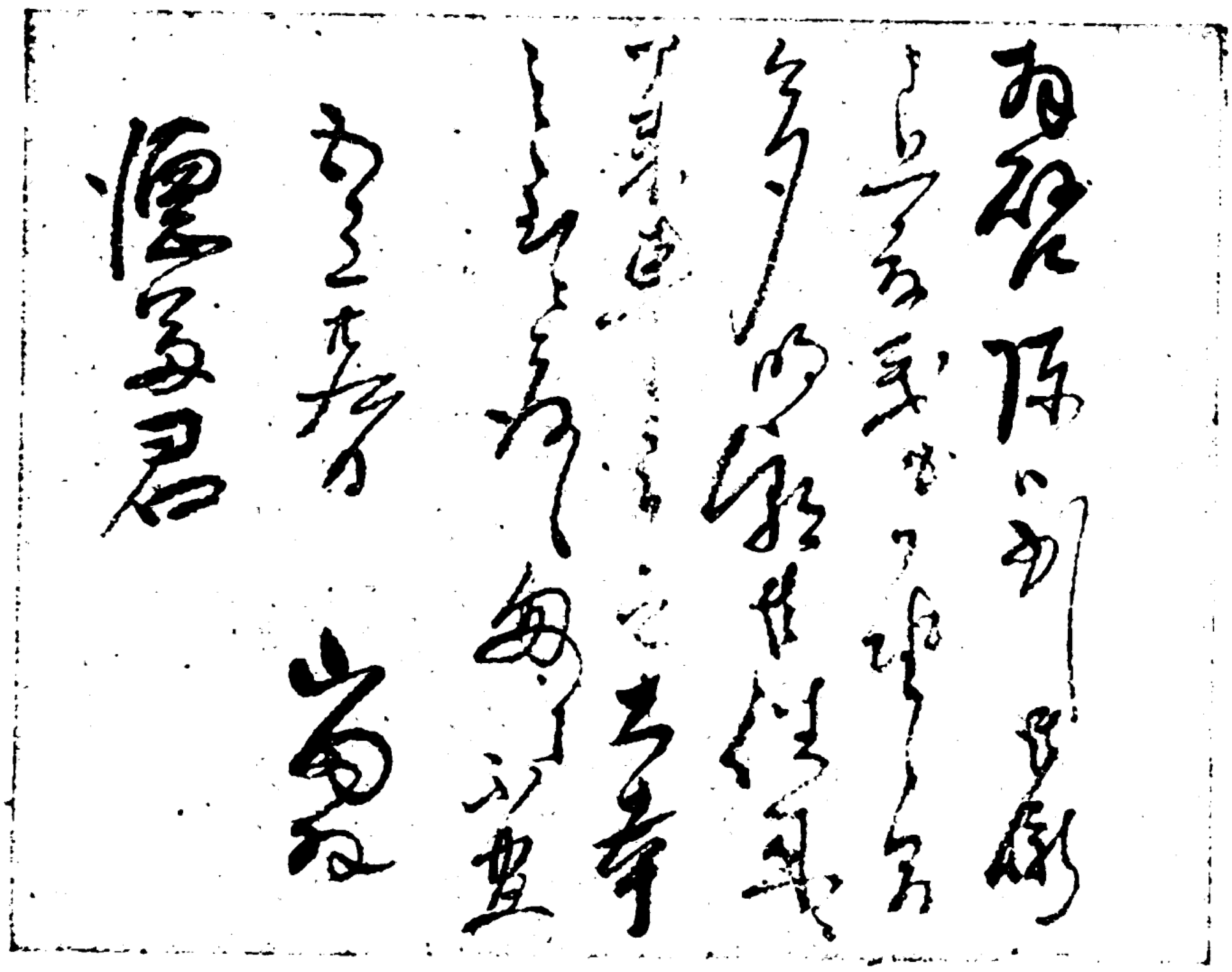
第四十二　條約改正と予

明治二十二年は、予にとつては實に多事多端の年であつた。それは一方には政治上に於て、大隈侯の條約改正が、世の中の大問題となり、予も又たその渦中に投じてゐたからである。第

二は同志社大學運動が、愈々緒につき、その爲に其の方面に於ける予の仕事が頗る增加した事である。第三は予が宿志である新聞發行の準備が、此年に於て略々出來つゝあつた事である。以上の三つに就いて、今少しく順を追うて手短かに語るであらう。

× × ×

扨大隈侯は井上侯の條約改正失敗の後を引受けて外務大臣となつたが、彼の滿々たる野心は、手を拱いて無爲無策の宰相たるを屑しとせず。寧ろ井上侯の失敗の餘を引受けて、是非共條約改正を議會開設以前に成就せんと努力した。固より大隈侯は井上侯ほど露骨に外人の要望に讓與しなかつた。しかも例せば吾が法權を外人に承認せしむる爲に、彼等の註文通りに外人は使用せざる迄も、外人を日本に歸化せしめて、それを採用するなどゝ云ふ事にて、畢竟反對者の眼から見れば、井上侯の條約改正と事實に於ては五十歩、百歩に過ぎなかつた。



山田武甫翁筆蹟

× × ×

當時自由黨は勿論、苟も大同團結の流を汲む者、若しくは保守黨國權黨の面々は、孰れも條約改正反對にて中止の請願、若しくは建白書などを出す者が相接した。予は此際、この勢を防止せねば、保守的反動が何處迄出で來るも知れずといふ考にて、從來大同團結に反對したる行掛り上、大隈侯の條約改正を理想的とは思はぬが、寧ろ最善を得ざれば次善を得よとの立場から、これを成就せしめた方が得策であるといふ見地にて、多數の世論に反對した。

× × ×

『國民之友』は明治二十年二月創刊の頃は、月一回、やがて二

同上たり、三同上たり、後には週刊とまでたつたが、世間の好奇心も時間と共に減退し、競爭者も世上に可成り出で來り、その爲に劈頭ほどの大景氣はなかつたが、しかも總ての點に於て當初占め得たる地歩を失はなかつた事は、雜誌そのもの丶品質、勢力の上から云つても、又たその經營上の所謂成功といふ點から云つても間違ひなかつた樣だ。殊に『國民之友』が夏期、春期の一年二回の大附錄は、一代の文學者を網羅し、恰も時代の水平最高準を示すものとなり、又た『國民之友』に其の寄稿を採錄せられたるが爲に、名を成したる作家も尠くなかつた。

それは兎も角も明治二十二年の下半條約改正の騷ぎに際し、議論としては、殆んど孤城落日の姿であつたが、しかも當時『經濟雜誌』の田口卯吉君、『報知新聞』の矢野文雄君等と互に呼應して論陣を張つた。併し正直に云へば、予は此の條約案に隨喜した者でなく、唯だ彼れ是れより善しと云ふ程であつたから、贊成の方面には、左程熱心ではなかつた。これが爲に『國民之友』の讀者に或は多少の影響があつたかも知れぬが、予自身に於ては、それ程氣付く程のものはなかつた。併しこの戰爭は予にとつては負け戰であつた。

たは當時閣僚の一人たる後藤伯、內閣から外の反對黨と、頻りに氣脈を通じ、又た樞密院議長であつた伊藤公の如きも、隱然反對の態度を示し、樞密顧問官にして明治天皇の御信寵最も篤き、元田先生の如きも、頻りに暗中の飛躍をせられ、即如何に大隈侯が奮鬪するも、到底勝色は見えなかつた際に、ちその十月、大隈侯は霞ケ關外務省の門際にて、來島恒喜の爆彈に打たれた。此に於て改進黨は極めて不利なる立場にあり、予と氣脈を通じつ丶ある九州の進歩主義者も、反對黨が條約改正反對の氣運に乘じて、自由黨の面々と提携し、大活動をなした爲、尠からざる打擊を受けた。併し予一個の立場としては、何等の痛痒をも相感じなかつた。

第四十三　明治二十二年の雜事

話前に還へる。明治二十二年二月十一日の憲法發布は、目出度く相濟んだが、その時には森有禮子が西野文太郎の爲に刺殺せられた。森子は元來急進黨の一人にて、米國に於ては新島先生等と頗る懇意の間柄であつた。然るに彼が文部大臣となるや、官學一點ばりにて、私學に對しては何等の同情をも寄せた

かつた。

予は新島先生の代理として彼を文部大臣官邸に訪ひ、同志社の事に就いて種々の相談をしたが、何一つ相手として取合はなかつた。予はこれが爲に尠からず不快を感じた。それは予を侮辱すると云ふではなく、その舊友である新島先生を侮辱するが如き口氣を漏したかの樣に、受取られた爲であつた。されば彼が刺殺せらるゝや、予は直に新島先生に向つて、その旨を電報もて告げ知らせた。予は必ずしもこれを愉快とは思はなかつたが、併し當時は、當人の被害者は、自業自得ではあるまい乎と思つた。今日から觀れば、森子の心事は諒とすべきもの頗る多く、彼に缺點もあり、失策もあつたが、彼は文部大臣として、吾が帝國の歷史に、最も記憶せらるべき一人であつた事は、間違あるまい。

× × ×

又たその砌り黑田首相は、首相官邸に憲法發布祝賀の大夜會を催し、それには全國府縣會の議長なども招待せられた。予も又た招待せられて、生れて初めて總理大臣の官邸なるものに赴き、又た夜會なるものに列した。予は予の妻及び群馬縣會議長として招待を受けたる湯淺治郞氏、及び予の姉たる湯淺夫人等と赴いたが、案内せらるゝ儘に奧へ奧へと赴き、左右を顧みれば、孰れも綺麗に着飾りたる婦人のみにて、男子らしきものは一人も見えなかつた。そこで初めて此處は貴女の控室である事に氣付き、急がしく飛出した。

扨舞踏が初まつてから、眞鍮の小札を持歩き、それを手渡しつゝあつたから、予もそれを受取らんとしたが、初めてそれが舞踏の番組である事を知つた。予が殊に驚いたのは、從來野蠻人の標本と思うてゐた、醉興の親玉、喧嘩の大將黑田伯が、殊勝にも、婦人を相手に踊つてゐた事であつた。その相手が外國婦人であつた乎、日本婦人であつた乎。そこまでは記憶せぬが、予に於ては實に意外の感があつた。

予はその晩種々の人に出逢つた。而して松方公と會見したる初は、實にその席上であつた。松方公は予が父の舊友と云はゞ舊知であつた。予の家には維新頃の公が、予の父に寄せられたる數通の書翰がある。父はよく公を知つてゐた。併し予は必要なき所には一切出入しなかつたから、實はその時まで松方公とは、直接に言葉を交した事は無つた。然るにこれ以來、予と

公との公私の交際は始り、遂に大正十三年七月公が世を終る迄、師友の如き關係を持續した。

第四十四　新島先生の晩年

扨又た同志社の事は追々世間に認められ、一瀉千里の勢に進むべきであつたが、井上侯の氣紛れと、種々の事に就いて智慧と力とを貸したる陸奥伯が、全權公使として米國に去りたると、大隈侯が條約改正に沒頭して他を顧るの遑なきと、種々の事情に依つて、東京では初め程の景氣ではなかつたが、地方に於ては、なか〳〵の勢力であつた。

併しこれと同時に新島先生の身體は、屢々危險狀態に瀕した。明治二十一年の夏であつた乎と思ふ、先生は鎌倉に居られたが、殆んど危篤に迫り、予はその報に接し、當時鎌倉迄は汽車が全通してゐないから、看護婦を連れ、藤澤まで汽車にて、それから車にて鎌倉長谷の三橋なる、先生の寓所に駆けつけた事があつた。

先生の心臓病は最早や階段を上る事さへ容易でなかつたが、しかも東奔西走、身を以つて同志社の事に當る有樣にて、予は涙と共にこれを止め、出來得る限り予は代理としてその勞に服することとした。

斯くて同志社通則、即ち同志社の憲法なども先生の望みに任せて、予がその原案を起草した。斯くて先生は二十二年の末には、相州大磯の百足屋の奥座敷に寓し、これにて新年を迎へた。

× × ×

予は當時『國民新聞』の創立の爲に頗る多忙であつたが、新年に入りてから先生を大磯に訪ね、種々の談話をした。而してその時に、多分金森通倫君も同席であつたと思ふが、愈々大學設立の場合には、政治、法律、經濟だけは、東京に置く方が便宜であり、且つ得策であると云ふ事に相談が一致し、機會を見てこれを發表する事に話合つた。

その事は先生の日記を見れば明からさまには記してはないが、その意味として受取らるべき文句が掲げてある。先生は篤學の人であり、又た下問を恥ぢざる人であつた。されば晩年東京に於て、大學の爲に奔走せらるゝ時にも、猶ほ車の上にて讀書を怠らなかつた。殊に泰西の書籍に興味を感じ、頻りにこれ

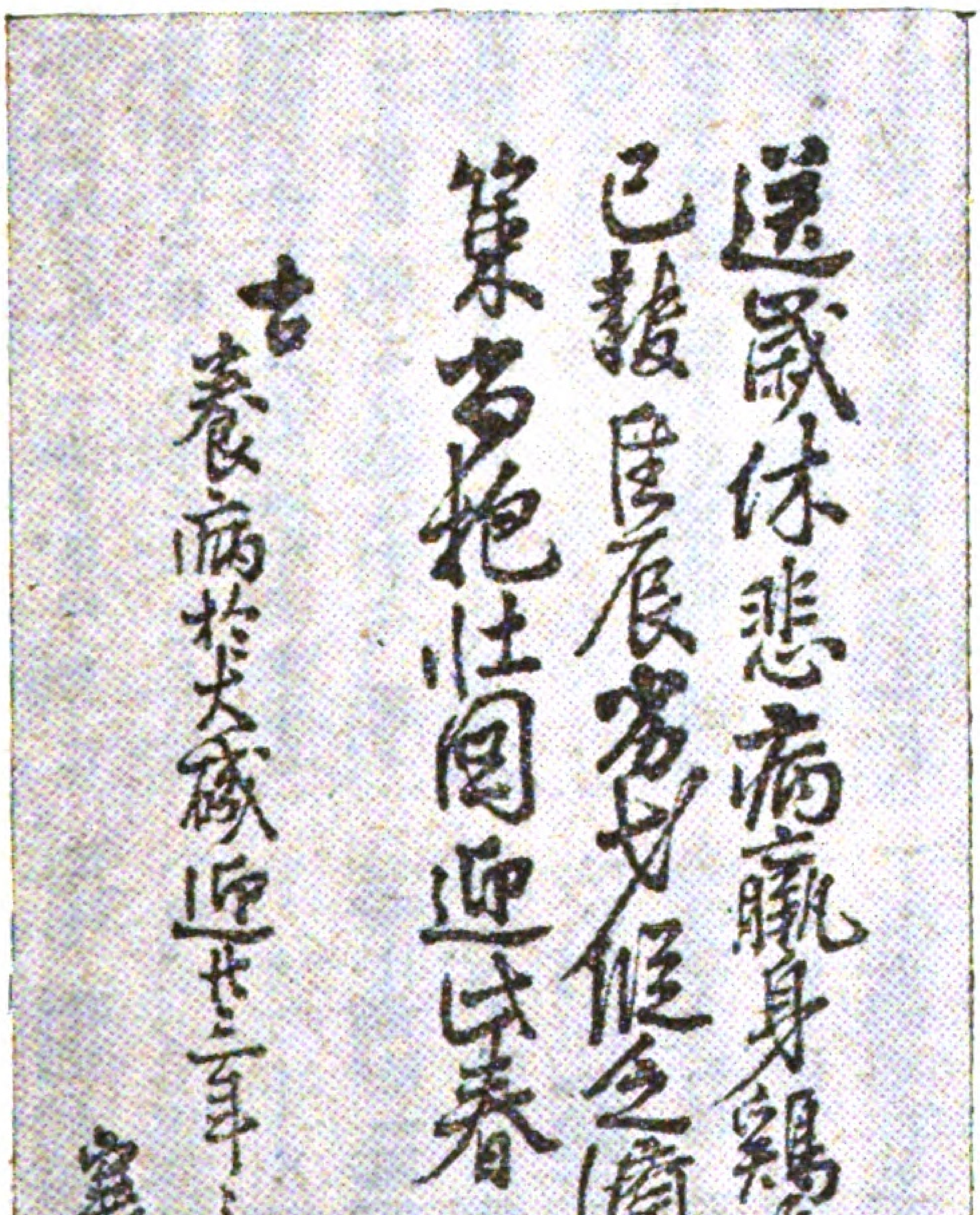
を耽讀せられてゐた。

右の次第にて先生は自ら餘命幾何も無いと思つて居られたであらうが、去りとて早急に永眠せらるゝであらうとは、吾も人も考へては居なかつた。即ち明治二十三年の新年を迎へた詩に、

『劣才從乏二濟民略一。尙抱二壯圖一迎二此春一』

とある通り、先生の胸中には、その壯圖が往來してゐた。先生は決して唯だ京都に蟄居して居る事を屑としなかつた。其證據と見るべき一は、先生は大磯に極めて狹くはあつたが、小軒を建つべき程の地面を需めて居られた。其は大學の一部分を東京に分設すると云ふ話の前であつた乎、後であつた乎、其登記は先生の永眠後に至つて了した程であるから、早くとも二十二年の末であつたらうと思はる。先生は大磯に在つて、東西兩京を股にかけて、同志社を擴大する積りであつたに、相違あるまい。

（昭和四年六月二十一日　民友社に於て）



新島先生の絶筆

第四十五　國民新聞發刊の準備（一）

新聞を發行する事は、予が新聞記者とならんとする志を立たると同時に、思ひ付きたる事ではない。順序から云へば、當初は唯だ新聞記者とならんとするが、唯一の目的であつたが、完全に新聞記者の機能を働かしむるには、自分が新聞紙そのものに對する自由の手腕を振ふ事が必要であり、斯くするには自らその新聞の持主、若くは重なる持主たるべき必要のある事を認めたから、予は何れの新聞社に入社する事も見合はせ、何時かは自ら思ふ通りの新聞を發行して見度いと考へてゐた。

而してその考は『國民之友』が殆んど豫想外の成功をなしたから、猶更ら一層の自信力を持つて來た。併し今日は勿論であるが、明治二十二年代の當時に於ても、一つの新聞を作る事はなか〱容易でなかつた。

× × ×

當時東京には所謂五大新聞なるものあり。卽ち日日、報知、每日、朝野、時事であつた。其他には所謂幾多の小新聞なるものがあつた。而してその中間にも若干の新聞はあつたが、若し强ひて領地を開拓すべきものありとしたならば、それは大新聞に非らず。小新聞に非らず。その兩新聞の境目に若干新たなる力を試むべき餘地があつた。

× × ×

卽ち予は此の方面に向つて鍬を打込まんと考へた。抑々何時頃から日刊新聞發行を具體的に計畫み出した乎。今ははつきり記憶しないが、尠くとも明治二十二年の初には、卽ち憲法發布の前後には、既にそろ〱其事に取掛つたらしく思はるゝ。それには第一、人である。予は豫め新聞の同人たるべき人物を夫々物色し、單に物色したるのみならず、平たき言葉を以つて云へば、その人々へ手付を打つて置いた。のみならず豫めその準備として、その人々を夫々實地に就き練習せしめて置いた。予は如何に遲くとも、明治二十三年帝國議會開設の年には、是非共吾が新聞を以つて、意見を發表して見度いと考へた。

× × ×

當時『國民之友』は一ケ月三回、十日に一度の發行で、それにても云ふだけの事には何等差支へはなかつたが、何やら日刊新聞でなければ物足らぬ樣に思はれて、何はともあれ是非共日刊新聞が欲しかつた。

併しこれには尠からざる困難があつた。第一は資金であつた。第二は新聞經營であつた。若し此際これ迄予と提携したる湯淺治郎君が『國民之友』發刊の當初に於ける如き熱心を以て此事に從事したならば、右の如き心配は無つた。併し湯淺君は寔に立派な人物であるが、それと同時に狷介不屈の人である。何時迄も予の女房役たる事に甘んずるには、餘りに獨自一己が勝過ぎてゐた。予は此事に就いて君を說いたが、君は反對はしなかつたが、寧ろ已むを得ず贊成した。それで新聞を作るといふ一點に於ては、傍觀的態度と迄は行かなかつ

たが、左程熱中しなかつた。これが爲にその金策も予自ら當たらねばならぬ事となつた。

當時民友社に幾何の資金があつたか知らぬが、何れにもしろ明治二十年から二十二年迄の間に、若干の儲があつたに相違は無い。兎も角も日吉町の共存同衆演說館で、後には大谷派の說敎所となり、更に飯島某といふ富者の高利貸の所有となつたものを、都合に依つて買收する事となつた。それが即ち國民新聞社の本據で、大正十五年四月、加賀町に移轉する迄、その本據は動かなかつた。此の家屋を詳しくは知らぬが、五千圓若くはそれに少し出た位の處で買受けた。

× × ×

場所はそれで澤山であるが、印刷は如何にすべき乎といふ事であつたが、當時一二の新聞社は秀英舍に依賴して居た。その例に倣ひ、印刷一切は秀英舍に引受けしむる事とした。即ち植字、大組みを此方にてやり、大組みしたるものを秀英舍に持行き、秀英舍にて印刷する事にした。而して植字、大組みも秀英舍が出張して來たものであつて、詰り新聞社が秀英舍に出張するではなく、秀英舍が新聞社に出張して來たのであつた。

當時新聞のメ切りと云へば、四時かせい／＼遲くとも五時か六時。頁は四頁、多くて六頁。發行部數は五千から一萬迄と云ふ事であれば、それで澤山であつた。併しそれにしても新に新聞を作るには、なか／＼骨が折れた。吾社は固より『國民之友』の地盤があつて、その地盤の上に新聞を載せて行く事が出來て、新に發刊するとは云へ頗る便宜ではあつたが。それでも創業は固より創業である。如何にしても創業費の一萬や二萬は必要であつた。

× × ×

新聞編輯の方は田舍新聞であるが、予は曾つて東肥新報に關係して、その爲に極めて幼稚ではあるが、若干の經驗があつた。且つ此方には當にしたる人もあり、當にすべき人もあつて、懸念は無かつたが、經營の方は全くの無經驗であつた。さりとてその儘閑却すべきでは無かつたから、此方は人見一太郞氏に擔當せしむる事とした。人見氏も無經驗の程度に於ては予と同樣であり、彼は唯だ『國民之友』の編輯に、若干參與したといふ迄の事であつたが、なか／＼强情者にて、且つ淸廉潔白の士であり、且つ人を廣く容るゝと云ふ事は兎も角も、部下を作

らへ、部下を愛すると云ふ事は、間違ひなき人であつたから、先づ此人にこれを委する事とした。固より其上には湯淺治郎君が、監督をしてゐた事は云ふ迄もない。

× × ×

扨て資金の問題である。既に新に社屋を購求したる上は、此上民友社に餘金のあるべき樣もない。予は如何にせんと考へた。それに就いて予が第一思付いたのは、當時社會に於て多くの大學生等を養成し、所謂る文化事業に就いて理解心があり、又た人を助くる上に於て義俠心があると評判ある、某出版業者である。彼は當時教科書出版以外に、流行の小說、雜誌、文藝等の書籍を出版し、凡有る文士はその庇蔭を受けてゐた。斷つておくがこれは博文館の事ではない。

予はその人こそ共に語るべきものと考へ、何等の緣故も無つたが、藪から棒にその人に面會を申込み、約束の上、下谷龍泉寺町の私宅を訪ね、第一予が新聞を作る所以を述べ、第二予が作る新聞は特色ある新聞である事を述べ、第三從つて必らず成功すべきものたる事を述べ、最後に共同事業なり、若くは資金の貸與なり、何れなりとも予の話に一口加つて貰ひ度いといふ事を申述べた。

然るに彼は或る小新聞の持主であつて、當時はその持主であつた乎、若くは持主を辭めた乎、その事までは明白に覺えてゐないが、何れにしても新聞に就いては、全くの素人ではなかつた。從つて予の話に對しては頗る懷疑的にこれを聽き、頭から斷つた。予も聊か面目を失し、悄然と歸つたが、此に於て初めて人の懷中を當てにした事を、悔いざるを得なかつた。併し矢弦上にあれば發せざるを得ず。今更ら中止するわけにもゆかす、此に於て湯淺君とも相談の上、上州原市の平田平次郎氏から一千圓を借用する事とした。平田氏はクリスチャンにて、同志社などにも寄附金をなし、新島先生の崇拜者であつたらしく思はれた。湯淺氏とは固より交友の間柄であつた。予とは別段何等の關係も無かつた。併し千圓の金ではとても物にならぬからそこで予は彼是考へて、予が鄉里熊本縣葦北郡田ノ浦村磯脇一郎氏に申込む事とした。同氏は予が從來の懇意にて、地方では大地主であり、數年前予が猶ほ熊本に居た際、吾儕に銀貨と紙幣との價格の差甚しき際、予の意見を聽いて意外にも金儲をなし、それにて予を德としてゐたと云ふ事を聞いてゐた。

つておくが、これは予が藤崎氏を儲けさせる爲に言つたのでは無く、予の出駄羅目が偶中したものであつて、予としては何等恩を被すべき筋でなかつたが、藤崎氏は何故か予を徳としてゐたといふ事である。それは扨置きその話を申込んだ。當時に於ては、五千圓の金は頗る大金であつた。今日では十七億の豫算を振廻す日本政府も、當時は漸く八千萬圓、六千萬圓の間で民黨と鎬を削つた時節であるから、五千圓と云へば全く大金であつたに相違ない。それで藤崎氏も予の申込に對し、且つ予の申込を取次ぐ二三の友人の顔に對し、『金錢は御用立つるが、何とか保證人が欲しい。湯淺君ならば申分は無い』との註文であつたが、當時の湯淺君は『半田氏の分だけは保證に立つが、それ以外は御免を蒙り度し』との事にて、其上强ふべき事でもなく、予は止むを得ず事情を打明けて、新島先生に保證人に立つて貰ふ事とした。

第四十六　國民新聞發刊の準備（二）

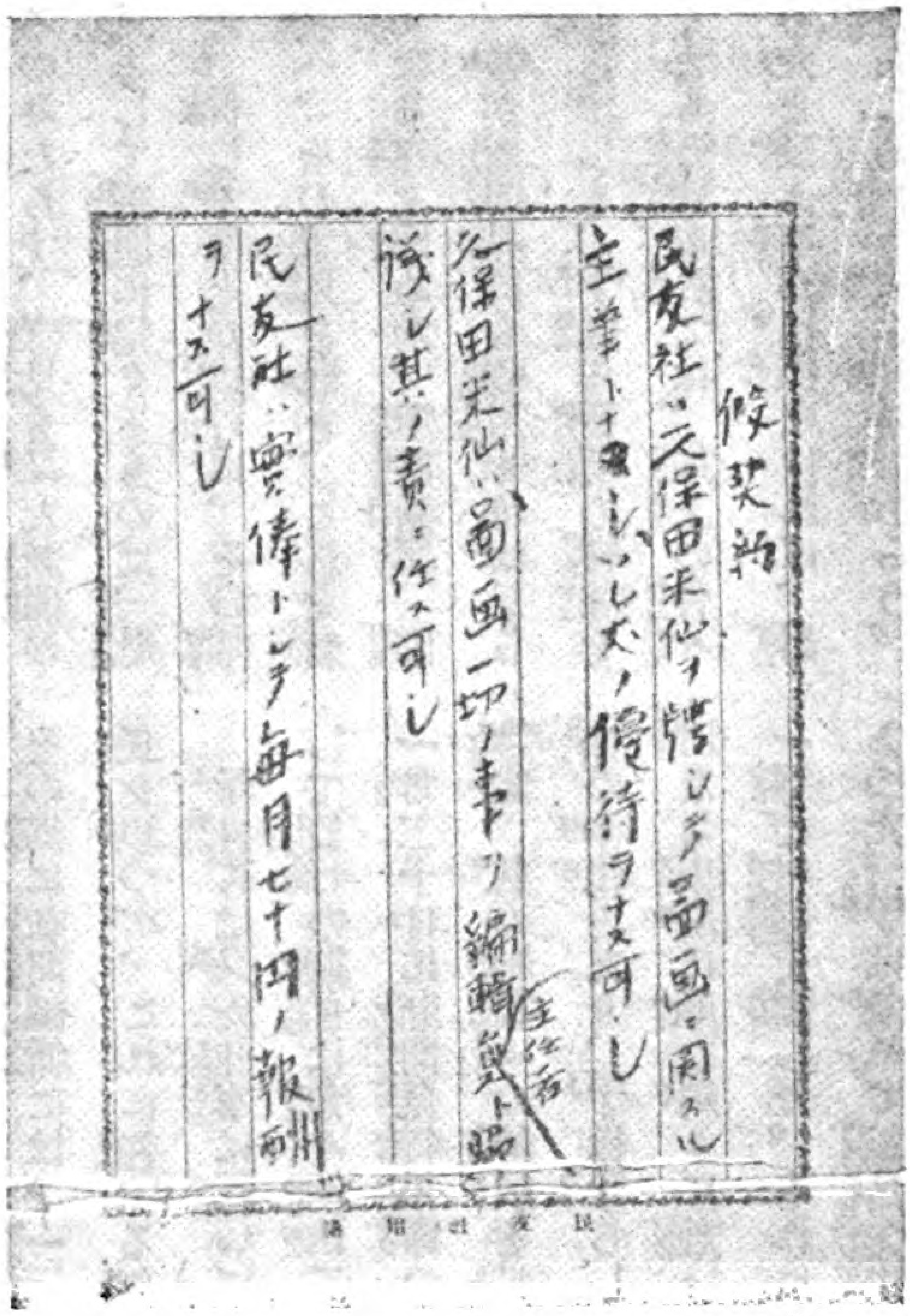
予は兼ねて如何なる新聞を作るべき乎といふ事を研究し、當時英國留學中の望月小太郎君に托し、凡有る英國の新聞を取寄せて、その長短得失を研究した。その中で當時英國にて所謂、New Journalismを標傍したるステッドの『パルマル・ガゼット』などは、恰も予が意を得たるものたる如く思はれた。予は豫ねて京都の畫家久保田米僊氏を知つてゐた。此人は畫家ではあつたが政談演説などもした事があつて、なか〳〵洒落氣の多い人である。而してそのスケッチに至つては、天下一品と思はるものがあつた。

曾つて君が佛國博覽會に赴くの際、予が編輯員の世話を焼いてゐた『京都日報』の紙上に、途中からスケッチを送つたが、それは如何にも面白かつた。そこで予は愈々新聞を作る日には、何はともあれ先づ久保田氏を聘する事を第一の要件と心得、兎も角もこれから手をつけねばならぬと思ひ、京都に飛んで行つたのは、明治二十二年の秋にて、世の中は大隈外相の條約改正中止運動の眞最中であつた。

當時予が中止運動に反對しつゝも、餘り目覺ましき働をしなかつたのは、本來大隈案そのものに就いて、深く随喜しなかつたばかりでなく、實は新聞創刊の計畫に殆んど全身全力を致してゐたからであつた。

斯く予は京都に赴き、久保田氏に面會し、事情を打明けて此に約束を結んだ。予は久保田氏に月給七十圓を拂ふ可しと云つたが、久保田氏は百圓欲しいと云ふ事であつた。今日から云へば、寔に兒戯に類するが如きであつたが、百圓の月給といへば、當時に於ては決して少額では無かつた。何れにしても予は編輯局に於て、最も高き給料を、久保田氏に拂ふ事に取極めた。

當時の新聞、即ち所謂大新聞なるものは、社説と云へば先づ政治問題か、せいぐ\くだけて經濟問題に止り『左樣然からば』のしかつめらしき文句のみであつた。從つて新聞紙面は單調であり。無味乾燥であつた。何れの新聞を見ても、沙漠を行くが如きものであり。唯だその中に於て、『報知新聞』に於ける栗本翁、若くは『朝野新聞』に於ける成島柳北、『日日新聞』に於ける岸田吟香の文章などが、漸く見るべきものがあつた。然も是れも當時は過去の事となつてゐた。而して社説に於て福地、福澤諸君の文章などがあつたが。それさへも明治二十二三年の頃は、段々特色を失つてゐた頃であつて、正に新聞界に新しき局面の打出を必要とする時であつた。


假契約
民友社ハ久保田米仙ヲ聘シテ畫圖ニ關スル
主筆ト爲シ以テ大ノ優待ヲナス可シ
久保田米仙ハ畫圖一切ノ事ヲ編輯(主任者)員ト協
議シ其ノ責ニ任ス可シ
民友社ハ實俸トシテ毎月七十圓ノ報酬
ヲナス可シ
民友社用箋

國民新聞發刊當初德富猪一郎と久保田米僊との契約草案　德富猪一郎手稿

予は新聞の問題は決して政治、經濟に限るものではない。文學、宗教、美術、凡有る社會問題、凡有る人事問題、悉く新聞紙面の種として取扱ふべきものであるから、政治經濟に偏重する必要の無き事を認めてゐた。又た新聞は必ず讀むものゝと思うてゐるが、その外に又た見るべきものである事を考へ、問題次第では讀むよりも、寧ろ見る方が早分りのする事を知り、新聞に於て凡有る事件を繪畫にて說明するの必要を認めた。風景とか、人物とか、肖像とかは勿論、火

事があれば火事の繪、祭禮があれば祭禮の繪、當時は未だ寫眞術が發達せず、寫眞版が普及せなかつた時にて、勢ひスケッチの木版畫が必要であつた。

× × ×

同時に事件が新聞の種であるのみならず、意見も又た新聞の種である事を認めた。當時意見として新聞に掲ぐるものは、社說、論說、投書の部類であつた。併し予はその以外に、その時々にその問題に必要なる人を捉へ、その意見を聽き、これを新聞に掲ぐるといふ事が最も大切なる事を認めた。所謂對話、即ちインタービユーなるものを、吾が新聞界にも採用せねばならぬと考へた。予のなした事は必らずしも、予自ら發明の特許をとる程の價値は無い。併し尠くとも吾國に於ては、如上の件々は予が國民新聞發刊と共に始めたと云ふ事が出來なければ、尠くとも廣く遍くこれを行ふに至らしめたと云ひ得るであらう。

（昭和四年六月二十五日、民友社に於て）

第四十七　國民新聞の發刊と新島先生の永眠

一切の準備は先づ明治二十二年一杯に出來上つた。社員の顏揃も略々出來た。編輯長には湯淺君が群馬縣會議長の際に、その書記に採用し、其の能力を認めて『國民之友』編輯員に推薦し、予は又たその能力を認めて『京都日報』創立者に推薦し、その爲に新聞編輯には、一通りの經驗を經來つたる福田和五郎氏を以つて、これに任ずる事とした。

予自らは又た此事に就いて、晝夜兼行の奔走をしてゐた。而して發行の期日は愈々明治二十三年二月一日と定めた。斯くて一月二十日に新聞發行披露の爲に、從來『國民之友』の特別寄書家、其の他種々の緣故を持つて居る人々を招待した。愈々當日の午後となり、予は珍らしくフロックコートを着込み、瀧山町なる床屋に顏を剃りに赴いた際、端なく社の小使が其處まで一通の電報を齎した。それは『先生危篤至急來れ』と云ふ事であつた。予は兼ねて新島先生の心臟病が、不治である事を知つてゐた。而して早晩先生と死別せねばならぬ時期の來る事を知つて居た。併し斯く迄早く、斯く迄急に、その事が迫つて來様とは思はなかつた。

× × ×

予は飽迄も縋り終つた手、縋らなかつた手、それさへ氣がつかぬ樣に飛んで歸へり、當夜三縁亭に招待するお客の接待の事一切は、湯淺君に依頼し。萬一の場合を慮り取敢へず小崎弘道君に通知して、至急大磯に赴かれん事を通じ置いた。これは別儀でも無い。愈々先生が最後に迫られた場合には、予は宗教者としては何事もなし得ない。何はともあれその場合に牧師たる小崎君が第一必要である。

斯くて予は取るものも取敢へず新橋から汽車に乘り、大磯に着し停車場から百足屋の別莊に至りたるに、呻吟の聲は殆んど門外に聞えて居た。それから二十三日午後二時二十一分先生の永眠せらるゝ迄、殆んどフロックコートの着詰めにて、徹夜の看護をしたが、先生は遂に逝かれたのである。先生はその逝く前に種々の遺言をせられたが、それを聞いてゐた者は、小崎弘道氏、及び京都から來られたる先生の夫人であつた。一切は予が悉く筆記した。先生は固より靈魂不滅を信ずる人にて、死を恐るゝ人では無い。併し當時は注射などと云ふ事も思ふ樣には行はれず、その苦痛は實に傍目に見てゐるのが、又た一段の苦痛であつた。

×　×　×

予は先生の逝かるゝや否や夫人に向つて斯く云つた。

『私は同志社以來貴女に對しては寔に濟まなかつた。併し新島先生は既に逝かれたからには、今後は貴女を先生の形見として取扱ひますから、貴女もその心持を以つて私に交つて下さい。』

と。爾來今日に至る迄、予は新島夫人をその時の心持同樣の心持を以つて待遇して居る。

話代つて先生と殆んど同時に、明治十九年十二月予等一家の熊本から東京に移轉する際に同行したる女學生、池田鶴尾子も又た大學病院にて逝いた。彼女は特殊の婦人にて、予は予の伯母竹崎順子の紹介にて面會した。志を立てゝ男裝し、五分刈兵子帶、絣の羽織、朴齒の下駄といふ扮裝にて、拒絕したるにも關らず、强ひて予等と同行したが、品行も方正であるし、品性も潔白であるし、殊勝な女性であつたが、遂に逝いた。

これは予の生涯に何等の關係は無いが、偶然の出來事であるから此に附加へて記して置く。

×　×　×

後にて聞けば三緣亭に招かれたるお客の面々は、主人が居ないとて散々不平を並べ、中には又た洋食に酒を出さなかつたとて、その不平も交つたと云ふ事であるが、併し予に於ては致方なき事であつた。新島先生の死は日本の爲にも、同志社の爲にも、非常なる打擊であつたが、予一個人にとつても非常に寂寞を感じた。明治九年の晩秋以來二十三年の初春に至る迄、先生とは離合集散常無かつたが、併し互に相知り、相ひ敬愛し、最近二三年間は悉くとは云はぬが、同志社問題等に就いては、同心一體として働いた。予は初から同志社そのものに多くの望を囑したと云ふよりも、唯だ先生の志を援くる爲であつたから、先生を失つた後の予は、同志社に對する考へも聊か異らざるを得なかつた。

× × ×

それは兎も角も、當面の問題は先生を保護人として借受けたる創業費の一件だ。予は取敢へず吾が同鄕の債主たる藤崎氏に、左の如き電報を打つた。

『保護人たる先生は逝いた。貴君より借用したる五千圓は、其儘予が手許にある。若し先生無き爲に安心が出來かぬると云ふ事であれば、直に返濟するも苦くない』

然るに藤崎氏は、

『此上は致方ない。一切貴君を信賴するから、然るべく使用あれ。保護人は誰にても異存は無い。』

と云ふ事であつた。そこで予は『國民之友』の會計をしてゐた事務員を保護人として、その金を創業費に使用する事が出來た。

第四十八 國民新聞の發刊

斯くて明治二十三年二月一日の朝『國民新聞』第一號は出で來つた。これを『國民新聞』と命名けたのは、『國民之友』の國民なる字を其儘使用したのだ。而して『國民之友』と『國民新聞』とは、恰も米國紐育に於ける『ネーション』雜誌と、『イブニングポスト』の關係の如く、兩者倂立する事とした。

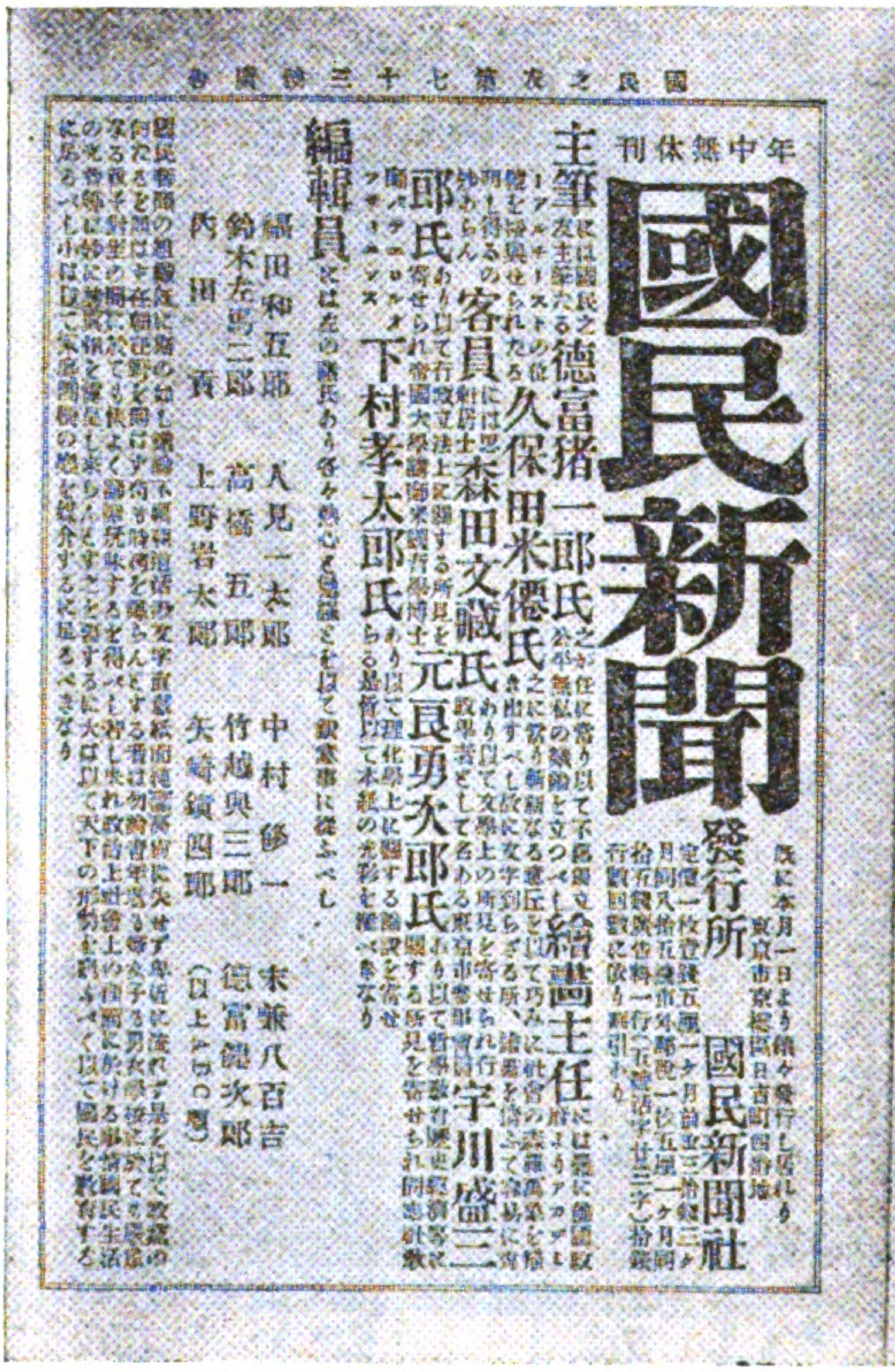
扨新聞が出來上つて見れば、予自身に於ても滿足は出來なかつた。而して『國民之友』にて多大の望を囑したる世間も、敢へて悉くとは云はぬが、その一部では確かに失望したらしかつた。何時も鮨は柳の下には居ない。『國民之友』で世間を驚したる予は、再び新聞で驚かすと云ふことは、初から期待した

る事では無かつた。或者は日刊雑誌であると云つた。無用の文字を羅列して、何等新聞らしき種は無いと云つた。それも或る程度迄は當つてゐたかも知れない。併し公平に云へば、矢張り新機軸を出したに相違は無い。世間の期待ほどでは無かつたとしても、必らずしも特色なき新聞では無かつた。而して當初から七千內外の購讀者を得た。當時に於ての七千の紙數は、一萬が殆んど新聞發行の最上級であつた時代に於ては、決して尠いとは云へなかつた。

（昭和四年六月二十六日、民友社に於て）

第四十九　國民新聞發刊と當時の政界

必ずしも手前味噌では無いが、假令『國民新聞』の發刊が、世間の豫期にも、又た予自身の期待にも全く副ふ事が出來なかつたとは云へ、凡有る意味に於て、新聞界に新紀元を打出した事は、疑ひも無い事であつた。


國民之友第七十三號廣告

年中無休刊

國民新聞

主筆　徳富猪一郎氏

久保田米僊氏

客員　森田文藏氏　元良勇次郎氏

下村孝太郎氏

宇川盛三

編輯員

福田和五郎　人見一太郎　中村修一　末兼八百吉

鈴木左馬二郎　高橋五郎　竹越與三郎　德富健次郎

内田貢　上野岩太郎　矢崎鎭四郎　（以上ＡＢＣ順）

發行所　國民新聞社

發刊當時の國民新聞の廣告

尠くとも新聞紙面の及ぶ範圍を廣くした。即ち從來殆んど閑却せられたる人間の生活、及び思想の凡有る方面に向つて、新領土を開拓したのであつた。而してこれが他の新聞に、新たなる刺戟を與へた事は、爭へない事實であらう。

併し當時に於て、予の主なる目的は、此の新聞を以つて改良の目的を遂せんが爲であつた。當時予の最も熱心であつたのは、第一、政治の改良。第二、社會の改良。第三、文藝の改良。第四、宗教の改良であつた。而して『國民新聞』は、以上の改良に向つて、自ら急先鋒を

以つて任じて居た。その中にても、政治の改良が予の最も熱中する所であつた。

×　×　×

扨如何にして政治を改良する乎。予の當時の意見は、何よりも先づ藩閥政府の打破であつた。これを打破するには、輿論の力を以つてせねばならず。而して輿論の力と云ふも、唯だ空言、空論で無く、實力を以つてせねばならぬ事を、十二分に認めた。而してその所謂る實力とは如何なるものである乎を考慮し、先づその實力の養成と結合とに勉めた。

×　×　×

予の考ふる所に依れば、自由黨と云ひ、改進黨と云ひ、是迄互に鎬を削つて來たが、何れも藩閥に對する反對黨である。政府黨に對する在野黨である。

然るに互に相爭ふと云ふ事は、これ恰も在野黨の力を以つて、藩閥政府を擁護する所以である。斯くては憲法が發布せられ、帝國議會が開設せられても、終古その目的を達する事が出來無い。故に何よりも先づ今日の急務は、在野黨の合同であり、合同が出來なくんば聯合である。

それには先づ自由黨ともつかず、改進黨ともつかず、所謂る九州に於ける進歩黨を合同し、その力に依つて、兩黨を合同するに若くは無しと考へた。これは予一人の考へでは無かつた。吾等同志の考へであつて、しかもその考へを最も熱心に、且つ有力に唱説したのが、河嶋醇氏であつた。

第五十　河嶋醇氏と進歩黨大合同

此の機會に於て、同氏に就いて少しく語らねばならぬ。河嶋氏は薩摩の健兒で、山本權兵衞伯等と年齡も相應し、又た少年からの友達であつた。

君は大藏省に於ける三人男——河嶋醇、中村元雄、加藤濟——と稱せられ、殊に大藏大臣松方公の寵兒であつた。君は若き時より有名なる論客であつた。しかも山本權兵衞伯程の雄辯では無かつた。餘りに性急で、聊か吃り氣味であつて、口よりも手の方が先に出ると云ふ漢であつた。

君が毆つたとか、君に毆られたとか云ふ者は、世間には尠くは無い。今日でも樞密院で恐ろしく勢力を張つてゐる、某顧問官の如きは、洋行の途次、船中にて骨牌の喧嘩から、強か毆ら

れたと云ふ話がある。

併し此人は根は正直者にて、駈引多き薩摩人に不似合に、一本調子の漢であつた。併し何事に依ずら意見が多く。善く云へば、『經綸湧くが如し』とも云ひ、惡しく云へば、出來る相談でも、出來無い相談でも、いくらでも註文に應じて出す、と云ふ人であつた。

此人は獨逸、墺太利の間に留學し、殊にスタイン博士の門人であつて、行政學、政治學、經濟學等に就いては、當時の官吏としては、造詣淺からぬと云ふ評判であつた。

而して海外に在る中から書を鄕友會に寄せて、屢々その國家前途の長策を開陳してゐた。鄕友會と云ふは、鹿兒島人の社交團體であるが、或は他日君によつて、政治團體になりはしまいかと思ひ、予は君が鄕友會に寄せたる意見に就いて、曾つて『國民之友』誌上に於いて、一本參つた事を記憶してゐる。

× × ×

然るに君は歸朝後、大いに松方大藏大臣等に重用せらるゝであらうと思うたが、何か意見の衝突でもあつたか。吾等が政府黨のチヤンピオンと期したる君は、却て反政府黨のチヤンピオンとして進み來つた。

君は先づ鹿兒島縣下に於ける、反政府黨の勢力を糾合し、それに依つて、九州進歩黨の合同を提唱した。九州では大同團結の折に、自由進歩主義者の一部分は、これに投じ、他の一部分はこれに反對したが、後藤象二郎伯が、それ等を踏臺として、黑田内閣に入閣して以來、大同團結は事實に於て分解し、從つて九州進歩主義者



河嶋醇氏と寫眞裏に記した筆跡

自然一致する傾向を來した。

固よりこの中にも、板垣自由黨に縁故を持つ者もあり、大隈改進黨に縁故を持つ者もあり、双方に縁故を持つ者もあり、又た何れへも縁故を持たぬ者もあつたが。何れにしても、九州は九州にて團結する事を得策とし、前には九州改進黨の名の下に團結し、後には九州進歩黨の名の下に團結する事になつた。

× × ×

河嶋君等は、此の進歩黨大合同の旗幟を翻して、中央に乘出し、先づ自由、改進黨に回答を促し、此に議會に乘込むに際し、在野黨の一大勢揃をせん事を企てた。政府ではこの勢を見て、今日で云へば所謂る官僚團體とも云ふべき者の勢力を假り、頻りに此の大合同の妨害をなさしめた。

而して、福岡の玄洋社、加賀の盈進社などは、何れかと云へば、この進歩黨の大合同には、最も反對であり、熊本の國權黨なども、勿論それであつた。

この進歩黨大合同に就いては、自由黨側は寧ろ大熱心とは云はざる迄も、餘り異存は無つた。唯だ板垣伯その人が、果して熱心であつた乎否乎は疑はしい。併し九州出身の松田正久氏等は無論賛成者の一人であり、殊に熊本に於る、熊本進歩主義の首領山田武甫氏の如きは、多少予の刺戟も與つて力があつたと云へ、最も熱心者の一人であつた。

而して改進黨に於ては、島田三郎君等は、頗る熱心に盡力した。併し『好事魔多し』改進黨中に、若干の異議者あり、爲に改進黨の合同者は、味方より攻撃せられ、今更致方も無く、此に於て折角企てられたる進歩黨合同は、改進黨を取り除きた、其他の進歩主義者の合同に止まらねばならぬ次第となつた。

此の場合に於て、河嶋氏は、反對黨の最も目指す一人となり、街頭若しくは公會の席上に於ても狙はれ、又その宅にも反對黨の壯士が押掛くるといふ事にて、同志の面々は何れも刀を携へて、河嶋氏宅に集つた事があつた。予の如きも刀こそ携へなかつたが、友誼上河嶋氏の宅に出掛けた事があつた。

第五十一 第一次山縣内閣と初期の議會

話代つて當時陸奥伯は、亞米利加より歸へり、山縣内閣の農商務大臣となつてゐたが、彼は當時に於て最も政治的に大なる

野望を抱いてゐた。
彼の目的は進步黨合同でも無く、又た政府黨合同でも無かつた。彼は衷心より藩閥は嫌ひであつた。維新の當時から『日本人』なる論文を作り、昔平家全盛の世には、平氏ならざる者は人にして人に非らずと云うた如く、薩長の全盛の時には、薩長ならざる者は人にして人に非らずと云ふ如き有樣であるが、これでは維新の目的は達せられ無い。日本は日本人にて治めなければならないと云ふ自分の立場から、此くの如き論文を作つて、これを木戸侯に示したといふ事である。
陸奥伯は山縣公が洋行の歸途米國に於て、大いに山縣公を說く所あり、その後山縣公が日本へ歸へり、內閣を組織するや、陸奥伯もやがて日本に歸へりたるに、內閣の椅子は旣に分配し盡されてゐたから、陸奥伯は當時板垣伯と往來し、板垣伯の衣鉢を承けて、愛國公黨――當時板垣伯直屬の自由黨を、愛國公黨と稱してゐた――の首領とでもなる如き態度を示し、その處宜しき駈引があつて、遂に山縣內閣は、岩村、榎本二大臣を罷め、新に陸奥、芳川の新大臣を迎ふる事となつた。
この交迭は、寧ろ專ら陸奥伯の爲に行はれたものと見るべきものであつた。爾來陸奥伯は大臣として內閣に在りながら、民間とも交通し、大臣にして候補者となり、遂に和歌山縣選出の代議士となつたのである。而して陸奥伯は此際何事を企てたる乎。恐らくは自ら政府黨でもなく、在野黨でも無く、その中間に蟠る一勢力を作つて、政界を上手く料理して見度きものと考へたのではあるまい乎。
第一議會に際して、民黨は八千萬圓の豫算から、八百萬圓を減ずべしと論じたるに、所謂る土佐派の爲に六百萬圓にて妥協が成立したのは、恐らくは、陸奥伯の勝利と見るべきものではあるまい乎。殊に第一議會の議長は、中島信行――後に男爵となる――氏にして、中島氏は陸奥伯の親類であり、且つ親友であつた。而して土佐派中の林有造、竹內綱などは何れも十年の事件にて、陸奥伯と同じく法網に罹つた連中であれば、如何に陸奥伯の手が彼等に及んだ乎は、これに依つて知るべきであらう。予は第一議會には尠からず失望した。中江篤介氏の如きは土佐人でありながら、土佐派の裏切りを憤慨し、無血蟲の文を草して、遂にアルコール中毒を理由として、議會を去つた程であつた。

（昭和四年七月三十日、民友社に於て）

改造社版 經濟學全集（第十三回配本）

第十八卷

社會政策

社會問題の緊張すること今日の如く甚しきはなき我國に於て目下「社會政策」の研究の焦眉の急なるは多言を要しまい。本卷は學理と實際の兩面に卓越せる波多野・藤井氏を迎へて原理の究明と施設に關する詳論を收め、更に特殊題目についてはマルクス學派の見解を明示するため本邦唯一の權威山川・山村氏を煩し田中氏の力著「ソヴエート社會政策」を加へて尨大なる體系を完成してゐる。

内容

社會政策原理　波多野鼎
社會政策施設各論　藤井悌
勞働組合論　山川均
消費組合論　山村喬
ソヴエート社會政策　田中九一

第一回	經濟學原理
第二回	經濟學大綱
第三回	日本社會經濟史
第四回	唯物史觀經濟史
第五回	各國經濟史
第六回	經營經濟學
第七回	經濟學前史
第八回	マルクス經濟學說の發展（上）
第九回	商業學（上）
第十回	租稅論
第十一回	現代日本經濟の研究
第十二回	財政學（下）

東京・芝・愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二一番

最新刊

經濟小言

政界に實業界に快腕を揮ひつゝある武藤山治氏が、其の主張する立場に立つて、婦女子にも解かるやうに、經濟に關する必要な知識を平易に通俗に解說したもので、國民必讀の經濟讀本である。

【內容】(一)經濟とはどう言ふものであるか。(二)贅澤は善いことか、惡いことか。(三)儉約に就てはどう考へて良いか。(四)富とはどう解してよいか。(五)資本とはどう解してよいか。(六)資本主義制度と社會主義制度とどちらがよいか。(七)金解禁とはどう言ふことであるか。(八)社會問題を解決するものは經濟學ではなく人間の心の改造である。(以上)

武藤山治著

(菊判並製)

定價八拾錢
送料十八錢

最新刊

市町村法律必携

現行法令に對し無產者は如何なる態度を採るべきか？著者奈良氏は夙に此切實な問題に着眼し研鑚多年、既に幾多の著書がある。今市町村制を中心に本書を成す。諸君は市民として町村民として、無產者的立場よりする法律知識の缺乏の爲に、徒に利用され、欺瞞にかゝり損失を受けつゝ而も自ら知ずに居る事なきか？先づ本書を讀み、事實を考察せよ。而て自己と自己の階級の利益を擁護せよ

【內容】
(第一篇) 市町村制逐條研究。
(第二篇) 市町村制雜題。
(第三篇) 市町村制法令集集。
(附衆議院議員選擧法關係法規集)

奈良正路著

(三六判總クロス上製)

定價參圓
送料廿六錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

改造文庫

百頁十錢（恒川義雅裝幀）

（數字（1）は拾錢（2）は貳拾錢以下之に倣ふ）
（送料（1）二錢（2）四錢（3）六錢以下之に倣ふ）

第一部

- 第十篇 社會主義の發展 エンゲルス著 堺利彦譯（1）
- 第十一篇 マルキシズム認識論 デイツゲン著 石川準十郎譯（1）
- 第十二篇 辯證法的唯物觀 デイツゲン著 山川均譯（2）
- 第十三篇 哲學の實果 デイツゲン著 山川均譯（1）
- 第十四篇 神と國家 バクーニン著 木莊可宗譯（1）
- 第十五篇 婦人論 ベーベル著 山川菊榮譯（6）
- 第十八篇 エミール（上卷） ルソー著 内山賢次譯（4）
- 第十九篇 エミール（下卷） ルソー著 内山賢次譯（4）
- 第二十篇 國家論 オッペンハイマー著 廣島定吉譯（2）
- 第二十一篇 金融資本論 猪俣津南雄著（4）
- 第二十二篇 日本開化小史 田口卯吉著（1）
- 第二十三篇 日本經濟論 田口卯吉著（1）
- 第二十四篇 日本經濟學說の要領 經濟的帝國論 瀧本誠一著（2）
- 第二十五篇 日本商業史 横井時冬著（4）
- 第二十六篇 日本工業史 横井時冬著（4）
- 第二十七篇 經濟學の實際知識 高橋龜吉著（2）
- 第二十八篇 リッケルト論文集 リッケルト著（2）
- 第三十篇 女工哀史 細井和喜藏著（4）
- 第三十二篇 社會進化と婦人の地位 ラッパポート著 山川菊榮譯（2）
- 第三十六篇 幸德秋水集 幸德秋水著（2）
- 第三十七篇 中江兆民集 中江兆民著（2）
- 第三十八篇 財產起原論 レヴィンスキー著 貴島克己譯（1）
- 第三十九篇 組織論 レーニン著 鈴木厚譯（3）
- 第四十篇 三民主義 孫中山著 金井寛三譯（3）
- 第四十一篇 唯一者とその所有 スティルネル著 辻潤譯（6）
- 第四十八篇 マルキシズム國家觀 マックス・アドラー著 山本琴譯（5）

第二部

- 第十三篇 俳諧七部集 萩原蘿月校（3）
- 第十四篇 蕪村七部集 萩原蘿月校訂（2）
- 第十六篇 神皇正統記 宮地直一校註（3）
- 第十七篇 奥の細道 芭蕉翁文集 萩原蘿月校訂（3）
- 第三十五篇 北村透谷選集 島崎藤村編（1）
- 第三十六篇 樋口一葉選集 樋口一葉著（1）
- 第三十七篇 平凡 二葉亭主人著（1）
- 第三十八篇 子規俳話 正岡子規著（3）
- 第四十篇 坊っちゃん 夏目漱石著（2）
- 第四十一篇 草枕 夏目漱石著（2）
- 第四十二篇 それから 夏目漱石著（3）
- 第四十三篇 一握の砂 悲しき玩具 石川啄木著（2）
- 第四十四篇 雲は天才である 我等の一團と彼 石川啄木著（1）
- 第四十五篇 山陰土產その他 島崎藤村著（2）
- 第四十六篇 作曲白秋民謠集 北原白秋著（2）
- 第四十七篇 獄中記 オスカア・ワイルド著 神近市子譯（2）
- 第四十八篇 厭世家の誕生日 佐藤春夫著（1）
- 第四十九篇 日輪 横光利一著（1）
- 第五十篇 勞働者の居ない船 葉山嘉樹著（1）
- 第五十一篇 海に生くる人々 葉山嘉樹著（2）
- 第五十二篇 小公子 バアネット著 若松賤子譯（2）
- 第五十三篇 ホワイトファング ジャック・ロンドン著 堺利彦譯（3）
- 第五十五篇 自選歌集 朝の螢 齋藤茂吉著（2）
- 第五十七篇 自選歌集 川のほとり 小泉千樫著（2）
- 第五十八篇 自選歌集 松の芽 中村憲吉著（2）
- 第五十九篇 自選歌集 海山のあひだ 釋迢空著（4）
- 第六十篇 自選歌集 立春 木下利玄著（2）
- 第六十二篇 自選歌集 人間往來 與謝野晶子著（2）
- 第六十三篇 自選歌集 槻の木 窪田空穗著（2）
- 第六十四篇 自選歌集 野原の郭公 若山牧水著（2）
- 第六十五篇 自選歌集 原生林 前田夕暮著（3）
- 第六十六篇 自選歌集 空を仰ぐ 土岐善麿著（2）
- 第六十七篇 作曲白秋 童謠集 北原白秋著（2）
- 第六十八篇 作曲白秋 國民歌謠集 北原白秋著（2）
- 第六十九篇 作曲白秋 舞謠曲集 北原白秋著（2）
- 第七十篇 背德者 アンドレ・ジイド著 石川淳譯（2）
- 第七十一篇 チエホフ書簡集 内山賢次譯（5）
- 第八十八篇 寡婦マルタ エリイザ・オルゼシコ著 清見陸郎譯（3）
- 第九十篇 井泉水句集 荻原井泉水著（5）

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

現代日本文學全集

第四十八篇

廣津和郎集
葛西善藏集
宇野浩二集

第三十六回
十一月上旬配本

内容

廣津和郎集

やもり　波の上　死兒を抱いて　崖　線路　水溜　哀れな女　邂逅　指　U君とエス　狗が疲れてゐる　神經病時代（その他）

葛西善藏集

悲しき父　惡魔　姉　子をつれて　馬糞石　不能者　遊動圓木　千人風呂　不良兒　歳晩　おせい　蠢く者　椎の若葉　湖畔手記　バカスカシ　醉狂者の獨白（その他）

宇野浩二集

苦の世界（前篇・後篇）　高天ケ原　軍港行進曲（正篇・續篇）（その他）

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



愛と藝術と

龍膽寺　雄

一

『つんぼ！』

燐寸の火がシウ！　と闇を區切つた窓硝子へ弧狀に閃めいて映つて、小さた燃えさしがムシヤクシヤに伸ばした僕の髪から、コムパスを抓んだ指先きへ落ちて蒼い煙りを立てて消えた。僕は意味のない凝視を窓硝子の闇から戻して、ふと壁の寢台を振向いた。ナミは曲げた小指の先きで頰ぺたへ鬣をこさへて、羽根枕へ深々とついた横着た頰杖を、スタンドの灯りに蔭らして居た。たくたまつた髪がユサ〳〵と手首へ崩れて、ボタリとそこから燐寸の箱が肘のきはへ落ちた。——彼女は細長く膨らめた毛布の下で、わがに脚の先きを動かした。

『何だい。』

『ドア！……』

髪も搖るがさずに邪慳に云つて、彼女は厚い蝕ばんだ近世（德川）風俗史のペエヂを左側へ繰つた。

『……?』

コムパスを置いて椅子から立つた時、クルリと眞鍮のノブが廻つて、ドアが壁から離つた。いつもの樣に革のオ、ヴアを脂ッぽくからだぢゆうに皺ませた槇氏が、靴の踵へステツキのいしづきを敲せて立つて居た。

『かまひません、どうぞ。……』

『寢てるンか。』

壁ぎはの明るい寢台にナミを見ると、彼は乾いてつぶやいた。さうして、莨のはしを火花を散らして床へはうつて、爐緣りの上から靴で踏んだ。

『藤村が見えてるんだ。會はないか?』

僕はしかけた仕事をちよいと見た。

『さう、……階下へ?』

『來たまへ。』

サツさとドア口へ引ッ返しかけて、ふと彼は足をそらして、――大股に床を横切つて、寢台のナミの枕元へ立つた。彼は太い指で彼女の髮を分けて華奢な顎をつまんで、こつちへ顔をねぢ向けた。

彼女はまた左側へペエヂを繰つた。

『何たいその繪は。へ!……ユウヂヨ?』

『お女郎のお寢牀よ。枕が二つ並らんでるでせう?』

ナミは顎を彼の手から邪慳にもぎとつて、ペエヂを手で押へて云つた。さうして、ポサリとそこへ板チヨコのピカ／＼する赤い紙サツクを落とされると、鉛筆をはづしてそれを拾つて、彼を仰いで髮の中から眼を振り出した。無理にこしらへた樣な顔の險がかた／＼の頰に泌まつて、涙がキラリと睫毛に光ると、ふと、――彼女は乾いたしやくりあげをした。

『こいつ!ものを貰はなきア愛嬌を見せねえ。』

わざと明るく云つて、槇氏はグニヤ／＼と亂暴に彼女のからだを毛布の上から揺すぶつて、――階段口へ戻つて來た。

『何だい。泣いてるぢやないか。』

『うん。……』

僕は氣嚮にたゞうなづいただけだつた。

九時、――「死の假面」の階下の客間はこの時刻にはいつも、莨の煙りで磨硝子の様に空氣が濁つて居る。高い圓蓋の石膏の浮彫りを殆んど隠して、眞ん中へたれた大きなシヤンデリヤの燦然たる無數の結晶硝子が、霧の中の花束の様にぼやけて、床のモザイツクへ据ゑた巨大な石の花鉢や、低い椅子を馬蹄形に支へたくろりのコリント風の圓柱の、寒む寒むしい縞大理石を、濕つぽく光らせて居た。

棧敷の上下のボックスも、花鉢をとりまいた十ほどの小さな桃色大理石の卓子も、客で一杯だつた。磁器やグラスの齒へ徹る軋り、金屬の食器の觸れ合ふ音、ヒソ〳〵話、醉ひどれの鼻歌、遠い座席の間の挨拶、忍び笑ひ、哄笑、女たちの嬌聲、燐寸の焔、白いカラア、モザイックの床を擦る給仕の靴音、眼鏡の反射、ジヤツキへ弾しるビイルの沫き、議論、――さう云つたものが、正面のオウケストラボックスから渦卷くジヤズと煙草の烟りの中で、一樣に澱んで居た。

『せんだつてはお手紙を有難う。』

『いゝえ。』

大理石の大きな花鉢の蔭で、椅子から立つた磯村氏と、僕は簡單な挨拶をした。

『今しがた伊東から上京したものですから。……』

給仕の久保に僕のぶんのグラスを云ひつけて、彼は手巾で短かい上品な口髭を拭いた。廳布の廳の一部が改築されるので、その建築樣式やその他について、大體僕が設計を委されて居たのだ。槇氏の經營するこのカフエ「死の假面」の建築に僕が關係して、以來彼の友情的な保護を受けて居たのが、間接に若いこの貿易商の知遇を得る動機になつたのだが。

尤も、「死の假面」では槇氏と僕との間に、殆んど好みの根本的な部分に相容れないものがあつて、少なからずその制肘を受けたので、磯村氏からこれに與へられた評價は、その意味で必ずしもことごとく當を得たものではなかつた。一體僕の藝術樣式は、僕自身の持つ二つの相反する趣味の、どちらへかの發展に胎されるので、一と口に云へば、一方には無際限に緻密に、複雜に、纖細に、華麗に、絢爛に、多彩に、豪奢に、要するに黄金と人巧とに飽かして。一方には飽くまでも粗野に、單純に、素朴に、生産的に、科學的に、單色に、要するに生活的に質樸に。――この二つの傾向への徹底だ。

僕はやむなく槇氏の意を酌んで、こゝでは二つのこの趣味の傾向を巧みにつぎはぎした。僕は空間的に假定した焦點から周圍へ向かつて、趣味の傾向を漸次にぼかして行つた。この意圖は床のモザイックにも陶器の浮彫りにも現れた。ロココの纖細に火焔ゴシックの幻想を加味して、更にそれへ東洋の古典と神秘とを匂はした異樣に大なシヤンデリヤと、群舞する青銅の裸女たちに捧げられた大きな色大理石の花鉢とが、空間的な焦點を象徴して、高い圓蓋を戴いた客間の中心を埋めた。さうして、この壯麗な中心から周邊へ向かつて、あらゆる室内裝飾の樣式と調度や器具が、漸次原始的な線と色調へ移行して、ぐるりの壁は磐の塊の粗らくついた灰ッぽい凝灰岩をむき出しに積んだ。桟敷の低い天井とコリント風の圓柱とに灯りを蔽

て、夜にはそこが暗い影になつた。
白粉くさい細い腕がよくそこで男の頸へまきついて居た。

『僕としてはむしろ不滿の方が眼立つのです。』

はじめて楢氏の紹介で、この大貿易商の若い主人に會つた時、彼の推稱に應へて僕は云つた。彼から麻布の邸の改築に關して、大體の意嚮を打開けられたのは、その席でだつたのだ。

『あたしの趣味なぞは無論、』

と、その時色の白いこの大ブルヂョワジイは、毛布のオオヴアへ樹脂に染んだ細い指からハヴアナの灰をこぼしながら、謙遜して云つた。

『……とるに足らないものですけれど、あなたのその二つの傾向的な趣味については、幾らか理解が出來る様な氣がします。あたしもまた單色が嫌らひなのです。近代人の食はされた悲慘な十字架ですな。』

寢室をなるべくんば信徒の遁した洞穴の様に、さうして食堂はサルタンの宮殿の様に、——さう云ふ彼の趣向について、しかし僕は蔭で頸をかしげた。やがて妻にしようと云ふ幼稚かなある娘を、楢氏の比喩を借りれば、接吻のあとへも血がにぢむくらゐに純潔に、弱わ弱わと育てゝ居ると云ふ不思議なこの趣味の人が、一體はかないその温室咲きの花を、岩の様に荒らくしく洞窟の寢床へ移すつもりなのだらうか？　と。僕はその時、ナミの住宅についての主張を思ひ浮かべたのだつた。手脚や胴の筋肉のコリくしたこの中性的な娘の理想は、丸太小屋だつた。丸太小屋へあんぺらの疊みを敷いて、庭へ羽根の白い鵞鳥を飼つて、冬になるとそこの雪を掻いて、お友だち（彼女の機嫌のごくいゝ時にはそれが僕になるのだが、）とフットボオルをする。鵞鳥は、尤も爐の中で丸焼きにして、みんなで喰べるんだと云ふのだから殺風景だ。

『僕はあなたの趣味から想像して、お手紙の意味を反對にとるんです。』

さう、楢氏の手からグラスへ薫色の液體を小さく注いで貰ひながら、僕は貿易商に云つた。

『つまり、……寢間をサルタンの後宮の様に。そして、……』

『否！』

若いブルヂョワジイは云つた。ハヴアナの柔らかい煙りを顔にもつらしながら。

『あたしは森の中に紅を假想するんです。森の中に紅をね。御承知の様に（彼はこゝで瞳の中にあるかなしほどの微笑を見せた。）あたしは鮮やかな紅を用意してるんです。あなたはありッたけの智慧を絞つて、深邃たる森をつくつて下さい。森ぢやないむしろ森色を。とにか

く、……この凝灰石の壁は傑作です。絢爛たるこれ等の貴族美を愉快に嘲笑して居る。花鉢もシヤンデリヤも一層あの石の壁の嘲笑を、華々しく引ッ立てゝ居るに過ぎません。』

僕は鼻からつひ微笑を漏らした。

『われ〳〵プロレタリアートが、あなたがたブルヂヨワジイを、實價以上に華々しく引ッ立てゝ居る樣にですか？』

女、──ユリが踊りの步調で椅子の間を縫つて來て、粉ッぽい白い腕を後ろから僕の頸へからめた。彼女も彼女の嬌態を引ッ立てるためには僕が必要らしかつた。──隣りの席で誰かとグラスをつき合つて居た磯村氏が、何か用事でもありげに座を立つて卓子を離れて行くと、ユリは纖い指の先きでヒヨイと磯村氏の口から葉卷を奪つた。

彼女の腋臭の匂ひがふと僕の鼻を掠めた。

『澤山！』

グラスをさしつけられると、彼女は捲毛の鮮やかな斷髪を搖さぶつた。さうして、蜘蛛の樣にヌル〳〵と裸かの腕をすべらして、僕のからだから彼のからだへと移つた。──紅の毒々しい唇の間から葉卷をとつて、そのまま彼の口へ突ッ込まうとして、潔癖に彼に拒まれると、冷たい嬌笑を天井へ漏らして彼女は卓子から離れて、そのまゝ煙草の煙りを掻き亂して露廊の方へ去つた。

火花がパツと凝灰岩の壁に散つた。

『大體目鼻もつきましたから、三四日うちに設計もお眼にかけられると思ひます。』

『有難う。樂みです。』

『當分こちらにおいでですか？』

──花鉢の向かうの邊で議論か何ぞが高調して、たしなみのない罵詈怒號の應酬になつて、やがて人の輪にまかれながら壁の方へと動いて行つた。

『さア。……』

貿易商は潔癖にフオークの叉をナプキンペエパアで拭きながら云つた。

『さう云ふ必要がありますか？』

『なるべくなら。……それに、さしあたり御相談に與つて戴きたいことも二三あるんですけれど。』

『今晩では？』

『一寸、では部屋へ脚をお運び願へますか？』

『あなたの御都合で。……』

『では失禮ですけれど。』

數分の後、椅子をずらして僕は卓子を立つて、オウケストラボツク

スを蔭らした大きな齒朶の鉢のきはから、屋根裏の戸口へと客を導いた。

二

埃ッぽい階段を踏んで、叩板に蹄鐵を代用した僕たちの屋根裏のドアロに立つと、貿易商は纖い髮を艶やくと櫛目立たせた品のいゝ小柄な頭を灯りにさらして、ちよいとつゝましくそこ等を見廻した。さうして、輕く拳を口へあてゝ、炭坑を出た坑夫の樣に、——しかし遠慮深くせきをした。

ナミは寢臺から姿を消して居た。スタンドの灯りが頭の痕の窪んだ羽根枕の臙脂を、皺んだ白い敷布の上に艶やくと眼立たせて、チヨコレートの銀紙がそのきはへ散つて、冷たく光つて居た。今しがたまでそこに居た女主人公の感情を、そのまゝ僕に傳へるかの樣に。

『お部屋ですか？』

仕事卓子の角を挾んではすに椅子に向合ふと、磯村氏は飾りけのない屋根裏の隅々を薄灯りの中で見廻して、遠慮深く聞いた。さうして、ポケットから葉卷のサックを出して、

『よろしうございますか？』

と、睫毛の蔭つた眼に灯りを映して僕を見た。僕は點火器の載つた硝子の灰皿を彼の前へずらした。

『どうぞ。……』

窓硝子のところまで二月の夜の寒氣が迫つて居た。窓に灯りの乏しい宏壯なビルデングが幾つも視界を遮つて聳えて、冷たい夜の蒸發氣が地面に低く薄く凝つて、通りの灯りをその底へ鏤めて居た。表て銀座の輝やかしい夜の通りが、はすに建物の隙を通つて居るので、路面を埋めた夥だしい燈火が星空へつゝ抜けて、廣告燈の明滅や電車のスパアクや、さうしたものがそれとない路面のどよめきを明るく空へ響いて居た。

『こちらが西ですね。』

『さうです。』

『あれは窓ですか？』

『いゝえ、露臺です。……向うが小さな出窓になつてます。あの露臺が下からの直接なドアロになつてるんです。調理室の壁へ階段が降りてましてね。』

貿易商は指の先きで葉卷の灰を硝子の灰皿へ崩して、

『「死の假面」にこんな屋根裏があらうとは思ひよりませんでしたよ。』

さう云つて、回轉椅子の上でもう一度首をめぐらした。——臙脂の淡い漆喰の天井や壁、怪しげな三稜劍を二た振り十字架風にかけた

達、客間の鋼張りの圓屋根をまともに仰げる絵硝子の大きな圓窓、原始色の埃ッぽい琉球の壺から花甘藍の桃色がうなだれた小さな丸卓子、二人寢には小さい一人寢には大きい折疊みの寢臺、ナミが自分で種子壺と呼んで、果物の種子や皮なんぞをピョイ〳〵と寢牀から吐き出す素焼きの壺、黄色い曇り硝子のシヤツポをかぶつた蠟燭形のスタンド、退屈をすると時々ナミと落花生の殼だの蜜柑の皮なんぞを持つて對局する、床へ白墨で畫いた大きな碁盤、ナミと僕との道化た、、を一杯に影繪風にくまどつたぐるりの窓掛、硝子のかけらを絲でくくつてつらゝの樣にさげた天井のシヤンデリヤ、緑青が世紀を模造した青銅の首やそこひの樣に無氣味に白い石膏の胴體、僕たちの、、の生活を戯畫化して友人が畫いた、五十號ほどのタンペラの、、の額緣、さう云つたものを順々に、一つ一つ氣にとめて眺めてから、貿易商は歎息的な眼を僕に戻して云つた。

『簡素な生活がこゝでは實に驚くばかり美しい諧調をなして居りますね。』

さうして葉卷をとり上げて、

『この頃あたしは自分の美感に對して、幾らか疑義を、……と云ふほどでもありませんけれど、さう云つたものを抱きはじめて居るのです。例へば、……少しく無作法な例ですけれど、せんだつてもこんなことがあつたんですよ。下町のある夜更けの通りでですが、自動車の故障でちよいとの間吹き曝しの闇へ立たされたんですね。と、或市場か何ぞへでも運ばれるのか、ぼろ屑を山ほど積んだ古ぼけた貨物自動車が、雪のぬかるみを嚙んで、荷を跳上げ〳〵疾驅して來るんです。何かなし手巾で鼻を抑へながら、人通りの途絶えた夜更けの通りに、見送るともなくそれを見送ると、車と一緒にポソ〳〵搖れて居る積み荷の蔭に、見るもむさくろしい、ぼろ屑同然な身なりをした若[illegible]働者の、、。健康と自然とそのものゝ樣に素朴に潑剌と？……あたしはあたしの生活に、この時くらゐ險惡的な悲哀を感じたことはありませんでしたよ。……あたしたちは社會に於いて、何ものかにきびしい縛しめを受けて居る！　しみ〴〵とこんな氣がしましてね。』

さう云つて、色の白い若い貿易商は空虚な淋しい微笑みを泛した。

『頽廢が一箇の美だと云ふことは、僕も否めないと思ひます。』

さう僕は云つた。

『、、の壁がいつか自分で退屈をして、あくびをはじめる時が來ると云ふのは、最早動かし得ない事實です。しかし、僕一箇の見解を云ふ

と、僕は美もまた未知の世界の發掘だと思ふのです。電氣文化の前には蒸氣文化がなければならなかつた樣に、明日の美のためには今日の美がなければならない。その時代その時代の完成と飽和との上に明日が建立される。……僕は從つて僕自身の持つ現在の美を過信して悔いないのです。端的に云へば、僕は僕の美と一緒に滅びてもいゝのです。そこからこそ輝やかしい明日の美が胎まれるべきなのですから。』

『あたしの美に對する疑義は、あるひはあなたの云はれるその飽和の上に立つて居るのかもわかりません。』

　さう彼はわびしく云つた。

『そのくせ、思想的にはあたしは毫末もプロレタリアートに同情を持たないのですけれど。……この點では槇氏とも同感で、あたしは心ではいつも近世プロレタリアートの社會主張に對して、鬪爭の用意をして居るのです。』

『あすこに三稜劍がありますけれど、』

　と、僕は笑つて爐を指した。

『ナミが戻つたら一つ僕に介添ひをさせて下さい。』

　若い貿易商は葉卷の頭を灰皿へ載せたまゝ、ギリシヤ型の端麗な鼻を蔭らせて、壁の十字架を見た。僕の手に渡るまでに幾度かフランス人の血に染んだに違ひない錆びた華奢なその三稜劍を。

『……？』

　ドアが風を起こして後ろへ開いて、かたかたの眼と頰とを短かく髮でかぶせたナミが、華奢な肩から桃色の大きな浴用タウヱルを捲いて、湯上がりの生き〲しい血色をむき出したしなやかな腕に、彼女には荷に過ぎるほどの大きな額縁をかゝへて、部屋へ這入つて來た。いぶかしげに椅子から立つたお客さまに、そッけない會釋をちよいと投げただけで、オウドコロンの匂ひをフワリと溫たかく灯りのきはまで運んだ。

『お客さまが畫廊のとこでさつき喧嘩をして。……』

　彼女は古びた金の剝げめから白く粉のこぼれたガタ〲の額縁を、重げに床へおろして僕を見た。

『西の一番はなのだな。』

『えゝ。』

『誰のです。……S.Hayashi？』

　ナミは髮のかぶさつてない側の眼で、眞ッ直ぐお客さまを見据ゑて、フンと云ふ高ぶつた表情を閃めかすと、そのまゝの表情をすぐに僕へ戻した。ひどく冷たく黑く澄んだ瞳と、湯上がりのピカ〲する細い鼻と、ナマいきなごく小さい富士がたの唇とが、可なりに度の強よい輕蔑を示して居るのを僕は見た。

『僕のナミです。』

客はやゝ意志的な眼で女の子を見た。さうして、輕い會釋のあとで、

『舞臺の上で一度お眼にかゝつたことがあるのですけれど、ずッと以前に。……』

ナミは微笑みもしないで、もう一度眞ッ直ぐ客を見た。白眼の蒼さが灯りを受けて燐の様に冷たく燃えた。

『磯村さんだ、麻布の。……』

『あたしはもつと小さな、可哀いらしいかたかと思つてましたよ。』

——三年ほど前に彼女は一寸の間自分の希望で、舞臺へ出て居たことがあつた。今は解散したG・座が丁度旗上げ當座でT・劇場の華々しい初公演にマアテルリンクの青い鳥を上演した時なんぞ、主人公のチル〳〵に扮して喝采を博したりして、子役では可なり名を賣つたものだつた。座の金主で、關西の財界では相當に識られた男だつたが、おぢいさんと呼ばれる年格向で、やつと十五かそこ等の彼女をしつこく追ひ廻したりなんぞしたので、いゝうんざりして間もなく僕はよさしてしまつたのだが。——

『二三年前はなか〳〵可哀いかつたんですけれどね。……』

『今だつても可哀いゝわよ。』

ナミは細い指の頸を曲げて爪の先きを搔きながら、ごく一寸ばかり一座の雰圍氣と妥協を見せて、申しわけほどかた〳〵に點頭をつくつた。さうして、タウエルの合はせめをお腹のところで内側から指でつまんで、藺の様に柔らかく灯に向かつて椅子へかけた。

『で、……御相談と云ふのは？』

客に促されて僕は椅子を動かして、錆びた紙挾から製圖紙をひと束引抜いて、灯りの下へ擴げた。さうして、小半時間設計の細部について、綿密に相手と意見をまじへた。格天井を模した唐木のモザイックに、障子を象徴した絹硝子を對象させて、純粹な洋風建築を基礎に、日本の「お座敷」の雰圍氣を出さうと云ふ試みなのだ。床・違ひ棚、書院窓、欄間、分離派風に象徴したそれ等の細部が、とりわけ僕として獨創を誇れるものだつた。

ナミはその間ぢゆうタウエルにくるまつてぢッとして居た。湯ざめが段々と彼女のからだから血色を奪つて、頰の白さが髮の蔭に眼立つて來た。

『あなたのお寢みのお邪魔をして居るのではないんですか？』

貿易商は氣にして彼女を見た。

『寢な、かまアないから失禮をして。』

僕も顏をあげた。

『いゝの。』

ナミは無感情に云つた。さうして、タウエルの間から纖い指を出して、卓子の上の設計圖を一枚はしから引抜いて、だまつてそれを顔の下へ引ッ張つた。と、短かい髪が片側から崩れて、黒く濕めッぽく額をかぶせた。

話がすむと客はナミに向かつた。

『舞臺へお出になる考へはもうおありになりませんか？』

『なくもないんですけれどね。』

と、僕は云つた。

『今ンところはしやぼてんで夢中なもんですから。しやぼてん集めの道樂でね。あすこの出窓の温室を覗いて御覧なさい。あれだけの珍種を集めるには、東京ちゆうのしやぼてん屋をあさり廻つても、おいそれとはむづかしいでせうから。……しやぼてんをこいつは植物界の無郷者と目して、寵愛してるんです。』

客は冷たい端麗な彼女の横顔を、どこか觀賞的な眼でぢッと見た。

『あたしもしやぼてんを少し持つてますよ。』

ナミは眠やくらしく客に向かつた。

『花のごく美しい種類のものを二十ばかりね。原産地から以前に取り寄せたのです。』

『あたくしは花には興味がないんですの。』

さう無興味に云ひかけて、彼女はタウエルの中へ華奢な顔をかしげて埋めて、膝まで顫はして、女らしいつゝましいくしやみをした。

『形ちの幻想をですか？』

彼女は頭を振つた。

『では、しやぼてんのどこがお好きなのです。』

『だから、無郷者的なところをですの。』

『本人の理想でしてね。』

さう僕がわきから註釋した。

『プロレタリアートの汎世界主義。マルクシズムの地球的、、をね。』

『いつぞや椏から、』

と、客は消えた葉卷のはしへ點火器の焔を移して、──小さた灯を瞳に映しながら云つた。

『あなたがたのロマンスを伺つたことがありましたつたけれど……とのかたは云はゞ御自分が無郷者でいらつしやるんではないのですか。』

『だからアメリカから移植された葉ッぱのないしやぼてんなんぞに、同情出來るんです。』

『葉ッぱも花もそして根もあるわ。』

タウエルの中で寒むさうにからだをすくめて、悲しげにナミはつぶ

やいた。長い睫毛から俯向いた白い頰へ雨の樣に繁く蔭を降らせながら。

『失禮ですけれど、』

と、磯村氏はちよいとためらつてから云つた。

『……お幾つでいらつしやいます？』

ナミは相手を冷たく見たまゝ、額の片側を覆うた髮を頸だけ振つて邪慳に後ろへ拂つた。

『ヽヽはもうあるわよ。』

若い貿易商は何かなし初心に頰を染めた。やつとこしらへた微笑みを、上品な口元へ匂ひの樣にとめたまゝ、やたらに葉卷の先きを赤くして、顏のぐるりを煙りで濁して、灰皿へ灰を崩した。さうして、皮肉に落ちついた面白げなナミの眼の中で一更あはてゝ、煙りにむせながら遂々椅子を立つて、そは〳〵と歸る身仕度をはじめた。

三

『靜かだね今夜は。』

客を階段の下へ見送つて卓子のきはへ戻つてから、僕は浮かない風でぼんやりともとの位置にタウエルへ顏を埋めて居るナミに、やや皮肉に云つてみた。彼女のおとりまきの浮浪少年どもが一人も今夜は訪ねて來ないのだ。――彼女は卓子の一箇所へ意味もなげにつけた眼を動かしもしなかつた。僕はスリッパを落とした彼女の素脚が、すつかり最早湯上がりの血色をなくして、二つくッついて寒むげに椅子からたれて居るのを、卓子の蔭に見た。

宵の口にはいつも屋根裏の僕たちの居間は、裏梯子を傳つてこのところへ出入りをする、浮浪少年じみた社會主義者や、どんな主義を生んで居るのやらてんで見當のつかない、プロレタリヤ派の色んな自稱藝術家たち、――畫家や詩人や作家や、さう云つた連中が巣にして寄つて、アルコホルの匂ひと煙りと女の噂さと、ブルジョワジイの攻擊と、ヽヽのヽヽと、どうかすると血まみれた腕力沙汰と、さう云つたもので、日本の近世社會に斷然と彌漫しつゝある、かの世紀的な雰圍氣をかもし出すのだつた。

僕が仕事机に頑張つて、定規で線を引いたり、コムパスで輪をつくつたりして居る時には、彼等は寢台の枕元のナミの小さた丸卓子を圍んで、幾らか僕に氣兼ねさうに集會の相談をしたり、印刷物の草稿をつくつたり、ドア口までナミを呼び出してヒソ〳〵話をしたり、彼女を外へ連れ出したりするくらゐだつたが、僕が居間をあけると、僕の仕事卓子は勿論製圖の寢臺まで彼等に占領されて、いゝ氣にそこ等ぢゆうを引ッ掻廻されるのだつた。僕は日本の現在の社會的事情に、必ずし

も近世的なあのロシヤの歴史を繰り返すべき必然性は認めないが、過去の、、、、、どもがどんなにやッきに騒ぎ立てたところで、社會が彼自身の、、、、た歩みから、、、、、、をとどめ得ないことは信じて居た。また、云ふまでもなくわれ／＼プロレタリアートが來たるべき社會に於いて、ブルジョワジイの、、、、、、べきであることも！

僕は地球を遂に風靡したクリスト教も、嘗てはロマオの葬窖で、既成社會組織の凄慘な壓迫に血をもつて健氣に反抗した、あの宗教的情熱兒たちの不屈な鬪志によつて、世界布教の緒ちをつくられたものであることを思ひ出さずには居られないのだ！　ナミの小兒病にも、彼女をとりまく見るからにむさくろしいこれ等の浮浪少年たちにも、しばしば僕は十字架を負つた使徒の姿を假托した。膿み潰れたこの資本主義の社會から、この樣な、、の抽出されたことは、、、、、、、、が正當ではあるにしろ、何と奇蹟に類したことよ！　と。

僕は日本の近世社會が、、、、、によらない、從つて一層本質に沈潛した急カアヴを畫いた、、、、、をたどりつゝあることは、はつきりと感じた。僕は彼等が現在抱懷しつゝある社會主張をそのまゝ、、、、、、とを敢へてしてまで、、、さうと云ふほどの、社會事情の逼迫は認めないが、近世社會のこの健康な動きの底に、彼等の存在が如何に重要な役割りをつとめて居るかについては、積極的な理解と肯定とを持つて居たので、例へば僕の屋根裏のこの無作法なお客さまに對しても、いつもそれだけの溫たかい好意は拂つて、しば／＼ある程度の物資の援助をすら惜しまないで來た。が、ナミを通して彼等か、僕自身の藝術境地を脅やかされる樣になつてからは、僕は時に强硬な意志をもつて、彼等の主張の一部に敢然と對抗して、僕自身の立場を護らなければならない機會を持たされる樣になつたのだつた。

僕の藝術境地とは、言葉を換へれば僕の美感だ。僕が藝術家である限り、科學者が彼の智性を信じる樣に信じなければならない美感だ！　この美の否定は藝術家としての僕の否定で、當然それはまた社會生活者としての僕の否定を意味するのだ！

僕は尊敬すべきこれ等の友人たちと、しばしば美を論じた。美の起原を、その發展を、その推移を、──それ等の社會的根據を、イデオロギイを、未來への暗示を。しかし、僕の美感にそれがどう投影されたか？

微塵も！

僕はナミに云ふのだ。

「お前におれは美を感じる。それはお前自身には直接魅力として、おれの内部へは飜譯されて愛として投影する。お前の仲間はおれの美をいつも嘲笑する。が、これを美の否定と解するのは間違つて居るか？

……おれは云ふまでもなく今ははんぱな片端れにしか過ぎない！　誰もがさうである樣に。――來たるべき世紀には、おれはおれのはんぱを埋め合はせた、時代的により完成な一つの生命をおれのあとつぎに送り出して、おれ自身の社會的な存在を主張させなければならない。つまりこゝでは、美は、……おれの場合には少なくも要求だ。おれの內部にと、そして社會にと、缺けて居るところのものへの憧憬だ。あるひは擬的にもつと存在してもいゝ素質への要求だ。お前たちの云ふ樣に社會は推移する。どう推移するか？　恐らくお前たちの云ふ樣にだらう。時代の推移は要するに生命の前の一箇の宿命だ。社會科學が息せき切つてそのあとを追ッかけても、その必然は如何ともしがたい。だが、人類は、社會は、それなら全く意志を持たないものだらうか？　實に綠を追うて轉々する放牧の民なのだらうか？　否！……近世社會科學は經濟的機構こそ社會の基礎だと叫ぶ。然り、正しく！しかし、基礎そのものは決して建物ではないのだ。社會は口と腸ときりない食欲だけの我鬼ではないのだから。……社會は何を今日に、そして明日に求めて居るか？　それは識らない。おれはおれ自身の要求するものをこゝでは信じるほかはない。なぜなら、おれは社會の要求するものゝ一つを、あるひはその幾つかを背負つて生まれ出たのだから。それはおれの場合にはさしあたり、美にもとづくところの社會への寄與だ。それはしば〳〵美から抽象であつてもいゝ！……お前は社會學こそ美の指針たるべきだとおれに告げる。が、社會學への無條件な追隨は、この場合おれの個性の「無」を意味するに過ぎない。美の準據は實におれのうちにある！　云はゞ戀愛も同じだ。健康な醜婦よりも病弱な美女をおれが愛するとすれば、おれはおれの神をも賭けなければならない。つまり、おれが異端を愛するのは、このものから社會への訂正と、社會からのこのものへの訂正とに、社會生活の顚覆を求めようとするにほかならないのだ。つまりそこにおれは、個人と社會との對立的意義を認めるのだ。だから、如何なる地位にあつても、……おれ一人が社會から孤立しても、おれはおれの存在に切實な社會的意義を認めるよ。つまりおれ自身を、おれの美を信じるよ。一體、社會の集團生活にだいて、文化は社會生活の各々の分野の上にそれぞれ完成されて、それ等の個々が畢竟社會總體としての時代的文化を形成するのだからね。だからおれは主張するのだ。社會の集團生活は個性の沒却から出發すべきではなくて、極端な個性の主張から始まるべきだと。あたかも、われ〳〵の體細胞の複雜な有機組織が、それぞれの機能の個性的な完成によつて健全な生命を營む樣に、社會のこの大集團もまた、その組織の各々の分野の健全な個性的機能の完成と相互影響とによつて、合理的な生命を營み得るものだと。藝術は社會

生活での云はゞ興奮素だが、生理學に於いても、血壓に影響する興奮素と性欲に影響する興奮素とは異なるのだ。階級問題は近代人の常識に沈潜すべき最大關心事ではあるにしても、それだけが社會生活の全領域でない限り、藝術の視野はもつと廣かるべきなのだ。』

『しかし、』

と、わが尊敬する友人たちは駁するのだ。

『所詮君の美感はプロレタリヤイデオロギイの上に根生ひたものではない！ われ／＼プロレタリアートの目して敵とする、ブルヂョワジイの牙城に落日を浴びて輝やく美です。從つてそれは沒落の藝術です。』

で、僕は云ふのだ。

『君はプロレタリアートの、、は、社會の裏返しだと考へて居る。が、それは僕に云はせれば君たちのヒステリックな幻影に過ぎないのです。なぜなら、資本主義社會の、、とともに如何なる新社會が現出しようと、絶え間なく生活から剩餘を分離しようとする、人間本來の自然的傾向が失なはれる筈はないから。要するにこゝでは、生產階級と消費階級との對立が破壞されるだけで、個人が生產する勞働者であり消費する王者である理想社會が現出するだけのことだから。そして人類に附與された剩餘分離の本能は、十錢の消費のための十錢の勞働よりは、五十錢の消費のための三十錢の勞働を求めるだらうから。三十錢の勞働？ 然り。科學と機械とは二十錢はおろか五十錢の勞働をでも、怜悧に人類のために償なつてくれるだらうから。……假りにまた、ヒステリックな近世社會科學的藝術理論家の主張の如く、生活の內容の變化につれて全たく美が變はるとしても、それはその時のことで、さしあたりわれ／＼はわれ／＼の現在の美を、……われ／＼のうちに動く美の範圍を、信じるほかはないのです。なぜなら、われ／＼は科學者ではなくて藝術家なのだから！……從つて、僕自身の考へを云へば、僕の藝術が落日を浴びてゐる沒落の藝術だつたにしろ、藝術家としての僕の時代的な存在を主張して、社會人としての役割りを果たすためには、明日はかなくこぼたれるものであつても、僕は現在の美感の上に自分の藝術を完成させなければならないのです。無論、僕は心から階級的對立の崩壞を望んで居ます。僕は君たちの仕事にも一と言當て非難の口振りを漏らしたことはないし、むしろしば／＼自の懷ころに、社會的壓迫のもとにある君がたを、かばつて來たつもりなのです。が、敢へて僕は云ひます。僕は僕の藝術を否定は出來ない。なぜなら、僕は僕と僕の美とに矛盾を感じないから。……また、君がたの誰かの云はれた様に、ブルジョワジイの擁護による藝術の完成にも、僕は矛盾を感じない。社會文化は常に支配階級によつて建設

されて來たものであり、現在はともかく、われ〳〵は資本主義の社會に生息してゐるのだから。……要するに、僕は現在の瞬間を呼吸して居る人間で、現在を完成せしめるための社會的自負に生きて居る「藝術家」なのです。だから僕の信念を云へば、明日の藝術は明日の藝術家をして完成せしめよです。科學は人類文化の過程に不斷に動きつゝあるもので、そこには永遠に終止點はないが、藝術が各々の時代に個々の完成を持つて、社會史の褶曲多端な地層に化石を、古曲を殘して行くのは當然なのです。僕自身が明日の社會人でない限り、僕の藝術も明日の藝術ではないのです。僕が僕の戀愛からやがて明日の社會人を生むだらう樣に、僕の藝術がやがて明日の藝術を胎むでせう。どちらにしろ、僕自身に缺けて居るものを、より完全に補はれて。……だから僕の戀愛を信じる樣に、僕の藝術を信じて悔いないのです。』

『お前たちのお禮に說くところのものは、』

と、僕はナミに云ふのだ。

『マルクスとおれの美感とを兩秤にかけて、敵か味方かを宣言しろと云ふのだらう？　おれはマルクスをおれなりに理解した。さうしておれはつきりと云ふよ。おれはマルクスよりも「美」に於いてはおれを信じると。……お前はおれよりもマルクスを戀ひするのかい？』

『戀ひするわ。』

彼女は躊躇なく云ふのだ。

『が、……仕合はせとマルクスはお墓でとうの昔に腐つてるよ！』

『からだだけは。……』

さう彼女は冷たく云ふのだ。

僕の藝術はかうして彼女を通して、彼女の仲間から絶え間ない脅威を受けなければならないのだつた。僕は時とすると死んだカアル・マルクスに、時には彼の思想を崇奉する浮浪少年たちの仲間に嫉妬をした。そこではただ一つの光明が僕を慰さめるだけだつた。それは、ー―僕の藝術を罵倒しつゝも、ナミは僕の懷ころを、彼女の口調を借りれば、プチブルヂョワの饐え臭い僕の懷ころを離れないことだつた。晝となく夜となく、浮かされた樣に仲間とどこかをほッつき步いて來ては、夜更けには冷たくなつたからだを僕に抱かれて、温ためられた。僕は彼女の生命のうちにも、マルクスによつて掘りさげられた理なる理智の先きに、神祕な明日の豫言をきいた！

『あんたの己惚れもそこまで行きア、ドン・キホーテを笑へないわ。』

僕の今夜は彼女のこの嘲笑に對して、自制のない激しい拳を擲したのだつた。

『ナミッ』

僕は桃色のタウエルに裸かでくるまつて、何かしら未だ解けないあ

るものをもつて、卓子の隅に凝然と灯りを見つめて居るナミに、立つたまゝ云つた。

『おれは繰り返して云ふ様に、おれに對するお前の感情には干渉をしないよ。お前の仲間がおれを否定する様にお前がおれを否定しようと、おれには仕方のないことなんだから。丁度、……どんな意志をもつても、お前に對する現在のおれの感情を、端的に云へば愛情を、おれには否定出來ない様にね。……お前がドン＝キホーテだと云ふんなら、ドン＝キホーテでも結構さ。』

さうして、僕は彼女の細い肩をタウエルの上から揺すぶつて、

『とにかく、……おれの生活にまるツきり未だお前が愛想をつかして居ないんなら、そんならもう寢な。おれはこれから未だ仕事があるんだから。お前の口がさう云ふ様に、しんからおれを輕蔑してるんなら、おれはお前がそんななりでこの二月の寒む空に、これから出て行くと云ひ出したところで、引止める資格はないけれどね。』

彼女は涙の一杯な眼に硝子の様に灯りを映して、暫らくぢッとして居たが、やがてごく瞬間僕を見ると、

『寢るわ。』

と、蚊の鳴く様につぶやいて、——タウエルのまんましほ〳〵と椅子から立つた。

——僕が階下からホットレモンのコップを二つ錫の丸盆へ載せて持つて來て、アスピリンをオブラアトへ包んで、寢臺の枕元へ立つた時、ナミは羽根枕の艶やゝかな臙脂へ髪をたくためて、やゝ俯向きに華奢な蒼白い頬を埋めて、毛布の下で寒むげにからだをすくめて居た。盆の上にカチ〳〵と硝子の觸れ合ふ音がすると、彼女は頬を動かさずに涙の光る睫毛をちよいとあげた。

『藥をお呑み。』

『……？』

『アスピリンだ。お前は風邪を引くにきまつてるから。……起きないでもいゝ。口だけ開けな。熱つかないよ。二つとも呑むんだ。』

彼女が細い喉をコクリ〳〵と鳴らして居る間、僕は琥珀色の温たかい液體を、唐草のコップの中にかしげて居た。さうして、お盆を丸卓子へ戻してから、タウエルのはしで濡れた唇を拭いてやつて、懐ころから懐爐を出した。

『寒むいから今夜はお前にやらう。……どこへ入れる？』

彼女は枕にもつれた髪の中で顔を仰向けて、毛布の際からわづかに出した指先きで睫毛をこすつて、脚の邊を動かした。

『脚へ。……』

僕は毛布の下から手を入れて、たくたまつたタウエルの中で、冷い

やりしたすベッこい彼女の脚をさぐつた。さうして彼女の痛むところへ、――幾らか彼女は機嫌を直したかして、睫毛に涙を光らしたまゝ鼻からいたづらッぽく笑ひを漏らして、『もつと、、もつと。』などとふざけたりしたので、僕は和んだ感情で懷爐をそこへ置いて、タウエルによくそこ等をくるんで、毛布の隅を叩いた。

枕元のスタンドを消して仕事机に戻つてから、僕は口ばたへくッつした。いた冷たい彼女の涙を、はじめて手の甲でぬぐつた。

四

夜なかに、――恐うつゝの中で、何かなし僕は彼女のすゝり泣きの聲をきいた様な氣がした。さうして、そのまゝ暫らくまたウトウトして、ふッと襲はれた様に眼をさました時、いつも僕の寢間着の懷ころへ顔を埋めて、手脚をもつらして寢て居るナミが、腕に居なかつた。僕は人疎ましく冷えた敷布を隅々と隅までさぐつて、それから手を延ばして丸卓子のスタンドをともした。と、彼女の羽根枕の皺んだ白い被覆に、水をこぼした様な濕めッぽい涙のしみがい、眼立つた。突然、異様な不安が僕のからだを寒むけの様に掠めて流れた。僕はピヂヤマのバンドを閉め〳〵寢臺から起きて、床の冷えたスリッパへ足をおろした。暗い部屋はい、しんとして居た。冷却した深夜の空氣が埃を沈めて、水の様に冴えて張詰めて居た。

(何所かな？)

が、それにしても僕のこの不安は？

――仕事卓子へ灯りをともさうと窓ぎはへ寄つて、ふとそこに灰皿を錘にしてはしをたらしたいぶかしい紙片を認めると、僕ははッとした。寢臺の灯りにすかして眼をこゞめると、細いノオトの切れはしに、亂暴なペンの走り書きがたつた一行、

さよなら　ナミ

『莫、莫迦！』

紙片をいきなり眞ッ二つに引裂いて、僕は手應へのない空間へ力一杯に叩きつけた。何かしらい、あらしに似た戦慄した感情が、熱つ苦しくからだぢゆうを驅け廻つて、脚がひとりでに床に顫へた。僕は自然で自分の脚に強力な意志を強ひた。僕はけはしい息を抑へて灯りの中に深夜の居間を見廻してみた。――そこ等は整然として居た。感情的なこんなつきつめた破壊を殘して彼女が去つたあととは、どうにもとれない靜けさだつた。何一つ取り亂したものはなかつた。僕は氣付いて忙がしく寢臺の壁を見た。

(さうだ！　着物がない。マントも、そして、――)

こめかみの邊で血管がヅキ〳〵した。僕は何か口へたまつたネ

パしたものを、やめずに腹立たしく床へ吐いた。

露臺のドアにはかきがねがはづれて居た。外の鐵の勾欄には白く霜が凝つて居た。霧が消えて異様に冷たく冴えた闇の中に、街の灯りがむきだしにまたゝいて、層々と空を衝いたビルデングの群れが、重心をなくして眞ッ黒く空間へよりかゝつて居た。

硝子製の様に焼けた頭をかゝへて、僕は冷たく開け放つたドアロに立つた。

（莫迦野郎！――お前は結極いゝ氣になつて、何かに、誰かに誘惑されて居るんだ！　まるで正氣をなくして居るんだ！　熱病やみみたいに。――考へてみろ、お前に對しておれよりも氣を遣つてくれる者が、世間にあるかどうか。）

僕は床を横切つて、仕事卓子の引出しを抜いてみた。財布は暮れかた紐をくゝつて入れたまゝだつた。僕は寢臺の枕元の丸卓子の蔭へ顔をこゞめてみた。銅貨や白銅や銀貨を適當な數づつ彼女の小遣ひにいつも入れて置いてやる、桃色のセルロイドのペン挿しも、重心を底へ据ゑたまゝこともなげにひッそりと立つて居た。――僕はムシヤクシヤした髪を指でむしつて、兩手で頭を二三度搖さぶつた。僕は寢る前に風邪藥と一緒に彼女に呑ましてやつたホットレモンのコップが二つ、錫の丸盆にキラ〳〵と無感情に光つて居るのを見た。

『……畜生！　凍ごえッちまへ、溝ン中へでもよろけ込んで。……死骸になつて明日浮いてろ。そいつが貴様等の主義の末路なんだ。……見てろ。そんなけちな、ちッぽけな破壊と感情とで、この重たい層が動くか。……畜生！』

僕はしかし露臺から白く霜の凝つた鐵の階段を、スリッパを脱いで顫へながら降りてみた。石炭殻の塚に昨夜まけたらしい水が白く池だつて冴つて、僕の素足の底を鋭どく噛んだ。石の建物の裾はひッそりとたゞ暗かつた。

『死んぢまへ、ひと思ひに。……おれはおれで、また何か氣のきいた慰さめをほかに見つけらア。……畜生！』

僕は露臺へ戻つて、もう一度街の灯りから眞ッ黒く空へ浮いた宏壯なビルデングの群れを仰いだ。さうして、口ぢうから乾いた唾を舌でこすり取つて、やッとこさと指の頭ほどにして、それを空間へ吐きつけた。

『勝手に寢てアがれ！……冷淡に白ばくれアがつて、この眞ッ黒い怪物め！』

（さア、汝も寢ろ〳〵！）

部屋へ這入つて、――露臺へ忘れたスリッパをまたつッかけて來て、僕は僕の頭へきびしく二つ三つ拳骨をくらはした。

（男らしく運命を容れるんだ！——子供に毛の生えた様な女の一人二人が何だ！——くだらん運命なんぞドン／＼默殺しッちまへ。寢ろ寢ろ。そして明日は勇ましくまた仕事にかゝれ。——仕事だ仕事だ。それがおれの生活の全部なんだ！）

が、——僕は床の紙片れをもう一度拾つて、裂けた二枚を合はせてみた。

さよなら　ナミ

『畜生！……これが十三の年から獻身の愛を運んで來たおれへの、最後の挨拶なんだ！……こん畜生！　八ツ裂きになつて』

と、僕はちぎれるだけこまかく引きちぎつた紙片を、更にクシヤクシヤと手のひらの中でまるめて、指が痺れるほどそれを床へぶツつけた。

『コッちからさよなら！　だ。……』

冷えたからだを寢臺へ轉がして、二人分の毛布に分厚くくるまつて、枕へ顔を伏せると、鋭どい悲しみと空虚な淋しさと、どこへとも向けやうのない口惜しさとが、あらゆる意志の制御を押破つて、潮の様に胸の奧底からこみ上げて、涙と一緒に氾濫し出した。僕は涙に滋めつた彼女の枕を、彼女を抱く様に抱締めたまゝ、ありッたけの嗚咽を熱つぼつたくその中へ籠めた。——僕は幾度も枕覆ひの乾いたところへ顔の位置を換へた。僕はしかし淋しかつた。僕の感情はあらゆる冷たい理智と意志の重壓の下で、とめどなくすゝり泣いた。

（藝術をうッちやつて女を得るか、女を棄てゝ藝術を護るか。——）

（しかし）

と、僕はまた考へるのだつた。

（今夜のあいつの行爲は、そこまでつきつめた意志的なものだつたんだらうか？——ほんの彈みからの、一時の感情が根になつてるのぢやないのか？）

僕はあはたゞしく毛布をからだから剝がして、素足を冷たい床へおろした。さうして、天井の灯りを眩しくともして、爐の傍の彼女の衣裳トランクの蓋を開けてみた。溺愛の中で金の糸目なく買つてやりやりしたさま／＼な彼女の衣裳が、二つのトランクから溢れて、わびしい色彩を僕の眼の底へ擴げた。——中味はどちらもきちんとして居た。彼女は普段着のまんまこの夜更けに出たらしかつた。

僕は埃の積んだ槇氏の石膏の胸像へお尻を載せて、ピヂヤマの中で寒さに顫へながら、ぼんやりトランクの中の冷たい彩どりに見入つた。——僕はまた立ち上がつて、埃ッぽい髮をむしり、さうして、腫のわびしい自分の影を見た。

（仕事だ！）

僕は元氣さうな顏を、窓ぎはの仕事卓子へやつた。

(おれはこの苦惱から、意地にでも力一杯な藝術を生んでやる！　糞！　このくらゐのことで、おれの藝術地盤へ罅が這入るか！)

僕は意味のない眼を、寢臺の枕元のナミの小さな丸卓子へやつた。蠟燭形のスタンドの黄色い擦硝子のシェードには、キュウピイの顏だの、へのへのもへじだの、ロオマ數字の計算だの、彼女のペンのいたづら書きが幾つも殘つて居た。

僕は種子壺から匐ひ出して輪がたに床へたくたまつて居る、林檎の皮の紅色を見た。夕御飯のあとに調理室から彼女がねだつて來て、齒齦ににぢんだ、の痕をそのまゝ、喰べかけを半分僕に分けてくれた林檎の皮の、テエプの樣にしなやかに床に匐つて居るのを。

僕は床の隅の白熊の毛皮を眺めた。眼へかぶさつて搖れる髮を邪魔にしい／＼、床を匐ひ廻つて彼女が敷いた一と坪ほどの毛皮の白線の、ところまだらに薄れて居るのを。

僕は寢臺の脚へからまつて床へ落ちて、けものの樣にまるく膨らんでたくたまつて居る、桃色の浴用タウエルを見た。湯上がりの彼女の體温が、未だもの倦ましくそのまゝ籠もつて居さうな、その柔らかい一と塊りの布地を。――

さよなら　ナミ

(あいつはしかししんそこからの決意で、この挨拶をおれにぶツつけて行つたんだらうか？――何事もなげなこの部屋で、おれたちの生活は、しかし、永遠に最早壞されてしまつたんだらうか？)

僕は視野の融けた眼から淚を拭いた。

僕は床を横切つて、カアテンをしごいて、出窓の温室を朧ろな灯りに覗いてみた。と、しやぼてんの鉢が、思ひがけない二十以上も空になつて、亂暴に引抜かれたあとに砂土が散亂して黑く濕めつて居るのを發見して、はツとした。

何かしら空虛な絕望が、僕の萎れた心の底へ灰色に擴がつた。――

五

翌る日の暮れかた、僕はぼろ屑の樣に疲れきつて埃にまみれたからだを、江戸川べりのたそがれどきを走る電車のクッションに、搖さぶらして居た。一日朝からタクシイを飛ばして、何かと用事にかこつけては、心あたりと云ふ心あたりを、僕はナミの消息をさぐつて歩いた。さうして、一切が思ひがけない失敗に終はつたのだ！　――都會生活にしん髓から浸かつて、裏も表ても見通したと信じて居た僕に、この大都市が今日くらゐ底知れない貪婪な胃袋をもつた怪物の樣に映つたことはなかつた。街路も建物も公園も橋もホテルもカフエ

も事務所も、一人の人間の感情などには風の樣に無關心な、たゞの生活の渦だつた。こゝでは一人の娘が彼女の生活を破壞して姿をくらましたぐらゐの出來事は、云はゞ澎湃たる大河へ小石を一つ投込んだも同樣だつた。

——新聞社では、メカニズムのお化けじみた輪轉機が、凄まじく油を飛ばして、世界ぢゆうへ擴がつたいらだつた神經網の眞ン中で、人殺しも、の、、も、急行列車の衝突も共産黨の檢擧も、マニキンガアルの妖婦面も議會の鐵拳騷ぎも、インクの匂ひを渦卷かして活字を踊らせて居た。鑛物工場では石炭色の皮膚をした勞働者たちが、資本主義の搾取に浴びる樣に汗をかいて、近世機械文明を產み出す硫氣臭い熔爐のぐるりに、紫色の火花を浴びて居た。カフエでは造花じみたアメリカニズムと鐵の塊まりの樣なマルクシズムとが攪拌されて、このカクテルモダアニズムの風味を、舐べ、その軋む樣な埃ッぽいジヤズの中で、髮の長い男と髮の短かい女の口が稱美して居た。プロレタリヤ派の人氣作家は、宏壯な新築の邸の玄關に、愛人らしい斷髮の美女をタクシイに待たせて、勞働爭議の小說の悽慘な結末に、忙がしく書齋でペンを走らせて居た。ペエヴメントはラッシュアワアの洪水に押し揉まれて、交通整理のサイレンが十字路の眞ン中で、とうの昔に聲を嗄らして居た。——

僕は埃ッぽい髮をメキ／＼と軋んで搖さぶれる窓硝子へもたらしたまゝ、頭の中に未だ渦卷いて居るこれ等のめまぐるしい一日の印象から、呆然と自分の疲勞しきつた感情をうッちやつた。

（おれの懷ころをかうして逃げ出して、さて、いらだたしいめまぐるしいこの社會のどこが、一層居心地よくあいつを抱いて行けるだらう？）

僕は煤けた睫毛を埃ッぽい手巾でこすつて空虛な眼を窓の外に流れるたそがれの街並みへやつた。廣漠たる灰色の渦卷きがそこにはあつた。あらゆる彩どりと形ちの流動が、そこでは眞空の中へ空虛な饒舌を籠もらして、鳴りどよめいて居た。

僕はナミの搜索そのものについては、未だ全く失望はしなかつた。この大都市は未だ僕にはその意味でくみし易い氣がした。また、僕は僕たちをこの樣にして決裂させた思想的なギャップについても、絕望は感じなかつた。僕は理智を信じる程度には感情を信じられる人間だつた。だから僕は僕たちの愛の根據に信頼が出來た。

——僕の淋しさは、云はば現實の空虛からもたらされるものであつた。さしせまつた今夜の、彼女の居ない屋根裏の生活すら、僕には想像が出來なかつた。そこでは彼女についてのすべてが、未だ現實の存在だつたから。僕の愛情の中で貞操を識らずに育つた彼女は、また

よそから愛情を強ひられることも識らなかつた。だから彼女はある意味で、心もからだも僕のかけらだつた。唇は云はば僕の唇と隙間なく合ふために育び、胴は僕の腕に合つて適度にくびれ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。彼女の生活へのマルクスの侵入にすら、僕は僕の内部に朧ろな肯定を感じたくらゐだつた！

僕はがらくたな電車のクツシヨンにからだを揺すぶられるたんびに、睫毛の内側に強よい意志で涙を抑へた。僕はポケツトを膨らました設計圖の紙束を抜いて、一枚々々膝へ散らしながら、自分の氣持ちをまぎらはす樣に、ありツたけ大きく見ひらいた眼で、繪硝子の圖案を眺めた。

僕は腕の大きなクロオム皮の時計をちよいと覗いてみた。

（夜になつたら若しかすると、——）

萎れた花が暮れかた起きかへる樣に、微かな望みが疲れた僕の中に頭をもたげかけて居た。

（あの階段をコツ〱と遠慮深くのぼつて、ドアの隙から自分の感情を恥かしげに、かたかたの眼を覗かせるかも知れない。長い睫毛にピカピカと涙をくツつけて。——）

ヲツシユアワアの滿員の電車と絶え間なく擦違ひながら、車室はがらりと鐵色のクツシヨンを、ともつたばかりの灯りの下へ擴げて居た。

釣革へたれた白いセルロイドの輪か、凄じい車體の動揺と一緒に、齊にキラ〱と大きく波打つて、窓には灰色の街並みが一とつらなり……に燈火を後ろへ飛ばして居た。僕は膝から散つた設計圖を一枚こ〻ん……で拾つて、クツシヨンの上でふとよろけた。

（どのみち、自分の感情的な行動の結果にあいつが失望をするのは、……眼に見えてるんだから。——）

そこまで行つて、突然僕は冥想を斷たれた。座席がゴツン！とお……尻を彈き上げて、齒の碎けろ樣な異常なシヨツクを僕は全身に感じ……た。運轉臺の正面へ遠くのびて居た街並みの淡い灯りが、急激に輪を……かいて右へ廻つて、熾烈た火花が蒼く空間に閃めくと、天井の灯りが……一齊に消えて、燈火のきらびやかなかたかたの家並みが、だしぬけに……正面へ迫つて來た。

（脫線だな！）

疾風の樣に接近して來た電柱を前に、必死とプレエキへかぢりつい……た運轉士の、うろたへた姿を認めた瞬間、僕は反射的にしかと座席へ……兩手を張つて、身構へをした。——車臺が倒れさうに二三度激しく左……右へ搖さぶれて、メキ〱と軋んで、異常な緊張した動揺が乘客たち……の間へ起きた。

正面の硝子が激しい紫色の火花と一緒に、粉々に碎けて飛んだの

を見た。運轉士の黑い姿がフッと吸はれる樣にどこかへ消えた。凄じい破壞的な衝動に全身を擊たれた樣な氣がしたが、やがて、——ふと、けたゝましい赤ン坊の泣き聲をきいた。

僕は折れ重なつてうごめいて居る乘客たちの中から、自分で起き上がつた。座席からは一間もはすに前へ飛んで、歪んだ金網をからげた、ニスの光る裂けた材木の下に、他の乘客たちと一と重なりになつて居た。——崩壞した灰色の石垣が、つひ眼の前に、折れた太い電柱を背負つて眼についた。

『お怪我はありませんでしたか? どこかお怪我は。……』

額から一と筋血をたらした眞ッ蒼な顏(多分車掌か何ぞだつたのだらう。)が、僕を覗き込んで、肩を搖すぶつて、せはしく聲をかけた。僕はその聲を非常に遠く聞いたが、それでもしッかとした口調で、

『いゝえ大丈夫です。』

と、頭を振つた。さうして、僕の下から起き上がつた三十ばかりの女の人と薄暗がりで顏を合はせて、意味もなくたゞ笑つて、不意にその顏を闇に見失なふと、——そのまゝ意識をなくした。

——熱つ苦しい暗黑の中に、赤い弧線のきれぎれが夥だしくはね返つて、錯綜して、それがウザ〱するこまかい綿の漂漾をたして、羽搏いて居た。虛空がさかさまにそこへかゝつて、ズンズンズンズンズンと頭へ血が溢よると、寂しい闇を曳いた小さな渦が、幾つもクル〱とそこ等を飛廻つて、段々とそれが溺れて行つた。さうして、その底から星の樣に深山の燈火が瞬たき出て、ザワ〱した人の氣配がうるさく耳のぐるりに高まつた。

『そッちを持つた。……』

『よし來た!』

誰かの聲が夢の樣に遠く小さく響くと、血の樣な赤い靄が闇の中に流れて、脚が空へ突き立つて、紺硝子の聯絡から綠色の鵞鳥が、幾つもスイ〱と滑めらかに、虛空を驅けつて流れた。

——眞ッ暗い街通りの屋根に、銅版色の空がポッと明るくゝゝまを描いて、僕はトボ〱と頭の充血を氣にしい〱、ひどくからだを片側へかしげて步いて居るのだつた。空間にでもよりかゝつて居る樣に。

——暗い角を廻るとだしぬけに、額を髮に隱らしたナミが、闇の裳を後ろへ曳いて、わきから僕に飛びついて來た。彼女はしなやかな腕を僕の頸へからめて、何かしら堪へ難い孤獨と淋しさをすゝり泣きに訴へつゝ、蛇の樣に執拗にそこ等ぢゆうへ脣を押しつけた。

斬られる樣な銳どい悲しみに僕はゾッとして、激しく淚におせびながら、彼女の暗い顏を切手の樣にしかと闇へ貼りつけるのだが、すぐにそれは尾を曳いた渦にたつて、迷ひ兒の樣にどこかへ消えてし

ふ。──

巨大な暗黑の空洞の中で、熱つ苦しい騒音がおどろ〳〵しく鳴りどよめいて居た。闇が先きへ行くほどすぼまつて曲りくねつて居るので、僕はからだを段々と小さくねぢの様に廻されて、小さく〳〵針のめどほどにすくめると、そこから闇が少しづつほころびて、花びらの様な明るみが、朧ろに眼の前へ擴がつた。──

霧の中に四角い窓硝子が、靜かに浮いて居た。

『よし！……』

小さくはツきりと誰かゞ云つた。

『一寸そのガアゼを。』

別の聲が遠くで續いた。

──澤山の跫音がそこ等に錯綜して居た。意味のとれないヒソ〳〵話や、チリンとかカチリとか云ふ金屬や玻璃の觸れ合ふ音が、その間を縫つた。僕は額にネバ〳〵と汗を感じた。何かふくれないしつこい塊まりが、僕の心の底にわだかまつて居た。僕は時折身慄ひする様な空虛な淋しさに襲はれては、ゾクゾクと寒むけが走る様にからだを顫はした。熱つ苦しいつかへが胃の邊からこみ上げて來ると、僕は強よく睫毛をしかめて、涙のたまを水銀の様に頰へ轉がした。

壁の艶やゝかな白いタイルには、天井の灯りが映つて居た。塗りの白い硝子戸棚が幾つもそこへ並らんで、硝子や金屬のさま〴〵な器具が、灯りに涙ツぽく光つて居た。白衣をまとつた見識らない男や女が、しきりなしその邊に影の様にうごめいて居た。

──紫色に澱んだ空氣の中へ、黑いこまかな渦が幾つも羽搏きをして寄つて、段々とその數が殖えると、白い窓も灯りを映した壁も、鱗を透かす様に不確かになつて、そのまゝ暗い霧の奥へまた形ちを消してしまつた。──

『吸入！ 急いで。……』

遠い遠いところで誰かの聲がせはしく叫んだが、それツきり空洞の熱つ苦しい騒音に、それも呑まれてしまつた。

──乳色硝子の簡素な電燈の花がさを、平坦な白い漆喰の天井に僕が仰いだのは、それからどのくらゐたつてか。時折耳元へこまかく傳はる地搖るぎを、窓からさして遠からぬ通りをよぎる電車や自動車の響きだと氣付いた時には、僕は僕をとりまくよごれた漆喰の壁に、外科病室の藥と硝子の匂ひをはツきりと嗅いで居た。と同時に、電車のあの出來事の朧ろな記憶が、──その先きへ擴がつた屋根裏のあの夜のいきさつの記憶が、途切れ〳〵に甦つて、斷たれた脈絡が綴られて來た。僕は何かなくしものでもさがす様に、眼だけを動かして自分のぐるりを見廻してみた。と、思ひがけない看護婦をとりまいた

壁や窓硝子の明るみを背に、それぞれの位置から僕を見つめて居る幾つもの見慣れた顏、——槙氏や磯村氏や、調理室のS・さんや、さうして、おゝ！　ナミ自身の顏をさへ見出だして、ふッとけはしく息を切つた。

——何かしら熱つ苦るしいものが腸にからまつて廻つたので、僕は身動きをしかけて鋭どく顏をしかめた。僕はけはしく高まつた息を自分で強よい意志で抑へた。毛布の外へ手を出さうとしたが、それはすぐに何か堅い骨の樣なものにつかへて、冷いやりした柔らかいものが指先きに觸れた。氷嚢か何ぞが幾つもそこ等にさがつて居るらしかつた。僕は睫毛の間から涙の粒を強よく頰へ絞つて、涙に融けた視野の中にもう一度彼等を見廻した。さうして、その眼を最後に窓を陰らしたナミの顏へ移すと、彼女は陶器の樣に蒼ざめた頰へ一とすぢキラキラと涙を光らしたまゝ、なかば怯えた刺す樣な視線で、瞳の奧から僕を見据ゑて、ひとりでに椅子からからだを立てた。

誰もだまつて居た。臨終の寢牀をでも圍んで居る樣な暗默な緊張がその底にあつた。僕の眼の中へ友情的な温たかい微笑みを投げた槙氏さへ、何かまた沈鬱な表情に返つて、そのまゝ感情を凝固させてしまつた。

ナミは昨夜（？）屋根裏を出たなりのまゝだつた。紛紫褐多の眞ッ赤に散らばつた褪えた彼女の普段着の友禅を、屋根裏での樣に親しく温たかく僕は見た。僕は彼女のからだに何かもの悲しい疲勞を感じた。感情に凍ごえた濡れた蒼白い頰にも、紅の乾いて皸割れた唇にも、繊い腕にも、幾らか未だ子供らしく華奢な肩にも、僕は偽はりのない彼女の心持ちを感じた。——が、それにしても、どうして彼等はこの出來事を識つたのだらう。特に、どこから彼女はこの變事へ馳けつけたのだらう。一體こゝはどこなのだらう？

僕が寢臺の錆びた鐵の手摺りのところで、彼女の冷たい柔らかな指を、心からの愛執をもつて弄ぶと、彼女は俯向けた睫毛に涙を光らしたまゝ、小さな唇をわざと子供の樣に道化て尖らかして、わづかに意志的な甘えた微笑で、口端を脇に吊らしてみせた。——改めて何を彼女からきく必要もなかつた。心から心へと僕たちの氣持ちは拘はりなく通よつて居る樣な氣がした。僕は彼女と柔らかく指をからめたまゝ、異常な重壓で押しつけられて微動だに出來ない自分のからだの先きに、自分の脚の存在を意識して、わづかに自由な爪先きの觸感を、何かしら樂しいものゝ樣に毛布の下で弄そんだ。

「お心持ちはいかゞでございまして？」

見識らない白衣の女が、指へからげたガアゼの先きへ、輕く僕の唇から涙を吸はせながら、輕くわきから身を乘り出して耳へささやいた。

『喉がお乾きになりませんか？』

——僕は彼女の手の細い硝子の吸呑みから、針の様にこまかく泡の立つ炭酸水の刺戟を、ネバ／＼と熱ッぽい口へそゝがれながら、その瞬間不思議にのび／＼とあらゆる感情から解放されて居た。電車の事故以來どんな風にして自分はこゝへ運ばれたのか、あれからどのくらゐ時間がたつて居るのか、さしあたり自分はどんな状態に居るのか。そんなことから氣にはならなかつた。

僕は僕をとりまく幾多の友情溫い視線に溫たかくくつろいで、枕の上に樂々と頸を廻して、頭の向きを換へてみた。——カアテンの隙から燻れた硝子を透して、遠く高臺へ傾斜して行く見識らない街の家並みがそこから覗けた。化粧煉瓦やコンクリートの壁に陰氣に窓を覗かした建物の群れが、紫ばんだ霞の奥へ距離を遠めて、その間を綴つたバラック風の低いとたんの屋根も、埃をかぶつたまゝ春めかしい陽に射られて、焔の様にかげろふを燃やして居た。アスファルトの平坦な通りが、傾斜に沿つた家並みの間に坂がかつた輪を描いて、磨きの艶を白金の様に陽に輝やかして、行人の雜鬧を蟻の様に小さく黒くうごめかして居た。あらゆるものが大きな空虚を抱いて、それで居て陽氣だつた。風も、陽の光も、建物も、行人の群れも、絶え間ない巷のざはめきも、何かしら空虚な淋しい影を曳きながら、明るく生き生きとして居た。嘗に、街へは今や三月が訪れようとして居るのだ！

僕は窓硝子が時折明るく風に揺さぶれる、變にひッそりした部屋の空氣で、ふと、何か賑やかしい、形ちのない希望をどこかに感じて、動けないからだの先きに、また自由な足の指先きの感觸を弄そんだ。何かしらうづく樣な愛着をその小さな自分のからだの一部に意識しながら。

——完——



大地

里見弴

六の一

いゝ按配に小野田の上京に先だつて、番町の貸家の方もあいたので、二家族同じ日に、北すべりの丘の中腹に建つたうちを引き拂ふことになつた。小野田の方へは、大勢若いお弟子たちも手傳に來て、嚴丈に荷造された世帶道具が、遠い大阪へと積み出され、昌造の方は、トラック一臺あるかなしの荷もむきだしのまゝで、つい六七町の見附うちへ運ばれて行つた。その混雜のなかで、小野田は、昌造の好きさうなものだ、と云つて、會津の方とかで出來る丈夫な生半紙を、あつただけそつくり讓つてくれたりした。

疊數にすれば十帖ばかりも狹くなつたわけだけれど、久振りで昌造も、我が家と呼べるものが出來て、いくぶん落ちついた氣持になれた。新聞や雜誌の、地震前からの續きものゝほかに、日々の短い仕事まで、頼まれるだけは片つ端から書いて、書いて、書きまくつた。さうでもしなければ生活のたてやうもなかつたし、それに氣持にも張りがあつてか、わりあひ樂に筆が捗つた。推敲の跡で、めちやくになる原稿を、そばから

そばから千葉に清書して貰ふ、といふ方法で、少しでも時間を節約し、机を並べて、三日四日ぶッ續けに夜を徹するやうなことも珍しくはなかつた。

その代り、一旦仕事にきりがつくや否や、鐵砲丸のやうに飛んで出て、その時々、どこかしらで瑛龍と落ち合ひ、あてもなく山の手の靜かな町々を逍遥ひ歩いた。坐り込んでゆつくり話すやうなことは、適當な場所もなかつたし、氣持にも、誰に對してともない遠慮のやうなものが感じられ、また敢てそれが望ましもなかつた。よく喋り、よく歩いて、快い疲れが來る時分に別れる、——二十歳ですらめつたにやつたことのない、この、謂はゞ第一課的なあひゞきが却つて樂しかつたのも、全く地震のおかげだつた。華美好きの瑛龍が、引ッ詰髮に、黒ッぽい着物をき、昌造も、夜更の風の身にしみる頃が來て、まだ外套一枚造れなかつた。摺れ違ひざまに、黄色ッぽい聲をたてる職人の群が、「なアんだ、いゝきようでえか」と興をさまして行つたことさへあるくらゐで、はたから見ても、路上の逢瀬が、丁度ふさはしいほどの風態でもあつたのだ。

十一月にはいつてからは、けれども、市ケ谷の監獄裏に貸りた瑛龍の住居から、妹夫婦、叔母たちが別になり、表町のお目附役たらうと云つてゐた女中も、注進するならするがいゝと、たかをくゝる氣になつて、三度に一度はあがり込んで夜を更したりした。地震前にも二三度行つたことのある、吉祥寺の靜かな部屋まで遠ッ走りをするやうな時には、仕事の道具を風呂敷包にして、大事さうに抱へ込んでうちを出た。

前年の歳尾から書きだして、地震後暫くの休刊を除けば、丁度足かけ年といふ、長い新聞の續きものも、やつと終りに近づいて來たので、息ぬきがてら、高部に逢ひに京都まで行つて來ることにした。もともと高部は壬之助の友達で、六つも年齡は違つてゐたが、昌造から云へば、これほど緊密な、これほど纎細な、これほど適變した交情といふものは、異性との間でも覺えがなかつた。唯一の友と云つてもいゝくらゐだつた。それが、表面の現れとしては、ほんの些細なことから義絶して、この春まで、丁度七年間、眞に畏友と云ふに足るべきものなしに過して來たのだ。春からも、互に地を隔てゝ住んでゐるために時折の文通が開けただけで、顔を合はせたのは、正月號の仕事で、昌造が、分秒も爭ふほどの忙しさの最中、たま／＼上京して來て、瞬壬之助のうちによつた時、晝飯を共にしただけで、まだゆつくりとは話してゐなかつた。それで思ひたつた京都行きの企を、瑛龍に話して聞かせた。

「どうだね、彼方でなんかほしいものはありませんかね？」

「さうね……」

伸子がうかない顔つきで「もう少しさきに延ばせないの？」

「なぜ？」

「なぜでもないけど、……いつだつたかも、あたし、手紙でさう云つてあげたでせう？——當分、成可く旅行はなさらないでくださいつて」

「さうだつたつけな」

「あら、憶えてないの？」

「然し、なぜ旅行をしちやアいけないのか、その理由も云はないで……」

「理由つてほどのこともないのよ。でも、たゞお友達に逢ひにいらつしやるだけなら、もつとさきによつてだつて……」

「をかしいなア、どういふんだらう」

「まアいゝわ。ぢア、あなたのいゝやうになさいよ。折角樂みにしてゐらつしやるのを、無理に止めてもわるいから……」

「だからさ、理由を……」

「理由はね……。まあいゝわ。行つてらつしやいよ」

「へんだなあ」

「いゝえ、なんでもないのよ。たゞね、あなたがゐないと、お宅が淋しいでせう？」

「なんか云つてらア。うちをあけるのは、いつだつてあんたと一緒ぢアないか」

「でも、それア、東京うちならいゝけど、旅行つてことになると……。世間だつてごたついてる時だし……」

「そんなこと……、なんでもありやアしないぢやないか」

「さうね。でも、成可く、……一ン日でも早く歸つていらつしやいね」

「よしきた」

簡單に昌造は、それを、瑛龍の、一人とり殘される淋しさが訴へられてゐる言葉と解した。「そいで、お土産、なんにしよう。矢つ張り着るものかな？」

「さうね、キッドの手袋と襟巻、……あの、黒くつて、ぴかぴか光る、……シールつと云ふの？」

「いやにハイカラなものばかりなんだね。なんかもうちつとかう、日本風の店へはいらしてくれよ」

「ぢアね、……京都ね、……あゝ、都の花」

「今度はまた、馬鹿に安いもんになつちやつたんだなア」

「そいぢアと、……あゝ、お人形がいゝわ。ちやんといゝ着物を着

て、足袋はいて、カタ〱いふの。ボク〱いふのは駄目よ」
「なんだい、カタ〱だの、ボク〱だのつて、なんのこつたかちつともわけがわからないぢアないか」
「いゝねえ、いゝ人形は、手や足がぶつかるとカタ〱いふわ。ボク〱したやうな音のするのは、安物で駄目よ」
「要するに、一番いゝのつて云へばいゝんだらう？」
「まアさうね。……それから、新京極に行つたら、箱。押繪の姉様がついてる、一貫張りの箱があるでせう？　あれ」
「そんな古風なもん、今時賣つてるかしら」
「あることよ、だいじよぶ。……それからね、……なんでもいゝわ、赤いもんなら。澁つ紙みたいな感じの、加島好みのものは一切お斷りよ」
「よし〱。……えゝと、キッドの手袋に……？」
「とても憶え切れさうもないわね。いゝわ、書いといてあげるから」
二十五日になつて、大阪と京都との間を忙しく往つたり來たりし、折角のあての高部とも、今度もゆつくり落ちついて話し込む折がなくて、三十日の朝には、もう歸つて來てゐた。日當りの緣側で、荷をほどき、土産物をより分けたりしてゐるところへ、おしげが來て、二言三言用の口を利いたあとで、ひとやま別にしてある紙包を眼で指して、
「それ、市ケ谷行きですか」
「さう」
強いてつくつた笑ひ顏で、
「お午つから、お出かけなんでせう？」
そのために歸つて來た、先約の用事を云つて、やゝ突慳貪に、
「お前だつて知つてるぢアないか。今日は行けやアしないよ」
「ぢア、お使ですか」
部屋のなかで、厚袍の背を丸く、火鉢の上に新聞を擴げてゐた千葉が、昌造の答に先んじて、
「僕でよかつたら、行つて來ますよ。どうせ、午ッから、あつちのへ行く序がありますから」
「別に急ぎもしないんだけれど、ぢア賴むかな」
「えゝ、よござんす。行つて來ませう」
「ちよいと、千葉さん」
おしげが呼びかけて、「すみませんがね、三疊の押入に、こないだの物がはいつてますから、ちよつと持つて來てくださいな」
「こないだの物つて……？　あゝ、さう、わかりました」
三疊の方で、がたことといはせてゐたが、

「えゝと、どつちです？」
「さうね。……まア兩方とも出して來てみて頂戴」
ボール箱を、二つ重ねて持つて來た時、ふと氣がつくと、千葉の着てゐる八端の厚袍は、お客用に、と云つて、つい近頃、おしげが、自分の普段衣織から仕立直させたばかりのものだつた。客と云へば、千葉も、客でないわけではなかつたが、この頃では殆ど毎日欠さず顔を見せ、昌造の仕事が忙しくなつてくると、五日も六日も泊り込んでゐる、といふやうな具合で、きまつた給金とは云へないまでも、時々の禮もしてあるのだし、別にさう鄭重にもてなす必要もないわけだつた。殊に、もの惜みの強いおしげの性分としても、仕立卸しのお客用を、通ひの書生と云つてもいゝくらゐの千葉に、むざ／＼と着汚させてゐるのが腑に落ちなかつた。それとて、（おや？　珍しいことがあるもんだな）の程度で、不愉快とかなんとかいふやうな、そんなはつきりした氣持を喚び起して來るほどのことではなかつたが。
取りつけの、下駄屋の名のはいつたボール箱の蓋を取ると、おしげは、緣板の上に二つ並べて、ずいと突き出してよこした。
「おこうさんに、お歳暮をあげたいと思ふんですけど……」
初めは、昌造の親しい者、――お民、三平、愛香などの間にだけ通じる隠し名だつたのが、いつの間にか、まるで本名のやうに行き亘つて了ひ、おしげでさへさう云つて呼ぶやうになつてゐたが、然し、二人の間に物のやりとりなど、曾て一度もないことだつた。
「どういふんだい、一體それア」
ちッと見詰られて　おしげは　含羞んだやうな笑ひ顔を反けたが、
「別にどうつてこともないんですけど、……でも　いけなきやアよしますわ」
「別に、いけるもいけないも、そんなこたアないがね……」
女房の心を計りかねた昌造は、そんな風に、曖昧に云ふよりほかなかつた。――春江の時分には、おしげもいろ／＼聞きたがり、昌造も　いくぶん聞かせたいくらゐの稚氣もあつたものだが、今度は、聞かれて出鱈目は答へなかつたけれども、そんなことが度々話題にのぼるやうな　一種のねばりけは、いつかもう夫婦の間に失はれてゐた。
だから、おしげは、瑛瓏といふものについて、多く知るところがない筈でゐながら、それがまだ廻り廻つた話で、存外昌造の知らないやうなことまでも知つてゐた。と云ふのが、昌造の、小學時代からの舊友、津田の細君とおしげとが、大の仲よしで、始終往き來してゐたが、その細君の故家方の親類の一人に放蕩家があつて、以前瑛瓏を贔屓し、時には自宅へも聘んだりしてゐたとかで、そこの夫婦の印象、觀察をとほつた瑛瓏の噂なるものが、折々おしげの耳へはいつて來る

わけだつた。それに依る瑛龍の特徴は、彼の女を知つてゐる人の十中八九までが云ふ通りで、何よりまづ一番に利口といふことだつた。それも、利害の打算に明かな、從つてあまり人情のない、といふやうな、よくない意味をよけい含んで利口さだつた。それから、土地一番、と云ふより、その頃では、東京一と云つてもいゝくらゐ大きくやつてゐた興行者家の養女で、だいぶ金もあるだらうし、自然氣位が高く、相當位置名望のある人間でなければ洟もひつかけない、——そんな風な女と考へられてゐるらしかつた。また、關係のある男の數も、大河内三郎を始め、とても昌造の知つてゐるくらゐの數ではきかないやうに云はれてゐる風で、やがて昌造も、その頭數を一つ殖しただけのことに終るだらう、といふのが、口に出して云はないでも、話の結論にはなつてゐるわけだつた。一つはこの拔道があるために、おしげも、良人の前に、さう屢々瑛龍の名を持ちだす氣がなかつたのだらう。——と思はれる理由は、二人の間に文通が開けて間もなく、鍵といふものを一切必要としない昌造の書齋で、留守中、おしげと、親友の節子とで、瑛龍からの手紙を讀んでみた、といふ話もあるくらゐで、いかにねばりけがぬけたとは云へ、女房として、まだそれほど無關心にもなれないわけだつた。

　そんな具合で、瑛龍といふものに對するおしげの感情は、——遂には良人も捨てられるだらう、といふ豫想を除くほか、決していゝ方へ向いてみやうとは思はれないのだが、それにも拘らず、突然歳暮を贈りたい、と云ひだしたのだから、昌造の面食ふのも無理はなかつた。

「それア、お前が、やりたいと思ふんなら、それを俺が止めるつてほどのこともないが……。然し、どうも解らないなア」

　千葉が、火鉢の前から、首だけ振むけて、「別に、あなただつて、これつてほどの意味があるわけでもないんでせう？　ねえ、奥さん、さうでせう？」

「えゝ、さうよ。たゞ、お茶屋で逢つてる分には構はないけれど、この頃みたいに、彼方のうちへ行くんだと、それだけまア厄介もかけてるわけだし……」

「あゝ、さうか。さういふ氣持からなら、それア無論結構なこつたよ」

　假令、世間普通の虚禮にもせよ、さうしておしげから好意を示してくれるといふことは、昌造として、嬉しくなからう筈はなかつた。それどころか、これを機緣に、二人仲のいゝ友達にでもなつてくれたなら、といふ愚しい夢が、忽ち胸へ飛び込んで來て、近頃にない明るく晴々とした氣持になれた。——男女の、殊に女の心理を微細に寫す、といふのが、昌造の作品に與へられてゐる定評だつたけれど、この、

おしげの言葉の裏に、好意以外の何物をも感じ得なかつたとは……。いかに心私に望み願つてゐた、その灸所へ觸れられ、嬉しさにとり紛れて了つたとは云へ、……後に殘つたのは、烈しい恥と憤りだつた、そして、また更に後に殘つたのは、あれは、矢つ張りあれでよかつたんだ、といふ、寂しく、穏な自愛だつた……。

二足のうちから、昌造が擇んだ分の下駄が、上方からの土産物と一緒に、その午後、千葉によつて、監獄裏の、瑛龍の住居へ屆けられた。

六の二

神津の女將が、夙に二人の間に、情の關係があるものときめ込んで、今後何か紛擾が起つても、一切自分は知らないことにするから、きちんとお互に責任をもつてくれ、といふ意味を、圓曲に宣言した晩、それをそのまゝ、おそく來た瑛龍に傳へたのが、逆のまた逆を行くやうな、へんな具合の、心理的機縁となつて、始終ひとつ床に寢ながら、半年以上何事もなく過して來た仲が、終に女將の疑を事實に、證でも結ばれることになつて、既に十月もたつてゐた。初は、わざとするのかと思はれるほど淡薄だつた瑛龍も、地震前後から、だん／＼ほんとうの女らしくなつて來た。男の積極性は、さういふことにも、拘らぬ滿足を與へるもので、昌造は、時に反省の苦汁に惱まされながらも、愛慾と淫蕩とを劃する一線を、兎角踏み越えがちだつた。

年が改まる頃には、復興の意氣は、ます／＼旺になつて來た。往來に面したひと家並だけで、裏はすぐに燒野原でも、地震前に賑だつた通りは、矢つ張りそこらしく、殊に夜は、明るい電燈の數で誤間化して、さうみじめにも見えなかつた。銀座を初め日本橋通り、人形町、九段下から萬世へかけての表通りなど、バラツク、バラツクと、さう馬鹿にも出來ないやうな店構もぽつ／＼目立つて來た。安くて間に合ふ當用の品を買ひ集めたりしながら、さういふ下町の散步を樂しんだあとは、前から知つてゐる芳町の、粗末ながらも出來あがつたばかりの待合へ、宿を覓めて行つたりした。傳通院前に假越をしてゐた支那料理屋で、美味に飢えた舌を滿足させた時には、江戸川を隔てゝ相對した牛込の丘陵を上つて、神樂阪で名代の果實屋にたち寄り、そこから監獄裏まで自動車を驅るのを常とした。好んで、暗く淋しい山の手の屋敷街ばかり歩き廻つてゐた頃と、僅二月三月のことで、世の中も、また人の心も、こんな風に激しく移り變つて來てゐた。

二月の初めには、赤阪の仲ノ町に、新建の小じんまりした借家を見つけて、瑛龍は、また以前の巣に近く舞ひ戻つて行つたが、妓籍を脱することは、去年のうちに、表町の養母の前できつぱりと云ひ切り、

お前がそれほどに云ふんなら、はたでどうにも仕樣があるまい、といふ程度の、お許しともつかないお許しが出てゐた。大洲内は洋行してゐるし、稼業に縛られるところはなし、どんなに明るく元氣づいてゐてもいゝ筈の瑛龍は、然し、神津時代に比べて、からりと變つたと云つてもいゝほどヒステリックになつて來てゐた。それも、出鱈目のわからずやを云ふのなら、一種の甘ツたれと、輕く身を躱してゐることも出來るのだが、そこまで行つても、瑛龍は瑛龍らしく、論理整然、威儀堂堂、正義の御旗を眞向にふり翳して、而も底意地わるくねち／＼やられるには、有繁に昌造もへこたれた。初めは正面にうけて、時には、寂しさに我知らず涙を落したり、癇癪をおこして、碌すッぽさよならも云はずに、途上で別れて來たりしたこともあつたが、三月四月とたつて、そんなことを云ひ出すのに、毎月およそ時期がきまつてゐることに氣がつき、はゝア、と感づいてからは、だん／＼にうまくはぐらかすことを覺えて了つた。子供たちが、月の變り目にかゝると、顳顬や、目と目との間の鼻の上を皺ませて、機嫌わるく、すぐぴい／＼泣いたりする、——それと見ると、昌造はすぐ、女房でも女中でも、そこらにゐる者に、おい、誰それは赤蛙丸だよ！ と云つて注意し、好きなおかづのなかに忍ばせたりして、小な子まで、必ず月一度はその苦い丸藥を飲ませることにしてゐたが、瑛龍のも、つまりはそれとおんなじことだと思つたので、なんでもない時に、うちの子供たちの話をして聞かせて置き、その頃の時期の環つて來るのを待つて、

「そーら、赤蛙丸、赤蛙丸！」

と、突拍子もない聲で怒鳴つてみせたのが、飲まないで利く一種の「藥」となつて、つい瑛龍もふきだして了つた。女房に限らず、これまで昌造が、二三ケ月なり、三年四年なり親しんで來た女たちには、不思議なくらゐ、一人としてその氣の強いのがなかつたので、他人の書いた小說など讀んでも、なんだか馬鹿らしい氣がしてならなかつたが、實際にあたつてみると、成程、ちよつと深刻らしい味はあつた。とは云へ、さういふ病的なことは、一切好かない質の昌造のことゆゑ、すぐ「飲まないで利く藥」を發見して了つて、瑛龍のそれをも、決して募らせるやうなことはなかつた。

そのなかに、たつた一つ、正面にうけ、而も實行していゝ申し出があつた。仲の町に移つて後、そこで夜を明した四五遍目の時、あたしの方からあなたのところへ押しかけて行くのなら、誰に見られても、一向差支ないけれど、あなたがこゝへ泊りに來ることは、世間に聞えて、あんまり體裁のいゝ話でもないと思ふから、折角來てくれたのを惡いけれど、今夜はこのまゝ歸つて貰ひたい、——氣がつくと、丁度

「赤蛙丸」の來る時分で、それが云はせる切口上には違ひなかつたのだが、重々これは尤でもあり、同感だつたので、以後堅く守つて、玄關先へも立ち寄らなかつた。その代り、——と云ふのもをかしいが、仲ノ町からさして遠くない、市兵衞町の丘の上に建つた小さなホテルに宿をとつて、三日四日泊り込んでゐるやうなことも珍しくなかつた。

地震前、よく逗子のうちをあけてゐたのも、事實その大部分の時は、瑛龍と一緒に過ごされてゐたには違ひないのだけれど、それにしても、まるツきりほかに用事がないわけでもなく、まだしもいくらか釋明の餘地はあつた。それが、東京に住みながら、始終うちをあけるとなると、いやにものごとが露骨になつて來て、有繫の昌造も、時には玄關の敷居を高く感じるやうなこともあつた。それも、歸るとおしげがふくれッ面をしてゐるとか、愚圖々々云ふとか、なんか手答でもあれば、却つて强氣に、えばりくさつてゐられるのだけれど、この頃は、急に目立つて元氣がなくなつて來てゐた。顏の色つやも惡く、老人のやうに額が骨ばり、しほれ返つて、碌々口も利かないやうな有樣だつた。

或る時、逗子にゐる頃から使つてゐる書生の岩井が、どうも肺病らしい、狹いうちのなかだし、もし萬一子供たちに傳染るやうなことでもあると大へんだから、一日も早く暇を出して貰ひたい、——おしげからかういふ申し出があつた。それより前に、一二度千葉から、岩井君は、どうもいやな咳をしますね、とか、あれア、脚氣より、こゝちアないかと思ふがなア、と、胸を叩いてみせるとか、さういふ注意があつて、昌造もいくらか氣にはかけてゐたのだが、もとく、有無を云はせず北海道から押しかけて來て了つた内弟子のやうな靑年で、遠に歸れといふのも氣の毒な氣がしたので、一遍よく醫者に診て貰ふやうに勸めたりしてゐた折だつた。

「こないださう云つといたんだけれど、杉本さんとこイ行つて診て貰つて來たかしらね」

「そんなこと、どうだか知りませんけれど、兎に角、顏を見てるだけでも氣持がわるござんすわ」

「だけど、その點がはつきりしないのに、斷る理由がないぢアないか」

「なんですか、しよッちう机によつかゝつて、ぐつたりしてるんですもの、あれぢア、氣の毒らしくつて、使ひとつ賴めやアしませんわ」

「然し、もしほんとにさうだとしても、この寒さに、北海道へ歸して やるつてのも、なんだか慘酷な氣がするかられ」

「そんな、ひとのことばかり考へてゝ、もし子供たちに……」

「それア、無論、なほ困るさ」
「困るどころぢアすまないこつてすわ！あの人だけは、断然帰して頂かなくつちア……」
いつもぼんやりひとッところを見詰めてゐるやうな、この頃のおしげが、事の如何に係らず、これほど強い言葉で云ひ張るのからして、ちよつとへんな気もしたが、
「さうか。それほどに云ふんなら帰さう」
と、承知して了つたのも、結局、子供の健康を案じる母親の熱情に動かされた態だつた。
手狭だから、といふ理由で、岩井に暇をとるやうに云つてゐるうちに、蒼白い顔をいやが上にも蒼ませ、涙ぐんで下を向いて了つたのに、昌造は、もと〳〵自分の意思から出たことでないだけ、可哀想になつて来た。
「だけど、君が、是非東京にゐたいんなら、どこかまたいゝところをめつけて、當分に置いて頁ふやうにしてあげられないこともなからうと思ふんだけど……」
暫く考へ込んでゐたが、
「有難うございますけれど、わたくし、矢つ張り郷里イ帰りませう」
悲しげにさう云つてから、ぢッと昌造の顔を見詰めた。死んだ人間が、この世に思ひ残すことがあつて、頼りにする人の枕もとに姿を現し、ぢいッと顔を覗き込んで、さも、もの云ひたげにしてゐる、——怪談によくさういふことがあるが、何故か昌造は、その時の岩井の凝視に、さも、もの云ひたげにしてゐる幽霊の悲しみを感じて、肌も心も、急に寒くなつた。
或る時はまたこんなこともあつた。珍しく、まつはりつく子供たちもなしに、たつた一人で、ぼんやり長火鉢の前に坐り込んでゐるおしげに、
「お前は、どうもよッぽどどうかしてるねえ。どつか體の具合でも悪いんぢアないのかい。一度醫者に診せといたらどうなんだい」
と、近頃たび〳〵繰り返してゐる言葉を、またしてもそこへ持ち出してみた。
「別に、どこも悪かアないんですけど……」
頬杖の手を引いて、伏目に火鉢の縁を撫で廻した。
「何しろ、然し、ひどく元気がないなア」
「さうお？」
寂しいながらも微な笑を口元に漂はせて、「おそい初戀なのよ、……なアんて……」
十年も前に、おしげを好きになつた自分自身の気持をさういふ風に

呼んで、それをそのまゝ題につけた小説を書いたことはあるが、良人の仕事の上には、少しの關心ももたない、――たまに讀んでみても、ちつとも面白くもなんともないと云ふおしげが、どうしてまたそんな難しい題名を思ひだしたか、それが不思議、と云ふより寧ろ可笑しくて、昌造も、思はずにやりとした。殊に、すぐあとへ、「……なアんて……」といふ、打消の氣持もつけ加へられてゐたし、正面の、今あたしは戀をしてゐるのです、といふ意味では、殆ど胸へ響いて來なかつたと云つてもいゝくらゐだつた。

「おそい初戀、よくそんなこと憶えてたねえ」

「それア憶えてますわ。……でも、いけない？」

「何がさ」

「あたし、ほんとに、おそい初戀なのよ」

まだ唇から消えない微笑が、昌造には、久々のもの珍しさで、嬉しく眺められた。

「生意氣いつてらア」

「いゝえ、ほんとよ。……いゝ？」

「いゝとも」

「いゝわねえ。あなただつて大好きな人があるんだから」

「いゝとも。お前が自分でちやアんと責任をもつてやることなら、何をしたつていゝのさ」

いくらか昌造も、眞面目になつてさう答へたが、然し、何かそこに、具體的な事實があらうなどゝは、思ひもかけなかつた。たゞ、あまりの寂しさから、戀愛といふ概念の、若々しさ、華々しさにあこがれ、夢見心地でゐる、――さういふおしげだとばかり思はれるにつけても、それだけの元氣がまだ胸にあることが嬉しく、有難かつた。この頃の衰弱には、毎日でも飲んで貰ひたい藥のやうにさへ思へた。

「さう？　……いゝつて云つたわねっ」

「云つたとも。大よしだよ」

もう一度おしげは、寂しさうに微笑つた。

六の三

前年の四月から小學校へ通ひ始めてゐた長男は、地震後のあちこちで、そのまゝまだ休ませてあつたが、今度の新學期が來るまでには、半永久的にもせよ、住む土地をきめ、そこで改めて尋常一年の入學試驗をうけさせてやらうと考へてゐた。おしげと、一番下の敞三の健康狀態から云つても、また家計の都合から云つても、とても東京は駄目だし、田舍とすれば、やつぱり住み馴れた逗子がよからうといふので、夙から彼方の知人に頼んで探して貰つてあつたが、東京の復興で

さへなかく〜捗らないくらゐで、冬場の海邊に貸別莊の新築なり、手入なり、そんなことは思ひもよらず、到底見つかりさうもないといふ返事だつた。そこへ、鎌倉の、金井といふ友達から、大してよくはないが、一二軒見て置いたから、一度出かけて來ないか、と云つてよこしてくれた。

朝のうちの快晴が、彼方へ着いた一時すぎには、急に寒々としぐれかゝつて來てゐた。遊びがてらと思つて、うちぢう、それに丁度居合はせた千葉まで引ッ張り出したのだが、三月も下旬ちかいといふのに、みんな外套の襟に首を縮め、水ッ洟をすゝるばかりで、遊びどころか、お役でも御免と云ひたげな顏つきだつた。

地震から、同じ土地で往き來するやうな人が、いちどきに減つて了ひ、人懷しい氣持になつてゐた金井は、茶よ、菓子よと待遇してはくれるが、なかく〜案内に立たうとはしなかつた。昌造の方でも、極端に風邪ひきッぽい金井の健康を知つてゐるだけに、さう急きたてられもしず、落ちつかない腰を据ゑてゐた。

「この寒空に、わざく〜一緒に行つて貰はなくつてもいゝんだから、所だけ教へてくれないか。それで結構だよ」

「まアいゝさ。いま鮨を云ひつけたから、それでも食べて、それからゆつくり案内してあげるよ。こゝはこんなに暗いけど、なに、まだ時間は早いんだ」

「でもね、子供らつれて來てるし、成可く早く歸りたいから……。君はも、今日はまアおもてへ出ない方がいゝだらう」

「なに、だいじよぶさ。……おい、初子、初子！お鮨どうしたんだい。もう一度誰か催促にやつてごらん」

いろ〜かまつてくれるほど、子供たちはくるッと母親の周りにへばり附いて了ひ、いやにしねくね含羞んでばかりゐるし、いくら云つても、千葉はまた上へはあがらず、緣側に腰かけたまゝ、むづッと默り込んでゐた。——昌造も、久振りの友達と、元氣よげに話しながらも、氣持は、妙に寂しく暗んで行つた。

鮨の御馳走になつて、うんと厚着をした金井夫婦も一緒に、おもてへ出た時分には、まるで日暮方のやうな、空氣の蒼白さだつた。——うちなんぞもうどうだつていゝや、と云ひたいほどの無氣力に、たゞ神經ばかりがさゝくれだつて來た。

大町の停留所に近い空地の隅で、銅色に塗つた亞鉛屋根の、いゝ加減古ぼけた家へ、まづ第一に案内してくれた。空地は、子供の遊び場にはいゝとしても、夜の出這入には不便だらうし、泥棒の少い土地とは云へ、いくぶん物騷な氣もした。庭先へ廻つてみると六七尺の土手の下が、すぐ電車の線路になつてゐた。(駄目だ、これア！)と腹の

なかでは、やけくそな襖が逆つてゐたけれど、あき盲目のやうに白ちつぽく鎖された雨戸を繰つて、兎も角一應なかへはいつてみた。わりに都合よくは建つてゐたけれど、女中部屋と玄關を除けば、たつた三間しかなかつた。

「どうだね？　少し狹いかな」

金井が、洟をかみ／＼縁先へ廻つて來て、「こないだは、天氣のいゝ晝間來て見たんだけれど、なか／＼これで日當りはいゝよ。丁度こゝらが眞南になるかな」

毛絲の手袋で、いやに太短く見える指でさし示してくれたりしたが、昌造は碌に氣を入れて聞いてはゐなかつた。どういふものか、加速度に氣が滅入り込んで行つた。おしげも、相變らず薄ぼんやりしてゐて、兩方から、殆と口は利き合はなかつた。間取りや家賃について、なんのかの云ふのは、主に千葉で、おしげがそれに答へながら、あちこち隨つて見てゐた。そのあとを、子供たちがぞろ／＼ついて歩いてゐた。——昌造は、まるで一人のけものだつた。

金井夫婦が、差向に縁側に腰かけ、互に言葉をやりとりしながら、まだほかに見て置いた二軒の借家について話してくれるのだが、その時分には、昌造はもうなんでもいゝ、といふ氣持になつてゐた。

「いゝや。ここにしとかう。どうせ永くはゐられさうもないけど、兎に角一遍越して來てからのこつた。どうせさうたくさん何があるわけぢアなし、假越のつもりで來ようよ。そいからゆつくり探しやアいゝんだし……」

それでは、家主がすぐこの表通りだから、といふので、昌造は縁先の下駄へ足をおろしながら、臺所の方で雜巾がけしてゐるおしげに、

「おい、もうこゝにきめたよ！　行かう！」

はア、とか、さう、とか、ぼんやりした返事を聞き捨てに、金井夫婦と一緒に、先に門を出て、空地を横ぎり、通りへ曲らうといふ角まで來たが、

「お待ちしてませうよ、わからないといけませんから」

と、金井の細君が、立ち止つてふり向いたのに、昌造たちも、何か話し込みながらも、足だけは止めた。

上の二人の男の子は、ほどなく駈け出して來て、空地の隅に積みあげてあつた、崩潰家屋の古材を登つたりおりたりしてゐたが、あとの連中が、なか／＼出て來なかつた。

「おい、昌一！　マ、たち、どうした？」

「もう來るだらう。戸をしめてた」

それから、またやゝ暫くたつ間に、金井は、二三度嚔をし、赤くなつた鼻の先を頻にひつこすつてゐた。

「あなた、だいじよぶ？」

「だいじよぶだ」

「お寒かアないの？」

「だいじよぶ、だいじよぶ」

「なにヨウしてやがるんだろ！　愚圖だなア！」

　思はず昌造は、口へ出して呟くと、大路にさつさと引き返して、庭先へ廻つて行つてみた。――丁度、戸袋のそばで、一枚だけ引き殘した隙から、おしげが、緣の高さを、尻で滑りおりやうとしてゐるところだつた。子供たちは、もう庭にゐ、千葉だけが廊下に突つ立つてゐた。

「何してるんだ！　金井たちを待して、わるいぢやないか！」

　癇癪聲に怒鳴りつけはしたやうなものゝ、なんとなく昌造には、てれくさいやうな氣持があつて、すぐくるりと踵を環らさせられた。――腦貧血を起しかけた時の、胸のむかつく、なんとも云へないやアな氣持が來た。たゞいやだつた。世の中のこと、何もかもいやでたまらない氣持だつた……。

「加島さん、風邪おひきンなつたんぢアありません？」

「どうして？」

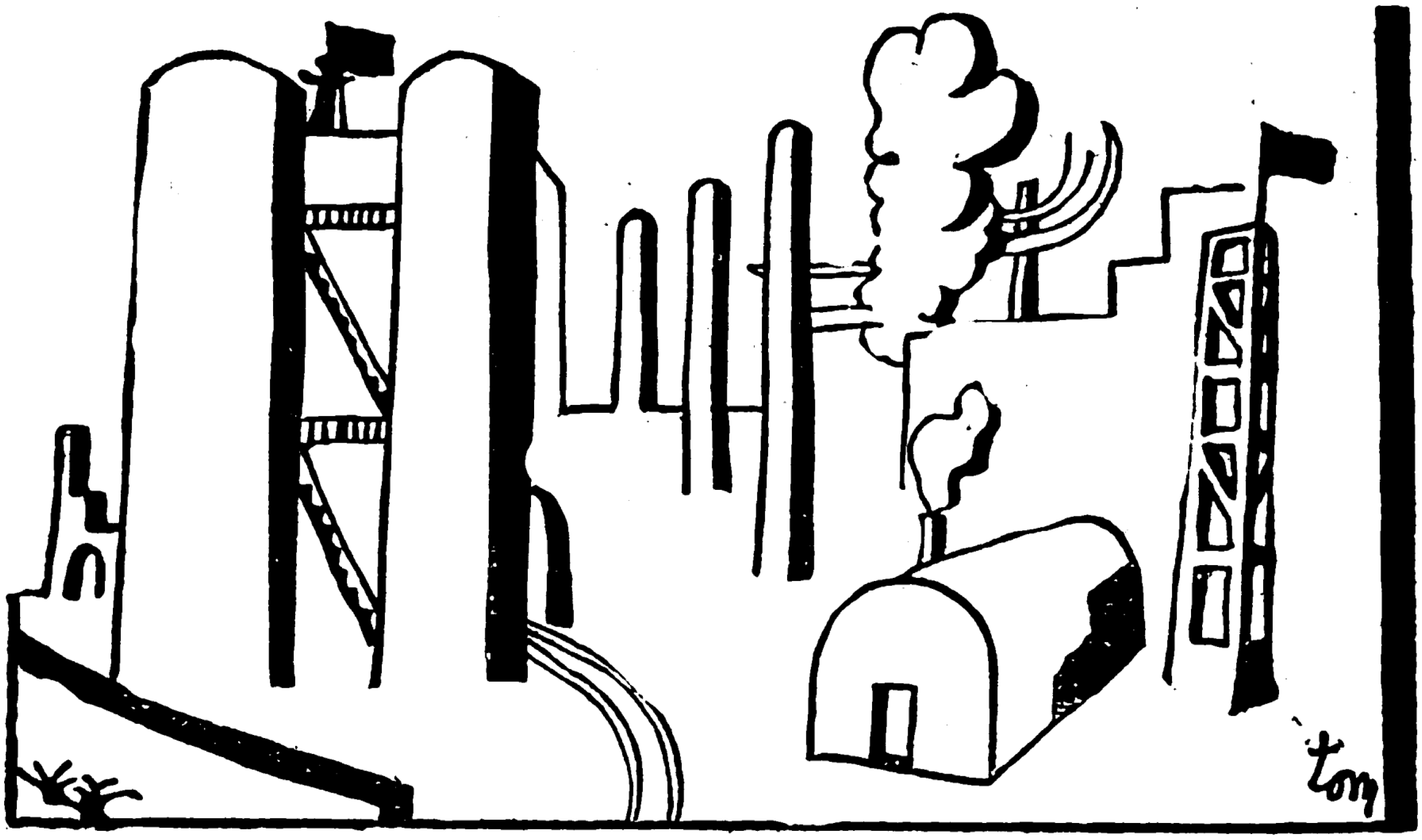
　と、歩みよつた時、金井も、ぢツと顔を見て、

「成程、少し青いなア」

「寒いんだ。今朝出かける時分、馬鹿にあツたかゝつたもんだから、そのつもりで、薄着で來ちやつたんだ。だけど、なに、平氣だよ」

　家主のうちによつて、貸りることにきめてから、道順でもないのに、停車場まで送らうといふ金井夫婦を、押し戻すやうにして、下馬の四ツ角で別れたのは、もうあちこちに、チラ〳〵灯のともる時分だつた。鼻の穴の熱いやうな氣持で、昌造は、いよ〳〵不機嫌に、堅く口を噤んで了つた。汽車のなかでも、知らない人には、つれとは思へないほど沒交渉に、瞬がない目を、ぢツと床の上の一點に据ゑてゐた……。

（つゞく）



セムガ(鮭)

前田河廣一郎

一

寒むい。

髯だらけなロシア人が、降参するやうに両手を擧げて、丘のむかうへあらはれた。

つづいて、三十疋ほどの犬どもが、灰色な列をつくつて、海へ吠え立てた。

犬も、その主人公も、長い冬籠りから、相貌がよく似てゐた。

ロシア人は、鐵具を重く墜したやうに、犬どもを呶鳴りつけた。

百七十人の日本人は、一團になつて、寂莫とした土地へ、歩をすすめた。古腐つた一軒の小舍が、丘のわきにある。新しいゴム長が、ぎこちなく鳴つた。

丘のてつぺんへ來ると、百七十人のうちから、一番背の高い男が、二三歩前へ出た。この男は、太い樫の棒を突き、犬の毛皮の外套を着てゐた。彼は、片手を擧げて、

『ジイマ――ドロゴ・スパシエボー！』

といふやうな、異様な言葉を叫んだ。ロシア語にちがひない。

百六十九人の日本人は、眼を瞠つて、突然自分達の仲間から傑出したこの人物の行動

に注意した。今まで『船頭』と呼んだ、のんきさうな外ッ歯の四十男であつた。

ロシア人は、そのロシア語を聴かなかつた。彼は言葉を忘れた人間のやうにむやみに笑つた。涙が見えるやうな笑ひであつた。次には、両手を翼のやうにひろげると、對手に組みついた。そして、又、笑つた。組みつかれた方は、日本人らしく、横向きに苦笑すると、二人のまはりに吠え狂ふ犬どもを、厳かな長靴で蹴る真似をした。

『ロスケだな……？』

『喧嘩か――喧嘩ぢやあるめえ。』

『番人だよ――嬉しがつてやがる。さうだらうよ、九ケ月も、向うの小舎に番をしてるんだから、な！』

あとから聴いて行つた連中は、煙草くさい口で、騒ぎ合つた。

と、ロシア人は、氣狂ひのやうに二三度腕を振り廻はして、何かを一同へ向つて告げた。それから、船頭が無言でポッケットへ押込んだ物を、外套の上から軽るく叩いて、こんな言葉で、彼れの手を握つた。

『ダ、ダ、ダ！　ド・スウエダーニア！　パイジョイエ・ペトロパウロスク。』

そこで、もう一度、犬どもを叱ると、闇の中でにやりとして、出て來た方へ取つて返へした。枯草の平原のむかうに、骸骨のやうに曝れた、低い小舎がぽつつり立つてゐる。いつの間にか、犬どもも、大地へ吸ひ込まれたやうに、その方へ姿を消してゐた。

百七十人の日本人は、しばらく無言で立つてゐた。――ロシア人の碧い眼と、身振りとが、幻覺のやうに、彼等の頭腦に刻まれた。ダ、ダ、ダ……一體、彼は、何を話したのだらう？

そこに、妙な氣持のとぎれが生じた。

この土地には、ひとりでに、人間を黙らせる何かがあるにちがひない。悲しみでもない。笑ひでもない。それとて、絶望でもない。さういふ人間の營む心理活動を、まだはつきりと當人にさへわからぬうちに吸ひ取つて、何處かへ運んで行つてしまふ、重力のない闇道のやうなものだ。それは、生きてゐて、同時に、死を味はつてゐるやうな氣持――錯覺である。

『――ここが、ロシアかね？』

一人の男が、先刻から口をあけ放つてゐるやうな聲で云つた。

空は、鈍い刃物のやうに光つてゐた。四邊には、白々とした、空つぽな土地が、むやみに擴がつてゐた。よくもこんなに平らに擴がつてゐるもんだ、と思はせるほど、無限の平地が續いた。その上に、木片や、枯れ草や、曝れた丸太棒などが、洪水のあとのやうに、淋しく散

つた。土地の涯に山脈があつた。山々の上には、冴えた氷の塊がしがみついてゐる。それが、非常に遠いやうでも、亦、わりに近いやうでもあつた。平原のどこから山脈になるのかがはつきりしないからだ。このどこまでも擴がつてゐる恐ろしい土地の氾濫を、二つの單調に動くものが堰き留めてゐた。一つは黒い海で、その上には、百七十人をここへ運んで來た第三函館丸が、盥の中のボートのやうに泛んでゐた。渚には、磯舟や、まだ水に漬からぬ川崎船などが、ごたごた列んでゐる。もう一つのものは、北と南とに彎曲した海岸線を押包んでゐる、冷めたそうな濃霧であつた。この濃霧は、氷よりも乾き、砂片よりも白く、空漠とした厚みをもつて、それ以外の地域を人間に見せまいとして地平をふさいでゐるのだ。そして、この限られた空間には、木も、青い物も、物音も、時間も、生命ですらも、すつかり根絶やしに逢つたやうな、深い、冷酷で殘忍な沈默の層が漲つてゐた。

『ここは、露領カムチヤツカ、と云ふのさ！』

しばらく經つてから、思ひ出したやうに、一人の老人が、誰かの言葉を訂正した。惧れに震へたやうな聲であつた。

それにつゞいて——

『こんな寒いとこたア思はなかつたが、』

『鮭を取る會社は、何處にあるのかね？』

『今夜は何處へ寢るんだね、一體？』

『何時頃かな、今？——ここにア太陽さまなんてものアないのか？』

『これで、一體全體、どこから魚ア捕るですかね？』

などと、各自が、遠い記憶から探ぐり出すやうに話しはじめた。だが、その言葉のいづれもは、極北の單純な自然に對する原始的な疑惑であるかのやうに、誰によつても答へられない質問に終つてゐた。

『ほおう——ッ！』

突然、誰か、剽輕な男が、山の方を向いて、口に兩手をあてがひながら、長く聲を曳いた。

『さア、みんな、荷物を小舍へ入れて、列を組むんだ！　列だ、列を！』

船頭は、反射的にから叫んで、砂の中へ樫の棒をぐんと突立てた。遠くの方のこだまの音が、彼れの鋭げ鋭げした命令で、ぎざぎざに截られてしまつた。

この男の樫の棒は、だてや嚇しに地上へ突立てられたものではなかつた。何となれば豫めの約束でもあつたかのやうに、彼れの憤つた動作の結果、そこに、百六十九人の間から、六人の『小頭』が、忽ち扮裝を脱いだ役者のやうに、人達の前に出現したから。——そして即座にその一人は、副船頭、他は人夫廻しといふ名で呼ばれた。これら

七人の『幹部』達は、ほかの誰もが氣づかないうちに、急に殘忍な表情を顔に出して、軍隊の拂ひ下げに着膨れて、家鴨のやうにまごまごしてゐる連中を、片つぱしから叱り飛ばすと、三つの大まかな組に分離させてゐた。

『これから、各自の荷物を擔ぐ。組がきまつたら一と組は、船から、荷役だ！　片方は小舍掛けに從事する。もう一と組は、砂へ埋めてある釜やボイラーを掘り出すんだ！――いいかね、みんな、今日の働き振りで、この夏一杯の成績もわかると云ふもんだ。それが、みなさんの賞與に關係することも無論の話だが。』

嘲けるやうにかう云つた船頭は、寒むさうに露出してゐる外ッ齒を、動物が牙を隱くすやうに、陰險に上唇で包んで、百六十三人の船から上陸つたばかりの勞働者を、じろりと一と亘り眺め廻はした。

からして、カムチヤツカ第一日の勞働がはじまる――。

2

百六十三人は、大きい地滑べりにあわを食つた村のやうに騷いた。十二晝夜も鹽汐の上へ積み込まれて、しけと濃霧の下に、窖の監獄舍のやうな生活をして來た彼等が、暗黑と粗食と嘔吐と炭酸ガスと惡臭とから一歩外へ出ると、もう慈悲も容赦もない『契約』が、ピストルや棍棒を持つた幹部の形で、息もつかせぬ激勢の中へ、彼等を驅き込むのであつた。

冬の間かこつてあつた六艘の川崎船が、砂や古席の下から掘り起こされた。本船のハツチ・カヴァは撥ねのけられて、ウインチが悪魔のやうに高笑つた。水夫達の罵聲の下で、動搖する甲板の上に、無數の箱や俵や叺やズックの袋が、俄か仕立の、へろへろの沖仲仕の頭上にうづ高く積り上げられた。

罵聲で、本船は鯨のやうに、人間を彈き返へす。傳馬は、子供が醉つたやうにくらくらする。波濤は、すべての物を顚倒させながら、高いところの物を急に谷底へ蹴落す。無力な、泣くやうな、死にもの狂ひな漁夫達の掛聲だけが、海の上に反響する。たまに、口惜しさうに、せつぱつまつた聲で笑ふものもある。

『うわッ、滑りやがつたッ！』

水音といつしよに、鹽叺が白い氣泡を散らして、見る見る[illegible]い水底に閉ぢ籠められてしまふ。叺の下に、田中といふ秋田ものがゐた筈だ。叺が沈みきつた頃に、海豹のやうに、顔を上へ向けた人間が、だんだん大きく海の表面へ騰つて手足をもがいて來るのが見えた。引上げる。艀で古席を燃やした火にやつと正氣づくと、さんざんに船頭に毆づかれる。田中は、ゴム長を逆さにしながら、それでも、敗け惜み

を云ふ。

『あんな冷めてえ水さ今まで一度だつて這入つたことねえしは。 諸アしびれるからは。』

米俵といつしよに、どしんどしんと人間がぶつ倒れる。 四十男が、もくぞう蟹のやうな髯を生やしながら、俵の下でぼろぼろと涙をこぼしてゐる。

『迚も、腰がつづかねえや……。』

叺を下へ置いた二人の男が、水つぽい眼をして丘の下でお互を愍み合ふ。

『地獄みてえだよ。』

そこへ三人目が、水母のやうに、足から先きに壊れて來る。

『荷役の時が大切だよ。今日なまける奴ア、ちやんと親方に睨まれるぜ。』

親切ごかしに、人夫廻しの老人が、棒の先きで砂を敲きながら叱りつける。

『親方、何時ですかね？』

通りすがりの船頭を摑まへて、かう訊くものがある。 腕時計の手前、時間を教へぬわけにも行かず、さうかと云つて、高聲で告げるわけにも行かぬ彼は、咎めるやうに對手を見据ゑたのち、低い呻り聲を擧げながら、右の腕首をちらと捲くつた。

『七時──ほう！ 晩の七時だ！』

その男の驚きを、船頭は威嚇するやうに、あとから追ひ立てる。

『貴様、そのストーブは小舍へ運ぶんだぞ！』

午後の七時で、うす曇りながら、太陽の見當は、內地の三四時頃の場所にあつた。 山脈の氷とその白つぽい圓光が、いつしよになるまでには、五六尺の距離があるのだ。

『おい、もう晩の七時だよ！』

『なに、七時だ？』

『七時よ、夜の七時さ！ 道理で腹が減つたと思つた。』

この騷ぎが、濱から傳馬へ、そこから逆に渚へ、丘の上へ、小舍の中までも、いつの間にかひろまつてゐた。

小舍の古蓆や板の間を掃除してゐた三人の若い女達は、かはるがはる、入口の蓆の間から首を出して、夜にならない午後七時の氣象を觀測した。 だらりと垂れた、入口の蓆の前で、船から來る食料品を選り分けてゐた。 ほかの五人の女達は、出稼ぎに慣れた女漁夫なので、若い女を嚇すやうに、聽こえよがしにいちやついた。

『あゝここは夜ちうものはねえ國だよ。』

『寢るのは、ほんの一刻だからな。』

七人の『幹部』達は、ほかの誰もが氣づかないうちに、急に殘忍な表情を露に出して、軍隊の拂ひ下げに着膨れて、家鴨のやうにまごまごしてゐる連中を、片つぱしから叱り飛ばすと、三つの大まかな組に分離させてゐた。

『これから、各自の荷物を置く。組がきまつたら一と組は、船から、荷役だ! 片方は小舍掛けに從事する。もう一と組は、砂へ埋めてある釜やボイラーを掘り出すんだ!――いいかね、みんな、今日の働き振りで、この夏一杯の成績もわかると云ふもんだ。それが、みなさんの賞與に關係することも無論の話だが。』

嘲けるやうにかう云つた船頭は、蔑むそうに露出してゐる外ッ齒を、動物が牙を隠くすやうに、陰險に上唇で包んで、百六十三人の船から上陸つたばかりの勞働者を、じろりと一と亘り眺め廻はした。

かうして、カムチャツカ第一日の勞働がはじまる――。

2

百六十三人は、大きい地滑べりにあわを食つた村のやうに騒いた。十二晝夜も鹽叺の上へ積み込まれて、いしけと濃霧の下に、畜の厩舎のやうな生活をして來た彼等が、暗黒と粗食と嘔吐と炭酸ガスと惡臭とから一歩外へ出ると、もう慈悲も容赦もない『殺戮』が、ピストルや棍棒を持つた幹部の形で、息もつかせぬ激勢の中へ、彼等を叩き込むのであつた。

冬の間かこつてあつた六艘の川崎船が、砂や古席の下から掘り起こされた。本船のハッチ・カヴァは撥ねのけられて、ウインチが悪魔のやうに高笑つた。水夫達の罵聲の下で、動揺する甲板の上に、無數の箱や俵や叺やズックの袋が、俄か仕立の、へろへろの沖仲仕の頭上にうづ高く蹴り上げられた。

荒波で、本船は鯨のやうに、人間を弾き返へす。傳馬は、子供が酔つたやうにくらくらする。波濤は、すべての物を顛倒させながら、高いところの物を急に谷底へ蹴墜す。無力な、泣くやうな、死にもの狂ひな漁夫達の悲鳴だけが、海の上に反響する。たまに、口惜しそうに、せつぱつまつた聲で笑ふものもある。

『うわッ、滑りやがつたッ!』

水音といつしよに、鹽叺が白い氣泡を撒らして、見る見る蒼黒い水面に閉ち籠められてしまふ。叺の下に、田中といふ秋田ものがゐた筈だ。叺が沈みきつた頃に、毒粉のやうに、顏を上へ向けた人間がだんだん大きく海の表面へ向つて手足をもがいて來るのが見えた。引上げる。焚火で古席を燃やした火にやつと正氣づくと、さんざんに船頭に毆づかれる。田中は、ゴム長を逆さにしながら、それでも、敗け惜み

を云ふ。

『あんな冷めてえ水さ今まで一度だつて這入つたことねえしは。脛アしびれるからは。』

米俵といつしよに、どしんどしんと人間がぶつ倒れる。四十男が、いゝ、いゝ、もくぞう蟹のやうな髯を生やしながら、俵の下でぼろぼろと涙をこぼしてゐる。

『迚も、體がつゞかねえや……。』

俵を下へ置いた二人の男が、水つぽい眼をして丘の下でお互を慰み合ふ。

『地獄みてえだよ。』

そこへ三人目が、水母のやうに、足から先きに壊れて來る。

『荷役の時が大切だよ。今日なまける奴ア、ちやんと親方に睨まれるぜ。』

親方ごかしに、人夫廻しの老人が、棒の先きで砂を敲きながら叱りつける。

『親方、何時ですかね？』

通りすがりの船頭を摑まへて、かう訊くものがある。腕時計の手前、時間を教へぬわけにも行かず、さうかと云つて、高聲で告げるわけにも行かぬ彼は、咎めるやうに對手を見据ゑたのち、低い呻り聲を擧げながら、右の腕首をちらと捲くつた。

『七時――ほう！　晩の七時だ！』

その男の驚きを、船頭は反撥するやうに、あとから追ひ立てる。

『貴様、そのストーブは小舍へ運ぶんだぞ！』

午後の七時で、うす翳りたがら、太陽の見當は、内地の三四時頃の場所にあつた。山脈の氷とその白つぽい回光が、いつしよになるまでには、五六尺の距離があるのだ。

『おい、もう晩の七時だよ！』

『なに、七時だ？』

『七時よ、夜の七時さ！　道理で腹が減つたと思つた。』

この騒ぎが、濱から傳馬へ、そこから逆に渚へ、丘の上へ、小舍の中までも、いつの間にかひろまつてゐた。

小舍の古蓆や板の間を掃除してゐた三人の若い女達は、かはるがはる、入口の蓆の間から首を出して、夜にならない午後七時の氣象を觀測した。だらりと垂れた、入口の蓆の前で、船から來る食料品を選り分けてゐた。ほかの五人の女達は、出稼ぎに慣れた女漁夫なので、若い女を嚇すやうに、聽こえよがしにぺちやついた。

『あゝここは夜ちうものはねえ國だよ。』

『寢るのは、ほんの一刻だからな。』

七八の『幹部』達は、ほかの誰もが氣づかないうちに、急に殘忍な表情を露に出して、軍隊の拂ひ下げに着膨れて、家鴨のやうにまごまごしてゐる連中を、片つぱしから叱り飛ばすと、三つの大まかな組に分離させてゐた。

『これから、各自の荷物を置く。組がきまつたら一と組は、艀から、荷役だ！ 片方は小舎掛けに從事する。もう一と組は、砂へ埋めてある釜やボイラーを掘り出すんだ！——いいかね、みんな、今日の働き振りで、この夏一杯の成績もわかると云ふもんだ。それが、みなさんの賞與に關係することも無論の話だが。』

嘲けるやうにかう云つた船頭は、嫉むそうに露出してゐる外ツ齒を、動物が牙を隱くすやうに、陰險に上唇で包んで、百六十三人の船から上陸つたばかりの勞働者を、じろりと一と亘り睨め廻はした。

からして、カムチヤツカ第一日の勞働がはじまる——。

2

百六十三人は、大きい地滑べりにあわを食つた村のやうに蠢いた。十二晝夜も蠶棚の上へ積み込まれて、しけと濃霧の下に、窖の監禁者のやうな生活をして來た彼等が、暗黒と粗食と嘔吐と炭酸ガスと惡臭とから一歩外へ出ると、もう慈悲も容赦もない『規約』が、ピストルや棍棒を持つた幹部の形で、息もつかせぬ激勢の中へ、彼等を叩き込むのであつた。

冬の間かこつてあつた六艘の川崎船が、砂や古蓆の下から掘り起こされた。本船のハツチ・カヷアは撥ねのけられて、ウインチが惡魔のやうに高笑つた。水夫達の罵聲の下で、動搖する甲板の上に、無數の箱や俵や叺やズツクの袋が、俄か仕立の、へろへろの沖仲仕の頭上にうづ高く盛り上げられた。

荒波で、本船は鯨のやうに、人間を彈き返へす。傳馬は、子供が醉つたやうにくらくらする。波濤は、すべての物を顚倒させながら、高いところの物を急に谷底へ殺到す。無力な、泣くやうな、死にもの狂ひな漁夫達の掛聲だけが、海の上に反響する。たまに、口惜しそうに、せつぱつまつた聲で笑ふものもある。

『うわツ、滑りやがつたツ！』

水音といつしよに、叺が白い氣泡を散らして、見る見る蒼黝い水の面に閉ぢ籠められてしまふ。叺の下に、田中といふ秋田ものがゐた筈だ。叺が沈みきつた頃に、海豹のやうに、顔を上へ向けた人間が、だんだん大きく海の表面へ向つて手足をもがいて來るのが見えた。引上げる。艀で古蓆を燃やした火にやつと正氣づくと、さんざんに船頭に毒づかれる。田中は、ゴム長を逆さにしながら、それでも、敗け惜み

を云ふ。

『あんな冷めてえ水さ今まで一度だつて這入つたことねえしは。體アしびれるからは。』

結髪といつしよに、どしんどしんと人間がぶつ倒れる。四十男が、もくぞう蟹のやうな髯を生やしながら、俵の下でぼろぼろと涙をこぼしてゐる。

『畜生、時化がつづかねえや……。』

叺を下へ置いた二人の男が、水つぽい眼をして丘の下でお互を憫み合ふ。

『地獄みてえだよ。』

そこへ三人目が、水母のやうに、足から先きに壊れて來る。

『荷役の時が大切だよ。今日なまける奴ア、ちやんと親方に睨まれるぜ。』

親切ごかしに、人夫廻しの老人が、棒の先きで砂を敲きながら叱りつける。

『親方、何時ですかね?』

通りすがりの船頭を掴まへて、かう訊くものがある。腕時計の手前、時間を教へぬわけにも行かず、さうかと云つて、高聲で告げるわけにも行かぬ彼は、咎めるやうに對手を見据ゑたのち、低い呻り聲を擧げながら、右の腕首をちらと捲くつた。

『七時——ほう! 晩の七時だ!』

その男の驚きを、船頭は威嚇するやうに、あとから追ひ立てる。

『貴様、そのストーブは小舍へ運ぶんだぞ!』

午後の七時で、うす曇りだから、太陽の見當は、内地の三四時頃の場所にあつた。山脈の氷とその白つぽい明光が、いつしよになるまでには、五六尺の距離があるのだ。

『おい、もう晩の七時だよ!』

『なに、七時だ?』

『七時よ、夜の七時さ! 道理で腹が減つたと思つた。』

この騷ぎが、濱から傳馬へ、そこから沖に艀へ、丘の上へ、小舍の中までも、いつの間にかひろまつてゐた。

小舍の古蓆や板の間を掃除してゐた三人の若い女達は、かはるがはる、入口の蓆の間から首を出して、夜にならない午後七時の氣象を観測した。だらりと垂れた、入口の蓆の前で、船から來る食料品を選り分けてゐた。ほかの五人の女達は、出稼ぎに慣れた女漁夫なので、若い女を嚇すやうに、聽こえよがしにぺちやついた。

『あゝここは夜ちうものはねえ國だよ。』

『寢るのは、ほんの一刻だからな。』

『ここぢや、一年に二つ年齢を取ることさ！』

一方、丘の上では、不思議な採掘が行はれてゐた。

羅紗の外套にくるまつた副船頭は、體操の教員みたいに小舍の西隅の柱から歩み出しながら、

『ひい、ふう、みい、よう――』

と口の中で呟き呟き、膝を直角に折つて、砂の上を南へ進んで行つた。

一團の勞働者が、シャベルや鍬を持つて、彼れのあとからぞろぞろ跟いて行く。

『よし、二十五だ。ここを掘れ！』

この歩行の數によつて、十五人ほどの腕が、がむしやらに大地に對して活動を開始する。しばらく土屑を搖がす地響と、苦るしそうな呼吸と、無限に滴る汗とがある。

『なに、無い？――そんな筈ア無いがな。よし、そんぢや、ここを掘れ！』

副船頭の記憶が正確であつたとすれば、たしかに釜やボイラーが、一年間にもう五歩ほど南へ移つて行つたものだらう。

『釜が出ねえと、みんなめしが食へねえぞ！』

掘り方が疲れると、彼はかう原始的な食慾を唆る。そこで、シャベルが鏡のやうに光るまで、砂を削つては掘り、削つては掘り出す。――ガチリ！　釜ではない。罐詰部の大釜だ！

再び、副船頭は、小舍を基點として、稍西南に角度を保つて、膝を折りながら、

『ひい、ふう、みい……』を繰返へした。

そして、その刹那、午後七時說が、誰の耳からとなく、一同の中に傳はつた。

『七時だ？』

闘咎がめるやうに、細い眼を眼鏡の下から擧げた。肥つた青年は、自分の手首に食ひ込んでゐる時計をじつと見返へした。

『嘘つけ。八時十五分前だよ。こりや、先刻、針を船で合はせたんで、まちがひはない。』

かうきつぱり云ふと、手にしたシャベルを、孔の中へ捨てたまま、彼は立ちあがつた。

『おい、晩の八時か？』

砂との格鬪に夢中になつてゐたほかのものも、一齊に顏を擧げた。時間について、勞働者は敏感だ。

『うむ、八時十五分前だ。』

青年は、鳥打の庇を、三日月形の額の上へ撥ねかへして、永久に

足踏みしてゐる副船頭の方へ、憤慨を感じたやうに、がつがつ歩るいて行つた。

『馬鹿々々しいツ、おいらア孔掘りにカムチヤツカくんだりまで來たんぢやねえや！』

もう一人の頬冠りが鍬をずでんと土の上へ投り出した。鍬は、土を吐きながら宙返へつた。

『夜の八時まで働かせる奴があるもんか！』

二人が三人、四人になつた。もう仕事終ひかと思つて、手拭で土をはたきながら、にたにたして這ひあがる男もあつた。

副船頭は、小舎の南隅の柱から、十二歩目で、青年によつて、その軍隊式な歩調を運られた。

『親方、もう八時なんですが——腹ア減つてしようがありませんよ。』

しかし、彼は自信を持つもののやうに歩みつづけた。

『十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三——』

そこで、彼は手にした棒を、心持、顔を赧らめながら砂へ突刺すと、はじめて、無断で勞役を放擲した、坊ちやん面の鳥打へ振り向いた。

『こいつ、畜生ツぽうめ！』

勞働者上りの大將から、特に軍隊といふものの氣臭の外はひであつた。

『八時がどうしたい？』

彼は唾を飛ばすやうに言葉を切つた。彼れの軍隊式に歩るいた十歩の距離を、青年は刻み足で近づいた。

『無茶ぢやありませんか！ 内地だつて、八時になりア晩めしくらゐは食はせまさアね。僕達ア腹が減つて、孔ところぢやないんですよ！』

鳥打は、もう再び時計の存在を對手に知らせながら、前よりはすこし和かに切り出した。副船頭は、小さな瘤のある、間々とした脂鼻に、肉慾的なくびれを淀めて笑つた。

『——だからよ、俺あ早く釜を掘らねえと、めしにありつけないと、先刻から云つてるでねえか。』

『しかし、ですね、青年は、自分のまはりにうつそり聚つて來てゐる仲間を意識した。その意識は、彼をもう一歩だけ對手に肉迫させた。

『——釜を掘るには力が要るでせう、そこで、めしを食はなけやカが出ないといふ理窟になりませんか。それに時間が時間ですよ。いくら北極だからつて、時計を一時間も晩らして置いて、勞働時間を胡魔化すのは非道いや。——何とかたりませんか、例へばですね、船から搬

り飯を取りよせるとか、』

副船頭は、この小肥りに肥つた若い者の、どこからさういふ理窟が出て來るのかを訝かるやうに、笑ひつづけながら、その頭から爪先までをじろじろ眺めた。彼れの奇妙な笑ひは、あまり永いこと持續されてゐるので、今は、すこし無氣味に、動物的にさへ見え出した。周圍の勞働者達は、あきらかに、窮地に追ひ込められた親方を見た。

青年は、すこし昂ぶつた。彼は鼻先で、せせら笑ひながら、もう一度、腕時計に眼を遣つた。

が、彼れの冷笑と、對手の痴呆的な笑ひの延長とが結びついたときに、副船頭は窮地から猛獸のやうに彈ね返へつてゐた。

『待て、野郎、ふざけんなッ！「例へば」だつて！　畜生ッ、ここで指圖するんなア誰れの役だと思つてけつかる！』

この奧州訛の勝つた呶鳴り聲は、空氣枕を石疊の上で毆ぐつたやうな響と、仔犬そつくりな悲鳴とを伴つて、濱の下までも、不穩な餘韻を曳いた。

青年の眼鏡は、足元に二つに折れて、その持主は胃痙攣にかかつたやうに、悶絶する手で腹腔を抱へた。

『この上生意氣ぬかしたら、ぶち殺してすまふぞ！』

副船頭は、圓るい鼻から荒い息を吐いた。

『どうした、青木——？』

突然、五六人の人間が、吃驚して飛び退いた。犬の毛皮の外套が、いつの間にか、群集の中に立つてゐたからである。

『や、奧野さん、見てゐしたか？……何、この畜生つぽがね、いやに口幅つてえことを抜かしやがるんで、すこしばかり馴らしてゐたところなんで。』

船頭は、かすかに頷いて見せた。

『これか？』

彼は、臂を伸ばして、青年の襟を攫むと、乾いた外ッ齒を舌で濕した。

『全く俺らを舐めてかかつてやアからね、えげ癖になる！』

『さうか——見せ示めだ、やッちめえ！』

船頭は、凜とした聲で云つて、鳥打帽を突放した。副船頭は、それを荷物のやうに片手で支へた。

『よがすとも！』

先づ青年の鳥打が飛んだ。次には、體軀を三つに折つた彼が、どさりと倒れて、したたかに頭蓋骨を大地へ撲つた。倒れたと同時に、熊のやうな青木の前半身が、それに向つて突貫してゐて、左右から猛然と動き出した鐵桿とも思はれる二本の腕は、殆ど無抵抗な對手の胸

に、べきべきと骨を鳴らせた。

『喧嘩だ、喧嘩だ！』

殺氣立つて渚から、砂地から、小舍の方から押寄せた群集は、油斷なくその場を警戒してゐる船頭のけはひに怖氣がついて、仲へ割込まうともせずに、他人の肩越しに、或ひは脚の間から、木偶人形同然の青年が、食肉獸のやうな壯漢に、血みどろな玩具にされるのを、わいわい云つてるより外はなかつた。

『もう、いい、青木、それで澤山だ。その邊へ投つときや、獨りで息を吹き返へすよ。さア、みんな、仕事に就いた！ 早くしねえと、何時まで經つても夕飯にならねえぞ！』

から冷然と云ひ殘した船頭は、淑かな靴音と共に、丘を急ぎ足で降りた。

『これが、この漁場の掟なんだぞ。惡るい事をする奴は、みんなこんなだから――は。』

青木は、見てならぬ殘忍なものを見たやうな群集に對して、勝ち誇つた赭ら顏を向けた。

嫌な思ひをした人達は、疲れた足を曳ずつて、ぞろぞろと滑るやうに砂地の傾斜を下つた。

『非道い！』

『あの田舍者、卑怯だなア！』

跛を曳いたり、膃肭の蕊を拔かれたやうに猫背になつたりして行く荷役の連中は、海岸へ辿りつくと、ペツと砂の上へ唾を吐いた。新しく傭はれた漁夫達はしばらく蒼い顏をして、深く考へ込んでゐた。

四五人の男と女とだけが、見るに見かねて、氣絶してゐる青年へ、小舍のバケツの水を掛けてやつた。

そこへ、もう一度副船頭が、づかづかと刻み足に近づいた。

驚いて逃げる小舍の前の人だかりを尻眼にして、彼は、ぐたりとなつてゐる青年の腕から、貝殼をひツ剝ぐやうに、腕時計を捥り取ると、片脚を擧げて、それを二度に踏み碎いた。そして、魯鈍な微笑を含んで、それを耳へあてがつて見て、はじめて滿足したのか、毀はれた機械を、正體のない持主の前へ、ぽいと投り出して行つた。

3

荷役は、四日間繼續された。

四日とは云ふが、内地では、八日と云ふべきであらう。

この不思議な大陸の一角では、朝は午前二――三時から始まり、晩は午後十一時頃に終つた。勞働は、時間では計算されずに、日の數だけでかぞへられた。

船舶から、巨人のやうな腕でウインチが掴み出すものを、手あたり次第に、傳馬で運んでは濱へ捨て、捨てては又漕ぎ戻つてゐるうちに、漁夫達は、丸い、四角な、長方形な、重い、濡れた、各種の物體のけじめが見えなくなつて、ただもう、貪婪な黒い船腹を空らにしてしまはねばならぬやうな狂人じみた作業の自然狀態に捲き込まれ、五日目の晝、汽船が、聞き覺えのある偏平つたい汽笛を殘して、南の方へ歸つたあとには、こんなにも自分達はいろいろの貨物を運んだのかしら、と思つて、『スタンダード石油會社』の箱や、味噌樽、醬油樽、漬物樽、米俵の山や、累々とした叺や、無數の空罐函や、蓆の丘などを、舌を巻いて眺めるのであつた。

それらは、不慣れな勞働者があわてて築造したバリケードのやうに、彎曲した海岸線を遠くまで縁取つた。

百七十人の日本人は、彼等を一と漁期だけ、北極の一隅に殘して行く第三函館丸に對して、愛情を表示しなかつたらうか！……

たしかに、汽船は、彼等全部を日本から積んで來て、日本に歸する彼等の生活、思ひ出、空想、聯絡のすべてを運んで、再び日本へ去らうとするのだ。汽船がゐなくなると、彼等は全く外國に在る外國人になつてしまふ。それが歸航した瞬間から、彼等の生活は、どんな困難にむかつても、自分達だけの力で切り開いて行かねばならない。

單純な彼等は、汽船といふものの持つ女性的なセンチメンタリズムに誘惑された。彼等は汚い、汗と垢にまみれた手拭を振つて、泣いた。十分に、百七十人が何をするために、この犬の穴のやうな隅ッこへ流されて來たかを知つてゐる、汽船の勞働者達も、デッキへ出揃つて高く手巾を振つた。かういふ刹那にこそ、勞働者達は、誰に教はるでもない自然發生的な友愛と階級意識を發揮する！

荷役が終るまでには、もう一組の勞働者達が、幹部部屋、倉庫、飯場、罐詰工場などの小舍掛けに忙殺された。

第一に出來あがつたのは、飯場である。これは、主として、炊事係の三人の老人の設計によつて建てられた。單純な丸太の組合せに、蓆を圍ひ、その蓆の壁へ木造りの高い台を兩側へ凭げたものが食堂で、めしはすべて台の上へ釘附けにした長方形の八つばかりの箱へ盛り入れられた。この原始的な食堂の入口に、太い鐵枠に支へられた釜と汁鍋とが、この飯場のただ二つの廚房具を代表して控へた。食堂と隔せられる蓆と棒との奥は、食料品の倉庫になつてゐて、味噌樽や澤庵の樽の類が、暗闇から殺人的な臭氣を送つた。

すべて、『倉庫』とか、『飯場』とか、『機關部屋』とか、『罐詰工場』とか、頗る大袈裟な、まるで同じカムチヤツカでも、オゼルナヤやウスーカム邊の日露の工場や、ロシア國營工場のエスカレーターやアイ

ヤソ・チンクなどを使つて、高い煙筒から北極が曇るほど煙と能率とを擧げてゐる大工場のやうな術語で呼ばれてはゐるが、その實、この個人經營の漁場では、すべては遍在的な丸太と蓆とをもつて築造され、必要も絶對性を帶びた場合でなければ、亞鉛は使はれない。

これらの小舍も、次第に、丸太のコンクリートと、蓆のセメントを集成して、一棟の土蜘蛛式建築を殖やすごとに、工場らしい『名目』だけを増して行つた。

機關部屋が出來あがる。

罐詰工場は、大きい鐵蓋のついた釜を据ゑたあとで、その上へ蓆の屋根を置き、三方を蓆で圍ひ、入口には、同じ蓆をだらりと下げればよかつた。

幹部部屋――これだけは、特に『事務所』と呼ばれたほどあつて、四邊の封建主義に對立した近代的裝置が施されてあつた。同じ蓆張りでも、この方には、しつかりした昨年からの骸骨が殘つてゐて、それに壁は窓際まで高く土盛をし、窓には文化的なガラスといふ贅澤品さへ嵌まつてゐるのだ。ここには、七人の幹部が寢起きするばかりでなく、軍手(軍隊拂下げの手套)や、煙草、股引、靴などの必需品の、煙草を除いては原價の幾パーセントかの高價で取引されるカウンター兼用のテーブルがあり、壁には極東全圖、汽船の寫眞、カレンダー、人名表などが、頗る非事務的な手で貼りこくられてあつた。

この幹部部屋を、最も幹部部屋らしく見せたものとなると、何を措いても、物々しく正面の壁に釣るされた三挺のピストルと、二挺のモーゼル銃を擧げねばならない。これらは、朝晩の濃霧と、鹽分の多い雰圍氣にも拘らず、裝飾的に磨き上げられてあつて、それらを、單に外見だけの裝飾品に終らしめないために、いつも實彈が罩めてあつた。

粗雜な木製の『馬』と、寢床と、行李類と、二册の帳簿と――それだけが、幹部のゐない場合の幹部部屋を構成してゐた。

この行政執行機關の本部は、濱一般を三角形に見た絶頂點に在つて、飯場、番屋、機關部屋、罐詰工場、井戸、倉庫などの營造物へ、おのおの最近距離によつて達する通路を持ち、窓からは居ながらにして、ガラスと云ふ物の特質から、一目でベーリング海の沖模様が展望された。ここだけは、ほかの砂地とちがつて、ツンドラ地帶を切り開いた、しつかとした地盤に立つてゐた。

かうして、大都會の失業者や、寒い日陰の縣の貧農を、大急ぎで掻き聚めたところの彼等百七十人が、ものの一週間も働いてゐるうちに、ともかく水産業の工場町に近い部落を、殆と古井戸と曝れた杯杭の列しかなかつた砂濱の上に建設したことは驚くべき事柄ではなかつ

たか！

それは、たしかに、荒削りで、急場凌ぎの、間に合はせだけの建物群であつたにはちがひない。しかし、この妙な部落からは、いつも炊事の青い煙が揚がり、罐詰工場の背後には人夫の女達の赤い腰巻が乾してあり、汽力罐からは鉛色の重油や、五色の紋様を散らす石油が滴り、通路通路には靴の跡にまじつてバフトの吸殻があり、殘飯と尿臭との雰圍氣にも、海の勞働者らしい、肺臓の強さうな笑ひ聲が聞えたではないか！　それから、又、めし類の茶碗や器物の音、我を爭ふ犇めき、仲の良い啀み合ひ！

事務所の棧橋には、汽船が着いたら、いつでも合圖の出來るように、フラッグ・ポストさへ樹てられてある！

もし、一週間にして、

『又やつて來るよ。……』

と云つて去つた、髯だらけなロシア人が犬の群と再びここへやつて來たとすれば、彼は、たしかに、日本人といふ國民の安價な模造工場の思想にかけては、世界一の手腕を持つてゐる、といふ愕くつたいお世辭を振り撒いたにちがひなからう。この漁場は、どこか、曲馬團の天幕に似てゐた！

これまでの第一次の準備期間は、迅速に、第二の整理期によつて代はられた。

この第二期に於て、百七十人は、それまでの『成組』に應じて、それぞれの等級と部署とを定められた。

七人の幹部は、動かぬところであつたが、機關部屋と筋子部屋と鰊場は、特殊な技能の要求されるところから、機關部二人、筋子部屋二人、飯場の炊事番の老人三人にもう二人の助手が加はつた。そのほか、男子と隔離されて罐詰工場へ寢泊りしてゐた女漁夫達を除いた百四十五人から、二十人は、雜夫として、漁業に直接從事しない、一段と賃銀の安すい組に廻はされて、あらゆる急場の走り使ひや雜用を辨ぜしめられた。殘餘の百二十五人の頭には、一隊四十人ほどの編成で、漁夫として、晝夜三回交替の三部組織が割りあてられた。

その編成が定まると、漁夫のうちの老人組は、濱へ出て網繕ひに廻はされた。

中年組は、まだすつかりは出來上らない小舎々々の建て増し、若者達は、一と山百二十叺づつ積む鹽の配置や、倉庫の整理などに使はれた。

これらの統制的な人員の組合せに、この個人の營利會社にとつて人間の勞働力を搾取して行く上に、最も都合のよい役割を果したのは、各部に必ず古くからの定期契約勞働者を編入して置く制度であつた。

新しく發見した漁夫達の間に、暫くからこの漁場で、夏場を稼いだ漁夫達は、しつかと楔のやうに食ひ込んでゐて、いつも、彼等の不平をなだめ、事件の發生を未然に防ぎ、時には傭主側のためのスパイの役をも演ずるのである。かういふ故參勞働者は、大概、安い「白米の食へぬ」村の貧農の、會社からの計略的な前貸金に釣られて雇傭關係を結び、それがつい慣例となつて、毎年の定傭ひにすると云つたものが多く、一日一人當八合の白米を、この漁場でやつてゐるやうに、日に五回に食ふために、二十時間の激しい勞働を、一時間八錢足らずの賃銀で厭はない――といふ、愚鈍な殉教者、白米だけを悦ぶ馬鹿な神様なのである。

絶對窮乏の背景から抽出されて、北へ、沖へ、カムチヤツカへと、自分の勞働力を捨賣りに移行する、かういふ勞働者は、無智と、利己心と、迷信とで、いつの間にか、傭主側の利害と自分の利害とに必要以上の一致點を見出し、會社や資本家のために、頼まれもせぬ忠節振りを發揮する、隱密的人物となつてゐる。一日五回の食事を給與するといふ慈善的な名目で、五回の食事を取らねばならぬほど長時間の勞働を『日割』で強制する資本家にとつては、かういふ親衛兵は、願つてもない幸ひであり、襤褸にくるまつた『金』なのである。彼等は、年一年と、げつそり精力を消耗して行く傍ら、資本家の大きい算盤から見れば、殆ど鐵的な昇給をゆるされる。

百七十人のうちにも、かういふ古株の漁夫は百人からの過半數を占めてゐた。そこで、この縄張りの部屋は、傭主側にとつては、多少の摩損を見越しても、安全な、能率的の善い漁場であつた。――が、問題は、いつも資本家側が、勞働者といふものに動きも進步も知識欲もないものだと、機械視してかかることから起こる。

この漁場にも、意外な事から、資本と勞働との對立が、百七十人の頭腦にはつきりと意識されるやうになつた時が來た。

きつかけは、頗る地方色に富んでゐた。

それは、誰かが、ここへ來て、はじめてオーロラといふものを發見した夜から起つた。

4

犬が吠えた。

北極の平原を響いて來る犬の聲には、それの響いて來るだけの荒寥とした廣ろさを思はせる、無限の淋しさがある。

最初の一疋の悲歎が、二疋、三疋の共鳴から、次第に數を增して、夜を隔てながら、數十疋の慟哭の合唱にまで移る間に、勞働者はさまざまなことを考へる。

彼等は、投げ出した脚を抱き締める。或る者は、しみじみと、肉刺だらけの自分の掌を眺める。ストーヴのまはりの猥褻な雜談から遠ざかる者もある。又、二三人は、靜かに考へるために、番屋を脱け出す。彼等は、有り剩るほど考へることを持つてゐる。しかし、暇がないのだ。

『なんだ、ありや？——』

かうして、番屋を出た一人が、眞北を指して、同僚に訊ねた。

『探海燈かね？』

もう一人が暗示する。

『あれか——ありや、北極光さ！』

土地に慣れた者が、説明する。

『あれが、オーロラといふのかね？——凄いもんだねえ』

『どうだい、あの山を見ろよ！』

カムチヤツカ半島の脊髓である、連山の一つが、光の中に、圓錐形の頭を擡げてゐる。それは、山といふべく餘りにも青く、透明で、水際立つて地平線から泛び出してゐる。白く熱した熔鑛爐の中で、不滅の水晶が燃えてゐるやうだ。

その山嶺を中心にして、數十條の照空燈を天心へ向けて放射したやうな、無色に近い、まつ直な光芒が、北の空を一瞬に晶るくしてゐる。じつと見てゐると、客の無い大きな何かのホールに、かんかんと灯をともしてゐるやうで、妙に不安な、虚無的な氣持に撲たれる。

靜かな、太古からの沈默に押ひしがれた地平線には、動くもの一つなくて、ただ、しきりに犬の遠吠えが聞える。

『あれが、つまり、いつも照つてるお太陽さまなんだなア……。

『——行こーか、歸へろーか、

オロラの下アに。……』

一人が、嗄れたテナーを鼻際で胡麻化す。それ以上は知らぬらしく、すぐ默つてしまふ。それほど、この皎々とした、無慈悲な、自然の魔術には、カフエ情緒と非妥協的な何かがあるのだ。

誰かが、思ひ出したやうに、番屋へ走つて行つて、仲間を呼んで來た。

一と塊りの群集が番屋からざめき出て、煙草の火が、褞袍や軍服羅紗のもじりの間に閃めく。どの顔も、どの顔も、あんごりと口を開いて、蒼白い、非現實的な四邊の夜氣に、醜い魚族のやうに見えた。

短かい讃嘆の辭があつて、それが止むと、深い吐息のあとに、深酷な靜けさが一同の上に横はる。——極度に雄大な物に押潰された刹那、人間は、手足をもがく暇もないのだ。彼等は、默りつづけて、あつけなく飯場の横からもとへ歸へりかける。

『おお、寒む！　ヤッパリ火の側がいいや。』

『明日は又早いぞ！』

異様なオーロラの光は、彼等にとつて何のつながりも、何の聯想もない、親しみ難いものであつた。鼾と、歯軋りと、寝言と、石炭ガスとの人間的な温くみを求めて、彼等は廊のドアから、ぞろぞろと番屋の中へ戻る。――

その時である。

突然、ばたばたと彼等の歸へつたと反對の方から足音がして、一人の男が、小舍へ這入りかけた漁夫へ呼びかけた。

『もし、もし、ここは日本人漁場ですか？――』

振り返つた漁夫はぎくりとして立停まつた。全く見も知らぬ人間である。ロシア人の着るルバシカを着て、ひどく息を喘ましてゐる。

『誰だね？』

『わ、私朝鮮人です。――今逃げて來たのです。ロシア人の漁場働く、非道い目に會ひました。助けて下さい。ここは日本人漁場でせう？』

『えッ、鮮人だつて？』

もう一人の漁夫が近づいて、入口の扉を掲げた。三分芯のランプから、黄ばむだ、ほそぼそとした光が流れて、陽に焼けた、土器色をした、その男のやや歪みを帯びた顔に、小深かい陰影を描へた。

『尹――といふものです。別に怪しいものでありません。』

朝鮮人尹は、寒さうに唇を鳴らした。

『まあ、這入るさ。そこにゐたつて、凍えるだけだ。』

彼等の一人が、大きく手を振つた。

『かういふのは、どうするのかな？』

最初に尹に呼び掛けられた男は、誰へともなく訊ねた。

『船頭さんに相談するんだな……。』

奥から欠伸まじりで、太い聲が答へた。

朝鮮人尹は、怖づ怖づストーヴの前まで進んだ。

小柄な、痩せこけて、空腹そうな、如何にも、北國の夜から飛び込みそうな胡散な青年であつた。長い道を、海岸に沿つて逃げて來たものらしく、ヅボンの處々に潮を浴びたのが目についた。コール天の禿つちよろの、耳かくしのある帽子を片手に持つたきりで、ほかには何一つ携帯品とてない。

しばらく、入口の側の寝床から、いろいろな顔が起きあがつて、じろじろストーヴの方を覗いた。一應の檢作が濟むと、それらの顔は懶さそうに、安物の蒲團の陰に沈んでしまふ。

凄さまじい鼾を掻いて、奥の方では眠つてゐる者もある。

のランプが、その人達の寢像を、深く敵つた畑のやうに、ぼんやりと朧かしてゐる。夜具の間からはみ出た、ゴム長の爪先が、鈍い光でランプに反照してゐる。早番の者は、着のみ着のままに、靴穿きで眠るのだ

ごく少數の人達だけが、尹といつしよにストーヴを圍んでゐた。朝鮮人は、珍らしかつた。

『船頭は、起きてこないぜ。怪しいもんでなけりや、明日會ふてさ。――困つたな、蒲團がないんだが。』

幹部部屋へ行つた者が、鼻の先きをまつ赤にして歸つて來た。

尹は、硬くなつた。

『よろしいです。私はここへ眠ります。どうぞ關はんで下さい。昨夜もツンドラの上で寢たんです。』

『よし、蓆を一枚持つて來てやらあ。――もう石炭はねえのか？　飯場の爺、けちな野郎だなア――。』

誰かが、から云つて、倉庫の方へすたすたと出て行つた。尹は、よほど疲れたらしく、周圍の者に何か訊ねられるごとに、鳥のやうに澁い眼をしばたたいた。それが、立ちながら眠つてゐるやうであつた。

翌る朝、二人の人夫廻はしが、朝番の人間を起こしに來た時には、尹は一枚の蓆にくるまつて、仔犬のやうに、ストーヴの前で丸くなつてゐた。

『手前か、昨夜飛び込んだ奴は――？』

額に疵痕のある、兇状持ちらしい顔をした人夫廻はしが、六尺棒の尖端で、尹の靴の底をぐわんと一つ毆くつた。

すべて、、、、、、、、、、であるかを知らうとするには、、、と會はせるに限る。尹は、がばと撥ね起きた。

『は、はい――さうです。』

人夫廻はしは、たゞ、その優越感を對手に示せばいいのだ。

『よし、鮮人だな。もつと眠つてろ、今に親方が會つてやる！』

奥のうす闇を、棒で掻き廻はすやうにして、ほかの一人の人夫廻りは、誰彼を呼び起こしてゐた。

『おウ、疋田ッ！　疋田ッ！　起きろよ、起きろッ！――何、尻が痛いッ？　べらぼうめ！　贅澤云はれに、高い錢出して連れて來たんぢやねえぜ！　起きろッ！　こん畜生、なま拔かしやがると、ひつぱたくぞ！』

その日の朝番の連中が、濱へ出拂つてから、朝鮮人尹は、ピストルの閃めく幹部部屋へ呼び込まれた。

船頭の奥野は、痩せぎすの體躯を、ベンチの上へ角度を多くして掛けながら、部屋中を煙草の煙で滿してゐた。

『親方、この野郎です。』

同行した、向う疵か、ぐいと尹の肩を押し遣つた。

『お前、朝鮮だつて？』

奥野は、煙幕の裏から、顔の半分を顰めた。

『はあ、さうです。尹と申します。』

『何しに來た？』

『私國營に雜夫してゐます。非常に待遇惡るいので、不平云うと、毆られました。逃げたのです。』

『いや、俺の聽くのは、ここへ何しに來たといふのだ。』

『働かせて下さい。何でもいいです。日本人漁場の方働きいいです。これから忙しくなるでせう。……』

『ヘン、うまく化けてやがらア。おい、三木、こいつを身體檢査しろ！　こんなのは、よくロスケに煽てられて赤化宣傳にやつて來る奴だ。――そのルパシカが怪しいや。裏を、裏だ！』

三木の敏捷な指先から、取り出された物は、ポケットのチルオネッツ・ルーブルが皺くちやになつて三枚、それからコペック銅貨が五つ。ほかに、どんな縫目を探つても、煙草の屑一つ出て來なかつた。

『煙草吸ふかね？』

船頭はバットを箱のまますすめた。

『いえ、吸はんです。』

『ふむ――それで、お前は、このカムチヤッカでは、一つの漁場の脱走者は、必らずもとの漁場へ送り屆けにアならんことになつてるのを知つてかね？――つまり、お前はもう一度逃げて來た工場へ歸るんだ。こちらから、態々人をつけて屆けるんだ。さういふ厄介を、お前は俺達に掛けることになるんだ。それを知つてるか？』

『いえ、ちとも存じません。……』

『國營は、どこの工場だ？――』

『ウスチ・カムチヤッカの第一工場です。』

『歩るいて來たのか？』

『は、私、足速いです。』

『大變な野郎だな……すこし怪しい。三木、こいつをふんづかまへて置け、すこし俺が吐かしてやる。』

三木は、尹の兩腕を、背後からぐいと擡げた。小さな朝鮮人は、器械體操の鐵棒に兩腕を『觀音開き』にしようとして、後半身が利かないときのやうな恰好になつた。立ちあがつた船頭は、ストーヴの下へバットの吸殻しを投ると、ちよつと險はしい眼を表に配ばつた。外には漁夫達が好奇心から部屋を遠卷に覗いてゐた。

『おい、お前達、そこへ立つちやいかん！　ここを覗いたら承知しね

えぞ！』
から云つて、彼は、新しいバットヘマッチを擦ると、すぱすぱと早口に吸ひ出した。折から、飯場の方へ急ぎ足に通つて行く副船頭を見つけた彼は、歯から煙草を抜き取ると、
『青木！——おい、青木、その邊へ誰も立たんやうに、見張つとれ！』
と命じて、一歩、尹の方へ近づいた。
朝鮮人尹は、人夫廻はしの腕の中で、鼬のやうに胴震ひした。
飯場で、いつも汁鍋の前で、二本の杓文字を爭奪し合つてゐる群集も、今日はひつそりとして、耳を澄ましてゐた。或る者は熱い飯湯氣の間から、眼を細めて、幹部部屋の前に踵を突張つてゐる青木の姿を瞶めながら、急いで箸を動かしてゐると、別な人間は、この機を幸ひと、汁の果の南瓜をこてこてと掬ひ上げながらも、幹部部屋にひ——いツといふ聲がすると、その半分を鍋の中へ取り落した。
『貴様ツ、ほんとに、宣傳しに來やがつたのぢやないのか？——ほんとか？』
組頭奥野の甲走つた聲が裂いた。
一同は、互に顔を見合はせて、背の高い奥野か、蒼い顔に反ッ歯を剝きながら嚙みつくやうに、對手を攻めてゐる姿を、眼の裏に描いた。それにしても、朝鮮人の悲鳴を擧げてゐるのは、何をしてゐるからだらう——？
もう一度、船頭が何かを、長たらしくがみがみ云ふと、今度は、朝鮮人の方でヒステリックな聲を張り上げた。
『私は、日本國民です！——朝鮮日本に合併されたです。日本國民の私は、日本國民の貴君から虐待される理由ない……です！　さういふことするから、朝鮮人、、です！』
稍しばらくの間、飯場の空氣には、蠅の唸る音しか聞えなかつた。
次に、人達は、昂奮した蒼い土色の顔の尹が、警官にでも護送されるやうに、青木に片腕を取られて、飯場へ連れて來られるのを目撃した。
『温和しくすて、めしを食へ。食つたら、じつとして部屋に待つてるんだ。いいか？』
青木は、亂暴したのが尹ででもあるかのやうに、から云つて、飯場の片眼の爺さんに、何かを云ひつけた。
尹は、終日、外へも出ずに、じつとしてストーヴの傍にしがみついてゐた。まるで、石炭爐べに飼はれたやうに、二度の食事を摂つた以外には、人の出はいり毎に、石炭を小さたスクープで掬つては、火の中へ投り込んだ。

『どうも、ありや、鮮人だなんて云ふけんど、日本人らしいつてさ。』
ツンドラの上で、網を繕つてゐる漁夫達は、そんなことを噂し合つた。

『人夫廻はしの丸山がペトロさ行つたちうのは、ほんとかね？』
一人の前歯の缺けた男が云つた。

『あ、ロスケの巡査引張つて來るだとさ。』
『だつて、あの丸山ぢやロシア語が出來めえに。』
『なに、むかうにあ、ちやんと通辯が備つてあるんだよ。』
『ペトロまでは、よつぽどあるそうだね――十里とか云つたつけな。』
『十二里と聞いてるがな。』
『一日たつぷりかかるかな――もつともこの日脚ぢや大丈夫だろ。』
『馬鹿云へ、誰が歩るいて行くものかな。俺先刻、ランチで丸山とほかの一人が出て行くのを見てるんだ。陸傳ひに行つたら、大變だ。河があらあ――。』

濱では、鹽叺の運搬をやつてゐる連中が、人夫廻はしの眼を忍んで、こんなことを囁き合つてゐた。

『ロスケの漁場ぢや、迚も待遇がええちう話ぢやねえか？』
『それぢや、何故すて、あの朝鮮が逃げて來たかしら？』
『さあ、親方の話ぢや、赤化宣傳だろて云ふがな。――朝鮮人だなんて、實は日本人が化けたのだろ、と云ふ話さ。』
『ともかく、俺の知つてるもんが昨年、何とか云つたな、何とか兄弟といふ會社へ一夏稼いだが、仕事は樂だし、一日たつた八時間しか働かない上に、しこたま金を殘して歸へつたよ。隣村んもんだがな。そりやロスケは勞働者を大切にするそうだ。何でも、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、云つて、偉らくソノ、、、でも、、に限つて、ちやほやするそうだ。――だとも。困るのは、パンだつてな。何しろ、大勢日本人が働いてるもんだから、米のめし位焚かせたらよさそうなもんだが、そこはさうは行かねえらしい。』
『しかし、あの鮮人の野郎は、怪しい奴だな……。』

夕番の交替に、第四回目の夕飯が出される。これは、一日の正餐だ。飯場でも、この夕飯には、新しい焚き立ての飯と、別な南瓜を切り込んだ味噌汁と、古るい澤庵の上へ六七本の新しい澤庵を切つて皿の上は側へ撒布し、一人當り半匹位の干鱈を汁鍋の中へ擲き込む。同じ味噌汁でも、永住的な澤庵でも、かうして出されて見ると、多少の變化はある。その變化は、本質的には何等の變化を伴はないことだとしても、早朝から三回も、同じ物の殘滓に、水を注ぎ足したり、下から引繰返へしたりして食はされてゐる勞働者達にとつては、全然メニユウがちがつたほどの變化である。

従つて、日盛り六時頃の夕飯は一段と雑沓する。

最後の一人が夕飯を食ひに出た時、朝鮮人丹も、赤く火膨れのした手の甲を擦りながら、飯場まで出て行つた。しばらく彼は、茶椀と汁椀とを入れた大笊の前に立つてゐたが、それが空らだつたので箸だけを持つて、日本人勞働者のあさましいほどの食慾の亂舞を打戍つてゐた。

『どうした、茶椀がねえのか？』

一人が親切に尋ねると、彼は、悄氣た顔をして、

『あとでよろしいです！』

と答へた。

そして、もう一度、番屋の蓆の前に、恨むやうな眼でこちらを見返へつた彼は、それつきり、何處へ行つたものか、ストーヴの側には姿を見せなかつた。

夕飯が終つて、三人の年増の女漁夫を加へて、いつもの猥褻組が、前方のストーヴへ陣取り掛けると、脚氣の氣味で早く臥ようとした男が、蒲團をめくつてから、不審そうに一枚の紙片を手にして讀んでゐた。

自分の箸だけは、火事があつても持ち出す心掛けの秋田者の田中も、枕の下へ箸箱を安置しに歸へると、そこに挾まれてある活字刷の紙片が眼についた。

二人は別々な寝床から、蓆の隙を洩れる光でそれを讀んで、互に顔を合せると、苦るし紛れにするやうな微笑を泛べた。

『おい、おい、こりや何だい？――誰だ、こんな物置いて行つたのは？』

から仰山な聲を張り上げたのは、脚氣と田中ではなかつた。入口のストーヴに近い寝床を整理して、いつもの『おいちよかぶ』を始めようとした、熊谷と呼ばれる盛岡からの渡り者であつた。

『はてな？』

熊谷は、紙片の裏表を引繰返してから、讀み上げた。

『日本人勞働者諸君！

諸君勞働者ハ、誰ノ爲メニコノ露領かむちやつかへ來テ勞働スルノカ？

思フテモ見給へ、コノそうゔいえーと・勞農ろしあ社會主義聯邦共和國ニオイテ、、、、、、、、、、、、日夜ハゲシイ勞働ニ従事シテ、ノコシタ莫大ナ利益ハ、、、！ 見ヨカノ、、、株式會社の如何ニ英國資本閥ト提携シテヰルカヲ！ 英國ハ正ニ勞働者國デアルトイ

フダケノ理由カラろしあニ、、ヲ挑ンデルデハナイカ！
醒メヨ、日本人勞働者諸君！　兄弟、勞働者達！
醒メテ、諸君ノ勞働ノ利益ヲホントウニ諸君ノ物トスル爲メニ、
コノ漁區ニ於テ、、、、、、、、、、、、、、、、！
、、、、！
コレコソガ諸君勞働者ノ、、、、、、、、、デアル！
ろしあ沿岸カラ、、、ノ、、、、、ヲ追拂へ！　漁業ヲ諸君ノ手ニ
取リ戾セ！
日本人勞働者諸君、眼ヲ覺マセ！　諸君ニハ、ガ一人シカナイコトヲ知レ。――即チ、、、、、、デナイモノハ、ドノ國デモミナ手ヲツナイデ、、、、シヨウトシテルコトヲ！
、、、、！　、、、、、、！
盛漁期ニオケル、、、、、、、、、、、、、、！
コレコソハ諸君ヲ幸福ニスル唯一ツノ道ダ！

熊谷は、事實上、皆までこの撒ビラを讀まなかつた。後半は、別に讀み手によつて、より高らかに讀み上げられた。それが讀み終られた頃、熊谷は船頭奧野以下の幹部五人を案內して、ものものしく番屋へ闖入して來た。

奧野が第一にしたことは、撒ビノをまた手にしてゐた宇田川といふ東京者を、いきなり棒で毆ぐりつけることだつた。この一團の手續を履行したあとで、歯を尖からせた彼は、同じ棒を采配のやうに振つて、幹部連に番屋全部の家搜がしを命じた。

『この野郎、こんな物、讀み上げる奴があるか！』

不平そうに、淚を泛べて立ち擧がつた宇田川の手から、猿臂を伸ばしてビラを捲り取つた船頭は、喉から吐くやうにから對手の言葉を封じた。

『太い鮮人だ！――野郎、どうしたつて逃がしはせんから、青木！誰か青木を呼べッ！』

同じやうなビラは、何時どうして撒かれたものか、めいめいの蒲團や枕の下には、一二枚づつ必らず挿入してあつて、聚めて見ると百八十五枚からあつた。

奧野はその一枚をポッケットへ捻ち込むと、あとはストーヴへ抛き込ませた。

『みんな、暫らくここを動いちやならんぞ！――それで、ちよつと聽きたいことがあるが、誰かこのうちで、あのヨボの逃げて行つた方向を見た人間はないか？』

から船頭が、烈風を喰つた煙筒のやうに喚めいてゐる傍から、一と間にゐる青年は、手早く先刻のビラを紙撚にすると、蓆と丸太との間

挾み込んでゐた。

その青年は、右の眼に裂傷を帶び、額の方々が青く腫れあがつてゐた。

「はッ、何か用ですか、大將？」

緊張した場面へ、青木の圓るい脂鼻が、深い皺を見せて這入つて來た。

5

間もなく、ツンドラの春――夏がやつて來た。

ベーリング海の、最初のひとうねりの波が、鏡のやうに、午前二時半の日の出を反映したと思ふと、急に氣がかはつて雨になり、濛々とした濃霧のそとに、太陽は追ひ出されてしまひ、やがて、再度の氣がはりから、午前十時頃になると銀ののべ板のやうな日光が、黒い海、曝れた大地を、烈しく灼きつけて、それが夜の九時頃まで粘いつぱいに火力を弛めないのである。

かうした日數のあとで、ツンドラには、錦繪のやうな夏が來るのだ。

この季節の特色は、人間の想像力を馬鹿にした、大自然の極端に派手で豪奢な復活祭であることにある。

數十、數百年以來の、生きては死に、死んでは生きた草の根で覆はれた、部厚な絨氈地層に、温度は酵母のやうに作用して、一夜で、猛烈な色彩のさつきや、つまとり草や、千鳥桔梗や、リンネ草などが、花卉類の原始色を極度に誇張して吹き揃ふ。黄金の蓆、血綿のやうな團塊、紫に、碧空の色に。――その上を、ゆるい水車小舍の唸りのやうに、小粒な蠅や虻が、芳香に醉つて飛びまはる。

これは又、オーロラとちがつて、心から勞働者を親しませる。

しかし、この場合にも、純粹に美しいものに對して、人間の本能の持つ鑑賞力は、大部分彼等の主觀的狀態によつて抹殺されてしまふ。百七十人の或る者にとつては、花が開かなかつたも同然である。また、その一部にとつては、富豪の花卉園の横を素通りしたも同じである。花が美しければ美しいほど、彼等は悲しむ。咽せるやうな匂ひ、幻覺的な虻の唸り、それらは勞働者を複雜に苦しめる。彼等はその上に寢ころんで、遊び狂ふであらうところの、郷里の子供だちを思ひ出す。若い日の、日向の多かつた戀愛時代を思ひ出す。その花を摘んで、ただ何となく歌をうたふ、まだ會つたことのない若い娘を考へる。そして、それらのことは、直接彼等の網繕ひとも、倉庫の整理とも、濱の井戸掘りとも、濱デッキの築造とも、獵犬の運搬とも、機械の据附とも、船底のタール塗りとも、米磨ぎや椀洗ひとも關係がな

いのである。

たまに雜夫の連中が、人夫廻はしに小突かれながら、ツンドラの奥深くまで、枯木や古材木などを、燃料にするために拾ひに行くときに、この狂人じみた、北極の俄か造りのパラダイスの美しさに醉つて歸る。

彼等の一隊が、漁場から、ペトロパウロスクの方へ、四五町も奥へ行つて、幅三間ほどの淀んだ小川に出逢はした時である。集めた古材木や、曝れた船板を、路々へ積み重ねてそこまで出た彼等は、小川へ來たことが、一つの合圖でもあるかのやうに、腰を下ろしてやすむことにした。

『ハラシヨウ!』

一人の、いつも『日露會話階梯』といふ、片假名附きの會話の手引きを懐ろに入れてゐる男が、かう嬉しげな發音で云つて、ごろりと草の中へ寢ころんだ。寢ころんだと云つても、その實、草の中へ見えなくなつたと云つた方がいいかもしれない。バツトの煙が、花の間を縫ふて、糸のやうに立ち騰る。

『暑いね。』

かう云つて、もう一人が赤毛布の裏をつけた、ぼろぼろの絆纏を脱ぐ。その下にも、同じやうな、襤褸袢纏が着込んである。

もう一人は、函館以來、底が、洗濯屋のアイロンのやうに擦り減つた、ゴム長を脱ぐ。

四人目の男は、犬が平原に向つて訴へるやうに、ただ棒立ちになつて、追分けを歌ふ。

『……せめて、歌棄、
磯谷まで――。』

人夫廻はしの『杉山さん』は、わりに寛大である。人間、ごぼごぼと濁つた音を立て、膨れあがつた夏の川が、あざやかな、きつい原始色の花花の間を、まつすぐに流れてゐるときに、さういつも函館に暖簾の下がつた大きい店を持つ山崎徳太郎商店の利益だけを考へてゐるわけには行かない。のみならず、杉山君は、歯ブラシ髭を蓄へてゐるだけあつて、とかく若い者と共鳴したがる自由主義思想の持ち主なのだ。だから、雜夫達は、こと更に彼を『杉山さん』と呼ぶ。

『どうだな、かう日和がいいと、おいらも、のこのこロシアの内地へでも歩いて行きたくなるよ。――ペトロまでだつて、これで十里そこそこなんだからな。あすこは、今漁場のさかる時期だから、さぞごつたかへしてゐるこつたらう。』

これには誰もこたへる者がなかつた。云ひ合はしたやうに雜夫達は、幹部連を警戒した。ことに、撒きビラ事件からといふもの、

人に内通して、連絡をとつた者がありはしないかといふ嫌疑があつたので、船頭以下の六人は、いろいろな形で勞働者の間に、探ぐりをいれてゐたからである。

一向に自分の氣持ちに反應するものがないのを見てとると、杉山君は、川の方を向いて大きな欠伸をした。紫の烟が、彼れの手元からまつすぐに立ち上つて、その大きい鼻孔を擽ぐるやうに掠めた。つづけさまに、彼は二つほど、烈しい嚏をした。

『ロスケの工場は、八時間勞働、八時間遊戲――それに八時間睡眠と來てゐて、まるで、、、、、、、、、、、、、、、、を見せつけるやうなものだ。機械もアメリカ製の最新式を使つてゐるし、お湯へも這入れるし、本も讀ませる、おまけに女工達とどんなにふざけまはつても天下御免と來てやがる。いいな！――俺達の漁場の婆アどもを見あがれ！』

この獨白は、すつかり諦めてしまつた杉山君によつて、誰の返答をも要求しない、一とくさりの感想として、空氣の中へ吐露されたのである。

『まつたくでがすな、あのうつい一寸ふめる代物は、まづまづ松代チユう蠍つ子ぐれえなところでがすべをん。』

女の話になると、意外に杉山君は反響を得たのである。反響した男は、仙台者の小野寺といふ、在郷軍人であつた。

『杉山さんなどは、色男だから、仲々あの八人が大騒ぎしてゐやう

すね。……』

『冗談、』杉山君は苦笑で言葉を切つた。

『――あんなあばずれどもと、何とかするんなら、逃げ出した方がましだよ。君達こそ、船の中で、みんな、、、づつとられた組ぢやないかね？――あいつらア、、、、、みたいなものだよ。』

杉山君は、案外くだけて笑つた。

もう一人が、妙な手つきで何か猥褻なことを話し出さうとした途端に、のつそりと、一人のロシア人が、一同の頭上に現はれた。

『おお、ロスケだ！』

ロシア人は、大きいパイプで煙草を燻らしてゐた。その鼻を中心に、いろいろな細い皺があつまつて、それが一圖になくなつた

と、彼は笑つてゐた。

『日露會話階梯』が、まつ先に名乘りをあげた。

『ズドラフストウイチエ！』

『日露會話』の第三頁が、たしかに『今日は！』といふ言葉のロシア語を、さういふ風な小むづかしい發音で指定してゐた。

『ダー、ダー、ヤポンツエー！』

『何といふんだね？』一人が、『日露會話』の袖をひいて訊ねた。

『おい、序に、この間逃げた朝鮮人は、お前の方の宣傳部から寄越したんぢあないかと訊いてみろ！』

杉山君は、命令的に、かう『日露會話』に要求した。

『日露會話』は、『食堂へまゐりませう、』から『何卒お湯をさしてください。』『いや、ありがたう、滿腹です！』までめくつてみたが、一向に、杉山君の註文に應じたやうな言葉は見當らなかつた。

ロシア人は、しきりに小さな本を、めくつては眞つ赤になつてゐる日本人を、好奇心から瞰おろした。

『ヤポンツエー・トリコ・アレンダトルヰ・ザ・ルイボロビー。——インペリアリステー・アレンドウユート・ゼムリー・オト・ラボチユーフ・ノ・ポーチエト・ツイナー・トロチエーブニフ！ ハツは、ハツは！』

『ありがたう——即ち、スパシーボ、までで、ここは終りだ。糞ッ！こんな本は、何の役にも立ちあしない！』

かう云つて、青年は、本を擲きつけると、どつかと草の上へ腰を下ろして、漫然とした笑みを湛へながら、對手を打戍つた。

『いまのは何と云つたんですか、は？』

仙臺の在郷軍人が、『日露會話』へ訊ねた。

『あれか、あれは君、君達日本人は、はるかに北海の怒濤を蹴破つて、國家のために艱難辛苦を厭はず、年々數千萬圓の利益を國家に齎らして歸る——すこぶるよみすべき、忠君愛國の民である！ てなことを、ぺらぺらとぬかしただけの話さ。』

青年は、すこぶるの機智で、笑ひながらかう云つてのけた。その實、ずゐぶん苦しかつたのである。

『ヤポンツエー……といふのは、俺達日本人のことだ。それだけは解るが、あとは皆暗號電報といふところかね。——』

杉山君は、腹の底まで日光を入れるやうに笑つた。

ロシア人は、草の上に投られてある『日露會話階梯』を、巨きい赤い手で拾つた。同じ巨きい、赤い指は、しきりにその頁をめくつてゐたが、

『鮭』

といふ字へ來ると、いく度もその原語を發音しつづけた。次には、

『漁業』

といふ字を發見して、それを彼等の眼の前に突きつけた。

『ルイボロビー！』

それから今度は、『罐詰』である。一同の頭が、小さな本の上へ集まる。その上で、ロシア人は肺臟の大きさうな笑ひ聲を上げた。

『工場』

それに、もう一つの字が加はる。

『國營』——『國營工場』

稍永いことかかつて、ロシア人は、

『勞働條件がちがひます！』

といふ言葉へ、巨きい爪の痕で、アンダ・ラインした。

『ははア、こ奴、俺達へ、國營へやつて來いと云つてるんだな！　宣傳だよ！　これこそ赤化宣傳だ！』

杉山君は、急に齒ブラシ髭をなでながら、外りかへつた。

『しかし、こんな宣傳なら、ちつとも恐ろしくないね。——大體、、、こでやかましく云つてるのは、皆こんな種類の、何でもないことなんだからな。』

突然、日本人の一人が、大きな聲で叫んだ。

『レニン！　トロツキー！』

その聲に應じて、ロシア人は、茶褐色な蝸牛の殼のやうな瞳を圓るくした。彼は、しばらく懷疑的に、さう叫んだ男を瞻めてゐたが、やがて、大きく肩を搖すぶりながら、誰へともなくかう云つた。

『ニチウオ！』

さう云ひ放つたかと思ふと、この異樣な大男は、何の愛想もたく、靴を鳴らして草を踏みわけながら、ツンドラの上を、歩み去つた。外國煙草の、強い香りが、日本人一同の鼻孔を撲つた。

『ロシア人て、妙な國民でがすな。』

仙臺の在郷軍人が、この短い朝飯前のエピソードに、結末をつけるやうに、眞面目くさつて、かう斷言した。彼等に接した、ロシア人は、決してこの一人だけではなかつた。

翌る日の朝、突然、沖へ、赤旗をたてたランチが現はれて、作業に從事してゐる漁夫達の間を縫つて、二人の役人らしい者と、一人の兵士と、朝鮮人らしい通譯が、幹部部屋をさして這入つて行つた。一人のロシア人は、G・P・U・の士官で、もう一人は稅官吏、二人とも顏の半分を濃い髭で埋めてゐた。

『あれだけ髭イ生やしてゐたら、よつぽど寒さがちがふだべに。』

漁夫達では、そんなことを云つて笑ひあつた。

幹部部屋では、船頭の奧野が、青木ともう一人の人夫廻はしの丸山等を參謀格にして、食卓の武器に凭れながら、『外交』を始めてゐた。

この『外交』には、多分のウオツカも流用された。酒量の强いロシア人は、咽喉へぶちまけるやうにウオツカの盃を乾した。

『この間、この青木君をさし上げた通り、ああいふ宣傳をする人間は、ぜひ貴國政府で取締つていただかないと困りますな！　その後、

あの尹といふ不逞鮮人を捕へてくれましたか?」

船頭は、自分の不確かなロシア語をすてて、朝鮮人らしい通譯に、皮肉な長たらしい質問を出した。

どこと云つて顔に特長のない、眉毛の薄い通譯は、流暢なロシア語で、ごく客觀的に奥野の言葉を、青い帽子を被つた、國家保安部の士官へ通譯した。すべて、これから、この部屋には、同じ話柄が二重に反復された。

「朝鮮人が、貴方の漁區に對して、勞働問題に關する多少の宣傳をやつたとしても、それは貴方がたの御注意を要する事柄であつて、ソヴイエト・ロシアは、それに對して何等の責任を負ふわけにはいきません。況んや、その、、、が、、、、、である以上は、私達政府と何等直接な關係がないことはあきらかではありませんか! それとも、何か、その男が私達の政府と直接關係があるといふ確實な證據がおありですか?」

ロシア人は、ちよつと腰のピストルへ手を當てて、片手を揮ひながら、通譯の方を向いて熱心に話した。

青木は、これには返事に窮して、コップの一つへ溢れるほど透明な酒を注いだ。稍あつて、彼は、脱いである壁の外套から、例の撒きビラを取り出して、その皺を伸した。

「これには、ご覽の通り、明らかに貴國政府を侮辱する言葉が書いてあると思はれますがね、」と云つて、彼は、大事な書面でもあるかのやうに、新聞ざらへ刷つたこのビラを通譯へ手渡した。

通譯は、青木の言葉を繰り返してから、二三語士官と話しつゞけて、今度はそのビラの飜譯にとりかゝつた。

人間でいつぱいにたつたこの小屋の空氣の中を、強烈な酒の香が立つて、眞夜中の醉漢のやうな虻が飛び廻はつた。

「――あらゆる資本主義制度の下に苦しんでゐる勞働者は、、、、、、、、、、、。又、それが當然でもありませう。しかし、ソヴイエト・ロシアに對する友愛や、同情などの意志の表示と、ソヴイエト・ロシア政府それ自らの行動とは、鮭と蟹ほどの相違があります。こんなものは、てんで問題になりません。――もし、本官が、貴方がたの御困難に對する同情の一端として、御忠告申上げたいことがあるとしましたならば、よろしくこの文書を本國の會社へ御送りになつて、なるだけこの文書に於て、、、、、、、、、するやうな部分、即ち、、、、、、、、、會社の重役達から命令してお貰ひになることでせう!」

こんな頼りのない押問答の結果、奥野は、三本のウオッカと、小ダースのサッポロ・ビールとを空にした、士官達が検査済みのあと出て

行くのを見送るより外はなかつた。この男、悲しいかな、赤色勞働組合といふものの存在を知らなかつたのである。

6

『――今日、いよいよ恙なく、この漁場に於きまして、網卸ろしが出來たといふことは、偏へに皆樣の協力一致の努力の賜物であります。そのことは、私ども幹部一同、山崎德太郎社長に代つて、厚く皆樣に御禮申上げる次第であります。今更、私風情が申上げますまでもなく、賢明な皆樣の疾くに御承知のこととは思はれますが、抑々このカムチヤツカの漁業は、我が大日本帝國が、かの日露戰役の際、數千億圓の國帑と數十萬人の同胞の血を流しました犠牲によつて、名譽ある戰勝の記念として獲得しました利權であつて、思へば、實に、その因つて來たるところの意義は深く、その事業の持つ價値たるや偉いものでございます。御承知でもありませうが、ここは名にし負ふ北極の端、東にベーリング海をめぐらし、西にオホーツク海を控へ、露領カムチヤツカの土地にいたしまして、我が海國男子を以つて誇る、諸君日本帝國臣民達は、勇敢にも他國の領土に於て、水産業の第一線に立たることにございます。――然る所以を持ちまして、諸君の一擧一動は、實に、、、、そのものの一擧一動とも云ふべきほど重大な意義を持つものと考へられまする。諸君が各自の勞働に身を委ねられ、專心專意これに從事されることは、とりもなほさず、、のために、日夜、、を摘んでゐることと同じなのであります。諸君は、實に光榮ある産業界の一部隊、前哨兵にも等しいのであります。本年の漁獲高が、必らず大豐漁であることを豫想いたしまする私共は、皆さんがその豐漁を齎らすことによつて、直ちに我が、、のために、、を盡されることになる、といふことを切に感じまして、今からその實現の日の一日も早からんことを祈つて居る次第であります。――でありまするから、與々も皆さんのうちには、、に對する、、、最も忌はしき、、、、、を爲す者、徒らに、、、、、、、、、、類ひの邪説の煽動に耳を藉さるることなく、自分の家に對して奉仕するやうな氣持ちで、誠心誠意この漁場に於てお働きが願ひたいのであります。……

……』

ここで終るのかと思ふと、船頭の奧野は、もう一くさりのスピーチを附け足した。

『……お働き下さつた結果によつて、本會社と雖も、わづかに個人經營の會社ではございまするが、かの、、漁業や、その他、日代三吉、八島八郎、萩和宗太郎その他の諸君にも負けないやうに、給金も增して上げまするし、魚もどつさりお土産に差上げまするから、儂等幹部

つばいにお働きのほどを、ここに會社に代つてお願ひいたします。——ええ、綱御ろしとは、ほんの名ばかりでございまして、何も御馳走はございませんが、この次ぎの一萬石祝ひを樂しみに、何卒一杯召し上つて戴きたい。』

この切口上な挨拶から、一合づつの瓶と、五個のぼた餅とからなる祝宴が始まるのである。その晩は、毛唐くさい身裝の好きな奧野も、紺の香のする新しい印絆纏を着た。衿には『山崎德太郎商店』と書いてあつた。

女達には、酒の代りにサイダーとかりん糖、ぼた餅などが出た。一合の酒は恐るべき速度で、疲れ切つた勞働者の體軀の纖維へ浸み込んだ。糖分に飢ゑてゐた彼等は、咽喉が痞へるほど、がつがつと甘い物を貪つた。酒の飲めぬ男は、一合の瓶で、一皿の餅を買つた。餅の嫌ひな男は、一皿の餅で、二三本の酒を掠めた。誰一人として殘すものはない。脚氣に罹つた三人の男は、何とかうまい言を云ひくるめられて、忽ち分前を掠められてしまつた。

『、、の爲めだ——もつと醉つぱらへ!』

『俺らア、、、、、、の第一線だ、およし、さあこつちさ來よ! 抱いてやるぜ!』

『會社の利益は、俺達の利益だとよ。松代つこ、さあツンドラの上さ行つて二人で寢んべ!』

だんだんに呂律が廻はらなくなつて來た、この綱御ろし祝ひは、八人の女の爭奪戰になりかかつた。その間、げえげえ吐く者もあり、他人の蒲團の上へ小便をする者もあつた。

『……おやぢこれ見ろ、
、、、、だよ、何んてまがいんでしよ。……』

などと、鉢卷きをして唱ひ出す者もあつた。隅の方に連れこまれた女が、赧い顏をして一座の方を見てゐると、急に撥ねかへつて逃げて來るのもある。番屋の外では、晩くまで女達を追ひ驅ける男の犇めきが聞えた。幹部達は、いい加減に座を切り上げて、部屋へ歸ると、改めて、筋子や蟹罐を肴にウオツカを飲み直した。

『酒と女と——さへ當てがつて置けば、野郎共は、當分大丈夫さ!』

これが、山崎商店代理奧野の哲學であつた。

醉つたまぎれに、熊谷の『おいちよかぶ』に釣り込まれて、先借りの分までせしめられる者もあつた。何もなくつて、軍手や、帽子まで張る男もゐた。もしものことがあつてはいけないと云ふので、副船頭と、丸山とが、番屋の廻はりを黎明近くまで警戒した。二人の外套のポッケットは、ピストルとポッケット・ウイスキーとで重かつた。

からして、彼等に許された亂醉の一夜が明けると、──凄さまじい雪崩れを打つて、魚群の襲來する最初の朝がほのぼのと明けた。

鱒は、鮭と先を爭つて、産卵のために川をめがけて殺到した。海は、澁茶を煮つめたやうに褐色に變じた。海豹は魚を追うて、コンマンドルスキー邊から、大擧陸をめがけて押して來た。熊は、人間の居ない場所をねらつて、川岸に撥ね上がる魚をあさり廻はつた。

大きな半島には、鋭い鞭のやうな、夏の最初の光線と共に、騒々しい生物の移動と生存競爭が始まつた。その中には、人間といふ飢えた動物も居つた。

7

網は沖へ張られた。縱四間、横十間ほどの長方形の箱のやうな、目の五分角の、糸の窖へ、魚の這入る個處だけ眞ん中を圓るく刳り拔いたもので、底は五間も海底に浸つた。網の幅だけ浮木が現はれてゐて、それを目安に、漁夫は漕いで行くのである。一艘の川崎船には、二十人から乘つて、それには部長が音頭をとる。網を手操り上げる時間が一時間、漁があつたとなると、日に十五六回は出動する。一と網の漁獲高は、大概一千尾ぐらゐのもので、それを船へすくひ上げて、發動汽船で岸まで曳いて歸る。魚は大きい畚で、船から直ちにウインチで捲き上げられ、それが、空中で水を切りながら、濱デッキの上へ、算を亂して開けられるのである。沖へは、一と網ごとに三十人づゝ出た。それ等の勞働の結果は、陸の百三十人ほどの勞働によつて、次第に食料品の山脈を築いて行くのだ。濱デッキでは四十人からの漁夫がマキリを持つて魚の腹を引裂いた。小さな踏臺みたいなものに腰を掛けて、その前にある箱へ、筋子は筋子、鮭は鮭とべつべつに投り込まれた。デッキのすぐ傍をトロッコが通つてゐて、割かれた魚を滿載しては、濱の方へ運び出した。筋子笊は、一尺五寸ほどの口徑を持つた不潔な容器であるが、それに魚の血みどろな卵を充滿して、四人の雜夫が山樵夫のやうな「背負ひ子」で筋子を運んだ。トロは六臺あつて、一臺に二人づつ附いた。鹽漬にされるのは鮭だけで、鱒は畚で罐詰工場へ運ばれる。トロで運んだ鮭は、一時、鹽の山からシャベルで投り出される荒ら鹽の中へ埋まる。廣大な鮭の山が一町ほどの長さに盛り上がつて、それが烈風の當る濱の砂丘のやうに、幾つも幾つも高まつて行く。

罐詰工場では、最も幼稚な、不衞生な、機械力と關係のない作業が始められる。高い木馬のやうなテーブルが設けてあつて、四人の漁夫が、一尺五寸ほどの庖丁で、絶えず首を振りながら、押し寄せて來る鱒の大群を、鱒の大きさだけに切斷して、血液の流れる斷面の滑り台

の上を、三人づつの女漁夫へ落してやる。無數の、蓋のない空罐を持つた女達は、臓腑の破片といつしよに落ちて來る漁肉を、黒い垢の溜つた爪先で罐の中へ押込む。一人の男が、罐の蓋とはんだとを持つて、ごく原始的な手附で鱒の罐詰を製造する。一とわたりはんだの附いた生魚の罐が揃ふと、その男は、背後の醜い大坊主のやうなボイラーの中へ、それを積み上げる、亜鉛一枚奥の機關場では、唯一人の機械技術の獲得者である、薄痘痕の男が、ゲーヂ・グラスと腕時計を見くらべながら、スチームを上げてゐる。錆の附いたボイラーに、錆の附いた鐵蓋が載ると、一間の高さを蓋附け人が土足のままで下りて來て、『おう、宇田さん、やつてくれよう！』と叫ぶと、薄痘痕の宇田が栓を捻つて、蓆張りの工場へとスチームを通す。大坊主は、吸入器を當てられる子供のやうにじつとしてだんだん汗をかく。蓆張りの工場は燒けるやうに熱くなる。無數の蠅が、カムチヤツカ全半島から、このうす生臭い、血だらけな、人間の汗と體臭と濕氣のやうな溫みに充滿した作業室へ魅惑されて、蓆二枚ぶりの入口から、雨のやうに飛び込んで來る。工場の外側、即ち蓆の外側には、嗅覺の强さうな蠅の群が、鐵のやうにへつたりくつついて、何かの隙を狙つてゐる。罐詰は、一定の熱量を與へられた上に、もう一度取り出されて、冷却した上で、空氣抜きをされる。恰度レッテルの貼つてある罐に、はんだの痕跡のある、田舎廻はりの『鮭罐』といふのか、この漁場あたりから出る鱒の、ナポレオン當時とさほど變つてゐない製造法の、罐詰なのである。筋子部屋には、四人の漁夫が、魚の胎兒を鹽漬けにして、大樽へ詰め込むといふ殘酷な作業に、血だらけになつてゐる。かうした樽詰は、この山崎の漁場では、一と夏三百樽ぐらゐしか出ないのである。罐詰は、ごく大漁で六百箱、落ちて四百箱ぐらゐしか内地へ輸送出來ない。

鮭は、蓆の鹽に埋められたまま、十日から十五日ぐらゐまでそのままにして置かれる。ときどき熊が來て、その鹽鮭を浚つて行く。その間に蠅が鮭の身へ卵を産み附ける。蛆が湧く。さういふ魚は、内地へ來ても肉に締りがなくて腐つてゐる。そのあとで、『形付け』が行はれる。これは八人づつの漁夫が一組になつて、鮭の山を、一日に一石づつ整理して行く。一石は鮭にすると八千尾、鱒はその二倍ぐらゐに相當した。その整理の方法は、『鹽切り』と呼ばれて、魚の肚へ鹽を詰めるのである。一日で卸ろし立ての軍手の指がぼろぼろに擦り切れるほど、粗い劣等な鹽が使はれる。魚の肚へ鹽を詰めると、それを一石づつ四角な山に積む。八疊四方ぐらゐの山が濱には五十も六十も突立のやうに築かれる。それ等は、積み上げられるや否やしつかと莚掛けされて、歸へりの汽船を待つのだ。

――魚を漁獲して、それ等を食料品にまで生産する過程を、百六十三人の勞働者は、眼も鼻も耳も無い動物のやうになつて、單純な激勞を、無數に、機械的に繰り返した。彼等を、勞働する動物にするために、七人の幹部は、彼等よりも、もつと機械的に、もつと無神經に呶鳴り散らし、動き廻はり、擲きつけ、威嚇して歩いた。

わけても、この盛漁期に、魂の底まで醉つぱらつてしまふのは、圓い鼻と、凄い眼の持主である副船頭の青木であつた。彼は、血を嘗めた熊のやうに暴れまはつた。この男の持つてゐる野獸性は、最初の一と春の鱒の群を見たときから、狼のやうに猛り立つた。彼れの眼は血走り、鼻のくびれは深み、棒を握つた拳には血管が膨らんだ。當るものは突き飛ばし、躊躇してゐる者は蹴り上げ、少しでも命令に不服な顏をする者があると、顏が歪むほど毆ぐりつけた。怒ることがこの男の勞働の能率を増すことであるかのやうに、彼は働きながら怒り、怒るとますます他人の氣づかないことにまで飛びまはつた。まるで、彼れの行動は、非常に腹立たしい仕事の中を、どうにかして早く切り上げようと焦心つてゐるかに見えた。鮭は、確かにこの男を狂人にした。

青木の殘忍性の、當面の摘發者は、番屋に寢てゐる三人の脚氣患者と、一人の淋病やみとであつた。彼は朝の二時頃から、自分の受持ちでもない人夫起こしに呶鳴りこんだ。

『やい、この穀潰し奴！　貴樣らが寢そべつてけつかるために、昨日は一石からの鮭を取り逃がしたぞ！　鮭は生き物だ。鮭つ子はあ、手前らみたいな怠けもんとちがふ。鮭には鰭があるぞ。泳いでるんだ。ぐづぐづしてゐたら、來年まで泳いで逃げて行くんだ。――起きろ！　起きねえか、この出來損ひめ！』

かういふ前觸れで、彼は床の上を樫の棒で撲つ。續けさまに、撲つた。青膨れな顏をして、患者の一人が、蒲團の下から手を合はして拜むと、憐憫といふ贅澤な感情の餘裕を持ち合せない彼は、長く伸びたその男の髮を引つ掴んで、蒲團の上へ坐らせると、背後から、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。男の眼からは、水のやうに涙が流れる。三分芯のランプの下で、周圍の人達は、朦朧としたその暴動の輪廓を見、鼓膜を劈くやうな騷動を聞き、身體中に[illegible]を自覺しながら起き上がる。かうして四人のうちの一人は、無理に出された沖仕事の最中に、、、、、、、、、、、、、、。もう一人は、倉庫の、、、、、、、、、、、。百六十三人は、百六十一人の勞働者になつてしまつた。それにも拘らずに、病人は大ぎ大ぎと殖えて行つた。

一日五回の米食は、勢ひ米食者特有の脚氣病を蔓延させた。そちら

にもこちらにも、靴を脱ぎ、股引を外づし、下穿きをまくり上げて、脛を壓して見る者が多くなつた。それと同時に、この不完全な漁場の司厨部では、さながら勞働者を窮しめるための陰謀でもあるかのやうに、野菜を斷らしてしまつた。馬鈴薯と玉葱が、味噌汁の鍋から消え、南瓜が最後の片影を沒してから、暫く若芽の味噌汁がつづいた。若芽の味噌汁から、この唯一の副食物は、急激に飛躍してサンペイ汁となつた。この妙な名前のスープは、頗る經費節約を主眼としたもので、それを調理するには、大鍋へ水を一杯沸せばよかつたのである。水の沸騰したころ、最も自分の勞力を經濟的に消費しようと心掛けてゐる三人の老人は、手鼻をかんだ手で、昨年の鹽鰊を、滅多矢鱈に切りきざんで投りこむのである。これがサンペイ汁。漁夫達の或る者は、それを『いつぺい汁』と稱した。それに、澤庵と云へば、第三函館丸が、百七十人をここへ上陸た日からの下積みが、鹽を吹き、黴を吸收するごとに、ぢやぶぢやぶ洗はれては又澄ました顏をして笊に納まるのである。そこで、漁夫達は夜陰に乘じて澤庵を盜んだ。又、味噌をくすねて、ストーヴで鰯を焼いて食つた。偶には、急を追ふに夢中になつた海豹を、網の中で撲殺して、その肉を食ふ者もあつた。臭い海獸の肉は、ひどく下痢を催させた。――總じてこれらの惡食は、菜食本位の勞働者達に壞血病を起させた。ちよつとしたマキリの切り疵でも直ぐに膿んで、腫れが關節へ傳はると、局部を中心に薔薇のやうな光りが皮膚一面に漂つた。

かういふ不健康のための各種の陰謀がめぐらされてゐる傍ら、勞働者の腕時計を踏み碎くほど時間に對する錯覺を持つた幹部達は、時と燃料と勞力の節約を思ひついて、絶對に入浴をさせなかつた。實、一度、網を染めた時に、百六十三人は、いゝとの粉を煮立てた湯の中へ入浴させられたことがあつた。湯が熱かつたためではなくて、彼等は、湯に含まれた染料のお蔭で、非常に血色のいい勞働者となつて現はれた。それも網卸ろし以前、カムチヤツカへ着いてたつた一回の話である。虱が湧く。かいいかぶれが出來る。醜惡な體臭が、彼等の一擧一動から噴霧器のやうに發散する。彼等は、猿のやうにものを云ふごとに體を掻いた。ちよつとした仕事の手隙きがあることに、兩手は猛烈に旋回運動をつづけた。眠つてゐても、身體を掻くことだけは忘れない。漁場をこぞつて、悉くの人間が、食事にも、會話にも、作業にも、生活の全部を、妙な手つきをするために捧げた。まるでその手つきをしないのは人間でないやうに。しかし、人間は習慣である。やがて、このがりがりと皮膚を掻く音、むしむしと着物を押へる恰好、擽ぐられた女が逃げ出すやうな背の筋肉の運動、それらも珍らしくはなくなつた。そして、それが珍らしくなくなつた頃に、この漁場へは病氣が頁

饑に領分を擴張しはじめたのだつた。

五人、六人——と脚氣が殖え、滓デッヤの連中は日に三人づつも怪我人を出し、壞疽や淋病の發生する者が漸漸に殖えてくる。かうした病院の內容を持つた作業場が完全に實現すると、そこには、、、、、、、、甚だしい個人的侮辱を罵聲とともに吹きかける、獰猛な七人の『醫者』があるだけであつた。この漁場では大概の病氣は一度罹つたら最後、それはツンドラの彼方を意味した。ツンドラの彼方は、同時に、箱作りが板を惜しみ惜しみ拵へる粗略な棺箱を意味した。それは同時に、その上に樹てられる細長い木の札を意味した。木の札には、その男の漠とした原籍と姓名だけは殘る。しかし、あまり木の札が小さいので、その男の病名も、その、、、、、、、知らしめた七人の惡魔のやうな『醫者』のことも書いてはない。

病氣に罹らない者も、髮は刈らず、髯は伸び放題に伸び、ろくに顏も洗はないところから、ギリヤーク人の家長のやうにぢぢむさい、黑光りにひかる、痴鈍な、睡眠不足な顏になつて、一人として人間らしい血色の者はなくなつてしまつた。臭い、垢光りのする、木の葉を綴り合はしたやうな襤褸をうちふり、猿人類のやうな勞働者達は、仕事の前に絕望的に手足を動かしながら、何一つ考へ直す力もなく、毀れて水の浸み込むゴム長をぺかぺか鳴らしながらよろめき廻はつた。

人間の窮乏狀態とは無關心に、孕みきつた魚類は、青黑い氷河の押し寄せるやうに、夜も晝も川を溯つて雪崩れこんだ。網が張り裂けたことも、一度や二度ではない。狼狽した人間は、大自然の無盡藏な寶庫から溢れ出る、魚の形をした『富』にむかつて、人間の企て得るあらゆる手段を濕して、その獲得と、獨占と、保存とのために、お互ひに憎みあひ、格鬪し、腹立たしい詭計で欺かねばならなかつた。

網揚げである。朝から時化氣味な空は、船を出すときには、沖の標木が見えぬほどの濃かい雨になつてゐる。海は、この白い混沌の奧から、大太鼓のやうな地鳴りを打つてゐる。少し經つと、礫を八方からぶちつけるやうな雨になつた。風が加はつて、底氣味の惡い波濤が、白い卷紙のやうな頭を見せて、むくむくと流動する丘を拵へては、急に深い谷底にせり代る。漁夫達は網の兩側に船を寄せて、骨を切るほど冷い網を手操りにかかる。魚は、透明な青黑い脊を見せて、だんだん縮小して行く自分達の隱れ家に狼狽して、互に彈きあひながら、水底を逃げ廻はる。目脂を溜めた部長が音頭をとつてから歌ふ。

『徹夜徹夜で……エヤホウ、
扱き使はれて……エヤホウ、
いくら俺らだつて……エヤホウ、
耐りあしねえ……エヤホウ。

函館さ歸つたら……エヤホウ、
船頭の鬼め……エヤホウ、
みんなでぶん毆れ……エヤホウ、
ぶんなぐつてやるべえ……エヤホウ。』

この悲痛なコーラスに、東京者の宇田川は、一段ときんきら聲を張りあげて音頭を繼いだ。

『協力一致で……エヤホウ、
國家のために……エヤホウ、
御國のためなら……ヤエホウ、
、、、、、、……エヤホウ！』

と、八分通りあがつた網の傍へ、部長の合圖の櫂を逆さにしたのを見つけて、揉まれながら到着した發動汽船から、船頭の奥野が桐油紙で包んだ肩を聳やかして、屹と一同を睨め廻はした。

『資本家がなくなつたら……エヤホウ、
、、、、、、……エヤホウ。』

歌はつゞく。奥野は痙攣的に、長い手鍵を握つた片腕をぶるぶる震はせて、口から、唾といつしよにバットの切れ端を海面へ吐き棄てた。

8

人間はどしどし仆れた。

それに反比例して鮭は殖えた。

百六十一人の勞働者のうちで、滿足に手足の動く者は、百三十人位しかなかつた。あらゆる境遇に適應する本能を持つた女達だけは、土地に馴れて、風邪一つ引かなかつた。

寢たまゝになつて起きあがれない者は、どんなに人夫廻はしが亂暴をしても、するがまゝにさせて置いた。病氣は、彼等をして、敎へられざるガンデイストにした。人夫の動員が利かなくなると、船頭以下六人の幹部と、百六十一人の間に喰ひ込んでゐた故參勞働者とは、彼等の本性を遺憾なく曝け出した。いたる處に、、が行はれ、、、、、、、、、、、、、、、。青膨れの若い者が、通路の上で泣き喚いた。古參の勞働者の中にも、次第に不安と凶事の豫感が働きかけた。あらん限りの力を絞つて、盲目的に働いてゐる瞬間、思はず、深い陷穽のやうな睡眠が襲つて來る。ふと、手をやすめたと思ふと、鼻が酸つぱくなるほど、、、、、、、、、、、、、、。幹部達の櫂の柄は屢々の亂用から、、、、、、、、、、、、、、。奴隷のやうな恐怖心が人達の外皮として發達したとすれば、その一枚下には血管のや

うな反抗心が次第に膨脹して行つた。幹部達の嚴格な、搾取的な組織力にも拘らず、組織それ自身がだんだん毀れて行つて、雜夫が漁夫に廻はつたり、腹裂きが船へ乘つたり、舸子部屋の連中が縣切りへ廻はされたりした。病人や半病人が動員されるために、人夫廻はしは餘計に氣を張つて、自然と自分でも勞働者の職分へまで手を出すやうになつた。奧野と青木とだけは、この狂ひ出したやうな漁場の絕對專制政治の二大柱として、さすがに一步も讓るところなく鬪爭の渦中に頭を擡げて步いた。しかし、何とその手の血みどろなことよ！

眠られぬ夜がある。たつた二時間の睡眠時間であるとは覺悟しながらも、若い漁夫達の間には、暗然のうちに約束が出來てゐるやうに、こつそり番屋を拔け出す者がある。二人、四人、五人……それが夜ごとに殖えて、三十人ぐらゐの集會者を持つやうになる。三十人の集會者が寄つた頃には、この小さな團體の中に秘密な申合せが出來てゐる。彼等は、着陸當日氣絕するほど毆られた青年のポッケットに保存されてある撒きビラを中心に、いろいろな復讐を計畫した。そして、その大部分が衝動的な、むら氣な、個人的報復であつたがために、次第に淘汰されて行つて、各人に共通した、全般に利害の一貫した、一つの決議が、そこに下されたのである。

それは、要求書の形をとつて、青年戶田によつて讀み上げられた。

『要求書

一、作業時間の短縮。勞働は八時間以上を課せざること。

二、病氣の者は、速かにペトロ市より醫師を呼びて診察すべきこと。

三、味噌汁に馬鈴薯其他の野菜物を混ずること。コレは絕對的に必要だ。

四、幹部七人の不法なる打擲及び暴行を全廢すること。

五、病臥中と雖も必らず一定額の賃銀を支拂ふべきこと。

六、賃銀は、全漁獲額の今年度相場による卸値段の半額を、漁夫雜夫、、、、、、、に分配すべきこと。

右六件を、山崎德太郎商店借區漁場に於て、、、、、、、として最も必要なる保護條件として、我等一同これを請求す。

漁夫及雜夫有志』

このごく幼稚な形式の要求書は、夜、番屋のランプの下で『日露會話階梯』の萬年筆で、汚い書簡箋へ認められた。翌る朝、第二回目の朝飯の拍子木の鳴るのを合圖に、三十人は一團となつて幹部部屋の入口へ立つた。

頻りに帳簿の上へ踏みこんで、何かを記入してゐた奧野は、一と目に不穩な空氣を見てとつて、すうつと脊を伸ばした。伸びあがつた彼

れの咫尺の距離に、磨きあげた兇器があつたのである。人間だけは當てにならぬとしても、これらに狂ひはない。

『何だ、何しに來た？――』

彼は尖がつた顎から、優秀な歯を剝いた。

『これですが、私達有志の間で、よりよりかういふ決議をしたのです。非常に困つた擧句、やむを得ずとつた手段ですから――是非讀んで戴きたい！』

宇田川は、一同を代表して、テーブルの上へ、その拙劣な、しかし誠意に滿ちた紙片を差し出すのである。

かういふ場合に、かういふ紙片を讀む資本家や、資本家の代理人の表情は、近代の社會では一つのタイプとなつた。それは、先づ、彼等が鼻の先で笑ふことである。次ぎに、、、、、、、、卑猥な文書へ眼をやるやうに、頗る輕蔑すべきものとして、眼から一段と紙片を遠ざけて、ざつと要求個條の番號だけを讀み通すことである。最後に、その表情の形式として、不可抗的にそれを讀んだ人間の唇が、犬が牙を剝くときのやうに、少し斜め上がることである。その釣り上がりの結果、白つぽい笑ひが、その男の顏の半分を歪める。船頭奥野も、ほとんどこれと寸分ちがはぬ表情を踏襲した。

『――――こりあ何だね？　お前達大勢かかつて、やつとこれだけ字が書けるといふことを見せに來たのか？　笑はせるねえ！　この漁場が始まつてから、勞働爭議なんて、たゞの一度もなかつたんだぞッ！』

ここまでは、稍尻上がりながらも普通の人間の應對であつた。それから、急激に奧野は、弓弦のやうな眉毛を引絞つた。

『馬鹿ッ！　――出て行け！　ここは貴樣らの這入る處ぢやないぞ！まごまごしてやがると、ぶつ放すぞ！』

この早口の怒號とともに、彼れの右手には兇器が光つた。三十人の有志は、ちよつと見えない手で瞼を毆られたやうな顏をした。

『讀んで見給へ！　君は、讀まずに俺達を追ひ拂はふたつてさうは行かねえんだ！　もう君達のこけ脅しには飽き飽きしたよ！　俺達に正當な理由があるからこそ、この要求書は書かれてるんだぜ！　何も、晝日中、大勢かうやつてだてや狂言で押しかけて來たんぢやねえんだ！　惡りいことは云はねえから、ずうつと讀んで見な！』

宇田川は、盛んに人さし指を使つて、奧野へ肉迫した。見てゐると、まるで、指一本で對手の兇器と擊ちあひの眞似をしようとしてゐるかに思はれた。

『これか、奥野は、冷藏庫の奥から笑ひ出すやうな聲を立てた。『こんなもの！　かうしてやらあ………。』

瘦せた骨張つた指の間に、不眠不休で有志達が文案を練つた要求

は、かながらのやうに引き裂かれてあつた。

『弾きやがつたな！　この野郎！』

二人の男が、宇田川を押し退けて、船頭の前へ突進した。それは、雜夫の濱本と、秋田者の田中とであつた。

『破いたがどうした！』

奥野の疳高な聲は、もう一つの、遙かに強度の爆發性を伴つた響と、すれすれになつて空氣を劈いた。轟然とした反響と共に、、、。一同は、何を意識することもなく、先づ煙硝臭い、あとからあとからと湧く煙の層に驚いた。彼等は床を鳴らして、戸外に飛び退いた。

『撃てー、、！　手前、、、、、、、、、、、、！　、、、、、、、、指を銜へて引つ込む俺達と思つてるか！　さあ、かうなつたら、、だ。いや、、、、、、、だ！　この漁場へ、、、の花が咲くまで、俺達は根絶やしにしてやつて見せるぞ！』

宇田川は、絆纏の袖をまくつて啖呵を切つた。戸田と濱本とは、瞼をひくひくさしてゐる田中を抱へて、よろよろと番屋の方へ歩み出した。彼等も疲勞し切つてゐたのである。

銃聲を聞きつけて、全漁場は針で突つかれたやうにびくんとした。次ぎの瞬間に、これほどこの濱に人間がゐたかしらと思はれるほど、濱デッキから、飯場から、小舍小舍から、老人とも若い者とも見分けのつかない、髯むくぢやらな人間が、番屋の前の廣場へさつと集つた。

そこで、昂奮した戸田は、眼鏡のない細い眼を腦天まで釣りあげて叫んだ。

『諸君――、、、、、、！　沖へ出た者は船を戻せ、デッキの連中は魚をずたずたに切り裂いちまへ。鹽切りの連中は、手當り次第に魚を海へ投り込め。機關場はスチームをあげるな。女達は、さつそく飯場へ兵糧の用意をしろ。手の空いてる連中は、手當り次第に獲物をとつて番屋へ集まれ。諸君、よく聞けよ！　今、僕達の仲間である、、、、、鬼のやうな船頭の手にかかつて、、、、、、、、、、、、！』

もう一度、彼れの記念すべき鳥打帽が、人達の頭上に烈しく振り廻はされた。

9

その瞬間から、俄かにこの漁場は解體した。解體作用は、意外に迅速で、崩壞的であつた。

走つてゐたトロが滑走を止めた。レールは地圖のやうに靜かになつた。鹽の山の中に、變挺な墓標のやうなシャベルが突つ立つた。樽からはみ出た筋子が、ひとりでに、生き物のやうにべつたりと砂へ落ちた。半分釣るし上げた畚を、途中で突つ離したウインチは、暫く肩胛骨の外れた職工のやうにぶらぶらして、鮭と砂の上へ等分に鹽水を撒き散らした。ウインチの動力である、機關部屋ががら空きになつたからである。靑年戸田の指令したやうに、濱デッキの漁夫達は、鮭をめちやくちやに切らなかつた。その代り數萬の銀蠅が魚をあさつてゐると、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。平常から憎まれてゐる炊事番の老人達は、釜に飯を殘したまま、幹部部屋の向うへ行つて寢てゐた。鑵詰工場では、腐敗しかかつた物が、慌てて腐敗し出した。鑵をいつぱい詰めたままの大釜は、煮えたぎるほど煮えたぎつて、雪がカムチヤツカへ來て、それを冷凍するまでは、さめまいと思はれた。女漁夫達は、幹部部屋と飯場の中間に塊まり合つて、大地震のあとのやうに、口を圍めながら八人いつしよに聲を殺して話し合つた。この時だけは、番屋に寢てゐた脚氣患者も、破風病患者も、淋病も、梅毒も、起き上がつたり、飛び出したり、泣いたり笑つたりして、ことの外番屋を騷々しいものにした。はつきりと、二つの階級に百六十八人は分裂した。幹部の組と、勞働者の組と。これは、最初の日に、奧野が組み合せたよりも、より單純な組み合せであつた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、——故參の半分かたは、わけが解らなくてまごまごしてゐるうちに、靑木の鐵の旗じ事務所の前へ追ひやられた。ほかの半分は、手を休めるために、屁なりで番屋の近くへ屯ろした。濱デッキを中心に、鮭の山々へかけて、いむらに散らばつた連中が、一と塊まりづついろいろなことを喚きやた。だが、何と云つても、、、、、、、、、、番屋の中が一番人混みがしてゐた。自然と、飯場が雙方の交戰區域にならざるを得ない。一人の男が、事務所の筋向ひの倉庫から、女達を手招ぎした。人夫廻はしの杉山君であつた。

『危いから、こつちへ來い！』

女達は、幹部に從順であつた。わけても杉山君は、今こそ、朝鮮の貴族のそれのやうに伸びてはゐるが、ちよつぴりした齒ブラシ髭の持主であつたのである。彼等は、猫のやうに背を圓めて倉庫へころげ込んだ。

番屋の中では、『日露何話』が、聲を張りあげて戰線の狀態を報告してゐた。

『今、幹部部屋にゐる奴等は、、、と見做していい。奴等は、總勢で、七十人を少し出るぐらゐだ。俺達と、俺達の方へつからうとしてゐ

る人間は、女を除いたあと全部だ。これから、俺達數人は、まづ手に這入るだけの、、、や、、や、、や、、、を、この番屋へ聚める。そして、人間の數に應じて、喧嘩する者へそれを割當てる。殘にある、、も持つて來よう。それから彈丸除けには磯船を横にすることだ。出來るなら、このウインチの鎖を、事務所の屋根へ引つかけて、あすこを根こそぎぶち毀はしてやりたいんだが――誰かこの危險な作業に志願する者はないか？　塊つて行けば彈丸の二三發も食つたつて犧牲が少しで濟むといふものだ。あつたら手を擧げてくれ！』

『俺がやる！』

手を擧げたのは、薄痘痕の、漁場で唯一の機械技師であつた。しかし、彼は孤獨ではなかつた。彼は單に口火の切り役であつたに過ぎない。十本ほどの手が、手の持主の正直な顏を説明して？　空中に突き出された。

だが、『日露會話』のこの突飛な計畫も、志士を募つただけに終つた。

奧野の不正直な時計で十一時頃、思案に餘つたやうな顏をした老漁夫達を先に、奧野、青木と杉山とを除いたほかの四人の人夫廻はしが、手拭をふりながらおづおづ飯場まで歩いて來て、疲れたやうな聲を絞つた。

『おーい、誰か、話の解る奴を三人ほど寄越せ。別に亂暴をするんぢやないから、安心して出て來いよ。話がつくものなら、お互ひに相談づくで行かうぢやないか！』

飯場では、元氣のいい聲が笑ひ出した。それに釣り込まれて元氣のない聲も笑ひ出した。

『何だ、めしの上の蠅みたいな聲立てるなつてよ！』

一人がかう云ふと、再び笑ひが傳播した。

飯場の前では、丸山の聲がいよいよ悲痛な調子を帶びた。彼は、額の疵へ血を集めて叫んだ。

『――そんなことを云はないで、ちよつと出て來た。惡いことは云はねえ、お互ひに爲めになるやうに話し合ふから、さう喧嘩腰にならないで與れよ。……船頭さんだつて、非常に後悔してるんだ。決して手荒な眞似はしないから、代理の者を事務所まで出してくれ！』

『船頭さん糞喰らへだ！　函館の裁判所で話をつけるとさう云へ』

戸田は眞つ赤になつて蓆の折目から、子供がラヂオ放送の眞似をするやうに、鼻にかかつた聲で叫んだ。

『しようねえ奴らだな！……』

丸山達は、唇を嚙んで呟きながら、いつたん事務所へとつてかへした。

どちらも、飯場を緩衝地帶として、釜に入つた飯を中心に對峙し

た。ただ、番屋側には、眼の前の生魚がいくらでも手に入つたのである。

長い沈默ののち、巨萬の鮭がこの漁場を素通りすることに、すつかり氣を腐らした奥野が、十杯目のウオツカを、半分口からこぼしてかう云つた。

『よし、やつつけろ！　あのひようろく共を抜きにして、この漁場を開くんだ！　そして見付け次第にあいつらは、擲いて擲きのめして、それでも、氣を失はない野郎は、睾丸へ鉛の芯を通してやるんだ。——俺らあ、どうあつたつてこの夏を失策じつちあ、山崎の旦那に合はせる顔はねえ！　さあ、皆びくびくしねえで、ここにありつたけの、、、、や、、をかつぎ出して、飯場で腹をふさいだら、仕事に取りかかれ！　それから、丸山、お前御苦勞だが、ウスの方へ一と走り行つて、無電を打つて貰ひてえな。百人でも、二百人でも、腕つ節の揃つた若けえのを急に狩り集めて送つてくれえつてな……いや、待て、そんな氣の長げえことをしてゐたら鮭はゐなくなる。仕方がねえ、泣きを入れて隣りの漁場から、漁夫を少し廻はして貰ふか。——ええツ、こんなことをぐづぐづしてゐるひまに、魚が逃げて行く、川口のロスケの工場へとられてしまふ、金が塊つて泳いで行きあがる！』

奥野の命令は、だんだんに獨自的形式を帶びて來た。しまひに彼は、起ち上つて髭を掻き撫りながら、凄い眸で、そのへんに棒立ちになつてゐる連中を睨みつけた。

『青木、青木は何處にゐる？——間抜けめ、青木を呼んで來い！』

かう云はれた人夫廻はしの二人が、へどもどして副船頭を呼びに、人をわけて外へ出た。青木は、一時間ばかり前にそのへんで嗷鳴り散らしてゐたが、何處かへ姿を隱してしまつた、と云ふのが、そのへんをほうづき歩いた二人の最後に突き留めた報告であつた。

青木はゐなかつた。——

それもその筈である。この熊のやうな惡漢は、潮の鮭の山の陰で、、、、、、、『、、、、』、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

最後に、、、、、、、、、戸田は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、宇田川の耳元へ囁いた。

『、、、、、、、、！』

『、、、、、口ほどにもねえ！』

宇田川は、額の汗を手で切り落しながら、亂れかかる髪を、ぐいと後ろへ投げた。

『おい、どうやら、青木を呼んでるぜ！　こりあ、かうしちあ居られまい。逃げよう！　どうせ、こんな腐つた漁場なんざ惜しくはねえ

よ!』

『日露會話』は、二人をうながした。二人の足元には、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

『どつちへ行く?――』

戸田は、足を暗示的に動かしながら、二人へ訊ねた『日露會話』は、無數の蠅を飛ばしながら、奥地の方を指さした。むんむんする腐魚のいきれの彼方に、秀麗なカムチヤツカ連山が、海よりも蒼く聳えた。

『ツンドラを横切つて、奥へ奥へと行くといふと――白樺の森がある。毛唐の眼玉よりもまつ蒼な湖がある。そこには、ヤークツクや、ギリヤーク人の部落が散らばつてゐる。ソヴイエト・ロシアの北方の開拓者が、俺達勞働者を喜んで迎へてくれる。こんな、尻の穴の小さい、、、、、、の腐つた鮭なんど喰はなくとも、、、、勞働と、もつと、もつと、、、、、、、があるんだ、どれ、三人で、一と股ぎにモスクワまで伸すか!』

たしかに、この男は、語學の初歩的研究者であつたとともに、、、、、、、、、、、、、、第一級生程度のピオネールであつた。

もう、彼れの破れたゴム長は、白樺の森への第一歩を踏み出してゐた。

そして、その震へる拳には、大概の會話には間に合ひさうにない怪しげな『日露會話階梯』の一卷が、ピストルのやうに握られてあつたのだ。

そのとき、番屋の方に當つて、もやもやと大勢の話聲が聞えて、それがぱつたり止んだと思ふと、船頭奥野の聲としてかういふのが聞えた。

『おう、番屋の連中――俺あ負けた!酒を出すから、あつさりと今日の始末は飲み流してくんな!』

その聲を聞いた三人は思はず顔を見合はして、首を縮めながら鮭の山の下を、足早やに走り出した。(了)

編輯だより

◇爽涼十一月。朗かな進出を思はせる。

◇而も一面には賣勳事件あり、鐵道疑獄に坐して政界の大物がゾロ／＼刑務山莊に煎餅蒲團の御厄介となる。政界はいかにして肅淸さるべき。

◇その平常に見よ、その性格に見よ、舊型の政治家を淘汰すべきは此秋である。大衆は自己に信條淸節ありやを猛省して見るがよい。

◇金解禁はなか／＼重大事だ。その時期と準備をかへす／＼も注意すべきだ。でなかつたら經濟界に動亂を卷き起さぬとも限らぬ。何も急ぐことはない。ゆつくり財界の動きを見つめた上で斷行すべきだ。この一事は實に現內閣興亡の岐れ目である。

◇緊縮と不景氣が混同されている。我國を永遠に權威づけるには緊縮は一の徑路である。借金はすべてを破滅せしめる。

◇谷崎氏は精進不斷の尊い經驗から、わが口語文の欠點を執筆された。六十餘枚の必讀すべきエツセイ。ために卍は一回休載。

◇政界の汚濁を廓淸する具體案を示した淸瀨氏の論文は熱意に滿ちてゐる。

◇創作欄には前田河氏の百十餘枚の力作を得た。其他全誌面一頁の無駄もなく新鮮尖鋭の氣を漲らすことが出來たのを喜ぶ。

◇「日本地理大系」の獨創的にして雄偉なる。そして現在までの寫眞術を抹殺し、飛行機による新興地理學の創生！ 全國各學校、家庭がもしここに留意を怠つたならその人々は生活的に、學術的に落伍者とならん。

◇乞ふ、すべての用意の科學的なるを、統制的なるを見よ。そして純地理學者に配するに各方面の科學者を網羅して從來の地理學を擴大したる苦心を。この地理大系こそ眞に劃期的の價値あるを信ずる。

◇現代短歌全集とゴーリキイ全集も非常な人氣だつた。短歌全集の次回配本は與謝野寬、與謝野晶子集とする。ゴーリキイの方は「アルタモーノフ一家」(米川正夫譯)と附錄ゴーリキイ評傳(昇曙夢)です。

◇谷崎潤一郞氏の評判の「蓼喰ふ蟲」が新裝を凝して出版さる。變り菊判で小出楢重畫伯の裝幀。同氏の「饒舌錄」も殆んど前後して刊行される。

◇有川治助氏の靈筆になる「ジョン・ワナメーカ」が近く出版されます。「ヘンリ・フォード」と共に御勸めします。

◇「現代日本文學全集」の『短歌・俳句集』は非常な好評を博してゐる。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵稅不要
壹ケ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和四年十月十八日 印刷納本
昭和四年十一月一日 發行

編輯兼發行人 東京市芝區愛宕下町四ノ十 山本三生
印刷人 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 [illegible]
印刷所 秀英舍

(定價五十錢)
(郵稅參錢)

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ十 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一一三一 一一三二 一一三三 一一三四

杉森孝次郎編輯

新進專攻學者
各專攻學分擔 全項目署名執筆

社會科學辭典

（見本進呈）

一冊に壓縮された社會科學百科全書（エンサイクロペヂヤ）！

日本最初の

特色

◆現代日本のもつ最適最大の編輯者
◆項目の精選包括——最新最要の社會知識
社會學、政治學、經濟學、法律學、哲學、社會問題、社會運動、マルキシズム、新教育並に無產者教育等々に關する最確實の知識
◆最も方法的なる編輯組織
◆新進專攻學者の眞劍熱誠なる討究

◆獨斷俗見を排する純科學的批判的態度
◆マルクス學及び社會運動辭典に兼用
◆日本無產勞働運動の實景展開
◆新教育並に無產者教育の高調
◆社會科學者、社會運動者人名辭典に兼用

四六新型六號三段組
總クロース柔軟表紙 九百七十頁・超時代的廉價三圓五十錢 郵税十八錢

東京西巣鴨町宮仲二三九三 社會思想研究所 振替東京六八七 電話大塚二六七九

世界聖典全集

見よ!! 全人類の法燈・莊嚴と神祕の一大寶庫!!

豫約募集・全三十卷

前輯全十五卷
後輯全十五卷

★前輯書目 全十五卷★

- 日本書紀神代卷(神道)全　文學博士 加藤玄智纂註　早大講師 安藤正次解題
- 四書集註(儒教)上・下　東京帝大教授 文學博士 宇野哲人譯
- 聖德太子三經義疏(佛教)上・下　高楠順次郎 境野黃洋 佐伯定胤 菅原得成 鼎義曉 共譯
- 印度古聖歌(婆羅門教)全　東京帝大教授 文學博士 高楠順次郎譯
- 耆那聖典(ジャイナ教)全　鈴木重信譯
- アヴェスタ經(波斯教)上・下　木村鷹太郎譯
- 死者之書(埃及)上・下　マスター・オヴ・アーツ 田中達譯
- 新約全書解題(基督教)全　前青山學院長 神學博士 高木壬太郎譯
- 新約外典(基督教)全　立大教授 哲學博士 杉浦貞二郎譯
- コーラン經(々教)上・下　文學士 坂本健一譯

★後輯書目 全十五卷★

- 古事記神代卷(神道)全　文學博士 加藤玄智纂註　早大講師 安藤正次解題
- 道教聖典(道教)全　文學博士 小柳司氣太　學習院教授 飯島忠夫 共譯
- 舊約聖典(基督教)全　立大教授 哲學博士 杉浦貞二郎譯
- アイヌ聖典(アイヌ種族)全　東大助教授 文學士 金田一京助譯
- 舊約全書解題(基督教)全　東京帝大助教授 文學博士 石橋智信著
- 印度哲學ウパニシャット全書(婆羅門教)九卷　東京帝大教授 文學博士 高楠順次郎監修　譯者 二十七氏

第一回配本

コーラン經【回々教】上　前輯第十四卷

回教は佛基兩教と共に世界の教界に鼎足の勢を張る大宗教である。イスラムとは神に服從するの義で、その聖典コーランは神意になつたもの、三世の神詔を錄した天上の祕錄である。法燈の繼嗣者オマーは嘗て讃していふ「天下の群籍はみな悉く焚くべし、その價値はコーランの一書は及ばず」と。

印度哲學ウパニシャット全書〔婆羅門教〕1　後輯第三卷

紀元前七百年の頃より印度の人心は漸く形式主義に倦み哲理に攻究に基いた大悟を以て解脫の唯一の手段と見做す思潮に達した。ウパニシャットはこの時勢が產んだもので、ショペンハウエルは之を「生前の安慰、死後の安慰、收めてこの一書にあり」と叫び最後の病床にすら手なほ卷を離さなかつたと傳へられる。

(注意) 甲種會員には兩書を、乙種會員には「コーラン經」のみを配本

世界聖典外纂 全

前後兩輯に包容した神道・儒教・佛教・基督教・回教・道教・婆羅門・波斯教・耆那教等九大教以外の諸教の來由及び沿革

執筆者 二十氏

世界九大宗教の燦然たる祕義解放さる!!

豫約規定

- **體裁** 菊判・五號活字・背皮兩面クロース・天金函入・毎卷平均約四百頁・裝幀豪華雅麗
- **頒布方法** 全三十卷、これを十五卷の二期とし、前輯十五卷、後輯十五卷、會員を甲種(毎月前輯後輯各一冊宛配本)乙種(毎月一冊宛配本、但前輯より始め後輯に及ぶ)の二種に分つ。豫約者のみに頒つ。
- **刊行期日** 昭和四年十月第一回を刊行、「甲種」は毎月二冊宛刊行にて昭和五年十二月完結、「乙種」は毎月一冊宛刊行昭和七年三月を以て完結す。
- **申込方法** 先づ御申込の際申込金として「甲種」金貳圓、「乙種」金壹圓を御拂込下さい。これは最後の月の會費に充當す。最初の月の會費は別に御拂込願ひます。申込金は中途御解約の方には御拂戾し致しません。(前金一時拂の方は申込金不要)
- **會費** 甲種―毎月拂(二冊に付)金五圓、乙種―毎月拂(一冊に付)金貳圓五拾錢、一時拂(全三十冊)金七拾圓
- **送本料** 會費の外に左の送本料を申受けます。甲種(二冊に付)廿四錢・乙種(一冊に付)十六錢・尙書留送附を希望の向は別に書留料十錢を御增下さい。東京市內は甲乙兩種とも六錢、書留料六錢增
- **拂込方法** 振替貯金又は爲替で其月一日迄に着金する樣お拂込下さい
- **締切期日** 昭和四年十一月三十日限

內容見本進呈

發行所 東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

